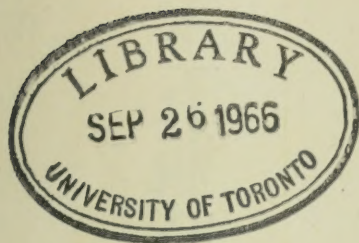
日本戯曲全集
第五卷

並木五瓶時代狂言集

東京
春陽堂版

市川米蔵の「けいせい飛馬始」栗島甲斐之助（大坂錦絵）

日本戯曲全集　第五巻　目次

並木五瓶時代狂言篇

けいせい倭荘子（六幕）……一
――和田雷八、越野勘左衛門三十三間堂通し矢――
けいせい忍術池（五幕）……一六一
――稲田東藏、笠森おせん――
けいせい飛馬始（五幕）……三四五
――天草軍記、栗島甲斐之助――

入間詞大名賢儀（五幕）……………………………………………………………五四
――大友市之正、正眞の馬を使ひし始り――
解説………………………………………………渥美清太郎

弓始の勅諚は、大佛の胎内さぐり、ワキは奥様悋氣の十種香、とつくり聞いた睦言に、閨の屏風の蝶番ひ、はふくら責めし弦音は、日本に響く

和田雷八

薗花嫁
壇花聟

けいせい倭莊子

繪入六冊

着衣始めの色直しは、丸山の松ばやし、シテは殿様手貢ひの三つ乳、しつかり打つた返答に鴛鴦の襖の相思ひ、はつしとこたへし矢叫びは、四海に轟く

越野勘左衛門

けいせい倭荘子

尾州藩の星野勘左衛門は、寛文九年五月二日、京都蓮華王院の三十三間堂での通し矢で、一萬五百四十二本のうち、八千九筋の當りで、弓の名人と稱されたが、十九年後の貞享四年四月二十七日、紀州藩の和佐大八郎が、惣矢一萬五十三本のうち、八千百三十三筋の通り矢があつて、弓の天下は大八郎に定まつた。兩者は別に關係はないのだが、これをソックリ借りて來て、殘酷にも大八郎を敵役にして、片岡萬作が「防州曲打松」といふ狂言を作つた。それを五瓶の增補したのが、この「けいせい倭荘子」であるが、派手に出來て居る爲か、原作よりも此方が盛んに行はれたものである、また、眼目の星野閑居の場の小槇の死は、明和年間、京都岡崎にあつた妹殺しの事實を、芝居で早速借りで來たもので、五瓶はそれを又借りして加へたのである。建部綾足の「西山物語」と同じ材料なのだ。小槇助國が蝶になるといふ筋は、「艶道通鑑」戀の部の飜案である。斯うして、全篇殆んど五瓶の創意でない脚本だが、後年の上場は實に數多く、江戸の舞臺にまで姿を現はしてゐる。その初演は天明四年閏正月、大坂中の芝居であつた。

外記之進お梅(尾上菊之助)傾城在世。介添伏屋(嵐房次郎)仲居おすま。介添橋富(尾上多見藏)傾城初音(澤村千鳥)傾城此花。腰元松ケ枝(嵐三右衛門)傾城花鳥。奥方濱荻(山下八百藏)彌生姫。妹小槇。おさい(澤村國太郎)北畠靱負之介。大和の助國(嵐三五郎)北畠主計正。越野勘左衛門(尾上新七)桃の井修理太夫。勘左衛門母檜垣(嵐七五郎)夏目藤左衛門。大安寺和尚(嵐新平)桃の井先次郎。下人藤六(中村京十郎)二見瀬平(三枡大五郎)蜘手作藏。荒川彈正(嵐三八)林監物。桔梗屋才兵衛(坂東岩五郎)和田雷八。近藤軍次兵衛。(淺尾爲十郎)此花屋出松。田丸關蔵(嵐他人)

本冊全部にわたつて、役割カタリその他につき、山形の秋葉芳美氏に、例の通り御配慮願つた事を、茲に御禮申上げて置く。

けいせい倭荘子

大序

島原廓の段
卅三間堂の段

役名——北畠靱負之助。北畠主計正。桃の井修理太夫。桃の井先次郎。寛内藏之助。蜘手伴藏。石黒丹下。二見瀬平。色島傳吾。櫻井新吾。桔梗屋才兵衞。此花屋由松。傾城、此花。同、花鳥。同、床世。同、初音。同、縫蝶。禿、名草。同、名古屋。天野孫作。夏目藤左衞門。和田雷八。

平常の通り、席觸れ終ると早鼓になる。向うより要用と差し札建てし木地長持ち、五棹ほど舁き、これに殘らず上下侍ひ附き添ひ出る。寛内藏之助、麻上下にて、家來引連れ出て、花道に彳み

侍ひ　明日の矢數は、御兩家のうち、どなたに極りましてござりまする。

内藏　イヤ、まだ何とも。今日御評議の上、何分火急の儀。この度の矢數は大切なる墓目御用定め。是非明日は延ばされぬ。矢數の一件心急かるゝ。用意の假屋へ早く〳〵。

侍ひ　畏まりましてござりまする。

内藏　猶また矢來篝の手當、必らず粗略なきやう、互ひに申し合せ、心得違ひなきやうにしやれ。

侍ひ　畏まつてござりまする。然らは直ぐに

内藏　大佛の役所へ。

皆々　ハア、。

内藏　いづれもその分、心得てよからう。

ト皆々幕の内へ入る。ト所作のかゝり。

造り物、一面の二重舞臺、東西障子屋體、正面障子。舞臺先、糸櫻の盛り、前に小松植ゑあり、二重舞臺出囃子。平舞臺東西に、桔梗屋才兵衞、天野孫作、仕丁にて、衞士篭にて篝焚き居る。これにて幕開く。

ト橋がゝりより、此花屋由松、蜘手伴藏、石黒丹下、色島傳吾、何れも仕丁にて、御所車を押し出る。ト向うより、傾城床世、同じく初音、同じく縫蝶。禿、名

草、同じく名古屋、仲居おすま、衣裳の上に白練りの
上ばかり、仕丁烏帽子、銘々三方に若松を飾り、持ち
出て、皆々よろしく所作模様あつて、とまる。
皆々　よいよ／＼。
由松　十八公の榮えは霜の後に顯はれ
丹下　一千年の色は雪の中に深し。
伴藏　これ皆松に諷ひし、詩の例し。
縫蝶　開くや子の日の松を壽きし
すま　青陽の御祝儀。
孫作　我れ／＼どもに至るまで
初音　千年まで限れる松も今日よりは
庄世　君に曳かれて
すま　萬代や經ん。
縫蝶　千秋萬歳。
伴藏　はゝら萬歳。只々
皆々　おめでたう存じ奉りまする。
ト下がり葉になる。御所車の御簾、卷き上げる。此う
ちに、北畠靱負之介、冠り直垂れ。花鳥、十二單衣、
天冠かぶり居る。
靱負　オヽ、方々、千代に八千代の壽きと

花鳥　殿樣の思ひ付きで、子の日のお遊びとやらぢやとて、
ついに乘つた事もない御所車へ、勿體ない相輿。
靱負　これ全く遊興でない。太夫が岩田帶を壽かん爲。
ト花鳥、恥かしきこなし。才兵衞、孫作、顏見合せ
才兵　ヤア、すりや御臺所には。
孫作　折れ込んだとは、めでたい／＼。
才兵　コレ、太夫の御臺樣、恥かしい事はない。サア、ち
つと爰へ出て、とも／＼に子の日の遊びを、始めなさい始
めなさい。
靱負　それ／＼、朗詠集にもある通り、子の日てふしめつ
る野邊の姫小松、曳かでや千代の春を待たまじ。
花鳥　そんなら、わたしも
靱負　サア、一緒に
トまた所作になる。兩人、車より下りて、所作模様あ
つて、靱負之介、皆々に、濡れかける。花鳥、悋氣す
る事あつて、靱負之介、花鳥、抱きつく。この間、作
藏、才兵衞、堪えられぬこなしあつて
才兵　こりや堪らぬ。
ト孫作に抱きつき、口を吸ふ。
孫作　エヽ、何をし居るぞい。

才兵　ても、えらい口熱の。

ト胸の悪きこなし。

孫作　如何に子の日の御遊びぢやとて、人中で女松男松を綴ぢ付けてもらうては、外の松脂の捌け所がござりませぬ。どの女松なりと、綴ぢつかんと思へども、辨慶の口借しさ。我が物ならねばチッと堪えて、稲荷山の松茸を、いづれのお山へなりと植ゑて下さりませうならば

皆々　有り難う存じまする。

靱負　オヽ、さもあらん〳〵。この子の日の遊びを見ては、それが堪えられんと云ふも尤も。望みに任せ、一人づゝ宛がひくれん。銘々所持の松茸を植ゑて、子松の種を下ろせ下ろせ。

皆々　ヤア、有り難し〳〵。

作蔵　サア、御免を蒙むりし上からは

傑吾　銘々撰り取りに

丹下　どのお山になりとも

皆々　この松茸を植ゑるぞ〳〵。

女皆　オヽ、好かん。

伴蔵　仰せの松茸を植ゑるを好かんとは

皆々　仰せを背くのか。

女皆　サア、それは

皆々　サア〳〵、なんと。

伴蔵　御免の子の日なれば

才兵　御前取りに、中で取つてくれう。

ト鳥刺しの合ひ方に、蛇の尾捕ろのやうに、皆々、立廻りになる所へ、桃の井先次郎、田舎者、木綿やつし、大小を菰に包み、脊負ひ出る。蜘手伴蔵、捕へて

伴蔵　サア、捕つたぞ〳〵。

先次　エヽ、怪體の悪い。何さらすのぢや。

女皆　ワアイ、違うた〳〵。

由松　それ御覧じませ。あんまり悪じやれが過ぎるからでござりまする。

伴蔵　忌々しい。わりやマア、誰れぢや。

先次　誰れとは愚か、花鳥を身請けの大盡ぢや。

作蔵　ハヽ、こりやをかしい。その態で身請けの大盡とは。

才兵　大盡でも小盡でも、風の神か鳥おどしのやうな形で、花鳥が身請けとは。

先次　オヽ、金銀米錢を以て傾城を一匹求めん爲、わざわざ都へ上り、島原にて様子を聞けば、桔梗屋の花鳥と云ふが飛び切り。一と云うて二のない評判。なんでも國元

へ土産に求め歸らんと思へども、大名客の揚げ詰めと
やらで、關山に居續けとやらで、毎晩々々、雨の降る夜
も風の夜も、すご〳〵歸る心憎さに、今日は直ぐにこの
關山へ、參着いたしたのぢやわい。

才兵　よう致したな。コレ、太夫を身請けせうと思はんす
なら

ト仕方して

此やうな山吹色の金の草鞋がなければ、身請けは愚か、
ちよつと杯する事もなりませぬぞ。

先次　それを汝に習はうか。ソレ。

ト金財布を抛り出す。才兵衞、取つて

才兵　これは。

先次　金子百兩。

才兵　ヤア。

先次　藁苞に黄金と云はうか。

才兵　正月に顔見世よりは珍らしい、身請けの大盡樣。

先次　サア、太夫を身請けするぞ。花鳥はどこに居る〳〵。

伴藏　オツと、花鳥々々と喧ましう云ふまいぞ。

才兵　花鳥々々とは、仲居と云ふ事ぢやわいな。

先次　サア、その仲居と云ふ者は、切り顔を見るやうな、
房の付いた赤前垂れをして、オ、好かんと云ふ者の事で
あらうがな。

由松　ハテ、さては野暮と見せ掛けて、廓の所謂は、よう
御存じでござりますな。

先次　オ、、遠國より花の都へ只一人、傾城を求めに來る
者。上方の樣子、詳しく聞き合さいで來るべきや。こり
や見よ。

ト手鑑出し

江戸砂子、浪花細見を盡し、京羽二重まで、詳しく書き
抜いてもらうて、持參して居るわい。

由松　色里細見、御持參なされてござるからは。

先次　オ、、如何ほど汝等が馬鹿にせうと思うても、どつ
こい、そつこい、その手は食はぬ水からくりの、猿が臼
挽きぢや。

由松　猿が臼挽く水からくりとは。

先次　そなこちやいかん〳〵。

ト新吾、龍神卷きにて、走り出て

新吾　ハア、申し上げまする。

由松　あわたゞしい、何事ぢや。

新吾　茶木が抱へ三つ指と申す者、只今これへ押寄せまし

てござりまする。

由松　ヤア、ナニ、茨木ぢや。

先次　三つ指と云ふからは、エヽ、鬼の事ぢやなア。

女皆　オヽ、怖。

花鳥　そんな恐ろしい者なら、ちやつと去なして下さんせいなア。

伴藏　誰れかある。三つ指を追ひ返せ。

傳吾　ハッ。

ト駈け出さうとする。

靭負　コリヤ、待て〳〵。

傳吾　なぜお留めなさるゝな。

靭負　茨木が抱へ三つ指と云ふ名に聞き怖ぢし、追ひ返せしは卑怯未練と、貶みせられんは後代の譏り。對面せん。これへ通せ。

傳吾　ハッ。茨木の三つ指、此方へ通りませい。

トぬめり唄になる。花道より傾城此花、振り袖の形にて、出る。禿、男、附き出る。

皆々　こりやどうぢや。

才兵　ヤア、三ッ指〳〵と云ふに依つて、鬼であらうと思ひの外、茨木屋の新造、此花太夫ぢやなう。

此花　ホヽヽヽ、いつに變りし風雅のお姿ゆゑ、とんと見損じましてござります。才兵衛さま、眞平御免の程、希ひ奉りまする。

ト慇懃に手を支へ云ふ。

皆々　さつても堅し。

先次　さつても美し。

靭負　形に似合はぬ切り口上、慇懃に手を支へるに依つて、三つ指と名けたのぢやなア。

先次　エヽ、斯う云ふ美なる女性であらうと思ひの外、すさまじい鬼であらうと思うて、あつたら肝を茶種にしたわい。

初音　但しあの美しいのが、矢ッ張り化けて居やんすので

床世　酒を進めて、寐間に入つてから、怖い姿になるのかいな。

すま　それ〳〵、丁度紅葉狩の謠の手であらうぞえ。

縫錦　あの姿を額さんが見さんしたら

由松　また例の移り氣。

縫錦　花鳥さんの癇癪の種であらうぞえ。

靭負　イヤモウ、誰れが何と云ふとも、あの美しい御面相を見ては、堪らん〳〵。

ト此花へ抱きつくを、花鳥割つて入り

花鳥　見る人毎に仇惚れの、悪性はならんぞえ。

すま　ソリヤ、花鳥さんの癇癪の始まり。

此花　そんならあなたが、花鳥さんとやら云ふ、靱負さんのお馴染でござりまするかえ。左様なればお腹立ちも御尤も。申し靱負さんとやら、數ならぬこの身に、お志しは有り難うござりますれど、幾重にも御免なされて下さりませ。

伴藏　ソリヤ、三ツ指の始まり／＼。

先次　ヤア、評判の三つ指は爰ぢや。

孫作　生捕つた／＼。

才兵　見るも後生。見らるゝも後生。

孫才　錢は戻り／＼。

先次　ヤア、聞いた／＼。花鳥太夫は美なる奴と、噂は聞き及んで來たけれど、つひに逢うたことがないに依つて、大勢の中でどれぞと試し見る所に、この太夫に定まつた。直ぐに連れて去んで女房にするわい。

ト花鳥を引立てる。才兵衛、突き退け

才兵　ア、、コレ／＼、滅相な。大事の太夫をどこへ。

先次　知れた事。身請けの金子渡したからは。

才兵　滅相な。太夫が身請けは六百兩。

先次　ヤア。

ト悧り。

才兵　これはやう／＼百兩。

先次　それでは足らんか。

才兵　後金の五百兩は。

先次　ハテ、高直なものぢや。なんと、それで負けてくれぬか。

才兵　益體もない。太夫の身請けを、雜魚や鰯を値切るやうに。

先次　負ける事はならんのか。

才兵　燈心で打つ太鼓、ならぬ事／＼。

靱負　才兵衛、出かした。例へ誰れが何と云はうと、太夫を外へ身請けさす事はなるまいぞ。

先次　なぜならぬ。

才兵　花鳥が身請けは外に先約がござりまする。

靱負　オ、、さうぢや／＼。

花鳥　わたしや外へ行く事は、否でござんすぞえ。

才兵　ハテ、わが身がなんにも云ふ事はない。おれ次第にして置きやいなう。

靱負　オヽ、才兵衛、必らず太夫が身請けは。
才兵　イヤ、お前の儘にもなりませぬ。
靱負　ヤ。
ト憫り。
先次　才兵衛とやら、百兩は手付けぢやぞ。
才兵　ハテサテ、お前より先約がござりますと云ふに。
靱負　外に先約とは何者ぢや。
才兵　それをお前に云ひませうかい。
花鳥　わしが知らぬ身請けとわえ。
才兵　ハテ、年の內は親方の心に任せ。恐らく一と云うて二とない全盛の花鳥太夫。斯う云ふ時に存分取りぬくのぢや。オヽ、どなたが何と仰しやつても、親方の心任せ。貧乏揺ぎもさせる事はなりませぬぞ。
ト花道より、二見瀬平、若黨にて走り出て
瀬平　御前樣。
ト皆々を見て
ヤア、この姿は。
靱負　二見瀬平、あわたゞしい。何事ぢや。
瀬平　ハツ、御本國より大殿樣、俄かの御上洛。
皆々　ヤア。

靱負　ナニ、兄者人の御上洛とは。
瀬平　御到着なさるゝと其まゝ、お中屋敷へも御入りなく、直さま參內遊ばされしところ、先達て津の國の大殿、修理太夫さまにも御上洛。
先次　ヤア。
ト憫り。皆々、思ひ入れ。
瀬平　御兩家にも、數代弓矢の御家督とあつて、大切なる蟇目の御用仰せ付けられしゆゑ、明日は三十三間堂にて矢數との儀。
靱負　ムウ、すりや蟇目の御用を。エヽ、折惡しく越野勘左衞門は出國して〳〵、兄者人は、なんと勅答なされたぞ。
瀬平　イヤ、未だ勅答の趣きは承りませねども、先づ御上洛の樣子お知らせ申し、兄上樣お下りなされぬうち、伏見の中屋敷へお供仕りませねば、御首尾如何と存じまして、お迎ひの爲、參上仕つてござりまする。
花鳥　エヽ、そんなら、急に去なしやんせにやならぬかえ。
瀬平　ならぬ段ぢやござりませぬ。斯う云ふうらも禁庭より、中屋敷へお下りの節、御前がお館にござらいで濟む

ものでござりますかいの。
花鳥　そんなら、もしひよつと兄御様のお供して、お國へ去なしやんすやうになつたら、わたしや何とせうぞいなア。
瀬平　ア、、案ずるも無理でなし。
花鳥　そも突出しの始めより、逢ひ初めてから今日の今まで
靱負　よく〳〵誠が通じたればこそ、勤めの中に
花鳥　わたしや何とせうぞいなア。
ト靱負之介こなしあつて
靱負　瀬平、これ見てたも。
ト花鳥の腹帯を見せる。瀬平、恟り。
瀬平　すりや腹帯を
ト此花、先次郎、顔見合せ
先次　大方そんな事であらうと思うたてや。
瀬平　左様な譯とも存じませず。
花鳥　イヤ、身請けせうのなんのと。
靱負　前後の爭ひ。
花鳥　聞けば聞く程、わたしが心の苦しさ。
瀬平　ハテサテ、大事の御身ぢや、お氣遣ひなされまするな。私しが好いやうに、大御所様へ申し上げて、ハテ、きなきな思ふ事はござりませぬわい。
作藏　なんと瀬平、合點がいたか。
孫作　尤も以前は、勘左どのの門弟なれども
作藏　勘左どのは御追放。
丹下　御家門なれば今にては、雷八どのの門弟となり居る我れ〳〵どもなれども
傳吾　とも〴〵今日の御祝儀を壽かん爲、時ならぬ糸櫻は瑞相。
瀬平　イヤモウ、めでたいと申すに、飽きのない儀でござりますれども、假にも禁庭の式を御遊興などゝ、もし堂上の御沙汰に及んでは、放埒の御咎め、大殿様の思し召しも如何でござりますれば、お小袖もお召し更へなされて、サア、何れも様。
先次　成る程、こりやあの者が申す通り。拙者が花鳥を身請け致さうと申すも、有やうは靱負どののお爲を存じての儀。
靱負　して、こなた様は。
先次　あからさまに云はれぬ譯は、これを見さつしやれ。
ト狀を渡す。

靫負　「兄様参る、彌生より。」これは
先次　マア／＼、とくと御覽じませ。
ト靫負之介、文を見て
靫負　この文體は。其許樣は。
先次　こなた樣と云ひ號けある、彌生姫が兄、桃の井先次郎でござるわい。
靫負　これは／＼。左樣とも存じませず、最前よりの無禮の段、御容赦下されませう。
先次　委細は密かに。ナニ、親方、何分花鳥が身請けは此方へ。
才兵　ハテ、なりませぬと云うたら。夜中の鐘までは、太夫は此方の揚げ詰め、と痛い目せうより、すつぱりと此方から夜半の鐘まで、新らしう待つてやりませう。
先次　如何にも。その間に何かの所譯、必らずその一言に
才兵　此方は違はぬ。其方の工面が出來るかの。
先次　念には及ばぬ。靫負どの、この場の人數を。
靫負　御尤も。コリヤ、其方達は直ぐに大佛へ立越え、先格の通り。
先次　矢數の用意。伴藏、皆、同道しや。
伴藏　畏つてござりまする。然らば直ぐに三十三間堂へ。サア、各々方も御苦勞ながら。
皆々　畏まつてござりまする。イザ、御同道仕らう。
ト橋がゝりへ入る。
先次　亭主、廓の者どもを次へ。
由松　畏まりました。コリヤ、おすま、太夫樣を。
すま　アイ／＼。サア、太夫さん方、奥へ。
女皆　そんなら皆さん、奥で遊ばうかいな。
靫負　瀨平、其方は心を附けて、新吾は奥へ。
新吾　ハツ。瀨平、ナア、合點か。
瀨平　キツと張り番。ヤイ親方、われも約束の通り
才兵　夜中の鐘まで。サア、お暇申さう。
ト唄になる。才兵衞は橋がゝりへ、女皆々奥へ入る。合ひ方。靫負之介、花鳥、先次郎、此花、思ひ入れあつて
靫負　この文體を見ますれば、兄者人より離縁狀を遣はされし彌生が方より
先次　妹が賴みに忍びず、使者を以て申し入れんと存じたれども、不和なる仲にて、よも御對面はあるまじと存ずるから、幸ひ上方に見知りたる者なき某ゆゑ、密かに

上京し、斯く姿をやつし、ソト申し交せしそれなる此花と申し合はせ、とも〴〵輿を催ほしたればこそ、直談いたした、一家の對面。

此花　先次郎さまの云はしやんす通り、フトこの間、角屋で一座したが緣となつて、末の約束。あの事この事話しのうち、お前樣のお噂。斯う〳〵せんと教への通り、あられもない今日の趣向も、花鳥さまを根引きにせうと云ふ先さまの思ひ付きでござんすわいなア。

靱負　再び緣を結んでくれよと、妹御彌生どのに賴まれながら、その事を脇へなし、花鳥を身請けと仰しやるお心は。

先次　諸侯に八人とは申しながら、妹と不緣の元は、傾城ゆゑと心の附きしも、里に馴れたる身につまさるゝ身請けの相談。ハテ、根引きとし、花鳥さへ此方へ取寄せ置かば、去る者は日々に疎し、自然と妹と仲睦まじくなる道理でござるまいかな。

靱負　お志し、千萬忝なう存じまする。津の國、勢州隔たる一家中、殊に久しく關東にお住居の先次郎どの、如何に御面體を存ぜんとて、今朝よりの贅六の有樣、面目次第もござりませぬ。

先次　ハテサテ、その面目事を云はすまい爲、いつもの通りキッとした家老どもに申し附けず、我れらが直に仕掛けたは、戀路に入つて御意見ではない、兎角睦まじう打解けて、お話し申さう爲ぢやわいなう。

花鳥　ほんに底々へお心の付いた、先次郎さまのお志し。

此花　斯う打解けるからは、今よりはお前とも兄弟分、妹ぢやと思うて、どうせい斯うせいと、引廻して下さんせい。

花鳥　オヽ、賴むの賴まぬのと云ふ仲かいなア。

先次　コリヤ〳〵、古めかしい挨拶は止めにして

靱負　珍らしい一家の參會。

先次　なんと堅身をやめて

靱負　打混じて一獻たべませうかい。

花鳥　それ〳〵、わたしらも改めて

此花　兄弟分の杯もしたし

靱負　と云うて、何かの譯を廓の者共に聞かさぬやう。

ト瀨平、出て

瀨平　イヤ、その儀はお氣遣ひあられまするな。チッと私しがお次に張り番して、樣子殘らず承つて、驚ろき入つた先次郎さまのお話し。

先次　ヤ。
　ト悧り。
靱負　アイヤ〳〵、遙か下部の者なれども、無二の志し、譜代の者でござれば、お心措きなく●
瀬平　この上とも御用の品、憚りながら御前の儀を、先次郎さま。
先次　爰は端近。
靱負　何かの事は離れ座敷で
先次　然らば御案内を。
此花　そんなら一緒に
先靱　おぢや。
　ト鳴り物入りの唄になる。靱負之介、花鳥、先次郎、此花、瀬平、花道へ行きかゝると、向うより主計正、修理太夫、和田雷八、上下衣裳にて出る。後に近習、矢の根の箭を持ち出て、皆々花道に佇み
主計　ハテ、怪しからぬ亂舞の體。
修理　禁庭の恐れと云ひ
主計　管領のお膝元とも憚らず。
雷八　ハテ、氣の毒千萬。
修理　何分等閑ならぬ勅諚の趣き。

修主　申し開けませう。
　トぢり〳〵本舞臺へ直る。皆々、座定まる。鳴り物打ちやめる。
先次　これは〳〵。存じ依りませぬ親人樣、主計正さまにも。
靱負　在京の後は、打絶えましたる御壯健の體。
靱先　如何ばかり恐悅至極に存じ奉ります。
雷八　御幼年の砌りより、關東にて御成長。さぞ東訛りの田舍人ならんと存じの外、甚だ風雅の先次郎さま。久々にて御意得ましてござります。
先次　オヽ、和田雷八、堅固であつたの。
雷八　ハツ。
修理　未だ部屋住みの先次郎。本國へ入部も致さぬ遊里の交はり。
主計　イヤ〳〵、御子息より、不届きは靱負之介。永々の在京は何の爲。禁庭の守護を怠り、現在兄が上洛せしも存ぜぬ惰弱者。
修理　父母在す時は遠く遊ばずと、制禁の道に叛き、朱に交はれば
　ト靱負之介方へ、こなしあつて

色慾に眩みし眼、醒しくれん。

ト立ち上がり、キッとなる。

主計　これは。

修理　不行跡の悴めを

主計　放埓の咎めか。

修理　如何にも。國を治めんと欲する者、先づその身を治む。

主計　身を治めんと欲する者は、先づその家を治む。ナア、御子息の御意見のみを思し召さずとも、先づ國家の治まりが要用かと存ずるが。

修理　御尤も。今日の勅諚の趣き、悴先次郎。

主計　弟靱負之介。

兩人　ハッ。

主計　この度當今の御惱とあつて、往昔御白河院に、源の賴政の吉例を以て、三明の蟇目仕るべき勅使。

修理　さるに依つて、家に傳はる水破の矢は、津の國の領主たる某への預かり。

主計　兵破の矢は某が家に、數代の傳書は射藝の規模。

修理　先例の通り、右水破兵破を以て、蟇目の役目。

主計　此方の射術たる越野勘左衞門は、聊かの誤まりに依つて、改易申し附けたれば、當今行くへ知れず。

修理　差詰め和田雷八なれども

主計　一旦宗匠たる勘左衞門、出國の上は、改め矢數の甲乙次第。

雷八　御意の通り、所詮勘左衞門には及ばずながら、射術の勵み、キッと射負ふせ矢數の譽れ。門入れてお目にかけませう。

修理　天晴れ大丈夫の一言。

主計　なか〳〵器量ある雷八。某の爲にも所緣ある其方なれば、正眞の弓も引き方。コリヤ、その箱これへ。

近習　ハッ。

修理　その箱これへ。

ト近習。主計正、修理太夫の前へ、矢の根を直す。

主修　兩家に預け置かるゝところの

修理　水破

主計　兵破の

主修　矢の根の器。

主計　緣邊の砌りは、互ひに取替へ、預かり奉る古例ゆゑ

修理　折角結びし、娘が緣も徒らに

主計　離縁の狀を遣はせしは、舅去りと、さぞ心外に思し召すでござらうの。
修理　なんの〳〵。今日の仕儀見るにつけ、是非ない儀とは申すものの、もし御舍弟の不行跡も、改まりし上にては
主計　水破
修理　兵破と
主計　互ひに
修理　取替へる時節も
主計　アヽ、待てば甘露の日和もござらうかい。
靱負　先刻よりの樣子、例へ勘左衞門居りませずとも
先次　私しどもが射藝の妙術がござりませうなれば
靱負　改め矢數の甲乙にも及ばず。
先次　兩人のうち、直ちに蟇目を相勤めませうもの。
靱負　遊興のみに武道を忘れし放埒の段
靱先　御免なされて下さりませ。
ト花鳥、此花、前へ出て
花鳥　樣子は聞きましてござんす。わたしらさへなくば、睦まじい御一家中を、よしない私しどもゆゑ。
此花　先さまを叱らしましたはわたしらが科。
花鳥　靱さまばかりを叱らずと。
此花　もう堪忍して上げまして下さんせいなア。
雷八　良藥口に苦し、諫言耳に逆らふ道理。必らずお心にはさへられな。申し憎い事を遠慮なく申すも、並々の家中とは格別のこの雷八。ハテ、明日の矢數は、津の國、勢州、兩國にかゝりし大事の前の小事。一國のお大名ぢやもの、ナニこれしきの放埒をお咎めは、大國の殿に似合はぬ。御胸中が狹い〳〵。すべて諸國に傾城町を御免あるは何の爲、泰平の御代のしるしでござらぬか。太刀は鞘、弓は袋に納まる。雷八がお詫び申し、幾重にも御料簡のほど希ひ奉りまする。
主計　聞き屆けた。一國の師範たる雷八が諫言。
修理　知行は與へ置きたれども、客分の雷八。繕ひなき諫言。如何にも是非あの女ならではと思ひ込まれし靱負どのの志し。ならば浮川竹の苦患も助け、ハテ、娘が手廻りになりとも。
主計　すりや遊君を弟が伽に。
修理　ハテ、諸侯に八人、無い習ひでござるまいかい。
主計　御息女の仇とも思し召さず、聟は子と申せばこそ、等閑ならぬ御深切。弟、仇に存ずるな。

靱負　雷八が諫言、修理太夫さまのお志し。
先次　妹を不便と思し召す親人様の義理。
靱先　エヽ、有り難うござりまする。
修理　明日の矢数の終りが蟇目の役。
雷八　先づそれまで、その矢の根は。
ト思ひ入れ。
修理　先次郎、其方に預ける。キッと守護仕れ。
先次　畏まつてござりまする。
ト矢の根の箱を受取る。
主計　この兵破は其方に。
ト靱負之介へ渡さうとして
何を云うても惰弱の魂ひ。イヤ〳〵、矢張り某が
ト九ツの半鐘打つ。数へて
はや後夜の鐘。
修理　矢数の刻限は寅の刻。
花鳥　どうぞそれまでに私しが身の上。
此花　申し、先次郎さま。
ト橋がゝりより、才兵衛、ツカ〳〵と出る。
才兵　サア、約束の夜半の鐘。
ト瀬平こなしあり、才兵衛、思ひ入れ。

なんぢやい〳〵。エヽ、まじ〳〵と、どなたも何奴も、蟇蛙に唾をねぶらしたやうなお面ぢや。所詮あかん事ぢや。サア、太夫おぢや。
ト花鳥を引立てる。瀬平突き退け
瀬平　何さらす。
才兵　知れた事、連れて去んで、こちらへ身請け。
花鳥　イエ〳〵、なんぼ親方さんの高下でも、身請けの事ばかりは。
瀬平　そんなものぢや。親方の儘にはなるまいぞ。
才兵　けつかるワ。そのならぬ所を、儘にして見せうわい。
花鳥　否でござんす。年の間こそお前の奉公人なれ、年さへ明けば親の儘。アイ、わたしには親があるぞえ。
才兵　その親はどこにゐる。
花鳥　サア、それは。
才兵　なんのあらう。コリヤ、われが親と云ふは、おれぢやわい。
花鳥　滅相な。わしが父さんは、さる浪人ぢやわいな。
才兵　さる浪人とは、世を忍ぶ假の名。われを足なしにせまいばかり。誠の親はおれぢやわやい。

瀬平　太夫さん、マア／＼、待たつしやれ。親方、藪から棒とした事云ひ出したが、われが親と云ふには、何ぞ慥かな證據があるか。

才兵　證據と云ふは、あの花鳥が肌の守に、一首の短册、おれが自筆。

瀬平　それが慥かな證據か。して、その歌は。

才兵　古歌ながら忘れぬ下の句。巖となりて苔の蒸すまで。

花鳥　わたしが肌身も離さぬ守り袋、知つて居やしやんすからは、お前は眞實の父さんでござんすか。さうとは知らず、これまでの不孝、赦して下さんせ。

瀬平　ハツ、さては花鳥さまの御親父でござりましたか。左樣とも存ぜず、過言の段々、慮外の段、眞平御免下さりませう。

才兵　イヤモウ、おれを誠の親と知らぬからは尤も。免す免す。手を上げやれ。

瀬平　ハツ／＼。

才兵　イヤモウ、子を捨てる藪はあれど、身を捨てかねたこの身。其方を捨てたは若氣の至り。年が藥と、どうやら、性根が附いて、それから稼ぎ出して、不思議に其方を抱へたも、盡きせぬ親子の縁。

瀬平　左やう／＼。例へ賤しい渡世をなされても、若殿樣のお胤を宿し給ふからはお部屋樣。その御親父樣なれば申さば舅御樣も御同然。爰は端近、先づ先づあれへ。と云つたらよからうが、おきやアがれ、大盜人め。

才兵　ヤイ／＼／＼。舅太夫樣にその雜言は、エ、、さては與太郎だと思ふのか。嘘ぢやない、誓文くつされ。

瀬平　おきやアがれ。おらが知るまいと思ふのか。うぬは無筆ぢやわい。

花鳥　ほんにさうぢやわいなア。

瀬平　一つ内に居ながら、如何に女なればとて、操り出されて、さては父樣かとは、馬鹿なお人でござる。ヤイうぬ、何者に頼まれた。サア、有やうに吐かせ。

才兵　コリヤ／＼、全く無筆ではない、能筆ぢや。

瀬平　なにを。筆取ることも叶はいで。

才兵　オ、、汝等が無筆のやうに思ふも理り。何をか隠さん。某事は堂上方に、伊織と云ふ諸大夫であつたけれども、僅かな筆の誤まりにて勅勘を受け、斯く下樣の身となりしも、筆の科と思へば、筆に恨みは數々の、文、玉章は勿論、一生筆を取るまじと心の誓ひ。

瀬平　ウム、すりや公家侍ひで、能書であつたれども、筆の科を悔んで

才兵　オヽサ、無筆と云ふは青公家原が嫉みを受けまい爲、餘り手が能すぎて、お咎めを蒙むりしゆゑ、大内でおらが事を、天神様／＼と云ふわい。

瀬平　けつかるワ。手が能すぎるが誠なら、いま吐かした古歌を書いて見され。

才兵　ヤ。

ト悄り。

瀬平　書きさらさんと。骨をボキ／＼折るぞ。

才兵　オヽ、書く／＼。誰れぞ書くまいと云ふかい。

瀬平　書きさへすればよい。

ト才兵衞、逃げるを、瀬平捕へ、硯箱持ち出て

サア天神さま、書かつしやれ。

才兵　ア、何とやら云ふ歌であつた。

瀬平　うぬが書いた歌を忘れたか。

才兵　あの子を産ました時書いたまゝで、久しう書かんに依つて。

瀬平　巖となりて苔の蒸すまで。

才兵　オヽ、さう／＼。その巖と云ふ字は、どう書いたな。

瀬平　ハテ、斯うだわい。

ト下に書いて見せる。

才兵　エヽ、巖水の巖ぢやな。

ト寢腹這うて書いてしまひ

ソレ。

ト差出す。瀬平取つて、

瀬平　やつたワ。太夫どの、見やんせ。

花鳥　オヽ、笑止や、これでも天神さまかいなア。

才兵　筆法傳授、秘筆の手はそんなものぢや。

瀬平　おきやアがれ、猿松めが。さては御親父様かと、慇懃にやりかけたは、のぼさるゝとは知らいで、免す免す手を上げいと、へげたれめが。うぬが手を上げいと云はいでも、おらが手は須彌の四天王まで上げるわい。

才兵　ハテ、長いお手なア。

瀬平　化けの皮の現はれ口ぢや。有やうに吐かせ。

才兵　吐かす／＼。親と云うたは假の名、誠はれこが欲しさ。

瀬平　誰れに頼まれた。

才兵　サア、それは。

ト雷八の方へこなし。

イヤ、頼まれはせぬけれど、こちらに大盡の身請けの口があれど、何を云うても靱負之介さまと云ふ色客があるゆゑ、太夫が親方の云ふ通りにせんに依つて、親と云うたが、ハイ、蟲092の呪なひでござりまする。

花鳥　何を、わしが知るまいと思うて。どこぞそこらに、頼んだ方があらうがな。

瀨平　爰らに頼んだ人とは。

雷八　ヤア、大切なる御評定の席にて無益の論。ヤイ親方女原連れて、キリ〳〵うせう。

才兵　ハイ〳〵。サア、おぢや。

花鳥　否でござんす。わしや去にやせんぞえ。

才兵　ハテ、それでもあなたが、連れて去ねと仰しやるもの。

瀨平　面白い。そろ〳〵化けの皮が現はれて來たわい。

ト雷八へ目を付け、才兵衞を附け廻す。

才兵　ア、コレ〳〵、睨んでおくれな。云ふわいな〳〵。

瀨平　サヽ、その頼み手を吐かせ。

才兵　サア、その頼み手は。雷八さまに頼まれましてござりまする。

瀨平　そんな事であらうと思うたてや。

才兵　この身請けを首尾ようやると、お定めの身請けの外に百兩。ハイ、有やうは金が欲しさの、敵役でござりまする。

花鳥　ほんにマア、現在御一家の靱負さんと、つい假初めの仲かいなア。常の身にもない程にと、度々斷わり云うても聞入れなら、なんぢや、身請けしようとは、エヽ、お前はなう。

ト修理大夫、ツカ〳〵と出て

修理　雷八、それへ。

雷八　ハツ。

ト雷八、前へ出る。修理大夫、扇にて打ち据ゑる。

こりや何となさるゝな。

修理　如何に川竹の女なればとて、現在主の爲に家門たる、靱負之介がちなみし女。殊に只ならぬ身と云ふ、理りも聞入れなく、樣々と陰謀を以て、無體に手に入れんとは、非道とや云はん、人非人めが。

雷八　すりや、拙者があの女を身請けせんと計りしを、非義非道と思し召さるゝか。

修理　なんと、非義非道であるまいか。

雷八　仁は百禍を除くと雖も、賞罰正しからざれば、却つてその身を害すの理り。館の姫君彌生さまのお爲、靫負どのの御身に取つては、妲妃褒姒にも勝りし傾城花鳥。さすれば兩家の仇、何卒追ひ退けん謀り事。如何にも餘度呼び出せしも、愛着の纏を切らせん爲ばかり。親方に申し含め、幼少の時捨てたりし、娘よ親よと、血筋の緣に靡かせん、手段も仇に、仕損せしは、流石匹夫の短才愚盲。斯くまで心を碎くとは、知らぬ女の淺はかに、誠戀慕と恨むも尤も。妓婦には稀れなる貞女の操。靫負さまの迷はれしも理り。オ、、出かした、天晴れ貞女貞女。

淑平　ムウ。すりや太夫どのに心あるやうになされたは、お二人の仲を裂き、彌生姫さまと元の樣に、御緣を結ばうと思し召すお心か。イヤ、そりや合點がいかぬ。

雷八　燕雀なんぞ大鵬の心を知らんや。既に一國一城の主たる御身にさへ、等閑ならぬ勅諚の緣邊。僅かなる遊君に見替へさせ、離緣などゝは、如何に主計正さまの御思案に及ばずとも、御老巧の修理大夫さま、イヤサ、御息女彌生さまは、御不便には思し召さぬか。恩愛の儀は少しもなく、只一徹の御短慮に、今この雷八を打擲は、誠某を非義非道と思し召さるか。イヤサ、是非御疑念晴れやらずば、サア、すつぱりと、お手討ち〳〵。

修理　ムウ。

雷八　イヤサ、御疑念除つて、もしお手討ち御不興などあつて、大切なる明日の矢數は、何者が相勤めまするぞ。イヤサ、射術の奧義、蟇目の役は、如何なさるゝぞ。只一朝一夕の儀ではござるまいがの。

主計　ホ、オ、天晴れ。例へその身は不義の惡名を請けてなりとも、勅諚の緣邊を取り結び、兩家の禍ひを除かんず志し。世の人口、譏りもいとはぬ今の忠言。修理どのにも必らず、御疑念なきやう。

修理　雷八が諫言も娘が爲。

主計　つゝまる所は、弟めが不行跡とは思へども。

雷八　サ、その穢れたる紬を清めんと、強く洗へば、得ては地紬を損ずるもの。只何事も無難に。ハテ、明日は大切の矢數。些かの儀はお構ひなく、家國の納まりが肝要かと存じます。

主計　如何にも。兎から云ふうち、餘程の隙入り。

修理　矢數の刻限に間もあるまいかい。

靫負　不行跡なる私しゆゑ、何かのお心遣ひ。

先次　雷八が兎や角と心遣ひも、妹を大切に思ひ過しての
間違ひ。親人様のお腹立ちも
靱負　皆私しの放埒ゆゑ。雷八、過分なぞや。
花島　そんな事とは知らいで、愛想づかし。はしたない者
ぢやと思うて居やしやんすであらうが、堪忍して下さん
せえ。
此花　イヤモウ、ほんのこれが、雨降つて地固まるとやら。
いつそ何もかもさつぱりと、ナア、才兵衛さま。
才兵　左やう〳〵。
修理　改めて杯せん。イザ、主計どの。
主計　兎も角も。
才兵　そんなら私しも。
瀬平　大儀であつた。
才兵　なんの、お前。
瀬平　ホウ、日本晴れがしたやうな。
先次　イザ、主計さま。
靱負　修理大夫さま。
修理　雷八。
雷八　ハツ。
主計　お先へ参ります。

ト唄になり、皆々、奥へ入る。あと、合ひ方。雷八残
り
雷八　父父たり子子たらば、天下自から忠なるべし。アヽ、
儘ならぬ浮世ぢやなア。
ト奥を見やり、思ひ入れの所へ、主計正、近習に矢の
根の箱と折を持たせ出る。
主計　弟雷八、これに何して居る。
雷八　主計正さま。
主計　如何にも、親人様の御遺言に依つて、他門へ遣はし
置いたれども、正しく骨肉同性の御身。母方こそ變れ、
親しき兄弟の仲なれども、疎遠となるは、こりや、世上
の義理、武士の表。内々にて何遠慮。奥へ來て、打解け
て一獻過さぬか。
雷八　いつに變りし御入魂の御挨拶。御意の通り、如何に
も兄弟と仰せらるゝ、また相違もござらねども、下賤の
胎内を借りし私し。他國へ参り、若輩の身分を、今さら
兄弟の御挨拶は、却つて迷惑。矢張り雷八どうせい、斯
うせいと、仰せられ下さりませう。
主計　尤も。氏を包み、陪臣の列に加はれども、自然と備
はる器量骨柄。園生に植ゑても隠れなき射藝の妙術。凡

そ今一人も有るまじき御身なれども、彼の喬木は風に破らるゝの理り。必らず萬端心得のあるべき事ぢやぞや。

雷八　喬木は風に破らるゝとは、すりや、射藝の德に依つて、一家中に

主計　サ、勝れし器量柄は、ハテ、十分に餘ればこぼるゝ世話の譬へ。

雷八　承知仕つてござりまする。

主計　重疊々々。さて雷八、早速ながら御身に、ちと折入つて頼みたき仔細、なんと聞いてくれうか。

雷八　イヤ、これは改まりましたる御意。只今仰せらるゝ通り、元を糺せば血筋の私し。何事に依らず、お心措きなく。

主計　頼まれてくれうか。

雷八　如何なる事なりとも。

主計　必らずその一言ば

ト雷八こなしあつて

雷八　違背なき金打。

ト小柄にて、差添へを金打。

主計　先づは安堵。

雷八　して、先づそのお頼みの様子は。

主計　コリヤ、その箱、これへ。

近習　ハツ。

ト恭々しく持ち出る。

主計　頼みと云ふは斯くの通り。

雷八　これは。

主計　矢の根の器。

ト雷八、開けて見て愕り。

雷八　この箱の内には矢の根は無く

ト主計正、消して

主計　アイヤ、彼の細川氏、藤孝の古歌にも、明けて見んかひもあるかや玉手箱。

雷八　再び歸る浦嶋が浪。

ト兩人思ひ入れ。

主計　と、サア、明らさま云はれぬ手爾波を、箱傳授と今の世までも、美名を殘す細川氏。

雷八　ムウ。

トこなしあつて

主計　幽齋が返歌の意味。

ト雷八、蓋をして、主計正が前へ出し

雷八　明けてだに見ず、返す波かな。

ト主計、感じて

主計　ただ血氣の勇のみと思ひの外、敷島の道に賢き和田雷八。ハテ、惜しい者を他國に仕へさす事ぢやよなア。明日の矢數も、さぞと思ひやられて、オヽ、頼もしゝ。ハア、何をがなと思へども、遊所の席。取敢へず些少の一器。コリヤ、その申し附けし品、これへ。

ト近習、菓子の折を雷八の前へ直す。

用はない。われ達は次へ立て。

近習　ハツ。

ト近習、奥へ入る。

主計　サア、身共が寸志、受納してくりやれ。

ト雷八、折を頂き、こなしあつて

雷八　ムウ、陸奥と記せしは。

主計　オヽサ、射藝の道の奥儀を、ナア、壽く寸志。

雷八　有り難く頂戴仕つてござりまする。

主計　イヤモウ、甚だ些少の儀。イヤナニ、雷八、御身も聞き及びの通り、此方の越野勘左衞門は、當時矢數の宗匠なれども、そと致せし心得違ひにて、改易申し附けたれば、差詰め明日御身がなア、一筋にても射勝ちし時はコレ、この矢の根の器を、明けて見んかひもあるかや玉手箱。

雷八　ムウ、すりやそれゆゑに。

主計　再び歸る浦嶋が波。先達て勘左衞門を改易せしも、この箱傳授の心。ナア。

ト雷八、思ひ入れあつて

雷八　キツと承知仕つてござりまする。

ト此うち、靫負之介、先次郎、瀬平聞いて居る。

主計　例へ未熟の者たりとも、我れこそ劣るまじと、勵むは人情なるものを。

ト雷八、折を主計が方へ戻し

雷八　お志し、受けたも同然でござりまする。

主計　ヤ、すりや約束を違へ。

雷八　先づこの品は。

主計　ムウ。一旦武士が契約せし金打は。

雷八　ハテ、金打は金打。

主計　それに又

雷八　賄賂取つて頼まれては、雷八が武士が立ちませぬ。

主計　ハテ、賄賂ではない。その一器は。

雷八　イヽヤ、陸奥と記せしは黄金花と云ふ謎。ナ、僅か

の金花に迷ひ、恥辱を取る雷八ではござりませぬわい。
主計　イヤ、それは。
雷八　内緣は格別。武術に於ては、凡そ續く者なきこの雷八。僅かの賄賂に、なんと武名が替へられませうか。
ト主計、肝に銘じたるこなしにて
主計　ハア、利慾に迷はぬ健氣の雷八。成る程、こりや、手前が不調法。
トこなしあつて、我が刀を差出し
差し古びたれども五郎正宗。
雷八　ハツ。
トこなしあつて、手を掛け
銘作を望むは武士の勵み。
主計　心よく受納してくれうや。
雷八　お家に傳來の御佩刀は亡父の筐とも存ずれば、ありし昔を思ひやられて、
トこなしあつて
有り難く頂戴仕つてござりまする。
主計　過分々々。此方の勘左衞門が通り矢は八千筋。ナア御身も浪人の身なれども、他家を繼げば、子で子にあらぬ郭公、明日の矢數を八千八筋、サ、鳴き終ると直ぐにこの箱を開けるが家の終りぢやぞや。
雷八　天晴れ勘左衞門に射勝つ氣性の雷八なれども、據なきお賴みゆゑ。
ト本意なきこなし。
主計　オヽ、賴もしい。明日の矢數に、天晴れ譽れを取るべき弓矢を捨て、すご〱古巣へ歸國の手土產。いよ〱賴みの品を取り申し
雷八　取らねば武士の數ならず。
主計　萬事は明日、矢數の席にて
雷八　御念に及ばぬ。
主計　チエ、。
ト御山に扇にて刀の鞘を敲き、これをキツカケに唄になる。主計正、悄々橋がゝりへ入る。雷八、刀を持ち見送り、こなしある所へ、内より、靭負之介、花鳥、先次郎、此花、瀨平、出て
靭負　雷八、なんにも云はぬ、これぢや〱。
ト拜む。
花鳥　なんぢや譯は知らぬが、二人ながら、大抵嬉しがつてぢやわいなア。
此花　先刻にからの譯、何もかもよう呑み込んで居さんす

お前ぢやに依つて、如才はあるまいけれど、どうぞ花鳥さんの譯を。

雷八　ハテ、よいてや。

靫先　コレ、必らず明日の。

雷八　ハテサテ。

ト目で押へる。

靫負　よいかや。

先次　もし其方が身が勝ちとあれば、直ぐに兩家の矢の根で蟇目の古實。

靫負　あつちの箱は明けても構はぬけれど、此方の矢の根はなア、內緣ある其許ゆゑ、兄者人のお賴み。

雷八　ハテ、何もかも雷八が爰に。

ト胸を叩く。

靫負　よし／＼。

先次　時に花鳥が手附けは爰にあれど。

瀨平　後金の五百兩は。

靫負　瀨平、其方は一走り、室町の大黑屋へ。

瀨平　アノ私しに。

靫負　イカサマ、われには渡すまい。

瀨平　お納戸役の

靫負　新吾を呼べ。

瀨平　ハツ／＼。新吾さま／＼、御用でござる、新吾さま新吾さま。

新吾　ハツ／＼、御用でござりまするか。

ト野袴にて走り出る。

靫負　オヽ、そちや大儀ながら、室町の大黑屋へ參り、金子五百兩持參せい。

新吾　ハツ／＼。

ト走り入る。

雷八　金子のお手當さへよくば、瀨平、御身は御兩所を大佛へ。

瀨平　ハツ。サア御前。

靫負　參りませうか。

ト先次郎へ目禮。

先次　御同道。

花此　どうぞわたしらも。

瀨平　ハテ、滅相な。大切の矢數の場所へ。

靫負　女は禁制々々。

先次　ナウ雷八。

雷八　それも矢來の外は格別、群集に紛れて。

花鳥　見せて下さんすかえ。
此花　雷八さまは、きつい粋ぢやなア。
雷八　ハテ、追從云はずと行かつしやれ。
先次　そんなら雷八、先へ行くぞや。
籾負　其方も後から。
瀬平　ござりませ。
ト唄になる。皆々、向うへ入る。雷八殘り
雷八　兄弟のよしみを重ね／＼、陸奥の黄金花、正宗の正銘、凡そ判金五十枚の折紙。
ト伴藏、才兵衛、出て
才兵　コレ、雷八さま、すりや花鳥が身請けは。
伴藏　もう止めになされまするか。
雷八　ソレ、身請けの金。
ト折を渡す。才兵衛、取つて、蓋取る。内より五百兩出る。
才兵　ヤア、こりや五百兩。して、働らき代の御褒美は。
雷八　矢數の終るまで、コリヤ。
ト才兵衛へ囁く。
これも兩家の婚禮を、首尾よく調へん爲。
伴藏　ハテ、きつい忠臣の。

ト丹下、傳吾、上下にて走り出る。
傳吾　雷八どの。
丹下　矢數の刻限。
兩人　御前よりのお迎ひ。
雷八　親方、承知か。
才兵　合點でござりまする。
雷八　何れも御苦勞。參りませう。
ト唄になる。皆々、靜々と向うへ入る。返し。
造り物、一面の筋塀、下りる。尤も大石垣、大佛外面の景色。半鐘にて、道具とまる。
ト合ひ方になる。向うより蜘手伴藏、着流しで、走り出る。橋がゝりより、新吾、首に財布を掛け、高提灯を持ち、出て來て、本舞臺にて行き會ひ
新吾　それへござるは伴藏どのか。
伴藏　新吾ではござらぬか。して、掛屋の首尾は。
新吾　上首尾々々々。五百兩の金子、廓へ持參いたしたるところ、最早この大佛へお越しと承り、直さま參つたが、未だ矢數は滿ちませぬか。
伴藏　イヤ／＼、今が矢數の始まり、存じの外、早うござ

つた。靫負之介さまにも、さぞお待ちかねでござらう。
新吾　されば〳〵、花鳥どのゝ身請けの相對は、矢數の終りと承つた。それゆゑ大抵急いだ事でござらぬ。
伴藏　さうであらう〳〵。
新吾　して、殿樣のお假屋は。
伴藏　三間堂の南の方、幕の御紋を目當に、合點か。
新吾　心得ました。
ト行かうとするを、伴藏、一刀浴せる。內にてヤアイ
ト、矢聲になる。伴藏キッとなつて
伴藏　ありや、矢數の矢聲。
ト新吾、これはとかゝり、立廻りあつて、伴藏、新吾に止め刺し、財布を取つて
花鳥を身請けの五百兩。これさへ此方へしてやれば、伴藏が思ふ壺。巧い手つがひ、濡れ手で粟。福德の三年目。さうぢや。
ト時の太鼓になる。尻からげ、向うへ逸散に走り入る。
返し。
造り物、右の塀を引上げる。一面の三十三間堂の表。繪馬、大分懸け、西の方に足場、人乘るやうにして その上に、越野勘左衞門通り矢八千筋と云ふ繪馬懸け、東西ともに水茶屋あり。時の太鼓にて道具とまる。
ト向うより、夏目藤左衞門、麻上下、衣裳。孫作、丹下、傳吾、高提灯を持たせ、出て來る。
孫作　今晚のお役目
皆々　御苦勞に存じまする。
藤左　この度、當今の御惱に依つて、先例に任せ、桃の井北畠、兩家に預かる、水破兵破の矢の根を以て、蟇目の行なひ仕るべき旨、勅命に依つて、越野勘左衞門に申し附くべきところ、國遠して行くへ知れず。依つて北畠に內緣ある、桃の井家に勅諚あり、和田雷八が弓勢を試さんが爲、今日の催ほし。即ち某、檢分の役目。いづれもお迎ひ大儀々々。
皆々　ハツ。
藤左　して、矢數の優劣は。
孫作　凡そ只今まで、四千五百本と見えまする。
丹下　イヤモウ、弓箭の聞えある雷八どの、勘左衞門に勝りはするとも、劣りは仕らぬ。
傳吾　殊にこの度の役目を蒙むれば、その身の譽れ、桃の

井家の規模、なか〳〵油斷はござりますまい。

藤左　成る程、其方達が申す如く、いづれ武藝は勵みたきものぢやて。あれ見られよ。あの繪馬に懸けたる、勘左衞門が奉納の矢の根は八千筋。今日の雷八は如何であらうな。

内に　シタ〳〵ワアイ。

ト矢聲になる。傳吾持つて出る。

採作　知らせの矢數、五千本の通り矢とござりまする。

藤左　天晴れ弓勢。矢數の場所へ。

皆々　イザ、お越しあられませう。

ト唄になる。皆々橋がゝりへ入る。臆病口の水茶屋より、花鳥、走り出る。才兵衞、追ひかけて出る。

才兵　待て、花鳥、どこへ行く。

花鳥　知れた事。靱負之介さまに逢うて、身請けの事を云ふわいの。

才兵　サア、なんぼわれが氣を揉んでも、五百兩が六百兩の、高い方へやるわいやい。

花鳥　イエ〳〵、お前の自由にはならぬわいなア。

才兵　ハテ、身請けの濟まぬうちは、親方の儘ぢやわい。サア、來い。

花鳥　イエ〳〵、なんでも外へ行く事は、否でござんすわいなア。

才兵　ハテサテ、來いと云ふに。

ト此うち、靱負之介、先次郎、此花、出て、この時、引分けて

靱負　イヽヤ、さうはなるまい。

花鳥　ヤア、殿さん。

才兵　靱負さま、そんなら最前から。

靱負　オヽ、何もかも聞いて居た。花鳥を外へやる事はならんぞ。

先次　その上、手附けを渡してあれば、此方が先約なるに外へやるとは不屆きな奴の。

此花　さうして、マア、約束の矢數も濟まぬうち、其やうな事云はしやんすは、お前には似合はぬ。ちつと嗜なましやんせいなア

才兵　イヽヤ、嗜なむまい。靱負さまの身請けは、僅か六百兩。此方の大盡さまは千兩でも萬兩でも、花鳥が存たけ金積んで身請けなさるゝ思し召し。約束變替へ常の習ひ。おのれが自由にするわいやい。

花鳥　其やうに云はしやんす大盡とは、誰れさんぢやえ。

才兵　サア、その大盡は。イヤ〱、今は云はれぬ。身請
けが濟んで、行けば知れる。キリ〱うせい。
靱負　イヽヤ、そりやならぬ。素町人の分として、我れ〱
に向ひ慮外の一言。手は見せぬぞ。
才兵　こりや面白い。其やうな事怖がつて、この商賣がな
るものか。エヽ、退かつしやれ。
此花　待たしやんせ。
ト支へる。引き退ける。立廻りの所へ、橋がゝりより
瀬平出て、才兵衛を蹴り倒す。皆々見て
靱先　オヽ、よい所へ瀬平。
花此　ようござんしたなア。
ト才兵衛起き上がつて
才兵　ヤア、うぬは瀬平。こりや、なんで蹴り倒したのぢ
や。
瀬平　なんでとは慮外な奴。百兩と云ふ手附けの打つてあ
る花鳥どの。矢數の濟まぬ其うちは、外へやる事能りな
らぬ。大盡々々と吐かすその客は、どこの奴かは知らね
ども、千兩出せば此方は萬兩、幾億萬の金銀でも、お手
支へなさるゝやうな、お大名と思つて居るか。殊に矢數
の眞最中、見事われが連れて行くか。

才兵　サア、それは。
瀬平　返答次第で、首が飛ぶぞ。
才兵　サア〱、と行きつまるも久しいものの。
靱負　しやつとでも云つて見い。
此花　オヽ、笑止。
内にて　シタ〱ワアイ。
ト矢聲になる。橋がゝりより伴藏、幟を持つて出て
伴藏　殿、これにござりまするか。お喜び遊ばせ。雷八ど
のは鬼神の如く、さし詰め〱、最早五千七百本の通り
矢。
ト差出す。
靱負　ナニ、五千七百本とな。
ト幟を見て
先次郎どの、瀬平、この筈ではあるまいか。
先次　なんとも心得ぬ。
靱負　瀬平、見屆けて參れ。
瀬平　ハツ。
ト橋がゝりへ走り入る。
伴藏　イヤモウ、あの勢ひでは勘左衛門に、滅多に負ける
事ではござりますまい。

靱負　サア、それが猶惡い。
伴藏　ヘテ、射勝つのがお家のお爲。それが何ゆゑ惡うござりまする。
靱負　サア、その惡いと云うたは。
伴藏　惡いと仰しやつたは。
靱負　サア、それは。オヽ、それ〳〵、矢數の濟む程身請けの手番ひが惡いといふ事ぢやわい。
先次　左樣でござりまする。
伴藏　ほんに又、この新吉も何をして居る。お屋敷の掛屋まで、取りに遣はされた後金、もう持つて來さうなものぢやが。
此花　ほんにマア、遲い事ではあるぞ。
花鳥　夜道と云ひ、ひよつと道で、もしもの事は、あるまいかいなア。
伴藏　金持つて夜道とは、不用心なものでござりまする。
先次　此やうに時刻の延びる程、矢數の終りも近づくと云ひ
花鳥　二道掛けし身請けの相談。
此花　どちらへ札が落ちやうやら、案じらるゝ、今宵の仕儀。

靱負　エヽ、早う持つて來居らいでなア。
才兵　その遲いのが此方の附け目。矢數の終り次第、身請けは此方へさせる程に、さう思うてござりませ。
内より　シタ〳〵〳〵、ワアイ。
ト瀨平、幟を持ち、走り出て
瀨平　六千三百本とござりまする。
先次　ドレ。
ト取つて見て
誠に、此やうに通り矢があつては。
靱負　家の大事。サア、大事の矢數。兄上と云ひ、修理大夫さまのお心遣ひ、よもやあの雷八が。サア、射負ける筈はあるまいが。
瀨平　心ならぬこの通り矢。
先次　伴藏、見屆けて參れ。
伴藏　畏まつてござりまする。
ト走り入る。
花鳥　このマア、新吉どのは、なぜに遲い事ぢややら。
此花　もし掛屋のお金が間違ひはせぬか。
瀨平　エヽ、この道まで迎ひに行きたけれど、後の事が氣遣ひなれば、行くにも行かれず。

靱負　身請けの切端。
先次　矢數の終り。
才兵　早う金が欲しいなア。
内に　シタ〳〵〳〵ワアイ。
　小伴藏幟を持ち、走り出て
伴藏　サア〳〵、お喜びなされい。六千七百本の通り矢。
瀨平　ドレ。
　ト取つて見て
　こりや斯うしては居られぬわい。
　ト走り入る。
才兵　へヽ、段々壽命が縮まつて來るぞえ。
靱負　誠に光陰矢の如しと、速きに譬へし矢數の通り矢。
先次　重なる手柄は雷八が、深き所存にあるべき事。
伴藏　イヤサ、お案じ遊ばすな。勘左衞門に射勝つとも、
　射負ける事ぢやござりませぬ。
靱負　サア、それが猶氣遣ひ。
伴藏　エ。
靱負　サア、氣遣ひな掛屋の返事。
伴藏　ほんに、もう來さうなものぢやな。
　ト空嘯いて居る。

内より　シタ〳〵〳〵ワアイ。
　ト瀨平、また幟を持つて、走り出て
瀨平　サア〳〵、大事ぢや〳〵。七千五百本でござります
　る。
先負　先次郎どの、こりやマア、どうしたものでござら
　う。
先次　イヤ〳〵、お氣遣ひなされな。アレ、勘左衞門は八
　千筋。
靱負　雷八が通り矢は七千五百本。
先次　最早、これが矢數の終りと見えまする。
才兵　矢數が終らば、後金の五百兩、受取らうかい。
皆々　サア、それは。
才皆　サア〳〵〳〵。
才兵　どうぢや。
内より　シタ〳〵〳〵ワアイ。　　返し
　造り物、右の道具、一面の廻り。三十三間堂裏の體。
　筋違ひに、樂屋まで打拔き、東西の茶屋、矢來にな
　る。舞臺先三尺程の矢來、セリ上げる。堂の椽側に
　雷八大肌脫ぎ、鉢卷、腹卷、弓懸け、弦滑り、射前

よろしく、この傍らに侍ひ一人、矢、渡して居る。尤も弓大分、矢數飾りあり。平舞臺に篝火澤山。上下侍ひ大勢、シタ〱〱ワアイと采を振つて居る。跳らへの矢數の鳴り物にて、道具とまる。

ト何本も〱弓射る事あつて、よき程にて

傳吾　七千六百本通り矢。

大勢　シタ〱〱ワアイ。

ト雷八、キツと見る。返し造り物、元の道具に戻る。矢張り立廻りの見得。合ひ方になる。

皆々　すりや、どうあつても。

才兵　エヽ、面倒な。おちやいなう。

ト先次郎、引分けて

先次　後金渡さう。

才兵　なんと。

先次　ハア、花鳥が身請けの後金、渡さうと云ふのぢや。

才兵　面白い。ドリヤ、金受取らう。

靱負　アヽ、コレ〱。先次郎どの、爰にない身請けの金。

先次　イヤ、金がある。

靱負　金があるとは。

先次　花鳥太夫が身請けの金は、これでござる。

ト矢の根の箱を出す。

靱負　そりや、其許の家に傳はる水破の矢の根。

瀬平　即ち雷八どの預かりにて、御持參なされしその矢の根を。

作藏　身請けの金と御意なさるゝは。

先次　手詰めになつたこの場の仕儀。見捨て聞き捨てならぬは一家の因み。寶は身の差合はせと、雷八が弓勢次第。明くれば直ぐに禁庭へ持參せねばならぬ矢の根なれども金の來るまで其許へ、暫しがうちお預け申し置く。これにて好いやうに。

靱負　そんならその矢の根を、お貸しなされて下さるか。

先次　暫時のゆとり。

ト靱負之介に渡す。

靱負　添ない。瀬平、これにて好いやうに。

瀬平　ハツ。コリヤ親方。お預けなさるゝは質物代り。一見も叶はぬ御寶。有り難い事ぢやと思ひ、大切に守護いたせ。

伴蔵　併しながら明朝早々、禁庭へ御持參なされねばならぬ御寶を

先次　預け置くは親方が氣休め。

才兵　勿怪な物とは云ひながら、寶とあれば、定めて結構な物でござりませう。たゞ待たうより丈夫なもの。しつかりと預かりました。

花島　ほんに、これでちつと落ちつくわいなア。これと云ふも先次郎さまのお志し。

此花　わたしも嬉しうござんすわいな。

先次　併し、家の重寶と云ひながら、雷八が預かりなれば必らず沙汰のないやうに。

瀬平　それはお氣遣ひなされますな。大切なお寶なれば、手離されぬ才兵衞。私しが側に引き付けて、金子の參り次第引替へ仕り、あなたへお手渡し致しまする。

靱負　何事も好いやうに、賴んだぞや。

瀬平　畏まりましてござりまする。コリヤ才兵衞、金の來るまで、この瀬平が側、一寸も離るゝ事はならぬぞよ。

才兵　なんの離れやう。これから島原へ行たり來たりする間に夜が明ける。金の來るまで雜用に附かうかい。

伴蔵　ハテ、かする奴の。

内より　シタ〳〵〳〵ワアイ。

靱負　あの矢聲は。

伴蔵　見て參りませう。

ト走り入る。引違へて、侍ひ、幟を持つて出て

侍ひ　通り矢の印。

ト差出す。先次郎、取つて

先次　七千九百本。

ト靱負之介、驚ろき

靱負　ヤア、それでは約束の

ト瀬平、キッとなつて

瀬平　いま百本が善惡の、忠か不忠か、引ッ捕へ

ト駈け出さうとする。皆々留めて

花此　こりやどこへ行かしやんす。

瀬平　知れた事、矢數の場所へ。

ト行かうとする。皆々留めて

皆々　マア〳〵、待て。

内より　シタ〳〵〳〵ワアイ。返し。

ト造り物、元の道具になる。矢張り雷八、射前の見得。

ト右の通りにて暫らく休らひ、此うち、侍ひ、弦を引
　く事あつて、雷八キッと見得。
侍ひ　八千筋通り矢。
大勢　シタ／＼＼ワアイ。
　造り物、元の三十三間堂の表になる。矢張り瀬平を
　留めて居る見得。
瀬平　ハテサテ、爰をお放しなされい。
先次　急いては事を仕損ずる。
瀬平　ぢやと申して。
内に　シタ／＼＼ワアイ。
　ト侍ひ、櫂を持ち、走り出て。
侍ひ　矢數の終り。
先次　八千八筋。
靱負　すりや勘左衛門に
瀬平　八筋の射越し。
靱負　先次郎どの。
先次　靱負之介どの。
瀬平　若殿様。
靱負　瀬平。

皆々　ハア、。
　ト當惑する。靱負之介、こなしあつて
靱負　さうぢや。
　ト腹切らうとする。皆々留めて
瀬平　こりや、なんで、お腹召しまするぞ。
靱負　なんでとは、雷八が裏を掻いたる今宵の矢數、ぢや
　に依つて。
瀬平　待つた、御短慮千萬な。死は易し、生は難し。何を
　申すも爰は途中。御歸館あつて何かの密談。
先次　主計さまの御賢慮にもあるべき事。
瀬平　急く事ではござりませぬ。マア／＼、お待ちあられ
　ませう。
　ト靱負之介、心の附くこなし。
靱負　成る程、こりやわしが早まつた。何事も兄上の御賢
　慮次第。さりながら、才兵衛に預けし矢の根。
瀬平　お氣遣ひなされまするな。後に殘つて下郎めが、お
　金のせいらくした上で、此方へ取り戻しまする。
先次　この先次郎は假屋にて、雷八が所存を試さん。
此花　そんならわたしは、殿様と一緒に。
花鳥　必らずともに、身請けの事を。

瀬平　ハテ、呑み込んで居りまする。
靱負　先次郎どの。
先次　ござりませ。
靱負　おぢや。
　ト唄になる。先次郎、此花は臆病口、靱負之介、花鳥と橋がゝりへ入る。後を見送り、捨ぜりふあつて
瀬平　ハテ、性急な若殿。どうやら斯うやらお館へお歸し申したもの〻、お家の寶、兵破の矢の根の紛失の折に、今度の勅諚。勘左衛門どの〻國遠と云ひ、主計正さまのお心遣ひ。御一家なれば桃の井家も同じ騒動。ハテ、どうしたらよからうなア。
　ト手を組み、思案して居る。才兵衛、欠伸混りに
才兵　ヤレ〱、退屈や〱。なんぢややらどさくさと、其方の方が片附いたらば、約束の金貰ひませうか。
　トせがむ。瀬平、耳へ入らぬこなしにて
瀬平　雷八へ殿様が、お願ひなされし今日の矢數。勘左衛門に射負ければ、勅諚の蟇目も延引。其うちには勘左衛門の行くへを探し、蟇目の役と申し立て、寶の詮議を遊ばす御所存。ところを射勝つた雷八が心底。頼みの筋は反對と云ひ、手詰めになつた今宵の仕儀。
才兵　コレ〱、人にばかり物云はせ、返答せぬは、ア、聞えた。金の來ると云ふは嘘ぢやな。コレ、何時ぢやと思ふのぢや。夜が明けるぞや。
瀬平　夜が明ければ、禁庭へ持參せねばならぬお寶。どうぞ延す仕儀が有りさうなものぢやが。
才兵　エヽ、なんの事ぢや。よい〱、埒は明きませぬか。なんの明かうぞい。やり仕事と云ふものぢや。どうやら金になりさうなこの代物。此方から質物にやつて金にするぞや。矢の根は質屋へやる程に、さう思うて居やいなう。
瀬平　なんと云ふ。
才兵　サイヤイ。金が間に合はぬに依つて、質に置く程にさう思うて居やいなう。なんの事ぢや、阿房らしい。
　ト行かうとする。瀬平、引き戻して
瀬平　それを質に入れて堪るものか。
才兵　そんなら約束の金を貰はうか。
瀬平　サア、その金は
才兵　どうぢや、有るか。
瀬平　エヽ、搗て加へて身請けの切端。お家の寶紛失の上、矢の根を質物とせば、兩家の寶を失ふ道理。

才兵　サア、先刻にから開いた様子が、この寶がない時には、明日禁裡さまへ云ひ譯が立たぬと云ひ、蟇目とやらも延びる道理。それでは詮議になるゆゑ、否とも金になるこの代物。ぢやに依つて持つて行く。

ト瀬平、此せりふに心附き

瀬平　なんと云ふ。この寶を質に入れゝば、明日の蟇目が延びると云ふか。

才兵　ハテ、知れた事。この矢の根がないと、その役目が勤まらぬぢやないかいやい。

瀬平　ムウ。この寶は雷八が預かり。これさへなければ明日の蟇目は延びる道理。其うちには此方の寶、兵破の矢の根、また勘左衛門が行くへ、尋ね出して申し譯。いよいよ其方には預けて置かれぬわい。

才兵　そんなら金を受取らうか。

瀬平　サアそれは。

兩人　サア〱〱。

才兵　どうぢや。

ト瀬平、無念のこなしあつて

瀬平　エヽ、もう、毒喰はば皿ぢや。

ト才兵衛を一太刀切る。合ひ方になる。本釣り鐘。

才兵　おのれ、切つたな〱。

ト立廻りあつて、瀬平、箱より矢の根を出し、矢の根を隠さうとするを、才兵衛、取りにかゝる立廻り。

瀬平　これを隠せば雷八が身の難儀。蟇目の延引。ソレ。

ト矢の根を持つて、ウロ〱する。また才兵衛かゝるを踏まへつける。

内より　お供揃ひ。

大勢　ハア、。

瀬平　ありや殿の御歸館。大切なお供先。ウム。

トまた立廻りになる。才兵衛を切り倒し、繪馬の矢の根を見て

奉納越野勘左衛門、幸ひの隠し所。さうぢや。

ト足場へ登らうとする。才兵衛かゝる。また切り倒し、足場へ上がり、寶の矢の根を、繪馬の矢の根と掏りかへる。此うち、伴藏出かけ、見て居る。小隠れする。瀬平、足場より飛び下り、繪馬の矢の根を寶の箱に入れる。才兵衛、それをとかゝる。瀬平、わざとやるまいとこなし。伴藏、足場へ登らうと立ち寄る。瀬平、それをと、箱の手を離す。才兵衛、忝ないと引き取る。此うち、先次郎出て、才兵衛を當て、寶の箱を持

つて走り入る。それを才兵衛、追ひかけ入る。瀬平は伴蔵を引き下ろさうとする。立廻り。足場へ登り、兩人、キッと見得。

伴蔵　わりや瀬平か。

瀬平　さう云ふは伴蔵か。

伴蔵　合點のゆかぬ繪馬の矢の根。

ト合ひ方替り、兩人、花々しく立廻り、よろしくあつて、伴蔵、花道へ走り入る。瀬平、起き上がり

瀬平　おのれ伴蔵。

トきつとなつて、追つて入る。ト橋がゝりにて

皆々　サア／＼、お出でなされい／＼。

ト夏目藤左衛門、修理大夫、出て來る。その後に雷八、右の形にて出る。孫作、丹下、傳吾、諸士大勢、譽めそやして出て來る。

皆々　雷八どの、きついお手柄／＼。

孫作　なか／＼越野勘左衛門は及ばぬところ。

藤左　八千八筋とは、きびしいものでござる。

皆々　お祝ひなさい／＼。

藤左　誠や武士の武邊なきは、陶器瓦礫の如しと、それには引替へ雷八が心掛け、天晴れ弓勢、弓矢の面目。

雷八　ハツ、こは有り難う存じ奉りまする。

修理　雷八、この度の矢數は、北畠主計正どの、其方へお頼みなされしに、その詞を守り、よくも八千八筋、ムウ射通したなア。

雷八　イヤ、忠義に凝つたる拙者ゆゑ、蟇目の役目を蒙むれば、この身の譽れ、御推量下さりませう。

藤左　首尾よう矢數も調ふ上は、いよ／＼蟇目の役目は雷八。兩家に傳ふる矢の根を禁庭へ。

修理　委細承知仕つてござりまする。

雷八　水破の矢の根は拙者が預かり、即ち先次郎さまへお渡し申し置きましてござりまする。

藤左　然らば右の趣きを武將家へ。

修理　拙者もお見送り。

皆々　我れ／＼もお供。

藤左　雷八、さらば。

雷八　御苦勞に存じまする。

ト唄になる。高提灯先に、藤左衛門、修理太夫、孫作丹下、傳吾、皆々向うへ入る。

雷八殘り、後見送り

雷八　いま修理太夫が詞と云ひ、主計正が某へ、賄賂を以

ての頼みは、勘左衛門が弓勢に、勝つて負けよと詞の謎。忠臣顔に呑み込んで、まんまと射通す八千八筋。恐らく四海の弓殿下。主計正が詞を背くからは、身共を此まゝに。こりや枕を高うは寝られぬわい。後日の妨げ。ムウ。

傳吾　お先。

大勢　ハア、。

ト所知入りになる。雷八、繪馬を見て

雷八　最前見屆け置きしあの繪馬に、勘左衛門が我れに續く弓勢なしと、高慢顔にて、矢の根に銘を記し、奉納したるあの矢の根。さうぢや。

ト足場へ登らうとして、東西の高提灯を切り落し、足場へ登ると、橋がゝりより、本行列、乘り物にて、皆皆よろしく向うへ入る。雷八、繪馬の矢を持ち、足場より下りて、後をキツと見送り。

おのれ一矢に。

ト向うへ走り入る。返し。

造り物、右の節塀下りる。此うち、道具、飾り替へ。

ト藤左衛門、供を連れ、臆病口より橋がゝりへ入る。

返し。

造り物、右の塀引き上げると、一面の二重舞臺、松原、花道兩側、本松原、舞臺先、道しるべの石をセり上げる。

ト矢張り所知入りにて、臆病口より右の行列、出て來る。これを、雷八花道よりツカ〳〵と出て、とつくりと見て、この行列を戸屋際にて弓矢を構へ、狙ひ居る。右の行列、よき所にて

主計　乘り物立てい。

皆々　ハア、。

ト行列とまる。主計正、乘り物の戸を開け

主計　最早何時。

傳吾　卯の刻でもござりませうか。

主計　明くれば直さま、禁庭へ差上げる矢の根。

ト乘り物の戸さす。

雷八　エイ。

ト乘り物に矢、立つ。皆々驚ろく。

皆々　これは。

主計　構はずと、乘り物やれ。

皆々　ハア、。

ト ばた／＼と早めて、行列、皆々、橋がかりへ入る。雷八、ツカ／＼と本舞臺へ來て、伸び上がり／＼、後をとつくりと見て、につこりと笑ひ

雷八　慥かに手ごたへ。

ト ばた／＼にて臆病口より、瀨平走り出て、雷八に突き當り

瀨平　曲者。

ト 箱提灯差し出す。敲き落す。兩人、立廻り、いろ／＼あつて、互ひに拔き合せ、瀨平、雷八と心得、切りつける。ト道しるべの石に當る。これにてパッと石火出る。兩人キッと身構へ、よろしく。

幕

二　段　目　　北畠館の段

役名――北畠主計正。同奧方、濱荻。北畠靱負之助。桃の井修理太夫。桃の井先次郎。同妹、彌生姬。局、橋富。同、伏屋。林監物。二見瀨平。蜘手伴藏。天野孫作。石黑丹下。色島傳吾。腰元、松が枝。和田雷八。越野勘左衞門。

造り物、見附け屋敷の大門、それより西手、物見の櫺子、門より東一面の高塀、すべて表通りの模樣。幕の內より太神樂、揃ひの形、撥の曲を舞うて居るを、右物見より中女形、子供、殘らず、皆々、物見の方へ後向きにて、延べ鏡にて寫し、下で舞うて居る見得にて、太神樂の囃子、笛、太鼓にて幕ひらくと、撥の曲よろしくありて、獅子を擔ぎ、また獅子の舞ひになる。此うち物見の女形、面白いの、上手ぢやと云ふ出合ひのせりふ、しか／＼あり、獅子神樂の通りにあつて、大ふつ／＼と囃すと、向うよりお徒步の侍ひ一人走り出て

侍ひ　御歸館。

ト 知らす。これにて太神樂の人數、橋がゝりへ、殘らず入る。ト物見の前、青海波の簾下りると、大門開く。

ト 所知入りになり、向うより口明けの主計正が乘り物を手舁きにして奧へ入る。此うち供の人數、玄關より東西に別れ入る。大門閉まる。向うパタ／＼にて、瀨平、走り出で、急き切つたる體にて、門の內へ入らう

とする所へ、また向うバタ／＼にて、伴蔵走り出る。
伴蔵　矢の根の盗賊、二見瀬平。
ト瀬平を捉へる。
瀬平　ハテ、脚骨の達者な伴蔵。
ト立廻りになり、門の内より、侍ひ一人出る。
侍ひ　ヤア、瀬平どの、何事。
瀬平　コレ、殿の御身の上、拙者お供に遅れしゆゑ、無念
にござる。
伴蔵　うぬに縄打ち、御主人へ。
ト始終、立廻りにて
瀬平　して、お館は上を下へと騒動いたしてござらう。
侍ひ　イヤ／＼、騒動は致さぬ。殿様にも只今御歸館。
瀬平　その御歸館がお嘆きの元。
伴蔵　慥かに見屆けた、夜前の仕儀。
瀬平　覺えない。たわ言吐くな。
侍ひ　何ぢややら譯が知れぬ。側杖に遭はぬうち、手前は
ちやつと。
ト門の内へ逃げて入る。瀬平、伴蔵、立廻りしい／＼
瀬平　せめて若殿様や奥様に。
ト行かうとすると

伴蔵　逃げても逃がさぬ。
トかゝるを、何をと瀬平、振り切る。これより兩人烈
しく立廻りになると、よろしく、瀬平、伴蔵を門の敷
石の上へ見事に投げる。起き上がる所を直ぐに捻ぢ伏
せ、どつこいと見得になると、チョン／＼にて、瀬平
伴蔵を乘せながら、この門、高塀、東西へ引き分け
る。
ト後、打ち抜き、二重舞臺、見附け、金襖、兩方筋か
ひに、塗り骨、縁張りの障子屋臺にて、右二重舞臺の
上に、先次郎、長袴にて、笛。田丸關彌、雷八が妹松
が枝、大小の鼓、靱負之介も長袴にて、太鼓打ち、謠。
ト内より、右の役人、鳴り物、松囃子の儘にて、囃子
の内に道具、段々、前へ押へ出して來ると、向うより
主計正奥方濱荻、衣裳、裲襠にて、腰元大勢、打連れ
て來ると、橋がゝりより、林監物、衣裳、上下にて、
天野孫作、石黒丹下、色鳥傳吾、この諸士打連れ、兩
方よりしづ／＼出て來る。これは囃子のうちにて、よ
ろしく直る。靱負之介、太鼓打ち上げる。濱荻、上へ
直る。皆々二重舞臺より下りて

松枝　これは奥様濱荻さま。
關彌　御家老林監物さまにも
松枝　只今お入りでござりまするか。
濱荻　靫負之介さま、松が枝、關彌、それより桃の井の若殿外次郎さまにも、御苦勞の御入りの上、笛の御役目。
先次　イヤ〳〵、拙者妹が縁と申し、親人様の仰せを幸ひ、何かの事の御見舞ひに、當お館へ參りましたるところ、主計正さまの仰せを蒙むり、御祝儀なれば望んで囃子を相勤めましてござりまする。
靫負　濱荻さま、監物を始め、皆の者、今日の祝儀も打ち納め、此やうなめでたい事はないわいやい。
監物　イヤ、なまめでたう存じます。
靫負　ヤ。
監物　若殿、濱荻さま、先次郎さまも御一家なれば、苦しうござりませぬ。この度大内の勅諚、即ち桃の井の御家來、當家に御縁のある和田雷八どの、夜前大佛に於ての矢數、通り矢も首尾よく仕負ふせられし上は、此お家の預かりの、大切な兵破の矢の根を、差上げねばなりませぬ。それに、祝儀ぢやの、松囃子ぢやのと、何事でござりまする。

靫負　イヤ〳〵、監物、氣遣ひしやんな。この靫負之介も、その矢の根の事を案じて居たが、先刻、兄者人、御歸館せられて仰しやるには、昨夜、雷八が矢數首尾よく仕負ふせしゆゑ、當今御惱の憂目を蒙むるといふは、縁を組んだる桃の井、北畠兩家の規模、此やうなめでたい事はない程に、其方達も隨分祝へ、家中の者にも賑はへとの仰せ。
松枝　それで私しらも、お恥かしい鼓の調べ。
濱荻　喜びに喜びを重ねる、陽春の壽き。
關彌　松囃子の御祝儀も納まり。
先次　手前どもも、おめでたう存じまする。
監物　ハテ、サテ、何もめでたい儀はござりませぬ。蘇目の役目相定まれば、差上げねばならぬ預かりの矢の根、その大切な矢の根は、疾より紛失いたして居りまする。
靫負　サア、その矢の根の事も、兄者人に尋ね申したれば苦しうない、矢の根紛失の申し譯は、よろしく計らふ、何事も案じる事はないと、慥かな仰せ。それで申し濱荻さま。
濱荻　成る程、仰せの通り、何事も殿樣のお指圖に依つて御祝儀の催ほし。監物、其方も案じずと、ともどもに。

監物　でも拙者は家老の役目、お家の大事に、鼓や太鼓の音色を聞いて、面白がつては居られませぬ。
靱負　ハテ、迂濶な者ではある。何事も兄者人が、案じなと仰つしやれば、氣遣ひはないわいの。
孫作　イヤ／＼、若殿、監物さまのお案じもお家のお爲。
丹下　我れ／＼も、大切な矢の根紛失と承つて
孫作　驚ろき入つてござります。
監物　一人貪戾なれば一國亂を起す。寶の紛失、お家の大事を押し包み、舞ひ唄ふは、殿の御賢慮の程、拙者はどうも、會得仕らぬ。
ト兩手を組み、思案すると、向うより、雷八、衣裳、上下にて、ツカ／＼と出て來て
雷八　何れも樣、これにお渡りあられまするかな。
士皆　ヤア、和田雷八どの。
雷八　監物どの、何れも、さて／＼、何と申さう詞もない仕合せ。先づ御臺樣にも、靱負之介さまにも、主計正さまの御身の上、承つて、拙者言語に絶しまして。
先次　コリヤ／＼、和田雷八、そりや何を云ふのぢや。
雷八　これは／＼、若殿先次郎さまには、はや御入來の程、ア、、御神妙至極に存じ奉ります。

松枝　申し／＼、兄樣、とつくりと、マア、お心をお鎭めなされて、御挨拶をなされませいなア。
雷八　何を妹、女の其方が小差出た。扣へて居よ。表向きは、桃の井の御家來なれど。當家に内緣ある身の、主計正さまとは、兄弟も同然。
靱負　如何にも、貴殿は親人樣の外戚腹、すりや、兄者人も、この靱負之介が爲には。
雷八　サア、親は泣寄りと下世話の譬へ。それゆゑ夜前の樣子聞くと等しく、取る物も取り敢へず。
監物　貴殿の手柄の、八千八筋の通り矢は、當代稀れな和田雷八どのと聞く嬉しさ。
先次　その高名ゆゑ、弓の天下は即ち雷八。蟇目のお役目を蒙むるといふは、その身の譽れ、好い家來を持つた桃の井の家の面目。
濱荻　殿樣にも、外ならぬ雷八どのの、お手柄の程、お喜びなされてござりまするわいなア。
雷八　イヤ、拙者が身の上よりは、先づは主計正さまにも。
先次　最前御歸館なされたわいの。
雷八　エ、。

濱荻　雷八どのにも、殿樣へ御對面を。
雷八　ア、イヤ〳〵、奥方樣。
　ト濱荻が顏、不思議さうに眺め
靱負之介さまも、
　トまた、靱負之介が顏を見て
先次郎さま、妹。
　ト皆の顏をいろ〳〵に見て、思ひ入れあり
御愁傷の體にも相見えず、只賑はしい屋敷の樣子。ムウ、
ハテナア。
先次　イヤ、雷八、其方が當お館へ參つたは。
雷八　拙者がこれへ、參つたは。
先次　なんぞ氣遣ひな事ではないか。
雷八　イヤサ、夜前矢數の歸るさに。
先次　エ、。
雷八　イヤ、夜前矢數のその節、御懇意に仕る當家の諸士
方より、お見舞ひ萬端にあづかりし、そのお禮の爲、又
は拙者内縁と申し、此方の姫君は、靱負之介さまと御縁
組み、そのお輿入れも、何とやら御延引。その取結びも
仕りませうと存じまして。
濱荻　その賴もしい雷八どの、大内よりお指圖を以て、靱
負之介さまに、先次郎さまのお妹御、大内にお勤めなさ
れし彌生さまとの御婚禮。どう云ふ仔細やら、殿樣の仰
せにて、お輿入れの御延引。どうぞこの上は、彌生さま
を一日も早う、ナ、靱負之介さま。
靱負　サア、姫が方から、急き〳〵の音信。どうぞ兄者人
にお頼み申して、姫の輿入れを。
松枝　申し、若殿樣、あなたには早う彌生さまと、御祝言
なされたうございますかえ。
靱負　サ、さうではなけれど。
松枝　イエ〳〵、よう存じて居ります。まだお輿入れのな
い先から、彌生さまと忍び逢ふとは、ほんにモウ
　ト雷八や、濱荻を見て、ちやつと
お睦まじい事でございますわいな。
　トびんとする。
靱負　イヤ、私しは、どうでも苦しうございませぬ。
　ト松が枝へ氣兼ねをする。雷八、始終思ひ入れあつ
て
雷八　妹、して、殿主計正さまには、いづれに御座なさる
るぞ。
松枝　アイ、殿には、奥殿にお渡りなされますわいな。

雷八　ムウ、すりや奥殿に、御別條なく。
靱負　イヤモウ、兄者人には隨分御機嫌よう。
雷八　ハテ、面妖な。
　トこなしあると、バタ／＼にて、伴藏、走り出る。雷
　八を見て
伴藏　コレサ、雷八どの、夜前矢數の場所に於て。
　トいふうち、又バタ／＼にて瀬平、走り出る。
瀬平　伴藏、騒ぐな。
　ト取つて投げる。
伴藏　好い所へ、瀬平め。
　トまた立廻りになり
瀬平　兎角生け置いては邪魔な野郎め。
　ト立廻りしい／＼
　イヤ、それよりは、殿の御身の上。
　ト行かうとするを
伴藏　一寸も動かす事はならぬ。
瀬平　何を、面倒な。
　ト振り切る。
伴藏　待て。
瀬平　離せ。

　ト兩人、立廻りしい／＼、臆病口へ走り入る。
靱負　ハテ、合點のゆかぬ、此方の家來、二見瀬平と
先次　此方の家來、鞍手伴藏と
監物　今の爭ひは、酒の上の口論か、但し仔細あつての事
　か。
雷八　何ぢややら、樣々の奴等が涌いて出て、騒がす程に
　の。
皆々　ほんに、なんの事ぢや。
　ト向うより
呼び　お勅使のお入り。
　ト呼ぶ。
皆々　ハテ、思ひがけないお勅使のお入りとは。
　ト雷八、キッと心附き
雷八　ムッ、幸ひ。ナニ、何れも樣、お勅使のお入りとあ
　れば、殿主計正さまには、お出迎ひなさらずばなります
　まい。サ、ちやつと右の趣きをナ、監物どのにも。
監物　如何にも、若殿、調狄さま、早く殿にお勅使お入り
　の樣子を。
　ト奥より
主計　イヤ／＼、知らすに及ばぬ、主計正がお出迎ひ申す

す。
ト衣裳、上下にて出る。雷八、ギョッとして
雷八　ヤア、主計正さま。
主計　和田雷八。
雷八　ハッ。
主計　夜前の矢數。
ト顏をヂッと眺め
天晴れ弓勢。
雷八　ヘイ。
主計　この主計正が
雷八　エ。
主計　緣者ほどあつて、天晴れの强弓、八千八筋よく射通した。ムウ、ハ、、、、。ハテ、辛勞にあつたであらうな。
雷八　ハッ、未熟の拙者、武運に叶ひましたさうにござります。
ト兩人、こなしあつて
主計　幸ひの雷八、馳走申し付けうが、折惡しい勅使のお入り。暫らく其方は
雷八　お次に罷り扣へませうかな。

主計　如何にも。某とくと遇すまで、身動きさせすと。
雷八　ヘイ、委細承知仕りましてござりまする。
ト合ひ方になる。雷八、こなしあつて奥へ入る。
靱負　申し、兄者人、お勅使のお入りとござりまする。
主計　其方達も無禮のないやうに。
皆々　お出迎ひ申し上げませう。
ト三味線入りの唄になる。主計正、靱負之介、先次郎、濱荻、監物、段々に、列を正し、皆々、出迎ふと、向うより、彌生姫、衣裳、裲襠、姫形にて、修理太夫、伏屋、橋富、介添へ、上下にて、侍ひ連れ、しづ／＼出て、花道よき所にて、彌生姫、皆々、立ちとまり、靱負之介と顏見合せ
靱負　ヤア、其方は云ひ號けの彌生姫。
濱荻　ほんに、お勅使と申し上ぐるは。
主計　コリヤ／＼、奥、弟、不調法千萬な。
靱負　それでも。
主計　ハテ、緣邊は格別、表向きはお勅使樣、お添へ人は桃の井修理太夫どの、ナ。
先次　誠に親人樣、妹。
彌生　香をとめて誰れ折らざらん梅の花、あやなし霞立ち

な隱しそ。大内にお宮仕へせしこの彌生、勿體なくも、
女御さまのお情にて夫結び、その輿入れも暫閑に、いづ
このお館へと思ひ暮らすうち、今日思はずも上樣の、仰
せを蒙むり父樣諸とも、參りましたる勅使の自ら。

主計　御苦勞の御入り。イザ、先づあれへ。

皆々　お通りあられませう。

ト矢張り唄にて、彌生姬、靫負之介へこなしあつて、
修理太夫諸とも、伏屋、橘富連れ、ズッと二重舞臺へ
通る。皆々並よく座に着く。

修理　ナニ、主計正どの、娘ながら彌生は勅使の役目。拙
者添へ人、先づは勅諚の趣きを、とくと御承知あつて御
尤もに存じます。

主計　ハッ、修理太夫どの、何かに附けての御懇志、千萬
祝着。

ト威儀を繕ひ

お勅使樣へ申し上げまする。何卒勅諚の趣き、仰せ聞け
られ下さりませうならば、如何ばかり

皆々　有り難う存じ、奉ります。

ト辭儀をする。始終、彌生姬は、靫負之介の方へこな
しあつて

彌生　勅諚の趣き、餘の儀に非ず。

ト云ひかけて、靫負之介、辭儀して居るゆゑ

アレ、俯向いてござる。コレ、伏屋、橘富。

ト靫負之介を教へる。

伏屋　申し靫負之介さま、大切な勅諚なれば、あなたばか
りは、お頭をお上げなされて、お聞きなされませい。

靫負　ハッ〳〵、左樣でござりますかな。

トしやんとして、彌生姬の方を見る。彌生姬、恥かし
さうに笑ふ。

伏屋　申し、彌生さま、ちやつと勅諚の趣きを。

彌生　サア、勅諚の趣き、餘の儀に非ず。この度我が君樣
御惱しきりに渡らせ給ふにつき、この北畠と、また自ら
が親里、桃の井と、兩家のうちより武士を選み、矢數を
射させて弓勢を試み、蟇目の役を申し付けよとの、先達
ての勅諚。

修理　それゆゑ夜前、拙者が家來、和田雷八に申しつけし
ところ、天晴れ強勢、八千八筋の通り矢。

彌生　その節も、お噂を承りますれば、兄さんと御一緒
に、端の寮に、どれやら美しいお女中と、お樂しみなさ
れてござつたとやら。ほんに自らはそれを聞きますると

ナ。
先次　コレ〳〵、妹。そりや、マア何を。
彌生　エ、。
先次　其方はお勅使ではないかいなう。
彌生　何を、兄様、お前も一つ穴の狐さんぢやわいなう。
修理　コレサ、娘、イヤお勅使様、何ゆゑ大切な勅　諚の
趣きを、仰せ聞けられませぬ。
彌生　サア、申しますわいなア。忙しない。
靭負　イヤ〳〵、お勅使様、何卒勅諚の趣きを。
彌生　あなたがさう仰しやるなら、申さいで何と致しませう。
靭負　ハツ〳〵。
ト辞儀する。
彌生　アレ、また俯向いてござるわいなア。
靭負　ハツ〳〵。
ト靭負之介、又シヤンとなる。彌生姫も、こなしあつて
彌生　それ源家より傳はりし、水破兵破の二つの矢の根を北畠桃の井へ預け置きしが、この度蟇目にお用ひあれば、急ぎ兩家より差上げ、蟇目終らば直ぐに取替へ、水破は北畠、兵破は桃の井と、改めてお預かりなさるゝがあの靭負之介さまと、自らと、婚禮の印とある、有り難い勅諚なれば、一時も早う兩家の矢の根を、自らに受取り立歸れとある、勅諚でござりまするわいなア。
修理　主計正どの、此方に預かり奉る、水破の矢の根は、即ち件先次郎に、持參いたさせましてござるが、して御當家にお預かりの、兵破の矢の根も、御一緒に。
監物　イヤ、修理太夫さま、その兵破の矢の根は。
主計　コリヤ〳〵、監物、扣へい。
監物　ぢやと申して。
主計　大切な勅諚、某を差措き尾籠至極。
監物　ハツ。
ト扣へると、橋がゝりより、バタ〳〵にて、侍ひ一人走り出て
侍ひ　申し上げまする。只今廣庭に於いて、此方の家來、二見瀬平、桃の井の家中、伴藏とやらと、口論の上、刃傷に及ぶべき體に相見えまするゆゑ、早速言上仕ります。
孫作　すりや、最前の兩人が、
丹下　また廣庭で

傍輩　争ひ居るとな。
主計　大切な場所、些細な儀を騒がしい。コリヤ、其方達
　は広庭へ参り、両方引分け、引据ゑて置け。
三人　ハッ。
主計　早く〳〵。
三人　畏りましてござります。
　ト三人、侍ひを連れ、橋がゝりへ入る。
靱負　最前といひ、今また広庭で、瀬平と伴蔵が争ひは。
濱荻　申し、それよりは、大切な矢の根の御返答を。
靱負　誠に、兄者人。
濱荻　殿様。
監物　申し、殿。
三人　御賢慮の程は。
主計　ハテ、大切な勅命、預かり奉るところの矢の根、差
　上げいで何とならうぞ。
先次　イヤ、主計正さま。
修理　ホヽ、承つたその矢の根の儀は。
主計　イヤ、差上げまする。
修理　ヤ。
主計　違背申さば違勅の科。勅諚の趣き了承仕り、預
かり奉るところの兵破の矢の根、差上げませうずる間、
お勅使様のお情を持ちまして、何卒両三日、日延べの
儀を。
修理　ムウ、御尤も。ナニ娘、イヤお勅使様、先達て館に
て申し上げし通り、ナ、彼の矢の根の儀、御受取りある
に、お心入れを以て、何卒主計正殿はるゝ通り、日延べ
の儀を。
彌生　我れ人に辛ければ、人また我れに辛しとやら。自ら
が身の上、有り難い女御様のお指図で、靱負之介さまと
の祝言を、今日や明日やと待ち侘び焦れても、小舅御の
主計正さまの仰せにて、輿入れも延引と聞く悲しさ、恨
めしさ。
　ト紙を取り上げ、涙を拭き〳〵
武士は物の哀れを知ると聞くに、エヽ、お胴慾な
　ト主計正が方へかけて
殊にあなたも、濱荻さまといふ奥様もござりますれば、
ちつとは又自らが心を思し召されて、例へ靱負之介さま
が嫌と仰つしやらうが、兄御様の御威光で、なぜこれま
で呼び迎へては賜はらぬ。靱負之介さまも、つれない兄
御と同じやうに、如何に不束な自らなればとて、祝言は

いつの事やら、打捨てござるは、聞えぬ〳〵、聞えぬ
わいなア。
ト泣く。
先次 これは困つたお勅使様ではある。大切なお役目を蒙
むりながら、其やうに泣いて居ては、濟まぬわいの。
修理 それ〳〵、我が身の上よりは、大切な日延べの儀
を。
彌生 父様。
修理 ヤ。
彌生 イヤ、桃の井修理太夫。
修理 ハツ。
ト不承々々に、辭儀する。
彌生 北畠主計正、同名靭負之介。
主計 ハツ〳〵。
ト共に、辭儀をする。
彌生 今日蒙むりし勅諚は大切で、先達て仰せ出されし勅
諚は、大切ではござりませぬか。
皆々 エヽ。
彌生 サア、自らと、靭負之介さまとの縁組みは、女御様
のお指圖、そんなら勅諚も同然。

修主 ヤ、なんと。
彌生 それに今まで等閑に、祝言もさせず、輿入れも延引
しても大事ないか。
主計 サア、それは。
彌生 何とでござりまするえ。
主計 段々、あやまり奉りましてござりまする。
ト平伏する。
修理 祝言輿入れの延引は、主計正の心得違ひ。ナ、もう
料簡して、兎に角日延べの事を。
主計 お勅使様へ、申さうやうもない拙者が不調法。何卒
御赦免下され、矢の根差上げまするところを、兩三日の
お日延べと、偏へに願ひ奉りまする。
彌生 そりや、叶ひませぬわいなア。
主計 エヽ。
彌生 ハテ、綸言は汗の如しとやら。今日受取つて立歸れ
とある勅諚、どうも延されませぬ。
主計 サ、そこを幾重にも、お勅使のお情にて。
橋富 日延べの儀は、お勅使のお姫様には、お聞き屆けは
ござりますまい。よう思うても御覽じませ。これまで焦
れ慕うてござるものを、なぜあなたのお指圖で、御婚禮

をお延しなされました。

伏屋　ほんに、姫御前の御婚禮は、高いも低いも一世一度、折角はずみ切つてござるものを、いとしほなげに今までの御延引。

伏屋　我が身抓つて人の痛さを知れとの譬へ。

橋富　親の心子知らずと申せど、子の心親知らずで、修理太夫さまも同じやうに、べん／＼だらりの、あなた任せ。

伏屋　申し、お姫様、この上は必らずともに

橋富　日延べの事は。

彌生　サア、それも、品に依つては。

ト靱負之介の方へこなしあつて

色をも香をも知る人ぞ知る。

主計　すりや、如何やうにお願ひ申しても。

伏橋　叶ひませぬわいなア。

主計　ホイ

修理　エヽ、娘、そりやあんまり。

彌生　自らは勅使なれば、上様も同じ事。

修理　エヽ、これは笑止千萬な。

ト此うち、濱荻、いろ／＼思ひ入れあつて

濱荻　申し、靱負之介さま、お勅使様の仰せ、背くは違勅の科。また矢の根を差上げませぬ時は、お家の大事、それをあなたは押默つてござつては濟みませぬ。なぜ日延べをお願ひなされませぬぞいなア。

靱負　イヤ、日延べの儀は、兄者人がお願ひなされても、お取上げなきお勅使様へ、なんと私しが。

濱荻　イエ／＼、そりや人に依りまする。あなたがお側へござつて、とつくりとお願ひなされたら、岡目から見ても十が九つ、日延べは叶ひまするわいなア。

靱負　左様なら、今一應、お願ひ申して見ませうか。

濱荻　見ませうかどころか、隨分お聞き屆けのあるやうに。

ト靱負之介が、襟を繕ろひやる。此うち、松が枝、ムッとして

松枝　イヤ、若殿様、そりや止しになされませいなア。

靱負　ヤア、松が枝。

濱荻　大切な事を、なんで其方が。

松枝　サア、お止め申しまするはナ、アノソレ、殿様がお願ひなされても、お聞き屆けのない、アタ片意地なお勅使様へ、また若殿様がお願ひなされても、なんのお聞き

届けがござりませうぞ。それぢやに依つて。
トこなしあり
濱荻　サア、そこにちつと、曰くがあるわいなう。
松枝　サア、その曰くが、わたしや、ツッともう。
靱負　コリヤ、松が枝、大事の場所ぢや、ちいとの間辛抱せい。
濱荻　お家の爲ぢや。マア／＼、默つて居や。
松枝　それでもどうぞ。
主計　松が枝、扣へい。
松枝　エヽ。
主計　見苦しい、何事。
靱負　ソレ、見やつたかの。兄者人の御意ぢや。扣へて居やうぞ。
松枝　エヽ。
トこなしあつて
ハイ／＼、畏りましてござります。
トぴんしやんして下に居ろ。
濱荻　サア、ちやつとお願ひなされませいなア。
ト靱負之介を突きやる。靱負之介、こなしあつて、彌生姫が側へ行き

靱負　申し、お勅使樣。
彌生　エヽ。
トちつと顏隱す。靱負之介にじり寄り
靱負　これまでは段々と、お心に叶はぬ事ばかり。何にも申しませぬ、お免しなされて下さりませ。
ト辭儀をする。此うち、彌生姫、涙を拭いた紙にてそろそろ鶴を折りかけて居る。
私しも、どうぞ早う、あなた樣と祝言を、飛び立つやうに、ほんに、ヤレ／＼、大抵待ち兼ねて居る事ではござりませぬが、お輿入れの延引は、さら／＼兄者人の指圖ではござりませぬが、何ぢややら、館にモヤ／＼した事がござりまして、ツイ隙取りましてござりまする。例へ祝言は遲うなつても、互ひの心に、サア、替る事がなければ、こりやあなたに、よう御合點の筈。この上はどうぞお執成しを持ちまして、矢の根を差上げまする日延べの儀を、コレ申し。
ト彌生姫、構はず、鶴を折つて居る。靱負之介、思ひ入れあり
その代りには、また私しが、ナ、これはしたり、申し、お勅使樣。

ト二重舞臺、下より、いろ／＼あり
そりや、どうでござりまする。なんでお詞を下し置かれ
ませぬぞいなア。
トどのやうに云うても、彌生姫、相手にならず、矢張
り鶴を折つて居る。此うち、濱荻、フッと思ひ附いて、
床にある、梅の早咲きを取つて來て、彌生姫が前へ持
つて出て、こなし。
濱荻　お勅使樣、憚りながら、この花は、靱負之介さまと、
あなた樣の仲を祝ひまして、御祝言の早咲き、眞先かけ
て紅梅の、赤いは卽ち色直しと、この花を御覽なされて
少しはお心を、ナア靱負さま。
靱負　さうでござりますとも。兎角祝言を急ぎます程に、
どうぞ日延べの儀を。
ト彌生姫、外らして
彌生　猫富、薄茶。
主計　アレ、お茶と仰せらるゝ。心の附かぬ、ソレ松が枝、
早く／＼。
松枝　エ、、
主計　何をウヂ／＼、早くお茶を持たぬか。
松枝　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。

トびんしやんして奥へ入る。此うち、始終、先次郎も
氣の毒がり
先次　コレ／＼、妹、其方も、もう好い加減に得心してや
つて。
彌生　自らは勅使でござります。
先次　サア、そのお勅使ぢやに依つて、トツトモウ。
ト頭を搔く、此うち松が枝、袱紗に茶碗を載せ、彌生
姫が側へ、持つて出て、靱負に、こなしあつて、彌生
姫、これを見てムッとする。松が枝、下に置き、彌生
姫が腹立ちするを睨める、
伏屋　松が枝どの、下からつしやれ。
ト松が枝も、始終腹立てゝ居る。
松枝　イ、エ、なんぼうお勅使樣でも、大事ござりませ
ぬ。
ト靱負之介と、彌生姫が間を、隔てゝ、トンと下にゐ
る。
主計　松が枝、これへ。
ト松が枝、ピンシヤンとして、主計正が側へ行くと、
二重舞臺より、松が枝を引きつける。彌生姫、思ひ入
れ。靱負之介、氣の毒がり

靱負　イヤ、申し、兄者人、その松が枝を。
濱荻　コレ、あなたはなんにもお構ひなされまするな。
　ト彌生姫方へこなしあつて
松枝　申し、殿樣、私しを何となされます。
主計　何とするとは、憎くい慮外者、武士の家に育つたやうにもない、大切なお勅使へ、お茶の給仕の作法も知らぬ不行儀者、不調法千萬な女め。うぬは某が、カウカウカウ。
　ト扇子にて、わざと仰山さうに叩く。彌生姫、氣の毒なこなし。伏屋、橋富、袖を引くと、彌生姫、氣を取り直し
彌生　ナニ、伏屋、橋富。
伏屋　ハツ。
彌生　御當家は、御政道が正しいわいの。
伏屋　左樣でござります。いづれのお館にも
橋富　御器量の好い女中は、お手討がようござりますわいな。
主計　エヽ、憎くい女め、目通りには叶はぬ。キリキリ立つて失せう。
　ト突き放す。松が枝、立ち上がるを、靱負之介支へて彌生姫を見て、ちやつと
靱負　無禮者めが
　ト突き飛ばす。
濱荻　申し、お勅使樣。
　ト彌生姫、會釋して
彌生　お茶たべます。
　ト茶碗を取り上げ、一口飲みて、下に置く。松が枝、悄々奥へ入る。靱負之介
靱負　憚りながら、そのお流れを、私しに。
　ト茶碗を取つて來て飲む。彌生姫、恥かしきこなしにて、梅の花を取り上げ
彌生　ても、可愛らしい花ぢやなア。
　ト詠める。皆々、彌生姫を見て、安堵の思ひ。
修理　お勅使樣、この上は日延べの願ひを。
　ト彌生姫、鶴と梅とを持ち立ち上がる。合ひ方になる。ソロソロ、二重舞臺より下りて
彌生　コレ。
　ト二品を見せる。靱負之介、濱荻、取りて
靱負　こりや、お細工の折鶴。
濱荻　梅の花。

彌生　夢にだに見ゆとも見べし朝な〳〵、我が面影に恥づる身なれば。
靱負　この二品は。
彌生　日延べの返事。
靱濱　エ。
彌生　この身の仇の、花と鳥。
濱荻　花と鳥。讀みを聲に直せば。
靱負　エヽ、さては、云ひ替したる花鳥が事も。
彌生　サ、あなたのお心は。
靱負　ムウ。
ト當惑。濱荻、キツと心附き、鶴を取りて
濱荻　その仇花は、濱荻が。
ト摺り寄るを
彌生　イヤ、落花狼藉、あなたよりは肝心の、花鳥を靱負之介さまが。
靱負　さうぢや。花鳥を思ひ切つたと申す誓ひは。
ト二品を取り、鶴を引裂き、花を散らす
斯くの通り。
彌生　そんなら、自らと、二世かけて。
靱負　替らぬ固め。

ト金打する。
彌生　エヽ。
トこなしあつて
日延べの願ひ、聞き屆けた。
皆々　有り難う存じ奉ります。
監物　ハテ、むづかしいお勅使樣。
主計　イザ、奥殿にて御饗應。
皆々　先づお入り、あられませう。
ト彌生姫、こなしあつて、振り袖を額に當て
彌生　オ、恥かし。
ト唄になる。伏屋、橋宿、連れ、奥へ入る。修理太夫、先次郎、主計正、靱負之介、濱荻、皆々、奥へ入ると、後に、監物一人殘り
監物　寄つて集つて、姫をふすぐり、たうとう三日の日延べを。イヤ、彼の矢の根の詮議と思慮を廻らす主計正。
ムウ。
トこなしあると、雷八、一間の障子、ソツと開けかけ
雷八　監物。
監物　コレ、主計正は。

雷八　コリヤ、シイ。
ト合ひ方になり、雷八、ソロ〳〵、前へ出る。
監物　先達て、こなたよりの知らせ、それに矢ッ張り。
雷八　されば、合點のゆかぬ。凡そこの雷八が放す矢は、百筋射て百筋當る。昨夜の手應へ、慥かに彼奴は。
監物　ヤ。
雷八　音聲と云ひ、立振舞ひ、常に變らぬ主計正。
監物　兄弟ともに生きて居つては、云ひ合せた通り、こなたを當家の跡目に立てる事も。
雷八　ハテ、小さい監物。北畠の家は勢州一國。身共が心は、この度の墓目の役を幸ひに、大内へ取り入り、弓勢を振ひ、名ある公家を語らひ、有やうは四海を一呑み。
監物　オヽ、頼もしい、雷八どの。その時身共は管領職に。
雷八　併し、大望は、些細な事より組み上げると云へば、主計正が實否を糺し、靱負之介を自滅させ、當家を押領して、云ひ合せし彼の矢の根は、其方が
監物　先達て、人知れず身共が奪ひ取つて、肌身離さず、コレ爰に。
ト袋入りの、矢の根を見せる。

雷八　よし〳〵、そりや矢張り其方が大切に。
監物　如何にも。
トまた懐中する。
雷八　この上は、主計正が實否を糺し、弟めも。
監物　その儀は氣遣ひあるな、屈竟の思案がある。
雷八　思案があるとは。
監物　監物が家來に申しつけた物、これへ持て。
侍ひ　ハア、。
ト橋がゝりより、鴛鴦を籠に入れ、持つて出て、渡して入る。雷八は見〳
雷八　その鳥は。
監物　こりや、七夕に生れし鴛鴦は、これこの如く、毛色も八つに別れ、執着深く、この鳥の血を取つて、酒に浸し、呑ますれば、忽ち心亂れて戀慕の氣ざし。
雷八　そりや、白狐に記しある慥かな祕事。世に稀れな七夕生れの鴛鴦、よく手に入つた。その手段は雷八が、とくと。
監物　然らば、こなたが。
雷八　密かに計らはん。監物。
監物　雷八どの。

靫負　これはしたり、短氣な。マア待ちやいの。

松枝　イエ〳〵、わたしや死にまする。お放しなされませいなア。

ト此うち、奥より

ト足音する。これにて雷八、目で敎へ、監物連れ、一間へ入ると、奥より、松が枝、自害しようとするを、靫負之介留めながら出て

靫負　コレ、危ない〳〵。マア〳〵、放しやいの。

ト無理に、脇差を取つて

松が枝、滅相な、こりや、何するのぢやぞいの。

松枝　何するとは、殿樣、お胴慾でござりますわいなア。

靫負　コリヤ、又くねりかけるのかやい。

松枝　イヽエイナア、あなたと云ひ號けの彌生さまが、ほんに何ぢややら、勅諚こがしに、悋氣やら、いぢるのやら、アタ憎てらしい事ばつかり、人目も憚らず。世の譬へにさへ、おほこな女中さんを、お姫樣のやうなと云ふのに、どこにあれがお姫樣。ありや廓の傾城にも、イヤ、ほんに花鳥さんの事も云はねばなりませぬわいなア。

トまた靫負之介を捉へる。

靫負　コレ、氣遣ひしやんな。花鳥が事は、最前お勅使樣の前で、思ひ切つたと云ふ誓ひを立てたわいの。

松枝　そんなら、花鳥の事は、思ひお切りなされて、あの姫づらの事は、どうなされますえ。

靫負　ハテ、ありやマア、勅諚ぢやに依つて。

松枝　わたしやその勅諚が聞きとむないわいなア。

ト耳を押へる。

靫負　コリヤ〳〵、また癇癪を起すか。なんの阿房らしい。よう合點して見や。太夫が事は思ひ切り、あの姫は、勅諚でも、いつ祝言しようやら知れぬぢやないか。

松枝　エヽ。

靫負　サア、その代りには、其方ばかりを、夜も晝も、靫負之介が側に引き附けて置いて、樂しむが、どうぢやどうぢや。

松枝　そりや、本心でござりますかえ。

靫負　本か、嘘かは、ちよつと一間へ。

ト囁く。

松枝　エヽ、アノ、それでも私しは。

靫負　何を斟酌。早う來くされやい。

ト無理に手を取りて、一間へ連れて行かうとする所へ雷八、ツカ〳〵と出て、靫負之介を引き退ける。

松枝　ヤア兄さん。
靱負　ほんに、雷八。
雷八　不所存な妹め。
ト抜打ちに、松が枝を、リウ／＼と、刀背打ちに遭はせる。
靱負　コレ、可哀さうに、なんで松が枝を。
雷八　こなた様にも、何と心得てござりますな。
松枝　ヤア。
雷八　今日お勅使は、拙者が御主人、云ひ號けの姫君。樣子を承れば、矢の根の儀につき二三日の日延べ。その御猶豫も何の爲、姫君のお心はこなたへ、イヤサ、妹めが横戀慕、もしこの仕儀が、お勅使様の御目にとまらば、折角願うた日延べも破れ、當家の大事。その辨まへもなき妹め。心の外と云へど目前の魔王、生け置いては日延べの妨げ。いつそ兄が手にかけて。
ト刀振り上げる。此うち奥より、彌生姫、出かけて居る。
彌生　コレ、待つてたも、雷八。
雷八　ヤア、姫君様、妹めは御祝言の妨げ。
トまた振り上げるを、彌生姫

彌生　マア／＼、待つてたも。松が枝を手にかけやると、自らは生きては居ぬぞや。
雷八　エヽ、なんと御意せらるゝ。
ト納まる。彌生姫、靱負之介の方へ、こなしあつて
彌生　サア、あられもない、自らが最前の所爲、人を恨み世を喞つも、何卒靱負之介さまと、一時も早う祝言を、サア、これとても戀のみならず、女御様のお指圖は勅諚同然。自らが輿入れ延引すれば、違勅の科、その咎めも思ひ計つて、勅使を乞ひ受けて、このお館へ參りましたも、矢ッ張り靱負之介さまのお爲と、また自らが願ひ。コレ松が枝とやら、さぞはしたなう思やつたであらうが堪忍してたも。姫御前は相互ひ、戀は切ないものと推量して、この後は身が事も。
靱負　そんなら、松が枝に。
彌生　なんの恨みが、ござりませう。
雷八　すりや、お姫様には。
彌生　松が枝の命を助けて、自らが手廻りの腰元。
松枝　エヽ。
彌生　ハテ、何かの指圖を頼んで、二人ナ、一緒に、靱負之介さまを、ナ、いとしほがるわいなう。

雷八　エヽ、妹め、聞き居つたか。

松枝　左様の御事とは存じませず、ほんに今の今まで、お恨み申しましたは、勿體ない、お免しなされて下さりませ。

ト手を合せ、拜むと、靱負之介、溜息吐き

靱負　アヽ、嬉しや、姫が心底聞いて、日本晴れがしたやうな。

雷八　姫君の心底承つて、拙者も安堵。この上は假の御祝言、靱負之介さまとお杯、ソレ濱荻さま、用意のお銚子、これへ。

ト千箱の玉の謠になり、奥より、濱荻、長柄の銚子を持ち、伏屋、橋富、島臺、三方を、皆々、目八分に持つて出る。前へ直す。

濱荻　雷八どのゝ、お指圖に任せ、お姫樣と、靱負之介さまとの内御祝言。

伏橋　イザ、お召上がられませう。

彌生　濱荻さま、雷八、嬉しうござる。

ト土器取り上げる。

雷八　憚りながら、武骨の拙者がお酌も一興。

ト長柄持つて酌する。此うち始終、謠。彌生姫。杯下に置く。伏屋、靱負之介が前へ持つて行く。靱負之介、戴き、杯取り上げる。雷八、こなしあつて酒注ぎ、杯納まる。

雷八　このお杯、濱荻さま、お納めあられませう。

ト濱荻が側へ、杯持つて行く。濱荻、會釋して取り上げる。雷八酌する。

濱荻　このお流れは、松が枝、其方へ。

松枝　アイ〳〵。

ト嬉しさうに側へ行つて杯を取る。雷八こなしあつて

雷八　その上に喰うたら、猶ほ苦しうなり居らう。

ト松が枝、飲みしまふ。

伏屋　サア〳〵、濱荻さま、お杯を早くお納めあられませう。

ト濱荻、杯取り上げる。雷八、なみ〳〵注ぐ。

濱荻　ア、コレ。

雷八　ハテ、かゝるめでたい折柄なれば、丁度〳〵。

ト濱荻こなしあつて飲むうち

これはお見事。サ、ま一獻〳〵。

濱荻　イヤ、それでは。

雷八　何を斟酌。下地はなる口。めでたうあなた様が。
ト勧める。濱荻、是非なう受ける。
相生の松風、颯々の聲ぞ樂しむ。
ト謡を謡ふ。
橋伏　御祝言も納まり、萬々おめでたう存じまする。
ト橋がゝりより、ヒタ〳〵と、鋲乗り物、供廻り出る。
お勅使のお迎ひ。
伏橋　申し、お姫様。
ト彌生姫、立ち上がり
彌生　兼ねての願ひ叶ひし上は、日延べの事は、自らが、請合ひました。
靱負　兎角天機よろしう。
濱荻　追ッつけめでたうお輿入れ。
ト乗り物へ彌生姫を乗せる。
松枝　介添へは私しが役目。
雷八　その時、一緒に連理の松が枝。エヽ、仕合せ者め。
ト突きやる。
伏橋　三々くどい事ながら
靱負　日延べの事を

彌生　違はぬ誓ひ、尉と姥
濱荻　やがて屛風の蓬萊山。
皆々　床杯も近々に
ト松が枝、靱負之介が方へ、行かうとするを、雷八、濱荻、隔てゝ
濱荻　めでたう吉左右。
雷八　勅使のお立ち。
ト唄になる。乗り物、供廻り、伏屋、橋富、松が枝、附いて皆々花道へ入る。ト此うち、靱負之介、濱荻、後見送り、ウットリとなり、立ち身にて互ひにヂッと顔見合せ居る。雷八も見送りながら
雷八　ハテサテ、喜ばしや。先づお姫様のお望みも叶ひ、御當家の日延べの儀も、さぞ御兩所様にも御安堵でござりませう。
ト兩人を見る。靱負之介、濱荻、其まゝヂッと下に居て、酒の廻つた思ひ入れあつて
靱負　日暮るれば、淋しきものと仇浪の
濱荻　眞菰隠れの獨り寢ぞ憂き。
靱負　神代の始めを云へば嫂も
濱荻　小舅も同じ女夫。

靱負　それを末世に、堅苦しい
濱荻　愚痴な事では
二人　あるわいなア。
　ト好みの合ひ方、琴入りの唄になる。ト雷八始終二人
に目を附け、これを聞いて
雷八　ムウ、そんなら彼の。
　トちやつと口を押へ、思ひ入れあつて、ツイと奥へ入
る。
靱負　濱荻さま、ちつとあなたにお願ひが。
濱荻　私しもお前に。
靱負　なんぞ御用か。
濱荻　アイ。
靱負　その御用は。
　ト立廻り、衝立を立て、濱荻、靱負之介と間を隔てゝ
銚子杯を取り、酒を飲み、衝立越しに差出す。靱負之
介、取つて
兄嫁御のお志し、キツと嬉しう戴きまする。
　ト一口飲み、後を差出す。ト濱荻、杯に手をかけ
濱荻　アノ、お僞はり。
靱負　眞實誓文。

　ト濱荻、杯を取る。
濱荻　私しも嬉しう。
　ト飲む。
靱負之介さま、私しはあなたへ。
靱負　御用の品は。
濱荻　口で云はれね私しが心。
靱負　筆で云はせて。
　ト右の衝立へ、兩方より、靱負之介は「手を取つて、」
と書き、濱荻「嫂水に溺るゝとも、」と書き
兩人　私が心は。
　ト引き廻す。
靱負　嫂水に溺るゝとも。
濱荻　手を取つて
靱負　手を取つて
　ト衝立を除け、靱負之介、濱荻が手をヂツと取る。
濱荻　助けて下さんすお心かえ。
靱負　盡未來まで。
濱荻　そりや、アノ、眞實。
靱負　死なば一緒。
濱荻　未來永々。

靱負　水の底まで
濱荻　番ひ離れず
靱負　連理の塒。
濱荻　澤邊の床も
靱負　二人一緒に
兩人　オヽ、嬉し。
　トひつたりと抱きつく。襖の内より
監物　何れもとくと、御覧なされましたか。
　トこれにて兩人、恟りする。襖、左右へ開くと、内に
　修理太夫、先次郎、主計正、監物、並び居て
濱荻　ヤア、殿様。
靱負　兄者人、いづれも様。
監物　不義の兩人、そこ動かつしやるな。
濱荻　エヽ。
靱負　ハア〳〵。
修理　奥方と、靱負之介どのの體裁。ハテ、氣の毒千萬
　な。
先次　戀は心の外とは申す事ながら、餘り外過ぎた御兩
　人。
主計　こな、人面獸心、四つ足め。

監物　イヤモ、四つ足に劣つた段々。嫂と小舅、不義する
　とは前代未聞。して、殿の御政道は
主計　云ふまでもない、目通りで。
監物　こりや、さうありさうなものでござります。
主計　兩人ともに、それへ直れ。
修理　こりや、主計どの、奥方を。
先次　現在の御舎弟を。
主計　重ねて置いて四つに致す。サヽ、兩人、早く直れ。
　ト靱負之介、こなしあつて
靱負　それ、濡れぬ先こそ露をもいとへ、斯く現はれし上
　からは。
　ト覺悟して、前へ直る。
濱荻　イエ〳〵、申し靱負之介さま、あなたに科はござり
　ませぬ。戀を仕掛けた濱荻、いま殿様のお手にかゝつて
　も、この身の誤まり、覺悟は極めて居りまするが。
　トこなしあつて
　どう云ふ事やら、矢ツ張りあなたに、輪廻が殘りますわ
　いなア。
靱負　そりや、私しも同じ事。心で心を取り直しても、只
　今のお詞、骨身に堪えて、どうも。

ト思ひ入れあつて
サア、面目なうござります。
ト此うち、監物、ニコ〳〵笑ひ、喜んで居る。
主計　兩人の不義は家國の恥辱。いま手に懸けて、獅子心中の蟲を斷ち禍ひを除く。兩人ともに覺悟せい。
靱負　イヤ、お手討ちに遭はぬ先、せめてはこれにて。
濱荻　私しも一緒に。
靱負　ソレ。
ト刀を抛つてやる。濱荻、取り上げて
濱荻　鴛鴦の思ひ羽
靱負　比翼の劍。
ト差し違へ死なうとする。所へ奥より
雷八　待つた〳〵、御兩人。
ト走り出る
必らず早まるまい。
ト留めるな
兩人　イヤ〳〵、離して。
ト振り切るな
雷八　ハテサテ、生は難く死は易し。無益の犬死。コレ、マア、マア〳〵、待ちなされい。

ト兩方、しつかり留めると
主計　雷八、不義の兩人、自滅はまだしも。何ゆゑ其方が。
雷八　イヤ、お留め申すが家國のお爲。
主計　何がなんと。
雷八　奧方は格別、相手は誰れ人、現在骨肉同生の御舍弟ならずや。天に不時の風雨あり、人に不時の煩ひあり。斯く申す拙者も、御緣は御座あれども、只今にては他家の奉公。未だお世繼ぎの御男子とてもなき主計正さま。それに今靱負之介さまお果てなされて、もし御身に過ちある時には、北畠の血筋は斷ち切れ、何者を跡目に、お立てなさるゝお心でござるな。
主計　イヤ、氣遣ひ致すな、雷八。この主計正が身は金鐵。未だ跡目の評議に及ばぬ〳〵。
雷八　でも、人身は病の器。
主計　その病も、養生と云ふ術あれば、五臟は銘城、堅固の長生。ム、、ハ、、、、。例へ又、跡目なきとて、科ある兩人、助けて置かうか。
雷八　イヤ、御兩人に科は、罌粟ほどもござりませぬ。
主計　科はないとは。

靱負　コレ〳〵、不義の科ある某を庇ひ、必らずともに兄者人に。
雷八　イヤ、ようござります。
靱負　それでも死ぬるは覺悟の前。
雷八　ハテ、大事ない。
濱荻　イエ〳〵、云ひ譯なき不義の誤まり。命を救ふとの心遣ひは嬉しけれど、必らず情を懸けて、その身の仇と。
雷八　サ、、、、何にも仰しやるな。
修理　出かした、雷八。何卒其方が計らひを以て。
先次　お二人をお助け申すやうに。
雷八　委細承知。
ト此うち、監物、合點のゆかぬこなしにて、雷八が側へ出て
監物　コレサ、雷八、何を承知めされた。不義の樣子は、目前御覽なされし殿の憤り。それを貴殿がさゝへこさへ。ソレ、先程の、イヤサ、最後の覺悟を極めた兩人、ナ、さすれば貴殿が、何も構はつしやる事はござらぬてや。
雷八　監物どの、お氣遣ひなされな、諸事は追ッつけ。
トこなしあつて
マア、扣へなされてござれ。
監物　何もかも御承知なれば、拙者扣へて罷りある。
トこなしあつて
主計　當家に緣ある和田雷八、いま兩人を庇ふは理りなれど、見逃がしならぬ不義の政道。
雷八　不義の御政道よりは、大外れた家國を望む、佞人を引ッ捉へて、御兩所をお助け申します。
主計　ナニ、家國を望む佞人とは。
皆々　雷八、そりや何所に。
雷八　即ち目前、林監物。
監物　ヤ、なんと。
雷八　遁がれはあるまい、繩かゝれ。
監物　ア、、コレ〳〵、雷八どの、そりや何を云ふのぢや。
雷八　イヤ、玆な人外め。うぬが企みで、七夕に生ぜし鴛鴦は、その毛色八種に分る、即ちこの鴛鴦餘鳥と違ひ、八つの毛色あるゆゑ執着深く、この鳥の心房の血汐を、酒に浸して飲ますれば、その執着宿つて、男女共に、心亂れて戀慕の氣ざし。それを用ひて兩人に、不義を致さ

せ罪に取つて、眞向落さんと云ふ邪智佞奸。

ト詰め寄ろ。監物、追ひ／＼こなしあつて

監物　エヽ、無念や。さうとは知らず頼みに思ひ、何もかも氣取られし上は、もう、うぬ。

ト雷八へ切つてかゝるを、ちよつと立廻つて、懐中の矢の根を取り出し

雷八　これこそ當家にお預かりの、兵破の矢の根。

ト見せる。

監物　それを。

ト寄るを、よろしく

主計　すりや、紛失の矢の根は。

雷八　疾より此奴が。

ト主計正に渡すを、取つて改めるうちに

監物　もう、絶體絶命。

トまた切つてかゝるを、刀を捥ぎ取り、引き廻し

雷八　寶の盗賊、捕つた。

ト引敷いて、繩かけ、引据ゑる。

主計　ホウ、天晴れ、雷八、心底見えた。

雷八　すりや、夜前矢數の。

主計　身共が頼みの箱傳授。

雷八　打ち割つた拙者が魂ひ。越野勘左衞門に劣るとは、これ末代の名折れ。エヽ、御當家に縁付き者なれば、例へ矢數は射損じて、我が身に恥辱を蒙むるとも、なか／＼それはいとはねど、情なや北畠の落胤血筋やと、人に知られしこの雷八、晴れの矢數を射損じては、亡父、とサア申すも畏れ、大殿様の、汚名の聞え、お家の瑕瑾、また射通すものならば、主計正さまのお頼みも背く。兎やせん角やと心は千々に、林監物、此奴が常々勸める惡事の段々、これ幸ひと工風を廻らし、彼の紛失いたせし、ソレ、その矢の根さへ、再びお手に入るものならば、主計正さまには御安堵と、胸を極めて詮議の蔓、弓も引き方味方と見せて、底意を探る心の的の、八千八筋薙目のお役目、勤める譽れと當家の納まり、それと云はれず暫時が間も、お心痛めし拙者が云ひ譯、斯くの通りでござります。

修理　ハテ、爭はれぬ、和田雷八。それが誠の弓取り、監物が手段とあれば。

先次　御兩人の不義の申し譯相立つ上は、親人様。

修理　如何にも。

ト靱負之介、濱荻を見る。兩人ヂツと俯向き居る。修

理太夫、先次郎、立寄り

修理　コレサ、靫負之介。

先次　濱荻さま。

ト兩人呼ばる。兩人、キツと顏を上げ

靫負　修理太夫さま、兄者人。

濱荻　先次郎さま、雷八どの。

靫負　エヽ、面目ない今の身の上。

濱荻　お恥かしい不義の有樣。

靫負　さうぢや。

ト兩人、また死なうとするを、修理太夫、先次郎、兩方留めて

修理　コレ、云ひ譯は、雷八が。

靫負　エヽ。

先次　心を亂して戀慕の氣ざしは、監物が惡事ゆゑ。

修理　醉ひも醒むれば

ト兩人を見て、こなしあつて

心も正しく。

靫濱　そんなら今のは。

主計　兩人勘當。

靫負　エヽ、御勘當とは、兄者人。

濱荻　殿樣。

主計　コリヤ、弟。尤も、今の所爲は監物が仕業なれど、其方が常の行跡、傾城狂ひに身持ち放埒、その惰弱にては、北畠の名跡覺束ない。

靫負　ハア、。

主計　また濱荻とても、身は穢れねど不義の汚名、武家の掟は館に叶はぬ。其方も離緣。

靫濱　そんなら二人が身の上は。

修先　アイヤ／＼、それでは。

主計　ハテ、お詫び御容赦。

雷八　イヤ、さうあつては、折角拙者が。

主計　苦しうない、雷八。惡しきを捨てゝ善きを得るは、聖人の敎へ。

雷八　でも現在の。

主計　家を繼ぐべき弟は、其方。

雷八　エヽ、なんと。

主計　サ、親人殿の外戚腹、北畠の血筋に相違なき其方なれば、跡目に立てて恥かしからぬ器量骨柄。主計正が讓る家國、なんと相續いたしてくれまいか。

雷八　ムウ。

ト思ひ入れあつて、ズッと立ち寄り、主計正が前へ、ヂッと直り、腹寛げて、刀を取り上げ

おさらば。

ト腹切らうとする。

主計　コリヤ〳〵、雷八、何ゆゑの切腹。

雷八　伯夷叔齊は舊惡を思はず、また兄によろしく弟によろしく、國民に敎ゆと申せば、例へ御心へ叶はずとも、靱負之介さまに御諫言あつて、家國をお讓りあるがこれ順道。それに、如何に血筋なればとて、その人に非ざる拙者へお讓りあらば、一家中の唱へ、世の人口、二つにはこの雷八、これまでの心の儘に、好事門を出でず、惡事千里の習ひにて、あれ見よ雷八は、外戚腹ゆゑ野心を差挾み、奸佞を以て、北畠の家を押領いたせしと、後ろ指は必定。それゆゑの潔白、切腹いたして相果つる。

ト また刀を取り直す。

主計　イヤ待て。唐土の堯舜に習ふ主計正、其方を跡目に立つるは、家國よりは四海の御爲。

雷八　ナニ、四海のお爲とはナ。

主計　ハテ、この度の勅諚は、當今の御惱、それを鎭める蟇目の役目は、其方ならずや。水破兵破の矢の根も揃へば、直ちに參內。併し、蟇目の傳書なくては勤まらぬ役儀。その傳書は、この北畠に傳はりあれど、他門に讓らぬ先祖の掟。それゆゑ、幸ひ忠孝全き血筋の其方なれば、跡目に立てて傳書を讓らば、某も大內への忠義、先祖の云ひ譯。なんと雷八、これでも不承知なるや。

雷八　すりや、拙者が蟇目のお役目勤めるゆゑ。

主計　家國諸とも、傳書を讓る。

雷八　ぢやと申して。

主計　如何程射藝に達しても、傳書なくては、蟇目の役目は勤まるまい。

靱負　コレ〳〵、雷八どの、これまでの放埒、この身の越度で、勘當受けし某なれば、所詮家國相續は思ひも依らず。一天四海の御爲、兄者人の仰せに隨ひ、何卒貴殿が。

修理　それ大功は細瑾を顧みず、辭退をすれば、蟇目のお役目勤まらず。

先次　さすれば、君の御惱は頻り。

主計　承知いたすか。

雷八　サ、それは。

靱負　跡目にどうぞ。

修理　但し、蟇目も勤めず

先次　不忠を立つるか。

雷八　サア。

皆々　サア／＼。

　ト段々勸める。雷八こなしあつて

雷八　チエ、、是非に及ばぬ。

主計　雷八、承知か。

雷八　ハツ。

主計　先づ滿足。

　ト雷八威儀を正し、靱負之介が側へツカ／＼と行き、兩手を取つて

雷八　靱負之介さま、仰せの通り、蟇目の役目蒙むりし拙者なれば、お勸めに隨ひ、據ろなく當家の相續、跡目と申すに非ず、當家の存亡。それも暫らく、蟇目首尾よく相納まれば、萬事は胸に、ナ。濱荻さまにも暫しが間、掟を立つる爲に、ナ。曇りなき身は晴れる時節、必らずともにお二人樣。

靱負　誠あるこなた、この上ながら。

濱荻　なにかとよろしう。

雷八　サ、詞多きは品少なし、拙者が胸中御推量。

　トこなしあつて

主計　承知の上は、桃の井どの、雷八は申し請け、苗字を改め北畠。即ちコレ。

　ト懷中より、一卷を取り出し

　跡目の印、蟇目の傳書。

　ト差出す。雷八居直つて

雷八　大内への不忠とあるゆゑ、仰せに隨ひ、心ならねど拙者、お跡目頂戴仕ります。

　ト取つて押戴く。監物、繩かゝりながら、をづ／＼前へ出て

監物　コレサ、雷八どの、御出世めされたその祝ひに、何卒拙者が一命を。

雷八　助けくれる。

　ト拔打ちに、首ポンと切る。

皆々　ヤア、それは。

雷八　家國望む佞人め、跡目に立つた政道始め。

修先　天晴れ、手の内。

主計　次手に不義の兩人も。

雷八　イヤ、御勘當とあるからは、お命助けて。

　ト靱負之介が大小を取り、濱荻と一緒に

館を追放。
ト花道の方へ、兩人を突きやる。
靱負　雷八どの。
雷八　隨分ともに。
ト懐中より、金一包み出し、抛つてやる。濱荻取り上
げ
濱荻　これは。
雷八　跡目の施行。
靱荻　エ、。
雷八　コレ、落ちつく所を、イヤ、早くござれ。
靱負　ハツ。
ト濱荻を連れて、向うへツィと走り入る。ト修理太夫
こなしあつて
修理　主計正どの、兵破の矢の根御手に入るからは、此方
の水破と諸とも。
主計　大内へ差上げ、蘇目の定日。
修理　如何にも。ソレ悴、其方に申しつけし水破の矢の根
を。
先次　即ちこれに。
ト口明けの箱を出し、紐を解きにかゝる所へ、橋がゝ
りより、瀨平、ツカ〳〵と出て、矢の根の箱を、引ッ
つたくる。
修理　ヤア、二見瀨平。
瀨平　イヤ、滅多に開かす事なりませぬ。
トどつこいと、眞中へ隔てる。橋がゝりより、伴藏走
り出て
伴藏　御主人、この瀨平めは、矢の根の盜賊でございま
す。
皆々　なんと、
伴藏　證據は、コレ。
ト瀨平が持つてゐる箱を、取らうとする。
瀨平　イヤ、猪口才ひろぐな。
トまた兩人立廻り。箱を揉み合ひ、取落す。先次郎、
ちやつと取つて
先次　合點のゆかぬ大切なこの矢の根。
ト箱を開き、口明けに摺り換へた矢の根を、キッと見
て
こりや、コレ、水破の矢の根ではなく、越野勘左衛門が
銘打つたるこの矢の根。

皆々　ヤア。
　ト悃り。雷八もギョッとする。
瀬平　イヤ、それは。
伴藏　此奴が。
　ト支へるを、瀬平、伴藏を取つて投げ、又矢の根を取
　らうとするを、雷八、瀬平を引き廻し
雷八　大切な場所ぢや、扣へい。
　ト下に居る。雷八が顔をキッと見上げる。
主計　コリヤ〳〵、瀬平、必らず慮外いたすな。その雷八
　は只今より當家の跡目。
瀬平　エ、。
　ト悃りして、主計正をキッと見て
　殿樣のお身の上。…夜前の。……それに。
　トいろ〳〵思ひ入れ、こなしあつて
　ヤア〳〵、こりやどうぢや。
　ト大きに呆れる。
雷八　水破兵破と二つの矢の根揃はねば、蟇目の役目相勤
　まらず、それゆゑ心を盡して、紛失の兵破の矢の根を詮
　議仕出せしを、又ぞろや水破の矢の根紛失しては、この
　雷八が。

伴藏　イヤ、その盜賊は、この瀬平め。
雷八　伴藏、なんと。
伴藏　イヤサ、夜前大佛にて、矢數も相濟み、後の片附け
　見廻るうちに、その瀬平めがこの箱より、大切な矢の根
　を取出し、足場を傳うて、どれやら繪馬の矢の根と摺り
　換へし體を、とくと見屆け引ッ捉へ言上と、それで夜前
　より附け纒うてこの館へ。
雷八　ナニ、なんと云ふ。すりや瀬平めが、水破の矢の根
　を盜み、繪馬の矢の根と摺り換へたとな。
伴藏　イヤモ、慥かに見屆けました。
雷八　アノ、繪馬の矢の根と。
　ト右の矢の根を取り上げて見て
　越野勘左衛門、慥かなこの銘。ムウ、さては身共が、
　ト主計正を見て
　ヤア〳〵。
　ト悃り、思ひ入れあつて、下に居る。
伴藏　即ち、盜賊めに繩打つて。
　ト瀬平を引立てる。瀬平、伴藏をポンと當てる。伴藏
　倒れる。
瀬平　この上は隱すに及ばぬ。水破の矢の根は、如何にも

夜前大佛にて。

主計　何ゆゑ、瀬平、其方が。

瀬平　イヤ、當家の矢の根、紛失ゆゑ。

主計　ヤ。

瀬平　サ、殿様、あなたが雷八どのへ、矢數の儀をお賴みなさるゝ様子を立ち聞きして、拙者もともに、何卒射損じさせんと願へるに違ひ、段々の通り矢、八千八筋と書上げ濟めば、藤目の役目は雷八。南無三當家の一大事、こりや桃井どのの、矢の根を盗めば藤目は延びる、其うち此方の矢の根の御詮議と心附きしより、才兵衛に手を負はせ、隠し所も所縁の繪馬、勘左衛門どのの矢の根と摺り換へました所へ、この伴藏が見付けて支へる面倒さ。受けつ潜りつ引返し、大佛へ行つて見れば、勘左衛門どのゝ繪馬の矢も相見えず、これはと尋ねる間に殿の御供。遅れてはならんと松原通り、後を慕うて一散に、やう／＼追ッ付き一町こなた、乗り物目がけ弓射る曲者。面改めんと差出す提灯、切り落されて暗紛れ。

　ト雷八一つ／＼こなしある。修理太夫、先次郎、のりかけて

修先　して／＼、その曲者はどう致した。

瀬平　なんぼう黒白は見えねども、力に任せてひん抱へ。

修先　搦め捕つたか。

瀬平　イヤ、彼奴もしれ者、身を交して振り離す。いつそ一打ちと振り上ぐる、刀は外れて眞の當て。たぢろく其うち。

　ト口明けの通り、こなしあつて話す。雷八えせ笑つて居る。

修先　ヤア／＼。

瀬平　サア、その曲者は逃げ失せました。

雷八　ホイ。殘念至極、取逃がしたか。

瀬平　サ、無念ながらも。

修理　瀬平、何ぞ又外に手懸りは。

瀬平　暗がりなれば、顔見えず、證據に殘る手懸りとても。

　ト雷八をキッと見て

風體恰好は慥かに。

　ト指さしする。

雷八　どうぢや、瀬平、覺えて居るか。

瀬平　サ、何を云うても暗紛れ。證據はなけれど。

　ト雷八を見上げ、見下ろし、さま／＼、こなしあつ

て
モ、十が九つ、大方に。
ト雷八が額をキッと見る。
雷八　何者ぞ、知れてあるか。
瀬平　サア、それは。……エヽ、コレ、取逃がすと思うたら、せめて三里の灸の蓋なりとも。
主計　瀬平、證據もなく、面も見知らず、取逃がしたとは。
ト瀬平、鬢の毛を掻き挘り
瀬平　エヽ、殘念にござりまする。
ト地團駄踏んで、どつかと下に居る。
修理　雷八が働らきで、紛失の兵破の矢の根はお手に入つたれど、また此方の水破の矢の根の紛失。さすれば蟇目も矢張り延引。
ト先次郎、ウロ／＼して
先次　コレ／＼、雷八、こりやマア何とせう。矢の根お預かりは其方、持參したは、この先次郎なれば。
雷八　オヽ、矢の根はある。
先次　ヤア。
雷八　イヤ、大殿樣、若殿樣、お氣遣ひなされまするな。水破の矢の根はござりまする。
先次　あるとは、どこに。
雷八　サヽ、その在所は。
ト主計正を見て、また思ひ入れあつて
とくと存じて居れど、ツイ。……サ、取り得がたき水破の矢の根。もうこりや、イヤ、斯うでござります。たかが程なき夜前の事、この上拙者が肺肝を以て詮議いたさば、恐らく手に入らんと云ふ事もござりませぬ。マア、何ぢやあらうと、御安堵なされてござりませ。
修理　イヤ、萬事に馴れた其方なれど、不分明なる詞の端。
先次　萬一詮議が隙どれば。
雷八　ハテ、拙者が身の上、これまで心勞いたした蟇目の役目は千日の茅。なんの等閑に仕りませう。
先次　それでも慥かに手に入ると云ふ
修理　詮議の手段は。
ト内にて、ドン／＼／＼と七ツの太鼓鳴る。雷八、思ひ入れあつて
雷八　ありや七ツ、手に入る刻限は。
ト ちよつと主計正を見て、こなしあつて、指を折り

一二九十は九々六々。ムウ、それ〳〵、暮れ六ツまでにはキッと、イヤサ、詮議し出して差し上げませう。

修理　すりや、暮れ六ツまでに。

主計　雷八、暮れ六ツまでに矢の根が出ずば、其方が。

雷八　イヤ、北州の千年も限りあれば、まして纔かに、サア、暮れ六ツまでに、とくと工風し矢の根の詮議。

先次　して、又あの瀬平は。

主計　イヤ、此方の家來なれば、落着までは拙者の預かり。

先次　そんなら、雷八。

修理　必らず、矢の根を。

雷八　仕負ふせし事なれば。

主計　サ、蟇目の役を相勤め、當家の相續いたすやう。

雷八　如何にも左樣。

瀬平　纔かに、それと。

ト きつと雷八を見て、また氣を替へ

殿樣、拙者は。

主計　次に扣へい。

修理　主計正どの。

主計　イザ、奥へ。

雷八　拙者もお供、仕りませう。

ト唄になる。皆々入る。後に、主計正、一人殘り、シンミリとして合ひ方。これより、雪チラ〳〵と降り出す。主計正、こなしあつて

主計　アレ〳〵、餘寒も嚴しく、次第に過ぐる刻限は、屠所の羊か、もう申の刻。

ト思ひ入れあつて

紛失の矢の根の在所見出さん爲、誠にこれが千辛萬苦、心緩めば身の勞れ

ト少し惱む氣色にて、手を叩き。

近習の者、云ひ附け置きし藥湯を持て。

近習　ハア、。

ト奥より、銀の茶碗を持ち出て、ハッと差出す。主計正取りて、扇にて近習を奥へ入れる。藥を服み、チッと俯向く。此うち、向うより、靫負之介、濱萩、菅笠にて雪を蔽ひ、ソロ〳〵出て來る。臆病口より、瀬平、出かけ、窺つて居る。

靫負　申し、兄者人。

濱萩　殿樣。

ト主計正、こなしあつて

主計　奧、弟、某が申し附けし通り、ホ、オ、出かした。

靱負　兄者人のお指圖なれば、現在嫂と不義と見せ

濱荻　ほんに、小舅御の靱負之介さまと、猥らな體も、皆あなたのお指圖ゆゑ

主計　サア、鴛鴦の血汐を取つて、兩人に不義を拵らへ、試みに手討ちか勘當と計りし雷八、監物が企み事を知つて、血汐の銚子を入れ替へさせ、わざと手段に乘つたる體にて、事を計りしゆゑ、紛失の矢の根も首尾よく手に入つた。

ト奧より、修理太夫、先次郎、出かけて

修理　主計正どの、謀し合はせし通り、首尾よう行たれど思ひがけない

先次　此方の矢の根の紛失。

主計　コレ、氣遣ひあるな。その水破の矢の根の在所も、慥かにこの主計正が。

修理　ヤ。

先次　御存じでござりますか。

ト本釣り鐘、ゴンと鳴る。主計正、こなしあつて

主計　弟、靱負之介。

靱負　ハツ。

主計　これこそ、雷八を用ひて、再び手に入る兵破の矢の根。又この一卷は、家に傳はる誠の蟇目の傳書。

ト二種を靱負之介に渡す。靱負之介取つて

靱負　すりや、この二種を。

主計　家の相續、大切に。

靱負　ハツ。

ト此うち、始終、本釣り鐘鳴る。

先次　ありや、もう暮れ六ツ。

ト此うち、雷八、上手の障子屋體より出かけ、様子聞いて居る。

主計　最早、雷八が操りし、某が知死期。

皆々　エ、。

主計　桃の井御親子、水破の矢の根、お渡し申す。

ト兩肌脱ぎかける。木綿にて疵を卷いて居る。皆々見て

皆々　ヤア、これは。

ト瀨平、前へ出る。

平瀨　ヤア、殿樣、さては矢ツ張り夜前。

主計　オ、、大佛より歸るさ、乘り物越しに射かけし一矢

は、コレ、弓手の脇に、矢柄は抜けど、矢の根は留まる。

皆々　エヽ。

ト大きに恟り。

主計　わざと家來に云ひ含め、苦痛を堪えて館へ歸り、弟始め奥にも斯くと知らさぬは、矢の根の紛失取返す手段。卯の刻より酉の刻まで、最後を堪える斷末魔。虚空を摑む四苦八苦も、家の大事と思へばこそ。

トがつくりと弱る。

修理　ハテ、思ひがけない主計どのゝ矢疵。今まで包まれしは、大丈夫とは申しながら。

濱荻　なんと身も世もあられませうぞ。さう云ふ事なら、疾にもお知らせなされては下さりませぬ。ほんに思ひがけないと申さうか、夢見たやうなこの有樣。私しは何と致しませうぞいなア。

ト泣く。靱負之介もオロ／＼して

靱負　申し、兄者人、なぜ私しにもお隱しなされて下さりました。左樣とは存じませず、仰せに隨ひ松囃子の催ほし、なんの打ち囃子。それよりは金瘡療法を。

主計　エヽ、コリヤ弟、奥、嘆く所でない。必らず未練な繰り言。イヤ聞かすまいぞ。

靱負　ちやと申しまして、これがマア。

瀬平　左樣でござります。なんとこれが堪えて居られませう。これにつけても、返す／＼も殘念なは、夜前の曲者。

主計　射かけし矢は、桃の井どの、貴殿の預かり、水破の矢の根。

ト矢の根を引き拔き、血汐を拭ひ、先次郎に渡す。先次郎取つて

先次　誠に、こりや水破の矢の根。

瀬平　すりや、拙者が大佛にて。

主計　摺り換へし矢の根と知らず、身共に射かけしは、敵は越野と思はす手段。

修理　して又、矢の根と射かけし、誠の敵は。

主計　我が立振舞ひに始終眼を附け、その矢の根詮議は請合ひしが、慥かな證據。云はねどそれと的を外さぬ、敵は雷八。

皆々　すりや、和田の雷八が。

トきつとなる。雷八障子ピツシヤリ。瀬平こなしあつて

瀬平　さうぢや。拙者が推察違はぬ。

ト行かうとするを、

主計　イヤ、コリや、雷八には屈竟の捕り手。

瀬平　エ。

ト立ち戻る。取り詰め、苦痛の體。

修理　こりや、モウ、主計正どのには。

皆々　御臨終でござりまするか。

ト取りつく。主計正、振り切り、

主計　騒ぐな騒ぐな。

皆々　それでも。

修理　コレ。

ト制する。チョン／＼にて、道具廻る。

一面の網代塀になる。これよりドンチヤン。この間に瀬平出て、捕り手の手配り、伴藏と取り合ふ事あつて入る。始終、この前より、雪は頻りに降りてあり、右網代塀を兩方へ引き分けると、後ろ二階屋の打抜き。築山、大前栽の模様にて、諸木に雪降りし體、見附け、二階の上に、雷八、凛々しく、捕り手に取卷かれ、膝手よき、タテの見得。ドンチヤン、大雪にて、よろしく、雷八、皆々を追ひ廻し、山を下りて來る。キツと見得になる。チョン／＼にて淺黄幕切つて落とすと、外側、一面の城を、セリ上げる。東、臆病口の側に、角櫓よろしく、雪降りの體。この城の前に、菰被りの非人一人、寐て居る。城の内、アリヤ／＼の聲、ドンチヤン、かすめる。右角櫓を大石火矢の音して、櫓崩るゝ仕掛けにて、石臺の上へ、雷八、石火砲を抱へ、出る。四方窺ひ、石火砲を捨て、ヒラリと平舞臺へ飛ぶ。非人恂り、立ち上がる。雷八、ポンと當て、菰を手繰つて、チョンと着る。こちらの非人、越野勘左衛門なり。雷八向うへ行く。勘左衛門、窺ひ、附いて、雷八よろしく入る。

幕

三段目

大和大安寺の段
一里塚の段

役名——大安寺和尚。同宿、雲床坊。同、牛床坊。桔梗屋才兵衛。同女房、お振。砂屋權兵衛。米屋傳兵衛。道具屋徳兵衛。別所段之丞。二見瀬牛。

大工作兵衛。同、杢兵衛。同、太郎右衛門。茶屋娘、お組。外記之進娘、お梅。浪人、要助 實ハ越野勘左衛門。

造り物、在の墓所。石塔、卒都婆、假おほひの竹垣などあり。表の方に閻魔、玩び人形太鼓奉納とあり。側に、赤青紙の旗、數多立て、經木に水向け、桔梗屋才兵衛が女房、お振、油ぎつたる風俗にて、回向して居る見得。大安寺和尚、眞中に立ち、伴僧雲床坊、半床坊、鉦、鐃鉢を鳴らして居る。講中大勢、並び居る。この見得、鐃鉢の音にて、幕引く。

講中　ヤレ、情ない。どうやら曇つて來たぞや。

講中　エ、、びやう／＼とした墓原に、物凄い閻魔さまの顏。

講中　アレ／＼、あの上げてあるのは、皆な疱瘡子の玩び。閻魔さまの本地は地藏さまと云ふ心はあらうが、とんと賽の河原のやうなぞや。

講中　ハア、、それで、借りる時の地藏顏、濟す時の閻魔顏と云ふのぢやの。

講中　ハテ、それも借りさへせねば、戻せと云ふ閻魔顏もない。みな心の鬼が身を責めるのぢやわいなう。

ト鐃鉢、打ち上げると。

ふり　ア、、いかい御苦勞さまでござりました。

和尚　なんの／＼、才兵衛どのは、元この大和產れなれど、身上稼ぎの爲と上方へ上り、嶋原の遊里にて、桔梗屋と呼ばれて歷々の暮らしと、蔭ながら聞いて喜ばしう存じ居つたに、不慮の劍難に遭うたとあれば、何卒修羅の苦患を助け得させん爲の、この施餓鬼でござるわいなう。

ふり　有り難う存じます。ほんに、折角女夫して儲けた身代を、雷八とやら、大八とやらいふ謀叛つかひに頼まれて、諸道具まで上り物になつて、いとしや才兵衛どのは血みどろちんがい。どうぞこの大和の故鄕へと志し、介抱して戻る道に、ツイころりと、いとしい事をしましてござんすわいなア。

ト泣く。

和尚　手疵を受けながら、長の旅をせられしゆゑ、破傷風と云ふものでがなござらう。

講中　聞けば、假おほひは才兵衛でござるげな。

ふり　ハイ、途中の事なり、誠に山家の事でござりますに依つて、もし狼にでも掘られてはなるまいと思うて、假

おぼひして、昔のよしみ、旦那寺ぢやに依つて、大安寺へ駈け込んで、様子をお頼み申したのでござりますわいなア。

和尚　佛事供養は沙門の役、改葬いたし進ぜたうも存ずれども、佛を再び掘り出すも、迷ひの種と存ずるゆゑ、葬の心労々の、この流れ灌頂でござるわいなう。

雲床　久しう上方へ行てござる間に、前の相長屋の衆も知れず。

半床　一家衆と云うてはなし。

雲床　せう事なしに、大和の講中方を頼んだのでござります。

ふり　ほんに、どなた様も、いかい御苦労さま、忝なうござります。

ト一々禮を云ふ。所へ、米屋お米、下男に小風呂敷持たせ出て

よれ　オヽ、これはお寺様、爰にござらつしやるかいな。

雲床　これは〳〵。申し、今井の、米屋のでござりますわいの。

和尚　ナニ、米屋とは、エヽ、御内室、いづれへござつたぞ。

よれ　今お寺へ参ります所でござりますわいな。

ト云ふ。

和尚　ホウ、殊勝な事ではござる。

よれ　いとしや主は、過ぎられましてござりますわいな。

ト云ふ。

和尚　何か亭主は御病死でござつたか。

よれ　イエモウ、ツイ風邪の心地と、今朝明け方に、眠るやうに臨終しられましたわいな。

雲床　それは、きついお力落しでござりませうな。

和尚　アヽ、老少不定とは云ひながら、ハテ殘念千萬な。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向のこなし。風呂敷を出し

よれ　これは七七日のお齋米。又この一包みは、常々主の遺言に、もしもの事があつたら、日牌月牌を上げてくれと、佛壇の下にのけてござりました五十兩。

ト出す。

ふり　ヤア、この五十兩を。

よれ　主の菩提の爲。

ト和尚、金を取上げ

和尚　オヽ、御奇特千萬。回向いたさう〳〵。

雲床　さうしてマア、葬ひは何時になされます。
よれ　山八ツに致したうございます。
雲床　死光りと申せど、時節がらぢや。随分倹約なされや。
半床　併しお布施は、輕いよりも重い方がようございます。
ふり　ムツ、そんなら、あなた様のも、お還りなされたかえ。
よれ　ハイ、惜しい事を致しましてございます。
ふり　イヤ〱、いかいお力落しでございますな。私しも幼な馴染みの夫に離れましたが、どうやら淋寂しい、辛氣な事でござりますわいな。
よれ　御推量なされて下さりませ。
ト泣く。
和尚　悲しいも道理々々。併し、いつまで嘆いても返らぬ事。兎角香花を斷らさぬやうに、一刻も早く歸つて、沐浴の用意などもなされ。愚僧も追ツつけ參らう。
よれ　ハイ〱。左樣ならお暇申します。
ト泣く〱、男を連れ入る。一つ鉦になる。
和尚　靜かに歸らつしやれ。

ト皆々思ひ入れあつて
講中　エヽ、只さへ物凄い墓原へ
同　なま〱しい亡者の話し。
同　常念佛の一つ鉦。
皆々　エヽ、心細い。
ト薄ドロ〱にて、才兵衛、坊主頭に胡麻鹽當て、竹杖を突き、閻魔堂の蔭、假おぼひの後へ、セリ上げの心にて
才兵　申し〱。
ト皆々、こなしあつて
皆々　今の申し〱は、どこからぢや。
和尚　ハテ、訝かしや。人隣絶えたる山林にて、いと哀れげなる聲音にて、申し〱とは。
雲床　お定まりの幽靈ぜりふ。
ト皆々、慄ふ。お振、思ひ入れあつて
ふり　どうやら今の聲は、聞いたやうな聲。
ト云ひ〱、才兵衛を見て
ヤア、こちの人、才兵衛どの。逢ひたかつたわいの、逢ひたかつたわいの。
ト縋りつき、泣く。

和尙　ナニ、才兵衞。
雲床　才兵衞どのは、死なれたに依つてこの施餓鬼。
講中　それ〳〵、アレ、あそこへ假おぼひしたと聞いたに。
皆々　アレ〳〵、あの姿は。
ト悸ふ。お振、始終憂ひの心にて
ふり　エ、、情ない。そんなら矢ッ張り迷うて居やんすのかいなう。
才兵　オ、、迷うた〳〵。戀慕の闇に迷うたわやい。
和尙　ナニ、戀慕の闇に迷ふとは。
ふり　そんならわしが、こなさんの死なんしたのを幸ひに後家狂ひでもすると思はんすのか。なんのマア、二世と云ひ交した仲で、外の人と惡性は
才兵　ないとは云はさん〳〵。エ、、おのれはなア。
ト嫌らしきこなし。
ふり　コレ、才兵衞どの、京三界から遙々大和まで、道行して來る程のわしが、マア、なんの外に色事を。
才兵　云ふな〳〵。その故鄕の大和路へ來居つたが、即ち徒らの證據ぢやわい。
ふり　ムウ、わしが大和へ來たが、徒らの證據とは。

才兵　おのれは京へ上らん先、あの和尙づらと云ひ交して居る事、知るまいと思ふか。
雲床　ヤア、そんなら前方は、こちの和尙の大黑であつたか。
半床　道理であの後家が泣かれると、和尙も泣かしやると思うたてや。
和尙　ヤイ〳〵、兩僧、そりや何を云ふ。
雲半　でも、あの才兵衞どのが、
講中　和尙どのと色事ぢやと、悋氣しられるからは。
才兵　今さら喰ひ隱しは、卑怯々々。エ、、娥ましいなア。
ト脇の下へ手を入れ、娥ましき身振り。
和尙　愚かや才兵衞入道。さては愛着の絆に迷ひしか。妻子珍寳不隨合と云へば、未來の道は別れ〳〵、獨來獨果と悟りの道、必らず戀慕の闇に迷はぬやうに、疑念を晴らして成佛めされ。南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト珠數押し揉んで、回向する。
才兵　イ、ヤ、念佛嫌ぢや、金が欲しい。
皆々　なんと。
ト悧り。

才兵　足なしおこせの奉公人を取つて、儲け貯めし身代を雷皆八づらめに頼まれて、謀叛の同類ぢやとて、身上は闕所に逢ひ、紋の附いた身なれば、盆無の悲しさ、四十九日がその間、家の棟に居る事も叶はぬゆゑ、やう〳〵この閻魔堂の上にすつくりと立つて居れば、おれが死んだ事を知らぬ人が、コリヤ才兵衛、火元はどこぢやと尋ねられ、途方に迷うて居るわいなう。

ふり　いとしや〳〵。

才兵　なんの、おのれが、どこへいとしや。その吠える涙を和尚めに泣いてやれやい。

ふり　そんならどうでも、わたしと和尚様と、譯があるやうに疑うて居やんすのかいなう。

才兵　疑ふどころかやい。和尚めが、その生白けたしやツ面で、後家を迷はす坊主傾城め。

和尚　これは、迷惑々々。

才兵　ナヽ、ちつと迷惑でござらう。一文の才覺もならぬ後家をふづくつて、この施餓鬼をしやるが、腐り合うて居やる證據ぢやわいなう。

和尚　わつけもない。こりや皆貴様の未來の爲。まだこの上千部萬部の經陀羅尼、冥途の手向け。

才兵　イヽヤ、千部萬部より、一分でもだんない、正金で欲しいなう。

半床　なんぢや、金が欲しいとは。

雲床　幽靈だてら、金を何にさつしやるぞ。

才兵　問うてたもつて、嬉しやなう。

　卜巫女の口寄せのこなしにて、珠數にて杖を叩き

身上限りした才兵衛ぢやに依つてなう、地獄へも引取りのしてくれ手がなさに、なんとせうづ川の婆さまの所に居食ひして居るわいなう。

ふり　コレ〳〵、わしが事を云ふこなさんが、なんでせうづ川の婆さまの所に居さんすぞ。こなさん、あの婆さまと譯があるのぢやな。

　卜悋氣のこなし。

才兵　それがえらい、ばつの尻ぢやわいなう。

ふり　オヽ、わしやばつの爲でござんす。こなさんの悋氣さんす。わしも悋氣せいぢやの。

才兵　悋氣したいは古血のわざよなう。黒船忠右衛門ではなけれど、コレこの着物一枚も切れて、死んだ時の儘、湯灌さへせんに依つて、浮世の垢で、地獄に珍らしい千手觀音がわせ給うて、その痒さ〳〵。

トいろ〳〵身振りする。

ふり　そりや、せうづ川の水遊びが過ぎるに依つてぢやわいなア。

才兵　洗濯しやうも糊の錢がないに依つて、眞ッ裸になつて居るわいなう。

雲床　ヤア、云ふな〳〵。さては地獄にも錢金が無うては居られん依つて、和尚樣に無心にうせたのぢやな。

才兵　オヽ、地獄の沙汰もれそづくぢやわいやい。

雲床　さう聞いては、猶ならん。

半床　オヽ、覺えもない和尚樣に、二百目いがめる企みぢやな。

講中　自體おのれが、元この大和からのふけり者。

同　云はば立歸りの科人ぢや、

雲床　引ッ縛つて代官所へ連れて行かしやれ。

皆々　腕廻せ。

　　ト各々、荒繩、棒にて、才兵衞を取卷く。

才兵　エヽ、コレ〳〵〳〵、幽靈に繩かけると、くゝめ繩になるわいなう。

講中　そんならキリ〳〵去に居らう。

才兵　イヤ、どうも歸られません。

　　トやりこむ。

皆々　なぜ〳〵。

才兵　盆でござる。せうづ川の婆樣にも、飯代の借があるに依つて、ちつとなとれそを持つて去なねば、どうも歸られません。

ふり　申し、和尚樣、今のやうにせうづ川の婆樣と色氣もあるかのやうに、悋氣したはわしの過言。飯代の算用せにや、地獄へ去なれんと云はれます程に、エヽ、どうぞ皆樣に詫び言して、成佛して下さるやうに、コレ、ナア。

　　ト和尚の側へ、嫌らしうすることなし。才兵衞、腹立て

才兵　それ〳〵、挨拶するやうな顏で、おれを早う冥途へ去なしたがり居るが、忌々しいわいやい。

ふり　エヽ、呑込みの惡い。こりや皆こなさんと相對づく。

才兵　コリヤ〳〵、滅多な事吐かすな。

　　ト術ながる。

ふり　ナアニ、銘々が斯う〳〵してくれと、頼んだ事は忘れて、わたしやほんに。

才兵　此奴が〳〵。おれが何を頼んだぞ。
ふり　云ふぞや〳〵。
才兵　此奴、玉が返つたな。
ふり　それでも逆強請りさんすもの。
才兵　おのれ、さう吐かしや、モウ。
　ト杖振り上げる。皆々留めて
講中　ア、マア〳〵、よいわいなう。
才兵　イヤ、退かしやりませ〳〵。
　トいろ〳〵揉み合ふ。
雲床　ハテサテ、女夫喧嘩は世帯の華ぢやわいなう。
才兵　イエ〳〵、地獄の釜も鍋も、打ち割つて絶やします。
講中　ハテサテ、如何に切られた幽靈ぢやとて、修羅を燃すは後生の妨げぢやわいなう。
雲床　それ〳〵、例へお内儀が惡性しられうが
半床　大黒になられうが
雲床　灌行きをしられうが
講中　穴の中へ入つてからは、後生の障りぢやわい。
才兵　サア、その障り三百日、この世は蛇に責められても、無間皮かむりの和尚樣めと嬶めを、のめ〳〵と添はさうかと思へば、修羅の種でござりますわいなう。
ふり　申し、和尚樣、あのやうに主に修羅を燃やさすも、みんなお前ゆゑ。ちつと云ひ譯して下さんせいなア。
　ト嫌らしきこなし。
和尚　さりとは〳〵、講中の手前も面目ない。愚僧はさらさら左樣な色慾はなけれども。
講中　サア、なけれどもなら、猶の事。
同　才兵衛が迷ひを晴らさせ
同　成佛さしておやりなされませ。
才兵　嫌と云へば、伴ひ奈落へ連れて行くぞ。
　ト怖い身振りをする。
和尚　ハテ、きつい迷うたものぢやなう。如何にも、人を助くるは出家の役、才兵衛どのが現世に居らるゝ人ならば、幸ひコレ爰に、日牌に上げられし五十兩、當分取替へてと云ふ品もあれども、何を云うても、正眞の、未來へ投げ金、無益の儀。
　トお振、才兵衛、顔見合せ
ふり　ア、申し〳〵、和尚樣、よい事を思ひ出しましてござります。總體佛樣へ盛り物したり、御膳を供へるは心ばかり。何もかも其まゝ在るぢやござりませんか。

和尚　如何にも。
ふり　丁度そのやうなもので、地獄の沙汰も金次第と云はれるからは、その金をちつとの間、爰に供へてさへ置けば、志しは未來へ屆いて、後の金は矢ツ張り和尚樣のお手に入るではござりませんか。
皆々　イヤ、これは尤も。
ふり　ハテ、主は高が幽靈。なんの金を持つて去なれませうぞいな。
皆々　イカサマ、氣は心ぢやわいの。
和尚　ア、、女性なれども、流石は繁華の里に育たれし程あつて、なか〳〵發明。當然の理に叶ひました〳〵。
講中　こりや、後家どのゝ云はるゝ通り
同　その五十兩を佛へ供へて
雲床　才兵衛どのが成佛しられるやうに
皆々　回向して遣はさりませ。
ふり　金は私しが殘り、番して居りますわいなア。
和尚　尤も〳〵。然らば後家御、暫らく。
ト右の財布をお振に渡す。
ふり　コレ、才兵衛どの、この金をなア、持つて去ぬ事はならぬ程に、志しばかりを未來への土產ぢやぞえ。

ト石の上へ財布を供へる。
才兵　オ、、流石の同行、その志しを見る上は。
ふり　成佛して下さんせえ。
トこなしあるうち、講中皆々並ぶ。雲床坊、半床坊、鉦、鐃鉢構へる。
和尚　サア、何れも同音に。
ト珠数押し揉んで
なまいだ。
皆々　なまいだ。
トこれより、鉦、鐃鉢にて、浮かれ念佛になるうち、お振、ソツと石を蓮の葉に包み、財布と摺り換へるこなし。皆々責め念佛のやうになる。才兵衛、これより狐の身振り。
才兵　ナニ、この金を下されんとや。返す〳〵も嬉しやなア。
ト財布を持つて、閻魔堂の蔭へ、消ゆるこなし。
和尚　ヤア、すりや才兵衛と云つたは。
皆々　狐であつたか。
ト お振、右の蓮の葉包みを取上げ
ふり　ヤア、金は蓮の葉包みが

皆々　石になつたゝ。
ふり　ハア。
　ト仰山に泣く。皆々、愕り。
　おのれ、古狐め。
講中　狩り出せ〳〵。
　ト鉦、鐃鉢を鳴らし、追ひかけ入ると、唄になる。お
　振、手招きすると、才兵衛、木蔭より出て
才兵　嬶。
ふり　こちの人。蓮の葉包みと掏り換へて。
才兵　まんまと五十兩は忝ない。
ふり　このきほひ口に、まそつと。
　ト橋がゝりを見て
　よし〳〵、又來るぞえ〳〵。
才兵　ドロ〳〵をしつかりと。
ふり　合點ぢや〳〵。
　ト太鼓を打ち、玩びの笛を、木蔭へ寄つて吹くうち、
　長持ちを擔ひ、宰領一人附き、出る。
男一　箱根八里はなア。
男二　馬でも越すに、ナアエ。
　ト寢鳥ドロ〳〵にて、才兵衛、竹杖を突き出て

才兵　申し〳〵。
　ト三人、キヨロ〳〵して
宰領　エ、小氣味の惡い萱原で
男皆　申し〳〵とは。
　云ひ〳〵、才兵衛を見て、ワアと長持ちを捨てゝ、逃
　げて入る。
才兵　ハ、、、、。ハテ、臆病な奴ぢや。
ふり　なんと、苦もなう長持を置いて逃げ居つた。
才兵　なんであらうぞ。
　ト云ひ〳〵棒鼻に掛けある狀を見て
　こりや何ぢや、讀んで見や。
　トお振に渡す。
ふり　大方、入日記でござんせう。
　ト讀み
　なんぢや、緞子三本。
才兵　〆めた〳〵。
ふり　黄金十枚。
才兵　えらいぢや〳〵。
ふり　馬の首一つ。
才兵　ヤア。

ト悄り。
ふり　水がね人形、魂ひ一つ。
才兵　なんの事ぢや。
ふり　鬢鬘五枚、大小十本、葬禮道具一式。なんの事ぢ
　　や。
才兵　エ、、旅芝居の道具長持ちや。
　　ト蓋を開けて見る。
ふり　なんの役にも立たぬものぢや。
　　ト雨車の音する。
　　南無三、雨ぢやぞえ。
才兵　エイ、早速、先づこの菅笠とばつてう笠。
　　ト各々着て
　　さて、雨氣でも重寳なものは芝居の魂ひ。こいつ、樟腦
　　ぢや依つて、幽靈にはいつち要る代物ぢやて。
ふり　シタガ、今の奴等が又、取りに戻らうぞえ。
才兵　オ、、そんならちつと所變へてこまさう。サア、わ
　　が身、大儀ながら片棒荷つてたも。
ふり　オ、、好かん。姫御前がこんな物。
才兵　ハテ、これが即ち、わが身とおれが、戀の重荷ぢや
　　と思や。

ふり　エ、、何をするも夫の爲。
　　トさし荷ひ
才兵　幽靈ばかりも氣が變らん依つて、また手段の趣向を
　　代へるには、幸ひこの道具。
ふり　木幡の里に馬はあれども。
　　ト才兵衛、馬の首ばかりを、長持ちより出し
才兵　首ばかりぢや。
　　ト唄になる。長持ちをさし荷ひ、向うへ入る。ト橋が
　　かりより浪人要助、衣裳、上下にて、若黨、草履取り
　　箱持ちの姿に、砂屋權兵衛、米屋傳兵衛、道具屋德兵
　　衛、その他二三人附き出て
權兵　申し、お旦那。幸ひの辻堂、暫らく雨宿りをなされ
　　ませんか。
要助　誠に春雨に物籠りて淋し、と鬼貫が獨吟、漸く彌生
　　朔日なれども、閏月あつたれば時候は最中。花に鳴く
　　鶯、月に渡る雁すら、その節と違へど、乾坤私しあらじ
　　とは、天道命を改むる、敎へも天に不時の禍ひ、ホ、。
　　とから云ふうち、早晴れわたる雲の氣色。實に暫時の花
　　曇りであつたよなア。
　　ト本釣り鐘つくと、別所段之丞、衣裳、上下にて、供

廻り、大勢連れ出て
段之　これは〳〵、要助どの、ハテよい所で御意得まして
ござります。
要助　イヤ、これは段之丞どの。夕陽に及んで、何方へお
越しでござるな。
段之　イヤ、貴殿の閑居へ伺候仕る所でござる。
要助　ハア、すりや益々御前の首尾もよく、明日は早天に
登城仕れとの儀でござるかな。
段之　イヤ、左様では。
ト氣の毒なるこなし。
要助　士は功に依つてその家を立つる習ひ、御前の思し召
しに叶ひしも、偏へに拙者が武藝の譽れ。明日より御前
へ御師範の拙者でござれば、一家中は勿論、御自分とも
師弟と相成れば、以後は萬端入魂に語りまするでござら
う。サ、近う〳〵。なんと孟春の野面の眺め、どうも
云へませんぞや。即席でも致さうではござるまいか。
段之　イヤ、即席どころでござらぬ。御用先でござるぞ。
トきつと云ふ。
要助　晩景に及んで御用先とは。
段之　貴殿の儀は、武術を申し上げの御奉公でござるぞ
や。
要助　なか〳〵過言ではござれども、凡て武藝神影の奥
儀。
段之　如何にも、辯舌を以て言上召されしところ。
要助　御賞美でござらうがや。
段之　イヤ、モウ、甚だ不首尾さん〳〵。
三人　ヤア、。
ト皆々顏見合せ
要助　思し召しに叶ひませんか。
段之　一向論に及びません。
權兵　そんな事であらうと思うたてや。
傳兵　餘り太平樂が過ぎたと思うたてや。
德兵　モウ、れそぢやぞや。
ト指さし、囁き、誹るなし。
要助　でも、三百石頂戴いたす筈で。
段之　サア、貴殿は三百石頂戴いたす氣でも、御前は勿論
御家老中、以ての外の御評議。武術申し立てとは、御家
中に人もなげなる廣言。恥とも思はぬ無禮者と、推擧い
たせし某まで、面目失ひましてござる。
要助　ア、孔子も時に合はざればぢやなア。

段之　又いづれなりとも、勝手次第に身上稼ぎなされ。先づ此方はお斷わり。使者の趣き斯くの通り、とは申すものゝ、ハテ氣の毒千萬。お暇申す。家來供せい。

　ト唄になる。侍ひ連れ入ろ。要助、ヂッとして居る。家來皆々、この間暫く、合ひ方ありて

傳兵　なんと聞かしやつたか。

德兵　この間からの鹽梅、大方こんな事であらうと思うたてや。

權兵　サア、わしもこの間から、方々へ目見得しられても、とんと一口も埒が明かんに依つて、ア、、どうぞ首尾ようありつかるればよいがと思うて、今日も、のぞをやつて見たれば、弓の仕方話し、

　ト揚弓の眞似をして

小鼻を見當になどゝ、揚弓の眞似をして居らるゝわいの。

德兵　ハ、、、、。いかいたわけの。和田雷八などとて、八千八筋も射通す時節に、揚弓で知行が取られるものかい。

權兵　あの位なら、外の太刀打ちも思ひやられます。

傳兵　もし眞劍勝負などになつたら、忽ち首はコロリ。

權兵　首を藏に積んでも、堪るものぢやないぞや。

傳兵　コレ、そんな事で三百石取らうとは、コレ、前々とは違ふ。今の三百石は、黑米でも三拾貫目ぢやぞや。

德兵　こりや、米屋どのだけ、算用が格別ぢや。

權兵　外の追ひ掛りとは違ふ。家賃はどうさつしやる。

要助　サ、、重々御尤もぢやが、爰は往來、殊に白晝に。

權兵　なにを。白晝でも追剝ぎの出さうな三昧。遠慮はこれ程もない。

德兵　それ〳〵、こちらが形で貴樣につくのも、貸した金を取らうばつかり。

傳兵　そも、去年の盆後から仕送つた米代。

　ト懷より帳を出し

九月前の〆が百八十匁あるぞや。もうこれぎりで賣らぬと云うては、緣が切れると思うて、また拾月前が二口〆めて五百三十匁。

權兵　貴樣が國から、ふうてんにわせてから、此方の貸座敷に居ても術なからうと思うて、こつそりとした隱居の內を、コレ、この傳兵衞に呑み込まして、疊から戸障子鍋釜まで。

德兵　コレ〳〵、

　トまた帳面を出し

總〆めて十六貫五百八匁。
權兵　呑み込んでもらつてやつたは、皆この家主が顔づくぢやぞや。
要助　段々お世話、御厚志の段、忘れ置きません。
權兵　如何にも、置かんであらう。もう置くものもあるまいと、おりや推察して居るけれど
傳兵　こちらは間屋へ仕切りの金、拂ひせにや、商賣がならぬわいの。
德兵　コレ、家主どの、貴樣の呑み込みぢやが、この道具代は、いつ算用さつしやるぞ。そも〳〵から、何軒目見得したと思はつしやるぞ。丁度今日の變替へともに十軒目ぢやぞや。
權兵　二軒目から八軒目、釣とる代物ぢや。
傳兵　モウ、所詮抱へ手はあるまい。今日まで貴樣にかゝつて、商賣もせずに付き歩いた代り、貴樣の所の諸道具疊まで捲つてこまそ。
　ト行かうとするを、要助、留めて
要助　ア、コレ〳〵、マア待つて下され。それは又餘り。
傳兵　道具屋、貴樣が餘り料簡過ぎるに依つてぢやわい。
德兵　エイ、おれも男ぢや。料簡過ぎると云はれては男が立たん。貴樣が米代に諸道具取るなら、おりやその代りに、お婆やお娘を引ツ剝いでこまさう。
　ト行かうとする。要要惘り、
要助　ア、申し〳〵、左樣なされて下されましては、殊の外の難儀。
權兵　貴樣、難儀は心から、
傳兵　モウ〳〵、今日の樣子では、ちよつとも待つ事はならん。
德兵　お娘も婆も引ツ剝いで。
　ト二人、行かうとする。立廻りあり、留めて
要助　すりや、どうあつても抱人や妹めを。
德兵　オヽ、剝ぐ段ぢやない、
傳兵　竹簀子にして、鍋釜までも引上げて、こますのぢやわい。
　トまた二人行かうとするゆゑ
要助　段々御立腹は、御尤もでござりますれど、母や妹めが、聊か存じた儀もござりません。マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。
權兵　コレ〳〵、要助どの、達て留めさつしやるのは、ちつとでも工面が出來ますか。

要助　イヤモウ、少しばかりでござりますれども、せめてこれを各々方へ、よろしうお頼み申します。

ト紙入れを差出す。權兵衛、開けて見て

權兵　オヽ、こりやしつかり。アヽ、流石はお侍ひぢや。まさかの時の軍用金と云ふ所の嗜み。アヽ、偉いもんぢや。マア〱、皆な氣を鎭めて爰へ爰へ。

傳兵　ドレ〱、わつぱさつぱと云ふも金が欲しさ。

德兵　正金で下さる程、有り難い事はないぢや。

ト各々、こぞり寄り、紙入れを開けて見て

權兵　ヤア、こりや、やう〱貳朱銀三枚。

傳兵　しつかりと重かつたは。

德兵　目貫と小さい金槌。

ト段々出して

德兵　此方の道具代は十六貫五百八十文。

傳兵　米代が五百三十匁。

權兵　家賃が二百八十匁。

德兵　三口〆めて一貫匁から上を、二朱銀三枚とは

要助　足りませんがな。

傳兵　足らんどころか、この間うちの草鞋錢もないわいなう。

德兵　矢ツ張り、こりや阿母やお娘を。

傳兵　それ〱、諸道具を。

トまた皆々行かうとするゆゑ。

要助　アヽ、時の用には花色小紋の上下。

ト脱ぎ、大小ともに

これが私しの、如才のない所でござります。

ト着物ばかりになり、差出す

權兵　すりや、小袖も上下も脱いで、この大小までも。

德兵　薄い形になつても、阿母や妹御を。

ト顏見合せ、しいんとなる。

要助　ハイ、たつた一人の母、殊に妹めは母が愛子でござりますれば、まだ餘寒も烈しうござりまするのに、どうも。

ト云ひさして泣く。權兵衛、德兵衛、顏見合せ

權德　ても、こなさんは孝行な人ぢやなう。

德兵　阿母や妹御を剝ぐと云つたゆゑ

傳兵　疊まで上げられては、難儀であらうと思うて

權兵　侍ひが大小まで。

ト云ひ〱、輕きこなしにて、拔いて見て

ヤア、これは。

德兵　赤鰯どころか竹光ぢやワ。
ト權兵衞、少し泣いて
權兵　この位なら、さぞ何やかや一人辛抱して、阿母や妹御に、不自由な目をさすまいとの志し。
權德　ア、、いとしやなう。
德兵　コレ、節季と云うて間もない事ぢやが
傳兵　待つてやりませう。如何にもおれは待たうが、爰に居るは、皆その日過ぎの和郎達なれば。
權兵　オ、、そんならこの二朱銀と。
德兵　この上下と小袖は、マア、今日の雇ひ賃に。
ト渡す。
男皆　よし〳〵、算用は峠の茶屋でせうぞ。
德兵　さて、挾み箱も。
權兵　この槍も。
ト各々、擔げ
又いつ役に立てうやら、雲を目當。
德兵　即ちうんつくと云ふ心ぢや。
權兵　金は取らいで、借錢の挨拶してやるとは
傳兵　如何に家名が砂屋ぢやとて
トこれよりのり地になる。

權兵　家賃も砂屋となるからは
德兵　權兵衞どんにやく、しんどが利
傳兵　孫そひ道中がなるものか
皆々　ヤツトコサ〳〵。
ト各々振つて入る。あと合ひ方になる。要助あと見送り
要助　慥かにこの郡山の家中に、匿まひあると聞いたゆゑ、凡そ十軒餘りも目見得して、樣子を窺ひ見れど、これぞと云ふ手懸りもなし。譯を御存じなければ、さぞ母人や妹が心遣ひ。先づ一旦歸つて。
トそろ〳〵行きかけ、落ちてある手拭、矢立を取上げて
こりや、慥かに今の奴が。ア、コレ矢立・手拭が。
ト呼び返さうとして
ア、、借に次手に、これも暫らく借用いたそ。
ト頰かむりして、向うへ行きかけると、唄になる。弓削外記之進娘お梅、卒塔婆、樒を持ち、花道より出て、摺れ違ひの模樣ありて
申し〳〵、お梅さまぢやござりませんか。
うめ　誰れぢや、何者ぢや。

要助　イヤ、私しでござります。

　ト頬かむり取り、双方顔見合せ

うめ　ヤア、勘左衛門さま。

要助　シイ。

　トあたりへ思ひ入れ、小聲のこなしありて

必らず名を仰しやりますなえ。

うめ　成る程、日蔭のお身なれば、御尤もでござりますが、マア、このお姿は。

要助　イヤ、私しよりお前樣、見りやお供も連れられず、只お一人。

うめ　サア、母樣は、何やかやのお心遣ひで、お癪が發つて、その介抱申すうち遅なつて、やう／＼今お墓參り致すのでござりますわいなア。

要助　すりや、阿母樣は御病氣。お墓參りとは、すりや、いよ／＼噂の通り、外記之進さまには。

うめ　アイ、お國の事や、お前の行く末の事を苦にして、お果てなされましたわいなア。

　ト泣く。

要助　すりや、國變に心痛なされて……私しの他國も、お國の成行きと存ずるゆゑ。アヽ、お痛はしやなア。弓削外記之進さまと云つて、射藝の妙術秘事口傳まで、某に御傳授下されし師の厚恩も徒らに、この身は御改易、御身は國の成行きに心氣をお痛めなされて。アヽ、如何に世の盛衰とは云ひながら、師匠の追善供養も等閑に、まだ御戒名さへ。

　トお梅が持ち居る、卒塔婆を取つて見て

變り果てたる御身の終り、御命日の今日、計らずもこの所にて、お梅さまにお出合ひ申すも、師弟の縁盡きざる印。出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

うめ　ほんに、嘆きの中の喜びとは、この事でがなござりませう。お前の行くへは知れず、母樣は御病身なり、なんとせうぞと力無う思うて居りましたに、斯うお出會ひ申しまするからは、どうぞ母樣や、私しが身の上を、お願ひ申しますぞえ。

要助　イヤ、その儀ならば、少しもお案じなされますな。

うめ　アイ／＼、そんなら何でもこれから。

要助　要助々々と、お呼びなされて下さりませ。

うめ　コレ、それにつけても、父樣の御遺言の。

要助　イヤ、委細は密かに。マア、私しの閑居へ。

うめ　そんなら何かの事は。

要助　マア、ござりませ。
ト花道へ行きかける所へ、代官、侍ひ連れ、バラ〳〵
と出て
代官　お尋ねの浪人、要助。
侍ひ　動くな。
トばら〳〵と取巻く。要助、恟り、お梅を後に圍ひ
要助　ヤ、聊爾なされますな。全く某。
うめ　なんぞ覺えのある事でござんすかえ。
要助　イヤ、毛頭覺えは。
代官　云ひ譯は御前で仕れ。
うめ　エヽ、そんなら。
ト要助ギックリとこなしあつて、
要助　浪人いたし、町家に住宅仕れば、理非はお代官所の
お指圖。是非に及びません。
うめ　そんならお前は、代官所へ。
要助　イヤ〳〵、少しもお氣遣ひなされな。
ト思ひ入れ
うめ　ぢやと云つて。
トあたりへこなし。要助、思ひ入れあつて、最前の矢
立を出し

要助　憚りながら、暫らく御容赦。
ト代官へ目禮し、狀を書く間に、お梅、モヂ〳〵して
うめ　何の事ぢややら、樣子を聞かぬうちは、どうもわし
や心ならぬわいなう。
ト心遣ひの間に、要助、手紙認めながら
要助　サ、その譯はこの書中に、とくと認めてござります
る程に、憚りながら、コレ。
ト狀を結び、上書きしながら
この所書きの、ナア、コレ、この筋を眞直ぐにお出でな
されますと、少し左の方に、花壇のある所がござります
る。それへ御持參なされ下さりませう。
ト狀を渡す。
うめ　そんならこれを、お前の阿母樣に。
要助　お渡しなさるれば、委細承知の譯。即ち身上ありつ
きの儀で、代官所へ參るのでござりますわいなう。
うめ　そんな事なら、よいけれど。
要助　何もお案じなさるゝ事はござりませんぞえ。
うめ　そんなら早う戻つて下さんせえ。
ト花道へ行きかける。
要助　サア、何もお案じには及びません。花畑のある所が

左様でござります。老女が居りまするぞや。急いでお怪我なされますなや。

うめ　アイ〳〵。

ト云ひ〳〵、花道へ杖を持つて入る。道を教へながら、行かうとするを

代官　サア、早く參れ。

要助　ヘイ。

侍ひ　歩め。

要助　ヘイ。

ト皆々、付け廻し、代官、侍ひ、要助を取卷き入る。と在所唄になる。返し道具

造り物、正面に、一里塚。西の方は、葭簾かけ、立場の茶店の體なり。向うより、大工作兵衞、杢兵衞、太郎右衞門、その他、大工四五人、旅の形にて出る。

大皆　サア、戻つたぞ〳〵。

太郎　ア、、御苦勞でござりました。

作兵　早う去んで、久し振りで忰どもが顏見ませう。

杢兵　坊主めに土産も

ト思ひ入れあつて

これはしたり、まだ荷物が來ぬワ。

太郎　ア、、又ぐもが持つてふけりはせんかの。

作兵　イヤ〳〵、えら荷ぢやに依つて、休み〳〵來居るもんであらう。

皆々　オ、イ、〳〵。

ト向うを招くと、また在所唄になる。と二見瀬平、雲助の形にて、裸身に、腰に澁紙を卷き、繩帶して、竹仕込みの杖を息杖にして、大工箱、六つ程擔ひ出る。

皆々　ヤイ、待つて居るわい〳〵。

瀬平　オ、、旦那衆、如何に空身ぢやとて、早い足ではあるぞ。

作兵　ハテ、久し振りで各々、在所へ歸つたと思や、内へ氣が急くのぢやわい。

瀬平　お家樣の顏が見たいのぢやな。

作兵　なに吐かすやら。マア、坊主めが土産を。

ト各自に別けて取る。

瀬平　えらいしまな荷でござんした。

皆々　オ、、大儀であつた〳〵。

瀬平　一杯飲まして下さんすであらう。

作兵　オ、、おいらも無事で戻つた祝ひ。

杢兵　マア、爰で別れの杯しや。コレ姐さん、なんぞ肴はないか。
くみ　ハイ、棒鱈に、鰊の昆布巻きがござりまする。
瀬平　猫かなんぞのやうに。
杢兵　なんでも生臭い物さへありやよい。早う燗しておぢや。
くみ　アイ〳〵。
ト茶屋娘お組、肴鉢、小丸鉢に、茶碗、ちろりを持ち出し
サア、お上がりなされませ。
杢兵　マア、年役ぢや。貴様から始めさつしやれ。
作兵　なんぞと云ふと年役〳〵と、迷惑な。
ト云ひ〳〵、一つ受け
サア、お慮外申さうか。
杢兵　さらば、のみやさいづちと致さう。
ト酒を飲む。
瀬平　ア、、ほんにお前方は、皆大工様ぢやな。
皆々　それがなんとした。
瀬平　マアお前方、大勢連れで、どこへござりました。
太郎　荒川へ。

瀬平　アノ、この大和から荒川へ。ムウ、荒川にも大工衆があるのに、なんで又、遥々呼び寄せたのでござりますえ。
太郎　ムウ、如何にも。こりや合點がいかん筈ぢや。
杢兵　われより、マア、おいらが合點がいかんわい。ナア作どの。
作兵　サア、どうでもありや、主殺しか、謀叛人を匿まうて置く思案ぢやわいなう。
瀬平　して〳〵、どうでござります。
作兵　ソレ、何やらの淨瑠璃。ナニ、オヽ、獨鈷の駄六と云ふ奴が、おのれが手に山を掘つて、えらい御殿を立てて、若殿様を匿まうて置き居つた格と見えるわいの。
瀬平　そりや、マア、どんな普請でござりました。
杢兵　どんなと云うたら、高さは常の座敷ぢやけれど、奥の離れ座敷の床の間を、押しかけてくるりと返し抜きにして、直ぐにその下が四疊半。どうでもむぐらもちと茶の湯でもするのか知らん。
瀬平　アノ、床の間を返し抜きにして。
作兵　芝居のやうに、チョン〳〵の拍子木、打たいでも行かれると云ふ普請ぢやてサ。

瀬平　ハテナア。
　ト いろ〳〵思ひ入れ。
作兵　なんぢや知らぬが、朝も晩もえらい馳走して
太郎　作料は五人前づゝ。
李兵　その代り、座敷の名や普請の様子、女房子にも必ら
　ず云ふなてて、神文に血判して戻つたてや。
瀬平　アノ、他言せまいと云ふ血判を。
李兵　オヽ、ぢやに依つて、内へ去んでからは、云ふ事は
　ならぬ。
太郎　マア、この話しはこれぎり。
作兵　銚子もこれぎり。
くみ　あの人にも、一つ進ぜなされんかいな。
作兵　如何にも。と云つて燗する手間で、生樽でやらう。
太郎　それが彼奴等は勝手であらう。
李兵　ソレ、總仲間から酒手ぢや。
　ト 錢百文、抛る。
瀬平　うたゝねとは忝ない。
　ト 腰に挾む。
作兵　サア、別れませうか。
皆々　また近々。

　ト 六ツの鐘鳴る。と各々道具箱を擔ぎ、別れ入る。あ
　と合ひ方。瀬平、後見送り
瀬平　所の大工を使はず、過分の價をやつて、この大和か
　ら大工を呼び寄せ、返し板の茶の間とは、どうでも曲者。
　殊に他言すなと血判まで取つたは。
　ト 皆々入りし後を見て
エヽ、とてもの事に、座敷の名を、
　ト 行かうとして
イヤ〳〵、彼奴等も仲間のうち。士農工商と分れても、
分けて聖徳太子の教へを守る職人、血判したれば、なか
なか云ふまい。併し、荒川と所を聞いたからは、なんで
も直ぐに
　ト 竹杖を拔きかけ
侍ひの魂ひは錆びねども、この身の錆。
　ト 我が身を見て
武士が世に落ちては、切取り強盜はある習ひといへども、
チッと今まで嗜なむ正道も、大恩あるお家の爲。例へ非
道をしてなりとも。
　ト 我が身を眺め、あたりを見、向うをキッと見て
ハテ、訝かしや、陰火でもなし。あの人影は。何にもせ

よ。

ト小蔭に忍ぶと

〽おしや暫しの薄き緣、名殘の涙堰きかねて、歩み惱みつ行き惱む。

トこの文句にて才兵衞、矢張り幽靈の形にて、お振と右の道具長持をさし荷ひ、樟腦火を提灯にして、提げて出る。

才兵　お振や。其方とおれとは因果な緣。折角稼ぎ出した金は、皆な代官所へ取上げられ

ふり　お前もわたしも着のみ着のまゝ。

才兵　殊におれは疵だらけぢやに依つて、體が弱つて、置いて行けと云ふ追剝ぎもならぬゆゑ、やう〳〵思ひ附いた幽靈騙し。

ふり　今まで人參騙しと云ふ事はあれど

才兵　幽靈騙しとは、くは世念五そこのけ。

ふり　美人局は愚か、手に手を引いて人の軒端に立つとも、變らぬ女夫の極印とは、コレ。

ト太股を捲り

わたしが内股には才と云ふ字。

才兵　おれは我が身の、おふり命としつかりと入れた、入れ黒子は。

ふり　未來までも、わたしとお前は二枚の屏風。

才兵　離れまいぞや蝶鋏。ザンザ。

ふり　ザンザと書いた起證も、この守り袋に。

才兵　おれもこの通り。

ト互ひに守り袋を出して

勿體ない。上人樣を、強請つて取つたこの五十兩。

ト財布を出す

ふり　無理に被せかけたその科も、地獄の沙汰も金次第と云へば、金ほど結構な物はござんせぬわいなア。

才兵　エヽ、忝ない。

ト戴くを、瀨平、後へ出かけ居て、ちよいと取る。才兵衞恟り

ヤア、何奴ぢや、おいらが物を取らうとは。

ト樟腦火で、顏を見合せ

ヤア、われは。

瀨平　どうやら見たやうなが。

才兵　その筈ぢや。河原で逢うた瀨平ではないか。

瀨平　才兵衞めぢやな。

ふり　そんならお前、近附きかえ。

才兵　近附きの段か、おれを膾叩いたやうにし居つた瀬平めぢや。
ふり　ヤア〱、そんなら主の敵。
ト武者振りつくを、蹴り倒し
瀬平　ハテ、好い所で逢うたなア。
才兵　イヤ、惡い所で逢うたわい。
瀬平　うぬを締め上げたら、雷八が行くへを詮議の種。サア、雷八めは何所に居るぞ。
才兵　おれも尋ねて居るけれど、とんと知れぬに依つて、この態ぢやわい。
瀬平　此奴が〱。有やうに吐かさんと、うぬ。
ト才兵衞を締め上げる。
才兵　コリヤ〱、手荒うすな、痛みがあるぞ〱。
トお振、瀬兵に詰めかけ
ふり　よう主に疵つけたなア。手負ひに水々とした女房は毒ぢやとて、獨り寐さして居るもおのれゆゑ。思へば戀の敵。
トまた武者振りつくを、立廻りあつて、ポンと當てると、お振、ウンと反る。
才兵　ア、、可哀さうに。
トお振を介抱しようとするを、引き付け
瀬平　雷八が行くへ、おのれより外に知つた者は無い。吐かさんか。
才兵　ナニ、おのれより、おれが身の上の敵、居所を知つてさへ居りや、此やうな幽靈になつては居ぬわい。
瀬平　死太い奴の。吐かさにや、うぬ。
ト立廻りあつて、才兵衞を締め上げると、コツトリと落ちるゆゑ
南無三、ハテ、脆い奴の。エ、、大事の手掛りを。
トこなしあつて、水茶屋の手柄杓を取つて來て、才兵衞に氣付けを呑まし、介抱するうち、和尙、雲床坊、半床坊、挾み箱、提灯持ち連れ出て
和尙　直ぐに七七日の仕上げをしませうとは、ア、、當世は氣が短うなつたわいやい。
雲床　手廻しではござりませうが、お布施を兼ね合して貰ふのには困つたものぢやてや。
ト云ひ〱、來かゝり、これを見て愕り。
半床　ヤア、これは。
皆々　ヤア、人殺しぢや〱。
ト騷ぐゆゑ、瀬平、思ひ入れ。

和尚　ヤア、こりや才兵衛夫婦。
雲平　すりや、先刻の狐は。
瀬平　そんならお前方は、この才兵衛とお近附きでござりますか。
和尚　近附きの段か、前方は此方の檀方ゆゑ。ア、、最前は狐めに。ハア、さては亡者を使ひ居つたのぢやな。
瀬平　アノ、すりや。
　トこなしあり
和尚　して、こなたは誰れぢや。
瀬平　私しはこの才兵衛が悴にござります。
和尚　ナニ、悴ぢや。合點がいかん。
　ト瀬平が姿を見るゆゑ
瀬平　成る程、斯う云ふ姿ゆゑ、御不審は御尤も。私しも一旦勘當は請けましたれども、今日不思議に巡り逢うたも、親は泣寄りと申すのでござります。
和尚　して、また親子と云ふには、證據でもござるか。
瀬平　ハイ、その證據は。
　トお振が肌の守を、ツツと取る模様にて
拙者人々々々、ちやつと親子ぢやと云うて下されいなう。
　ト介抱する體にて、長持の水がれ人形の水銀を、ツツと杓へ入れ
コレ〳〵、この清水を一口飲んで、氣を附けて下されいなう。
　ト水銀を飲ますと、お振心付き、瀬平を見て、エ、、と力むと、直ぐにとんぼ返りするを、瀬平、ちやつと留める。
皆々　ア、、危ない〳〵。
　ト瀬平、うまいと云ふこなしにて
瀬平　イヤ、拙人は、取逆上せて居られますゆゑ、物もよう云はれません。モシ、親子と云ふ證據は、即ちこの守り袋。親仁どのの肌にも、大方掛けて居るでござりませう程に、引合はせて見て下さりませ。
和尚　ナニ、守が證據とは、それに増した事はない。早う。早う。
雲床　畏まりました。
　ト才兵衛が掛けてある守と引合はして見て
こりや同じ裂れでござります。
瀬平　なんと、慥かな親子の印でござりませうがな。
和尚　イヤ、モツ、斯く慥かな證據を見るとは、成る程相

違はない。

瀬平　親子の印。まだそればかりぢやござりません。親仁どのの股倉に、お振命と入れ黒子が、親子と云ふ慥かな極印でござります。

雲床　ドレ〳〵。

ト才兵衞が股倉を改め

コレ〳〵、股倉に、振と云ふ字の入れ黒子がござります。

トお振、又ムゥ、と怒つて、とんぼ返りするを、瀬平

瀬平　ナウ、母者人、アレ〳〵、泣いてばかり居られますれども、ちやんと葬禮の用意はしてござります。

ト長持より、棺桶、旌、天蓋を出す。

和尚　これは、きつい手廻し。ソレ、兩僧、手傳へ〳〵。

ト棺桶へ、才兵衞が死骸を入れる。

雲床　これは、いかうしやき張つてござります。

瀬平　イヤ、私しが手が苦手ぢやに依つて、擦つて進ぜませう。

ト腕も、足も、へし折るこなし。お振、泣く泣く氣を採んで、又とんぼ返りする。

和尚　これは氣の毒。イヤ、ナニお息子、親を送るは子の道とは申せども、現世の孝行には代へられぬ程に、こなたは阿母の介抱召され。愚僧が萬事呑み込んだ、呑み込んだ。必らず側を離れさしやんなや。

瀬平　殘念ながら、左樣仕りませう。

和尚　オヽ、それ〳〵、愚僧はこれにて引導いたさん。

ト仔細らしく棺の後へ廻り

汝元來枯木の如し。この世にて狐狸に騙られ、幽靈と憂き名を立てらるゝと雖も、才兵衞は難波の境に目を覺まし、シヤリ〳〵佛とならん事疑ひなし、南無。

ト棺を叩くと、男二人棺を舁き上げると、雲床坊、半床坊は提灯を持つて、先へ立つ。和尚、鐃鉢を持つ。瀬平、旌を一つに門火の拵らへ。お振は氣を採んで、又とんぼ返りする。

和尚　お辭儀には及ばぬ。門火〳〵。

ト瀬平、門火焚く。

皆々　ナマイダ。

ト同音に、しづ〳〵花道へ行く。お振、行かうとするを、瀬平、引き廻し、グツと締め殺す。お振、返ると、和尚、鐃鉢を程よく鳴らす。各々、一度に。

幕

四段目

勘左衛門住家の段
軍次兵衛住家の段

役名 ─ 北畠靭負之介。桃の井息女、彌生姫。近藤軍次兵衛。同一子、佐國。娘、小槇。外記之進娘、お梅。下人、藤六。砂屋權兵衛。米屋傳兵衛。道具屋德兵衛。母、檜垣。浪人、要助 實ハ越野勘左衛門。

造り物、二重舞臺、見附け鼠壁、反古の腰張り、納戸口、その次に一間の押入れ、此うちに雛祭りの體。上の方、よき所に二階の心、箱梯子掛け、橋がかり、杉の垣、枝折り戸。臆病口より舞臺際まで花壇にて、四季草花盛りの體。二重舞臺の際に、臺付き燒物の手水鉢。すべて、在鄕、侘びたる住居の模樣よろしく、幕の内より、下人藤六、木綿やつし、ぼつとせにて、雛の酒肴を取散らし、雛の膳にて、一人飯喰うてゐる。在鄕唄にて幕開く。

ト向うより、お梅、目籠に蛤を入れ、持つて出て、内へ入る。

うめ　藤六さま、いま戻りましたわいなア。

藤六　オヽ、昨日來たお梅さま、お前は旦那樣が手紙をつけて、此方の内へござんした大事の娘御。それに最前からどこへござんしたぞいの。

　ト云ひ〳〵、飯を掻ッ込む。

うめ　サア、昨日不思議に逢うた要助さま、それから内方のお世話になつて居る私し。妹御の小槇さまの雛祭り、心ばかりに祝ひまするこの蛤、これを求めに行たわいなア。

藤六　ハテ、しをらしい子ぢやなア。

　ト云ふ拍子に、飯を咽喉へ詰め、いろ〳〵術ながる。

うめ　コレ、申し、藤六どの、なんとさしやんしたぞいなア。

　ト藤六、脊中を敎へる。お梅、心得、脊中を叩いたり、擦つたり、さま〳〵介抱する。

藤六　アヽ、嬉しや、これで助かつた。

うめ　どうさしやんしたえ。

藤六　サア、あんまりお前の志しがしをらしさ、てもさてもと思ふ拍子、ひよいとお飯を呑み込んだ。アヽ、なん

ぼう小いさうても、お飯は咽喉を通さぬ物と見えるわいなう。
うめ　お前も滅相なお人ではあるわいな。さうして小槙さまは、いづくに居てぢやえ。
藤六　今日は上様の寺參り、それで小槙さまは、あの二階に。
うめ　明日は節句ぢやに依つて、髮を撫でつけてやらうと云うてぢやあつた。ちよつと二階へ行て、小槙さまと。
　ト二階へ行かうとする。藤六、慌てゝ引き留め
藤六　エヽ、滅相な。ならぬぞ〳〵。コレ、二階へやつて堪るものか。誰れも二階へやらぬやうに、それでおれが爰に張り番して居るのぢや。その賃に雛様の酒肴、飯から饅頭、みな喰ひ次第ぢやないか。
うめ　そりや、なんのこつちやいな。
藤六　何事とは、エヽ、お前は何にも樣子を知らんせぬに依つてぢや。いつも此方の上様が寺參りさんすと、その留守に、アノ、小槙さまの、ナ。
　ト云はうとして
イヤ〳〵、大事のこつちや。滅多に云はれぬ〳〵。
うめ　云はれぬ事を、わしや聞いても大事ないわいなア。

ちよつと小槙さまに。
　ト二階へ行かうとするを、藤六留めて
藤六　ハテ、滅多に二階へはやらぬ。
　ト云ふ。
うめ　それでも、わたしや。
藤六　コヽ、コレ、邪魔な。爰には置かれぬ。お梅さん、ごんせ。
　トお梅を、藤六、無理に納戸の内へ連れて入る。ト好みの合ひ方になる。暫らくあつて、二階より、小槙、振り袖娘の形にて、帶しながら、梯子より下りて來て、衣紋つくり、手水鉢へかゝり、手を洗ひ
小槙　申し〳〵、佐國さま、ちやつと下りてござんせぬかいなア。
　ト二階より
佐國　もう下りても大事ないかえ。
小槙　今が好い首尾ぢやわいな。
佐國　そんなら。
　ト佐國、着流しにて、羽織袴を持つて、梯子より下りて來て、こなしあつて、手水鉢にかかる。小槙、水汲み上げる。

佐國　これはお慮外。
小槇　もう、こちや水かけて上げぬぞえ。
佐國　これはしたり、そりやなんで。
小槇　アノ、女房にお慮外と云ふやうな事が、あるもので
ござんすかいなア。
佐國　エ、。
小槇　コリヤ、小槇、手を洗ふ程にちやつと水を掛けい。
それ手拭も持つておぢやと、あの殿達がお内儀さんに云
はしやんすやうに、云うたがよいわいなア。
佐國　エ、そんなら……コリヤヤイ、小槇、手を洗ふ程
に、ちやつと水を掛けい。ソレ、手拭ぢや。……サア、
掛けて下さりませ。
小槇　アイ／＼、こちの人、掛けますぞえ。
ト水を掛ける。佐國、手を洗ひ／＼、花壇を見て
佐國　小槇どの、アレ、しをらしい春菊が、よう附いて花
が開きましたの。
小槇　アイ、お前に貰うた苗は、何でも好う附きますわい
なア。殊に、杜若と云ひ、秋草ともに返り咲き、四季の
眺めを一時。
佐國　どうしても薬士の製法が、よいと見えますわいの。

小槇　申し、ナア、こちらの菊を見やしやんせいなア。
佐國　ムウ、この吾妻菊の事かえ。
小槇　アイ、その吾妻菊とは、何と書きますえ。
佐國　ハテ、知れた事、吾妻菊。
小槇　アノ、吾妻菊……オ、、嬉し。
ト思ひ入れある。佐國、花壇に余念なう。
佐國　花は盛り、月は隈なきを見るものかは。雨に向ひて
月を戀ひ、垂れ籠めて春の行くへ知らぬも猶哀れに情深
し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ、見
所多かれ、と吉田兼好が筆すさみ。この佐國も、四季の
草花に心を寄せ、喜びも愁ひも又楽しみも、ナウ、小槇
どの。
小槇　アノ、花の心が花に惚れ、心の花に愛で、母様や兄
様が、なんぼう叱らしやんしても、此やうに枯れ葉を透
かしたり、若葉を撮んで、苗を植ゑ、また實を防ぎて、
ナア。
ト此うち、蝶二つ飛んで来て、佐國、小槇が袖へとま
る。兩人、ヂッとしたこなしにて、袖を抱えて、一緒
に寄り添ふ。
小槇　申し、コレ、こちの人。

佐國　花飛び蝶驚ろけど、人憂へずと云ふに、コレ、此やうに
小槙　お前の袖なは男蝶。
佐國　こなたの袖なは女蝶。
小槙　誰れ憚からず、番ひの蝶々。
佐國　夕には草に伏し、朝には花に樂しみ
小槙　露に養ふ
佐國　情の床。
　ト思ひ入れあつて、兩人、一時に蝶を放してやる。二つの蝶、花壇に飛び遊ぶ。小槙これを見て、アツと
小槙　アレ、羨ましい。女夫連れ立ち花に遊ぶ睦まじさ。わたしとお前は、人目を忍ぶ切ない戀路。
佐國　コレ、こなたの兄様は、御浪人なれど、前は此方の親仁様と、互ひに劣らぬ同じ家中。
小槙　サア、お前の父御さんと、死なしやんしたわたしが父さんと、世にある時のいさかひで、いま浪人なされて
佐國　互ひにこの大和の住ひ、やうやう道は二三町隔つれど
小槙　心は解けぬ前の遺恨で、兄様も。

佐國　親仁様と不和の中。それにこなたと私しは。
小槙　サア、それぢやに依つて、あの蝶々になりたうござんすわいなア。
　トしをれる。佐國も思ひ入れあつて、氣を替へ
佐國　小槙どの、大切なお觸れによつて、昨夜から親仁様の名代に、代官所へ行た戻りがけに、約束した雛様を持つて來たが、つい今まで思はぬ隙入り。さぞ内では尋ねてござるであらう。また長居してその間に。
小槙　イヽエ、大事でござんせぬ。母様の寺參りは、大抵隙の入る事ぢやござんせぬ程に、もそつと遊んで下さんせいなア。
佐國　それでも、阿漕が浦に引く網も、度重なれば顯はれぬうちに、ちやつと。
　ト羽織袴を取上げると、小槙、ちやつと取つて
小槙　イエ、わたしや阿漕でも明石でも、去なします事は嫌ぢやわいなア。
佐國　これは又無理な事を。ドレ、その袴や羽織を。
　ト取らうとする。
小槙　これ渡したら、お前は去んでぢやに依つて、滅多に渡す事はなりませぬわいなア。

佐國　ハテ、また今度の寺參りの時には、ゆるりつと。
ト取らうとするを、小槇、イヤ〱と逃げ歩く。奥より藤六、お梅、出て來て
うめ　小槇さま、何をほたえさしやんすぞいなア。
小槇　ほたえるのぢやござんせぬ。コレ、藤六、佐國さまが行かうと云うてぢやわいの。
藤六　イヤ、そりやならぬ。佐國さまは去なされぬぞ、去なされぬぞ。
佐國　コレ、藤六どの、わしが居るうち、ひよつと阿母樣が。
藤六　イヤ〱、かみ樣が戻らしやんす刻限にはまだ早い。おれが吞み込んで、二人を逢はすその賃に、雛さんの供へ物は、みなわしが片附ける約束。それをまだ喰ひ盡さぬうちに、お前が去なんしては、おれが食留めに遭うてはならぬわいの。
佐國　ハテ、其方までが其やうに。
うめ　申し、あなたも、もちつとお遊びなされて、ナア、小槇さま。
小槇　さうでござんす。これからは又、雛さまの前で、酒事を。

佐國　イヤ〱、さうしては爲にならぬ。内へ心が急けば、此まゝ去なうわいの。
ト行かうとするを
小槇　ソレ、ちやつと留めてたも。
藤六　合點ぢや。
ト表の戸を閉し、掛金を掛ける。
佐國　イヤ、去なねばならぬわいの。
小槇　マア〱、待たんしやんせいなア。
佐國　ハテ、放して下され。
ト佐國、行かうとするを、三人寄つて、留める事よろしく揉み合ふ。此うち、小槇が母檜垣、向より杖突き、戻つて來て、門口へ來て、戸を叩き
檜垣　コレ〱、娘、いま下向しました。藤六は居ぬか。コリヤ、戻つたぞよ、〱。
ト内にて
四人　エ。
ト惘り
藤六　ソリヤコソナ。
ト仰山に云ふ。これにて皆々うろたへ、佐國をどうせうと羽織袴を雛の毛氈の下へ隠す。檜垣、頻りに叩く。

藤六、戸を開けて
かみさん、戻らんしたか。
ト大きな聲で云ふ。
檜垣　阿房め、惘りするわいやい。
藤六　おれも惘りしたわいな。
うめ　かみ様、いま下向なされたかえ。
檜垣　オヽ、お梅どの、
ト小槇を見る。うつとりと花壇の方を眺めて居る。
コレ、娘、娘、コレ娘。
小槇　エヽ。
ト惘りして
なんぢやぞいなア。
ト仰山に、檜垣が側へ行く。
檜垣　これはしたり、惘りさしやる程にの。
小槇　お前もマア滅相な。コレ、小槇と云はしやんすに依つて、惘りするわいなア。
檜垣　無理な事云やるわいの。今日はわしが寺へ參つて、内もさぞ淋しかろ、それで待ち兼ねて居やつたであらうなア。
小槇　ナンノイナア。待つ時は遲くて、面奴、待たぬ時には早う戻らしやんす程にの。
ト始終花壇の方を見て、上の空に云ふ。
檜垣　あの子とした事が、何を云やるやら、
ト云ひ／＼、二重舞臺へ上がり、不思議さうに雛を見て
コレ、娘、見れば此方のうちに不相應な、結構な御殿と云ひ、内裏雛、寺參りとするまで無かつたが、こりやマア、どうして求めやつたぞいの。
小槇　エヽ、それはな。
藤六　コレ、そりや最前、佐さまがお前に。
小槇　イヽエイナア、母様、あの雛様は、わたしが好いた雛さまぢやに依つて、それで餘所々々から貰ひましたわいなア。
檜垣　そんなら、この雛は餘所から。
小槇　アイ。
檜垣　ハテ、結構な物を貰やつたなう。
トこなしある所へ、向うより砂屋權兵衞、米屋傳兵衞、道具屋德兵衞、前幕の形にて
權兵　マア、ようござる。なんでもおれが、一せりふせにやなりませぬ。

傳兵　さうぢや。こなたがせいらくせにや、どうも濟まぬわいの／＼。

ト　わや／＼云ひ／＼出て、本舞臺へ來て

權兵　要助どのは、内に居やつしやるか。

權傳　オヽ、要助に逢はう／＼。

ト　皆々、内に入る。

藤六　ソリヤコソ、來をつたぞ。例の鬼どもがせがみに來をつた／＼。

檜垣　コリヤ／＼、藤六。其やうに喧ましう云はずと、覺えのある主人のお家。きやつと斷わりを云へやい。

藤六　合點ぢや。この所はいつものお定まり、旦那樣は留守ぢや／＼。

權兵　イヤ／＼、留守では濟まぬ。コレ、婆樣、これまで家賃も取らず、この家主がまた呑み込んで、餘の借錢も挨拶して居るわいの。

傳兵　イヤ、こなたの挨拶は、もう上げて、直相對ぢや。これまで露命を繋いで置いた、黒米か何ぞのやうに、白米の代を踏むとは、シヤリとては胴慾ぢやわいの。

德兵　おれも要助に賣つた道具代、取らにや置かぬぞ。

權兵　挨拶上げて、家賃のせいらくするのぢやぞ。

ト　口々に喧ましく云ふ。小槇、佐國が居る心にて、いろいろ心遣ひ。

小槇　申し／＼、お前樣方たも、モウ其やうに仰しやらずと、早う去んで下さんせいなア。

三人　イヤ／＼、金取らにや、去なんぞ／＼。

小槇　エヽ、コレイナア、人の内には誰れが來て居るやら知りもせいで、そんな大きな聲で、云うて下さんすないなア。

檜垣　成る程、あなた方が皆な御尤もでござりますが、兄もどうぞ有りつきがござりましたらと思ひ／＼、ツイ延引いたしまする。

德兵　イヤ、一體変な要助は、よい恰幅をしながら、どこの屋敷へお目見得するの、イヤ有りつくのと云うては、此方の道具を買ひかゝり、嬉しやこりや借錢を拂ふさうなと思へば、行く先き／＼の屋敷を、ものゝ三日と勤めずに失敗つて戻る。

權兵　昨日も昨日で、おいらも錢の取れる事ならと、供になつて行たところが、道から變替へ、亂騒ぎぢや。

傳兵　今日は三月の節季、否でも應でも取らにや措かぬぞ。

德兵　コレ、二人の衆、これから云ひ合せた通り、要助も内に居ず、金も出來ずば、玆な諸道具を、ナ、合點か。
權傳　オヽ、引ツ外して持つて去ならわい。
藤六　イヤ、待たうぞ。浪人しても要助、この茅屋は、アア、何とやら、ォヽ、武士の常念佛、ではない城郭ぢやぞ。
權兵　なに吐かすやら。阿房めに構はずと
德兵　片ツ端から引ツ外して
三人　持つて去ならわい。
ト藤六を突き退け、行かうとするを
檜垣　コレ、待つて下さりませ。
三人　エヽ、面倒な。
ト引き退けるを、コレ、と、お梅、藤六、小槇も留めるを、聞かずに、皆々立廻り。よき所にて、佐國、納戸口より走り出て、三人を突き廻し、小槇、檜垣を圍ふ。
三人　ヤア、こなたは大庄屋の息子どの。
小槇　ほんに、お恥かしいこの仕儀。
檜垣　娘、あなたは。
佐國　イヤ、大事ない者でござります。

檜垣　それでも。
佐國　ハテ、差當つた御難儀を見兼ねて、いま挨拶に出ましてござります。
檜垣　ムウ。
ト氣味合ひあり
權兵　イヤ、申し。なんぼうお前の御挨拶でも、取る物を取らねば、あの衆達も私しも。
傳德　オヽ、聞きませぬぞ。
佐國　コレ、こなさんの追ひかゝり濟しさへすりや、云ひ分は無いぢやごんせぬか。
權兵　成る程、金さへ受取りや云ひ分はござりませぬ。
傳德　あなたがその金を。
佐國　濟します。
三人　エヽ。
佐國　藤六どの、ちよつと硯を。
藤六　オットショ
ト取つて來て、佐國が前に置く。佐國、サラサラと一札を書き
佐國　ソレ、三人の衆。
ト一札を渡す。權兵衞、受取つて、三人とも一緒に見

て

三人　こりや、あなたの振り手形。

佐國　サア、いま金渡したうても、爰は他所の内の事。追ッつけ算用書き持つて、此方の内へ取りにごんせ。

權兵　イヤモツ、あなたの事なら、なんの違ひがござりませう。

傳兵　この大和の國中で、恐らく一と云つて二とない御身上。

德兵　結構な御挨拶人で、爰な内の仕合せ。

權傳　イヤ、おいらも仕合せぢや。

佐國　コレ、その一札を渡す上は、爰な内に云ひ分はないの。

三人　なんのお前。

藤六　ハテ、身上のよい者は、何を云つても請けがよい。

佐國　云ひ分なくば早う去んで、後に此方の内へ。

三人　金を受取りに參りましよ。

小槇　ア、、コレ申し、それではお前。

佐國　ハテ、何にも構ひはない。

三人　さらばお暇申しませう。

ト三人ながら喜び、手形を持つて、捨ぜりふ云ひ〳〵、向うへ走り入る。檜垣、こなしあつて、佐國が側へ行つて

檜垣　あなたはこれまで、見請けましたやうに存じますれど、年寄りの事、しつかりとも覺えませぬが、思ひがけない今の難儀、お救ひなされて下さりますとは、忝なう存じますれど、いつの間に此方の内へ、何の用があつてお出でなされた事やら。マア、あなたは、どなたでござりますえ。

佐國　イヤ、わしは。

トうぢ〳〵、云ひ兼ねる。

藤六　コレ、ナア、かみさま、このお方はナ。

ト云はうとするな

小槇　ア、、コレ、イヤ、母樣、このお方は、アノ、わたしがソレ、お近附きのお方でござんすが、此方の内に居やんしたは、オ、、ソレ、アノ、牡丹の根を預けてくれいて、ナア。

佐國　エ、、成る程、私しも花を好みますゆゑ、小槇どの仰しやる通り、牡丹の根を御無心申しまして、それで内方の花壇を拜見。

檜垣　エ、、アノ、此方の花壇を。

ト大きに恟りする。佐國もこなしあつて

佐國　イエ〳〵、まだ花壇は拜見いたしませぬ所に、思ひがけない今の仕儀。それでちよつと。

小槇　ひよんな所に居やしやんして、いろ〳〵の事を聞かしまして、又お世話になりましたわいなア。

檜垣　アノ、娘、そんならアノ雛樣も、大方あなたに。

小槇　アイ、大抵氣の毒な事ぢやござんせぬわいなア。

藤六　小槇さまには、なんでも持つて來てやつてぢやぞえ。

檜垣　これは、マア〳〵、なんとお禮を申し上げませうやら、今までとんと存じませぬ事とて。

佐國　イヤ、何にもお禮仰しやる事はござりませぬ。

檜垣　イヤ、きつと有り難う存じます。さうして、あなたそのお所は。

佐國　エ。ツイ、近所の者でござります。

檜垣　アノ、御近所のあなたが、娘の小槇に。

佐小　エ、。

トこなし。檜垣も思ひ入れあつて

檜垣　ホ、、。忝なう存じまする。お禮は追つて、

ト小槇の方へかけて

わざとお名もお所もお尋ね申しませぬが、この後とても、兄要助や、この母が、必らず目にかゝらぬやうに、牡丹の根を貰ひにお出でなされませ。

佐國　そりや、忝なう存じまする。

トこなしあつて

私しも今の事で、内へ歸つて聞かねばなりませぬ。阿母樣、もうお暇申しませう。

小槇　そんなら、もうお前は去なしやんすか。コレ、申し。

ト側へ行つて、手を取ると、振り切つて、檜垣を敎へる。小槇、それでも、と云ふやうな氣味合ひ、兩人よろしくあつて、フト、檜垣と顏見合はせ

檜垣　年寄れば、いかう目が霞んで惡いわいの。

トこなしある。小槇を、お梅、藤六、引き分ける。

佐國　さらばお暇申しませう。

ト合ひ方になり、佐國、門口へ出ると、向うより、要助、小蒔の形にて、代官、家來に取卷かれて出て、戸屋際にて

代官　いよ〳〵其方が申した通り、刻限まで出口を固めて相待ち居るぞよ。

要助　浪人いたしても以前は武士。相違はござりませぬ。
代官　出かした。吉左右相待ち居る。家来参れ。
ト要助と入れ替り、家来引連れ、代官、戸屋へ入る。本舞臺にて、佐國、懐中より、小柄を出して見て居る。要助、代官の入つた後見送り居る。矢張り、花道と本舞臺にて
佐國　最前思はず花壇へ忍び、裏へ廻つた所に、思ひ掛けなう。
トこなしあつて
その時拾うたこの小柄。こりやコレ慥かに。
ト思ひ入れあつて
ムウ、そんなら。
ト思案しい／＼、花道へ行きかける。要助も、思案しい／＼本舞臺へ来る。此うち始終合ひ方。また本舞臺には、小槇、檜垣に、雛さまの道具、一つ一つ見せてゐるうち、佐國、要助、ヂッと花道にて行き合ひ、佐國、ちやつと小柄を隠す。要助も、ちやつと袖にて顔隠す。互ひにこなしあつて、背中同志擦れ違ひに入れ替る。この時、フト顔見合せ、要助苦笑ひ。佐國、向うへツイと走り入る。要助、思ひ入れあつて、追ひかけようとして、ツカ／＼と後へ戻つて、内へ入る。
うめ　ヤア、要助さま。
藤六　旦那様。
檜垣　なんぢや、兄が戻つたか。
小槇　ほんに、兄様。
檜垣　要助、其方のその形は。
要助　様子は昨日、お梅どのに手紙にて申し越しました通り。
檜垣　まだ有りつきはござらぬか。
要助　左様でござりまする。が、申し、母者人、妹。たつた今、此方の内から出て去んだ人は。
小槇　エヽ、ひよんな。お前、逢はしやんしたかいなア。
要助　ヤア。
小槇　イヽエ、なんでもござんせぬ。
檜垣　コレ／＼、要助や。わしや其方の戻りを待ち兼ねて居ましたわいの。
藤六　アノナ、旦那様。おりや小槇さまの事は、何にも知らぬぞえ。
要助　なにを、阿房めが。
ト睨む。藤六、こなしあつて、後へヂッと寄る。

イヤ、母者人、私しも早う歸つて、お前樣にお目にかゝらうと心は急きましたなれど、思はぬ用事に、今まで引きつけられ、やう／＼只今。

ト奧口たゝ伸び上がり、そこら中を眺め、小槇こなしあり

小槇　こちや雛樣を祭つたけれど、お前には見しやせぬわえ。

ト振り袖にて圍ふ。要助も思ひ入れあつて

要助　申し、母者人、兎角用心が第一の、〆りが肝心。共に御油斷なされまするなえ。

檜垣　そりや、氣遣ひさつしやるな。隨分萬事に心をつけて居ますわいの。

小槇　エヽ、そんならこれから、寺參りもさしやんせぬかえ。

要助　盜人の暇はあれど、守り手の暇はなし。

藤六　蔭裏の豆もはじけ時。

うめ　コレ、何も云はしやんすな。

檜垣　イヤ、要助、この母が云はねばならぬ大事の事がある。必らず悃りしてたもんなや。

要助　エヽ。

ト小槇、ハツと思ひ入れ。

檜垣　併し又、喜ばす事があるわいの。

ト小槇、嬉しきこなし

要助　母者人、左樣仰しやれば、私しもちつとあなたに、申し上げまする事がござりまする。必らず悃りなされまするなえ。

檜垣　ヤ。

ト小槇、こなしある。藤六、佐國が事知れた、と云ふ仕方。お梅も、大事ないかと心遣ひ。小槇、いろ／＼思ひ入れある。

要助　イヤ、又、御安堵なされまする事もござりまするで。

ト此うち、小槇も、思案定めて

小槇　申し、母樣。

檜垣　ヤ。

小槇　兄樣、私しもお前方に、云はねばならぬ事がござんすが、必らず悃りして下さんすなえ。

要助　妹、其方も。

小槇　アイ。

要助　ムウ。

藤六　コレ、お梅さま、おりやお前に云ふ事がある。ソレ、
　悧りさんすなえ。
うめ　エヽ、何を、同じやうに。
檜垣　イヤ、お梅どの、藤六を連れて、ちいとの間奥へ。
うめ　畏まりました。サア、藤六どの。
藤六　さうぢや。悧りづくしで尻こそばい。ちやつと奥へ
　行かうわいの。
うめ　ハテ、ござんせいなア。
　ト　お梅、藤六を連れて奥へ入る。
檜垣　コレ、邪魔は拂うた。サア、娘。
要助　母者人。
小槙　お前方も。
要助　悧りすなとある
小槙　アノ
要助　して
檜垣　その
三人　樣子と云ふは。
　ト　合ひ方になり、各々、木鋏み、鉈、小刀を持つて、
　三人ながら花壇の側へ云つて、小槙は山吹、要助は菖
　蒲、檜垣は白菊、面々に切つて携へ、元の所へ直り、
　檜垣、立ち身、小槙、要助、左右に座して
小要　コレ。
　ト　兩方より、山吹と、菖蒲を見せる。
檜垣　山吹の、花色衣、主や誰れ。
小槙　問へど答へず、口なしにして。
　ト　要助が方へ。
檜垣　五月雨に、澤邊の眞菰水越えて
要助　いづれ菖蒲と引きぞ煩らふ。
　ト　檜垣、右の白菊見せて
檜垣　心あてに、折らばや折らん初霜の
要助　ムウ、置きまどはせる
小槙　白菊の花。
檜垣　サア、花もの云はねども母が心は、園生に植ゑても
　隱れなき。ナ、サア、其方は何にもまだ白菊。
要助　イヤ、菖蒲に紛ふ杜若、似たりや〳〵の御心底。
小槙　アノナア、垣根に育つ春草も、獨りは立たぬとやら
　云へば、私しもどうぞ母樣や兄樣のお庇で、ソレ、最前
　のお方に、思ひの山吹でござんすわいなア。
檜垣　そんなら親子。
要助　兄弟。

小槇　心の謎は
要助　大方承知。
小槇　アノ、ほんまかえ。
檜垣　母も合點。
小槇　オヽ、嬉し。
要助　妹、何が嬉しい。
小槇　サイナア、わたしが願ひを、得心ぢやござんせぬかいなア。
要助　なんの願ひを。
小槇　エヽ。
要助　扣へて居い。
小槇　アイ。
　ト こなしある。
檜垣　悴、越野莞左衛門。
要助　エヽ。
檜垣　イヤ、本名を呼ぶからは、元の侍ひ、改めてこの母が、其方に頼みたい事があるわいの。
要助　ムウ、拙者が本名、越野莞左衛門とお呼びなされて、改まつたお頼みとはな。
檜垣　コレ。

　ト小槇が手を取つて、要助が側へやり
檜垣　その妹の小槇を嫁らしたい程に、其方、どうぞ連れて行つてたもらぬか。
要助　ハイ、妹を嫁らしたいとは、そりや何處へ。
檜垣　この村續きの大庄屋、軍次兵衛どのの所へ連れて行て、佐國と祝言さして下されいの。
要助　エ、アノ、私しに。
檜垣　サ、過ぎ行かれた越野官太夫どのと、以前は朋輩、浪人の砌りより互ひに確執、その親の遺恨ある軍次兵衛どのへ、妹を連れて行くは、定めて嫌であらう。心外にも思やらうが、コレ、そこが母が頼みぢや。祝言さしてやつてたもいなう。
要助　ムウ。
　ト思ひ入れある。此うち、小槇、無性に喜び
小槇　申し、母樣、そりやお前、眞實の事でござんすかえ。
檜垣　ハテ、なんの僞はりに兄を頼まうぞいの。
小槇　アイ〳〵、ホンニナア、さうとは知らず、今まで母樣にも兄樣にも、隱して居ましてござんすけれど、父樣の遺恨とやらで、兄樣とも仲の惡い軍次兵衛さまの事な

れば、どうで思ふやうにはなるまい、ハテ、ならぬ時にはなんのその、不孝な思案に極めて居ましてござんすが、堪えて下さんせ。申し、兄さん、お前もどうぞ得心して、連れて行つて下さんせ。あんまり〳〵、思ひがけない事で、今まで案じた心の百倍、モウ、嬉しうて〳〵嬉し涙がこぼれますわいなア。

ト泣く。要助、こなしあつて

要助　イヤ、申し、母者人。成る程お頼みの通り、妹を連れて参りませうが、大庄屋の軍次兵衛は、妹を嫁に取らうと、得心して居りまするかな。

檜垣　イヤ、得心ではござらぬわいの。

要助　すりや、向うに得心も致さぬ所へ。

檜垣　サ、連れて行つて、頼んで下され。

要助　アノ、遺恨のある私しに。

檜垣　無念にあらう。口惜しからうが、軍次兵衛に腰折り屈めて、是非とも佐國と祝言さして下されいなう。

要助　現在あなたのお頼み、畏まりましたと申し上げたいが、この儀ばかりは。

檜垣　コレ、ならぬとあれば、母は生きては居ませぬぞや。

要助　ムウ。さてはお命に替へても。

檜垣　妹が可愛い。末子は血の餘り、いづれに愚かはなけれども、分けて小槇は

ト小槇が顔を見て、要助へかけ、思ひ入れあつて

サ、不便でござるわいの。

要助　すりや、いよ〳〵。

檜垣　わしも武士の妻。

要助　ムウ。如何にも承知仕りました。心よからぬ軍次兵衛、武士の性根はどこへやら、只今にては貪慾無法。人非人とも存じて居ります奴に、妹を連れて参り、只管に嫁に貰うてもらひませうが、申し、万々一如何やうに申しても、軍次兵衛が聞入れませぬその時には、妹、そちや何とする。

ト小槇、思ひ入れあつて、また山吹を取り上げ

小槇　私しが心は、佐國さまに添ひたいゆゑ、例へつれない男御でも、お詫び申して七重八重、花は咲けども山吹の。ナ、得心ない時には、この身一つだになきぞ悲しき。覺悟は極めて居りますわいなア。

要助　して、軍次兵衛が承知いたさば。

小槇　コレ、申し。

ト菊と菖蒲を取上げ
吉左右菊の齡を延べる翁草、その時母樣にも、喜ばしやんすかほよ花。
要助　また兄が賴んで得心せずば。
ト山吹を見て
小槇　この山吹の、身は一つだになきぞかなしき。……なんとこれでは、兄さん。
要助　出かした、妹。
檜垣　三種の花が、賴みの印。
小槇　よい幸先にこの生け筒。
ト三色ともに、花活へ活ける。
檜垣　繡入りの晴れ着は白小袖。
要助　拙者が形も。
檜垣　武士の嗜なみ。
要助　用意に所持ずる、無紋の上下。
ト唄になる。檜垣、要助、柳行李を取出して、檜垣は小槇に白無垢を着替へさす。要助も、白無垢、麻上下になる。よろしく、身拵らへあると
要助　サ、用意よくば。
小槇　サ、二人がその形、道の間は。

要助　成る程。
ト小槇に上着を着せる。檜垣、要助に上張りを着せようとする。小槇、要助が額を見て、思ひ入れあつて、毛氈の下より、最前の佐國が羽織袴を出して渡す。要助取つて、幸ひと云ふ心にて、白無垢の上へ羽織を着て、袴をつけて、花活を持つて
要助　サア、妹。
小槇　母樣、もう參りますぞえ。
檜垣　コレ、必らず、身の一つだにを忘れまいぞや。
小槇　アイ、そりや合點でござんす。
ト檜垣、思ひ入れあつて、大小を取つて來て
檜垣　勘左衞門、この大小は父御の差し料、性に合はぬと其方にこれまで讓らなんだが、腰が明いて見苦しい。
ト差出す。ハツと、要助、受取り、大小を差す。
要助　今こそ誠に今生のお暇乞ひ。妹が顏を。
ト小槇を引廻し、檜垣へ顏を見せようとする。檜垣、泣かうとして、ちやつと脇見する。
ア、浮世ぢやな。
ト唄になり、要助、小槇を連れ、思ひ入れあつて、向うへ入る。檜垣、後見送り、この見得にて、チョン〱

にて。

道具返し

造り物、三間の二重舞臺、見付け、唐紙よろしく、世話襖、東西落間、後へ寄つた障子屋體、橋がゝり、柴垣、枝折り門、臆病口より舞臺前まで、段々上りの花壇。右の二重舞臺に、天秤直し、銀箱、大分積み重ね、帳面、硯箱など取散らし、右二重舞臺に、軍次兵衛、紙子仕立てを着し、算盤を振り上げ、佐國を引きつけ、叩かうとして居る。手代大勢、子供大勢、下女、腰元、皆々、軍次兵衛を留めて居る。下の方に、砂屋權兵衛、米屋傳兵衛、道具屋德兵衛、矢張り借錢乞ひにて、佐國に金受取らうと詰めかけて居る。この見得にて、道具引き出し、よろしくとめる。

軍次　ヤイ、皆の奴等、放し居らぬか。憎くい悴め、存分にせにや置かぬぞ。

皆々　左樣仰しやらずと、マア〳〵、お待ちなされませ。

權兵　申し、佐國さま。こりやどうでござります。ほんのあなたのお顏づくで、待ちましたのでござりまするが

傳兵　約束のお銀を下されずば、最前の振り手形は反古同然。

德兵　矢ツ張り向うへ行て

三人　せいらく致しませうかな。

佐國　ハテ、一旦わしが振り手形まで書いて、請合つた事違ひはせぬ。銀渡します程に、マア〳〵、待つて下され。

軍次　ヤイ〳〵、何の爲におのれは、大枚の五十兩と云ふ銀を、彼奴等に渡さうと云ふ手形を書いてやつたのぢや常から實體なおのれ、よもや色遣ひではあるまい、譯があらう。サ、その譯云へ〳〵。

ト急き切つて云ふを

手代　申し〳〵、旦那。其やうに氣を揉ますと、お心をお鎭めなされて、若旦那樣に樣子をとつくりと

皆々　お問ひなされませいなア。

軍次　何を吐かすぞいやい。

皆々　ぢやと申しましても。

軍次　エヽ、おのれらまでが一つになつて、悴に肩持つのぢやなア。ヤイ、コリヤ、今日、糠の入つた茶粥を喰はして置き、親方の事は思ひさらさぬのぢやな。

皆々　イヤ、左様では。
軍次　すッ込んで居らう。
皆々　ハイ……。
　ト後へ寄る。
軍次　コリヤ、忰め。おりや生れついて、人に物遣る事はきつい嫌ひぢや。オヽ、出す事は袖口から手も出さぬ。内に大勢人を使うても、畑へやつたり歩銀の催促、その間には銭差し作らす。女どもの仕事は、飯食はす時と、どぶさる間を休まし、月夜になればだ灯火なしに夜仕事さす。人は愚か何でもかでも、二色三色程に使はねば銀は貯らぬ。先づ正月の飾りが釣瓶繩、松山草は焚きつけ、七月の麻殻で壁下地、砂糖桶に柄を附けて杓にする。杓子は定木、こりやお定まりぢや。猫の代りにゐのころ飼ひ入れて、鼠を取らすと盗人の用心、また寒い時分は、裾に寝さして炬燵の代り。質を取らねば金を貸さず、塵紙一枚鼻紙に使はす、一文の銭を百萬に割るやうにして、オヽ、それよりは、大用と小用とを別々にするわいやい。斯うして銀を貯めて、貸しつけては利銀を取り、田地を買うては作物取り、万事に心を附けて取り込む事ばつかりを思うてゐる。それを五十兩の銀を、あの三人の奴等に渡すとは、なんの事ぢや。
佐國　イヤ／＼、申し、親仁様、其やうに御立腹なされますな。
軍次　極道め。それが腹が立たいで、なんに腹の立つもので。
佐國　ハテ、私しぢやと申してお前の忰、なんの大切ない金銀を麁末に遣ひましよ。ちつと求めました品がござります。サア、五十兩に買うて置きますと、慥かに千兩か。
軍次　ヤ。
佐國　二千兩か、捨賣りにしてもキッと値打ちのある一品、それを僅か五十兩で買ひましたのでござりますわいなう。
軍次　ムウ、こりやどうやら耳寄りなが。
佐國　サア、それぢやに依つて脇他へ遣つてはならぬと存じまして、コレ、この振り手形、金は内へ取りに來て下され、早速渡さうと固い約束。それであの衆達が。
軍次　して、その買うた品物は、どこにある。
佐國　私しが爰に所持して居ります。
軍次　ドレ、それをちよつと見よう。

佐國　成る程、お目に懸けいで何と致しませう。が、マア、あの衆達に銀をお遣りなされて下さりませねば、私しの顏が、イヤ、顏よりは、マヽ、値賣りの出來る彼の品を、戻さねばなりませぬ。

軍次　ムウ、五十兩出して千兩にもなる事なら、そりや、事に依つたら、銀を出すまいものでもないが。

佐國　他人ではござりませぬ。現在の忰。なんのお前に覺束ない事を申しませう。キツと千兩にはなりまするわいな。

軍次　そんなら、マア、十兩位は。

佐國　イヤ、五十兩。耳を揃へて渡さねばなりませぬ。申し、其やうに仰しらずと、ツイ、五十兩を、ナ、サア、大庄屋もしてござるお身ではござりまぬぬかいなう。

軍次　なんぼ庄屋ぢやと云うて、銀出す事は。コリヤ、よう思うても見い。五十兩貸しつけると、月に十兩で三兩づゝの利を取る。それにほつかりとは、どうも出し憎い。

佐國　ようござります。お得心がなけりや、ハテ、千兩になる品なれど、返してしまへば濟みまするが、エヽ、斯う、云うても見す／＼千兩になるものを。

軍次　コリヤ、忰、いつそ斯うしてはどうぢや。マア、千兩にしてから、五十兩の銀を後で渡す事は。

佐國　イエ、申し、滅相な、そんな巧い事が出來りや、アレ、あの三人の衆が、ナ、コレ、サア儲けるであらうがの。サア／＼、そこを私しが振り手形、拔き差しならぬやうに彼の一品を、買ひ取つて置きましたのでござります。サア、ちやつと銀を出して、お遣りなさりませ。

軍次　アノ、千兩になるに違ひはないかよ。

佐國　ならいでなんと致しませう。私しも相應に慾は存じて居りますわいの。

軍次　ソリヤ、ハヤ、現在血を分けた親子の仲、よもやとは思へど。千兩になるに違ひがなければよいけれど。

佐國　最前申しまする事がお氣に入らずは、いつそあの衆達に、彼の一品を。

軍次　サ、戻さすのもどうやら惜しいものなり。

佐國　そんならお金を。

軍次　ぢやと云つて、それも。

佐國　エヽ、埒の明かぬ。いつそ返しませう。コレ、三人の衆、銀が渡らぬ、ナ、渡らねばちやつと、ナ。

三人　先へ去て取りませうか。

佐國　エヽ、さうではない。ハテ、五十兩で千兩にもなる

品を、戻さねばならぬ。ナ。サア、戻したら、大方捨賣りにしても、九百五十兩はこなた衆が儲けるのであらうの。

三人　イヤ、そんな事より、彼の借錢の。

佐國　コレ、借錢しても買ひたいか。イヤ、さうはならぬわいの。わしが儲ける。オヽ、五十兩出して千兩にも賣る一品。

ト此うち、軍次兵衛、御籤取つたり、福徳の疊算を置いたり、銀を出さうか出すまいかの、心にて、さまざまこなしあり

軍次　悴、代物は持つて居るな。

佐國　ハテ、爰にござりますれば、今お目に懸けたら、ひよつとあの衆達が、五十兩が千兩になる事ぢやに依つて、もし惜しいと思つたら、此方へモウ賣りませぬ。それでは儲けられませぬぢやに依つて、こりや、後であなたに密かにお目に懸けまする。

軍次　ウム、そこもあるわいの。

佐國　サア、それぢやに依つて。

軍次　よいワ、せう事がない。五十兩渡す。

佐國　エ、。

軍次　その代りに、もし千兩にならぬ時は、その算用は、われにするぞよ。

佐國　そりや、如何やうとも。マア、早う銀をお渡しなされて下さりませ。

軍次　エヽ、トツト、富の札を買ふやうなものなれど、悴だけに違ひもあるまい。

ト云ひ／＼、銀を出し

ソレ、五十兩。

ト渡さうとして、惜しさうに

われが請合ひぢやな。

佐國　キツと千兩に致しまする。

軍次　違ひないかよ。

トまた銀を、引ツ込めようとする。

佐國　なんの違ひがござりませう。

ト銀を取つて

コレ、約束の五十兩渡す程に、ちやつと持つて去なしやれ。

ト銀を三人に渡す。

權兵　ハイ／＼、嬉しや埒が明きました。これでもあちらへは。

佐國　ハテ、なんにも云はずと、早う。

徳兵　ハイ〱、受取りは、込めて一緒にしてござります。

三人　忝なう存じます。

ト佐國に渡し、橋がゝりへ入る。佐國、しかじかあるうち

軍次　コリヤ〱、悴。三人の奴等に銀渡したら、もうよい。サ、われが買うた代物を早う。

佐國　成る程、お目に懸けませう。

軍次　ちやつと見せてくれいやい。

佐國　千兩にもなれば大切な一品。コレ、手代どもも女どもも、皆た奥へ。

女皆　ハイ〱、マア、親旦那様の御機嫌が直つて喜びます。

手代　千兩になると云ふ話で、強慾な親旦那様が、ほつかりと五十兩。

同　こりや、水盤から大蛇が出たやうな。

軍次　何吐かす。キリ〱うせう。

皆々　ハイ、、、、。

ト皆々奥へ入り、静かになる。合ひ方になり、軍次兵衛、こなしあつて

軍次　サア悴、今の代物は。

佐國　即ちこれでござります。

ト懐中より、返し前の小柄を出す。軍次兵衛、取つて、ギヨッとして

軍次　アノ、この小柄を。

佐國　マア、とつくりと、御覧じませ。

軍次　尤も、金の無垢ぢやが。

ト云ひ〱、見て

毛彫りは、陰と陽の紋盡し。

佐國　二重輪の中に相と云ふ字の古文字。

軍次　こりや、コレ、慥かに。

佐國　あなたの古主、北畠の若殿、靱負之介さまの御定紋、お差し料のその小柄、なんと覚えがござりまするか。

軍次　アノ、これが、千兩になるか。

佐國　千兩は愚かな事、萬々兩にも慥かになります。

軍次　そりや、どうして。

佐國　イヤサ、武士の忠義は萬代不易。朽ちても朽ちぬ黄金より、世の人貴み、有り難う存じますぞえ。

軍次　イヤ、軍次兵衛は百姓大庄屋、忠義立てより、矢

ツ張り金が、おりや有り難い。

佐國　エ、、お情ない、親仁様。

ト胸倉取つて、下に置く。

軍次　コリヤ〳〵、情ないとはわれが事。エ、、着るものが皺になる、襟が損ねるわいやい。

ト振り離す。

佐國　ソレ、申し、僅かの損ねをおいとひなされて、萬劫末代、祖先への恥辱、お名の損ねにはお心が付きませぬか。

軍次　ヤ。

佐國　サ、北畠の御家老、近藤軍次兵衛と云はれては、一家中に頭を上ぐる者もなき家筋。お過ぎなされし母者人に、なにかの様子を、承りましたが、私しが産れし時、勿體なくも大殿様が烏帽子親にて、佐國と云ふ名乘りを下され、幼ない時より呼び名は呼ばず、今この國へ參つても、只大和の佐國々々と、百姓に不相應な名を呼ばるゝも殿様の御恩。その御恩を忘れて、あなたには邪しま非道、我が召使ひ婢女に手を附け、懐胎せしを幸ひに、邪智を以てその女を御前へ差上げ、現在の我が子を殿様のお胤と偽はつて、育て上げたる雷八どの、末ではお家を押領せんとの悪事の段々、人は知らぬと思うてござつても、天知る地知ると、相家老越野官太夫どの、それと悟つて、何氣なう雷八どのは、津の國和田の家へ養子、又こなたには虚妄の筋に依つて、既に縛り首に極まりしを、殿様のお情にて命助かり、お國を追放、それゆゑ今の身の上。世にある時にも我が悪事は思はず、越野氏へ遺恨を差挾み、兩家共に浪人して、同所に住みながら、前の不仲に遺恨の様子。また養子に出たるこなたの胤、この佐國が爲には腹替りの兄、雷八どのの企みにて、様子を聞けば主計さまは御最期、若殿様には桃の井の姫君諸とも、御流浪なされて蟇目の延引。違勅の科にてお尋ねの御身の上。以前の御恩忠義を思はば、今この時、ナ、御恩送りは如何やうとも。

トさま〴〵こなしあつて、意見する。と軍次兵衛、手を打つて

軍次　ハ、ア、出かした。流石は軍次兵衛が忰程ある。

佐國　すりや、御合點が參りましたか。

軍次　イヤ、雷八が事ぢや。

佐國　エ、。

軍次　サ、大殿の胤と被せ損なうた雷八、津の國へ養子に

行て和田雷八と名乘り、噂を聞けば、天晴れ矢數を射通し、おれが心を受け繼いで、北畠も桃の井も、押領せうとは健氣な奴ぢや。人間はそこぢや。慾を知らねば役に立たぬ。小さい時に別れたが、逞ましい性根になり居つた。ハテ、親は無うても子は育つぢやな。

佐國　エヽ、人非人の雷八どのを褒めるお心では、百萬陀羅申しても、お聞き届けはござりますまいが、ちつとは又、御先祖の事や、冥途にござる母の事も思し召されて、どうぞ親仁樣、落目の御主人靱負之介さまのお爲を。……サア、あなたのお心次第、私しは疾より。

ト思ひ入れあつて

サア、親仁樣、軍次兵衞さま。

ト繰返し、いろ／＼云ふ。軍次兵衞、構はず、帳面を繰返し見て

軍次　コリヤ、十市郡の村方の奴等は、歩銀を一向入れ居らぬが、手代任せにして置いてはこれぢや。いつそおれが、ゑぐうせいらくせにやならぬわい。

佐國　イヤ、申し、どうぞ古主へ忠義を。

軍次　なんの古主、なんの忠義、今おれが身は大庄屋軍次兵衞、どつからも知行は取らぬ百姓の金貸し。すりや、北畠の靱負之介が流浪せうが、ナ、桃の井の姫が惣嫁に出やうが、ナ、何を構ふ事がある。そんな事思ふ手間で、貸しつけた歩銀の算用せにやならぬ。

ト算盤を取上げ、置く。

佐國　エヽ、そりやお前、犬に劣つたお心でござりますぞえ。

軍次　犬と云はれても猫と云はれても、兎角金が貯めたい。

佐國　人間僅か五十年と申すにも、六十の上七十におツ懸つて、百姓をせたげ、町人を痛め、高利を取つて強慾非道。いつまで生けうと思うてござるぞ。蜉蝣の夕を待つ、夏の蟬の春秋を知らぬ、果敢なき事は夢にも譬へし世の中。それにマア、其やうに。

軍次　イヤ、おりやいつまでも死なずに居て銀貯める。オオ、まだ七十にならぬ軍次兵衞、東方朔や、浦島から見ては、まだ孫ぢやもの。

佐國　アノ、古主へ忠義を思はず。

軍次　古主よりは高利を取る。

佐國　人に誹られ、憎まれても。

軍次　可愛がられて死なうよりもまし。

佐國　すりや、どのやうに御意見申しても。
軍次　馬の耳に風ぢや。
佐國　恩を知らぬは鬼畜木石。
軍次　銀を貸すから、鬼のやうに云はれるは合點。
佐國　そんなら親仁樣。
軍次　もう何も云ふな。聞き入れぬ。
佐國　エヽ、人でなし。忠義を思はぬ人非人。モウ、何も申しませぬ。
軍次　オヽ、それがよい〳〵。
佐國　この上は、慈悲も情も忠義も思はず、千年も萬年も長生きして、エヽ、銀貯めさつしやりませ。
ト小柄を打ちつけ、唄になり、腹立てゝ、奥へツイと入る。軍次兵衛、殘りし小柄を取上げ、また見て
軍次　この小柄と、今の意見が五十兩。でも高いものぢやなア。
トこなしある。所へ、手代三人、革財布を擔げ、橋がかりより出て
手代　申し、旦那樣、只今歸りましてござります。
軍次　奈良の町の家質の歩銀と、三月限りの日合ひも取つて戻つたか。

手代　ハイ、皆な集めて、これにござります。
ト財布を渡す。軍次兵衛、取つて
軍次　ドレ、ちゝうはないか、改めて見にやならぬ。
ト天秤へ直す。
手代　皆な取つた先の名は、上包みに書いてござります。
ト軍次兵衛、一々見て、皿に入れかける。針口張る。此うち、始終合ひ方。向うより、小槇を連れ、要助の勘左衛門、花活を持つて出て來て、小槇に囁き、門口より
勘左　どなたぞ、お頼み申しませう。
手代　どなたでござりますな。
勘左　イヤ、軍次兵衛どのは御在宿でござりますかな。
軍次　誰れぢや。此方へ入らつしやれ。
勘左　アイヤ、越野勘左衛門めでござります。
ト内へ入る。
軍次　ヤア。
トこなしある。
勘左　一別以來、お久しう存じます。
ト慇懃に云ふ。軍次兵衛、構はず、針口張つて
軍次　ヤア、コリヤ久兵衛め、この銀にはえらう欠がある

が、こりや僅か五百目のうちで、三分も欠があるは、どうしたものぢや。

手代　イヤ、五百目のうちで三分そこらは、缺ではござりませぬ。大方懸けまどひでござりませう。

軍次　極道め。おれが懸けるに違ひがあるものか。そんな事吐かすと、おのれが給銀で引く程に、さう思ひ居らう。

ト云ひ／＼、また板銀をチヤン／＼と當つて見る。

勘左　イヤ／＼、軍次兵衞どの、何かお取込みの中へ私しが參りましたは、ちと貴殿に折入つてお願ひの儀が。

軍次　この節は無心は聞きませぬぞ。

勘左　イヤ、左樣でもござりませぬが。

軍次　コリヤ／＼、平助め。おのれが取つてうせたこの板は、大方みなやけぢやぞよ。

手代　なんの滅相な。その銀は受取つて、郡山の兩替で改めまして、一挺もやけはござりませぬ。

軍次　さういふ阿房ぢや。例へやけが無うても、あると云うてやらねば、引けが取れぬわいやい。

手代　ハイ。

勘左　イヤ／＼、申し、軍次兵衞どの。勘左衞門め、ちよつとお目にかゝりたう存じまする。

軍次　イヤ、算用の最中へ、こりや迷惑ぢや。

勘左　イヤ、御迷惑でござりませうが、お暇は取らせますまい。ちよつとお逢ひなされて下されい。

軍次　ムウ。

ト思ひ入れあつて、銀どもを片附け、煙草盆提げ、下りて來て

以前の遺恨、軍次兵衞と火を擦つた仲の、宮太夫が倅の勘左衞門が、おれに逢ひたいとは何の用ぢや。

勘左　イヤモウ、據ろないお願ひ、何卒お聞き屆け下さるならば、千萬忝なう存じまする。

軍次　ハヽヽヽヽ。どうで碌な事ではあるまい。聞けば浪人して、ツイ隣り村とやらに、貧乏に暮らして居るとやら。おれに願ひと云ふは、大方銀を貸してくれいか。イヤ、銀ぢやあるまい。僅かの錢であらう。例へ一貫でも二貫でも、商賣ぢやに依つて、オ、貸してやらう。オオ、どこへでも貸すが、ちつと利が高い。殊に引當物がなければ貸されぬ。抵當があるか、何ぞ持つて來たか。錢はなんぼぢや。また百や二百は一向邪魔ぢやが。ハテ、來憎い所へ面の皮の厚い。勘左衞門、よう來たの。

ト勘左衞門、口惜しき思ひ入れあつて、また氣を替

勘左　ハヽヽヽ。イヤ、左樣な御無心筋ではございませぬ。

へ

軍次　ムウ、そんならなんぢや。

ト勘左衛門、ズッと立つて、小槇を連れて入り

勘左　イヤ、以前は格別、只今にては村方の御支配なさる、大庄屋の軍次兵衛どの、近頃御不肖にはございませうが、この妹小槇めを、御子息佐國どのの嫁に、お貰ひなされて下さりませうならば、忝なう存じまする。お賴みと申すは、この事でござります。コリヤ／＼妹、ともどもに軍次兵衛どのにお願ひ申せ。

小槇　アイ／＼。

ト恥かしいこなしあつて

舅御樣、いま兄樣が云はしやんす通り、どうぞ私しを、お前樣の嫁になされて下さりませうならば、大抵有り難い事ではござりませぬに依つて、舅御のお前樣には、隨分々々孝行に致しませうし、縫ひ仕事も洗ひ濯ぎも、なんでも致しまして、その間にはどこへでもお使ひに參ります。その外なんなりと、あなたの仰しやるやうに。

軍次　コレ。コレ／＼／＼、これはしたり、つべこべつべこべと、喧ましい。この軍次兵衛は村の大庄屋、貧乏人ではないぞ。金持ち銀貸しぢや。倅が嫁に下女や小女郎の業はさゝぬわい。

小槇　エ。

勘左　ハテサテ、阿房ではある。コリヤ、軍次兵衛どのの身上はよろしい依つて、腰元、婢女、お物師、お手代、下男をお使ひなさるゝ。佐國どのの嫁になると、琴三味線の、茶の湯、十種香よ　外にする事はないわい。ハ、ハ、、。我れが貧乏でござりますゆゑ、あなたのお身上も左樣かと存じまして、只今の無調法、お氣に障りましたらば、眞平御免下さりませう。コリヤ、お詫び申せお詫び申せ。

小槇　アイ／＼。舅御樣、今のは私しが不調法でござんす。隨分榮耀榮華に暮らしませう程に、御堪忍なされて下されませいなア。

勘左　オヽ、それがよい／＼。さてこの花活は、手前が母心ばかりの賴みの印でござります。お納めなされ下さりませうならば、有り難う存じまする。

ト軍次兵衛が前に、花活を置く。

軍次　ムウ、なんぢや。菊に山吹、杜若。エヽ、三色が一

文で賣る賴みの印。ハテ、高値なものを、こりや、お氣張られたな。イヤ、折角のお持たせなれど、嫁は手前に入用はござらぬ。オヽ、こちらからも、荷物三十荷、持參金五百兩の嫁の相談があれど、それさへ變替へ。自體女房持たすは費えの第一。先づ嫁入りの晩の物入りから、世間への披露、付け屆け、喰ひ人は殖へる。その間に子をはらむ。ソレ腹帶の祝ひの、イヤ取上げ婆の祝儀の、引くの山のと、なんぼの事やら。またその上に、オギヤオギヤと、餓鬼めがへり出ると、宮へにさへ藁の上三貫と云ふ。よう三貫で止まらうぞ。六日だれの餅また喜こび、それに又、産れた餓鬼が男なら、甲幟を染めたり粽を配ばる。また女子なら、雛祭り、手習ひさすか學問縫物。疳を煩らふ、疱瘡はしか。イヤ祈念祈禱の、醫者の藥代のと、費えだらけの物入りだらけ。それはと云へば女房から。針を藏に詰めても堪るものか。ぢやに依つて倅にも、一生女房を持たさぬ。それに押しつけ業に妹を嫁にとは、アタ、野太い。よし又費えをいとはずに嫁を取ると云うても、其やうに安い貧乏な裸の嫁は、おれよりはマア、倅が外聞が惡いと嫌がるであらう。ハ、、、ハ。

勘左　イヤ〳〵、さうあらうと存じて、勘左衞門連れて參る所存ござらねども、母が賴み。殊さら御子息佐國どのと、妹小槇めは、疾から懇ろ致し居りまする。それゆゑ妹も、外へ片付く心底もなく、また佐國どのにも、外の女房持たつしやる所存もないやうに承りましたるゆゑ推しての嫁入り。それを嫌と仰せ下さると、妹は一生獨者、生きて居る甲斐がござりませぬ。それが不便さに、參り憎い所へ參りましてのお賴み。軍次兵衞どの、とくと御勘辨なされて下さりませうならば、千万

軍次　コレ〳〵、勘左衞門、其方の妹と、此方の倅が、なんの懇ろ。そりや途方もない僞はりを。

小槇　イエ〳〵、申し、佐國さまと私しとはナ。

軍次　懇ろぢやない。嫐つたのであらう。ハテ、若い者の事、ちよつと嫐つた。それを仰山に、イヤ、懇ろして居ると云ひかけするは、エヽ、慾ぢやな。

勘小　エヽ。

軍次　仕事ぢやな。それを名けて美人局と云ふ。

勘左　ナニ、美人局とは、軍次兵衞。

トきつとなり、反り打つを、小槇、ちやつと取りつき、いろ〳〵宥めると、勘左衞門も、こなしあつて

ハヽヽヽ。そりやモウ、仕事となりとも、美人局となりと仰しやつても、そりや、本人の佐國どのが御承知。こなた樣が御得心下さらねば、今申す通り、妹めは疵者になつて、一生後家を立てさせねばなりませぬ。釣合はぬ事は、提灯と釣り鐘より、まだ／＼釣り合はぬ縁組みなれど、お情でござる。コレ、越野勘左衞門、兩手を突きまする、頭を下げます。どうぞお聞き屆け下されうならば、有り難う存じます。

ト此うち、軍次兵衞、素知らぬ顏にて脇見する。勘左衞門、あちらへ廻り、こちらへ廻り、賴むせりふの終りに、軍次兵衞、勘左衞門が羽織の袖口を撮み上げて見る。勘左衞門も、フト氣を附け、思ひ入れ

軍次　ハテ、面妖な。この羽織は慥かにおれが羽織で、忰佐國に遣つたが。

ト袴もジロ／＼見て

その袴も忰が袴。羽織と云ひ、勘左衞門、こりや、どうして着て居る。

勘左　エヽ。

軍次　ハア、さてはしこためたな、わりや盜んだな。

勘左　イヤ、これは。……妹、どうぢや。

小槇　アイ、この羽織も袴も、最前佐國さまが、此方の内に置いて行かしやんしたのでござんすわいなア。

軍次　なんの、忰が其方の内へ。イヤ、茲な盜人めが、サ、脫ぎ居らう。

ト引ッたくる。小槇、それはと寄るを、勘左衞門を支へる。軍次兵衞、勘左衞門が形を見て

ハヽヽヽ。そりやなんぢや。白無垢淺黃上下、灰寄せに行くのか、但し色屋で借りたか。どうで近年は只の所へは行けぬに依つて、葬禮のものをしてやるとは、こりや新らしい。手代ども、見たか。斯う云ふ態で妹を此方の嫁とは野太い奴の。この賴みの印の、佛壇の立て枯らしも穢らはしい。

ト蹴り飛ばす。勘左衞門、キッとなるを

なんぢや／＼、その面は、イケまじ／＼とした大騙りめが。

ト引きつける。小槇、キッとなる。勘左衞門、また押へる。

自體うぬが親ゆゑ、浪人した軍次兵衞、その意趣があれば、うぬを斯うして／＼。

トさま／＼打擲に遭はす。小槇も支へるを、一緒に引

きつけ
コリヤ、女郎と云ひ、兄も大騙りめ。憎くピコつくと、
イヤ、踏み殺すぞ。
ト蹴り倒す。勘左衛門、キツとなつて
勘左　エ、。
ト寄るを
小槇　コレ。
トしがみ付き、泣く。勘左衛門も、こなしある。
軍次　ハテ、盗人と云ふものは、よう手ざしをせぬ。どづかれつけたものぢや。コリヤ、手代ども、必らず用心せい。用心が悪いぞよ。えらう用心が悪いわえ。銀どもを箱へ入れて、奥へ持つて來い。ア、、おれも餘ッぽど草臥れた。ドレ、奥へ行て、
ト行かうとするを、勘左衛門、ヂツと裾を押へる。
勘左衛門なんとする。
ト振り返り
エ、、忌々しい、べら坊め。
ト蹴り飛ばす。唄になり、勘左衛門、立ち上がるを、小槇、ヂツと留めて居る。軍次兵衛、こなしあつて、手代皆々に銀箱を持たせ、奥へ入る。勘左衛門、小槇、

それなりに差俯向き、暫らくあつて
勘左　妹、據ろなき母のお頼み、其方が望みを叶へてやりたさ、ヂツと無念を堪えたる、兄の所存は届いたであらう。
小槇　申し、兄さん。定めて口惜しうござんせう。無念にあらう。皆私しゆゑ。よう堪えて下さんした。よう堪忍して下さんした。
ト泣く。勘左衛門もこなしあつて、上を刎ね、最前の花筒を、小槇が前に置き
勘左　ナア、いろ〱に頼んでも、承知せぬ軍次兵衛、もうこの上は是非がない。身の一つだになきぞ悲しき。最前の返事は爰。
小槇　アイ。
ト唄になる。小槇、ズツと立つて、帯を解き、上着を脱ぎ、白無垢になつて
母様のお志し、嫁入りの白小袖、叶はぬ今の身は最期の晴れ着。
ト前へ出る。
勘左　エ、可哀やなア。折角思ひ詰めたものを、邪慳な軍次兵衛ゆゑ、あたら花を散らすと思へば。

ト思ひ入れ。

小槇 兄さん、今こそ誠に、身の一つだになきぞ悲しき。

ト手を合す。

勘左 オヽ、出かした。……云ひ殘す事はないか。

小槇 アイ、覺悟はようござんすけれど

ト後よう云はぬ思ひ入れして、差俯向く。

勘左 けれど。

小槇 最前逢うた佐國さまと。

勘左 佐國と。

小槇 死ぬる今際に、たつたま一度。

勘左 ま一度。

小槇 寢たうござんすわいなア。

ト兩袖を顏に當て、俯向き、泣く。

勘左 それ程までに。……サ、尤もぢや、道理ぢや。其方が心ではさうあらうが、もうこの上は仕樣もやうもない仕儀。その外に望みはないか。

小槇 もう尋ねて下さんすな。隙がいると何やかやを思ひ出しますわいなア。

ト泣き、氣を變へ、目を瞑ぎ、合掌する。

勘左 流石は親人の胤、勘左衛門が妹程ある。

ト思ひ入れあつて

覺悟はよいか。

ト刀を振り上げると、障子屋體の内にて

佐國 すりや、親仁樣、御得心を。

小槇 ヤア、ありや佐國さま。

勘左 サ、覺悟はよいか。

ト刀を振り上げると、小槇、ちやつと飛び退き

小槇 アヽ、コレ〳〵、待つて下さんせいなア。

勘左 ヤア、未練な。臆れたか。

小槇 イヽエ、覺悟は疾からよけれど、今のお聲を聞いては、どうぞもう一度。

勘左 ヤア、くど〳〵卑怯者。うろたへて兄が武士まで捨てさすか。

小槇 サ、それでも、佐國さまに。

勘左 サ、覺悟せい。

小槇 イヽエ、わたしやちよつと向うへ行て。

ト奥へ行かうとするを

勘左 その未練では是非に及ばぬ。

ト一かせ切る。小槇、コレ待つてえ、と抜け廻り、奥へ逃げ込む。勘左衛門、追はへ入るうち、バタ〳〵に

て、手代、下女。そりや暴れ者ぢや、と騒ぎ立て、橋がゝりへ逃げ込む。後へ、小槇、走り出て、そこにあつた小屏風をぐる／＼と體に廻し、隠れる所へ、勘左衛門、走り出て、あちこちと尋ね廻り、屏風に手をかけ、妹、覺悟、と云ふ。小槇、ズッと立ち覗く所を、勘左衛門、首切る。合ひ方になり、小槇、屏風の上より、ツル／＼と本首落ちる。向うへ坐る。勘左衛門、思ひ入れあつて、キッとなり

ヤア、この家の軍次兵衛は、何所に居る。妹は斯くの通り。下手人の佐國が首、受取らう。

ト奥より

軍次　越野勘左衛門、急くな。其方が望みを叶へてやらう。

勘左　ヤア、なんと。

トこなしある。奥より、軍次兵衛、着付け、上下、大小にて、佐國が首を、羽織に包み、小脇に搔い込み、ツカ／＼と出る。

うぬ、軍次兵衛。

ト切つてかゝるを、軍次兵衛、立廻つて

軍次　コリヤ、待て。

勘左　イヤ、古主の恩を思はぬ人非人。

軍次　イヤ、人非人ではない。

勘左　なんと。

軍次　古主の御恩を思へばこそ、北畠の家老近藤軍次兵衛、以前のこの形、眼にかゝらぬか。

勘左　イヤ、姿は變つても、心は矢張り強慾非道。

軍次　オヽ、この非道も悴が切腹、命を捨てて身共に意見、六十年仕込みし惡事も、佐國が忠義を立つる最期の一句に、我慢の角も忽ちに、子を先立つる我が心。安祿山でも提婆でも、不便と思はで何とせう。竹の林に住む虎も、勢ひ猛きものなりとも、我が子の別れを悲しんでは、三日三夜泣き叫び、千里の功ある足萎えて、一歩をなす事能はずと。曾て殿の胤と僞はりし、雷八が身の上も、主殺しの斷罪と、彼れを思ひこれを見て、今日只今眞人間、武士の性に立歸り、古主の御恩思ひ知つたる證據は、コレ、この首。

ト本舞臺へ、本首直す。

勘左　すりや、佐國は切腹して、介錯は其方が。

軍次　コリヤ／＼、勘左衛門、何を云ふ。この御首こそ、違勅の科ある北畠の若殿靱負之介さま、ナ、サ、これま

での罪亡ぼしに、軍次兵衛が手に掛けた。
勘左　その心とは思はず、最前の
軍次　嫁入りと云ふも其方が、彌生姫の首はあれど、この若殿のお首が無さに、頼みの印の花活に、三色の花は身替りと、イヤサ、三河に育つ杜若、由緣の色を幸ひに、切つて投げ出す身共が手際。なんと、勘左衛門、コレ、この花の批判は、よもやあるまいが。
勘左　ハア、惡に強きは善にもと、驚ろき入つたる御心底。暮れ六ツまでに御兩所の、首打つて渡さんと、夜前より代官所にて、請合ひしこの勘左衛門。この上は、妹、イヤ、桃の井の御息女、彌生姫の御首と諸共に。
ト小槇が首を、よき所へ直すと
小槇　申し、佐國さま。
佐國　小槇どの。
トどろ〳〵にて、首一所へズッと寄る。仕掛けにて、蝶々番ひ、飛んで出て、花壇を飛び廻る。勘左衛門、ちやつと二つの首に羽織を被せる。軍次兵衛、花壇をキッと見る。合ひ方、變る。
軍次　アレ、見られよ、勘左衛門。いま佐國と小槇が靈魂、蝶と化して前生の、おのれが好める花壇に、戯むれ遊ぶあの風情。
勘左　彼の唐土の莊子が夢に、小蝶に化したる例しはあれど、それは空言。
軍次　これは目前。
勘左　二世の契りに、番ひの蝶。
軍次　親が許して盡未來。
勘左　緣を結ばす、佐國、小槇。
軍次　四季の草花の大嶋臺。
勘左　花に濕ふ水杯。
軍次　斯う云ふ事と知るならば
勘左　疾にも女夫にせうものを。
軍次　不和の仲にも睦ましう
勘左　云ひ交したる、二人が氣兼ね。
軍次　なぜもそつと早う、おりや善心にならなんだぞ。
勘左　武士の常とは云ひながら、思へば〳〵、軍次兵衛どの。
軍次　勘左衛門、料簡して、矢ッ張り只の百姓で、泣かしてたもれ。
ト體を投げ伏し大聲上げて泣く。勘左衛門も思ひ入れあると、ザヤン〳〵と、暮れ六ツの半鐘鳴ると、橋が

かりより、代官、家來連れて出て

代官　越野勘左衞門、これに居るか。先達ての約束、兩人の首受取らう。

勘左　ハア、只今討ちし彌生姫、靱負之介どののお首。

ト二つの切り首、渡す。

代官　出かした。一刻も早く實檢に供へん。家來、續け。

ト首を持つて、家來引連れ、走り入る。と柴垣より、靱負之介、彌生姫、出て

靱負　樣子は殘らず聞いたが、靱負之介や、この姫が身替りに。

彌生　殿樣の後を慕うて來た、自らゆゑに、二人の最期。

軍次　ヤア、御兩所樣。

靱負　近藤軍次兵衞。

勘左　すりや、伜が指圖で。

彌生　其方を供に。

勘左　彼の雷八が詮議を。

軍次　その伜が成行きと、佐國が菩提の爲、貯へある金銀にて、一宇を築いて小和泉に引ッ込み、姿を替へ、大和同心と呼ばるゝも前世の業因。

勘左　蝶になつたる因緣も。

靱彌　我れ〳〵ゆゑに。

ト此うち、捕り手兩人、出て居る。

捕手　殘らず聞いた。誠の。

ト靱負之介、彌生姫にかゝるを、勘左衞門、軍次兵衞、兩人を引き廻し、ポンと切る。

靱彌　ヤア、それは。

軍次　惡事の仕納め。

勘左　これより直ぐに。

ト刀を拭ふ。ドロ〳〵にて、花壇へ、蝶々出る。

靱負　アレ、佐國と小槇が。

ト指さしする。

彌生　いとしや、花壇に。

ト泣く。

勘左　ムウ、南無阿彌陀佛。

トよろしく。

幕

五段目　　道行の段

浄瑠璃「道行二世の縁花の臺」

宮薗文字太夫
宮薗組太夫
三味線豊澤晋五郎

役名——大和の佐國の靈。小槇の靈。下人、藤六。外記之進娘、お梅。二見瀬平。晒し女、おたち。同、おふさ。同、おたみ。同、おせん。傾城、此花。同、花鳥。飛脚、早助。

けいせい倭荘子　**道行二世の縁花の臺**

〽極樂の、蓮の臺の宿入り、二世安樂の縁深き、されば大和の佐國は、小槇に誓ひし言の葉も、眞に二世の夫婦仲、紫磨黄金の肌と肌、迦陵頻迦は手もつけず、心の儘の起臥しに、嬶よ精出せ、嬶よ精出せ、旦那どの、こんな縁が殼竿の、長き契りの樂しみに、これまでの事遣る瀬なき、思ひ出せばこちの人。ア、、さて嫌な娑婆世界、あつちの國に居た時は、花に心を移り氣な、殿御心と知りながら、馴れ初めにし去年の秋、村の祭りの折からに、氏神さんの鳥居先、參り群集のその中で、わたしが振りの田舍染め、お前の差いてござんした、お腰のものに掛つたが、結びの初め初戀に、焦れ慕うて人傳を、田面の雁の文使ひ、岩木ならねば我れも亦、花によそへし返り言、嬉し恥かしその夜さに、つい新枕川島の、二世の臺の樂しみに、娑婆と冥途も初春は、いづれ賑はふ門松の、德若に御萬歳と、末世も榮えましんます、誠にめでたう候ひける。萬安くと、釋栴檀の木の下より、誕生まします、釋迦如來は、卯月八日に産湯を注ぎ、涅槃の雲に霰を降らせ、既にお茶湯を捧げみるは、誠にめでたう候ひける。殊にめでたう候ひける。めでたうやめでたうや、春の始めの春駒なんどは、夢に見てさへよいと申す。宵のひぞりも後朝の、色の世界に戀の種、九十くよくよ口說くも戀よ、惚れた殿御は現なく、夢に見てさへよいとや申す、夢に見てさへよいとや申す。月は桂に、花は嵐に、伴れて勇みの駒の足、坂は、サア照る照るナア、鈴鹿は曇る、合の土山雨が降る。寒の師走も日の六月も、駒の手綱に日を送る、その水無月の夕には、弘誓の船の舟遊山、三途の川の櫓拍子も、ヤツシツシ、死出の山、飛び交ふ姿ちゝり〳〵ちゝり、星かあらぬか螢火

の、身を焦したる夕涼み、風を恨むは花の縁。一つ葛屋に一つ葛屋に四季の花、水仙室咲きの梅、いとし可愛と撫子の、よれつ縺れつ糸櫻、垣根卯の花杜若、殼竿唄の女夫合ひ、可愛らしいぢやないかいな。四季折々の盛りには、春は櫻に夏菊や、秋は紅葉に冬の梅、由縁の色は藤の花、いとし可愛と撫子の、桔梗せいしを杜若、心石竹牡丹花の、愛に零るゝ萩の露、佛々と唄はれて、小唄交りのお念佛、冥途の鳥は不如歸、我れも番ひの二人連れ、好いた男や、好いた妻、仇にはなさぬ三ッ瀬川、深き思ひは鷄の、鳥も睦まじ西の國、唄ふ聲々夢心、逢ひたい見たいの念力が、通りて爰に藤六お梅、其まゝ纏る四つの袖、刄にかかりし身の上の、遁がれがたなき苦しみは、修羅の太皷のどろ〳〵〳〵、鳴れば驚ろく兩人を、振り拂ひ行く修羅道の、極樂忽ち地獄の責め、狂ひ亂るる大紅蓮、振り切る袂名殘の袖、夢に夢見る草葉の露に、俤ばかりや殘るらん。

小槇、佐國、お梅、藤六、振りあつて道具替る。

造り物、一面の黑森、松原、大きな榎。舞臺先流れ川、爰に、二見瀬平、旅姿にて、三度笠を持ち、眠つて居る。道具止まると、直ぐに鳴り物入り、眠やかな在郷唄になり、花道より、晒し女、おたち、おふさ、おたみ、おせん、傾城此花、花鳥も、晒し女の形にて、盥に布を入れ、持つて出て

せん　サア、皆さん。布を晒さうぞえ。

皆々　合點ぢやわいなア。

トこの聲に恂りして、瀬平、この中を、あちらこちらと走り廻る。皆々、見て

瀬平　ヤア、お前方は。

ト晒し女、皆々、瀬平を見て

此花　ほんに、瀬平どの

瀬平　ムウ、そんなら今のは夢であつたか。

皆々　なんの事ぢやいなア。

瀬平　成る程、御合點が參りますまい。なんでもいつぞや郡山で聞いた大工が話し、雷八が行くへを尋ねんと、晝夜の道中。思はず暫らくまどろむ其うちに、佐國どのや小槇どのが、番ひの蝶と身を化して、花壇に遊ぶと思へば、忽ち極樂世界に夫婦連れ、娑婆と冥途を目前に、見しは正夢。

花鳥　すりや、殿樣やお姫樣の、お身替りになつたお二人

を

瀬平　夢に見たも忠義の誠。

花鳥　これと云ふも皆な雷八ゆゑ。靫負之介さまと云ひ交し、身請けも濟んで嬉しやと、喜んで居るうちお館の騒動。殿様と云ひ、この花鳥まで流浪の身。

此花　御一家なれば、桃の井のお家も共に沒落。雷八どのの惡事ゆゑ、この大和の侘び住居。皆な勘左衛門さまのお世話でござんすわいなア。

せん　それに繋がるお前方まで、ついに仕馴れぬ賤の業。

たち　勘左衛門さまのお頼みにて、村中の人目なれば、この間から私しと、同じやうに晒しの稽古。

ふさ　ほんに、いとしい事ぢやわいなア。

瀬平　イヤモウ、これも追ッつけ、昔し語りになりますわい。

皆々　さうぢやわいなア。

ト在郷唄になる。花道より、飛脚早助出て、瀬平に行き當り

早助　これは麁相、急ぎの御用、免しやれ〳〵。

ト行かうとするを、瀬平、引きとめて

瀬平　して、どれからどれへの、お飛脚でござりまする。

早助　紀州の荒川のお屋敷より、都嶋原へのお飛脚。

ト行かうとする。

瀬平　待たつしやれ。荒川とあれば。

早助　なんと。

瀬平　ちよつとその狀。

ト取りにかゝる。立廻り。瀬平、狀を取つて

讀んで御覽じませ。

ト花鳥、取つて開く。

花鳥　ナニ「わざと飛札を以て申し遣はし候ふ、此方大切なる客人饗應の爲、手前屋敷廓の體」

早助　それを。

ト立廻り。飛脚を、瀬平、押へ、狀を見て

瀬平「廓の體に仕立て、慰め申したく候ふにつき、名ある傾城十人ばかり、その外藝子法師、太鼓持ちなど見繕ろひ。」

ト立廻り。瀬平、飛脚を投げ、此花に狀を渡す。

此花「尤も、仲居、料理人、座敷の掛引き不都合なきやうに頼み入り候ふ、金子の高は望み次第、早々返事待ち入り候ふ、此花屋由松どのへ。荒川用人、澤田兵藏。」

早助　その狀を。

ト　かゝろ。立廻り。

瀬平　状の文體、大工が噂。

花鳥　荒川とあるからは

此花　尋ぬる人に

皆々　逢ひはないぞえ。

早助　さうはさゝぬ。

ト起き上がるを、また投げて

瀬平　愛構はずと。

早助　うぬ。

トかゝるを、引き倒して、踏まへて

瀬平　ござりませ。

ト皆々向うへ入る。

よろしく幕

荒川館の段
紀の川の段

切　幕

役名 ― 和田雷八。荒川一角。二見瀬平。奴、鐵平。同、腕内。同、善平。腰元、松ケ枝。下人、藤六。傾城、花鳥。同、此花。同、初音。同、藻鹽、同、難波津。北畠靱負之介。桃の井先次郎。同妹、彌生姫。滋の井中将實ハ田丸闘彌。大橋大進。万里小路隼人。越野勘左衛門。

造り物、見附け、東西一面の障子屋體、すべて結構な屋敷の模様。幕の内より、二見瀬平、奴にて、立ち身。奴善平、同じく、腕内、水打ち桶、竹箒にて打ちかけ居る。瀬平、留めて居る。この見得よろしく、橋がゝり、柴垣、枝折り門に、奴鐵平、見て居る。この見得よろしく、バタ／＼白囃子にて幕開く。

瀬平　両人の奴め、こりや、おらを何とひろぐのだ。

ト突き放す。

善平　イヤ、瀬平、わりやこの館へは新参なれど、これまで餘程奉公馴れて居るさうな。そこを見込んで、おらが頼んだ、下郎奉公の第一、水の打ちやうが習ひたい。

腕内　オヽ、さうだ。おらも式日の草履の持ちやう、とつくりと教へてくれろ。また嫌と云ふが最後

善平　新参の其方、嫌とは云はさぬ。この竹箒を、われが胴腹へ突ッ込んで置いて、教へてもらふのサ。

腕内　斯う習ひかゝつたからは、グッと身を入れて教へてもらふのサ。
善平　サア、嫌か、應か返事せい。返事は
善腕　どうぢや。
ト此うち、鐵平、懷ろ手にて、鬚撫でて居る。
鐵平　オ、、さうだ／＼、善平、腕内、二人とも氣遣ひな事はない。心を落しつけて、とつくりと習へ／＼。
瀬平　ハテナア、草履を掴む下郎奉公するからは、式日のお草履、又は水の打ちやう知らいで、當荒川のお家へ、おらが奉公がならうか。其方から望みかゝつた奴の諸藝、とつくりと胴腹にこたえる程、一番教へてやらうわい。
ト身繕ろひする。
善平　その胴骨にこたえる程習ふわい。
腕内　マア、弟子入りに、カウ。
ト兩方より、手桶にて水を浴びせる。瀬平、身を交す。また來る所を、よろしく留めて
瀬平　へ、、、、ハ、、、、。ハテ、弟子入りに水浴せとは、こりや嫁入りと取違へたのぢやな。滅多にさうは、エ、、せまいわい。
ト突き放す。これより立廻りになる。始終囃子。瀬平、よろしくあつて、兩人を取つて投げ、切つてかゝるを、鐵平、ツカ／＼と行つて、瀬平を留めて
瀬平　イヤ、物覺えの惡い弟子ども。如何に折檻するとて、マア、さうはさせまいわい。
瀬平　横合ひからの挨拶人、取分けわれが留めるからは、こりや、グッと開かにゃならぬ。オ、、この館へ奉公望むこの瀬平、どれやらお客人へ、一角さまの御馳走で、都より傾城ともを呼び寄せて、廓の遊び。面白さうな趣向ゆゑ、望んで奉公に來た身共。その譯と云ひお客人の、假名實名開かにゃならぬ。
鐵平　うぬは北畠のなぐれ者、この荒川へ奉公望むと、どうでも望みがあるであらうと推量した。おらが指圖で二人の者へ云ひつけた。
善平　式日の草履
腕内　水の打ちやう
鐵平　性根を据ゑて
三人　習はうわい。
瀬平　サ、教へてやつたその上で、お客人の名云はさにゃ置かぬ。

鐵平　見事われが。

瀨平　如何にも、云はして見せう。

鐵平　ソリヤ。

ト善平、腕内、切つてかゝる。立廻りあつて、兩人を當てる。鐵平、瀨平、切つてかゝる。立廻りあつて、切り結び、留まる。奧より、腰元松が枝、出て

松枝　コレ其方衆は、何ゆゑに眞劍を以て口論の樣子は。

鐵平　イヤサ、これは。

瀨平　松が枝さま、この下郎めらが。

松枝　ア、コレ、瀨平。例へどのやうな事があつても、其方は新參、この館へ來てまだ間もなければ、何かともに。

瀨平　イヤ、此奴等を捉へ、何かの、ナ。

鐵平　ハテ、何かにつけて新參者は、心を措かねばならぬ程に、虫を死なして、サ、朋輩仲よう、ノ。まだ委細は知らねど口論の樣子が、一角さまのお耳に入つては、却つて爲になるまい。マア、其方の方から引いたがよからう。

瀨平　ムウ。うぬら、命冥加な粕奴めが。サア、引き居らう。

鐵平　新參ながらお氣に入りのお腰元、松が枝さまの御挨拶がなければ、首と胴との生き別れだに、ハレ、仕合せな蜻蛉奴め。

瀨平　何を小癪な。サア引け。

鐵平　サア引け。

鐵平　サア〳〵〳〵。

ト兩人、拔き身を引く。

松枝　一角さまには、奧にて廓の衆との御酒宴。踊りの最中。追ッつけこれへお出であれば、マア供部屋へ行て、皆な一所に睦まじう、酒でも。

善平　イカサマ。こりやよかるべい。

腕内　ドリヤ、行て一つ呑まうかい。

瀨平　なにを。うぬらがやうな土奴めらに、一つ部屋も穢らはしい。

善腕　ナニ、土奴とは。

ト兩人、きしむ。

鐵平　ハテ、もうよいわい。松が枝さまの挨拶が重い。マア、この場はこれで濟まして。ナ、合點か。

兩人　オヽ、合點だ。

瀨平　古めかしい頷き合ひ。命に南風が當つたか、腐り奴

め。
鐵平　死暴れの胴殼奴め。叩きこなすは追ッつけだわい。
瀬平　とぎすめが羽根叩き、締め殺さるゝを待つて居れよ。
鐵平　見事うぬ、締め殺すか。
瀬平　締め殺すまでもない、望みなら摑み殺してくれうわい。
鐵平　うぬ、その頬桁を。
瀬平　何を小癪な。
松枝　ア、。コレ、マア、次へ。
四人　ムウ、ネイ〳〵。
ト橋がゝりへ入る。鐵平、善平、腕内、三人思ひ入れあつて、橋がゝりへ入る。瀬平、松が枝、殘る。合ひ方になる。
瀬平　松が枝さま。
松枝　瀬平。
瀬平　あなたは先達てこの館に腰元奉公、また拙者が指圖で、花鳥さまを始め、若殿樣御緣のある方々を、廓の者に仕立て、當荒川の館へ入込ましたも。
松枝　兄弟ながら、人非人の雷八さまの行くへ。
瀬平　十が九つ圍まひ居る荒川一角。萬事に心を附けても、拙者は下郎、奥座敷へは通れぬ身の上。
松枝　それゆゑ花鳥さまと云ひ合せ、皆な色で仕掛けて一角を、
瀬平　それが肝心。併し花鳥さまには、大事を抱へながら、晝夜の亂酒とやら。
松枝　サア、産後の惱みに、あのやうに御酒を上がッては。
瀬平　何分拙者が御意見申して、館の實否。
松枝　兄樣の身の上。
瀬平　尋ね出して殿の敵、お家の仇を。
松枝　ア、、コレ。
ト兩人、思ひ入れあつて、踊り三味線になる。瀬平、こなしあつて、橋がゝりへ入る。松が枝、殘る。奥、バタ〳〵にて、一角、衣裳、羽織、抜き身。これを、傾城初音、難波津、床世、藻鹽、清流し、花笠、皆々踊りの形にて、留めながら
藻鹽　御短氣な、一角さま。
皆々　マア〳〵、待たしやんせいなア。
ト留めながら出る。松が枝、こなしあつて

松枝　これは殿樣には、何ゆゑの御腹立でござります。
一角　何ゆゑとは、松が枝。其方も存じの如く、都嶋原より傾城ともを呼び寄せ、身共が館にて廓の遊び。酒宴の折から、フト思ひ染めた傾城の花鳥、この荒川一角が宿の妻にと、さまざまと口說けども、得心せぬ死太い女。
初音　それゆゑお腹立ち、手討ちにするとの癇癪でござりますわいな。
來世　また花鳥さまは、委細構はず例の大酒。醉潰れたわいなう。一角さまが何を云はしやんしても、なんにも白川夜舟。
難波　寄る邊定めぬ苦界の身でも、一旦云ひ交さしやんした殿御へ、心中立てる花鳥さま。
一角　イヤ、その心中立てる男と云ふは、北畠靱負之介、違勅の科で斃つてしまつたわサ。
藻鹽　サア、死なしやんした殿御には猶の事、後に殘つて意氣地を立てさしやんす、花鳥さまの勸めの誠。
來世　一角さま、お前もモウ、無理な事云はずと
皆々　思ひ切つて上げさんせいな。
一角　イ、ヤ、思ひ切らぬ。客人へ馳走と云うて呼び寄せたも、見ぬ戀に焦れた花鳥、身共が思ひを晴らさう爲ちやわやい。
松枝　エ、、そんなら、申し殿樣、このお館にござる
女皆　お客人とわえ。
一角　僞はりぢや。
皆々　エ、。

ト皆々、顏見合せこなしある。

一角　ヘ、、、、。客人へ馳走と云つて呼び寄せしも、誠は花鳥に打ツ惚れしゆゑ。幸ひ醉ひ臥して居る所を、無理に、得心せずば、たつた一討ち。さうぢや。

ト奥へ行かうとするを

松枝　マアマア、お待ちなされませ。

ト留める。

一角　松が枝、其方も花鳥が肩持つか。
松枝　なんの勿體ない。お主樣のお詞を背いて、花鳥どの肩を持つてよいものでござりますか。
一角　それに何ゆゑ留める。
松枝　サア、木折りに行かぬが戀の道、其やうに御短氣では、なる戀もならぬもの。兎角物事和らかに、情と誠が屆いたら、ナア皆樣。
皆々　さうでござんすわいなア。

鐵平　ト橋がゝりより、パタ〳〵、鐵平、出て
お旦那様へ、申し上げまする。

一角　鐵平、身共が云ひつけし奴、引ッ立て來たか。

鐵平　如何にも。やうやく只今申しつけ置かれし通り、大和より召捕り、歸りましてござりまする。

一角　幸ひ、待ち兼ねし戀の囮、早くこれへ。

鐵平　ハツ。

　ト立ち上がり、橋がゝりへ向ひ
ソレ、兩人の者、その阿房めをこれへ。

　ト橋がゝりのうちにて

善腕　サア、阿房め、歩め。

藤六　こりや情ない。どうするのぢやいなア。

善腕　細言云はずと、サア、歩め。

　ト合ひ方になり、藤六、赤子を懷に抱き、善平、腕内、前後を圍ひ

善腕　サア。

藤六　サア。

善腕　サア。

　ト出て來て、本舞臺へ來る。皆々見て

初雛　ヤア、其方は勘左衛門さまの。

床藻　下人の藤六どの。

藤六　ヤア、お前方は知つて居るお方。わしや騙されて、こんな所へ來たわいな。

　トこなしあり

鐵平　ソレ、兩人。

善平　阿房め、下に居ろう。

　トきつぱり。

藤六　エ、。

　ト愕りして、トンと下に居る。赤子笛にて、抱子泣く。

オ、、可哀さうに〳〵。お前も愕りしたが、おれも怖うて、恐怖の蟲が發るわいの。

松枝　コレ、申し、お前は聞き及ぶ越野勘左衛門さまの御家來なりや、抱いて居やしやんすそのお子も、勘左衛門さまのお子でござんすかいなア。

藤六　イ、エ、この子は大事の預かりもの。

松枝　エ、。

一角　北畠靱負之介と、傾城花鳥が仲の子悴。

鐵平　即ち旦那様の戀の囮に、尋ね求めて呼び寄せし阿房め。

皆々　そんなら花鳥さんの産ましやんした
藤六　アイ、若殿様の胤ぢやに依つて、此方の旦那さんが預かつて、上さんが育て、居やしやんす。守はこの藤六。この子を賺さうと野面へ出たを、侍ひが大勢來て、何にも云はさずこの子諸とも、おれを駕籠へ打込んで、荒繩でぐる／＼卷いて、滅多無情に舁いて來たが、出て見ればこの屋敷。なんにも惡い事した覺えはないが、氣味の惡い。この子やわしを連れて來たは、血を絞つて毛氈にするのぢやないかと思や、最前から肝が縮み上がつて、案じて居るわいなア。
床世　申し、一角さま、花鳥さんの産ましやんした
初音　あの子を戀の囮とは
難藻　さてはお前は。
一角　惚れてゐる花鳥、得心すれば仕合せ。矢ツ張り嫌と云や、子悴に憂き目を見せ、得心さす。
皆々　エ、。
藤六　可哀さうに、この子に憂き目を見せるとは、川へ流すのかいな。
一角　品に依つたら沈めにかけるか、燒き殺すか。そりや花鳥が返事次第。ソレ、鐵平、マ、、餓鬼をこなたへ

鐵平　ハツ。
　ト寄るを、藤六、ちやつと飛び退き
藤六　エ、、滅相な。この子を囮ぢやのなんのと、如何に花鳥さんと云うても、鳥のやうに、取らす事ならぬならぬ。
鐵平　エ、、面倒な阿房め。
　ト藤六が首筋持つて引き上げ、抱子を片手にて引き出す。赤子笛。松が枝、ツカ／＼と行つて子を抱き取り、ちやつと懐へ入れてしまふ。
鐵平　ヤア、松が枝さま。
一角　その子悴を。
　トきつとなるを
松枝　イヤ、お取持ち申し上げませう。
鐵平　ヤ、なんと。
松枝　サア、燒野の雉子、夜の鶴、子に迷はぬ親がござりませうか。この子を見せて、花鳥さまに折入つて、口說き落すも女子同志。暫しが間は、この子を私しに。
一角　ムウ、預けくれう。
鐵平　その子を預かり松が枝さま、旦那の戀を、見事こなたが。

松枝　古への常磐御前の例しもあれば

女皆　貞女を捨てゝ貞女の操。

藤六　コレ、その子を取られては、おりや旦那さんに叱られるわいなう。

善腕　邪魔な阿房め。

鐵平　おらが部屋へ抛り込んで置け。

兩人　ハア。

一角　松が枝、花鳥が返事を。

松枝　後までキッと。

女皆　私しらもとも〴〵に。

鐵平　有無の返事が餓鬼めの生死。

藤六　おりやマアなんと。

鐵平　ソレ、引ッ立てい。

善腕　うせう。

一角　松が枝。

鐵平　色よい返事を、お旦那様へ。早く〴〵。

ト唄になる。藤六は、善平、腕内に引ッ立てられ、橋がゝりへ、松が枝、子を抱き、思ひ入れあつて、床世、藻鹽、難波津、皆々こなしあつて、奥へ入ると、後に、一角、鐵平殘る。

鐵平　お旦那。

一角　鐵平。

鐵平　兼ねて仰せ聞けられし通り、廓の者を當國へお召しなされしも

一角　彼の客人へ馳走と云ふも、誠は後日の仇、一々に仕舞ひつけて根を斷つ思案。

鐵平　成る程。さすればお客人も、世間廣う彼の一儀を。

一角　如何にも。其方が性根を見込み、身共が心底明かしなれど、未だ客人に對面は致させぬ。併し、兼ねて客人にも云ひ聞かせ置いたれば、

ト囁く。コリヤ。

鐵平　すりや、いよ〴〵お客人は。

一角　ハテ、萬事に心を附けて、後程密かに。

鐵平　心得ました。

一角　鐵平、行け。

鐵平　ハッ。

ト唄になり、鐵平、橋がゝりへ入ると、一角こなしあつて、奥へ入る。柴垣の蔭より、瀬平、ソロ〴〵出て、思ひ入れあつて

瀬平　いま一角と鐵平が密談、手延びにならぬ事の大事。

とくと云ひつけ入込ましたれど、女の事。もうこの上は身共が直に。

ト思ひ入れあつて

さうぢや。

ト猩々の亂れの合ひ方になる。瀨平、奥へ行かうとする所へ、奥より、花鳥、衣裳、裲襠、緋しごき腰帶にて、酒に醉ひたるこなしにて、櫻の枝を持ち、出て、瀨平が向うへ立ち塞がり、模樣取りある。瀨平、構はず引き退け行くを、花鳥、留める。振り切り、立廻り。始終、亂れのうち、よろしくあつて

花鳥　コレ、待つた。

瀨平　喰ひ醉れの花鳥どの、本性現はす傾城性根、相手になるもむやくしい。

ト振り拂ひ、また行かうとするを

花鳥　イヤ、急いては事を仕損じる。心を鎭めて、マアマア、待つた。

ト瀨平、花鳥が胸倉取つて、引据ゑ

瀨平　倶不戴天の敎へ、お主の仇の雷八。コレ、此やうの下郎なれども、一日千秋の思ひをなし、これ程まで心を碎くに、エヽ、こなたはならぬ。さうぢや。

ト引き退け行くを、花鳥留めて

花鳥　イヤ、奥には兼ねて宿直の大勢、見咎められてはその身の大事、飛んで火に入る夏の蟲。

瀨平　ヤ、なんと。

花鳥　酒に醉うたが本性か、醉はぬ心が亂れるか。賤しい勤めのわたしなれど、子仲なしたる靱負さま、あなたのお爲なりや、假へこの身は、一分試しに刻まれても、なんのいとはう、家國の爲、雷八を見出さん、妾は元の傾城花鳥、ほんに露の間も油斷を仕りませうか。

瀨平　そりや、口車の僞はり。云ひ合せた通り、雷八が在所を見出さん爲、この館へ入込ませしに、ソレその如く酒に心を奪はれて、大切な敵の實否が知れまするか。

花鳥　知るればこそ取つた敵の密書。

瀨平　なんと。

花鳥　酒に醉ひたる體にもてなし、騙し寄つて、一角が所持したる、コレ、この密書。

ト狀を出す。瀨平、取つて開き

瀨平　ヤア、こりや雷八より、諸浪人を語らふ頼みの書面。

花鳥　サア、それが手に入るからは詮議に及ばぬ。雷八は

この館に。

瀬平　お出かしなされた、花鳥さま。

ト拔打ちに切りかける。花鳥、梅の枝にて受けとめ

花鳥　コリヤ、瀬平どの、わたしをなんと。

瀬平　ハテ、敵雷八は聞ゆる强勢、出合ひし時には、あなたの手の內。

トまた立廻り。

花鳥　イヤ、廓に育つても、靱負之介さまに添はうと思ふわたしが身の上、寄り〱の心がけ。

ト立廻り

瀬平　それ聞いて、拙者が喜び。

ト一つ〱、立廻りにて

花鳥　雷八に逢ふと思へば。

瀬平　油斷はあるまい。

花鳥　なんのその、石に立つ矢も女の念力。

瀬平　して又、刃物は所持なされしか。

花鳥　切れ味試した懷刀。

ト手裏劍に打つ。瀬平、見得よく、手桶にて留め、引き拔き、見て

瀬平　いよ〱安堵、矢張りあなたに。

ト打ち返す。花鳥も、梅の枝にて受け留め

花鳥　キツと、受取りました。

ト鞘に納め、懷中して

サア、この上は。

瀬平　して、拙者が申せし、返し板の床の間は、何所と云ふ事、ナ。

花鳥　サア、間每々々を改め見て、返し板の床の間は。

瀬平　知れぬも理り、隨分密かに仕込みしこの家の普請。

花鳥　心得ぬは、塀重門の內に人を通さぬ別御殿、あれが慥かに。

瀬平　して、その案內は。

花鳥　この緣側を眞直ぐに。座敷は人目、庭傳ひに。

瀬平　然らば花鳥さま。

花鳥　瀬平どの。

瀬平　イザ。

ト兩人、身拵らへして、花道へ行きかけると

チヨン〱にて、飾り、段々東へ引く。始終、鳴り物入り、合ひ方。道具模樣にて、兩人こなしあつて、本舞臺へ戾つて來る。道具、段々引く。飾りつけ、三間の間、二重舞臺、見付け、金の張り付け。眞中に一間

の床の間、黒塗り、床縁、後一枚。「必らず道を守る」の大橋流の掛け物あり。練り塀、塀重門。上の方、入込みの御殿の模様。矢張り合ひ方にて、道具とまると、花鳥、爰ぢや、と教へて、こなし。瀬平、心得、門の錠前、捻ぢ切り、内へ入る。二重舞臺へ上がり、兩人立別れ、キッと掛け軸を見て

瀬平　必らず道を守るの、この掛け軸。

花鳥　仁義に外れし一角なれば。

瀬平　道を守るは閑居の通ひ路、もの新らしき普請の結構。

花鳥　そんならこれが。

瀬平　板返しの床の間、マア、この掛け軸。

ト引き千切る。板返しにて、蜘手伴藏、百日、着流しにて、現はれ出る。

伴藏　ヤア、二見瀬平、傾城花鳥。

花鳥　ヤア、其方は蜘手伴藏。

瀬平　いつぞや館の騒動より、行き方知れぬ蜘手伴藏。さては雷八諸とも、一角に匿まはれて居つたよな。

伴藏　如何にも。當國の主、荒川一角と云ふは、身共が兄者人。兼ねて雷八どのと心を合しござれば、その縁でこの屋敷に匿まはれて居る。これをどうして氣取つて、うぬらは爰へ。

瀬平　エヽ、嬉しや、花鳥さま、伴藏が身の上知るゝ上からは、雷八は思ふ儘。盲龜の浮木、もう氣遣ひはござりませぬ。

ト尻をグッとからげる。伴藏、こなしあつて

伴藏　ハテ、大事を知つた兩人、いま命を取らるるを知らず、喜ぶうつけ者。マア、雷八どのより、閻魔の廳へうせう。

ト切りかける。

瀬平　ドッコイ。

ト受けとめ

敵の端くれ。

花鳥　討取る血祭り。

ト懐劍にて突きかゝる。伴藏、立廻り。瀬平、よろしく。これより鳴り物入りの面白き合ひ方。三人、始終二重舞臺にて、烈しき立廻りあつて、瀬平、伴藏を取つて引伏せ、切り倒し、乗りかゝり、見得よく兩人、止めを刺す。

花鳥　オヽ、天晴れ、瀬平。

瀬平　雷八が最後の先駈けひろげ。

ト扨る。チョン／＼にて、右の見得、三間二重舞臺へ簾下りる。ト又チョン／＼にて、一面にセリ上げる。椽の蹴込みの下、段々上がるに隨ひ、小幕下りる。トド二重舞臺セリ上がると、紋板打ち返し、舞臺、峨々たる山になる。チョン／＼にて山幕、切つて落す。

造り物、三間の間、二重舞臺、天井、丸太の切り小口の欄間。見付け、鼠壁、瓦燈口、ぐるり、山の切り出し。すべて、所々に、丸太橋、金山の關口の模樣にて、岩窟の住居、道具に好みありて、この二重舞臺の上には、和田雷八、百日、着流し、褥の上に直り、銀の菊燈臺を灯し、見臺に向ひ、軍書讀誦の體にて、高蒔繪の煙草盆を扣へ、長煙管にて煙草のみ居る。琴入りの合ひ方にて、道具とまると、雷八本を繰返し見て、

雷八　孫子の曰く、之を按に謀り事を以てして、其精を索む。曰く、主孰れか道ある。將孰れか能ある。天地孰れか得。法令孰れか行はる。兵衆孰れか强き。士卒孰れか練れる。賞罰孰れか明かなる。吾れ、之を以て勝負を知る。ムウ、この書を見るにつけても、この雷八は、北畠主計正を手にかけ、いま一角がこの館に、人知れず潜み居るも、時節を待つて四海を掌握。追ッつけ青雲の兆し。我れながら天晴れ。ハテ日本の豪傑英雄ぢやよな。

トこなあしろ。仕掛けにて、天井より血汐流れる。雷八が着附けにかゝる。雷八、ヂッと見て

ハテ、思ひがけなき血汐の滴り。ハヽア、さては一角が例の短氣で、家中の者を手討ちか。但しこの上は返し板の床の間、伴藏の身の上か。何にもせよ、どうやら氣遣ひ。

トきつと立ち上がり、天井を見ると、岩の端間にて、赤子笛泣く

ヤア、心得ぬ赤子の泣き聲。ムウ、すりや、この所へ。

ト振り返り、岩蔭をキッと見る。松が枝、右の赤子を抱き、ツカ／＼と出て

松枝　お久しや、兄さん。

トきつと下に居る。雷八、ヂッと見て

雷八　ハヽ、そちや妹松が枝。この館へ入込み居る樣子は疾より知つたが、さては身共が在所を知らん爲、桃の井のひんこめが指圖であらう。

松枝　エヽ、人でなしの兄さん。コレ、お前の悪事ゆゑ、北畠桃の井のお家も騷動。蟇目延引は違勅の科とあつて、若殿様やお姫様はナ。

雷八　科人になつたも身共が計らひ。ヤイ、松が枝、うぬが抱いて居るその餓鬼は。エヽ、さては傾城花鳥が産んだ靱負之介が子悴ぢやな。

松枝　イエ〳〵、この子は若殿様や花鳥どののお子ではござんせぬ、ツイ、餘所の子ぢやわいなア。

ト　こなしあつて、抱きしめる。

雷八　ても、嘘を吐く奴ぢや。コリヤ、土龍同然に土中に住んでも、何もかもよう知つて居る。靱負之介子悴と云ひ、松が枝、こりや好い所へ來たわいやい。

松枝　エヽ、お前はなア。

雷八　うぬが親の養子になつたこの雷八、云はゞ赤の他人。暫らく見ぬうち大分脂が乘つた。事に依つたら身共が枕の伽をさしてくれうわい。

松枝　なんぼう養子でも、一旦兄弟となつたわたしに、その詞。イヤ、畜生に劣つた雷八どの、お前の在所が知れる上は、両家の納まり。さうぢやぞ。

ト　行かうとするを、雷八、引き戻し

雷八　コリヤ、うぬ、桃の井北畠の奴等に、身共が在所を知らすのか。

松枝　知れた事。お家の仇、靱負之介さまのお爲、皆この館へ入込みてござるも、お前の在所を知らん爲。それぢやに依つて。

ト　また行かうとするを、引き戻し折りつけ

雷八　身共を主計正が敵と、付け狙ふ下郎めや女ばら。大方、それも越野勘左衛門めが後楯であらうが、そりや大鵬を狙ふ孑孑蟲。ハテ、ぞんざいな奴等ぢやなア。

松枝　エヽ、この樣子を、ちやつと皆樣に。

雷八　知らしたくば、その餓鬼おこせ。

松枝　アヽ、この子を。

雷八　捻り殺して北畠の跡目を斷つ。

松枝　ほんに胴慾なその心。

雷八　細言云はずと渡さぬか。

松枝　コレ、申し。この子を預かつた時、花鳥さまへ義理を立てて靱負之介さまに添ひたさ。わしが爲には、この子は結ぶの神様同然。滅多にお前に渡さうかいなア。

雷八　コリヤ、其やうに云つても、この二本の指がちよつと觸ると、われともにヒク〳〵。

松枝　エヽ。
雷八　サア、子倅渡せ。
松枝　サア。
雷八　サア。
松枝　サア〳〵。
　トじり〳〵付け廻し
雷八　ハテ、松が枝、もう叶はぬわいやい。
　ト和らかに云ふ。松が枝、ハッと思ひ入れある所へ、鐵平、岩蔭より、ツカ〳〵と出て、抱子を引き出す。
松枝　ヤア、その子を。
　ト寄るを、ポンと當てる。雷八、鐵平をヂロリと見て
雷八　そちや見馴れぬ下郎。
鐵平　イヤ、一角さまのお執成しにて、兼ねて雷八さまへ。
雷八　ムウ。すりや、一角が噂の、器量ある鐵平と云ふは。
鐵平　卽ち拙者がお目見得の印。
　ト赤子を刺す。
雷八　オヽ、出かした、鐵平。其方は兼ねて望みあると聞く。一角が心底明かせし上は、雷八が一味。いよ〳〵この上ともに。
鐵平　粉骨碎身忠義を立て、この身の出世を。
雷八　氣遣ひ致すな。取立てくれう。固めの血判。
　ト連判を抛り出す。
鐵平　ハッ。
　ト取上げる。松が枝、心附き、起き上がり、死骸を見て
松枝　ヤア〳〵、こりや大事のこの子を。
鐵平　おらが殺した。
松枝　エヽ、さては兄樣と一つの鐵平。
　ト脇差を抜き取り、切つてかゝる。鐵平、立廻り。雷八、抜打ちに、松が枝を一かせ切る。
鐵平　ヤア、雷八さま。
雷八　邪魔な女郎めは、この世の暇。
松枝　エヽ、情ない雷八どの。
　トよろぼひ寄るを、又ちよつと切る。
雷八　鐵平、改めて申しつける役目。兼ねて語らひし當國の浪人、その連判を以て、心變らぬ誓ひの血判、取るは其方。

鐵平　すりや、拙者に。

雷八　一角にも申し談じて。

鐵平　委細承知仕りました。

松枝　エヽ、此まゝ死ぬるが口惜しい。

　トまた寄るな

雷八　ハテ、死にあをちする女郎め。

　ト蹴り倒して、踏まへて

　鐵平、合點な。

鐵平　心得ました。

雷八　ドリヤ、苦痛を助けてくれう。

　ト踏みつけながら、グッと止めを刺す。チョン／＼にて。

　右の道具、後へ引ッ込み、山幕下りると、天王立にて、元へ戻る。簾巻き上げると、初手の御殿にて、上の方に、勅使、滋の井中將、床几にかゝり居る。雜掌、大橋大進、萬里小路隼人、衣裳、上下にて附き添ひ、下手に、荒川一角、辭儀して居る。

一角　勅使の趣き、荒川一角、有り難う存じまする。

　ト橋がゝり、臆病口、バタ／＼にて、瀬平、腕内、花鳥、善平、立廻りしい／＼出て

腕内　大切なるお客人を討取つた、二見瀬平。

善平　傾城の花鳥、遁がれはあるまい。

善腕　サア、覺悟せい。

腕平　イヤ猪口才な下郎め。この館に匿まひたる雷八が在所、知らんと入込んだ我れ／＼。

花鳥　この所で蜘平伴藏を討取つたは、雷八が居ると云ふ慥かな證據。

腕平　この上は一角、隱しても隱されぬ、其方が匿まひ居る人非人の雷八を。

花鳥　サア爰へ

雷八　早く出せ。

　ト始終、兩方立廻り。

中將　一角、あの兩人は。

一角　ハッ、北畠の餘類の奴等、和田雷八を、主計正が敵と附け狙ふ兩人。

大橋　北畠、桃の井は、蘇目延引違勅の科。それゆゑ一角どの、計らひにて、靭負之介彌生姬が首討ちしとの訴へなれど

隼人　正しく科人の餘類。

大橋　大內よりの勅命を蒙むり給ふ、滋の井中將さまの御前とも憚らず、狼藉の振舞ひ。

隼人　科に科を重ぬる兩人

兩人　キッと仕置を。

瀬花　エ、なんと。

一角　勅使の御前ぢや、尾籠な奴の。

花鳥　エ、。

トこなし。

善腕　ムウ。

トぎしむ。兩人、身構へ

中將　して、一角、其方承知の上は。

大橋　勅諚の趣き、和田雷八に蟇目の役目を申しつけ、御惱平癒御座あれば、重罪たりともその科を赦し

隼人　即ち大內北面の武士。

瀬平　ヤア、ナニ、すりや、和田雷八に科を赦して、改めて蟇目の役目を仰せつけられ

花鳥　北面の武士にお取立てなさるゝとな。

中將　和田雷八に下さるゝ、薄墨の御綸旨。

ト見せる。

瀬花　エ、。

ト顏見合せ、思ひ入れ

一角　なんと、聞いたか兩人。有り難い勅諚の趣き。雷八が身の上は金鐵、ビクとでも手ざしはならぬ。只今より北面の武士ぢやぞよ。

瀬平　エ、折角心を盡して入込みしに

花鳥　思ひ掛けなき勅使の趣き。

善腕　身動きひろぐと、打ち放すぞ。

大橋　サア、一角どの、早々和田雷八をこれへ呼び出し

中將　御綸旨拜領を。

ト返し板の內より

雷八　畏れながら勅使の趣き、和田雷八、領掌仕り奉る。

花鳥　ヤア、ありや雷八。

瀬平　もう、この上は、科人になつても構はぬ、家國の仇。

花鳥　瀬平どの。

ト兩人、行かうとするを

善腕　さうはならぬ。

ト立廻り、瀬平、花鳥、ポン／＼と、兩人を一緒に切り殺す。

一角　ヤア、兩人の奴等、身が家來を。
ト立ち上がる。
瀬平　ソレ、毒喰はゞ皿
花鳥　雷八を。
ト兩人、キッとなる。
一角　ソリヤ、用意の飛び道具。
捕手　ハア、。
ト橋がゝりより、捕り手大勢、鐵砲を持つて、バラバラと出て、瀬平、花鳥を、鐵砲にて取卷く。
火蓋を切らうか。
瀬花　ヤアこれは。
一角　身動きひろぐと、胴腹に風穴おやぞ。
花瀬　エ、。
ト無念がる。と雷八、板返しより、衣裳、上下に改め出て
雷八　コレサ、一角。お勅使の御前、彼れら如きに仰々しい。そりや何事。
一角　でも、こなたを狙ふ兩人の奴。
雷八　なんの、蟲螻めらに用心とは、大人氣ない。
瀬平　エ、、一別以來、逢はうと思うた和田雷八。

花鳥　コレ、寶の山へ入りながら、手ざしもならぬと。うぬを、なア。
ト齒ぎしみ
雷八　跪くな〳〵。只今綸旨頂戴すれば、蟇目の役目を蒙むり北面の武士。今こそ時到つて、龍の天上、雲の上の交り。不便や、もうこの後は、下々のうぬらが對面は叶はぬぞよ。
瀬平　エ、、その雜言。
花鳥　惡口を
一角　ソリヤ、油斷いたすな。
捕手　ハッ。
ト鐵砲を構へる。
瀬花　エ、、
トこなし。
大橋　勅使の趣き、蒙むつたとある雷八に
隼人　イザ
大隼　御綸旨を。
中將　如何にも。蟇目の役目相勤め、大内守護の武士司。
ト居直り、綸旨を差出す。
雷八　ハッ。

ト威儀を繕ろひ、綸旨を頂戴して
弓勢は曩に天聞に達せし如く、これより拙者、古への源三位頼政同然、蟇目の役を仕負ふせ、一天の君に仕へ、忠勤の勵み奉る。

隼人　オヽ、神妙なる勅答。

大橋　この上は取敢へず

中將　急ぎ都へ上洛。

雷八　幸ひは日を選まず。大君の御惱、束の間も猶豫は不忠、直さま出立。

一角　すりや、雷八どの、旅の用意は。

雷八　後より追ひ／＼、貴殿の計らひ。

大隼　中將さまにも、はや御歸館。

中將　雷八、とくと。

雷八　イヤ、御旅館まで御見送り。

中將　それは祝着。

花鳥　そんなら雷八

瀨平　うぬは、モウ。

雷八　逢はぬぞよ。イヤサ、われ達がやうな下々の匹夫めらには、もう對面は叶はぬ。越野勘左衞門めにもこの樣子を傳へ、この後は雷八に逢ひたくば、日の出の日天子を拜せよ、卽ち日輪は身共ぢや。わいらが身の上守つてくれう。仇に思ふな、冥加に盡きる。桃の井、北畠の餘類の皆の奴等に、必らず野垂れ死さらすなと、身が云つたと云へ。此方は罰を當てねど、可哀やどうで、碌な死はしをるまい。

花鳥　エヽ、口惜しい

瀨平　無念なわい。

一角　身動きひろぐと、火蓋を切らすぞ。

瀨花　エヽ、コレ。

ト顏見合せ、喰ひしばり、泣く。

大隼　中將さま、イザ、御歸館。

雷八　拙者がお供。

ト三味線入りの、下がり葉になる。中將を先に、隼人大進、花道へ行きかける。雷八、後に附く。花鳥、瀨平、ヂリ／＼と付け寄る。

瀨花　うぬ。

トきつとなる。

一角　ソリヤ。

捕手　火蓋を切らうか。

ト雷八が後に附く。瀨平に筒を向ける。瀨平、花鳥を

圍ひ、後へ、一角、こなし。雷八、瀬平、花鳥を見て
ニツコリと笑ひ

雷八　ハテ、水月を望む、猿猴めらぢやなア。

トこなしあつて、しづ／＼供して、花道へ行く。捕り手皆々、恟り、矢張り鐵砲を本舞臺の方へ向け、雷八が後に附いて入る。始終、三味線入りの下がり葉にて皆々、入り切ると、常の合ひ方に直ると。花鳥、瀬平こなしあつて

花鳥　瀬平どの

瀬平　花鳥さま

花鳥　思ひ廻せば、どうも

瀬平　命を捨てゝと存じましても、大内より勅諚。

花鳥　後日のお咎めを思ひ

瀬花　みす／＼見遁がしては、エ、。

ト泣く。

一角　オ、、道理ぢや／＼。ハ、、、、。どう跪いても雷八は大内の北面、附け狙へば逆磔刑。ハテ、よい態ぢやなア。

ト瀬平、こなしあつて

瀬平　申し、花鳥さま、あなたは雷八が様子を勘左衛門さまの方へ、拙者は死物狂ひに

一角　家來、ソリヤ。

捕手　ハツ。

ト橋がゝりより、捕り手大勢、バラ／＼と出て、取巻く。勘左衛門、捕り手の形にて、紛れ出て、瀬平、花鳥を取巻く。

動くな。

瀬平　イヤ、猪口才な奴ら。

ト皆々、追ひ拂ひ、勘左衛門、瀬平と立廻りあつて

勘左　コリヤ、瀬平。早まるな。

ト留める。瀬平、勘左衛門を見て

瀬平　ヤア、越野勘左衛門さま。

花鳥　ほんに、爰へはどうして。

一角　さてはうぬが、越野勘左衛門。

ト切つてかゝるを、勘左衛門、留めながら

勘左　コリヤ、天道誠を照らし給ひ、心を碎いて大内へお願ひ申した華山の役目、首尾よう相勤めし越野勘左衛門、その御恩賞として、桃の井、北畠の科は御赦免下され、敵雷八は兩家の心任せとある、コレ、有り難い御綸旨頂戴。

ト出して見せろ。

瀬平　すりや、あなたのお働らきにて、雷八は心任せと
な。

花鳥　それに今のお勅使樣は。

勘左　雷八を誘き出す身共が計らひ。お勅使と云ふはお家
の小姓田丸關彌、附き添ふ雜掌は射術の門弟。

一角　ヤア〳〵、すりや雷八を誘き出さん、うぬが計らひ
にて。

勘左　如何にも。首尾よう仕負ふせし上は、花鳥どのに
は、若殿の隠れ家へ、右の樣子を、お知らせ申して、兼
ねて云ひ合せし通り、皆一樣の出立ちにて、紀の川の晒
し堤に於て、雷八を待ち受けて。

花鳥　これまでの本望、若殿樣に

勘左　一時も早う。

花鳥　合點でござんす。

ト行かうとする。

一角　イヤ、それは。

ト行くな、瀬平、引留め

瀬平　動くな。

ト圍ふ。花鳥、向うへ走り入る。

一角　エ、勅使を似せ物と知らず、うか〳〵と雷八が。

勘左　イヤ、誘き出せしは、家國の敵ばかりでない。兼ね
て其方と心を合し居る、謀叛の棟梁和田雷八。

一角　ヤ、なんと。

ト橋がゝりより

鐵平　即ちその證據は、これにあり。

ト藤六と連れ立つて、ツカ〳〵と出て

勘左衞門さま、仰せつけられましたる、雷八一角が謀叛
の連判。

ト渡す。

一角　ヤア、鐵平。うぬは。

鐵平　越野家の家來、浪人なされぬ先勘當受けし、お詫び
の綱にこの館へ入込んだ、身共が本名は矢ッ張り、下郎
の鐵平。

藤六　この藤六が兄貴ぢやわい。現在の我が子を可哀さう
に、花鳥さまの子ぢやと云うて、おれに抱かして爰へお
こして、樣子を聞きや、殺さんとしたといな。

鐵平　幸ひおらが女房めが產んだ子悴を、若殿樣や花鳥さ
まのお子と僞はり、殺したりやこそ雷八が、ほつかり渡
したその連判狀。

勘左　忰を殺し、連判狀取りし功に依つて、元の主從。
鐵平　エヽ、有り難い。
瀨平　勘左衞門さまの御家來と、知らぬ拙者が、これまで種々の。
鐵平　イヤ、わざと本名名乘らぬも、一角めに油斷さす此方の手段。
藤六　もう、この上は。
勘左　謀叛の片割れ。兩人存分に。
一角　イヤ、勘左衞門を手に掛け、この樣子を雷八へ。
　ト また切つてかゝるを、勘左衞門、掻い潛り、兩人に突きやる。瀨平、鐵平、立廻り、トド、一角を切り殺す。此うち、勘左衞門、二重舞臺へ上がり
勘左　オヽ、出かした、兩人。
瀨鐵　この上は我れ〳〵も。
藤六　敵討ちの場所。
勘左　晒し堤へ、早く行け。
三人　ハツ。
　ト 兩人向うへ走り入る。藤六、橋がゝりへ走り入る。勘左衞門、二重舞臺にて、連判狀開き見て
勘左　天命歸するところ、有り難い。

ト 戴き、チョン〳〵にて。
　右の道具、西へ引き込み、後へ打抜き、見附け、紀の川の流れ、舞臺前まで、段々柵、川岸の體。東西に綺麗なる葭家、所々に大木の松の幹、舞臺前より後まで、段々上がりの吊り枝、藤の花一面に、道具の模樣、玉川の繪の心にて、晒し唄にて、道具とまる。
　ト 後の正面に、彌生姬、傾城初音、床世、此花、藻難波津、花鳥、皆一樣の姿にて、高下駄にて、布晒し居る見得、合ひ方になる。と右の拍子にて、皆々、前へ出る。よろしくあつて
此花　申し皆樣、もう日足も西へ傾けば
床世　仕事も追ッつけ
藻難　早う片附けうぢやござんすまいかいなア。
花鳥　それ〳〵、彼の事に心が急けば、ナア、申しお姬樣、イヤ、お國さま。
彌生　アイ、お花さまが云はしやんす通り、早く晒しを片附けて、肝心の事を、ナ。
此花　ほんに。それにお前方の殿御や、わたしが夫も、ま

だござんせぬわいなア。
四人　又どこぞで、惡性をして居やしやんすのでござんせう。
彌花　イヤ、さうではござんすまいが、早う來て下さんせうでなア。
ト在所唄になる。ト向うより、桃の井先次郎、靱負之介とともに、上張りにて、晒しの擔桶を差荷ひ出て
靱負　オツと、肩しよ。
先次　合點ぢや。
ト肩を替へ、二足三足いつて、又
肩しよ。
靱負　オツと、合點ぢや。
トこんな模樣にて、兩人、舞臺へ來る。
彌生　申し、こちの人。
花鳥　最前から待ち兼ねたが。
此花　お前も今かいなア。
靱負　お花が知らせ、取るものも取り敢へず
先次　それで急いで來たわいなう。
ト擔桶を下ろし
女皆　イ、エ、お前方は例の惡性で

靱負　イヤ、コレ。
トこなしあつて
もう、そこどころではない。
ト改まつて
彌生姫、花鳥、先次郎どのにも、この靱負之介を始め、兩家に所緣ある皆も、みな此やうに賤の姿となり、この所にて家國の仇、兄者人の敵雷八を
先次　サア、討取る手筈に、勘左衛門が計らひ
此花　先次郎さまに連れ添ふ、わたしも共に雷八を
皆々　助太刀は皆一緒。
靱負　これにつけても、不便や松が枝は一角が館にて、雷八が手にかゝりしとの事。
彌生　また、佐國どの、小槇どの、自らや殿樣の身替り。
花鳥　皆の敵、その恨みも
皆々　兎角雷八を。
靱負　コレ、もう追ツつけこの所へ來れば、矢張り賤の女。
皆々　合點でござんす。
トまた晒しの合ひ方になる。と向うより、中將、雜掌、雷八、附いて出て、花道にて

中將　アレ、雷八。優しき賤の手業。
雷八　中將さま、さぞ珍らかに思し召されませう。暫時あ
れで御遊覽を、ナウ御兩所。
大隼　如何にも。雷八どのゝ仰せの通り。
雷八　イザ〳〵、お越しあられませう。
ト中將を進め、本舞臺へ來る。靫負之介、皆々、顏を
隱して、片寄るを
雷八　コリヤ〳〵、苦しうない。其方達が手業を御遊覽あ
らせらるべきとあるお勅使樣、有り難い事だと思ひ、構
はずと布を晒せ。冥加に叶つた仕合せな奴等の。早う早
う。
ト此うち、中將は下座に直り、辭儀して
中將　申し、皆樣。
大隼　和田雷八を、これへ誘き出してござりまする。
ト下手にゐて、辭儀する。雷八は、眞中にて中將を見
て
雷八　ヤア、お勅使樣、御兩所、そりや何事でござる。
トこなしある。
靫負　出かした闘彌、扣へい。
中將　ハツ。

ト中將、下へ下がる。
雷八　ヤア、北畠靫負之介。
靫負　珍らしや、和田雷八。
皆々　遁がれはあるまい、覺悟せい。
ト脇差、手挾み、取卷く。
雷八　ヤア、桃の井先次郎、彌生姬、兩家に所縁の奴ばら、
こりや、どうぢや。
ト向う、戸屋の内より
勘左　エイ。
ト掛け聲。雷八が腕に、矢立つ。橋がゝり、臆病口よ
り、鐵平、瀨平、出て
瀨鐵　雷八、最早遁がれはあるまい、
雷八　すりや、これは。
ト勘左衞門、向うより、弓を手挾み、出て
勘左　殿主計正さまへ射かけしは、某が奉納の矢の根、そ
の矢を以て腕を縫ひしは、越野勘左衞門が年來の恨み。
蟇目の役目も先達て仕負ふせしゆゑ、其方は兩家の心任
せとある、誠の御綸旨。
ト見せる。
瀨鐵　謀叛人と云ひ

靱負　兄者人の仇
皆々　家國の仇。
雷八　ムウ、さては似せ勅使を拵らへ、何もかも勘左衛門が手段ぢやな。よいワ、この上は、マ、返討ち。覺悟せい。
ト身構へする。
皆々　サア、雷八。遁がれはあるまい。覺悟せい。
ト詰め寄る。
勘左　ヤレ、待たれよ、方々。雷八をこの場にて討取るは易けれど、一旦軍次兵衛が情にて、若殿樣や姫君樣のお身替りに立つたる、佐國小槇が菩提の爲、まつた大切なる科人、大内へ奏問の遂げ、お指圖次第。
靱負　成る程、この樣子、急いで奏聞の上。
勘左　先づ／＼この場はめでたく、お立ち／＼。
ト打出し。

幕

けいせい倭莊子（終り）

「けいせい忍術池」再演絵本の表紙

諏訪の海、氷の上の通ひ路は、月吉原に突出しの新造、唐やうで書く起證文、七枚つぎの宿送り、軍鶏駕籠の献上に、聲ぢや／＼と閨の駈引き、禿の合圖は、さればはやァ

いなば出口へ
送らんと

けいせい忍術池

東西六丁

夕暮方の廓景色

風に叫ぶ清少の穂は、雨にうそふく五輪うち、所は津の國からす原、幼な馴染の女房は、判じ物で知る夫の去り狀、三くだり半の早飛脚、網乘り物の結納に、爰ぢや／＼と村の寄合ひ、狐の證據はサアこんだ

けいせい忍術池

稻葉小僧新助といふ盜賊があつた。多く大名の家を稼いだが、天明五年九月十六日、一ッ橋邸へ忍び入つて捕へられ、獄門に懸けられた。この盜賊の事を脚色したのが「けいせい忍術池」で、天明六年十二月十七日初日で、大坂角の芝居へかゝつて大當りを取つた。主人公の東藏が卽ち新助で、稻葉小僧を稻田東藏ともじつたのである。大坂狂言としては珍らしく、世界を江戸に取つて、當時有名だつた笠森おせんを取込んだなぞは面白い。

上畑當馬。氏江左衞門(中山小三郎)川那部伴藏。稻田伊豫之助。鐵火の權八(坂東彌藏)仲居お粂。兵庫女房更科(中村粂太郎)薗原伏屋之介(市川門三郎)遠山甚三郎。奴有平(中山他藏)薗原圖書。花守り木曾兵衞(嵐七五郎)花守り大作。石堂主計頭(三桝大五郎)御臺おすわの方。笠森おせん(花桐富松)信濃當藏。萬野兵庫(市川團藏)齋藤龍興。きほひ江戸七(藤川仲藏)乳人渚(尾上多見藏)傾城此花。腰元松ケ枝。大作女房おます(嵐村次郎)辨天駒助。髙島大助。質屋十兵衞。兄太九郎(三桝松五郎)土手の銅鐵。八代一學(中村治郎三)八ッ橋村都市。足利義晴(中山來助)傾城花扇。妹小糸(岩井半四郎)稻田東藏。亭主才兵衞(淺尾爲十郎)舞子妻菊。九重姬(尾上菊五郎)

京坂で餘り上演されるので、江戸でも一度興行された事がある。それは文政三年正月の河原崎座で、名題は「御誂玉似貌繪本」と云つた役割は左の通りであつた。

稻田幸藏、花守り大作(五世松本幸四郎)九重姬(松本よね三)妻更科。女房おます(吾妻藤藏)兄太九郎(淺尾友藏)牛島の願鐵坊(市川宗三郎)小山判官。花守り木曾兵衞(大谷馬十)花守り杵藏。藤島兵庫(七世市川團十郎)

願鐵坊といふのは原作の銅鐵、判官は圖書、杵藏は都市、兵庫は萬野兵庫である。

けいせい忍術池

發端大序

金杉稻荷の場
深川八幡の場
柳原土手の場
薗原御殿の場

役名――齋藤龍與の靈。稻田伊豫の助の靈。氏江左衞門の靈。上畑矢柄 實ハ薗原伏屋之助。薗原伏屋之助 實ハ三河村の都市。薗原圖書。八代一學。上畑新吾。近藤七郎平。葉里愛馬。扇屋卯八。質屋源左衞門。上畑屋大作 實ハ平柳銀兵衞。傾城、花扇、同、此花。舞子、妻菊。同、小芝。同、花野。仲居、お粂。同、お濱 實ハおきよ。梅津宰相娘、九重姫。九重姫 實ハ妹小糸。幇間鐵八、實ハ兄太九郎。手下、土手の銅鐵。同、辨天胴助 實ハ幇間、五丁。遠山甚三郎。奴、有平。御臺、おすわの方。石堂主計頭。萬野兵庫。同女房、更科。笠松村萬吉 後ニ稻田東藏。

造り物、一面の二重舞臺、向う金襖、前半簾、おしま付きの高欄、幕の内より、齋藤龍與、頭はしやりかうべにて、着付け、法眼袴にて、褥に直り居る。稻田伊豫之助、氏江左衞門、素袍立烏帽子、外に侍ひ五人、衣裳上下、皆々頭はしやりかうべ。笠松村萬吉、丸額の前髮、百姓にて、木綿やつしにて皆々に取卷かれ居る。この見得、天王立ち、ドロ〳〵にて幕明く。ト始終寢鳥、薄ドロ〳〵。

侍一　サア、繩かけて拷問する。

侍二　尋常に

皆々　腕廻せ。

ト か〻る。萬吉、立廻りあつて

萬吉　ア、コレ、おりや繩か〻る覺えはない。滅多な事をせまいぞ。

侍三　ヤア、吐かすまい。當美濃の國、笠松の里に於て、百姓治郎作が悴。

侍四　耕作の業を嫌ひ、海道へ出て往來の懐中を探り、印籠巾着を切り取り、又は口論を仕掛けて金銀を強請り取る事、上聞に達したれば、遁がれぬ所ぢや。

皆々　繩か〻れ。

トまた立廻りになり、萬吉、皆々突き退け

萬吉　エヽ、滅相な事ばつかり云ふわいの。この萬吉は、成る程、笠松の者なれど、親仁が死なれてから、母親なしの一本立ちの孤兒。茶を呑めの飯喰へのと、近所の世話になるも怪體が惡さ。大道へ出て、一膳飯のてん屋物商ひなして、つき米に追はれるゆゑ、思ひ付いた晝とんび。折にふれてははつたりも働らいた覺えあれど、高の知れた端下仕事。口明けて見世出す程の奉公はない。それに仰山さうに繩かゝれとは、マア、なんのこつてごんすぞいの。

侍一　ヤア、不敵な雜言。踏み付けて繩かけい。

皆々　腕廻せ。

ト又かゝる。此うち、始終寢鳥、ドロ／＼。萬吉、よろしくあつて

萬吉　老先のあるこの體、そんなで行くのぢやないわい。

侍一　ハテ、辯舌と云ひ丈夫な一言。當美濃の國笠松の里、萬吉に

皆々　相違ござりませぬ。

龍興　笠松の里に於て、人となりし萬吉に相違なくば、伊豫之助、親子の對面いたしてよからう。

伊豫　ハツ、伜萬壽丸、無事にあつたか。

萬吉　なんの事ぢや。おれが名は笠松村の萬吉。それを萬壽丸の羊羹のと、菓子屋のやうな名を呼ばんすは、とんと合點がいかぬ。

左衞　不思議は尤も。幼少にてお別れありし、こなたの實父と云ふは、これなる稻田伊豫之助どの。親子の對面召されてよからう。

侍五　サア、萬壽丸どの。

皆々　御親子の對面。

萬吉　矢ツ張り合點がいかぬわいの。今日は例年の南宮祭り、人立ちが多いゆゑ、夜のうちから出かけ、好い仕事をせうと思ひの外、この和郎達が出て來て、無理無體に爰へ連れて來た。ちよつと來いに引ツ張られるのは常の事なれど、括れの縛れのと云ふかと思へば、親子の對面せいとは、上げたり下げたり、なんぢややら、ちつとも譯が知れぬ。

伊豫　ハテ、親はなけれど我が子の成長。この伊豫之助は其方が親ぢやわいやい。

萬吉　イヤ、おりや笠松村の治郎作が伜萬吉。こなさんのやうな結構な親、持つた覺えはないぞ。

左衛　藥の上より捨子となりしゆゑ、誠の親を知らぬが尤も。幼名は萬壽丸、正しく稻田どのゝ嫡子なれど、捨子となりしこなたの身の上。

萬吉　待たんせや。さう云はんすと、どうやら覺えがある。成る程、おれを捨子ぢやと云ふ事は、死なれた母者人も話して聞かして居たが、なんぞ慥かな證據はごんせぬか。

伊豫　誠に、其方が生立ち、左の腕に三つの黑子が、即ち稻田の定紋と子孫に傳はる。

萬吉　ドレ。

ト左の腕を捲り見て

ほんに、おれが腕に三ツの黑子があるからは。

伊豫　この伊豫之助は眞實親身。同性の親ぢやわいやい。

萬吉　ムウ。そんなら、この萬吉は稻田どのゝ

伊豫　忰。

萬吉　親人。

兩人　ハテ、思ひがけない對面ぢやなア。

ト始終寢鳥、ドロ／＼。萬吉、思ひ入れあつて

萬吉　ムウ。美濃の國齋藤龍興公の身内に於て、三人衆と呼ばれし、稻田どのゝ、嫡子と生れしこの萬吉。捨子となりしその仔細は。

伊豫　稻田家の惣領なれど、成人の後、大膽不敵に强氣をなし、金氣を盜む相ありと、我れを諫むる者あるゆゑ、家來に申し付け、笠松村へ捨子となせしも、光陰經つて十七年。

萬吉　それとも知らず、土民の中に交はつて、鋤鍬取りし今日只今、この所へ招かれしは。

龍興　その仔細は、この龍興が申し聞かさん。過ぎつる因幡山の合戰に、無念の敗北、その恨みを晴らさん爲。

左衛　我が君齋藤龍興公、味方の武士を召し寄せて、稻葉山に籠城ありしその時に、足利武將義晴の、命を受けたる寄手の大將は

伊豫　即ち信州薗原左京太夫賴重、不意を討つたる夜軍に

龍興　味方の軍勢散り／＼に、或ひは討れ或ひは落人。口惜しや雜兵の手にかゝらんよりはと、本城の廣庭に、齋藤家に傳はる系圖の旗を押立て、最期の酒宴酌み交す。

左衛　この氏江左衞門も、御主人龍興公の御供、冥途の先駈け。

伊豫　殿の御首を敵方へ渡さじものと、兼ねての覺悟。

龍興　鎧の上帶ソッツと切り、双肌脫いで九寸五分、弓手

の脇へがばと突ツ込み、右手へキリ〳〵と引き廻せば

侍一　待ち設けたる稻田どの、いで介錯と

左衛　立寄る間も、嶮しく攻める寄手の軍兵。

伊豫　大將蘭原左京太夫が、手勢殘らず込入つて

左衛　遂に敢へなく龍興公の

伊豫　首は敵へ取られし無念。

龍興　いま其方を召し寄せしは、この龍興が最期の無念。

皆々　我れ〳〵が修羅の妄執。

伊豫　親の鬱憤。

龍興　晴らさせんその爲、關八州の味方を招き、足利武將を亡ぼし、蘭原左京太夫が首取つて、供養に手向けてくれ。

皆々　萬壽丸、其方への頼み。

ト此うち、萬吉、いろ〳〵あつて

萬吉　ムウ。さほど由緒ある我が身と知らず、民間に膝を並べ、仇に暮らせしこの年月。併し、百姓にて生ひ立ちし、この萬吉が、反逆謀叛に組みするは、心元ない。

龍興　イヤ、それこそは齋藤の、家に傳はる系圖の旗。奪ひ返して味方の催促。

萬吉　して、その旗は何國に。

伊豫　討手に向ひし蘭原家に。

萬吉　すりや、蘭原左京太夫が所持するとな。ムウ。その系圖の旗を奪ひ返して、一味を語らひ、時日を移さず謀叛の根組み。龍興公の鬱憤、親人の無念、諸公の妄執、追ツ付け晴らしてお目にかけう。

皆々　天晴れ忠臣、健氣な一言。

萬吉　士卒をなづくる軍用金、諸方の珍器を盜み取り、忍び忍びに一味の催促。我が名も今より改めて、東國筋に隱れ潛むの文字を其まゝ、稻田東藏。

伊豫　我が子ながらも丈夫の魂ひ。

左衛　時を移さず軍慮の計略。

萬吉　龍興公、親人。

龍興　出かした東藏。

萬吉　ハツ。

ト辭儀する。ト大ドロ〳〵になり、外に太鼓を打つ。

萬吉、こなしあつて

ハテ心得ぬ。天地一度に震動して、アレ〳〵〳〵、あの閃きは。

伊豫　我れ〳〵が、罪障に引かれて冥途の呵責。

萬吉　すりや、修羅道の

皆々　責め太鼓。
ト皆々苦しみ、掛け煙硝パッと立ち、萬吉、キッとなつて
萬吉　これも足利薗原が謀計ゆゑ。
トいろ／＼見て
エヽ、口惜しや、無念やなア。
ト大ドロ／＼にて、萬吉を切り穴へセリ下げる。
ト黒幕切つて落す。ト稻村、石塔、墓原の體になり、合ひ方にて道具とまる。但し小さき辻堂あり。ト橋がかりより、土手の銅鐵、毬栗、破れ衣の汚なき坊主にて、狐を一疋ひん抱へ走り出て
銅鐵　お頭の云ひ付け、此奴をしてやらうと思うて、心を盡した。コレ、この狐は、えらい鬼に通じて妙なる獸物。習ひ覺えた眞言の法を以て、六面の手箱に封じ込み、眞言祕密の修法を以て行へば、幻術は心の儘。早うお頭に。
ト辻堂へ立寄ると、少しドロ／＼にて、萬吉の東藏、盜賊の形にて、手に髑髏を持ち、ツカ／＼と出て
東藏　ハテ、思ひがけない。今まどろみし夢の中に、我が素性、本國の樣子、親子の對面、龍興公のお姿まで、ありあり見たは、ムウ。
トこの時、フト髑髏を見て
我が手に殘りしこの髑髏。さては最期の念に依つて、性を引いたる美濃の仇、信州を亡ぼせよと、親人の業通。すりや、この髑髏は。
ト思ひ入れあつて、我が腕を喰ひ裂き、髑髏へ血汐をかける。仕掛けにて髑髏赤うなる。
さてこそ／＼。我が血潮に、染まりしこの髑髏は、親人稻田伊豫之助どの、無念の魂魄導く印。この上は夢の告げ、修羅の妄執晴らすは追ッ付け。親人、お氣遣ひ下されな。
ト髑髏を戴く。銅鐵、こなしあつて
銅鐵　お頭、こなたは。
東藏　土手の銅鐵、今の樣子を。
銅鐵　殘らず聞いたこなたの素性。稻田伊豫之助の御子息なれば、いよ／＼以てこなたへ一味。我れこそ氏江佐衞門が家來、本名は南宮左忠太。
東藏　すりや、同じ齋藤家の別れ。この後とても水魚の交はり。して、申し付けた一儀は。

銅鐵　たつた今、手に入つたこの白狐。
東藏　出かした。この上は倶に天を戴かず。
銅鐵　短兵急に事を計るは。
東藏　銅鐵。
銅鐵　お頭。
東藏　來い。
ト銅鐵を連れ、東藏、ツイと向うへ走り入る。ト口上出て、只今仕りまするが狂言の發端でござります、と口上云うてチョン〳〵にて道具、返し。
黒幕切つて落す。後ろ奥深に淺黄幕。上より一面紅葉の吊り枝下りる。臆病口の方より絹幕打つたる實木突き出す。橋がゝりの方より、筋違ひに障子屋體。すべて深川八幡の境内、紅葉狩の遊興する體。鳴り物入りの面白き合ひ方にて、道具とまる。と、小芝、花野、踊り子の形。妻菊、藝子の形。お粂、仲居の形。上畑新吾、藥里當馬、近藤七郎平、衣裳羽織、皆々紅葉の本笠を着て、この人數、帶を持ち合ひ、蛇の尾取ろにて、鐵八、幇間にて捉まへにかかるを、いろ〳〵あつて、トゞ妻菊を捉まへ

鐵八　サア、捉またへ〳〵。
ト皆々八方へ別れる。
なんでもメめた〳〵。
九重　アレエ〳〵。
鐵八　きやつ〳〵と云ふまい。深川の里では、鐘を鳴らす藝子の妻菊さんを、幇間の鐵八が、生捕つた〳〵。サアサア、鬼は極まつたぞ。
妻菊　それでも、こちや嫌ぢやわいなア。
鐵八　嫌ならこの鬼の餌食になる心かえ。
ト抱きつく。
妻菊　嫌ぢやわいなア。アタ好かん。
ト振り切り逃げる。
鐵八　ドツコイ、嫌とは云はさぬ。
トまた取りつくを妻菊、引退ける。
くめ　そんな巧い事は、仲居のお粂がさゝぬわいなア。
トお粂を新吾支へて
新吾　身共が加勢ぢや。鐵八、急げ〳〵。
鐵八　してやつた。妻菊さんを手に入れた
ト追ひかける。
妻菊　アレイ〳〵。留めていなア。

ト逃げ廻る。
當馬　ドツコイ、此奴はおれがやらぬワ。
七郎　コレ〳〵當馬、貴殿、風が變つたの、
當馬　變らにやならぬ。我れら首たけぢや。
鐵八　そんならお前が、妻菊さんに。こりやならぬわい。
當馬　コリヤ〳〵お粂、頼んで置いた返事はどうぢや。
くめ　サア、よいわいなア。妻菊さんはわたし次第。又わたしが事は、あの子次第ぢやわいなア。
新吾　そんなら妻菊、頼んで置いたお粂が返事は。
妻菊　そりや、わたしが呑み込んで居るわいなア。
新吾　何も呑み込んで居るとばかりで、入込まさねば譯が立たぬ。
花野　小芝さん、見やしやんせ。この間から又しても、妻菊さんやお粂贔屓ぢや。なんでも云うてぢや事を聞かしやんすと思へば、道理こそ、思ひ參らせ候べく候ぢやわいなア。
小芝　それで追從して、機嫌取らしやんすのぢやわいなア。
七郎　伴藏當馬、卑怯々々。なぜに男でせぬぞいの。

新吾　其所に如才はなけれども、ナウ當馬。
當馬　オ、サ〳〵、館では天晴れ奥女中が心をかけ、當馬さま〳〵、薬里當馬さまと付け廻せども、廓の戀は又格別。男ではいかぬ心底ぢやて。
七郎　さう聞けば、心でもあるかい。
新吾　シタガ、もう人頼みより、直付けにお粂。
當馬　妻菊。
新吾　返事はどうぢや。
ト兩人に抱きつく。
七郎　我れらは、これを。
ト小芝を抱く
小芝　オ、せわし。嫌ぢやわいなア。
くめ　コリヤ、ちよん〳〵の間で、舞臺一面の色事になつた。
新當　サア、その色事にかつてくれぬか。
皆女　オ、なめ。
男三　なめとは何を舐めるのぢや。
ト突き退ける。
鐵八　イヤ、舐めるのぢやない、呑むのぢや。
皆々　ヤア。

鐵八　今日の趣向は紅葉狩、此花さんを鬼の大將にして、呑み明ける鬼大臣さまの女子退治。これも吉原の廓へ通ひ詰めてござつた。所で、どう風が變つたやら、この二三日後から、深川へお出でなされて藝子狩り。それでこの八幡の料理茶屋を惣揚げにして大だて。紅葉の作り花の紅葉で、紅葉狩の御遊興。

くめ　深川の色達を、手に入れる呑み酒次第。シタガ、お前方の小さ酒で、我れらを退治とは、覺束ないわいなア。

新吾　よい／＼。性根を据ゑて呑みかつて

當馬　短兵急に蒸し返しに

七郎　刺し通し／＼

皆々　退治して見せうわい。

鐵八　イヤ、酒の事ばかり云はずと、紅葉狩には相應な、平の維茂。ぜんざい雜煮すましでもよし、或ひは又、小豆餅の喰ひくらしてはどうあらう。

新吾　イヤ、酒盛りよりは餅盛りが、我れ／＼が勝手ぢや。

くめ　その勝手をさゝぬが鬼仲間の趣向。

妻菊　アレ／＼、鬼のお頭が

女皆　見えるワ／＼。

唄へ上戸を急ぐ紅葉狩／＼、今日の趣向を尋ねん。

ト摺り鉦、鳴り物入りの合ひ方にて、向うより傾城此花、衣裳、紅葉花立ての長柄の傘をさしかけさせ、禿袖野、市彌、これも花立てを來て、紅葉の枝に大きなる杯を付けさし向ひ出る。皆々花道にて

此花　實にや長らへて勤めるとも、今は早、誰れ白雲のお客様、しげる小笹のさゝめ事。人こそ知らね揚げに來て

市彌　しめて逢う夜の移り香は

袖野　忘れもやらぬ夕まぐれ。

市彌　しぐるゝ床を焦れつゝ

此花　四方の別れも懷かしく、伴ひ來る約束に

袖野　例もの色も目をそひて

此花　恥らふ顏のした紅葉。夜の間の露に

二人　濡れつらん。

妻菊　酒の作略。

女皆　相詰めましてござります。

此花　コレ見やしやんせ。この杯で今日の討手を、押し伏せるのぢやわいなア。

鐵八　討手の大將、その大臣樣を相手の、此花さんが押伏せるとは、茶臼山の紅葉狩か、浮む瀨よりはどえらいどえらい。
新吾　そんなら、その杯で。
當馬　ヤア、これはならぬワ。
くめ　ならねば戀もならぬわいなア。
此花　酒は手管、戀の本地。
七郎　酒を手管本地とは。
此花　あら／＼語つて聞かすべし。妻菊さん、小芝さん、花野さんも共どもに。
三人　合點でござんす。
當馬　酒は本地を
男三　承はらう。
　ト太鼓地になり
鐵八　東西々々とうざい。
　ト此花、皆々、こなしあつて
此花　先づこの深川の里開闢より、戀に身振りの振りやうは。
　ト小芝、花野、兩端。妻菊、眞中にて
妻菊　さて第一は、男の惡いとも、また粹顏してなめかゝるゆゑ憎みあり。
花野　取分けざぶりの惡洒落に、四人程を捨て給ふ。
小芝　今一振りは腹の立つ、高顏してせい八百。
妻菊　云ふを先より顯はして、根性惡さの野暮天。
花野　しなだれるのが嫌味の立ち先。
小芝　外らさぬ身振り。
花野　意地惡の根性。
妻菊　膨れる程猶付け廻る三人身振りの
皆々　こげんなか。
新吾　ハテ、手管の本地、驚ろき入つた。
當馬　いよ／＼腹の裂ける程、吞み据ゑて、戀が叶ふか、酒毒に中るか。
新吾　二つに一つは遁がしはせぬ。
鐵八　ても、きつい惚れやうな。
くめ　コレイナア。彼れこれ云うて居るうちに、その大將が押し寄さうぞえ。
皆々　ほんになア。
此花　隨分上戸に吞まさんせ。
皆々　合點ぢやわいなア。
此花　色酒に戀を掛けたる柵は

皆々　流れもあへぬ紅葉狩。

唄へ先づ木の元に立寄つて、四方の梢を眺めて入らせ給へや。

トこの唄にて皆々幕の内へ入る。新吾、當馬、七郎平は舞臺に殘り、後へ固まつて居る。一聲になり、向うより、上畑矢柄、衣裳羽織にて、紅葉の枝に樽を付け、蘭原伏屋之助、着付け、狂言にて、右の樽を差擔ひ、兩人出て

伏屋　エイサツサ

矢柄　エイエノエイ。

伏屋　なたまめこ。

矢柄　さゝまめこ。

兩人　ア、しんど。

ト花道にて

唄へ面白や、頃は長月二十日餘り、四方の笑顏もいろいろに、錦彩る庭の面。

伏屋　ハア、、幕を張つたり〱。餘所にも紅葉の彩り風。しな〱ひよろ〱〱。皆の顏も我が顏も、植ゑても隱れぬ蘭大臣とは我が事なり。如何に誰れかある。

新七　御前に候ふ。

ト向うへ出て辭儀する。

矢柄　御後に候ふ。

伏屋　ハ、、、。こりや、矢柄が出かし居つた。なんと皆の者、この蘭原伏屋之助が趣向は、天晴れ粹か〱。

新吾　イヤモウ、若殿には、けうとう上がりました。

伏屋　粹は上がつて、氷屋の狂言が、大不調法者でござります。

トこれより身分の口上よろしくあつて

當馬　イヤ〱若殿、出來ました。

新吾　御本國信濃の緣を取つて、戸隱山の紅葉狩。

矢柄　誠に故鄕へは、錦を飾る

伏屋　酒賣り人。

矢柄　それは唐土、會稽山。

伏屋　矢たけ心の冷酒を。

三人　飲めや唄ひや、やりかけたり。

矢柄　ヤツハイ、エイヤツハ、ホウ〱。コレ、この樽の

矢柄　底を叩けと仰しやるのか。

伏屋　袂に用意のこの杯。

ト出して見せる。

三人　ぬからぬ所が粋の骨頂。
伏屋　さらば樽の口明けうか。
　ト禿出て
市彌　申し〳〵、この幕の内から、お前方を呼びまして來いと云うてゞござんす。サア早う
皆々　ござんせいなア。
伏屋　これは不思議や、この山に、誰れ訪ふ人もあるまじ。氣に入りなる人の。
矢柄　誰れぢやいなア。
此花　わしが呼びに上げましたわいなア。
　ト皆々出る。
矢柄　ソリヤ出たワ。
此花　我れは、このあたりの酒呑童子。
三人　爰は聞える鬼の住家。
伏屋　如何なる鬼が出るとも、取つて押へ、切り伏せ呑みに、退治せいで置くべきか。
此花　さては御身は
皆々　上戸かえ。
伏屋　下戸が樽を持つものかい。
此花　そんなら杯。市彌袖野。

禿二　アイ〳〵。
　ト大杯持つて來る。
伏屋　ヤア、これでか。
女皆　これでかとわえ。
伏屋　イヤ、この杯より、これではどうぢや。
　ト杯を見せる。
此花　オ、呑まぬ先から卑怯な事。こんな木の葉の杯は、龍田川へ斯う流してしまふわいなア。
　ト向う戸屋の内へ抛つた心する。
伏屋　そんなら、どうでもこれで呑めか。
女皆　知れた事いなア。
　ト戸屋の内より
はま　その酒助けてあげんすぞえ。
伏屋　これを助ける加勢のあるか。爰へ呼べ〳〵。
謠〽實にや數ならぬ身程の、山の奥に來て、人は知らじと打解けて、獨り眺むる紅葉ばの、色見えけるが如何にせん。
　トこの謠を大小入りの唄にして、これを割つてお濱、仲居の形、柏木が手を引いて無理に連れ出る。但し柏木、右の杯持つて居る。

伏屋　ヤア、仲居のお濱。この酒の加勢せうとは、その振りそか。

はま　アイ、この間から、突出しの藝子さん。

矢柄　して、加勢に出た、その藝子の

三人　姓名は、如何に〳〵。

くめ　あの子の名を云はうかえ。

伏屋　聞きたい〳〵。

くめ　あの子の名は、がと云ふわいなア。

伏屋　なんぢや。か。

矢柄　か。

伏屋　か。美しいかい名ぢやなア。

くめ　かの字の下を、指いて御覧じませいなア。

伏屋　なんぢや。かの字の下を指いて見い。こりや智惠袋を振はにやならぬわい。

矢柄　私しも指いて見ませう。

三人　我れらも一緒か。

伏屋　か。

矢柄　か。

三人　か。

伏屋　か。烏ぢやあらう。

くめ　なに仰しやるやら。

伏屋　からくり。

新吾　かゞみ磨ぎ。

七郎　金佛。

當馬　かせいた。

女皆　オ、辛氣。

伏屋　オッと出たこそ道理。かはらけぢやあらう。

妻菊　イ、エイナア。もう一字云うて上げさんせいなア。

くめ　そんなら、かしぢやわいなア。

伏屋　かし。ムウ、かしも云ふかな。

矢柄　かしや。

當馬　かし〳〵、かしらいもでもあるまいな。

新吾　かし〳〵〳〵。

伏屋　柏木、拍子木でもあるまいし。

はま　そこらぢや〳〵わいなア。

伏屋　柏餅ではあるまいか。

くめ　その柏餅と拍子木と、一つに合はして見なされいなア。

新吾　拍子木。

當馬　柏餅。

伏屋　一つに合はして拍子餅
矢柄　餅拍子。
伏屋　拍。
矢柄　子木。
女皆　もちつとぢや〳〵。
伏屋　かしは木。
皆々　さうぢやわいなア。
伏屋　そんなら柏木。ヤレ、大層な名ぢやなア……さうして、いよ〳〵加勢をしてくれるか。
柏木　ハイ、この杯で。
伏屋　ヤア。そりやおれが杯。
柏木　上げうかえ。
伏屋　おくれ。
柏木　女子が男に杯やるは、一生に一度ぢや。あなた知つてござるかいなア。
伏屋　なんぢや。堅うやりかけるな。
柏木　合點でござりますかいなア。
伏屋　サア、マア、合點ぢや。
柏木　オ、嬉し。
ト　こなしあつて、此花、杯を引取つて

此花　加勢さするはならぬわいなア。アタ厚かましい。先刻にから見て居れば、はしたない。なんぢやぞいなう。
柏木　あなたへ上げる大事の杯、合點ぢやと仰しやるからは
此花　サア、その合點ぢやが、わしや合點がゆかぬわいなア。
伏屋　なんの合點のゆかぬ事がある。これも趣向の一つになる、紅葉狩の狂言ぢやわいの。
此花　イエ〳〵、モウ〳〵狂言どころぢやない。殿樣、お前を爰には置かれぬ。此方へござんせ。
柏木　大事の〳〵杯の納まらぬうちは、何所へもやらぬわいなア。
此花　連れまして行て見せるわいなア。幕の内へござんせいなア。
柏木　イ、エ、わたしが連れまして行くわいなア。
此花　オ、なめ。殿樣。
柏木　イ、エ、此方へござんせ。
ト　兩方より引ッ張ろ。お粂、中へ入り
くめ　これはしたり、戀の湊に船が着き過ぎて、方返しがならぬ。爰はわしが思ひ付き。殿樣に面ない千鳥をさし

て、誰れぢやあらうが、捉まへなさつたお方が、酒の加勢はどうあらうえ。

伏屋　こりや、面白からう〳〵。

くめ　そんなら斯うして。

ト伏屋之助が目を括り

皆な合點かえ。

女皆　合點ぢや……ソレ〳〵、ヤアットサ。

ト踊り三味線、太鼓入りにて、殘らず踊り。伏屋之助、踊りながら捉まへようとする。柏木、此花、捉まへられうとする。お粂、此花に囁く。妻菊、お濱、柏木に囁く。右は踊りながら皆々思ひ入れ。踊り三味線早める。此うちお粂、此花を連れて入る。妻菊、お濱皆々柏木を無理に連れて入る。新吾、當馬、七郎平、矢柄、囁き合ひ、矢柄、奥へ入る。三人こなしあつて

三人　渡した。

ト三人も奥へ入る。トこれより大小入りの合ひ方になる。と伏屋之助、あたりを見て

伏屋　ヤア、。皆おれを鬼にして抜け居つたな。

ト右の合ひ方に合し

〽殿樣鬼ぢや、槌の子は鎗持ち、ようやり居つた、加勢の藝子がおぼこな顏で、口舌しまする口舌する。此花太夫がひつこなした顏に、角に生やして悋氣をしをる……しつこのばいこの、けち〳〵はら〳〵にならずとも、きりきりしつちよん〳〵、きりきり〳〵しつちよん〳〵、ちやうりやうふりやうら、りつろつろ、とふらはりやろらり、つろ〳〵ひやうらりひよ。

トちらしになる。

〽よろり〳〵と喜び伏すや、木蔭にかたしく袖に露深し、夢ばし覺まし給ふなよ〳〵。

トこなしある。トとひよろ〳〵になり、花野、妻菊、錦の袋を三方に載せ持ち出る。

〽これはこの所に仕ふまつる末社の神、如何に蘭大臣、慥かに聞き給へ、都梅津の宰相家公の御息女、足利の御仲人あれど、まだ輿入れなきゆゑに、取急げよとの御託宣、これに仕へてござんす。お目を覺まされ、とくに御祝言候へや。

ト花野、妻菊、三方を枕元に置いて入る。ト鳴り物打ちかける。

伏屋　アラ淺ましや我れながら、無明の酒の醉ひ心、など

ろむ隙もなきうちに、あらたなりける夢の告げ。
〽起きたる枕に雷火亂れ、天地も開き風をちこちの、たつきも知らぬ山中に、覺束なしや恐ろしや。
ト伏屋之助、袋を取上げ合點のゆかぬ思ひ入れ。
〽不思議や今までありつる女〱、とり〲化生の姿を顯はし。
トこの謠のうち、幕切り落す。柏木、姫の形。お濱、衣裳補襠。鐵八、衣裳上下にて、付き出る。

伏屋　コリヤ〱、囃子方、待つてくれ。こりや、なんの事ぢや。

柏木　自らが云ひ號けの殿御、薗原左京太夫さまの弟御、伏屋之助さま。

伏屋　最前の藝子がその形。今の詞。そんなら柏木と云ふは。

はま　忠家公の姫君、お云ひ號けの九重さまでござりまする。

伏屋　ヤア、。

九重　足利の御仲人にて、云ひ號けはありながら、祝言の遲いのを待ち兼ね、この東へ參りましたは、女の大膽とお蔑すみも恥かしけれど、思ひ餘りし自らが、切なる心御推量遊ばして、どうぞ御祝言を、ナウ、二人の衆。

鐵八　拙者事は梅津の宰相が家來、鳴尾左團治と申す者。

はま　私しは姫が乳人、渚と申しまする者でござります。

左團　この東へ姫を同道いたし、若殿伏屋之助さまの御身の上承るところ、吉原へお通ひあつて、晝夜の御遊興とあるを、これ幸ひと姿をやつし、姫にせめて內祝言と存ずるところ、又この頃はこの深川へとのお越し。それゆゑ幇間となつて、乳人を仲居に仕立て、姫は突出しの藝子と僞はり、里の者に呑み込ませ、今日の仕合せ。輿入れは表向き、先づ內々の御祝言なされて下さりませうならば、姫が喜び、我れ〱も有り難う存じまする。

伏屋　ムウ。そんなら其方達は、忠家公の身內の者ぢやな。

はま　左樣でござりまする。
ト此うち、薗原圖書、衣裳羽織にて、臆病口より出かけ聞いて居る。

伏屋　姫とおれとは、足利の嚴命を以ての云ひ號け。併し未だ婚禮せよとの御上意下らねば、私しに祝言はどうも。

九重　エヽ、折角この東の里へ參りましたは、どうぞ祝言

がしたさ。それに胴慾な。御上意が下らねば、祝言がな
らぬと仰しやれば、自らは兼ねての覺悟。さうぢや。
ト左團治の刀にて自害せうとするを

左團　こりや短氣な姫君。お待ちなされませう。

九重　それでも伏屋之助さまが。

圖書　イヤ、氣遣ひない。祝言の致させませう。
ト前へ出る。

伏屋　ヤア、伯父者人。

左團　すりや、こなた樣は、

圖書　伏屋之助が伯父、薗原圖書。

九重　そんなら自らと。

圖書　ハテ、祝言の致させませう。

伏屋　イヤ、伯父者人、それでは。

圖書　足利の御仲人、梅津の宰相公の御息女、九重姫に今
凶事あつては、薗原家の大事になるぞや。

伏屋　如何にもソレ。

左團　然らば御祝言のなされ下さりませうか。

伏屋　伯父者人の仰せ。姫が望みの通り。

九重　エヽ、忝なうござります。

左團　御祝言あれば、先達て御契約の通り、聟引手に一千
町の御朱印。
ト持つて出たを檢め、これを渡す。

伏屋　一千町の御朱印、受納する上は。

圖書　此方の重寶、時雨の色紙を差上げる契約。

左團　薗原家の御重寶、時雨の色紙は、後鳥羽院の御宸筆
とあつて、御主人忠家公の御懇望。

圖書　伏屋之助、紅葉狩の遊興に持參せしとある時雨の色
紙を、早くあの方へ。

伏屋　成る程、色紙お渡し申さう。上畑矢柄、これへ。

矢柄　畏まりました。
ト矢柄、色紙の箱を持ち出て
薗原家の重寶、時雨の色紙、お受取りあられませう。
ト左團治が側に置く。左團治見て

左團　かたしきの衣手寒く時雨つゝ、有明山にかゝる叢
雲。……誠に後鳥羽院の御宸筆、慥かに受納いたしてご
ざります。
ト箱へ納める。

はま　この上は、姫が望みの通り。

圖書　取持ちはこの圖書。

矢柄　急いで御內祝言。

ト銚子杯を取つて來て
九重　そんなら申し、伏屋之助さま。
伏屋　九重姫。
九重　オヽ嬉し。
ト杯を取上げこなしあつて、相に相生のと高砂の謠に
なると、渚酌にて、九重姫、伏屋之助、祝言よろしく
あつて
左團　先づ假の御祝言納まる上は
圖書　輿入れは近々身共が取計らひ。それまで姫は矢張り
當地の
左團　旅館に相待ち居ります。
渚　人目もあれば、イザお姫樣。
九重　申し、伏屋之助さま、必らずともに。
伏屋　氣遣ひしやんな。追ッ付け新枕をするわいなう。
九重　それを待つて居りまするぞえ。
左圖　一時も早う、サア、お姫樣。
伏屋　兩人ともに大儀ぢやあつた。
左渚　ハッ。
ト唄になり、九重姫、伏屋之助へこなしあるを、左
團治、渚、無理に橋がりへ連れて入る。トあと合ひ方

にて、圖書、伏屋之助、矢柄、顔見合せこなしあつて
奥より、新吾、當馬、七郎平、出て
三人　若殿、まんまと首尾よう
伏屋　伯父者人の指圖の通り、
都市　私しが殿樣になつて
圖書　云ひ號けの九重姫が、この東へ來て居るを知つたに
依つて、伏屋之助に祝言させば、云ひ交して居る花扇へ
立たぬ。それゆゑ何もかも、身共が指圖。甥の殿の戀の
取持ちは現在の伯父、この圖書が粹であらうが。
伏屋　イヤ、なんとお禮を申さうやら、有り難うござりま
す。
當馬　似せ物の色紙を渡してあれば
圖書　後日に輿入れしても、人が變れば卽ち姫は不義者。
新吾　御上意でも嚴命でも、去りこくるは此方の儘。
當馬　日本晴れに廓通ひ。
七郎　太夫どのへは心中が立ち
伏屋　此やうは嬉しい事があらうかいやい。
都市　申し、首尾よう仕負ふせました上は、私しへ。
圖書　約束の褒美。ソリヤ百兩。
ト抛つてやる。伏屋之助實は都市、取つて

都市　エヽ忝ない。これさへ取れば私しは、もう歸りたうござります。
圖書　如何にも、伏屋之助に仕立てゝ、姫と祝言さした其方なれば、一時も早う。
都市　畏まりました。
ト衣裳羽織を脱ぎ、やつしになる。
圖書　コリヤ、姫は旅館に居れば、必らず見咎められぬやう。
都市　イヤ、氣遣ひなされますな。この金を持つて、本國へ歸ります。
圖書　然らば大儀。
都市　御縁があらば、また重ねて。
圖書　早う歸れ。
都市　合點でござります。
ト都市、向うへ走り入る。あと皆々こなしあつて
三人　サア、この上は誠の若殿様。
伏屋　祝ひ事に、假家で酒にせう。
圖書　伏屋之助。
伏屋　伯父者人、三人の者も。
三人　先づ、お越しあられませう。

ト唄になり、圖書、矢柄實は伏屋之助、三人も假り家へ入る。ト合ひ方になり、小糸、世話の娘の形にて走つて來り、後よりおきよ、世話の形にて追ひかけ出て
きよ　コレ申し、小糸さん。
小糸　エヽ、なんぢやいなア。
きよ　その形をして爰へ來て、見付けられたら惡い。ちやつとござんせいなア。
小糸　イエ／＼、こちや最前の殿様伏屋之助さまに、も一度逢ひたいに依つて、兄さんに隱れて來たわいなア。
きよ　アレ、滅相な事ばかり。サア／＼、ござんせいな
ト兩人せり合ふ所へ、太九郎、世話形風呂敷をかたげ出て、
太九　コリヤ、小糸、おきよどの。
小糸　エヽ。
太九　梅津の宰相どのゝ姫ぢやと云うて、祝言さしたわれと云ひ、おいらが見付けられたら大變ぢや。なぜ爰へうせアやがつた。
小糸　サア、わしや最前の若殿様にナ。
太九　滅相な。逢はしたら姫の似せ者が知れる。コレ、お

きよどの、構はずと、ちやつと妹めを連れて去んで下さんせ。
きよ　アイ／＼、合點でござんす。サア、小糸さん、ござんせいなア。
小糸　イエ／＼、それでもま一度。
太九　ハテ、早うせぬか。
小糸　エ、辛氣な。
きよ　ちやつと、ござんせいなア。
太九　早ううせぬか。
小糸　エヽ、早ううせるわいなア。とんと妹の心を知りもせいで、アノ兄さん面めが。
　トこなしあつて、おきよ、無理に引立て向うへ連れて入る。太九郎、こなしあつて
太九　妹めを九重姫にして、伏屋之助と祝言さして、取替へたこの色紙を、八代一學さまへ。
　ト行かうとする。此うち、八代一學、羽織、野袴、深編笠にて、橋がゝりより出かけ居て
一學　持參に及ばぬ。太九郎、これにて受取る。
　ト笠取る。太九郎、見て
太九　ヤア、一學どの。

一學　其方が妹を、此方の姫にして、伏屋之助と首尾よう祝言を。
太九　まんまと仕負せた時雨の色紙。
　ト箱を渡す。一學、取つて檢め見て
一學　ヤア、こりや眞赤いな似せ物。
太九　すりや、似せ物とな。
圖書　誠の色紙、お渡し申さう。
　ト奥より出る。
太九　ヤア、こなたは伯父御。
一學　さては藺原圖書どのか。
圖書　貴殿は都梅津宰相公の雜掌、八代一學どのなア。
一學　如何にも。姫の似せ物、祝言の手段、知られし上は、ソリヤ太九郎。
太九　ハツ。圖書どの、こなたを。
　ト風呂敷より刀を出して切りかゝる。立廻りにてよろしく留める。
圖書　待つた、早まるまい。この圖書も同腹中ぢやぞ。
一學　ヤ、なんと。
圖書　此方の伏屋之助と云ひしも、ありや似せ者。
太九　ナニ、伏屋之助を似せ者とは。

圖書　サア、宰相公の息女、云ひ號けの九重姬、この東へ下り、伏屋之助と祝言の望みと、聞きたるゆゑに、身持ち放埒の伏屋之助、吉原通ひを幸ひに、身共が勸めて似せ者を拵らへ、九重姬と祝言させ、似せ色紙を取替へさせしは、後日に顯はれ、その科で伏屋之助を初め、左京太夫も切腹させ、薗原の家國は、この圖書が押領の望み。

一學　ムウ。さては貴殿もその望みな。拙者も疾より心をかけぬる主人の姬、足利の嚴命に依つて、伏屋之助どのへ輿入れさすむやくしさ。姬が病氣を幸ひ、太九郎が妹を、九重姬に仕立て、伏屋之助に祝言させ、似せ朱印を拵らへ、取替へさせしは、後日に薗原より事を顯はし、主人を咎め、宰相を追ひ失ひ、姬と夫婦になり、梅津の家を押領する一學が手段。家は變れど企みは一つ。

太九　ムウ。この上は御兩所ともに、お心を合されなば、兩家ともお手に入る道理。

一學　成る程、初めて逢ひし薗原の伯父御どのと

圖書　梅津の家臣一學、貴殿と心を合せば互ひの大望。

一學　刀に添へて望みを叶へる。

圖書　併し、心を變ぜぬその印に。

一學　先達て奪ひ取つたる、聟引手に出す一千町の誠の御朱印。

ト出して見せる。

圖書　此方もその通り、誠の時雨の色紙。

太九　それを互ひに取替へるが固めの印。

ト兩方、寶を取替へさせる。

一學　この上は圖書どの。

圖書　萬事の密談。

一學　追つての對面。

太九　マア、それまでは

一學　拙者は旅宿へ。

圖書　然らば何かは追つて。

一學　太九郎、參れ。

ト唄になり、一學、太九郎を連れ、こなしあつて向うへ入る。圖書、殘り、思案して奧へ入る。向うより、傾城花扇、禿綾野、同じく鹿の子、幇間五丁付き出る。

綾野　サア〳〵、ちやつと行かしやんせいなア。

五丁　かゝる一大事、聞捨てにはなりますまい。

禿二　サア、ちやつとござんせいなア。

花扇　オヽ、せわしな。殿樣と二人の仲は、ツイ一通りの

仲ではなし。
五丁　でも、祝言の事を聞いては。
花扇　サア、ようござんすわいなア。
禿二　マア／＼、行かしやんせいなア。
　ト皆々本舞臺へ來る。
五丁　申し、太夫さん、伏屋さまをお迎ひの爲、この深川へ漕ぎ付けた船の内。
鹿子　殿様は云ひ號けのお姫様と
綾野　御祝言があるとやら。
五丁　側から聞てさへ、目がクラ／＼して腹が立ちます。それにお前は、なんともござりませんかえ。
花扇　互ひに深う云ひ交した仲ぢやもの、祝言の噂を聞いたら、腹が立たいでなんとせうぞいなア。
五丁　それに又。
花扇　サレバイナア。燃え立つ炎をヂッと納めて、胸に濟ますが江戸の張り。吉原の太夫ははしたないと、名ざかの立つが恥かしさに、云はぬ心の思ひは百倍。推量して下さんせいなア。
　ト物思ひのこなし。此うち、遠山甚三郎、大小、深編笠にて出かけ居る。

五丁　シタリ、流石は吉原の全盛、花扇さん程あつて、諸事胸中に収つて居りましてござりまする。
鹿子　さうして伏屋さんは。
綾野　何所に居さんすぞいなア。
五丁　なんでも伏屋之助さまを探して、太夫さんと差向ひの勝負がよからう。サア、二人もおぢや。
鹿子　そんなら太夫さん。
綾野　伏屋さんを呼んで來るぞえ。
五丁　サア／＼、おぢや／＼。
　ト皆々臆病口へ入る。
花扇　殿様に限つて、よもやとは思うて居ても、心の狹いは殿御の常。斑女が閨の花扇と、捨てる心にならしやんしたらば
　ト思ひ入れあつて
どう思うて見ても殿様に逢うて。
　トこなしあつて行かうとする。甚三郎、前へ出て
甚三　待つた太夫。
花扇　エ、。
甚三　辛からば、只一筋に辛からで、情は人の、コレ、爲ではないか。

花扇　エヽ、なんと。

甚三　エヽ、胴慾な花扇。

ト編笠を取る。

花扇　ヤア、お前は。

甚三　通ひ詰めた備前の浪人。

花扇　ムウ。

ト思ひ入れあつて行かうとするを、甚三郎、付け廻し立ち塞がつて、

甚三　コレ、身共への返事は、どうぢや。

ト合ひ方になり、花扇、思ひ入れあつて

花扇　サア、その御返事は、今はどうも。わたしはちつと。

ト引退け行かうとするを、甚三郎また留めて

甚三　和漢の文にも暗からず、茶の湯香道を諳んじ、世に隠れなき吉原の、全盛花扇どのと云ふ、名さへ床しく思ひしに、一度か二度かと通ひ詰めた、よしあし事のいや増す心の煩悩。思ひ切らうと存ずる程、猶面影が目先にちら／＼。面目次第もない。

ト扇にて額を隠す。花扇、こなしあつて

花扇　わたしがやうな不束な者を、賤しからぬお侍ひ様の假にも慕うて下さんすればこそ、夜毎日毎に通はしやんして、逢はぬ夕は状文の、数も盡きせぬ御深切。傾城冥加に叶うた仕合せ。さら／＼仇には存じませぬわいなア。

甚三　さほどに思ふ心があらば

花扇　サア、色よい返事のならぬと云ふは。

甚三　聞えがあらうが。そりや川竹の末の楽しみ。見らるる通り浪人の拙者なれば、所詮こなたを根引きして、末の面倒見届ける程の餘力もござらぬ。只今も承はれば、頼まれた一言を、引かぬ東の張りとやら。意氣地とやら。情の道を御存じあらば、二度とは申さぬ。たつた一度。

ト寄り添ふ。花扇、思ひ入れあつて

花扇　成る程、御返事を致しませう。

甚三　すりや、色好い返事を。

花扇　サア、わたしが返事は。

ト思ひ入れあつて、紅葉の木に短冊付けし枝あるを見て手折り、甚三郎が側へ差出し

わたしが返事。

ト差出す。甚三郎、枝を取り、短冊を見て

甚三　時雨する稲荷の山の紅葉葉は、青かりしより思ひ染

めてき。

ト讀み、こなしあつて

この古歌を返事とは。

花扇　サア、時雨の露と濡れ染めて、青葉のうちに思ひ染め、云ひ交したそのお方は……時雨の夜半に通ひ詰め、思ひ合うては紅ゐの、色をも香をも知る人ぞ知る。

甚三　ムウ。すりや古歌の心を以て、青葉のうちに云ひ交した

花扇　心の手には花染めの、淺墓ならぬわたしが心中。

甚三　間夫とやらに操を立て

花扇　靡く心が張りと意氣地。

甚三　花物云はねど返事の一枝。

花扇　とつくりと御合點遊ばして、流石は賤しい君傾城、情知らず義理知らずと、申し、必らず下げすんで下さんすなえ。

ト甚三郎、思ひ入れあつて

甚三　ムウ、主ある一枝、無理に手折れば落花狼藉。

ト枝を折り、思案のこなし。

花扇　御合點が參りましたかえ。

甚三　イヤ、傾城に意氣地はあれど、此方とても武士の意氣地。口說きかゝつた戀の返事を。

花扇　エヽ、づツとモウ。

ト思ひ入れあつて座を立ち、行かうとする。甚三郎、留めて

甚三　如何やうに心を盡して口說いても、色好い返事がならぬと云ふか。

花扇　お志し忘れはおきませぬ。

ト云ひ捨て行かうとする。裲襠を押へて

甚三　武士の本意、刀に替へて望んだ戀路も。

花扇　ない緣であらうと諦らめて下さんせいなア。

ト唄になり、花扇、素氣なう振り切つて奥へ入る。甚三郎、本意なきこなしあつて

甚三　マ、あれ程までに。

ト思ひ入れあつて

ムウ。

ト思案する。内にて

五丁　ハイ〱、畏まりました。ヤレ、恐ろしい事ぢや。

ト云ひ〱出て、橋がゝりへ行かうとする。甚三郎、見て

甚三　コリヤ、幇間の五丁ではないか。

五丁　ホウ、山さんでござりますか。ても替つた所で、エ
エ、聞えた。こりや太夫さんのお後を慕うて。
ト甚三郎が脊中を叩き
きつい取りやうな。
甚三　サア、それについて、少と折入つてお身に。
五丁　ア、、仰しやりますな。太夫さんの事なら、とんと
あかぬ事でござりまする。
甚三　イヤ〳〵、その儀ではない。お身に頼みたいと云ふ
は、斯うぢや。
トちよつと囁く。
五丁　エ、、左様なら質屋の源左衛門を。
ト大きな聲にて云ふを
甚三　コリヤ、隨分ともに密かに頼む。
五丁　畏まりました。追ッ付け來るやうに申しませう。
ト五丁、橋がゝりへ入る。甚三郎、こなしあつて
甚三　どう思うても、花扇を手に入れねば
ト思案して
俳しながら、あれ程までに思ひ込んだ花扇。萬一此方の
望み叶はぬ時は
ト質屋を呼ひにやつたと云ふこなしあつて

黄金は朽ちても朽ちせぬはお家の……御恩を仇に散り行
く忠義、數代續く遠山の家名は
ト愁ひのこなしあつて
ア、、迷ひ安き道ぢやよなア。
ト唄になり、甚三郎、思案しい〳〵奥へ入る。在郷唄
になり、向うより、土手の銅鐵、毬栗坊主、破れ衣に
て、上燗屋大作、木綿やつし、彦三頭巾、上燗泡雪豆
腐の荷をかたげ、付いて出て
銅鐵　さりとては、しめうねんな商人ぢやわい。
大作　ハテ、高の知れた江戸の名物、泡雪豆腐腹一杯喰は
れて、錢取らにや泡雪と、利も元も消えてしまふ。それ
ぢやに依つて、錢取らにや何所までも行くのぢや。
銅鐵　オ、、魂ひの續くだけ付いてうせい。
大作　うせいでは。
銅鐵　勝手にさらせ。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。大作、銅鐵を突き廻し
大作　コリヤ、何所まで引ッ張つて行くのぢや。
銅鐵　引ッ張るの引ッ張らんのと、高の知れた端下錢、ぶ
さ打つやうな坊主ぢやないわい。
大作　云はんすない。今日はこの深川の八幡で、何とやら

云ふお大名が、紅葉狩の遊興があると聞いたに依つて、なんでもして來いよ、上燗に泡雪で、錢儲けの晝前から店を出した所へ貴樣が來た。酒はこなからを三度、泡雪は二十杯まで。惣〆め百八十六文と云ふ物、寄越さにや喰逃げでえすぞや。

銅鐵　サア〳〵、えいわい。

大作　イヤ、えいでは濟まぬ。錢がなけにや、着物を引ッ剝いでも、手じり合さにや、商人の一分が立たぬわい。

銅鐵　われが云ふは皆尤もぢや。

大作　尤もでなうては。錢おこすか、引ッ剝がうか。サアサア〳〵、どうぢやぞい。

銅鐵　どうと云うて、うんと云うては一文もない。

大併　忌々しい。さう吐かしや、いつそ引ッ剝いで。

銅鐵　なんとさらす。

大作　けち太い奴の。キリ〳〵と脫げ。

銅鐵　どうでも剝ぐのか。

大作　但し、錢をおこすか。

銅鐵　サア、それは。

大伴　引ッ剝がうか。

銅鐵　サア〳〵〳〵。

大作　エヽ、いつそ。

ト立廻りになり、好き所にて、銅鐵、懷中より手箱を出す。ドロ〳〵にて、セリ下げにて消える。大作、こなしあつて

面妖な。何所へうせた。たつた今の事。でも、替つた坊主ぢや。エヽ、忌々しい。出がけから損をさし居つた。併し、合點のゆかぬ。ムウ。それよりは國の親仁樣、病氣の中を弟に任せて、この東へ來たは、御主人へ勘當の詫が叶へば、元の身の上。さすれば親仁樣も義理ある弟も。

ト思ひ入れあつて

マア、何かは差措き、この八幡へ來て、ムウ、樣子を

ト荷なかたげ

ア、國の事も氣にかゝるし、又この身の上、親仁樣、弟が

トこなしあつて

鹽梅よし。名物泡雪豆腐。

ト唄になり、橋がゝりへ入る。ドロ〳〵にて、銅鐵、初手の切り穴よりセリ上げにて出て

銅鐵　豆腐屋めはうせ居つた。なんでもこの間、金杉稻荷

で捕へた狐を封じ込んで、お頭の云はるゝ通り、やりかけた所が今の通り。大分業が利くわい。

ト こなしあつて、フト落ちてある守り袋を拾ひ見て

ても、結構な守り袋。

ト 開き見て

慶長九年甲辰、正月三日誕生の女子かのとよむ。こりや何ぞになりさうな物ぢや。

ト 唄になり　こなしあつて、臆病口へツイと入る。ト奥より、花扇、此花と一緒に、伏屋之助を連れて出る。舞子三人付いて出る。

皆々　サア、殿さん、ござんせいなア。

此花　矢柄さん、伏屋之助さんは、何所へやらしやんしたぞいなア。

伏花　コリヤ、其やうにしてくれな。伏屋之助が皺くたになるわいやい。

綾野　なにを。お前はお姫樣と祝言さしやんしたぢやないかいなア。

此花　一體殿さんは、何所へやらしやんしたぞいなア。

伏屋　ハテ、殿さんはおれぢやわいやい。

此花　イヽ、エイナア。この間から深川へござんした、伏屋之助さまぢやわいなア。

妻菊　此花さん、お前が惚れさしやんした伏屋之助さまと云ふは噓で、誠の殿さんは、この矢柄さんと云ふ。

此花　エヽ、そんならお前が。

伏屋　殿樣と暫らく入れ替つて居たのぢやわいやい。

此花　エヽ。

伏屋　これも花扇への心中。云ひ號けの姬と祝言をせまい爲ぢやが、どうぢや／＼。

綾野　イヤ、合點がゆかぬわいなア。

此花　エヽ、阿房らしい。なんのこつちやぞいなア。

ト こなしあつて、奥へ入る。

小芝　樣子を聞いてわたしらも悔りしたが、仕合せは花扇さん。

妻菊　腹立てさしやんす事はござんせぬわいなア。

花扇　云はしやんすな。お前方も同じ穴の狐。滅多に油斷はならぬわいなア。

伏屋　此奴が／＼。悋氣も好い加減に措かいでな。

花扇　イヤ措くまいわいな。アタ阿房らしい。

ト 紙を打ちつける。

伏屋　投打ちを。おのれに負けうか。阿房らしい。

ト煙管を打ちつける。これより、花扇、伏屋之助、莨盆、銚子、杯など、そこらの道具を無性に打ちつける。子役いろ〳〵取支へる。好き所へ橋がゝりより、扇屋卯八、親方にて出て、この揉合ひの中へ入る。花扇、伏屋之助、兩人して卯八を散々に叩く。

卯八　アイタヽヽ。こりやどうするのぢや。

伏屋　ヤア。

ト皆々恟り。奥より、甚三郎、出かけ居る。

卯八　伏屋之助さま。イヤ、伏屋之助どの。わりさんに逢はうと思うて、草履さへ三足までしまうた。シタガ、百曼陀羅云うたて、あかん事ぢや。サア太夫、連れて去ぬるのぢや。來い。

ト花扇を引立てる。

花扇　親方さん。

卯八　なんぢやい。

花扇　爰は花還、人も聞きやんす。殊に小芝さんや妻菊さんも聞いてゝござんすぞえ。

卯八　ハテ、かけ構はぬ他所の女郎。われは又おれが抱へぢやに依つて。

花扇　サイナ、なんぼう親方さんでも、殿様に揚詰めの其うちは、お前の儘にもならぬかいなア。

伏屋　太夫が云ふ通り、親方、武士の魂ひ、この刀は見えぬか。

卯八　ハヽヽヽ、やつたワ。なんぼ貴様が大名風を吹かしても、れその才覺とんと出來ぬワ。何か僭上のありたけを盡して、金の段になると、イヤ役人に受取れの、家老どもに申し付けてあるのと、出放題に醉はされて、粒三文取らずに居るワ。マア、揚げ代は揚げ代にして、急にさるお大名が、花扇を身請けの相談。なんでなと損を入れ合すのぢや。サア、意地張らずとうせい。

花扇　例へ命を捨てゝも、外へ行く事は嫌でござんす。

小芝　成る程、爰は一つ親方さんの料簡で、外へやらずとどうぞ又。

卯八　默りやアがれ。料簡のなるだけは、これまでにしてある。細言云はずと、うせい。

ト花扇を引立てる。伏屋之助、留めて

伏屋　コリヤ待て。

卯八　忌々しい二才めぢや。よいワ。揚げ代の代り、いつそ、われをカウ。

ト伏屋之助を引付ける。皆々、アヽこれと寄るを

なんぢや〱。揚げ代の溜り金の數程、カウ〱〱。
ト伏屋之助を散々踏みつける。ト甚三郎、最前より出
兼れてこなしにて、この時、堪へ兼れしこなしにて、
ツカ〱と出て、卯八を突き廻して取つて投げる。伏
屋之助、甚三郎を見て
伏屋　ヤア、其方は。
甚三　若殿には御堅固の體、恐悦至極に存じまする。
花扇　申し、あなたはお近付きでござんすかえ。
ト伏屋之助に云ふ。
伏屋　近付きの段か、遠山甚三郎と云うて、國元の家來ぢ
やわいの。
花扇　エヽ、その甚三郎さんが、わたしにこれまで
ト云ふを甚三郎押へて
甚三　ハテ、何事も云はぬが祕密。
花扇　どう思うても見ても……ハテ、御家來樣でござんせ
うなア。
ト思ひ入れ。卯八、起きて
卯八　おさぶ。貴樣が、あの二方の家來ならば、なんでお
れを投げた。
甚三　何ゆゑ主人を手籠めに致した。

卯八　ハア、此奴、聾ぢやさうな。貴樣、耳が遠いか。先
刻にから、あびひる程云うた事を貴樣聞かんか。聞かず
ば諄けれど、今一度云うて聞かさう。あの太夫は、さる
お大名樣が
甚三　身請けせう。
卯八　ヤ。
甚三　サ、此方へ身請けすれば、申し分はあるまいがや。
卯八　洒落るワ。コレ、太夫が身請けは、耳を揃へて五百
兩でえすぞや。
ト甚三郎、財布を抛り出して
甚三　手附け金五十兩、受取つて歸れ。
卯八　ヘヽヽ。これもある型ぢや。手附けの金が明けて
見れば、石や瓦か。その手でいくやうな扇屋の卯八ぢや
ない。マア、檢めて見よう。
ト財布の金を檢める。
花扇　お志しは嬉しいが、あの金は矢ツ張り
伏屋　ア、コレ、氣遣ひしやんな。おれが爲には家來の甚
三郎。何にも云はぬ。忝ない。
花扇　イ、エイナア。それでは詰まらぬわいなア。
伏屋　ハテマア、默つて居やいなう。

ト此うち、卯八、金を檢め

卯八　こりや正金五十兩。

甚三　まだ外に申し分があるか。

卯八　なんのお前。外から身請けを强請つたは、この金を見ようばかり。わたしは、もうお暇申さう。

ト行かうとする。

甚三　親方待て。

卯八　ハイ。

ト立戻り、甚三郎、卯八が胸盡しを取つて引付け

甚三　素町人の身を以て、主人に對し慮外の雜言。手附けの金の一札は、極印をカウ。

ト柄にて眉間を割つて突き放す。

卯八　アイタヽヽ。アヽ痛いは痛いが、五十兩とは忝ない。足元の明るいうち、どなたもこれにござりませ。

ト財布を持ち、走り入る。合ひ方。

小芝　ほんにモウ、小氣味のよい事ぢやわいなア。

妻菊　一體廓中で、評判の惡者ぢやわいなア。

伏屋　イヤモウ、好い所へ甚三が來たので、とんと燒酎を呑んだやうな。

小芝　雨降つて地固まると、思ひも依らぬ身請けの手付け。お前はさぞ嬉しからうなア。

花扇　わたしや辛氣なわいなア。

伏屋　それ／＼ちやつとあれに、禮を云や／＼。

花扇　アイ。

妻菊　見かけは堅いやうで、きつい粹樣ぢやわいなア。

小芝　それ／＼、粹の水上樣ぢやわいなア。

ト甚三郎、こなしあつて、花扇が手を取り

甚三　太夫來やれ。

花扇　何所へ行くのぢや。

甚三　知れた事。帶紐解かして抱て寢るのぢや。

花扇　エヽ。

ト皆々愕り。伏屋之助、花扇を付け廻し

伏屋　甚三郎、そりや何を云ふのぢや／＼ぞいやい。

ト急いて云ふ。

甚三　こなた樣をお迎ひの爲、在江戸の其うちに、フト吉原へ通ひ染めて、侍ひがあるまじい、遠山甚三郎、苗字に替へ知行に替へ、惚れて／＼惚れ拔いた花扇。サア、返事聞かう。なんと。

花扇　申し、現在あなたの御主人、その相方のわたしと知つて。

甚三　心の外サ。

花扇　エヽ。

甚三　サ、外と云ふ。その字が流石凡夫サ。

　ト此うち、伏屋之助、腹の立つこなしあつて、甚三郎を背打ちに打ち据ゑる。甚三郎、チツと堪える。直ぐに胸倉を取つて振り廻し

伏屋　畜生め。おのれはなア。其方が爲には現在の主、その相方の太夫を、ほんに云ひやうもない惡人め。魔王め。エヽ、おのれはなア。

　ト甚三郎、俯向き居る。皆々顔見合せ、氣の毒なるこなし。所へ奥より、質屋源左衛門、出て

源左　オヽ、甚三さま、爰にござりますか。質屋の源左衛門でござります。

　ト氣兼れのこなしあつて、小聲にて

甚三　源左衛門、先程は世話であつた。

源左　世話するは商賣づく。先程のお使ひで、五十兩の金子は早速に遣はしましたが、定めしお間に合ひましたでござりませう。サア、質物を受取りませうかな。

　ト甚三郎、思ひ入れあつて差添を出し

甚三　五丁を以て申し遣はした通り、即ち國宗の折紙。

源左　成る程、捨賣りにしても百兩が物はあるとの事。即ち殿様の御拜領とやら。

　ト甚三郎を見る。甚三郎、云ふなと云ふこなし、早く歸れと顔にて知らす。源左衛門呑み込み

源左　エヽ、成る程〳〵。左様ならお暇申しますでござります。

　ト源左衛門、橋がゝりへ入る。右のうち、花扇、いろいろ思ひ入れあつて

伏屋　そんなら太夫が身請けの手付けは

小芝　お刀を代なして。

　ト皆々思ひ入れ。

伏屋　その身の榮華に親人より、拜領の刀までを。エヽ。

　ト齒ぎしりして

　義理も作法も、四つ足に向うて詞はない。サア太夫、皆もおぢや。

　ト皆々行かうとする。甚三郎、花扇を留めて

甚三　武士の魂ひ、重代の刀物までを質に入れ、金子調達の艱難辛苦も、つゞまる所はこなた。

　ト伏屋之助に云ふ。氣を替へ

　イヤサ、こなたの……色香に迷ひし武士の一徹。凝り固

まつた身共が性根。いよ〳〵返事が
花扇　アイ、嫌と云ふのが返事ぢやわいなア。
甚三　親方に渡つて手付けを渡せば、誰れ憚らぬ身共が女房。
花扇　エヽ。
伏屋　なんと。
甚三　サア、僅かなれども手付けの金子、反古にはなるまい。
伏屋　サア、それは。
甚三　ハテ
　ト花扇を付け廻し
得心して、抱かれて寢やれ。
　ト突き据ゑる。此うち、銅鐵出て
銅鐵　イヤ、太夫が得心しても、おれが得心せぬ。
　ト向うへ出る。甚三郎、見て
甚三　わりや何者ぢや。
銅鐵　太夫が兄ぢや。
甚三　ヤ。
銅鐵　花扇太夫が眞實の兄ぢや。
花扇　ア、コレ、お前のやうな見苦しい坊さん。阿房らしい。こちや知りやんせぬぞえ。
　ト銅鐵、花扇をヂッと見て
銅鐵　親はなけれど子は育つと、ハテ、よくも成人をしたなア。われが爲には實の兄ぢやわいやい。
　ト花扇、ひんとする。
伏屋　見れば見苦しい非人め。
妻菊　兄弟と云はんすには、なんぞ慥かな。
銅鐵　默りやアがれ。證據のない事を云はうか。證據と云ふは、妹、われが生れた年號月日。
花扇　エヽ。なんと云はしやんす。
銅鐵　慶長九年甲辰の年、正月三日の誕生、幼な名は、かのと云はうがな。
花扇　エヽ、そんならお前は。
　ト甚三郎、思ひ入れ。
銅鐵　藁の上で別れたれば、おれがやうな兄のあるとは、夢にも知るまい。なんと人品骨柄、好い兄であらうがな。
女皆　そんなら花扇さんの。
　ト皆々花扇を見る。
花扇　ハア。

ト泣く。
甚三　すりや、眞實の兄弟。ハテナア。
トこなしあつて、片脇へ依る。大作、出かけ聞いて居る。
銅鐵　イヤモウ、兄は乞食の見苦しいこの態。その妹は大名のお手活け。兄親と云ふは、若いの、こなさんは聟。おれは舅。初めての出合ひぢや。ちつと無心がある。
伏屋　無心とは。
銅鐵　金が欲しい。と云うたてて、高の知れた乞食坊主、深い望みもない。マア、當分二十兩餘り貰ひたい。いま爰で、だい〳〵。
伏屋　サア、それは。
銅鐵　無いか。無い物を無理とも云はれまい。
ト甚三郎を尻目にかけて
こちらへ云うたてゝ、あきさうもない風體。よいワ、妹を連れて去んで、なる所で談合を極める。サアおぢや。
ト手を取る。花扇、振り放し
花扇　嫌でござんす。お前のやうな憎らしい兄さん。此方から勘當しやんす。とッとと去んで下さんせいなア。
銅鐵　此奴が〳〵。兄親に向つて、頸がはしやぎ過ぎるぞよ。
花扇　どうで氣には入るまいぞいなア。
銅鐵　よいワ。さう吐かしやア、兄が折檻、胴骨を打ち据ゑて。
トまきがりの竹を取つて叩きにかゝる。大作、ツカツカと出て、銅鐵が利き腕を取り
大作　コリヤ、何をするのぢや。
銅鐵　妹を折檻するのぢや。
大作　イヤ、さうはならぬ。
ト突き放す。この時、銅鐵、右の守り袋を落す。大作、取つて懐中する。伏屋之助、大作を見て
伏屋　ヤア、其方は。
大作　先年御勘當を受けました、平柳銀兵衛めでござりまする。
銅鐵　ヤイ〳〵、うぬが懺悔話し、聞かうとは云はぬ。あの花扇はおれが妹、おれが氣に入らぬに依つて、おれが手で、おれが折檻するのを、横合ひから出て、何ごさはるのぢや。
大作　いよ〳〵こなさんは兄貴ぢやの。
銅鐵　根元根本、変りなしの兄弟ぢやわい。

大作　ハテナウ、久し振りて巡り逢うた妹に、つれなう當る兄貴もあり、現在主人の馴染んでござるお傾城に、道ならぬ不義。

ト甚三郎を尻目にかけて

世はさまぐ\ぢやなア。

甚三　忠義の道と戀の道、分けて盡すが身共が本心。

大作　例へ御勘當を受けてなりとも

甚三　思ひ込んだ武士の一圖。

大作　重代の知行に替へても。

甚三　いつかな切れぬ戀慕の絆。思ふ湊へ漕ぎ付けて見せう。

大作　ハテ、根強い惚れやうぢやなア。

銅鐵　サア、妹、連れて去ぬ。來い。

ト花扇にかゝる。大作、付け廻し

大作　待つた。

銅鐵　また留めるのかいやい。

大作　サア、あやきれのせぬ兄弟の名乘り。今一度證據が聞きたい。

銅鐵　何遍でも云うて聞かさう。妹が生れ年號は、慶長九年甲辰、正月三日の誕生。

大作　あの通り相違はござりませぬか。

花扇　アイ、肌身離さぬ守り袋に、しつかりと書いてござんすわいなア。

大作　さうして、その守り袋は。

ト花扇、懷中を探れ

花扇　サア、先刻に落したに依つて。

大作　もう好い。大概樣子が知れた。

銅鐵　さうありさうな事ぢや。

大作　さうして、こなさんの親達は、どうしられたの。

銅鐵　ヤ。

大作　定めし息災でござるであらう。

銅鐵　イヤく\、親仁は一昨年の秋、鳥羽の祭りの餅が咽喉に詰まつて死んでしまうた。

大作　ハテ、さうして母さんは。

銅鐵　これも親仁の事を氣病みにして、間もなうてこれてしまうたわい。

大作　すりや二人……孤兒になつて。

銅鐵　菩提の爲の出家遁生。

大作　ハテ、殊勝な事ぢやなア。とてもの事に年號月日、誕生日の書き物があらう。それが見たい。

銅鐵　悪い合點な奴ぢや。その書き物は妹が方に。
大作　さればサ、その守り袋を落したとあるに依つて。
銅鐵　落した事を、おれが知らうかい。
大作　サア、その貴様の懐中から、この守り袋はどうして。
　ト守り袋を出す。
銅鐵　ヤア、それは。
　トかゝるを突き放し、守り袋を抛り
大作　覺えがござるか。
　ト花扇、取つて
花扇　ほんに、こりやわたしが守り袋ぢやわいなア。
大作　サア、その守り袋をちよろまかして、太夫さんの兄貴とは、手の見えたあざとい騙り。出直してうせい。アノ大盗人めが。
伏屋　そんなら太夫が
妻菊　兄さんと云うたは
花扇　嘘でござんしたかいなア。
大作　嘘も嘘、尻の割れた赤嘘でござります。
銅鐵　手目が上がつたら、もう自棄ぢや。
　ト大太刀を拔いて大作に切りかゝる。立廻りにて大作銅鐵を取つて押へて、伏屋之助、下げ緒を取り、大作に渡す。これにて銅鐵を縛り
大作　動きやアがるな。大騙りめ。
花扇　エヽ、憎らしい。よう騙しくさつたなア。
　ト銅鐵が頭を叩く。
妻菊　ほんに憎い坊主めぢや。
　ト頭を叩く。小芝も叩く。
大作　どうで、うぬ一人の目論見でもあるまい。とつくりと調べにやアならぬ。併し、うぬが身の上よりは、この身の越度。
　ト悄れるこなしにて、伏屋之助に向ひ
以前はお館にて相勤めました平柳銀兵衛め。若氣の至りにお納戸金を遣ひなくし、身持ち放埒の拙者め。お處刑の死罪に極まりしを、あなた樣の執成しを以て、命助かり、お國を追放。故郷なれば三州八ツ橋村に立歸り、花守りやら隱もりやら、武藝に替へ、鋤鍬の土になつても忘れぬ御恩、何卒御勘氣御赦免をと、遊里通ひのお跡を慕ひ、參りましてござりまする。
花屋　さうでござんす。樣子を聞けば、おいとしいお身の上。

大作　何卒大殿様への御推挙、若殿のお執成しを願はしう存じます。
伏屋　サイヤイ。おれに如才はないが、何を云うても親仁の手前が。
ト大作、思ひ入れあつて
大作　イカサマナア。何を斯うと云ふ功もなければ、御赦免はない筈。がこの後功の立つたならば。
伏屋　その時こそは元の主從。
花扇　偏へに功の立つやうに。
大作　その功の立てやうは。
ト銅鐵が方を見る。銅鐵、纒付きの儘逃げうとするを大作突き廻し
此奴を手繰つて詮議したらば、歸參の種になるまいものでもない。
伏屋　それまでは商人の其方。
花扇　殿様と一緒に、マア、奥へござんせいなア。
大作　酒宴の肴は此奴を手料理。
ト銅鐵を引立てる。
銅鐵　吸ひ物はいけまいかなア。
小芝　サア、マア、ござんせいなア。

甚三　ア、イヤ、若殿、最前より差扣へて居つたが、望みかけた拙者が願ひ。是非とも太夫は申し請けるぞ。
伏屋　エヽ。
トぎしむを大作抑へ
大作　マア、ようござりまする。
ト銅鐵付け廻し、甚三郎が側へツカ／＼と出て胸倉を取り
非義と云はうか、非道と云はうか。小身の拙者でも、忠義と云ふ字は、この土性骨に沁み込んでござるわいなう。こなたはなんぢや。御恩も知行も、おれよりは遙かにまさつた、譜代相傳の御主人ではないか。遠山甚三郎とも云はるゝ武士が、道ならぬ戀に、畜生の名を取つてそれで本意本望でござるか。エヽ。
トいろ／＼振り廻し突き放し
何れも様。この畜生には構はずと、サア、奥へ參りませう。
伏屋　そんなら銀兵衛。
大作　騙りめ、うせう。
ト唄になり、大作、銅鐵を引立て、伏屋之助、花扇、此花、妻菊、皆々甚三郎の方へこなしあつて、奥へ入

ろ。甚三郎残る。暮れ六ツの鐘鳴る。合ひ方、甚三郎
　こなしあつて
甚三　最早暮れ六つ。足利の嚴命。兵庫どのに諜し合した
内談。今宵一夜を過しては、盡しに盡した志しも水の
泡。ハテ。
　ト手を組み、思案する。トしつぽりとした唄になり、
　これにていろ／＼思案する事あつて、キッとなり、鯉
　口をくつろげ
身を捨てゝこそ浮む瀬もあり。戀慕の絆も切つて捨てる
が、この世の惡念。
　ト思ひ入れあつて
ソレ。
　ト唄になり。甚三郎こなしあつて、奥へツイと入る。
　トどろ／＼にて、銅鐵、繩かゝり、セリ上げにて切り
　穴へ出て、こなしあつて、繩を引切り
銅鐵　何を猪小才な。狐の守護するこの體。うぬらが手位
でいかうか。
　ト奥を見て
アノ大馬鹿者どもめが。
　ト向うへ行かうとする。圖書、新吾、當馬、七郎平、

　出かけ居て、銅鐵を引ッ挾む。銅鐵、見て
銅鐵　こなたは。
新吾　藺原家の伯父御、圖書どのと云ふお大名ぢや。
銅鐵　ムウ。そのお大名様が。
圖書　味方せい。
銅鐵　ヤ。
圖書　諏訪一國を横領せんと、思ひ立つた大望。味方せば
うぬも立身の種を蒔くと云ふもの。
銅鐵　こりや、どうやら耳寄りぢやわいの。
七郎　伯父御の大望も、家老どもが自由にさせず。
當馬　殿の側には、膳番壽見の用心あれば、兎角心に任せ
ず。
圖書　さるに依つて、見届けし今の法術。諏訪の一國血統
を絶やすは其方が法力。コリヤ、合點がいたか。
銅鐵　呑み込みやんした。惡い事には拔け目ない坊主ぢ
や。シタガ、手に取らぬ立身より、當分の骨折り代を。
圖書　ハテ、慾の深い奴。法力の印だに見えたらば、取立
てくれる後日の約束。ソリヤ。
　ト最前の朱印を拋る。銅鐵、取つて
銅鐵　こりや、何ぢや。

圖書　一千丁の御朱印。
花扇　首尾よく仕負ふせた上では。
圖書　國郡と直ぐに引替へ。
銅鐵　ア丶、忝ない。
ト懐中する。
當馬　して、圖書さまは。
圖書　裏の山手より、直さま上屋敷へ。
三人　お供いたさう。
銅鐵　コレ、追ツ付け印を見せやんせう。
圖書　しかと申し付けたぞ。
ト唄になり、圖書、こなしあつて、三人を連れ、臆病口へ入る。銅鐵、こなしあつて
銅鐵　うまいワ〳〵。朝ツぱら仕事に一千丁の朱印とは、狐福は爭はれぬものぢや。
トこなしあつて、行かうとする。大作、出かけ
大作　ずく入め。待て。
銅鐵　又かいやい。
大作　又かとは、わりや巧い事ひろぐなア。
銅鐵　うまいとは何か。
大作　伯父御の手から、一千丁の御朱印。

銅鐵　ヤ。
大作　邪法を行ふ狐遣ひ。われには餘ッぽど詮議がある。が差當つてその朱印を。
ト取りにかゝる。立廻りあつて
銅鐵　一旦手に入れた朱印、首が落ちても放す事はならぬわい。
大作　しやら臭い奴の。朱印の出所、伯父御の惡心、引ツ捕へてと思うたれど、血を血で洗ふお家の騒ぎを思ひやつて、朱印さへ渡したらば、何奴も此奴も、命ばかりは助けてくれるワ。命代りの御朱印、此方へ渡せ。
銅鐵　ハテ、もうそれまでに欲しくば、如何にも遣らうと云ひたいが、嫌ぢや。ならぬ。
ト突き廻して行かうとする。
大作　逃げ足の早い坊主め。キリ〳〵と渡せ。
銅鐵　ならぬ。
大作　渡せやい。
銅鐵　嫌ぢやわやい。
大作　面倒な。
ト懐中へ手を突ッ込む。銅鐵、振り切り立廻り、いろいろあつてとまる。所へ當馬出て、大作にかゝる。こ

隙に銅鐵、向うへ逃げて入る。大作、當馬を投げ
南無三、うぬ。
ト向うへ追ひかけ入る。當馬、起き
當馬　彼奴が捕へられては我れ〳〵が身の上。なんでも加
勢を。さうぢや。
ト後を慕ひ入る。ト内にて踊りの太皷三味線になり、
バタ〳〵にて奥より、花扇、逃げ出る。甚三郎、拔刀
にておはへ出る。
花扇　マア〳〵、待つて下さんせいなア。
ト鳴り物かすめる。
甚三　待てとは、今打ちわつた身共が所存を。
花扇　サア〳〵、眞實親身のお志し、無下にする氣はござ
んせぬけれどな、わたしや矢ッ張り殿樣の事が。
甚三　これ程までに事を分けても。
花扇　思ひ切らうと思ふ程、一倍募る心の輪廻。堪忍して
下さんせ。
甚三　それ程までに。
ト拔身を捨て思ひ入れ。
花扇　サア、たつた今、始めて聞いた御本心。殊にわたし
とは實の。

甚三　アイヤ、コレ、身共が底意、無下にせずば心を定め
て。
花扇　思ひ切る事は、いつまでも。
甚三　サ、そこが貞節、その身の誠。
花扇　でも、殿樣に云ひ交した
甚三　貞女を破つて貞女を立てい。
花扇　イ、エ、義理も操も惚れたが因果。
甚三　その身の因果と思ひ諦らめ
花扇　緣切る事は嫌ぢや〳〵。嫌ぢやわいなア。
甚三　嫌でも應でも身共が底意を。
花扇　聞いたに依つて思ひも百倍。
甚三　思ひ切らぬか。
花扇　くどうござんす。
ト云ひ捨て行くを、よろしく留めて
甚三　水よく船を浮め、水却つてその船を覆へす。情は却
つて仇となる。花扇、わりや遠山が武士を捨てさせた
な。
花扇　命に替へても、云ひ交した仲ぢやわいなア。
トまた行くを留める。キッとなつて
甚三　待て。得心せずば絶對絶命。

花扇　アイ、殺されませう命も捨てうが、殿樣にま一度。

甚三　イヽヤ、本心を明かした上は、殿の御前へやる事ならぬ。

花扇　でも、わたしや殿樣に。

　ト行くを突き廻して

甚三　死出三途でお目見得いたせ。

花扇　エ、。

甚三　もうこれまでぢや。

　ト刀取上げ、花扇を一かせ切る。鳴り物せわしく、花扇逃げるを、甚三郎追ひ廻すこと二三度あり、此うち此花出て甚三郎を留める。花扇、下座の障子屋體へ駈けて入る。甚三郎、追つて入る。此花も續いて行かうとする。と假家の障子にパッと血煙り立つ。此花、悔りして

此花　ヤア、あれは。

　ト鳴り物止む。凄き合ひ方になり、此花、慄うて居る。と甚三郎、血刀を提げ、ツカ〳〵と出て、思ひ入れあつて

甚三　一途に思ふ女心、不便や。

此花　エ、。

　ト甚三郎、此花を見てキッと身を替へ

甚三　浮世の愛惜、切つて捨つれば一念發起。

　ト血刀を取り直し、此花の方へ

水。

此花　アイ。

　ト慄へながら手桶を取り來て、柄杓にて手へかける。甚三郎、刀を納め、思ひ入れあつて行かうとする。此花、留めて

申し、そんなら花扇さんを。

甚三　遠山甚三が戀の意趣に、打つて捨てたと若殿へ申し上げやれ。

　ト行かうとする。

此花　アヽコレ。

　ト留めるを振り切り、立廻りあつて此花を當てる。タヂタヂと寄る。甚三郎、ちよつと愁ひ心意氣あつて氣を替へ、橋がゝりへツイと入る。此花、氣の付きしこなしにて、續いて行かうとして後へ戻り、うろ〳〵するこなしあつて

申し、皆來て下さんせいなア。

　ト奥より、伏屋之助、妻菊、小芝、綾野、皆々連れ出

ろ。

伏屋　此花、何を仰山に云ふのぢや。

此花　エヽ、ずつとモウ、大事ぢやわいなア。

妻菊　大事ぢやとは、なんぢやぞいなア。

此花　なんぢやどころか、花扇さんが殺されさしやんした
わいなア。

伏屋　ヤア〳〵〳〵。

ト皆々愕り。

小芝　そりやマア、ほんかいなア〳〵。

此花　ほんの噓のと、死骸は彼處に。

ト皆々假家へ入り、花扇が死骸を見て

皆々　ほんに、惨たらしい切られやうぢやわいなア。

伏屋　可哀や〳〵。

ト泣き、此花を捉へ

さうして太夫を切つた奴は。

此花　アイ、甚三さんぢやわいなア。

皆々　エヽ。

伏屋　すりや、戀の叶はぬを根に葉に持つて、うぬ甚三め、
甚三は。

此花　慥かにお屋敷へ。

伏屋　うぬ、甚三め。

ト行くを皆々留めて

皆々　マア、待たしやんせいなア。

伏屋　イヽヤ退け。

皆々　待たしやんせ。

ト留めるを伏屋之助振り切り〳〵、この模様にて、橋
がゝりへ皆々付いて入る。妻菊、残り居る。ト兵庫の
女房更科、出かけ居て

妻菊　更科さま。

更科　どうやら斯うやら、殿様はお屋敷へ。

妻菊　この様子を一時も早う。

更科　大兵庫へ……ござんせ。

ト両人、橋がゝりへ走り入る。返し。

造り物、柳原土手になり、稲田東藏、大殿左京太夫
を殺し、車輪の轡を奪ひ取り出る。花道より萬野兵
庫、家來に提灯を持たせ出る。行き合ひ、いろ〳〵
あつて、曲者待てと呼び留める。ト互ひに手裏劍打
ち、逃げて入る。それよりいろ〳〵あつて又返しに
なる。

造り物、屋體の體。向う一面金襖、侍ひ大勢、捕り手形にて並び居る。おすわの方、長刀を突き、鉢巻にて床几にかゝり居る。伏屋之助、股立ちにて、九重姫、更科も脇差を差し、凛々しく、おすわの方に引添ひ居る。その外腰元大勢相詰め居る。見得よく上畑新吾、川那邊伴藏、高股立ち、諸士大勢、この見得。早太鼓方々にて、アリヤ〳〵の聲にて、道具とまる。

すわ　川那部伴藏、矢張り曲者の行くへは知れぬか。

作藏　ハツ、辰巳の御門より、方八町が間に、人數を分ち曲者の詮議いたせども、今に於て何の注進もござりませぬ。

侍一　その上我れ〳〵、隠れ〳〵は申すに及ばず

侍二　天井下屋、殘る方なく詮議いたせども、曲者の行くへは相知れませぬやうにござります。

九重　思ひがけなき今宵の騒動。

更科　殿様の御最期と云ひ、預かりの寶紛失。

伏屋之助　太夫は殺され、兄者人はお果てなされる。この伏屋之助は、何とせうぞいの。

九重　斯う云ふ場所で、矢ッ張り花扇どのゝ事を仰しやるかいなア。

更科　九重姫さまの仰しやる通り、この場所で花扇どのゝ事は。

伏屋　おやと云うて、おりや悲しうて、どうもならぬわいの。

ト泣く。

すわ　伏屋之助、そりや何事。大切なお家の一大事。預かりの寶紛失と云ひ、殿様の御最期の場所を辨まへ、泣かずに居る自らが心の内を、御推量なされて下さりませい。

更科　奥様の立派に仰しやるお心根を

九重　思ひやつて

皆々　お痛はしうござりますわいなア。

ト向うバタ〳〵にて、園原圖書、押取り刀にて走り出て

圖書　一家中の者ども、殘らず相詰め居るか。

皆々　伯父御圖書さま、先づ〳〵。

圖書　館の騒動、知らせに依つて駈けつけたが、奥方おすわの方。

すわ　圖書さま、思ひがけない館の騷動。
圖書　して、兄者人の御尊骸は。
更科　矢張り奥殿に。
伏屋　伯父者人、私しが身の上、今日程悲しい日はござりませぬ。
圖書　伏屋之助、車輪の縛も紛失とあるか。
伏屋　左樣でござりまする。
圖書　氣遣ひ致すな。縁を引いたるこの圖書が罷り在れば、兄者人の敵、寶の盜賊も、詮議いたしてお目にかける。ナニ、兵庫が女房更科。
更科　ハア。
圖書　其方が夫兵庫、かゝる大騷動に、何ゆゑ登城いたさぬ。
更科　イヤ、夫兵庫へ騷動の樣子を、早速注進いたさせましたれば、追ッ付け登城でござりませう。
圖書　家老たる萬野兵庫、この騷動に登城せぬとは、どうやら心得ぬ。
　トこなしある。ト向うバタ／＼にて、七郎平走り出る。
更科　近藤どの、夫兵庫どのゝお返事は、なんと／＼。
七郎　兵庫さまへ注進申せしところ、似合ひの曲者に出合ひ、その曲者取逃がせしとあつて、柳原より直ぐに芝口の方へ、お出でなされましてござります。
すわ　ナニ、そんなら兵庫が曲者に出合ひしなれど、取逃がせしとは。
九重　ハテ、殘念な事を。
　ト向うバタ／＼にて、當馬、走り出て
當馬　今日決斷所にての御上意
　トお觸れ書を差出す。おすわの方、取つて
圖書　ナニ、決斷所よりの御上意。
となる。
當馬　拙者今日飛鳥山より歸りかけ、決斷所より、お召しなされ、この度の盜賊、稻田東藏と申す者の捕り方を、蘭原家へ仰せ付けられ、即ち觸れ書を受取り、立歸りましてござります。
更科　そんなら今宵寶藏へ忍び入り、車輪の縛を奪ひ取り、大殿樣を手にかけ、立退きし曲者が
伏屋　お尋ねの盜賊
皆々　稻田東藏であるまいか。
すわ　殿樣を手にかけ、家の重寶車輪の縛を盜み取つたる

曲者が、もし稲田東藏に極まると、捕り方を請けながら、
取逃がしたる重々の誤まり、薗原の家の一大事。

圖書　この騒動に、今まで參らぬ萬野兵庫。

七郎　どうやら合點が。

圖書　皆の者、ソリヤ。

ト目配せする。

皆々　ハッ。何れも、ござれ。

ト皆々駈け出す。

すわ　皆の者待て。何れへ參る。

皆々　兵庫が館へ。

圖書　登城せぬが心に一物。

皆々　ぢやに依つて。

すわ　ハテ、自らが詞もかけぬに、皆の者、立騒いで見苦しい。扣へて居い。

圖書　でも、この騒動に居り合はさぬ

皆々　兵庫が心底。

すわ　サア、病氣遲參も仔細もあらう。マア〱、急かずとも心を鎭めて、曲者の詮議が肝要。

皆々　ムウ。

ト立戻る。

すわ　ナア、伯父御樣、左樣ではござりませぬか。

圖書　現在の夫の最期、さぞ取亂すと思ひの外に、ハテ、丈夫な。流石は武家の奥方、天晴れ女には稀れなおすわの方。驚ろき入りました。

トこなしあつて、向うより

呼び　御上使。

圖書　ヤア、思ひがけなき上使のお入り。

伏屋　まだ明け六ツも打たぬうちに、ハテ、心元ない。

すわ　何にもせよ、御上使のお入りとあれば、これへお通し申せ。

ト長刀を置き、衣紋繕ろひ、皆々もその通り。ト向うより石堂主計頭、着付け上下にて、上下の侍ひを連れ出て、花道にて

主計　諸大名諸士方の、横目の役目相勤むる石堂主計頭。今宵當家の騒動、事の樣子を糺し、足利武將へ申し上げんその爲、夜中なれど横目の役人、罷り通りまする。

トすつと東舞臺上座へ通り、皆々並みよく引下がつて

圖書　横目のお役、石堂主計頭どのには、御苦勞千萬に存じまする。

主計　當館の御緣家、薗原圖書、まつた奥方おすわの方、

すわ　御舎弟伏屋之助どの、その外一家中の面々にも、左京太夫どのの不慮の横死、館の騷動、さぞ御辛勞。
すわ　主計頭さまには、お役目とは申しながら、日頃の御懇意、有り難う存じ奉りまする。
主計　して、左京太夫どのゝ、御最期の場所は何所に。
すわ　即ち奧殿に死骸も其まゝ。
主計　決斷所への訴へは明朝。跡目萬端願ひの品は、一家中評議の上。拙者は只見屆け、横目の檢視役。
すわ　兎角よろしうお願ひ申し上げまする。
主計　然らば御最期の體、とくと檢めませう。
すわ　御案内は自ら。大切な御上使樣、陪臣の者どもは、一人も奧殿へは叶はぬぞ。
皆々　畏まりましてござりまする。
すわ　主計頭さまには、奧へお通り下されませう。
主計　御臨終の場所、作法も亂さぬ奧方の取計らひ。石堂主計頭、とくと感心。ハテ。
　ト思ひ入れあつて
　マア、御案内頼み存ずる。
すわ　先づお入りなされませう。
　ト唄になり、主計頭、おすわの方、皆々奧へ入る。ト後に圖書、何れも殘り、いろ〳〵あつて
伏屋　姬、更科。
九更　若殿樣。
三人　こりやマア、どうなりますであらうぞ。
　トこなしある。ト向うバタ〳〵にて、辨天胴助、盜賊の形。奴有平、奴にて、兩人、白木の狀箱をせり合ひながら出て來て
有平　サア、その狀箱、此方へ渡せ〳〵。
胴助　大切の密書、渡す事はならぬ。
當馬　ヤア、見れば兵庫が家來有平、騷々しい、何事ぢや。
七郎　かゝる騷動の砌り、御上使もお入り。靜まれ〳〵。
圖書　イヤ、有平。見馴れぬ者を捕へて立騷ぐには、仔細があらう。
新吾　仔細を云うた。相手は何者。
有平　イヤ、何者か存じませねど、狀箱を持つて御門のあたりに窺ひなするは、なんでも合點參らず、詮議の筋にならうかと存じて、右の仕合せでござりまする。サア、そのその狀箱、此方へ渡せ。
胴助　イヤ、滅多に渡さぬ大切な密書。屆ける先のお人よ

り、外に見せる事はならぬわい。
ト立廻り。
圖書　詮議しかゝつた有平、早く狀箱、此方へ。
有平　畏まりました。
胴助　イヤ、首は取られても、滅多にや渡さぬ。
圖書　狀箱渡さぬは必定曲者。
皆々　手に餘らば、我れ〳〵がかゝらうか。
有平　イヤ、有平めがしかゝつた詮議。人は頼まぬ。
ト胴助と烈しく立廻りになつて、有平、右の狀箱を取
る。
ソレ、狀箱檢めた
トこちらへ拋る。
胴助　それを。
トかゝるを有平立廻りにて
有平　ドツコイ。
ト留めるうち、皆々狀箱を開き、狀を出し、中に小柄
一本ある。
皆々「萬野兵庫どのへ、稲田東藏」ヤア、。
ト驚ろく。
更科　萬野兵庫どのへ稲田東藏。

伏屋　コレ、この狀箱の内にこの小柄。
ト出し見せる。更科、取つて
更科　誠にこの小柄は、兵庫どのゝ御秘藏、八ツ橋に杜若、
即ち後藤祐乘が細工。
有平　その小柄が狀箱に入れてあると云ひ
圖書　合點のゆかぬ狀の名宛。
伏屋　稲田東藏よりとは
皆々　ハテ、心得ぬ。
胴助　名宛を見られし上は。
ト有平を振り切り逃げうとするを、有平引き戻して
有平　イヤ、動くな。
ト支へる。
圖書　サア、更科、早くその狀を讀み上げい。
更科　エ、。
圖書　稲田東藏より送つたる兵庫が小柄。その狀讀んだら
何もかも樣子は知れう。
皆々　早くその狀讀み上げい。
更秋　サア、それは。
當馬　ハテ、埒の明かぬ。
ト引ツたくり、封印切る。

ナニ〳〵「紙面を以て申し上げ候ふ、いよ〳〵お頼みの通り、今宵寶藏へ忍び入り、蘭原へ預かりの重寶、車輪の緡を易々奪ひ取り候ふところ

新吾　左京太夫居合せ、遁がれがたなく候ふゆゑ、貴公より預かりの杜若の小柄を以て

七郎　杜若の小柄を以て手裏劍に打ちかけ、左京太夫を刺し留め、危ふき所を遁がれ立歸り申し候ふ。

當馬　後難を存じ、右の小柄を拔き取り、早速返辨いたし候ふ間、お受取り下さるべく、詳しき儀は貴面の砌り、萬々申し上ぐべく候ふ、以上。

皆々　萬野兵庫どのへ、稻田東藏より」。

圖書　さては兄左京太夫を手にかけ、車輪の緡を奪ひ取りたる大罪人は、兵庫に極まつた。

更科　エ、。

圖書　ハテ、兵庫は恐ろしい者ぢやなア。

有平　イヤ、御主人兵庫さまに限つて、さう云ふ企みは、よもやござりますまい。

皆々　でも、この狀と云ひ、小柄が慥かな證據。

有平　サア、その樣子は此奴。サ、有やうに吐かし居らう。

胴助　イヤ、何も知らぬ。お頭東藏どのゝ云ひつけで、その密書を萬野兵庫どのに渡さう爲、門前をへちまうて居た。おりや稻田の手下、辨天胴助と云ふ盜賊ぢや。

有平　その盜賊ゆゑ、詮議して事を糺す。

　ト胴助にかゝるを、何かと立廻りあつて引据ゑ

どう云ふ仔細で、あの密書を東藏が方よりおこしたのか。

　トいろ〳〵あつて、胴助が首筋取つて引起す。胴助、舌喰ひ切つて死んで居る。有平、こなしあつて、ホイと坐る。

更科　詮議の種のその者が

有平　相果てた上は。

圖書　いよ〳〵兵庫は大罪人。

有平　ムウ。曲者に出合はしつたあるお旦那の樣子。なんでもぽツ付いて下郎めも。

更科　有平、早う。

有平　心得ました。

圖書　ハ、、、。ハテ、いろ〳〵にからくる兵庫が企み。幸ひ奧には横目のお人。この樣子を兵庫が氣取らぬうちに、彼奴が屋敷へ押しかけて。

新吾　繩ぶつて立歸り、お家のお爲。何れもござれ。
皆々　さうぢや。何れもござれ。
ト皆々行かうとするを、更科、留めて
更科　マア〳〵待つて下さりませ。よもや夫兵庫に限つて此やうな恐ろしい企みを致しませうか。どうぞ暫らく。
岡書　企まぬ者が盜賊を頼んで、家の重寶は、どうして盜ませた。
更科　なんの夫が寶を盜ませませう。
岡書　その證據は密書の文體。但し、外に盜まぬと云ふ云ひ譯があるか。
更科　サア、云ひ譯はなけれども、見す〳〵知れた無實の難。
皆々　無實の難と云ふ證據は。
更科　サア、それは。
皆々　サア〳〵〳〵、なんと。
更科　お家の大事に夫の遲參。それゆゑに、エヽ。
ト思ひ入れ。
七郎　何れも、ござれ。
ト皆々花道へ行く。ト向うより、兵庫、上下にて、走り出る。皆々立塞がり
皆々　ソリヤ、兵庫ぢやぞ。
當馬　萬野兵庫、動くな。
兵庫　何れも、御苦勞々々々。さぞお疲れでござらう。先づ奧樣には、どれにござる。
トうろ〳〵する。
當馬　兵庫、捕つた。
トかゝるを
兵庫　騷動の樣子、承はつた〳〵。
ト行かうとする。
七郎　捕つた。
ト又かゝる。
兵庫　大殿御最期、寶の紛失と、承つて拙者仰天。
當馬　兵庫、捕つた。
兵庫　遲參の段、眞平々々。マア、とくと評議せにやならぬ。サア、何れもお出でなされ。
七郎　捕つた。
兵庫　横目のお入りも承り、取る物も取りあへず、宙を駈つて參つた。して、御前體は、如何でござる〳〵。
トこの心にて右の通り度々あつて、この間、兵庫、始終取逆上せたることなし。何にも耳に入らぬ思ひ入れあ

つて、皆々を振り放し、本舞臺へ來る。これまで始終花道にてするなり。好き所にて皆々本舞臺へ來て

皆々　萬野兵庫、奥へは叶はぬぞ。

圖書　其方は大罪人、繩かゝれ。

皆々　腕廻せ。

兵庫　この兵庫を、奥へ叶はぬ、腕廻せとは。

伏屋　コレ〳〵兵庫、其方はマア、ひよんな事を企み居つたなう。

九重　さうしてマア、稻田東藏と荷擔人と云ふやうな事があるものかいなう。

更科　コレ、申し、兵庫さま、お家の重寶、車輪の轡を盜ませ、勿體ない大殿樣を手にかけたは、お前でござりまするか……ヤア、お前は。

兵庫　默れ女房。お家の騷動ゆゑ、コリヤ血迷うたな。氣を取逆上せて居るか。

更科　イヽエイナア。お前に……サア、大罪人と疑ひがかかつたわいなア。

兵庫　何がなんと。

圖書　萬野兵庫、兄左京太夫どのを、其方は手にかけ、車輪の轡を盜ませたと云ふ慥かな證據はな、コレこの小柄。

ト見せる。兵庫、取つて

兵庫　如何にも、こりや拙者が所持の小柄。

皆々　覺えがあるか。

兵庫　この小柄は、最前柳原で出ッくはせし曲者。逃げる所を後より、詮議の手がゝりと、その曲者が肩先へ打込み置いたるこの小柄……爰へはどうして參つたな。

更科　サア、その小柄、二つには、稻田東藏と組みなされたと云ふ、慥かな證據はこの密書。

ト兵庫へ以前の密書を見せる。

兵庫　「萬野兵庫どのへ稻田東藏。」

ト右の状を讀んでこなし。

すりや、最前出合ひし曲者が、紛ふ所もない稻田東藏。大殿を手にかけ、お家へ預かりの車輪の轡を奪ひ取り、その上に小柄を相添へ、爰へ送りしは、さては兵庫を科人にして腹切らせ、蘭原を押領せんとの企み。アヽ、こりや惡計の落し穴へ嵌められたな。ムウ。

圖書　ソリヤ、兵庫に繩ぶて。

皆々　腕廻せ。

ト兵庫にかゝるを見事に投げ

兵庫　イヽヤ、お家の安否聞くまでは、繩かゝる事罷りならぬ。何にもせよ、奥樣に御對面申して。
圖書　イヽヤ、家國を亂す大罪人。奥へ通す事はならぬ。
兵庫　何がなんと。
皆々　但し、科人でないと云ふ云ひ譯あるか。
兵庫　サア、それは。
皆々　サア〳〵、なんと。
兵庫　エヽ、無念な。
圖書　ソリヤ。
皆々　捕つた。
ト皆々かゝるを兵庫、見事に投げる。
兵庫　惡く寄つたら手は見せぬぞ。
ト奥より。
すわ　イヤ、兵庫に繩かけるには及ばぬぞ。
ト腰元連れ出る。
兵庫　おすわの方さま。
九重　そんなら最前からの樣子は。
すわ　殘らず樣子は聞いたわいなう。
兵庫　すりや、奥樣には最前より。
すわ　其方が罪のあらまし、とつくり聞き屆けて

圖書　罪極まつた科人、踏みつけて繩かけい。
すわ　イエ申し、罪の疑はしきは輕くすとやら云へば、矢張り兵庫はあの儘。
皆々　おやと申して。
すわ　ハテ、自らが思案があれば、大事ない、皆扣へて居や。
圖書　ムウ。
トこなしあつて、兵庫、思ひ入れあつて、おすわの方に向ひ。
兵庫　奥樣、今宵の騷動、殿樣の御最期、御愁傷の段。
すわ　其方も無念にあらう。
兵庫　ハア。
トぢつと俯向いて泣く。
すわ　身に覺えなき、無實の罪を受けたる其方の心根、推量しまして。
兵庫　すりや、拙者が胸中を。
すわ　知らいでならうか。數代忠臣の薗野兵庫、今宵の騷動、殿樣の御最期、寶の紛失、また其方の身の上。こりや正しく薗原家を滅亡させんと計る者の仕業。さは思へども差當る、證據なければ月に叢雲。

兵庫　疑はしいはコレこの小柄。模様をとくと御上覧下さりませ。

ト小柄を差出す。おすわの方、取つて、こなしあつて

すわ　こりや、八ツ橋に杜若。

兵庫　いづれあやめと引きぞ煩らふ拙者が身の上。

すわ　紫の色とはなしに杜若、それとは見れど影や映らふ。

兵庫　お家の納まり。

すわ　殿様の敵。

兵庫　寶の詮議。

すわ　花物云はねど

兵庫　兵庫が身の上。

すわ　知らいでならうか。

兵庫　奥様。

すわ　兵庫、この小柄の模様、とつくりと目利きしました。

兵庫　エヽ、有り難う存じまする。

ト差添抜いて腹へグッと突ッ込む。皆々驚ろき

伏屋　ヤア／＼、兵庫、切腹しやつたかいの。

更科　こりや兵庫どの、お前が死なしやんして、お家の納まりは、なんとならうぞいなア。

ト取りつき泣くを突き退け

兵庫　ヤア、うろたへ者めが。この兵庫が顔……イヤサ、この兵庫が切腹の後、我れに成り代り、伏屋之助さま御臺様、御兩所に心を付けいよ。

トこなしあつて、更科、愕りしながらヂッと兵庫が顔を見て、こなしあつて、ヂッと泣く。

兵庫　伯父御圖書さま、疑ひかゝりし身の云ひ譯。萬野兵庫が切腹、とくお見屆け下さりませう。

圖書　ムウ。

トこなしあつて、兵庫が側へ行き、疵口を見て

臓腑を破り引き廻したれば、耆婆が來ても療治は叶はぬ。

兵庫　萬野兵庫か切腹、助かるやうに突ッ込まうか。馬鹿な事を。

圖書　すりや、疑ひ立ちし云ひ譯に、其方が

皆々　切腹いたしたな。

兵庫　イヽヤ、お家の納まり。殿を手にかけ、寶を奪ひ取りし稻田東藏が行くへ、詮議の其うち、日延べのお願ひ。

主計 日延べの願ひは石堂が、推擧いたしてくれう。
ト奥より出る。
すわ そんならあなたが。
主計 左京太夫どのとは日頃懇意、家老たる萬野兵庫、命を捨てゝ日延べの願ひ。推擧いたすも、義を見てせざるは武士の本意ならず。足利への申し譯・家を立つべき日延べの日數、凡そ五十日。
兵庫 すりや五十日のお日延べを。
主計 石堂主計頭、横目の役に替へても、推擧いたしてくれう。
兵庫 エヽ。
ト石堂主計頭を拜む。おすわの方、思ひ入れあつて
すわ コレ、其方が切腹しやつたゆゑ、當家の納まり、忝ないぞや。思ひがけない、サ、萬野兵庫。
兵庫 奥樣、拙者が最期が、お家の納まりとの御一言が、未來へ土産。これに付けても、何にも知らぬ女房。イヤサ更科、必らず最期を嘆くな。五十日の日延べが
すわ 寶の詮議。
九重 大殿樣
更科 兵庫どのゝ
伏九 卽ち中陰。
主計 忌七日が
圖書 家の結着。
皆々 マア、それまでは。
圖書 兵庫が介錯。
トおすわの方をめどに切りかゝるを、主計頭、立廻りにて、よろしく留める。
主計 イヤ、介錯には作法あるもの。
ト付け廻す。
圖書 でも。
主計 ハテ、見苦しい圖書どの。殊に日延べの願ひ、當家の緣たるこなたなれば、直さま同道。
圖書 お供いたさう。
ト主計頭、圖書、上下侍ひ、靜々と行く。トゞ好き所にて
主計 萬野兵庫。日延べの願ひ、其方が切腹見屆けし上は、この主計頭、刀にかけて。イヤ、最期を清う。
兵庫 エヽ、有り難い御上使のお情。大殿のお供せん。
トきり／＼と引き廻し、笛を搔き切り、手を合し、バツタリとこける。皆々こなしあつて、

主計　天晴れ忠死。
皆々　南無阿彌陀佛。
圖書　どうでも。
　ト また刀に手をかけ、きしむ。主計頭、留めて
主計　拙者はお暇。
圖書　ムウ。
　ト おすわの方へかゝる。よろしく留めて
すわ　御上使様には、お役目御苦勞に存じまする。
　ト よろしく幕

二段目　薗原本國館の場

役名——御臺、おすわの方。薗原圖書。高島大助。津和平馬。飯田勝左衛門。溝川戸右衛門。大橋仙藏。水野周平。小姓、主水。腰元、松ヶ枝。手下、土手の銅鐵。遠山甚三郎。薗原伏屋之助。梅津息女、九重姫。稻田東藏 實ハ萬野兵庫。同女房、更科。岩倉靱 實ハ稻田東藏。

造り物、平舞臺、見附け金襖。正面に、松ヶ枝、更科、九重姫、囃子にて、伏屋之助、海上を舞うて居る。この見得、この謠にて幕開く。

よろしく舞ひあつて打ち上がる。ト内にて踊り三味線太鼓鳴る。ト見附けの襖兩方へ開く。一面の二重舞臺になると、眞中におすわの方、衣裳裲襠にて褥に直り、酒呑んで居る。大助、衣裳裃にて長柄の銚子を持ち、おすわの方に酒をすゝめて居る見得。橋がゝり、この方へ、仙藏、周平、勝左衛門、戸右衛門、平馬、着附け裃にて皆々願ひの心にて扣へ居る。

大助　よいよ／＼。若殿のお能、お女中方の囃子、奥の踊り。どうも云へぬぢやござりませぬか。おすわの方さま、これを肴にて、一獻召上がられませう。
すわ　イヤモウ、けうとう面白かつたわいなう。
仙藏　我れ／＼が一統のお願ひ、お聞き届け下さらば、有り難う存じまする。
伏屋　おすわの方さまの仰せゆゑ。この頃都からおぢやつた、この九重姫まで能の役目。
九重　自らは、側へどのやうな仰せでも、あなたの側に居りまするが嬉しうござります。

すわ　ほんに都、梅津宰相さまの九重姫さまを、澤山さうに、お免されて下さりませえ。
九重　なんの、云ひ號けの自ら。伏屋之助さまのお側に居たいばつかり、父上樣にお願ひ申して、この國へ參つて居りますれば、この上ともに、おすわの方さま。
すわ　氣遣ひなされな。伏屋之助さまと御夫婦に致しまするわいなア。
九重　エヽ、忝なうござりまする。
松枝　わたしらの拙い囃子、お恥かしうござりますわいな。
周平　如何に奧樣の御意なればとて、今日は大殿樣の七七日。
勝左　それが寶詮議の日延べの日限。
戸右　足利より御上使お入りとの先觸れあれば。
仙藏　どうなる事やら。
大助　サア、奧樣、お一つ〳〵。
すわ　兎角、大助でなければ夜が明けぬわいの。
諸皆　是非とも我れ〳〵が願ひ。
仙藏　寶の詮議。
周平　足利への申し譯は。

すわ　酒に醉うたが本性か、本性が醉うて居るか……ア、神ならで知る人もなし……ちやなう大助。
大助　左樣々々、大殿お果てなされてより、この家國は、おすわの方さまのお心任せ。
戸右　イヤ〳〵、それゆゑ、我れ〳〵が新訴訟は。
周平　大殿御在世の砌りは、正直を元として、草木も搖がぬ當國の繁昌。
勝左　然るに大殿、不慮にお果てなされてより、お國の政道は、おすわの方さまのお心の儘。
仙藏　系圖正しき侍ひを遠ざけ、お側には高島大助一人、お氣に入つて立身出世。
平馬　譜代忠功の者どもまでを退け、大助を側近く、政道の助けと思し召さるゝは、薗原家の破滅の基。
戸右　さま〳〵の工風を構へ、町人百姓を虐げ、上には奢りを進める侫人ゆゑ、何卒大助を我れ〳〵に下し置かれませうならば
平馬　ずた〳〵に切りさいなむが、お家のお爲。
勝左　舊恩の忘れぬ諸士の願ひ。
戸右　お聞き屆け下さりませうならば
諸皆　有り難う存じ奉りまする。

大助　ハア、何事の願ひかと思へば、この大助の出世を妬み、智惠なしの腑拔け侍ひ。寄り集まつてさま〴〵のたわ言。佞人などとは、慮外千萬。
周平　ヤア、慮外とは何が慮外
戸右　町人百姓を痛め、お家を亂さんとする大惡人を、申し受けうとするが
皆々　誤まりか。
大助　何を外見ずの懷魂ひ。無益の地を益と爲す仕方を立て、申し上げるは町人百姓の爲。領分十石峠あたりより、木曾川を切り落し、飛驒の高山の麓より、北國の海へ水を流し落せば、田地田畑水損なく、又その跡を田地にすれば、餘程の物なり。年貢の納まりは、お家のお爲。
周平　イヽヤ、下を憐れむ其方が、町人百姓の金銀を虐げ取る事、知るまいと思ふか。
戸右　是非とも申し受けて
五人　其方を成敗。
大助　ハヽヽヽ、見事其方達が、この高島大助を。
皆々　申し受けて見せう。
大助　イヤ、小癪な奴等の。

ト大助、五人と反り打つて詰めかゝると、向うより
呼び　御上使のお入り。
三人　最早御上使のお入りとあれば
すわ　大助、皆の者も、マア、靜まつてお出迎ひ申しや。
大五　ムウ。
ト兩方キツとなるを
更科　コレ、奧樣の御意でござんす。
大五　ハツ。
三人　わたし等が身の上は。
更秋　マア奧へ。
松枝　アイ。
ト松ケ枝、奧へ入ると合ひ方になり、皆々出迎ふと向うより、薗原圖書を侍ひ五人にて圍ひ、競ひ、衣裳𧘕𧘔にて、近習四人連れ靜々と出て來る。
侍皆　動くまい。
伏屋　ヤア、これは。
圖書　御上使のお入りと承り、見附けまでお出迎に參つたるところ、思ひがけなく弓矢にて路次の警固。足利の嚴命。何も身に覺えなき圖書なれども、御上使の計らひ。
皆々　すりや、御上使の。

競　イヤ、家中の者、騒ぐ事はない。足利の仰せ、薗原一家不審のあるゆゑ、伯父圖書を斯くの通り。岩倉競、上使の趣き申し聞かさん。家來、引け。

弓侍　ハツ。

ト皆々扣へろ。

すわ　さては御上使、岩倉競さま。

競　罷り通る。

トずつと二重舞臺の上座へ通る。圖書、おすわの方、その次へ並よく並ぶ。殘りは皆々下舞臺に分れて並ぶ。

圖書　伏屋之助、おすわの方の越度ゆゑ、伯父たる身共にまで、御不審立つて甚だ迷惑。

すわ　して、その御不審の樣子。

三人　御上意の趣き。

皆々　仰せ聞けられ下さりませうならば、有り難う存じます。

競　イヤ、申し聞かするに及ばぬ。今日は五十日の日延べの終り。して、紛失の寶、手に入つたか。

皆々　エヽ。

競　イヤサ、先達て足利どのより、當家へお預けなされし車輪の轡、紛失の砌り、左京太夫どのの横死。即ち薗原家滅亡にも及ぶべき所を、家老萬野兵庫、切腹いたして五十日の日延べの願ひ。石堂どの取次にて、お聞き屆けあつて、斯く本國へ歸り、日延べの中に寶の詮議あるべきところに、おすわの方の身持ち放埒、これ第一の科。二つには伏屋之助、足利家のお仲人にて、都梅津宰相公の御息女、九重姫と云ひ號け。結納聟引手として一千丁の御朱印。當家の重寶時雨の色紙と、取替へ婚禮あるべきところ、似せ物拵らへ內祝言いたさせ、取替ふべき色紙も似せ筆を以て、御朱印を取り受けし科明白。即ち宰相公より足利どのへ訟訴。これ打捨て置かれぬ大罪人。

すわ　すりや、伏屋之助さまは。

伏屋　イヤ、その似せ物を拵らへ、祝言いたしたは、皆伯父者人の。

圖書　コリヤ／＼伏屋之助、あはてゝ何を云ふ。得知れぬ者を其方に仕立て、祝言したは、其方が云ひ交して居る、傾城花扇とやらへの心中。云ひ號けの姫を嫌ひ、離緣を致さん爲であらうが。

伏屋　イヤモ、それも皆お前樣の。

圖書　現在の伯父の身共が、甥の放埒、廓のほたへを知ら

うか。馬鹿な事を。
ト睨む。
更科　云ひ號けの九重姫さま、都より先達てお入りの上は、若殿さまに咎めはござりますまい。
岡書　イヤ、伏屋之助九重姫も、緣組みは足利家のお仲人。この館へ參り居る姫なれば、何ゆゑ足利家へお屆け申さぬ。
伏屋　サアそれは。
九重　自らが參りましたは、父上さまにお願ひ申しまして密かに。
岡書　すりや内證。表へ立たぬ姫の輿入れ。足利家へその樣子は申し入れられぬ。
伏屋　エ、。
トこなしあり。
大助　若殿、御上使のお咎め。こなた、申し譯がなけりや、お家は退轉。拙者は國詰め、事の樣子は存ぜぬが、東に於ての身持ち放埓、承つて、どうで碌な事は出來まいと存じて居つた。ハテ、笑止千萬な。
九重　申し、伏屋之助さま、大切な場所、どうぞ申し譯はござりませぬかいな。

更科　申し、若殿樣、代りを立て、御祝言なされしは、ほんの若氣。その樣子、默つてござらずと、これは斯う、あれはあれと。
ト岡書を敎へ
有やうの通り、申し譯をなされませいなア。
すわ　イヤ、如何やうに申し譯なされても、放埓の越度、低い所へ水溜るとやらの下世話の譬へ。詞多きは却つて申し譯にはなりますまい。
伏屋　そんなら、何と致しませう。
競　御朱印色紙、改めませう。
伏屋　エ、。
競　御祝言を嫌ふは若氣の至り。野心なければ、誠の色紙御朱印も承知の筈。
伏屋　成る程、二種ともに御覽に入れませう。
岡書　オ、それがよい。身も現在の舅の其方。惡しかれとは思はぬ。早く。
伏屋　畏まりました。
ト奥へ入る。競、こなしあつて
競　誠に愛着の道、その根深く、源遠し。五塵六欲のその中に、只彼の惑ひの一つ止め難きは、兼好が筆ずさみ。

ハテ、よく示したなア。
ト此うち伏屋之助、色紙の箱と御朱印と持つて出て
伏屋　おすわの方さま、時雨の色紙・一千丁の御朱印、イザ、お改め下され、御上使樣へ。
トおすわの方の前へ持つて行く。
すわ　當家の重寶時雨の色紙、後鳥羽院の御宸筆。
ト蓋を開き、改めろうち、圖書こなしある。
ヤア、これは。
圖書　何と致した。
すわ　すりや、この御朱印も。
トまた見て
ヤア、これも。
圖書　二種ともに似せ物か。
皆々　エ、。
ト見ようとするを、おすわの方、よろしくあつて
すわ　イヤ、二種ともに、とくと改め差上げませう。
圖書　すりや、一千丁の御朱印、時雨の色紙も。
すわ　サ、大切な御上意、とくと內見の上、差上げたう存じます。
競　そりや如何やうとも。併し、御朱印色紙の見屆けばかりでなく、おすわの方にも奢りの不審。足利の聞え、彼れこれ以て思し召しよろしからず。それゆゑ執權職多き中に、この岩倉を當國へ差越されしは、右の條々詮議を遂げ、返答に依つて計らふ旨あれば、おすわの方、とくと思慮を廻らして返答めされい。
すわ　これは有り難い岩倉さまのお詞。殿樣の御最期、寶の紛失、家の大事と自らが心の內、闇に險阻の近道を辿るが如く、日延べの今日只今まで、兎つおいつに家の治まり。
競　イヤ、おすわの方、そりや僞はり。家の治まりを思ふ者が、アレ庭前にはあの如く、潮の流れを掘り入れ、吉原深川より毎夜遊女を引入れ、踊りぢやの能ぢやのと、伏屋之助諸とも踊り狂ふ奢りの沙汰。
すわ　イヤ、自らの身の上、奢り遊興と見せるも、一つの計略。紛失の寶、行くへ詮議の爲。
圖書　ナニ、遊興が詮議の爲とは。
すわ　サア、遊興に心亂すと見せかけても、胸なる月は曇らじと、大殿樣の追善も、足利家を憚つて、四座の太夫を召し寄せず、女の業に打ち囃子。謳ふも舞ふも法の聲。佛事供養を奢りと唱へ、自らや伏屋之助さまは、放

埓とわざと世に謳はすも、彼の曲者、行くへ知れざる稲田東藏に、油斷をさせる謀略。殊に廓は諸人の入込む毎日毎夜、入り替り立ち替り呼び寄せて樣子を聞き取り、舞子遊女は隱し目付け。又この庭前へ潮を掘り入れしは當家の氏神、諏訪大明神を念ずる御手洗、祓ひ清めるお家の治まり。

岡書　ハン、どぎまぎとした云ひ譯。そりや俗に云ふ判じ物。岡に書いて持たつしやれ。

競　ア、イヤ〳〵、先程より承はるところ、流石は蘭原家の奧方、天晴れ風雅の詮議。イヤモウ、驚き入つた。併し、さうゆるゆるとした事ではない。今日は日延べの終り。彼の紛失の寶受取らねば、蘭原家は長く斷絕でござるぞ。

三人　そんなら今日中に

大助　車輪の轡。

岡書　時雨の色紙、御朱印も。

すわ　とくと内見詮議を遂げ。

皆々　御上使樣への御返答。

競　して、詮議の手がゝりは。

すわ　彼の忍びの術に妙を得し、盜賊稲田東藏の在所。

競　アノ、名におふ盜賊稲田東藏を、

すわ　サア、艸を分けて詮議いたすところへ、當國へ入込みしと注進あれば、追ッ付け召捕り寶の詮議。

岡書　イ、ヤ、べん〳〵とした事ではない。寶差上げるは今日中。

競　至急の詮議。もし手に入らぬ時は。

すわ　申し譯に自らが命。

競　氣の毒ながら、有無の返答、承るは上使の規模。

岡書　寶の有無が生死の境ぢや。自滅の刻限までは

三人　奧の殿にて御休息。

すわ　御上使樣。

競　奧で返答、相待ち申す。

ト唄になり、この一卷き皆々入る。おすわの方、後に殘り思案のこなし。合ひ方にて大助、側へ出て

大助　これはしたり奧樣、何を思案なされまする。大殿お果てなされてより、この國はお前樣のお心次第。これしきの御遊興を、奢りなどとは、伯父のわんざん。政道をお捌きなさるゝお身でも、したい事が出來ぬと云へば、世界は暗闇でござります。サ、、浮き〳〵と遊ばせ〳〵。

すわ　サア、それはさうなれど、今日につゞまる寶の詮

議。
大助　ハテサテ、また其やうな事を御意なさるわい。日頃のお氣に似合はぬ、お心が小さい〳〵。紛失した寶をば、今日中に渡せなどとは、御上使の餘りなる詞。大體足利を足利と奉つて居れば附け上がる。程よく寶が出ればよし、もし手に入らぬその時は。
ト囁く。
すわ　ムウ、そんならアノ、上使を毒藥を以て。
大助　コレ、お聲が高い。伯父御圖書どのを初め、御上使諸とも此方から先をかけ、軍神の血祭り、足利を一戰に攻め破り、義晴を押ッ下し、高慢顏の諸大名を、一々首を並ぶるものならば、東海姫子の國の主。古への例もあれば、鎌倉尼武將と尊み、我れらは四海の執權、したい事する遊興の物入り、下萬兵の貢ぎ。拙者の兼ねて仕方の通り、そつともお氣遣ひはござりませぬぞ。
すわ　誠にさうぢや。事に馴れたる其方の進め。出來た出來た。
大助　御承知ならば、奧にて密かに。
すわ　手段の毒藥。
大助　おすわの方さま。
すわ　マア奧へ。
大助　ハッ。
ト唄になり、大助、奧へツイと入る。後におすわの方一人殘り、こなしあり、
すわ　大助が進めを幸ひに、自らが放埓と見せるも、家國の爲。今日につづまる寶の詮議。ハテ、何としたものであらうぞ。
ト思ひ入れあり、雪チラ〳〵と降る。橋がゝりより遠山甚三郎、着流しにて、おづ〳〵出て、こなしあつて手を突き
甚三　申し、奧樣、おすわの方さま。
トおすわの方、聞えぬ體にて、降る雪を眺め
すわ　降る程も果敢なく見ゆる淡雪の、羨やましくも打ちかくるかな。殿の御最期より、心を千々に寶の詮議。雪に雫ぐの聲あれば、及ばずながら蘭原の、家の立つやうお願ひ申す、氏神諏訪の御神。
ト臆病口の流れを又見る。此うち甚三郎もこなしありて
甚三　遠山甚三郎めでござります。何卒奧樣へ一つのお願ひ。

すわ　この庭前へ掘り入れし潮の流れ、あの如く氷張り詰めあるも、誠に潮水に氷張るは、狐渡つて通ひ路となる。
甚三　サア、拙者が廓通ひ致せしも、全く色に耽りしにはあらず。仔細ありての儀でござりますれば。
すわ　また狐が渡り戻れば氷も解ける。
甚三　憚りながら、その申し譯を奥樣へと、お許しなきに推參仕りましてござります。
　トこの時、おすわの方、甚三郎を見て
すわ　そちや遠山甚三郎。
甚三　ハツ〳〵。
すわ　一旦國遠せし其方、何ゆゑ館へ立歸つた。
甚三　奥樣へお願ひの筋ござりまして。
すわ　廓通ひに身持ち放埒、殊に殿樣より拜領の、刀まで賣り拂ひ、傾城の身請けやら、剰つさへその傾城も、其方が手にかけたではないか。
甚三　拙者が放埒、傾城を手にかけし樣子、口でまだ〳〵申し上げんより、憚りながら、これ御覽下さりませう。
　ト懷中より二つの守を出し、おすわへ渡す。
すわ　アノ、この守を。

甚三　ハツ。
　トおすわの方、二つの守を開き見て
すわ　慶長五年三月二日誕生の男子。こちらも又、慶長九年正月二日誕生の女子。こりやコレ同筆と云ひ、同じ年號、五つ違ひの兄弟の印の守。
甚三　その一つの守は若殿伏屋之助さまと、深う云ひ交せし、吉原の傾城花扇。
すわ　又この守は。
甚三　拙者が生れし年號月日。
すわ　すりや、花扇と兄弟の其方。
甚三　伏屋之助さまの放埒の元は、幼ない時別れし妹と知つたは、飛鳥山にて、それより以前廓へ通ひ、妹と知らず口說きしは、若殿に思ひ切らさんその爲に、拜領の刀まで、人手に渡して身請けの相談。色で仕掛けて思ひ切らすも、九重姫さまと睦まじく、御祝言の致さすれば、足利家の聞えもよく、大殿樣の御安心と、些細な思案も忠義の爲。花扇を妹と知る上は、兄が手にかけ殺せしも、皆若殿樣を御大切に存じまする心から、人に知らさぬ身の放埒。武士のあるまい戀の意氣地で、傾城花扇を手にかけし遠山甚三郎なれば、御前の聞え、家中の手前、

も面目なく、直に國遠のところにお家の騷動。大殿様の御最期、寶の紛失、御家老兵庫どのゝ切腹まで承つて、南無三、この身の越度ゆゑ、かゝるお家の一大事に、居り合され不忠の段、何卒お詫び申し上げ、寶の詮議も及ばずながらと存ずるから、面押拭うてお館へ、立歸りましてござります。

すわ　妹を殺し、伏屋之助の放埓を止めん爲の、廓通ひであつたか。

甚三　その忠義も水の泡となつて

すわ　大殿様の御最期ゆゑ、折角其方が心盡せし

甚三　不便や妹めも犬死。この様子申し上げれば安堵。この上は腹切つて大殿様のお供。

すわ　待て甚三郎。

甚三　イヤ、未來へ參つて、大殿様へ、色に迷はぬ申し譯。

すわ　イヽヤ、其方が身の上、大殿様へ自らが、お詫びの取次ぎ致してやらう。

甚三　なんと御意なさるゝ。

すわ　大殿様へ御目見得いたさせう。

甚三　エ、。

すわ　コレ。

ト上手の一間の障子開く。内には具足櫃の上に六具ともに具足飾りあり、但し紅葉の葉の紋付き。甚三郎見て

甚三　アノ、これが。

すわ　薗原左京太夫さま。

甚三　エ、。

すわ　形見こそ今は仇なれ、これなくば

トぢつと泣く。

御定紋付きのこの具足は、即ち大殿様。

甚三　ハツ〳〵。

ト平伏する。おすわの方も思ひ入れありて

すわ　譜代の家來遠山甚三郎、廓通ひの申し譯。色に溺れし體は、伏屋之助さまのお爲。現在の妹を手にかけ、忠義を立てし甚三郎なれば、御褒美のお詞を遣はされませう。

ト泣く。甚三郎、思ひ入れありて

甚三　幼少の時分よりお側を相勤め、大恩受けし拙者めが、御最期の砌り、御尊顏も拜せぬ口惜しさ。本意なさを奧様。

すわ　甚三郎、當國の主
甚三　園原左京太夫さまが、やみ〳〵と盜賊めに
すわ　口惜しいやら無念やら、今日は卽ち七七日。
甚三　當る忌日もお家の安否。
すわ　變れば變る
兩人　殿のお姿。
ト兩人思ひ入れありて泣く所へ、奧へ伏屋之助出て、甚三郎を見て
伏屋　ヤア、遠山甚三郎。
甚三　若殿樣。
伏屋　太夫が敵。
ト脇差拔いて無二無三に切りかゝるを、摺り拔ける。おすわ留めて
すわ　待つた。こりや何となされます。
伏屋　イエ〳〵どうも堪へられませぬ。花扇を殺した甚三郎なれば。
すわ　イヤ、傾城の敵より、大切な殿樣の敵を打つお心はござりませぬか。
伏屋　エヽ。
甚三　花扇を手にかけし拙者も忠義。

圖書　イヤ、不義不忠の甚三郎、伏屋之助、手討ちに召され。
ト出る。
甚三　エ、なんと。
すわ　伯父御圖書さま。
圖書　おすわの方、甚三郎を伏屋之助が手討に致すを、何ゆゑ留めるのぢや。
すわ　遠山甚三郎は何科あつて。
圖書　知れた事、武士のあるまい廓通ひ。殊に傾城を手にかけたではないか。
すわ　傾城を手にかけても、身請けとやらをしたれば甚三郎が心次第。また武士たる者が廓通ひを科とあつて、成敗すれば、伯父御圖書さま、お前樣も手討に致さにゃなりませぬ。
圖書　ヤ、なんと。
すわ　伏屋之助を進め、廓通ひの元は圖書さま。殊に紅葉狩の遊興も、あなたのお指圖と云ふ事を、自らはよく存じて居りますわいなア。
圖書　ヤ。
すわ　サ、廓通ひの者を、一々吟味を遂げて成敗いたしま

せうか。
圖書　サ、それは。
すわ　なんとでござります。
圖書　ムウ。
　トこなしあり、甚三郎、思ひ入れあつて、スッと前へ
直り
甚三　若殿樣、花扇を手にかけし拙者が越度、イザ、御存
分になされませう。
伏屋　重々憎い奴なれど、今のおすわの方さまのお詞で、
どうやら。
　トこなしあり
すわ　助けて置くも非常の大赦。大殿樣の忌明けの追善、
甚三郎、其方に構ひはないぞ。
甚三　すりや、拙者は。
すわ　元の主從。
甚三　エ、、忝ない。
圖書　でも、見す〳〵。
すわ　ハテ、廓通ひの武士を成敗いたしませうか。
圖書　イヤ、それには及ばぬ。
伏屋　そんなら申し。

すわ　ハテ、伏屋之助さま、甚三郎、來やれ。
　ト唄になり、おすわの方こなしあつて、伏屋之助甚三
郎を連れ、奥へ入る。後に圖書殘り
圖書　なんの事ぢや。兎角邪魔になるおすわの方。
　ト思ひ入れあり、一間の具足櫃より
銅鐵　圖書どの〳〵、コレ伯父御。
圖書　ヤア、身共を呼ぶは何者ぢや。
　トあたりを見廻す。
銅鐵　ハテ、爰からぢや。
　ト具足着て前へ出て來る。圖書、悄りして
圖書　ヤア、これは。
銅鐵　ハテ、愚僧ぢやわいの。
　ト兜、具足を着、下に矢張り布子破れ衣着て居る。
圖書　其方は銅鐵。その姿は。
銅鐵　深川でフッと出逢うて、心の合うた拙僧。今日この
屋敷へ入り込み、具足を着て、向うに忍んで居たも、コ
レ。
　ト囁く。
圖書　ムウ、成る程。身共もその手段、此方の手番ひ、今
宵は過さぬ。

銅鐵　狐を使ふ愚僧が居れば、氣遣ひない。
圖書　必らず人に見咎められな。
銅鐵　ハテ、只の人間とは違ふ。また手段もあれば。
圖書　コリヤ、其方は奥へ參れ。
銅鐵　そんなら、何かは後に。
圖書　銅鐵。
銅鐵　圖書どの
圖書　先づ。
銅鐵　合點ぢや。
ト唄になり、銅鐵、奥へ入ると、本釣り鐘にて暮れ六ツ打つと、奥より競出て
競　最早暮れ六ツ。
圖書　御上使岩倉さま。
競　おすわの方は何方にぞ。詞番うた時刻到來。イザ、寶受取らう。
すわ　その御返答、それへ參つて仕りませう。
ト裲襠、白無垢にて出る。
競　ムウ。その姿は、さては車輪の轡、手に入りませぬな。
すわ　女ながらも一國を預かり奉る自ら。一旦申せし詞、反古になつては政道が立ちませぬ。手に入らぬ時はと、兼ねての覺悟。
圖書　ムウ。そりや好い思ひ切り。潔よう自害さつしやれ。一家のよしみ。介錯はこの圖書。
すわ　相果てましたるその後にては、御上使さま、足利の御前は、よろしう願ひ上げまする。
圖書　ハテ、そこらの所に如才はない。一時も早う自害さつしやれ。
すわ　誰れかある。用意。
腰元　ハ、ア。
ト三方に懐劍載せ持つて出る。此うち始終合ひ方。靜かなる本釣り鐘。競、こなしありて
競　盛りなる花の姿も散る頃は、哀れに見ゆる春の夕暮れ。ハテ、あたら櫻を散らすよなア。
すわ　散ればこそ、いとゞ櫻と詠みし言の葉。卑怯未練と後代に、名を殘すこそ武家の恥辱。
圖書　オヽ、人も花も散り際が大事。すつぱりとやらつしやれ。
すわ　花も散り、春も暮れ行く木の本に、命も絶えぬ入相の鐘。信濃の國の主、薗原左京太夫が妻、すわが自害、

とくとお見屆け下さりませう。

トこなしある所へ、奥より、伏屋之助、九重姫、更科、戸右衞門、松ヶ枝、五人の諸士、皆々バタ〳〵と出て

伏屋　おすわの方さま。

九重　姉様。

皆々　奥様。

すわ　コリヤ、見苦しい。何事。

皆々　御自害と承りまして

侍ひ　御存生のうち

皆々　せめてお暇乞ひを。

すわ　御上使様の御前、見苦しい。次へ。

伏屋　科人はこの伏屋之助、申し譯には切腹。あなたは矢ッ張り。

すわ　イヤ、自らが最期は兼ねての覺悟。何かの科を身に引受けて、死ぬるが本望。お前がお果てなされては、この薗原の家國は、何者が治めまするぞ。

伏屋　ぢやと申しまして。

すわ　ハテ、御未練な。ソレ、妹伏屋之助さまを伴ひ、次へ。

皆々　それでも。

圖書　ざわ〳〵と、御上使への無禮。皆の者、次へ立て。

皆々　サア、それは。

圖書　早く立たぬか。

競　イヤ〳〵、圖書どの、暫らく。おすわの方の胸中、武士も及ばぬ天晴れの覺悟。併し、皆の嘆き察し入る。ナニサマ、暫らくのうちは苦しうあるまい。皆の者には暇乞ひ。

圖書　イヤサ、それでは。

競　ハテ、苦しうござらぬ。

すわ　そんなら御上使様の

皆々　お情にて。

競　遠慮は無用。

すわ　左様なら、暫らくのうち。

競　ゆる〳〵と暇乞ひ。

皆々　エヽ、有り難うござります。

九重　ハイ〳〵。

ト前に出る。

すわ　伏屋之助さま。

伏屋　ハツ。

すわ　兵庫が妻更科。

更科　ハイ〳〵。

すわ　其方に云ひ殘す。紛失の寶手に入らず、自らが最期の上は、所詮梅津宰相さまより、九重姬の御緣組みも、御許容はあるまい。すりや、薗原の家は斷絕。爰の所をよう辨まへて、思ひ合うたこの二人を夫婦にして、再び紛失の寶を尋ね出し、それを功に、この伏屋之助に跡目相續をナ、必らず。

ト伏屋之助へこなしありて

當家の緣ある者でも、油斷をせぬやう、合點か。

更科　畏まりましてござります。奥樣の御遺言、御最期のお名殘りに。

ト三方長柄の銚子を取つて來て

松枝　伏屋之助さまと九重さまの御內祝言。奥樣のお心殘らぬやうに。

すわ　出かしやつた松ヶ枝。自らは最期の本望。

更科　サア、お二人樣。

松枝　御祝言をなされませう。

伏屋　如何におすわの方さまのお詞ぢやと云うて、そもやそも、マアこの中で。

すわ　祝言しやらぬは、自らの末期の詞、背きやるのか。

伏九　サア、それでも。

松枝　隙取れば、御上使樣への無禮。

更科　サア、申し。

伏九　サア、そんなら。

更松　サア、早うお杯。

腰元　待女郎はわたしら。

松枝　九獻の役も一つにして

すわ　三國一の經陀羅尼。

伏屋　歸らぬと云ふ杯か。

九重　姉樣のお身の上。

皆々　御生害の色直し。

ト皆々、おすわの方を見る思ひ入れありて

すわ　時刻が移る。

ト獨吟のめりやすになり、矢張り釣り鐘つく。松ヶ枝、更科、伏屋之助、九重姬に杯さす。皆々愁ひの思ひ入れ。キツと心得あつて、よろしく納まると、圖書、こなしありて

圖書　段々時刻移る。祝言濟んだら、おすわの方、早々生害。

すわ　御上使様のお情、有り難う存じます。最早この上
は。
皆々　エヽ、そんならモウ。
すわ　未練な事を。
　ト向うバタ〳〵にて侍ひ一人走り出て
侍ひ　申し上げまする。
皆々　何事ぢや。
侍ひ　兼ねて御吟味ある盗賊の張本、稲田東藏を、一の橋
の上にて召捕り、網乘り物にて只今これへ。
すわ　ナニ、東藏を召捕りしとな。寶の詮議、一時も
皆々　早う〳〵。
侍ひ　ハヽア。
　ト駈け込み、バタ〳〵にて、花道より網乘り物を大勢
して舁いて出る。捕り手大勢舁いて、よき所へ直し
侍ひ　盗賊の張本、稲田東藏を
皆々　召捕りましてござります。
すわ　オヽ、出かした〳〵。御上使の御前にて寶の詮議。
　ソレ、引出せ。
侍ひ　ハヽア。
　ト網をほどき

　サア、稲田東藏、御前へ罷り出ませい。
侍皆　出居らう。
　ト乘り物の内にて萬野兵庫、アヽと欠伸する。
　罷り出ませい。
兵庫　ハテ、仰山ながらくためら。いま盗賊の出頭と呼ば
れる稲田東藏。それへ出て、皆の奴輩に對面してくれう
わい。
　ト百日鬘、黒二重、丸腰にて出る。
侍皆　うぬ。
　ト侍ひ皆々、十手にて圍ふ。
兵庫　コリヤ、あまり息精張るな。わいらが一萬や二萬で
押取り卷いたとて、この東藏は怖うない。イデ歸らうと
思や、何時でも大手を振つて罷り歸る。併し、これへ來
るからは、腹一ぱい云ふ事云はにや、引摺り出しても歸
りやせぬ。恐ろしい事はない。控へて居よ〳〵。
侍ひ　ヤア、不敵の雜言。サア、御前へ
皆々　歩め。
兵庫　ハテ、それもおらが勝手次第にする。わいらが世話
にはならぬ事だ。
　ト眞中へノサ〳〵行く。

侍皆　下に居らう。
兵庫　さりとては姦ましい。默らうてや。斯う突ッ張つては話しもなるまい。御前とは爰らの事か……皆、許さつしやれよ。
ト　どつかりと下に居る。
すわ　音に聞く稻田東藏とは、其方が事か。
兵庫　手前でござる。
すわ　ハテ、聞いたより丈夫な魂ひ。
兵庫　ハテ知れた事。藺原家を打ち潰し、一天四海を手の內に握り。捻るやうにせうと存ずる稻田東藏。どうで一通りの人間、ついした盜賊ではござらぬ。
すわ　さほど逞ましい其方が、やみ／＼虜となつて、この館へ來りしは、天命の盡きたるところ。
兵庫　イヽヤ、天命の盡きたるではない。この東藏が慈悲心、淚脆いからだ。
すわ　そりや又どうして。
兵庫　イヤ、勿體ない事だが、商賣を變へるつもりで、これへ參つた。向後謀叛の臺詞や盜賊の出見世を、さつぱりと相止めるぢや。その心で來たからは、何にも驚き怯える事はない程に、さう思うて、詮議があるなら、誰れ彼れの差別はない、勝手次第に其方の根の續くだけ、詮議さつしやれ。
すわ　ムウ。すりや誤まつて改むるに憚る事勿れと云ふ聖人の詞を守り、非道を改むる心ぢやな。
兵庫　イヤ、さうでないぢや。略聞けば、今日足利より上使を立て、車輪の縛を受取らんとの催促。もし寶の在所知れぬ時は、おすわの方の首を持つて、立歸るとやら承つた。ハテ笑止千萬。拙者が商賣やめるからは、さうさすが見得でもないと存ずるから、我れと我が身を訴人して、これへ參つた稻田東藏。車輪の縛は先達て、手先が盜んで所持するからは、戾して遣れば云ひ譯の自害に及ぶまい。サア、爰らが今の淚脆い所ぢや。
すわ　ムウ。すりや稻田東藏、其方が。
圖書　車輪の縛、所持して居ると白狀の上は、詮議に及ばぬ、これへ出せ。
兵庫　引かつしやれ。
圖書　なんと。
兵庫　拙者を足利どのへ引かつしやれ。足利に於て車輪の縛を渡し申さう。
圖書　ヤア、得手勝手な雜言。所詮一應や再應で、縛の在

所は吐かすまい。今この所で彼奴を拷問して、轡を受取るか、さなくばおすわの方の首、御上使へ渡すが寶の代り。

兵庫　ハヽヽヽ、この東藏が所持して居る車輪の轡、足利へ引けば事明白。それを差措き寶より何より、おすわの方の首を望むとは、ハテ心得ぬ。

圖書　サ、それは。

兵庫　寶が欲しくば、この東藏を足利へ引かれい。

圖書　ぢやと云うて、うぬを足利へ引いては。

兵庫　是非とも首が欲しいか。

圖書　サ、それは。

兵庫　東藏が體は寶の切手。轡と思うて同道しやれ。

圖書　サア。

兵庫　サア／＼／＼。イヤモ、滅多に足利へ連れ憎からう。ハテ、きよろ／＼したお侍ひぢやわい。

ト橋がゝりバタ／＼にて侍ひ出て

侍ひ　申し上げます。稻田東藏が手下の者五人、東藏召捕られしと聞いて、降參に罷り出ましてござります。

圖書　ヤアナニ、東藏が一味の者、降參に出たとは。

ト競を見る。競、こなしありて

皆々　さてこそな。

圖書　高島大助、來やれ。

大助　ハ、ア。

ト奥より出る。

圖書　いま東藏が手下の者、降參に出たとある。其方參り、取逃がさぬやうにナ、合點か。

大助　心得ました。

圖書　早く行きやれ。

大助　さうぢや。

ト橋がゝりへ走り入る。

兵庫　ハテ、この東藏が名乘つて出たを、召捕られしと存じて、降參に出た手下の奴は、うろたへ者。

ト競の方へこなしあり

圖書　岩倉どの、今の仕儀。こりや、どう致さう。

競　ハヽヽ、ハテ、手の見えた。知れた事を。

圖書　ぢやと申して。

競　よくござる／＼。この詮議、身共が糺してくれう。

兵庫　ナニ、この詮議を糺すとは、見事こなたが糺すぢやまで。

競　加何にも。ヤイ、稻田東藏、出直せ。

兵庫　出直せとは。
競　罷り歸れと云ふ事ぢや。
兵庫　寶の轡、所持して居る、この東藏に歸れとは。
競　最前の詞の端、上使に立つたる岩倉競、承知した。
　とくと聞き取つたれば紛失の轡、受取つたるも同然。歸
　れと云はば、サ、早く歸れ。
兵庫　歸りませう。この東藏が手にある轡、受取つたとあ
　る一言。こなたにも渡した同然、用事しまへば無用の拙
　者。只今歸る。歸りますぞ。何れも。さらば。
　ト合ひ方になり、兵庫、しづ／＼花道へ行く。競、煙
　草のみ見送る思ひ入れ。兵庫こなしありて、向うへ行
　く。よき所にて
競　待て……コリヤ待て。詮議が殘つた。待て。
　ト兵庫、キッとなつて
兵庫　なんと。
競　イヤサ、詮議が殘つた。マア待て……と、サア、其
　方から打掛けにやならぬ所を、ハテ、新らしう仕込んで
　來たな。
兵庫　例へ詮議があるにもせよ、上使に對して無益の問答。
　是非歸ります。

競　イ、ヤ、當國薗原の家老たる萬野兵庫。暫らく待
　て。
兵庫　ムウ。すりや拙者を萬野兵庫と。
競　睨んだ眼に違ひはあるまい。
兵庫　イヤ、薗原家の家老萬野兵庫は、日延べの願ひに腹
　切つて相果てました。
競　そりや其方が双子の弟。
兵庫　ヤ。
競　信濃の當藏と云ふ双子の兄弟、その弟を兵庫に仕立
　て、腹切らしたは天晴れ手段と、人は喰はうが身共は喰
　はぬ。オ、、いま稻田東藏と名乘る其方は、信濃の當藏
　が兄、誠の萬野兵庫。
兵庫　我が弟、信濃に生ひ立つ當藏と云ふ者を、兵庫に仕
　立て腹切らし、我れは寶の詮議に、斯く姿をやつして、
　徘徊するを誠の兵庫なりと、御上使の眼力。
すわ其方の弟を兵庫なりと、小柄の模樣、杜若にて知ら
　せし謎解いたは、自らばかりと思ひの外。
競　あさる雉子の妻乞ひに、うぬが在所を人に知られ
　て。
圖書　ムウ。すりや其方は萬野兵庫。

兵庫　斯く相恰變ふれば、現在當家の伯父御でも、兵庫と知らぬうろたへ眼。
圖書　ムウ。
トこなしある。
兵庫　女房、大小。
更科　ハツ。
ト渡す。兵庫差す。
皆々　して、この上は。
すわ　深山木のその梢とは見えざりし。
兵庫　櫻は花に顯はるゝかな。御上使の俗稱も。
競　ヤ、なんと。
兵庫　サ、拙者を萬野兵庫と見出した御上使。こなた樣の御本名も、此方とくと存じて居る。
競　アノ、この岩倉競を。
兵庫　如何にも。
競　ハテナ。
ト橋がゝり、バタ／＼にて大助走り出る。
圖書　高島大助、あわたゞしい、何事。
大助　エヽ、口惜しや。拙者に仰せ付けられし降人の奴輩、何れも術ある曲者にて、東藏召捕られしとは僞はりと聞いて參り、眼を眩まし、繩引切つて行くへなう。無念にも取逃がしましてござります。
圖書　すりや、眼を眩まし落ち失せしとな。
ト安堵のこなし。
すわ　イヤ、逃げて程なき事。よもや天へも駈るまい。大助、早う。
大助　ハツ。
ト駈け出さうとするを
兵庫　大助待て。其方に詮議がある。
大助　なんと。
兵庫　本國へ歸つた兵庫が手始め。うぬ、繩掛けて詮議する。腕廻せ。
圖書　イヤ、あの大助には何科あつて。
兵庫　木曾川を切り落し、耕作の助けとなさんとは僞はり、誠は謀叛の計略。民を虐げてお國の爲と、取上げる金銀も、軍用の手當であらうがな。
大助　全く以て。
兵庫　詮議次手ぢや。白狀いたせ。
大助　イヽヤ知らぬ。知りませぬぞ。
兵庫　知らずば只今知らしてくれう。降人の者ども、これ

へ參れ。
甚三　ハ、ア。
　ト橋がゝりより甚三郎、五人の者を連れ出る。
圖書　ヤア、遠山甚三郎、家中の者ども。
大助　こりやどうぢや。
兵庫　最前其方が眼を眩まし、逃げ失せたと云ふ降人は、
　この者ども。
大助　ヤア、。
甚三　兵庫どのゝ計らひにて、東藏が一味の者と僞はり、
　諸士を召連れ、この甚三郎、隱せし牢屋の戶口、この所
　を落ちよと一書を投げ、出口を開いて渡せしは、東藏と
　一味せし慥かな證據。但しこれにも云ひ譯があるか。
大助　サ、それは。
甚三　サア。
大助　サア。
兵庫　サア。
兵甚　サア〳〵〳〵。
大助　もう百年めぢや。
　ト甚三郎に切つてかゝる。立廻りありて、取つて投げ
　繩かける。圖書こなしあり。競心意氣。

兵庫　出かした甚三。
甚三　して、この大助は。
兵庫　五人の者の願ひに任せ、遣はす間、獄屋へ引け。
五人　畏まつてござります。
甚三　早く。
五人　ハッ。
　ト大助を引立て、橋がゝりへ入ると、競こなしあり
競　イヤナニ、當家の盜賊になつて、立歸つた萬野兵庫。
　事の一件、詮議する、この上使に却つて詮議があるとな
　らば、詮議を早くおしやれ。
兵庫　詮議せよとの御意なれは……ソリヤ。
侍ひ　ハッ。
　ト侍ひバラ〳〵と取卷く。
　御上使、腕廻せ。
　ト皆々十手振り上げ構へる。
競　なんと。
　ト立ち上がると、競が懷中にて笛の音する。二管にて
　ひしぎ吹く。
皆々　ヤア、あれは。
すわ　正しく御上使の懷中。

兵庫　嬉しや寶の在所が知れた。
競　何がなんと。
すわ　今の一聲は笛の音色。
兵庫　足利家より預かり奉る、車輪の轡と云ふは、誠は馬具にあらぬ稀代の樂器。
すわ　神代のその昔、天の鈿女の製作ありし枯葉の竹、枯葉の二字を轡と唱へ、笛の音色に嘶く馬の聲あれば、車輪の轡と世に稱す。
兵庫　前九年の戰ひに、新羅三郎義光、節度使を賜はつて、東夷征伐の戰場に、これを所持して賊徒を討つ。
すわ　藤原の時秋が足柄山にて、入長樂を授けしも、この名笛の不思議に依る。
兵庫　武家にあつては凶事を知らし
すわ　樂器に取つては名譽の一笛。
兵庫　枯葉の竹を笛に作りし神器の奇特、所持するその身に變ある時は
すわ　自然と音を出す車輪の轡。
兵庫　馬具にあらざる神代の重寶。
すわ　今お上使のお身の上、おのれと音を出す名笛は
女皆　正しく車輪の轡か。

甚三　大殿の御最期の砌り、紛失せし寶、所持する其方。
兵庫　盜賊の張本。
皆々　稻田東藏。
兵庫　紛れはあるまい、サア尋常に
甚三　寶を渡して
皆々　繩かゝれ。
競　ハヽヽ、ハテ知れた事をくど〱と、知れた轡の講釋、おきやアがれ。神代の重器と、よく知つたゆゑ、左京太夫を打ち放して、奪ひ取つた稻田東藏ぢや。
皆々　さてこそなア。

トきつとなり。競こなしありて、社杯を脱ぎ、二重舞臺の下へ下り、取卷いて居る侍ひを蹴散らかし、眞中へ直つて

競　盜賊の張本、稻田東藏と名乘るからは、この家の大殿の敵、寶の盜賊。サア、成敗いたせ。
甚三　流石の東藏。本名名乘る上は。

トきつとなる。

兵庫　イヤマア、甚三。
甚三　何ゆゑお留めなさるゝな。
兵庫　イヤ、繩かけぬうち、預かりの重寶、受取らにやな

らぬ。
競　イヤ、滅多には渡さぬ。萬野兵庫、身が所持の寳が、欲しくば手下に附け。
兵庫　ヤ、なんと。
競　サア、この東藏が手下、謀叛徒黨の連判へ、伏屋之助も其方も血判いたせ。その時こそは車輪の轡、戻してくれう。
伏屋　イヤ、最前から聞いて居れば、なんぢや、この伏屋之助に血判せい。イヤ、手下になれのとは、憎くい奴の。
競　得心せねば、打ち碎かうか。
伏屋　ヤア。
競　イヤサ、この重寳を粉微塵。
甚三　イヤ、それは。
競　繩かけぬか。縛つてくれぬか。
甚三　ムウ。
競　手出しをすれば寳の破却。サア、兵庫、東藏が旗下に附くか。
兵庫　如何にも、手下に附かう。
すわ　アヽ、それでは。

兵庫　イヤ、苦しうござらぬ。御寳に凶事ある時には家は斷絶。殿にも拙者めも、刑罰は免がれぬ無調法。また彼奴に一味仕り、後日に顯はれ、軍門に晒さるゝ、その刑罰も何れの道、同じ亡ぶる命ならば、首尾よう寳を取返し、足利家へ差し上げるが、肝要かと存じまする。
競　こりや、御家老どの、味をやらるる。すりやいよいよ手下に附くか。
兵庫　ハテ、武士の詞に二言はない。
競　して、血判は。
兵庫　そりや後程。
競　時刻が延びると、寳はばら／＼。
女皆　エヽ、憎てらしい盜賊。
兵庫　イヤ、卒爾は無用、馳走が第一。
甚三　ナニ、馳走とは。
兵庫　ハテ、山海の名物を以て、種々の馳走したその上では
競　血判いたすか。
兵庫　寳もその時。
競　返してくれう。
兵庫　そりや忝ない。

ト手裏劍を打つ。競、程なく留めて

競　ヤ、この小柄は。

兵庫　いつぞや柳原にて出合ひしその時

競　兵庫、其方が打ちかけし小柄。

兵庫　先達て密書諸共、此方へ受取つたれば、また其方が身共へ打ちかけたその小柄、いま改めて戻すが馳走の發端。

競　成る程、身共が小柄、しつかりと受取つた上は

伏屋　爰等が手裏劍の打ち返しであらう。

競　馬鹿な。そんな古い事はせぬわい。

甚皆　現在、お家の仇。

すわ　寶の盜賊を、ハテ、星の光晝見えねど、夜は露れて槿花一日の榮を樂しむ。

競　須彌山に腰打ちかけて虛空を、ぐつと呑めども咽喉に觸らぬ

兵庫　詮議の獻立て。

甚三　料理の庖刀。

すわ　馳走の仕樣は

兵庫　拙者が胸に。

圖書　詮議の落着、馳走の仕樣も、圖書がとくと見物せう。

兵庫　御相伴は伯父御の身の上。

競　身共は上客なれば。

ト立ち上がる。

侍ひ　案內は我れ〱。

ト取卷く。

兵庫　コリヤ、必らず率爾いたすな。

競　寶は微塵になるぞよ。

兵庫　稻田東藏。

競　萬野兵庫。

甚三　ムウ。

競　二才め、われも案內いたすか。

すわ　サア、奧の間。

兵庫　イザ、先づ。

伏皆　お入りなされませう。

ト唄になり、皆々こなしありて、この一卷、奧へ入ると、銅鐵出て、こなしありて、手箱を出し

銅鐵　けい〱きつたし、おんらいさんはら〱。

トどろ〱にて橋がゝりより狐火出ると、大助、繩かけながら出て、よき所にて獨り繩解ける。狐火消え

ろ。

大助　銅鐵。

銅鐵　高島大助。

大助　謀る〳〵と思ひの外、萬野兵庫の計略に落入つた身共。併し虜を遁がれ、今爰へ來たは。

銅鐵　二重牢屋と、數十人を以て張り番しても、助け出したは、愚僧が妙術。其方が身に凶事はない。

大助　忝ない。して、東藏や圖書は。

銅鐵　それも氣遣ひない。愚僧が附き添へば、鵜の毛で突いた程も刃向ふ事はならぬ。

大助　でも邪智深い萬野兵庫、又どう云ふ計略をせうも知れぬ。

銅鐵　ハテ待て。叶はぬ時は、この家へ掘り出した、潮の流れ、あの如く氷が張れば、狐渡りて平地も同然、牛馬の通ひも心の儘なれど、また狐が渡り戻れば元の潮。東藏どの丶計らひ、上諏訪にて水を堰き切つたれば、例へ氷は張らいでも、平地も同然なれば、氷の張つたるを幸ひ、愚僧がこの書面の手箱を持つて、氷の上を渡つて、上諏訪の水の手を切つて落せば、氷は解けて、この館は忽ち水責め。

大助　流石妙計、出かした〳〵。して、又一味の輩、スワと云ふ時、責め寄する合圖は。

銅鐵　そりやお頭の投げ松火、狼火を合圖に、山手から責め寄する手筈ぢや。

大助　何もかも、此方の手違ひなし〳〵。

ト此うち甚三郎、出かけ聞いて居る。

甚三　兩人ともに動くな。高島大助、狐使ひの賣僧め、遁かける、腕廻せ。

銅鐵　大事を知つた上は。

大助　生けては置かぬ。

ト立廻りになり、銅鐵、程よき所にて書面の手箱を出すと、ドロ〳〵にて廻り襖にて消える。

甚三　ヤア、あのづく入め。

ト行かうとする。大助、突き廻し、どつこいと見得になり、チヨン〳〵にて、返し。

ト甚三郎大助、見得しながら、この道具、東へ引いて取る。後は又二重舞臺、結構なる奥座敷の體。見付け金襖、書院、床の間にありて、よき所に炬燵、隨分結構なる蒲團かけ、この炬燵へ競ひ、矢ツ張り盗賊の形に

てあたり居る見得。面白き琴唄にて段々前へ突き出して道具とまると、奥より松ケ枝、茶碗袱紗を持つて出て、競の前へ持つて來て、こなしあり

松枝　申し、稲田さま、あなたはたつた一人、この座敷に、さぞ御退屈にござりませう。不調法なわたしが手前。一服召上がられ下さりませう。

競　茶は嫌ぢや。あつちへ持つて行け。

松枝　あつちへ持つて行けと、わたしが志し。思ひ思うて立てた物、そりやあなた樣の心の裏茶。

競　エヽ、けち女郎め。茶は嫌ひぢやと云ふに。

松枝　そんなら。

競　あつちへうせう。

松枝　オヽ怖。

トこなしありて奥へ入る。競こなしありて

競　手ざしはならず兵庫めが、いろ／＼と手を變へて。

ト思ひ入れありて

ヘヽヽヽ。構はずと、一寐入りせうわい。

ト炬燵へグッと入つて、野方途に寝ると、また奥より九重姫、舞子二人、長柄の銚子杯を持つて出て、九重姫、怖々ながら競が前へ手をつかへ

九重　申し、稲田東藏どの、伏屋之助さまのお志し、こなたに九獻を進められまする程に、コレ。

ト競をいろ／＼見て

舞子　アレ、二人の衆、盗人は、よう寐て居るわいなう。寐て居ては濟まぬ。お姫様、ちやつとお前が、起さしやんせいなア。

主水　奥様や兵庫さまの仰せなれば、ちやつと起して御馳走を。

九重　滅相な。わしや怖いわいなう。

主水　それでも、奥様の仰しやりつけ。

九重　どうぞこなた衆二人して、起して下され。

二人　わたし等も、怖いわいなア。

九重　そんなら主水、其方、起しやいなう。

主水　私しは怖うござります。

九重　自らが頼むわいなう。

舞子　イエ／＼、お前が起さしやんせいなア。

主水　サア、九重さま、申し。

九重　どうぞ二人して。

舞二　否ぢやわいなア。

九重　起していなう。

主水　否でござります。

舞二　起さしやんせいなア。

　ト三人、いろ〳〵せりあり。兢、起き上がつて

兢　小女郎ども、何を喧ましう吐かすのぢや。

皆々　エヽ。

　ト悧りして怖々ながら

九重　このお酒をお前に。

　ト慄ふ。

兢　酒は否ぢや。あつちへうせう。

　トぐッと睨む。

三人　アレ〳〵。

　ト怖がり奥へ逃げて入る。兢あと見送りて

兢　ハヽヽヽ。

　ト笑ふと、また奥より更科、菓子と盆を持つて出て來て、行儀に兢が前に直し、後へ下がつて辭儀する。兢、ヂロリと見て

　こりや又、いけもせぬ菓子か。

更科　粗末ながら、召上がられ下さりませうならば、おすわの方始め、夫兵庫が喜び、この上がござりませうか。

兢　ムウ、すりや貴様は兵庫が下齒か。

更科　エヽ。

兢　大分よいふさんもんぢや。併し、舌たるう好きらしう見える。兵庫が堅い面して取りのめすか。貴様、なまたれるか。

更秋　申し、そりや何の事でござります。

兢　ハテ、兵庫がせぶる時、よがるかと云ふ事ぢや。

更科　とんと左やうの事は合點が參りませぬ。

兢　素人の知らぬこつちや。貴様もおとりにかまへた時なら、一からいても見やうけれど、今はとんとその氣が出ぬぢや。

更科　申し、この菓子、召上がられて下さりませう。

兢　イヤ、大名の菓子は果物屋の貯へ同然、おれが口には合はぬ。

更科　そんなら矢張り御酒を。

兢　イヤ、酒も爰らのは惡酒。立場の煮賣り屋同然であらう。酒も否ぢや。

すわ　左やうなら、御膳を差上げませう。

　トおすわの方、長足高蒔繪の膳を持つて出て、兢へ据ゑ、こなたへ直る。

　盜賊なれど兵庫が詞、寶を破却しては家の大事。それゆ

ゑ自らが配膳。サア、稲田東藏、イザ、お箸召されい。

ト競、膳部を見て

競　こりや下手な作者の二の替り、道具でゆすつたか。

ト一々蓋を明けて見て

こりやいけぬ料理ぢや。斯う鳥を澤山に使うては、油濃うて喰へるものか。これよりは、つのみる鰶の燒きたてか、冷飯の茶漬、それがヤツと喰はれる。この料理は犬に喰はせろ。

ト蹴り飛ばす。更科、ムツとして

更科　盜賊の其方が勿體ない。奧樣の御配膳、冥加を思はず無禮の振舞ひ。

すわ　コレ〳〵更科、そりや何事。

更科　イヤ、あんまりな不行儀。

すわ　寶を破却しられては、長く薗原の家名は斷絶。サア、マア、急かずチツと控へて居や。

更科　エヽ。

すわ　コレ。

ト おすわの方、思ひ入れ。更科こなしあると、奧より兵庫、折を持つて競の前に直し

兵庫　イヤナニ、盜賊稲田東藏。

競　なんでえす。

兵庫　當國は陰氣深うして草生ぜず、海隔たつて鹽稀なり。それゆゑ馳走も心に任せず、何をがなと思ふ所に、幸ひ美濃の國より到來の珍物。この一折は、なんと賞翫召さるゝか。

競　何ぢややら馳走々々と、仰山に罵つたが、喰はれもせぬ酒や菓子。七五三、五五三の料理は、毎日喰ひ飽いて、榮耀に滿ちて居るこの東藏。滅多に馳走の仕樣があるまい。無益の事に氣を揉まずと、早う連判に加はり、手下に附くなりと、又あり來つた鐵砲玉の座禪豆、大身の鎗、金味をなぜ喰はさぬ。手短かに賞翫さゝぬのぢや。

兵庫　サア、その獻立よりこの一折、好物と思ふから、持參せし萬野兵庫。サ、是非とも賞翫を。

すわ　この折開いたその上で、此方より望む重寶。

競　戻してやりたいが、マアならぬ。

すわ　ヤ。

競　血判をせぬ上は、何れも寶は戻さぬ。

兵庫　すりやこの折開かずに。

競　首筋押へても血判さす。否と云へば寶の破却。この

折も到底ろくな物ではあるまい。
ト踏み砕く。中より旗出る。
兵庫　美濃の國齋藤龍興が系圖の旗。
競　アノ、それが。
兵庫　この旗奪ひ返さんと、上使となつて來たであらうか。
競　ヤ、なんと。
すわ　美濃の國齋藤龍興、過ぎつる頃叛逆の企てありて、稻葉山に立籠りしを、足利の厳命に依つて、當蘭原家へ討手を仰せつけられ、齋藤龍興を亡ぼし給ふ我が夫左京太夫頼重。
兵庫　龍興が家臣、稻田伊豫之助が悴、當家を恨み、主親の仇を報はんと、爰かしこに徘徊すると聞けば。
競　ムウ。すりや、この東藏を美濃の家臣、稻田伊豫之助が悴と云ふのか。
兵庫　イヤ、さうではない。稻田東藏と云ふ盗賊は、金銀には目はかけず、諸大名の家の重寶を望むと聞けば、龍興は美濃の領主、即ち齋藤家の重寶、系圖のこの旗、其方へ與へくれうと思うて。
競　イヤ、同じ重寶でも、討死せし龍興が、この旗望みはない。
皆三　すりや、その旗は。
競　この通り。
ト寸々に引裂き捨てる。
すわ　ヤア／＼蘭原家の規模に申し受けし、齋藤の系圖の旗を
更科　引裂き捨てた稻田東藏。
競　騒ぐな／＼。コリヤ兵庫、わりや恐ろしい者ぢやな。似せ物の旗を渡し、我が俗姓を名乘らし、車輪の縛を取返さうとは、あざとい奴。
兵庫　すりや、この旗を。
競　似せ物と知つて居る。車輪の縛は東で奪ひ取り、系圖の旗はこの本國にある事、疾より知つて居る。例へその誠の旗が、石の唐戸に納めてあつても、望みかゝつたこの東藏が、奪ひ取つて立歸る。
更科　もうこの上は。
競　コリヤ、手ざしをすれば、寶の破却。
トおすわの方、更科を押へると、また競が懐中にて一聲鳴る。
すわ　エヽ、アノ、お寶を。

再演の繪番附

競　欲しからうな兵庫。取りたいか。なぜ取らぬ。家を立てる寶は、コレ、爰にあるが……ぽんぽにあるぞよ。欲しいか。欲しからう。血判せい。手下に附け。

ト此うち、おすわの方、更科、キッとなるを、兵庫、押へ、こなしあり。

併し、われを幕下に附けても、取廻しの不調法な、鈍な野郎であらう。われには相應な盜人仲間の小使ひ、灰吹の掃除が好い役ぢや。何ぢややら、智惠ありさうに稻田東藏と名乘つて戻つたが、左京太夫が敵、寶の盜賊、知れてある身共ぢやぞよ。それに何ゆゑ手ざしせぬ。馳走をしても間に合はぬ。似せ物の旗でゆかぬ、この東藏が怖いか。手におふまい。オヽ、ちつと自由にはならぬ。何もかも喰ひ違うた鵙の嘴。エヽ、まじ／＼と、あの面わい。エヽ、ハヽヽヽ。

トいろ／＼惡態を云ふ。おすわの方、無念がるを、兵庫、始終こなしあり、競、此のうち金瘡の痛む思ひ入れにて、五體を慄はし苦痛の體。兵庫、ヂッと見て居て

兵庫　ハヽア、廻るワ／＼。砒霜石斑猫鴆毒の驗目。當り外さぬ兵庫が馳走。稻田東藏、その身にとくとこたへつらん。

競　ヤヽ、なんと。

兵庫　三毒の劑を以て仕掛けし炬燵、暖氣の入れば疵のほとぼり。金瘡破れて五體は惱亂。さぞ苦しからうがな。

競　ムウ。すりやこの炬燵に、毒を仕掛けて身共を。

兵庫　毒の廻りは、ハテ、早いもの。

競　こりや新らしう、出かし居つたわい。

兵庫　ハテ、もちつと苦痛を見せたがよい。

競　その苦痛を見ぬうち、うぬらが自滅。

ト庭の松が枝へ投げ松火を投げる。狼火上がると遠責め。

更科　ヤア、あれは。

すわ　一味の者を招く知らせの狼火。

兵庫　イヤ、押寄せぬ其うち、エイ。

ト長押の額へ手裏劍打つ。二重舞臺一面に網下りる。

更す　ヤア、これは。

兵庫　東藏は籠の中の鳥。

ト網の内にて

競　ハテ、ひこ／＼としたほててんがう。

更す　エヽ、あれは。

兵庫　コレ。

トきつとなるを、兵庫チッと留める。チヨン／＼にて道具廻ると、一面の網代塀になり、バタ／＼にて松ケ枝、伏屋之助、九重姫を圍ひ、捕り手に取卷かれ出て

松枝　お二人に聊爾したら、爲にならぬぞ。

捕手　伯父御圖書どのゝ仰せ。伏屋之助九重姫に繩を掛け虜にする

皆々　女郎めら、邪魔ひろぐな。

伏屋　聊爾したら切捨てぢやぞ。

九重　必らず寄るまいぞ。

捕手　なにを。

トかゝる。松ケ枝、皆々を相手に立廻り、よろしく、皆々を追うて入る。伏屋之助、九重姫殘り、ウロ／＼して

伏屋　松ケ枝、早う來てたもいなう

ト兩人こなしある所へ、捕り手大勢引返し

捕手　サア、兩人ともに。

ト引立てる所へ、甚三郎走り出て、皆々を取つて投げる。始終このうち遠責め

伏九　ヤア、遠山甚三郎。

甚三　御兩所ともにお家の大事。一先づ爰を。

伏屋　ぢやと云うて。

九重　姉樣を。

甚三　氣遣ひござらぬ。

皆々　兩人を。

トかゝるを甚三郎、引き廻し、よろしくありて

甚三　一時も早う。

伏屋　姫、おぢや。

ト伏屋之助、九重姫を連れ、向うへ走り入る。

捕手　兩人を落した遠山甚三郎。

ト甚三郎にかゝる。これより皆々を相手に甚三郎、烈しき立廻りありて、皆々を橋がゝりへ追うて入ると、内にて始終バタ／＼、大勢の聲。

大勢　盜賊稻田東藏、網を切り破り行き方知れぬ。探せ探せ。

ト無性に騷ぐと、橋がゝりより銅鐵出て、こなしあり

銅鐵　嬉しやお頭の身の上、氣遣ひない。この上は、この館を水責め。

ト書面の手箱を出し

けい／＼きつたし、おんらいさんはら／＼。
トどろ／＼にてセリ下げにて、切り穴へ消えると、右の網代塀を兩方へ引分けると、三間の二重舞臺。この上に兵庫、大童になりて、大勢を相手にタテして居る見得、よろしくある所へ、橋がゝりより甚三郎、手負ひにて走り出て

甚三　エ、、口惜しや兵庫どの。粉骨碎身仕れども、多勢の寄手に、無念や深手。
兵庫　して、おすわの方さまは。
甚三　何方にござるやら。
兵庫　ヤ、ア。
　ト驚ろくこなしの所へ、松ヶ枝、大助とタテしながら出て
松枝　東藏へ一味の大助、遁がれぬ所ぢや。
大助　なにを。
　ト皆々立つ所へ、更科、拔刀にて走り出て
更科　兵庫どの、一大事でござんす。
　ト兵庫、タテしい／＼。
兵庫　なんと。
更科　稻田東藏は逃げ失せる。奥樣はお行くへなう。所に思ひがけない潮の氷、一時に解け、この館へ水溢れ入つて俄の洪水。
兵甚　ヤア／＼／＼。
大助　館の奴等は皆殺しの手段ぢや。
兵庫　エ、、うぬを。
　トこれより皆々、二重舞臺の上にてよろしくタテになり、右のタテのうちに臆病口より、浪を押し出して來る。兵庫甚三郎、入れ違ひありて、捕り手を浪の中へ切り込む。始終此うち總體に水音烈しう打つ。水嵩、次第に增る心にて、捕り手近習流れ出る仕掛け。始終門の戶や垂木流れ來る。此うち二重舞臺、タテしい／＼屋體搖らめき、右の人數乘せながら、この舞臺、東へ搖れ流れに引いて取る。此うち川流れの音烈しく、よろしくあると、西の方より數寄屋の屋根に、競、凜々しき形にて、甚三郎と見得よく旗を擴げ、見い／＼流れ出る。甚三郎かゝるを、ちよつと當てる。暫らく屋根とまると競、こなしありて
競　これこそ齋藤家の誠の系圖の旗。寶藏に納めありしを、なんの苦もなう奪ひ取つた。皆の奴等は土左衛門、ハテ、心地よいなア。

ト　きつとなる。甚三郎起き上がり、うぬ、トかゝり、立廻りのうち、また西の方より兵庫泳いで來る。競、甚三郎、よろしくあり
うぬもこの世の暇。體は水葬。
ト甚三郎を殺し、浪間へ切り込む。兵庫、此うち屋根へ泳ぎつく。
兵庫　人非人の稻田東藏。
ト駈け上がる途端に、競、波間へ飛び込む。兵庫よろしく見得。チヨン／＼にて黒幕切つて落す。
と橋がゝりの方に蘆原、樋の口、出ろと、合ひ方にて道具とまる。かすかに遠責め、銅鐵、切り穴よりセリ上げにて顯はれ出て、手箱を捧げ、
銅鐵　けい／＼きつたし、おんらいさんはろ／＼。
トどろ／＼にて樋の口へ、狐火多く出ると、銅鐵こなしありて。
お頭の身の上、其方達が守護したゆゑ、何事ないか……
ムウ、出かした。大儀々々。
ト手箱を懷中する。ドロ／＼にて狐火消える。矢張り合ひ方。銅鐵、あたりを窺ふ。此うち樋の口より競、右の旗を咬へ出る。銅鐵見て
お頭。
競　銅鐵、何もかも首尾よう、誠の旗も手に入つた。
銅鐵　さぞお頭には御滿悅。
ト此うち東西の通ひ口より黒裝束の手下、隨分大勢出て來て、本舞臺へ並よく並び
手下　お頭のお迎ひ。
ト競、こなしありて
競　銅鐵、皆の者……供せい。
ト競、銅鐵を連れ、黒裝束の手下皆々後に附き、次第に向うへ入る。とくと戸屋へ入り切ると、本舞臺、樋の口より兵庫、づぶ濡れの形にて出て、向うをキツと見て、思ひ入れありて、よろしく

幕

三　段　目

谷中笠森稻荷の場

役名――笠森おせん。姉娘、おまつ。一子當吉。學者、吟山。飛脚早助。鐵火の權八。横住大藏。茶店のお百。きほひ組伊之助。伊勢屋十兵衞。萬野兵庫。

造り物、本舞臺、水茶屋の體。下座の方、障子屋體。向う納戸口。これに並んで葭簾入りし一間あり、臆病口、大鳥居、玉垣、舞臺先上手に見事なる櫻の木、人登るやうにして、よき所に葭簾、すべて江戸笠森稻荷の境内、綺麗にあるべし。庭神樂にて、幕明く。

ト參詣の仕出し、宮の内へ行き違ふ模樣。お百、茶屋女にて出て居て

お百　お茶參りませ〳〵。

ト往來を留めて居る。納戸より笠森おせん、世話形にて前垂れ、これも茶店女にて出て

せん　どなたもお茶上がつてござんせんかえ。

ト留めて居る。仕出しのうちに、醫者、奴、町人、方方より出てとまり

醫者　イカサマ、休んで行かう。サア、皆かけさつしやれ。

ト皆々床几に腰かける。おせん、茶を酌んで持ち行く。

奴　なんと、笠森の稻荷、繁昌な事だな。

醫者　それ〳〵、何か近年の流行稻荷、其所で彼の境内に煮賣り屋が出來る。見世物、講釋は勿論、此やうな茶店なども出來て、參詣の絶える間のないぢや。

町人　殊に春先は櫻の花見、どうも云へるものぢやない。

奴　イヤ又、花よりも美しいは主だわい。凡そ江戸中で笠森のおせんと云うては、一と云うて二のない器量

醫者　サア、それに惜しい事は金次第、情の切り賣り、彼の俗に云ふ、こそを働らくげなとや。

町人　何云はしやるやら。あのおせんに限つて、なんのそんな事があらう。ナウ、おせん女郎。

せん　アイ、左樣でござります。モウ、斯樣な生業を致して居りますれば、毎日々々參詣の人群衆、それ〳〵の氣心を汲み分けまして、あのゝものゝと話しの調子を合せまするうちには、戀もあれば無道もあり、それを世間では遊女同然の身過ぎ、身賣りもするやうな噂。そんな事を聞きまするると、大抵うたてな事ぢやござんせんわいな。

町人　さうありさうな事ぢや。

お百　イヤ、モウ、おせんさんは知らぬが、わしらは錢金に拘はらぬ。相談の仕手さへあつたら、無縁法界、情の施行がしたいけれど、相手になつてくれる人もなし。

奴　イヤ又、あらう筈もないワ。時に、もう行かうぢやないか。
お百　それ〳〵、この間はきつう物騒な。稲田とやら稲葉とやら云ふ盗人が、江戸中を徘徊するげな。
醫者　なんでも手酷い盗人ぢやさうな。剝がれてはなるまい。
町人　さうとも〳〵。床几代は有り合せた、こま銀一つ、爰に置きまするぞや。
醫者　器量だけ張り込んで、南鐐一片、受納して下され。
奴　小分ながら鳥目二百文ぢや。
　トめん〳〵出して床几の上に置く。
せん　ハイ〳〵、マア、休んでお出でなされませ。
醫者　イヤ〳〵、日も西天に沒した。サア、皆ござれござれ。
　トわや〳〵橋がゝりへ入る。おせん、右の金を一つ〳〵前巾着へ入れ
せん　このお錢は其方に。
　ト錢はお百に遣る。
お百　おくれるかえ。こりや忝ない。さうして、いつもの通りに。

せん　呑み込んで居やるであらう。
お百　込んで居ります。ドリヤ、身仕舞ひをして置かうか。
　トお百、納戸へ入り、神樂になると、向うより、早助飛脚にて
早助　エイサツサ〳〵〳〵。ヤレ、しんどや。息繼ぎに一杯貰はう。
　トおせん、茶を持ち行く。早助、おせんが手を取つて見事。いつそ殺してくされ。
せん　ア、、申し、何をなされまするぞいなア。
早助　何をするとは、三里一跨げに飛んで來た早飛脚。兎角素早いが當世ぢや。
　ト無理に引寄せる。おせん、こなしあつて
せん　見れば時限りの飛脚ざん。お前、氣が急かうがな。
　ト氣を持たすやうに云ふ。
早助　例へ急くと云うて、斯うなつて、これが一足も歩かれるものか。
せん　そんなら、わたしのやうな者でも。
早助　わたしのやうなとは、どうぢやいやい。モウ、お屋敷の御用が缺けうが、この首をコロリ山椒味噌と抛り出

すが心中ぢや……なんと、手酷いか〳〵。
せん　ハテ、お前さん、その氣でござんすならば。
早助　か。
　ト顔を見る。おせん、チッと尻目に見て
せん　ぢやわいなア。
早助　こりや、モウ、溶けるわいやい〳〵。
せん　申し、この腰に卷いて居やしやんすは、なんぢやえ。
早助　食もあり金もある。
　ト夢中のやうに云ふ。
せん　マア、これも退かしやんせいなア。
　ト帶を解く。早助、現になつてまろ裸になり
早助　サア〳〵、寢たい〳〵。
せん　サア、寢るは寢るけれどなア。申し、あの一間が暗うしてないに依つて、あそこで……しつぽりと寢たいわいなア。
早助　サア〳〵、早う〳〵。
せん　マア〳〵、行かしやんせ。
　ト唄になる。おせん、早助を連れて、見附けの舞臺へ入る。直ぐに納戸より拔けて出て、荷物の金を取上げ奧の方へ、堪忍してくれいと云ふこなしにて、ちよつと拜むと、神樂になり、向うより、萬野兵庫、着附けに羽織大小、江戸頭巾にて出かけ
兵庫　ハテ、繁華の地ぢやなア。
　ト云ひ〳〵舞臺へ來る。
せん　申し、休んでおこしなされませ。
兵庫　イカサマ、一服くゆらさうか。
　ト床几にかゝる。おせん、茶を持ち行く。兵庫、見てハア、聞き及んだ笠森のおせんとやらぢやな。聞いたよりは好い器量ぢや。
せん　何を仰しやりまするやら。
兵庫　當所などは繁華と云ひ、別して繁昌の宮居、諸商人の入り込む中にも、彼の家には鼠、國には盜人とやら、左樣の族の徘徊する沙汰は聞かぬか。
せん　イヤ、モウ、當代は御政道の嚴しくござりまするに依つて、そんな事は、とんとござりませぬわいなア。
兵庫　すりや、當所に於ても。
　トこなしあつて
　この所へ入込んだと慥かな注進。
　ト思ひ入れ。此うち、おせん、兵庫をつくづく見て
せん　物腰と云ひ恰好まで、どうやら。

兵庫　何がどう致した。
　トおせん、こなしあつて
せん　ホヽヽ、私しとした事が、申し、さうしてあなたは、當所のお侍ひさんでござりますか。
兵庫　イヤ〳〵、身は遥か北國の者サ。
せん　エヽ、アの、北國でも。マア、似た風俗もあればあるものでござんすなア。
　トこなしあつて、兵庫、思ひ入れ
兵庫　兼ね〳〵聞いた笠森のおせん。ハテ。
　トこなしあり、氣を變へ
　ドリヤ、稻荷へ參詣に行かう。
　ト行かうとするを留め
せん　申し、お歸りには又。
兵庫　休息を致すであらう。
　ト唄になり、兵庫、こなしあつて鳥居の方へ入る。おせん、思ひ入れあつて
せん　ほんにマア、よう似た……さうであらう筈もなし。何かにつけて、近う便りのありさうなものぢやが。
　ト思案すると、神樂になり、向うより、吟山、羽織、嫁らしき拵らへにて出て、おせんを見て扇を鼻に當て擦れ違ひ、櫻の方を見て
吟山　咲いたワ〳〵。咲きも始めず散りも初めず、どうもどうも。
せん　申し、おかけなされませ。
吟山　門に入つては、先づその忌名を問ふ。君が彼の笠森のおせんぢやなう。
せん　左樣でござります。
吟山　硯を持ちやれ。
せん　ハイ〳〵、お歌でもなされますかえ。
　ト云ひ〳〵硯箱を持ち行く。吟山、花紙を出し
吟山　よみしまゝ止みなんも如何ぢや。
　トさら〳〵と認め、吟ずるこなしあつて
　万客既來境内色
　櫻花開指婦人脣
　麗容聲甑少時舍
　價摸千金春宵示
　ト詠むうち、おせん、こなしあつて
せん　面白さうな事でござります。私しも及ばずながら、
　ト吟山の書いた端に發句を書く。吟山、取つて見て
　ドレ〳〵……「若草や寐よげに見ゆる今日の暮」ハテサ

テ、即席の達者。見事々々。
せん　あなた、きつう學問をお好きさうに見えます。
吟山　和學の道を少々は學んだ。
せん　和文のうちでも、徒然などは、よう出來ましたものでござりまするなア。
吟山　兼好法師は、よう書き居つたて。
せん　人として色好まざらん者は、玉の杯底なき心地ぞするとは、面白い事ではござりませぬか。
吟山　其方も書を讀む事が好きぢやな。
せん　梅の林に入るは楽まざるに、その端芳ばしとやら。あなたのやうなお方と、常住一緒に居りましたならばなア。
吟山　朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりと云へば、なんと夫婦になる氣はないか。
ト手を取り、床几へ引寄せる。
せん　そりや、アノ、ほんまでござりますかえ。
吟山　大聖人孔子も照覽あれぢや。
せん　左様なら、モシ。
トこなしあり
婚姻は萬裔の始めとやら申しますれば。

吟山　娶る時には必らず父母に申すと云へども。もう、其所までは手が屆かぬやうになつた。
せん　シタガ、とてもこの間に夫婦の固めをば。
吟山　オツと、一を聞いて萬を察する。夫婦の固めは、さもしけれど黃金一兩。
ト扇を載せ差出す。
せん　千金に勝るお志し。
吟山　比翼連理の契りを早う。
せん　密かにあの一間へ。
吟山　婦人、來やれ。
ト唄になり、おせんの手を取り、下座の障子屋體明け、吟山、暗き事ぢやと云ひ〳〵探り足にて兩人入る。見附けの屋體より、お百、出て、指にて見附けられたと云ふ仕方をしてそれより下座の屋體へ入る。ト納戸よりおせん、拔けて出て、前巾着へ金を入れるこなしある。ト向うより、きほひ組伊之助、大肌脱ぎにて體中に刺青を拵らへ、俠ひの形にて酒に醉ひたる體にて出る。
伊之　忌々しい。なんの事だい。
ト云ひ〳〵出る。

どうだ、おせん坊、この間は逢はねえ。

ト訛つて云ふ。おせん、いかつうに小肩を振つて

せん　オヽ、神田の伊之さん、よく來なさつたな。

伊之　よく來たとは有り難い。何時見ても美しいおせん坊。畜生め、どうだい〳〵。

ト凭れかゝるを突き退け

せん　エヽ、よしにされい。小嫌らしい。なんの事だい。

ト肩を振つてあちらへ行く。

伊之　コリヤ、ヤイ、神田の伊之助と云つちやア、八百八町を拔き通つた男だ。おせん坊、どうだい〳〵。

ト抱きつく。おせん、こなしあつて

せん　そりや、お前の心意氣次第で、わつちが方は、どうなとするが。

伊之　エヽ、玆な命め。今日は谷の長吉の賭場で、巧く當つて五兩三分ある。おせん坊、ソックリ遣る。どうだえ。

ト金を遣る。おせん、突き戻し

せん　エヽ、措きない。わつちも笠森のおせんぢや。金づくではいかぬ。なんの事だ。當て事もない。

伊之　出來た。要らぬ金なら爰らへ打ッちやつてしまうて、なんと今爰で談合するかえ。

ト寄り添ふ。

せん　なにを。そないに云ひなさつても、お前、外に極りのあるげな。

伊之　極りとは平松のおてるの事か。あの踏ん張りめは、疾に長竿、突き出してしまつた。

せん　エヽ、また嘘を吐きない。

伊之　ほんまだよ。

せん　そんなら極まつても見ようか。

伊之　マア、あの二階へ來なさい。

トおせんを引ッ張る。この時二階より、吟山、刀を提げ出る。お百、附いて出る。見附けの屋體より早助出る。

吟山　顏に似合はぬ大丈夫。

早助　あの器量をして、宇津の山邊とは、とんと合點がゆかぬ。

ト双方とも云ひ〳〵出る。おせんを見て

吟山　ヤア、おせん、其所に居るか。そんなら。

トお百見て、悄りして隱れろ。伊之助、おせんを引ッ張る。吟山、早助、伊之助を突き退けて、おせんを引

ッ張り合ふ。お百、この中へ分け入り、おせん、擦り抜けて納戸へ入る。三人、取違へてお百を引ッ張り合ひ、一時に額を見て、お百をぶッ倒して、さん〴〵蹴り、何所へ失せたと云ひ〳〵、三人とも橋がゝりへ走り入る。お百、ほう〳〵して追はへ入る。唄になると向うより、おまつ、振り袖の世話娘にて、鏡を抱かへ子役の手を引き出る。

まつ　當吉、其方はしんどからうなう。

當吉　イヤ〳〵、しんどい事はござりませぬ。

まつ　それは嬉しい。シタガ、もう内ぢやぞや。

ト云ひ〳〵舞臺へ來て

母樣、戻りましたぞえ。

トおせん、出て

せん　これはしたり、二人ながら、お宮の門に遊んで居やるかと思へば、何所へ行て居やつた。ひよつと遠歩きして、迷ひ子になどなつたら、大抵の事ぢやないぞや。未だ弟は頑是もないが、おまつ、よう心得て居や。

まつ　サア、遠い所へ行く氣はございんせぬが、わたしやこの鏡を持つてな。

せん　ほんに、鏡を持つて、何所へ行きやつた。

まつ　サイナア、父樣の行く所は知れず、便りに思ふお前は、この間から鳥眼とやら云うて、夜になると目の見えぬ病。わたしやそれが悲しいに依つて、聞けば小石川の方に鳥眼を癒す好い藥があるとやら。シタガ、その藥の値段は高いとやら。貧しい中で、お前に云ふが悲しさに、お百に貰うたこの鏡を、その藥屋へ持つて行て、これでその藥を賣つて下さんせと云うたれば、大事ない、藥は遣る、この藥は持つて去んで、何時でも藥の代は出來た時に持つて來いとて、それは〳〵深切な藥屋さんでござんしたわいなア。

當吉　コレ、母樣、この藥をつけて、夜さりも目の見えるやうになつて下されや。

ト藥の包みを渡す。おせん、ホロリと泣いて

せん　子心にも、母がこの鳥眼を案じて、可愛や……シタガ、その藥屋さんは、氣の好い情心の深いお方。コレ、鏡と云ふ物は、姫御前の嗜なみぢや程に、今度からそんな事があるなら、矢ッ張りわしに云うたがよいぞや。

まつ　申し母樣。この父樣は、何時戻らしやんす事ぢや。早う逢ひたい。逢ひたうござんすわいなア。

せん　オヽ、逢ひたいは道理ぢや。わしも逢ひたい。夫信

濃の當藏どのは、元は信濃の生れにて、由緒ある侍ひの果ぢやげな。樣子あつてこの東へ來て、お家に育ち、緣でがなフツと馴れ染め、云ひ交した其うちに、生み落した其方衆兄弟、夫婦暮す其うちにも、どうぞ一度、國元へ歸參がしたい、元の侍ひになりたいと、朝夕その心でか知らぬが、女房子を置去りに家出さしやんしたが、去年の冬。申し、こちの人、なぜ斯う〳〵云ふ譯で、一旦別れねばならぬと、樣子を話しては下されぬ。斯う云ふ子供を振り捨てゝ置いて、別れてこの方半年餘り、あまり氣強い、胴慾でござんすわいなア。

　ト泣く。

まつ　父樣の話しを聞いたので、どうやら悲しうなつたわいなア。

當吉　母樣、おれも悲しうなつた。

せん　オヽ、道理ぢや〳〵。シタガ、もう追ッつけ戻つてござんすであらう。二人ながら、大人しうして待つて居や。おまつ、其方の頭は一昨日の儘ぢやの。ドレ、撫でつけてやりませう。

　ト櫛を取り、おまつの髮を撫でつけるこなし。この時橋がゝりより、鐵火の權八、博奕打ちにて出かけ、

權八　サア〳〵、來たぞ〳〵。是でも非でも、今日は逢はにや措かんのぢやぞ。

せん　オヽ、權八さま、ようござんしたなア。

權八　イヤ、ようは來ぬ。惡う來たのぢや。コリヤヤイ、爰た當藏に博奕のいきさつ、盆の上で貸した金、積り積つて去年の極月までにカウッ、十貫に餘る金ぢやぞよ。毎日々々催促に來ても、當藏は家出をした、イヤ駈落ちをして居ぬのと、何時戻つて、何時せりふをつけるのぢや。

せん　サア〳〵、尤もでござんすが、なんと云うても半年餘りと云ふものは、門に居やしやんせぬに違ひもなし。

權八　サイヤイ、それに違ひがなくば、昨日も云うた通り姉の子は

　トおまつを引立てる。おせん留めて

せん　イヽエ、金の代りに娘賣る事はならぬわいな。

權八　ならぬとは、わりや横に出るのぢやな。

せん　ナンノイナ。さうではござんせぬけれどナ、今にもこちの人の戻られた時に、主の借らんした金の代り、姉のおまつは賣つてやりやんしたと云はれさうなものかいなア。

横八　サア、そんなら十貫受取らうかい。
せん　サレバイナ、其所が談合でござんす。マア、二三日の所を。
横八　その二三日で今まで釣りつけられたのぢや。シタガ、今日一日は待つてやるワ。ハテ、今日中にでも當藏が戻つたら、直ぐにせりふするワ。また戻らぬ時は、姉を連れて去ぬワ、手短かな返事は、爰な門で待つて居るぞよ。
せん　そりや、お前の勝手にさしやんせ。
横八　せいでは。ドリヤ、一寝入りして待たうか。
　ト横八、障子屋體へ入る。おせん、こなしあり
せん　いろ／＼に心を盡して、これまで溜めた金が……大方五十兩餘り。こちらの方も濟ましたし……イヤ／＼、それよりは、マア、色紙の質請け。
　ト云はうとして奥へ氣兼ねあつて
これと云うても又。マア、大抵の事ではない。
　ト思ひ入れあつて
それはさうと、其方衆は饑じからうの。
まつ　イエ／＼、未だ欲しくはござんせぬ。
せん　イヤ／＼、饑じい時分ぢや。坊にも飯を食べさしませう。サア、おまつもおぢや。
　ト唄になる。おせん、二人の子供を連れ、納戸へ入る。向うより、伊勢屋十兵衛、着附け羽織、町人にて出る。橋がゝりより、横住大藏、大小、黒股引の侍ひ、三度笠を持ち出て
十兵　横住大藏さまぢやござりませんか。
大藏　お身は質屋十兵衛ではないか。
十兵　これはよい所でお目にかゝりました。マア／＼、これへござりませ。
　ト兩人とも床几に腰かけ
して、あなたは、どれへお出でなされまする。
大藏　どれへと云つたら、お身に逢ふ爲サ。
十兵　アノ、私しに。
大藏　如何にも。當春主人一學さまより、其方へ質物に置かれし時雨の色紙。
十兵　ア、コレ、靜かに仰しやりませ。その色紙が、どう致しました。
　トこの時、おせん、出かけ、ちよつと聞いて入る。
大藏　サア、色紙の質物を拵らへ、藺原の家へ輿入れあつた。足利の姫君。その縁組みを引裂いて、藺原の家沒落

させたのも、九重姫を主人一學どのゝ手に入れん爲ばかり。事成就の上は、彼の色紙を受取り歸り、主人の手より足利へ差上げ、隠れてござる九重姫を申し請けんと云ふ主人の企み。十兵衛、時雨の色紙は所持して居るであらう。

十兵　成る程、その色紙は所持して居りまする。

正藏　それは幸ひぢや。

　ト懐中より金の包み取出し

即ち主人一學さまより、渡されし金子百五十兩。封印の儘ぢや。サヽ、金子受取つて、色紙を渡しやれ。

十兵　アヽ、モシ〳〵、大藏さま、この色紙を私しの所へ、質物に取つて用立てました金は、百五十兩でござりますぞえ。

大藏　ぢやに依つて、百五十兩持參いたした。

十兵　されば、其所でござります。質物に取つてから、此方、凡そ百日餘りの日數、その間は利息と云ふ物もかゝります。利息を十五兩と見て、三月十日でマア、五十兩と元利〆めて、二百兩お出しなされませにや、この色紙は渡されませぬ。

大藏　ムウ。すりや、五十兩と云ふ利息が要るか。

十兵　お前、如何に素人ぢやと云うて、利を取らいで質屋はなんで食べますぞいな。

大藏　イカサマ、其所もある。

　ト思案して

この所は斯うしやれ。身は當所の錢屋方へ參つて、右の五十兩を調へ、家來に持參さゝう程に、その節色紙と引替へに渡したがよい。この百五十兩は、先づ預けて置かう。

十兵　成る程、左様ならこの百五十兩は、何がなしに預かつて置きませう。

大藏　して、お身が家は。

十兵　小石川で伊勢屋十兵衛と云ふ質商賣、門口にはお定まりの看板、隠れ紛ひはござりませぬ。

大藏　然らば金子調達して遣はすであらう。

十兵　お別れ申します。

大藏　詞を番うたぞよ。

　ト大藏、橋がゝりへ入る。十兵衛、こなしあつて

十兵　うまいワ〳〵。なんでもこの間から、續けての敗軍。この金で今一軍やつてこまさう。

　ト行かうとする。おせん、留めて

せん　アヽ申し、十兵衛さまぢやござんせんか。
十兵　オヽおせん、この間は逢はぬ。
せん　サアヽ一兩日も逢はぬに依つて、大抵案じて居る事ぢやござんせぬ。それに顏も見せず去なうとは、氣の惡いお方ぢやわいな。
十兵　久しい奴ぢや。なんぞ云うてか。
せん　オヽ憎。
　ト太股を抓る。
十兵　アイタヽヽ。
せん　誰れに逢ひたいえ。
十兵　サア、逢ひたいと云ふは、おせん、われにぢや。
せん　でも、よう嘘を吐くお方ぢやわいな。
十兵　イヤ、嘘ぢやない。おれが方に嘘が無いが、われの方に嘘がある。
せん　そりや、なぜにえ。
十兵　おせん、わりや信濃の當藏と云ふ男があらうがな。
　トこなしにて
せん　當藏どのと云ふ男はあつたけれど、長の月日を別れて居れば、遠ざかる者日々に疎しとやらでな。
十兵　イヤ、呑み込めぬ。われが男の當藏に、ついしか逢はぬが、笠森のおせんと云うては名うての女。聞きや男に別れ、後家になつて居るとの事。どうぞ〆めてこましたいと思うて、覺えがあらうな、この春から此方へ、一分なり二分なり、二朱なり、こま銀なり、金銀の威光を見せても、たるやうでならぬやうで、ぬらりくらりとあしらうて居るは、これ皆當藏とやらへの心中。それに今まで、此奴なると思ふと、鼻も讀まれたが、怪體が惡いわい。
　ト煙草盆を持つて、こちらへ來る。おせん、こなしあり、十兵衛の側へ行て凭れかゝり
せん　十兵衛さま。
十兵　なんぢやい。
　トつんと云ふ。
せん　そりや、お前、水臭いと云ふものぢやわいな。
十兵　どうして何が水臭い。
せん　わたしがこの間云うた事、お前はどう聞いて下さんしたえ。
十兵　ハテ、女房に持つてさへくれるなら、女房になりませうと云うたぢやないか。
せん　サイナア。姬御前の口から、よく〳〵に思はいで、

そんな事が云ひ出されさうなものぢやと思うて下さんすか。ほんにモッ、氣立てはよし、男は立派、形身上はよし、わたしや、モウ、どうなとなる氣ぢやけれど、何を云うても片思ひな事ばかりで。

ト十兵衛へこなしあつて

イエ／＼、口先で人を勦るは、殿御の常ぢやわいな。

十兵　なるぞえ。此方の相談はなり切つてあるぞえ。疑ひの深い女房ども。金の要る事があるなら、遠慮なしに云うたがよいぞや。

ト財布を出してひけらかす。おせん、思ひ入れあつて

せん　申し、こちの人え。

十兵　ヤア／＼。

ト抱きついて云ふ。

せん　アノ、先刻に聞いて居れば、色紙とやら質請けとやら。ありや、なんの事でござんすえ。

十兵　サア、あれは時雨の色紙と云うて、信濃の國薗原家の寶物ぢや。それがどうした。

せん　サア、聞けばその色紙が、質物に入つてあるとやら。定めしお前、持つて居やしやんすであらうがな。

十兵　ハテ、モウ、大枚の金になる代物。何がこの間は、盗人の噂で物騒ではある。其所で立つても居るにも肌身離さず、大事にかけて懐中して居るぢや。

せん　エヽ、そんなら。

ト思ひ入れあつて

申し、その色紙を、わたしに預けて下さんせぬかえ。

十兵　色紙を預かつて、なんにするのぢや。

せん　お前の心が知れぬに依つて。

十兵　ヤ。

せん　サイナア。お前の心に、僞はりのないと云ふ證據の爲、大事にさしやんす色紙が、こちや預かつて置きたいわいなア。

十兵　こりや、尤もぢや。如何にもこの色紙は、わが身に預けう、と云ひたいが、今はならぬ。ハテ、寢所へ入つて、帶を解いたその上で、如何にもこの色紙、わが身に預けう。

トおせん、思ひ入れあり

せん　十兵衛さま、寢ようかえ。

十兵　イヤ、モウ、寢たうて／＼、何所も彼所も、しやきばつて居るわい。

トじやん／＼と暮れ六ツの鐘鳴る。おせん、こなしあ

る。
せん　エヽ、ひよんな。もう、暮れたかいなア。
十兵　暮れた所が命ぢやわい。
ト　おせんに抱きつく。おまつ、納戸より出て
まつ　申し、母様。
ト　真中へ出る。
十兵　エヽ、掬りをさしアがつた。
まつ　入相が鳴つたれば、お前は鳥眼。
ト　云はうとする。
せん　アヽ、コレ／＼、なんにも云やんな。コレ、其方は
アノ、内へ灯も灯して、そして、坊も眠たから程に、
添乳して寝さしてやりや。
まつ　アイ／＼。用があるなら呼ばしやんせえ。
せん　ちやつと行きや／＼。
まつ　アイ／＼。
ト　おまつ、奥へ入る。
十兵　いろ／＼の奴が邪魔さらし居る。
ト　云ひ／＼上座へ行く。おせん、鳥眼のこなし。
せん　十兵衛さま、お前はまだ、疑うて居やしやんすか
え。

十兵　おせん、おりや爰に居るわい。
ト　おせん、こなしある。
せん　わざと拗ねて見たものぢやわいな。
ト　探り／＼十兵衛の側へ寄る。十兵衛、いろ／＼あ
る。
十兵　おせん、わが身、眼が見えぬか。
せん　エ。
十兵　先刻にからの素振り、わが身は鳥眼ぢやな。
せん　なんの、マア、わたしが。
十兵　コリヤ／＼、男ぢやないかい。女夫の仲で、なんの
それを隠す事があるぞいやい。
せん　イエ／＼、さう云ふ事ではござんせぬけれどな。こ
の間は、きつう逆上せた加減か。
十兵　ハテ、眼が見えいでも大事ないわいやい。なんと、
日が暮れたが、寝ようぢやないか。
せん　サア、寝やうは寝ようけれどな、わたしやどうやら、
心が解けぬわいな。
十兵　心が解けぬとは、エヽ、色紙の事か。ハテ、それ程
に思ふ事なら、如何にも色紙を預けう。
ト　懐中より色紙の箱を出し、色紙を取つて箱ばかりを

其所に置く。おせん、これを知らず

せん　ハテ、モウ、その色紙さへ預けて下さんす事なら、心の疑ひ、何もかも、さつぱりと打解けると云ふものぢやわいな。申し、十兵衛さま、其所に居やしやんすかえ。

十兵　オヽ、爰に居る／＼。

ト箱を渡して

十兵　サア／＼、望みの色紙ぢや。

せん　エヽ、忝なうござんす。

十兵　疑ひが解けたら、この帯を解いて。

トおせんが帯に手をかける。

せん　アヽ、コレ、もう寝るのかいな。

十兵　はずみきつて居るわい。

ト無理におせんの帯を解かうとする。この時おせんの懐より巾着落ちる。十兵衛、ちやつと手早に中の金を小石と摺り替へる。おせんはいろ／＼尋ねるこなし。

コレ／＼、わが身の尋ねるは、これぢやないか。

ト巾着を渡す。おせん、取つて

せん　アイ／＼、これでござんすわいな。

ト落ちついたこなし。十兵衛はそれより色紙の置き所に困るこなし。櫻の木を見て、右の色紙を櫻の木へ抛り上げる。此うちおせんは、色紙の箱を持つて、探り探り奥の方へ行かうとする。

十兵　コレ、何所へ行きやるぞいなう。

せん　サア、寝るのには枕も要らうし、さうして床も取らうと思うて、それでな。

十兵　エヽ、そこ所か。

ト夢中になつておせんに抱きつき、いろ／＼ある。この時兵庫、ツカ／＼と出て十兵衛を引き廻し、取つて投げる。十兵衛、起きて

十兵　ヤイ、わり様は、何處の牛の骨ぢや。なんでおれを投げたのぢや。

兵庫　それがどうした。

十兵　ヤ。

兵庫　これに居るおせんが夫、信濃の當藏と云ふ者。見知つて置きやれ。

トおせん、大きに愕りして

せん　エヽ、そんなら先刻の

兵庫　女房、無事に居たな。

トおせん、探り寄つて、兵庫にしがみつき、大泣き。兵庫、突き退け

見苦しい。何を吠える。

せん　こちの人、エヽ、思ひがけもないと云はうか。先刻の時、なぜ名乗つては下さんせなんだぞいなア。エヽ、ツツと顔が見たい。懐かしかつた〱わいなア。

ト また取りついて泣く。十兵衛、おせんを突き退け

十兵　エヽ、すッ込んでけつかれ。信濃の當藏、如何にも見知つた。近附きにはなかつたが、貴様が爰へ戻りや、この十兵衛を手籠めにしても大事ないか。なんの科で、この十兵衛を手籠めにしたのだ。

兵庫　知れた事、密夫の科で。

十兵　なんと。

兵庫　この刀は、われが目には見えぬか。國元へ歸參叶へば信濃の當藏、武士だぞよ。侍ひだぞよ。その女房を捉へ帯紐解いて、何ゆゑ不義は働らいた。

十兵　サア、それは。

兵庫　密夫の成敗、重ねて置いて眞二つに……と、サア、これもよしない刀の穢れ。畜生を相手に、いらざる問答。助けてくれる。キリ〱と立つて失せう。

ト 十兵衛を睨めつける。おせん、思ひ入れ。

十兵　なんぢやい〱。二本差したてゝ、脅し喰ふやうな十兵衛ぢやないわい。

ト 云ひ〱帯をする。權八、出かけ居て

權八　當藏、われの戻るのを待つて居たわい。

兵庫　わりや何者ぢや。

權八　侍ひになつたと思うて、えらう洒落るな。コリヤヤイ、鐵火の權八、見忘れはせまいがな。

ト 兵庫、權八を見て、思ひ入れあつて

兵庫　オヽ、如何にも權八々々。よく存じて居る。

權八　存じて居いでは。當藏、忘れもせまい、目黒の金兵衛が盆の時、われもおれも側を張つたワ。おれは無性に面を引く。われが前が淋しかつた。日頃組合ふこつちやと思うて、二三兩貸してやつたが因果の最初ぢや。それから足が附いて、五兩が十兩、重疊になつて二百兩近い金を呑み込み仕事で貸してあるぞよ。それから間もなう出奔も同然。コリヤ、何が胴が一つになつて、やり事にかけたのかい〱。

兵庫　すりや、身共に金子を用達てたと云ふのか。

權八　惚ける事はないわい。

兵庫　如何にも、借用の金子、返してくれう。

權八　サア、受取らう。

兵庫　今はない。旅がけと云ひ、いろ〳〵調達をして返しさへすりや、申し分はない筈だ。

權八　ハテ、大束に出たな。

せん　アイ、イヤ、その金わしが返しやんせう。

權八　アノ、二百兩に屆いた金を。

せん　サア、爰に有り合した五十兩。これを渡しまして、後の所は又、こちの人とも談合を致しまして。

權八　よいワ。五十兩でも取らにや損ぢや。

ト取らうとする。兵庫、突き廻して

兵庫　イヤ、この金子渡す事はならぬ。

せん　申し、わたしが志しの金、なぜ渡されんえ。

兵庫　心が知れん。

せん　エヽ。

兵庫　忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えぬ掟。その不實不貞の金子、信濃の當藏、望みにはないいて。

せん　すりや、わたしが身の上を。

兵庫　聞くに及ばぬ、不實の女め。

トきつと云ふ。

せん　ハアヽ。

ト泣く。

權八　當藏、有る金を使はず、達引はどうするのぢや。

ト右の間、十兵衛、櫻の木を見詰めて居て、爰にて

十兵　オヽ、さうぢや。侍ひになつた信濃の當藏。ぢやむさいせりふしては、侍ひの一分は立つまいぞよ。

兵庫　サア、その武士の面を穢した間男の其方。コレヤイ、この首が胴に繋いであるぞよ。

ト十兵衛の首筋叩き

今宵中は町人の當藏になつて、無難に納めるは當藏の胸にある。權八、マア、この場は歸つたがよからう。

權八　イヤ、歸るまい。何時までも居て催促ぢやて。

十兵　オヽ、どうあつても今の達引。

兵庫　武士になつて間男の詮議をせうか。

十兵　サ、それは。

兵庫　矢張り町人で待つたがよからう。

權八　イ、ヤ、待つ事はならぬぞ。

ト權八を十兵衛突き退け

十兵　イヤ、待つてやる。

權八　ハテ、それでは。

十兵　サア〳〵、えゝ、おれが挨拶ぢや。われが催促をすると、情なや、おれが首縊ぢやに依つて、おれも去ぬ

る。貴様もマア、去んだがいいわい。

權八　エヽ、忌々しい。そんなら明日早々、せりふに來るぞよ。

十兵　サア〱、いいわい。

ト權八を連れ行かうとして、色紙の事を思ひ出し、櫻の下へ行かうとする。兵庫、突き廻して

兵庫　間男の成敗せうか。

十兵　なんのお前。サア、行け。ハテ、行けいやい。

ト十兵衞、權八を無理に連れて橋がゝりへ逃げ入る。兵庫、思ひ入れあつて行かうとする。おせん、探り寄つて

せん　アヽ、コレ。

ト兵庫が裾を取る。振り切つて行くを留める事二三度あつて、双方チッとととまる。しつぽりとした合ひ方になる。

コレ、こちの人、わたしは格別、別れてから半年餘り、お前は二人の子供に、逢ひたうはござんせぬかえ。

ト兵庫、こなしあつて

兵庫　聞き及んだ弟が悴…イヤサ、兄弟の身共が悴。氏より育ちと其方の養育、逢ふにや及ばぬ。

せん　エヽ、それ程までにわたしが。

ト兵庫、おせんが胸倉を取つて引据ゑ

兵庫　見下げ果てた、コナ人外めが。わりやこの當藏を、相果てたと思ふか。但し存命で居ると思うて居つたか。最前それと名乘り開かすは易けれども、この頃世上の噂を聞けば、信濃の當藏が女房は、當所に於て筮竹おせんと、名乘りを取りし賣女の生業。よもやとは思うて居つたが、最前あれより窺ひ見れば、往來の旅人を相手にして、その身を穢す徒らなる身持ちばかりか、金銀を掠め取つて、道ならぬ惰弱の振舞ひ。よくも身共が一分を捨てさせ居つたなア。子供の養育、朝夕の爐の活計ならば、袖乞ひ非人、例へ飢ゑて死ぬるまでも、操を立てゝ、なぜ當藏が歸りは待たぬ。僅かの利慾にその身を穢し、丁稚小野郎素町人の慰み物になつて、それで本望か。どの面下げて身に詞を交した。最前より、もうぶち成さうか、もう切つて捨てうかと、刀の柄に手はかゝつてあれども、ナ、不便や子供が…頑是なき悴まで、恥辱を與へる、コナ人でなしめ。

トいろ〱あつて突き放す。おせん、こなしあつて、色紙の箱を取出し、兵庫が側へ置く。

せん　當藏どの、それを見て下さんせや。

兵庫　これは。

せん　薗原のお家に傳はる時雨の色紙。

兵庫　ヤ、、なんと。

せん　わたしへの意見、さら／＼無理ではござんせぬ。シタガこちの人、お前も胴慾でござんすわいなア。日頃國元へ歸參の志しがござんすならば、なぜ斯う／＼ぢやと打明けて、談合しては下さんせなんだぞいなア。現在連れ添ふわたしにも隱して、家出さしやんしたその日より、子供は尋ねる、わたしが案じ。國元へ行かしやんしたか、但しは不時の煩らひで、もしもの事もありはせぬかと、生死の程も案じられ、晝は終日、夜は夜もすがら、無事な便りを聞くやうにと、祈らぬ神も佛もなう、今日よ明日よと待ち暮らす其うちに、世間の取り沙汰。嘘か誠か知らねども、薗原のお家の騷動、大殿樣はお果てなされ、寶は紛失、家中のお衆は散り／゛＼と、聞いて猶更案じも百倍。どうか斯うかと思ふうち、お家の寶この色紙が、質物に入つてあると手筋を聞いて、これこそ幸ひ、その色紙を請け出して、お前の手柄に立てたい事と、心は千々に思うても、その日送りの活計も薄い水茶屋商賣。金才覺の當途もなう、辛い悲しい河竹の、遊女にまさる徒らも、割つて云へば當藏どの、お前に忠義が立てさせたいばかりぢやわいなア。なんぼわたしのやうな不束な女子でも、廓の勤め傾城の奉公が、なるまいものでもなけれども、それでは子供の養育もならず、非道と知つて往來の人を、騙した罪科も、夫を思ふ貞節の、天道誠を照らし給へば、この身の願ひ、念が屆いて今日思はずも、手に入つたは、コレ、この色紙。一つの功にもなるならば、どうぞ役に立てゝ下さんせ。笠森おせんと云ふ名は、徒らに穢しても、心の操は立てましたが、この身の云ひ譯。當の心を知らぬかなんぞのやう、思ひやりのないこちの人、胴慾ぢや／＼。胴慾でござんすわいなア。

ト大泣き。此うち兵庫も悲ひのこなしあつて

兵庫　操正しきその身の云ひ譯。心の潔白、疑ひ晴れた。

せん　そんならこちの人。

兵庫　イヤ、信濃の當藏が兄、萬野兵庫が今の云ひ譯、逐一に承知いたしたぞよ。

せん　エ、。

ト恟り。

そんなら、あなたは。
兵庫　骨肉同胞、双子の兄弟。
せん　エヽ。
ト大きに愕り。
兵庫　コリヤ、其方が夫の信濃の當藏。いま改めて對面し
やれ。
ト一腰を渡す。おせん、合點のゆかぬこなしある。
せん　この一腰が、夫當藏どのとはえ。
兵庫　月は變れど今日が卽ち命日。俗名信濃の當藏、遁生
菩提、南無阿彌陀佛。
トおせん、大きに愕りして、兵庫に取りつき、急いて
急いて物の云はれぬこなし、いろ／＼あつて
せん　申し、そんならこちの人は、死なれましたかいな
ア。
兵庫　所も變らぬ當所、藺原の上屋敷に於て、不便の最
期。
せん　エヽ。
ト愕り、いろ／＼あつて
ハアヽ。
ト大泣き。

兵庫　同腹同性の双子なれば、一つ屋敷に育つ時は、必ら
ず一人は劍に祟ると、俗說に依つて弟は、藁の上より
信州の片里、乳母の在所に人となり、疎遠に過せし長の
月日。思はず當春巡り逢うたが、その身の不運。お家の
仇を見出さん爲、萬野兵庫とこの兄に成り替り、武士も
及ばぬ立派の切腹。餘所に見なして過せしも、お家に蔓
る叛逆人を見出さん爲、惜しからぬ身共の存命。卽ち
弟が切腹の、血汐に染まる差添は、其方の爲には夫の
筐。肌身に添へて回向しやれ。
トおせん、始終泣いて居て、差添を抱き〆め
せん　こちの人、夢にもわたしや知らなんだ／＼わいた
ア。恨みつらみはなけれども、去年ソッと別れたのが、
長い別れであつたのかと、思へば死なしたやうにも、わ
たしやえゝ思はぬわいなア。エヽ、時も時とて鳥眼の
病、お顏が見えねど兵庫さま、眞實のお前と思うたは、
逢ひたいと思ふ心の煩惱。覺めては果敢ない血汐の刀。
これでお前は死なしやんしたかいなア／＼。
ト一腰を抱き〆め、いろ／＼あつて
申し、兵庫さま、この上のお願ひは、兄弟の子供の養
育。こちの人、冥途で逢ひませう。
ト大泣き。

ト右の刀にて死なうとする。兵庫、留めて

兵庫　マア、いま相果てゝは、死後の夫の爲にはならぬわ。

せん　イエ／＼、放して、死なして下さりませいなア。

兵庫　さればサ、忠義に死したる弟が、功も空しく、お家の騒動。ソレ、色紙の手に入りしこそ幸ひ、國元の主人に差上げ、功を立てるが未來の追善。コリヤ、合點が行たか。

せん　エヽ、とつと死ぬるにも死なれぬ命。なんとなる身の因果ぢやぞいなア。

ト泣く。

兵庫　ハテ、泣くのが夫の追善にならうか。

トきつとなる。

なんにもせよ、時雨の色紙。

ト色紙を取上げ、改めて恟り。

こりや、コレ、色紙は無くて箱は明から。

せん　エヽ、／＼／＼。

ト大きに恟りして、箱を探すこなしにて、手に當る巾着を取り、中を改めて

ヤア、こりや、コレ、蓄へた金と云ひ、時雨の色紙まで……それなら十兵衞が。

ト探りながら行かうとする。

兵庫　コリヤ、いづれへ行く

せん　十兵衞の居る所を探して。

兵庫　ハテ、サテ、斯程の事を企む曲者、女の身と云ひ、夜は盲目同然の女。急くな騒ぐな早まるな。マア／＼、待て。

トおせん、いろ／＼こなしあつて

せん　エヽ、とツとモウ、この埒明けてくれぬかいなア。

兵庫　色紙の在所は、質屋十兵衞、召捕るは易けれど、其方が手より詮議して差上げるが、非業に死したる弟が功ともなり、兄弟子供も出世の生先。

せん　すりや、この詮議を私しに。

兵庫　サア、荒立てるは事の破れ。

せん　無難に色紙を取返すは

兵庫　十兵衞とやらに得心させて

せん　質請けの二百兩を。

兵庫　探索するが、コリヤ、未來の追善。

せん　兵庫さま。

兵庫　縁もあらば、重ねて。

ト行かうとする。ちよつと袖を扣へ
せん　申し、せめて兄弟の子供に。
ト兵庫、思ひ入れにて
兵庫　藤原や伏屋に生ふる帚木の、ありとは見えて逢はぬ君かな。
せん　ありとは見えて逢はぬ君かな。
兵庫　逢ふは却つて涙の種サ。
ト袖を振り切る。おせん、こなしあつて
せん　左様ならば。
兵庫　命全う色紙の詮議を。
せん　この身に替へても。
兵庫　吉左右の便り、相待ち居るぞ。
ト合ひ方になり、兵庫、行かうとして、思ひ入れあつて、おせんに目を残し、鳥居の方へ入る。おせん、これを知らず、こなしあつて
せん　兵庫さま〳〵、申し、兵庫さま、もう、お出でなされましたか。未だ云ふ事もあり、お願ひ申す事もあつたのに、先刻にまで、もう戻つてか、明日は顔を見ようかと、楽しみに暮らしたが、例へ夜が明け日が見えても、見たい〳〵と思ふ願ひはなし。ア、味氣ない世の中ぢやなア。
ト右のせりふのうち、十兵衛、出て、おせんの側なばさし足にてソツと櫻の木へ登ると、奥より、おまつ、常吉、出る。おせんの側へ寄り
まつ　申し、母様。
せん　ヤア、おまつ、常吉。其方衆は、まだ起きて居やつたか。
まつ　アイ、わたしは父様の死なしやんした話しを聞いて泣いてばかり居たわいなア。
常吉　わしも泣いて居たわいなう。
ト兩人泣く。おせん、兩方より抱き寄せ
せん　可哀や〳〵。悲しうなうてなんとせう。この父様は何時戻つてぢや、早う逢はして下されと、常住わしをせがんだが、この母様も其方衆も、もう父様に逢ふ事はならぬぞや。この後夫に仕へるも、わが身達が孝行と、一木の花一つで、阿迦の水手向けるより外はない。花の盛りには戻つても下さんせうがと、指折り數へて待つた櫻花。朝夕汲む清水の流れ、手向けるがせめてもの追善供養。さうぢや〳〵。
トしめやかなる唄になり、二人の子供に手を引かれ、

櫻の木の側へ行き、右の刀を櫻の枝に括り付ける。此うち子役二人、前なる流れにて手桶に水を汲み持ち行く。おせん、柄杓にて手向け、三人とも手を合せ

俗名　濃の當藏佛果菩提の爲。

二人　南無阿彌陀佛々々々々々々々。

せん　老先のある子供を殘し、死なしやんしたその時が、さぞ子供の事やわしが事、胸一杯になつたであらうと思へば、いとしや〳〵。シタガ、先刻に兵庫さまのお詞、どうぞ金を拵らへて、色紙を取返しさへすれば、夫の功になつて、子供の出世を便りになるとの事。どうぞ子供が出世するを、草葉の蔭から見やしやんしたら、大抵の喜びではあるまいし。それに越した追善供養もあるまい。エヽ、どうぞ金が欲しい。質屋へ行て色紙を取戻したい。と云うて半時や一時に、どう才覺がならうぞ。エエ、夫へ色紙を渡したいばつかりに、鶴の粟を拾ふやうに、心を碎き身を凝らして、僅かに溜めた金さへも、取られてしまひ、詮議せうにもどうせうにも、情ないこの鳥眼。エヽ、どうぞ今宵ばかり目が見えてくれぬか。夜明けの鐘は鳴らぬか。二百兩の金は出來ぬか。エヽ、手詰めとなつたこの金。申し天道樣、どうぞ貸して下さりませ。金は降らぬか。エヽ、こりやマア、どうせうぞいなア。

　トおまつ鏡を持ち、側へ行て

まつ　コレ、母樣、其やうに金が要るなら、わしが云ふ通り、この鏡を金にして

富吉　もう泣きやんで下されいなう。

　ト兩方より取りつく。おせん、こなしあつて

せん　ヤア、なんと云やる。この鏡を金にして。

二人　アイ。

せん　鏡を金に。

二人　アイ。

　トおせん、思ひ入れ、少しキツとなり

せん　オヽ、それよ。鏡は女の魂ひ、又は神の形にも象り善惡邪正を晴らし明らむる神の正體……ほんに思ひ出した。小夜の中山にて無間の鐘を撞けば、金銀財寶心の儘となると云ふが、例へ道は隔つとも、一心を籠めて打つものならば、石にもあれ土にもあれ、夫の爲、我が子の爲になるならば、女の念力、通らいでならうか。

　ト櫻の木へ探り寄り

この刀の切尖に、殘る血潮は夫の魂ひ。この鏡が女の魂

ひ。相合する夫婦一體。金氣同性を相求むる。鏡は元より釣鐘の突座。無間の鐘の音はなくとも、忠臣貞女の誠を照らし、大願成就なさしめ給へ。申し、天道様、無間の鐘、未來の夫、子供の爲に捨てるこの身。未來は奈落の底に沈み、蛭の地獄に苦しむとも、いとはぬ／＼。大事ない。三千世界の溝川にすたれる金、一つ所へ集めたび給へ。南無無間の鐘さま／＼。

ト鏡にて櫻に括りし刀を叩く。ゴンと鳴る。

せん　ヤア、今の鐘は。

二人　鐘が鳴つたか。

せん　淺寺の曉、鐘の音色か……但しは天道憐れみ給ひ、願ひの叶ふ印か。南無無間の鐘さま／＼。

ト頻りに打つ。鐘鳴る。ト明け六ツの半鐘打つ。雨車になる。櫻花凄まじく散る。十兵衞、上にて慄ふ。金落ちる。合ひ方烈しくなる。

二人　ヤア、金が降つたわいなう。

ト拾ふ。

せん　ナニ、金が降つた……ヤア、夜が明けた。忝ない。

ト鏡に映る。十兵衞を見て

ヤア、其方は十兵衞。

十兵　見付けたら百年目ぢや。

ト飛び下り、切つてかゝる。立廻りあつて、始終雨車にてタテのうち、十兵衞の懷中より色紙を引出し

せん　これは。

ト十兵衞、引ッたくり、立廻りあつて、しやんととまる。

せん　時雨の色紙と云ふは、後鳥羽院の御製にて、有り難くも帝の宸筆。

十兵　何がなんと。

せん　片しきの衣手寒く時雨つゝ、有明山にかゝる村雲。一むら時雨降り來るは、正しく誠の。

ト立廻り。

十兵　如何にも色紙ぢやが、見事取るかよ。

せん　取つて見せう。

十兵　なにを。

ト立廻りにておせん、危ふくなる。子供二人支へる事、いろ／＼あつて、よき所へ兵庫、ツカ／＼と出て、十兵衞が持つて居る色紙を取り、見事に投げる。

せん　ヤア、あなたは。

兵庫　女の貞節、天晴れ出かした。ソレ、時雨の色紙。

ト捲る。おせん、取つて。

せん　これは。

兵庫　それを功に、子供が生先。

せん　エ、、忝ない。

ト十兵衛、起きて兵庫へ切つてかゝる。立寄つて手を捻ぢあげる。おせん、右の金を集め

せん　申し、このお金は。

兵庫　それも別れし弟が筐。

せん　そんなら此まゝ。

兵庫　本國諏訪へ。

せん　兵庫さま。

兵庫　早う行け。

ト十兵衛を投げる。おせん、子役を連れ、向うへ入る。

幕

四段目　木曾兵衛内の場

役名＝＝薗原伏屋之助。九重姫。花守り木曾兵衛　實ハ六郷主膳。輕井澤右衛門。入江逸八。本所三平。爪の太九郎。同妹、小糸。土手の銅鐵。奴、有平。飛脚、早助。花守り大作。同弟、都市。同女房、おます。同一子、大次郎。稲田東藏。

造り物、平舞臺、見付け、赤壁納戸口、上の方に折り廻し中二階。いつもの所に門口、屋がゝりの方に又塗垂れ門口、隣の心にて、舞臺前一面に欄、花道の角、板橋にて殘す。杜若、花見事に所々にあり、幕の内より本舞臺に花守り木曾兵衛、紙子仕立て、親仁の形にて莨盆抱へ、稽古の指圖をして居る。入江逸八、本所三平、輕井澤右衛門、兵法の門弟にて、逸八、大作の子大次郎、竹刀打ちの見得。橋がゝりの方、太九郎、門に積んである道具を一つ／＼内へ入れて居る。見得双方よろしく百萬遍の念佛。在郷唄にて、幕明く。

木曾　ソリヤ／＼、孫よ、其所を付け込んで行かねば……太刀先がエ、こまるわいやい。

大次　合點ぢや／＼。ヤア。

逸八　ドツコイ。

ト仕合ふ。

太九　エヽ、忌々しい。おれには道具を運ばしやアがつて、妹めは何してけつかるしらん。

三平　先生、奥には百萬遍がござるが、今日は御法事でもなされまするか。

木曾　イヤ、ちつと志しの日でござるから、それゆゑ念佛を勤めまする。

澤右　左樣ならば今日は、稽古は休みませうものを。

木曾　イヤ、大事ござらぬ。隨分出精にお出でなされ。ツイ上達でござります。

ト太九郎、此うち、始終出入りあつて

太九　妹めは何をしてけつかるしらぬ。もう船は着いた筈ぢや。

トぼやいて道具を内へ持つて入る。此うち、逸八、大次郎に竹刀打ち落される。

大次　祖父樣、ぼんが勝つた／＼。

澤右　オヽ、天晴れ／＼。流石は先生の孫でござる。

逸八　小坊主と侮つて、思はぬ後れを取りました。

木曾　父に聞かしたら喜ぶであらう。爰へ來い／＼。

逸八　して、先生、御子息方は何所へござつたな。

木曾　イヤ、大作は畑へ參ります。弟都市は寺詰りをしてござります。

ト向うより、太九郎妹小糸、世話娘にて、鏡立と櫛箱を持つて出て

小糸　此方の内はモウ爰か知らぬ。

ト其所らを尋ねる。

太九　ヤイ／＼、妹、今まで何をしてけつかつたのぢや。

小糸　嬉しや、爰かいなア。

太九　爰かいなどころか、何ゆゑ早う來て手傳はぬのぢや。

小糸　それでも、やう／＼船が今來たもの。

木曾　この上は三平どのには、昨日教へた竹刀を。

三平　成る程、澤右衞門どの、お相手になつて下され。

澤右　如何にも參りませう。

太九　サア、この葛籠と、がらくたで仕舞ひぢや。今日家移りぢや。粥を早う炊きかけ／＼。

小糸　何を云はしやんすやら。月に十五度程づゝ宿替へする家ぢやもの、家移り粥を炊かいでも、大事ないわいなア。

太九　そんな起緣の惡い事を吐かすまい。

小糸　それでも嘘ぢやない。

再演の絵番附

太九　おれも宿替へを商賣のやうに、したい事はなけれど、すつきり金に責められるに依つておぢや。初手は江戸に居たが、段々宿替へして、たうとうこの三河の國へ來たが、また何所へ行かうやら知れぬ。

小糸　サア、わたしもちつと心當りがあるに依つて、始終付いて廻るものゝ、そんな事を門中で云ふものかいなア。

太九　なんの構ふ事がある。サア／＼、もちつとおぢや。手傳うて、入れてしまへ／＼。

ト念佛責めになり、小糸、手傳ひ、太九郎、道具を段段内へ入れる。三平、澤右衞門、いろ／＼立廻りあつて納まる。木曾兵衞、褒める。太九郎、道具入れしまふ。

太九　これから内を片付けにやアならぬ。妹、來い。

ト内へ連れて入る。願以志功德になり、納戸より、大作女房おます、世話女房にて襷がけにて出て

ます　申し、舅樣へ申し上げたうござんす。燒香をさしやんせいと、同行樣方が呼んで、ござんすわいなア。

木曾　ほんに、大事の御主人、イヤ大作の母親、死んだおれが女房の命日。成る程、燒香せにやならぬ。

逸八　先生、私しどもは、もうお暇申しまする。

木曾　ハテ、もつと稽古なされませいで。

三平　イヤ、今日はお取込み。

澤右　また明日ゆるりと仕ります。

ます　左樣ならあなた方に、お歸りなされますかいなア。

三人　お暇申します

木曾　ようお出でなされました。

ト三人、橋がゝりへ入る。

大次　母樣、坊も奧へ行かう。

トおますに取りつく。

ます　オヽ、わが身の爲にも大事の祖母樣の日。燒香さしませうわいなう。

木曾　兄貴どもは、早う戻りはせいで。

ます　こちの人も、弟御都市さまも、もう戻つて見えませうぞいなア。

木曾　そんなら嫁女、奧へ行きませう。孫も來い。

ト大次郎を連れ、おます、木曾兵衞、奧へ入ると、在鄕唄になり、向うより大作、鍬をかたげ、百姓の形。都市、着流し、やつしにて、齋米を持つて來た風呂敷、をかたげ、連れ立ち出て來て

大作　弟、わが身は寺へ、齋米持つて行きやつたか。
都市　親仁樣の云ひ付けで、齋米を持つて寺へ參りました
が、兄貴、お前、いま畑から仕舞うて戻りがけかいな
ア。
大作　今日は母者人の命日、親仁樣が氣を付けて、念佛を
勤めて下さりますを、家に居て手傳はうとも思へど、危
ない世帶、ちよつとの間も油斷がならぬわいの。
都市　ア、、昔は歷としたお侍ひなれど、今は其やうな下
働らき。どうぞお前を歸參さすやうにと、わしや及ばず
ながら、常住その事ばかりを。
　ト思ひ入れあつて
大作　これはしたり、又おれが事を苦にするわいの。この
大作は、元の侍ひにならいでも、親仁樣やわが身と皆一
緒に無事に暮らせば、働らき甲斐があると云ふものぢ
や。
都市　兎角、儘にならぬが浮世ぢやなア。
大作　ハテ、又そんな事を。イヤ、親仁樣が定めて待つて
ござるぢやあらう。サア、おぢや〳〵。
　ト兩人、本舞臺へ來て内へ入る。大作、鍬を片付け、
　草鞋を解く。都市も片足の草鞋を解きにかゝるを、大
　作、留めて
弟、何するのぢやぞいなう。
都市　サア、お前は草臥れて居やんせうと思うて。
大作　ハテ、なんの、おれが手に脫ぐが勝手ぢやわいの。
都市　ア、、脚絆の跡が喰ひ入つてある。
　ト足を擦る。
大作　これはしたり、大事ない、構やんないの。
　トこちらへ來る。
都市　兄貴、少し肩揉んでやりやんせう。
大作　イヤ〳〵、わが身もおれが事構はずと、寺詣りの草
臥れ、少と休んだがよい。
　ト莨盆取つて來て宛がふ。大作、こなしあつて
弟、わが身は日頃からの志し、それ程まで……ア、、く
すぼるかして煙たうてならぬ。
　ト眼をさすり。莨のみ、都市もこなしあつて
都市　イヤ、兄貴、藪から棒な事なれど、わしやいつぞや
はお前に尋ねうと思うて居ました。これまで折がなかつ
たが、幸ひ今ちよつと尋ねます。この都市が渡したと云
うて、親仁樣から、何ぞ受取らんした物があるかえ。
大作　ムウ、わが身がおれに渡してくれいと云うて、親仁

様の手から
都市　お前に渡さつしやつた物があるかえ。
大作　そりや、いつ時分の事ぢや。
都市　もう大方、小一年にもならうか。
大作　何を云ふやら。弟とした事が、一年にもなる事を。
都市　イヤ、改めて尋ねにやならぬ大事の事。
大作　そりや、マア、何を渡して置いたぞいの。
都市　サア、それは少と云ひ兼ねる。
大作　なんぢやあつた。
都市　折角わしが…　イヤ親仁様が……よもや……ハテ、面妖。
　ト　こなしあつて、奥よゝ。
木曾　皆、もそつといるりとさつしやりませ。
皆々　いかい御雜作でござりました。
　ト木曾兵衛、捨ぜりふ。その外皆々同行にて出る。
都市　これは親仁様。
大作　同行のお衆、もうお歸りなされまするか。
同行　オヽ、これは兄貴の息子どの。
木曾　大作都市、いま戻つたか。
兩人　やう／＼只今、歸りましてござります。
木曾　もつと早う戻りはせいで、念佛ももう勤めてしまうた。
皆々　いかいお雜作になりました。
同一　そのお雜作ゆゑ、肝心の同心者の鋪鐵は、醉ひ潰れてしまうたわいの。
同二　あの坊主め、滅相な。あのやうに酒を吞むと云ふ事があるものか。
皆々　一向性根が付かぬわいなう。
同三　イヤ、大事ござらぬ。奥の片隅に蒲團着せて寢せて置きましたれば、追ッ付け醉ひが醒めたら去なれませう。
同四　ほんに、益體もない坊主ではある。おいらも同心者と一緒に、醉ひ倒れぬうち、もう去にませうかい。
同五　さうしませう。木曾兵衛どの、今日はよう勤めさつしやりました。
皆々　もう去にませうわいの。
木曾　ハテ、去なしやるか。御苦勞でござりました。
大都　ようお出でなされました。
皆々　いかい御馳走になりましたわいの。
　ト皆々ワヤ／＼云うて橋がゝりへ入る。

木曾　志しの今日の念佛、勸めてしまうて、胸がさつぱりとした。
都市　イヤ、申し親仁樣、お前、わしが頼んで、兄貴に渡して下さりませと云うて渡して置いた物を。
大作　ハテ、弟とした事が、なんぢや知らぬが、それを今親仁樣に。
都市　アイ、尋ねにやならぬ大切の事。ソレ、この春わしがお前に、渡しました物を、兄貴に渡しては下さりませぬか。
木曾　ムウ、都市、そりや何ぢやあらうぞい。
都市　ハテ、大枚の……サ、ソレ、江戸に行た時、持つて戻つた、彼のナ。
木曾　エヽ、淺草海苔か。
都市　なんのマア、大枚の、エヽコレ、お前は覺えさつしやりませぬかいな。
木曾　サア、年寄りと云ふものは、とんと覺えがない。
都市　アノ、わしがお前に。
ト大作が居るゆゑ、云はれぬと云ふ心で
こりや、とつくりと申します。
大作　オヽ、さうしたがよい。大方又なんでもない事であらうが、兎角病のやうに氣にかけて、エヽ、正直な者ではある。
木曾　イヤ都市、わりや、おれが云ひ付けた通り、寺へ齋米を渡し、書いてやつた戒名の事、よう弔うて下されと頼んで戻つたか。
都市　そりやよう頼んで戻りましたが、親仁樣、あの書いておこさつしやりました、堂覺院殿角入居士と云ふ戒名は、誰れがのでござります。
木曾　サ、それは……イヤ、ちつとおれが遁がれぬ佛の戒名ぢや。
大作　イヤ、親仁樣、今日は私しが死なれた母者人の命日。念佛まで勸めて下さります忝なさ。自體この大作とは生さぬ仲。
木曾　大作、其方は死んだ女房の連れ子。また都市はおれが先妻の事なれば
都市　義理ある弟と思うて、兄者人の日頃のお志し。
大作　お屋敷を勸めて居たこの大作。前の名は平柳銀兵衞。この身の越度で主人の御勘當。國へ戻れば母者人は、この家へ嫁入り、尋ね來て親子の名乘り。
木曾　その時の婆が遺言。ほんの悴同然に思うて居る兄の

大作。
大作　親仁樣のお世話、弟が孝行。
都市　親となり、兄弟となるも
木曾　深い緣ぢや。こんな事云や、氣に隔てが出來る。兄貴ともに奧へ來て、燒香せぬか。
都市　ほんに兄貴、一緒に。
大作　イヤ、おりや畑から持つて戻つた物を供へ申せば、爰で揃へて、後から行かう。
木曾　そんならさうせう。サア、弟の都市。
都市　親仁樣、お前、今の事を、とつくりと思ひ出して下さりませ。
木曾　ハテ、搗てゝ加へて、マア、奧へ來いやい。
ト木曾兵衛、都市、奧へ入る。大作、殘り、こなしあつて
大作　親仁樣、弟も、もう其所へ參ります、
ト合ひ方になり、思ひ入れあつて、あたりを窺ひ、表の疊を上げる。下より、薗原伏屋之助、九重姫、出る。
大作　若殿樣、九重姫さま、御兩所ともに、さぞ御退屈にござりませう。

伏屋　勘當請けやつた以前の家來、平柳銀兵衛、本國の騷動より、立退いた伏屋之助、思はず其方に巡り逢ひ
九重　自ら諸ともこの家へ來て、其方の情にて
伏屋　人目を忍び段々の世話。
九重　忝なうござるぞや。
大作　勿體ない。なんのお禮に及びませう。以前の御家來の私し。若氣の至りに、お納戸金を遣ひなくせし越度にて勘當請け、どうぞ元の身の上歸參をと存じまして、この春も江戸表、深川の八幡で、ちよつとお目にかゝり、お願ひ申しました通り。その所にお家の騷動、殿樣の御最期、寶の紛失。これも惡稀田東藏、それに與みする伯父御圖書どのの惡事ゆゑ、思はぬ御兩所の御流浪。お氣遣ひなされますな。追ッ付け寶も詮議仕出し、及ばずながら薗原のお家の、立ちまするやうに仕ります。
伏屋　サア、その一言が伏屋之助が力。
九重　この上ながら、よろしきやうに賴むぞや。
大作　イヤモウ、必らずお案じなされぬがようござります。
ト此うち、向うより、有平、三度笠を持ち、旅の形にて出る。

有平　樣子を聞けば、今は花守り大作どのとやら。大方あの家がさうであらう。

ト本舞臺へ來て、門口より

頼みませう〳〵。

ト戸を叩く。大作、こなしあつて、ちやつと、二人を疊の下へ入れ、元のやうにして

大作　アイ〳〵、なんぢやな。なんでごんす。

ト戸を開ける。

有平　率爾ながら、この家は大作どのと申すか。

大作　イヤ、大作と云ふはおれ。マア、こなさんは。

ト顔を見て

有平　ヤア、平柳銀兵衞どの。

大作　蓑野兵庫どのゝ御家來、有平どの。

有平　銀兵衞さま。

大作　これはしたり。

トこなしあつて

マア〳〵、これへ。

有平　嬉しや、たうとう尋ね當りました。

ト兩人、よろしく直る。

先づは銀兵衞さまにも、御健勝の體、おめでたう存じまする。

大作　イヤ、この身の事より、樣子を聞きたいお家の騒動。定めて御家老兵庫どのにも、

有平　晝夜とも、その儀ばかりに主人の御辛勞。

大作　そりや推量いたして居るが、有平どの、こなたには又、何ゆゑこの銀兵衞を。

有平　尋ね參りましたは主人の御用。

大作　蓑野兵庫どのより、勘當の身の銀兵衞へ。

有平　仰せ越されしその仔細は、コレ。

ト捕り繩を拋り出し渡す。

大作　こりや、捕り繩。

有平　先達てより主人兵庫へ、こなた樣の越度、勘當の身のお詫びに御内意、仰せ越されど、一つの功立たねば、お取上げなき所に、この度のお家の騒動。主人の仰せは平柳銀兵衞へ、まこと蘭原家の舊恩を忘れぬものならば、御勘當の詫びに、功を立つるは今この時とあつて、即ち拙者めを御内意のお使ひ。

大作　例へお家は沒落しても、御恩を忘れぬ昔の銀兵衞。兵庫どのゝ仰せなくとも、何卒一つの功をと存ずる胸中。いま花守りの大作となつて、この在所に住んでも、

魂ひは持らぬ以前のお侍ひ。
有平 それ承れば拙者も安堵。
大作 兵庫どのより功を立てよとあるこの捕り繩。ム、ウ、さては盗賊稲田藤蔵を。
有平 イヤ、左様ではない。當春江戸深川の八幡にて、若殿伏屋之助となつて、云ひ號けの姫君九重さまと、内祝言の上、御朱印と色紙を取替へし、似せ者の若殿は騙りの正銘。尤も伯父御圖書どのゝ計らひと承れど、若殿になる騙りは本人。即ちこの三河の國の者とやら。それを捕へて詮議すれば、御朱印の在所知れる道理と、主人の仰せ。銀兵衛さま、こなた樣には當國の御住居、土地の案内御存知の上は、若殿になりし騙りめを、吟味あつて繩を打ち、御朱印の御詮議、これが一つの功にもと、心付きたる萬野兵庫。大殿に成り代り、御勘當赦せば歸原の御家來、平柳銀兵衛との仰せでござります。
大作 ムウ。すりや、當春深川八幡にて、若殿伏屋之助さまになつて、云ひ號けの九重姫さまと、祝言した騙りめを、詮議して繩かけよとある兵庫どのゝ仰せ。
有平 即ち騙りの住居は、矢張りこの三河の國。
大作 草を分けて詮議仕出し、若殿になつた騙りめを、繩にかけて御朱印の詮議いたさう。
有平 すりや、御承知あつて。
大作 一つの功を立てる所存。
有平 然らば拙者は。
大作 イヤ、まだ兵庫どのへ内意もあれば。
有平 暫らく奥へ。
大作 同道いたさう。
有平 銀兵衛さま。
大作 有平どの、マア、ござれ。

ト唄になり、大作、有平、こなしあつて、奥へ入る。

隣の家より

小糸 エヽ、ずんと行きやんすわいなア。

ト門口へ出て

如何に妹おやと云うて、無理ばつかり云うて。やう〳〵今日宿替へして來て、まだ近付きにもならぬに、隣へ行て糸繰借つて來いの、鍋借つて來いのと、人をけん〳〵云うて叱つてから。めんめが行て見たがよい。大抵行き憎いものぢやござんせぬわいな。

トいろ〳〵ぼやき、こなしあつて

アイ、お許しなされて下さりませ。

トこちらの家へ入ろ。

ハイ、私しは隣の者でござんすが……これはしたり、内方にはどなたもござんせぬさうなわいなア。

ト奥より

都市　アイ／＼、イヤ、わしが行きまする。

ト出て

申し、女中さん、なんの用でござります。

小糸　イヤ、わたしや隣へ宿替へして参じました者でござんすが、御無心ながらちいとの間、内方にお大切の物でござりませうが、御無心ながら金槌と鋸を、お貸しなされて下さりませうならば

ト云ひ／＼都市と顔見合せ

ヤヽ、お前は。

都市　ヤア、こなたは。

小糸　伏屋之助さま。

都市　九重姫さま。

小糸　でもマア、思ひがけない。

都市　さうぢや。

ト奥へ行かうとするを、小糸縋り付き

小糸　マア／＼待つて下さんせいなア。

ト留めるを振り切り

都市　この形を見られては。

ト振り切り、行かうとするを又留める。

小糸　殿様。エ、胴慾な。わたしやま一度逢ひたさ、兄さんの宿替へさしやんす先々へ付いて行くも、お前様に逢ひたいばつかり。今日隣へ宿替へして來て、思はず爰でお目にかゝるは。

都市　イヤコレ、九重姫どの。

小糸　エヽ。

都市　合點のゆかぬ。都攝津宰相公の御息女が、その形と云ひ、隣へ宿替へして來たとは。

小糸　サア、それはな。

都市　ムウ、聞えた。さてはこなたは姫と云うたは。

小糸　アイ、嘘でござんすわいなア。

都市　ヤア。

小糸　お前も、そのお姿、伏屋之助さまと云はしやんしたは。

都市　イヤサ、それは

小糸　嘘でござんすな。

都市　ア、コレ。

ト合ひ方になり、引き廻し、こなしあつて
人が聞いては、互ひの身の上ぢや。
小糸　こちやそんな事は構やせぬわいなア。お姫樣になつ
たは嘘でも、祝言はほんまにして、どうぞわたしとな。
ト思ひ入れあつて、都市もこなしあつて
都市　ムヽウ、そんならこなさんは。
小糸　アノお前に。
都市　ヤ。
小糸　惚れましたわいなア。
ト思ひ入れあつて
都市　ムウ。さうして、こなさんの誠の名は。
小糸　小糸と云ふわえ。
都市　ハテ、小糸どのぢやなア。
ト奥より。
木曾　都市々々、都市は何所へ行た。
都市　アレ、親仁樣が呼ばつしやる。
ト奥へ行かうとするを小糸また留めて
小糸　申し、お名の名は都市さんと云ふかえ。
都市　ヤ。
小糸　いま呼ばしやんしたは親仁樣ぢやな。

都市　サア、それは。
小糸　どうぞわたしが云ふ通りに。
都市　戀は諸道の妨げ。どうもそんな事は。
ト振り切り奥へ行かうとするを
小糸　そんならお嫌かえ。
都市　サア、嫌ではなけれど、今はどうも。
小糸　ならねばわたしも。
ト身繕ろひして行かうとするを都市留めて
都市　こりや何所へ。
小糸　蘭原伏屋之助さまと云ふは、この家の都市さんでご
ざんすと云ふ事を、こちや兄さんに云うて、ソレ、殿樣
の所へ云うて行てもらふわいなア。
都市　コレ〳〵、それを云うて行くと、九重姫と云うたは
小糸と云ふ事は知れるぞや。
小糸　徒川の先に流るゝとちからも、身を捨てゝこそ浮む
瀬もあれ。
都市　すりや、おれが戀を叶へねば。
小糸　似せ者の事が顯はれて、殺されると云うても、お前
と一緒に死ねれば、せめてもの本望でござんすわいな
ア。

都市　アノ、それ程まで、おれが事を。
小糸　殺の契りも百歳の命。ちよつと見初めて惚れました
が、因果でござんすわいなア。
ト都市、こなしあつて
都市　ハテ、味に縺れたこの場の出合ひ。
小糸　江戸で別れて爰で逢ふは、矢ッ張り縁のあるのぢや
もの。
都市　縁のあるどころか、色男はないかや。
小糸　なんのマアわたしに。
都市　濡れの利く娘盛り。得て巧う持ちかけて置いて、サ
アと云ふ段になると、不義者見付けた、其所動くななど
と云ふやうな事であらうなう。恐ろしや。怖やなう／＼。
小糸　エヽ、づんとモウ、そんな事ぢやござんせぬわいな
ア。
ト側へ寄る。都市、身を反け、前の濡れを見て
都市　誰が教へねど雨露の、恵みを受けてその時々を違へ
ぬは、草木に心なしとは云はれぬわいの。
小糸　ほんに美しい花の盛り。
都市　こりや、この國の名所の杜若。
小糸　杜若。

都市　杜若。
小糸　必らずともに。
都市　キッと約束すれば。
小糸　ツイの縁ではないものを
都市　初めて爰で
小糸　互ひの固めは。
都市　コレ。
ト小紫めいたる唄になり、兩人、こなしあつて立別
れ、杜若の一本づゝ取つて來て一緒に合せ、
二世紫のこの一本。
小糸　色香も深い杜若。
都市　斯く取替ゆれば。
ト互ひに花を取替へ
小糸　昨日まで、餘所に思ひしあやめ草、今我が宿の妻と
見るかな。
都市　蕾みの花は起證のかせに。
小糸　必らずともに、
都市　濡れぬ先こそ露をもいとへ
小糸　神かけて
都市　二世も三世も

小糸　女夫かえ。
都市　女夫ぢや。
小糸　ほんまに。
都市　眞實。
小糸　オ、嬉し。
ト小糸、都市にひつたり抱きつく。この時、木曾兵衛
奥より、ツイと出て
木曾　オ、都市、爰に居るか。
ト出る。兩人、恟り。都市、其所にある竹刀を取り
都市　ヤア。
ト身構へする。木曾兵衛、見て
木曾　都市、そりや何をするのぢや。
都市　エ、。
木曾　見れば見馴れぬ女中ぢやが、こなたは誰れぢや。
小糸　ハイ、わたしは。
木曾　何所から來た女中ぢや。
都市　エ、、イエ〱、あの人は隣へ宿を替へて見えまし
た、相長屋でござりまする。
木曾　エ、、隣へ宿替へて來たお人か。
小糸　アイ〱、御近所でお喧ましうござりませう。

木曾　その女中が、何しにござつた。
小糸　サア、それはな。
都市　ア、、それは、なんでござります。アノソレ、オ、、
習ひに見えました。
木曾　何を習ひに。
都市　兵法を。
木曾　ヤ。
都市　なんとマア、女中にしては、好い心がけではござり
ませぬか。
木曾　エ、、それで今のヤアぢやな。
ト竹刀打ちの眞似する。
都市　イヤモウ、初心とは見えませぬ。餘ツぽどの手者で
ござりまする。サア〱、ま一遍やりませう。
ト竹刀を小糸が側へやる。小糸、竹刀を取つて
小糸　アイ、モウわたしやモウ、兵法がきつう執心でござ
んすわいなア。申し、必らず共に今の。
ト云はうとする。
都市　ア、、コレ〱、さう構へては危ない。兎角兵法と
云ふものは、一眼二足と云うて、目を利かすが大切ぢ
や。目を利かすがナ。

ト木曾兵衛を数へる。小糸、呑み込み

小糸　アイ／＼、よう覺えましたわいなア。

木曾　見れば若い女中ぢやが、若い者を捉へて、ハテ、兵法ぢやよなア。

ト莨盆持つてこちらへ來る。

都市　ヤア、。

ト竹刀を構へ、こなしある。この時、隣の家より、太九郎、出かけ

太九　妹めは何をして居る事ぢや知らぬ。棚を吊らさして待つて居るのに、彼奴に物を云ひ付けると、何時でもこれぢや。

トぼやき／＼、スツと内へ入る。

ハイ御免なりませう。私しが所の妹めは

ト小糸を見て

オヽ、爰に居るか。

ト小糸、矢ッ張り竹刀を構へて出て

小糸　ヤア、。

太九　そりや、何するのぢや。

小糸　サア、こりや兵法ぢやわいなア。

太九　なんの事ぢや。

木曾　アヽ、そんならこなたは。

太九　ハイ、お隣へ參つた者でござります。

都市　アヽ、そんならお前が。

小糸　わたしが兄さんぢやわいなア。

太九　妹、あなたは誰れぢや。

木曾　こちの息子でえすわいの。

太九　これはしたり、そんならあなたが。

都市　お隣の。

ト云ひ／＼顔見合せ、恟りして

太九　ヤア、われは。

都市　こなさんは。

太九　慥かに

都市　深川の八幡で

太九　その時の若殿か。

都市　その時のお侍ひか。

太九　その形。

都市　その形。

太九　譯を糺したら金の蔓に。

ト都市にかゝる。木曾兵衛、太九郎を突き廻し

木曾　コリヤ、何さつしやる。

太九　イヤ、騙りの目論見、その詮議を。
木曾　ヤ。
都市　コレ、粗相云ふまい。此方に詮議があれば、こなたとも。
小糸　兄さん、人の七難より我が身の十難。
太九　ヤ。
都市　妹を姫に仕立てた、サ、こなたの心。
太九　此方が云へば
都市　此方が云ふ。
小糸　それぢやに依つて、マア兄さん。
木曾　ハテ、こりや水の流れと人の行くへ、何所で巡り逢ふやら知れぬが浮世。なんぢや知らぬが、云ふ事も聞く事も、壁一重隣り同士。何時云はうと儘ぢやないか。ナウ、隣の。
小糸　アイ／＼、さうでござんす。兎角云はぬが樂しみ、見ぬが花とやら。ナ。この花をわたしや、大事にしますぞえ。
　ト都市へかける。太九郎、こなしあつて
太九　こりや、モウ、腰据ゑてとつくりと、糺さにやならぬわい。

木曾　ハテ、近所の事なら何時なりとも。
都市　留めて置いて、此方も聞かにやならぬ。
太九　云はさにやならぬ。
木曾　コレ、マア、ゆるりと話したがよいわいの。
　ト奥より
ます　イヤ／＼、云はしやんせ／＼。
大作　阿房め、コリヤ、どうするのぢや。
ます　マア、ござんせいなア。
　ト納戸より、おます、大作を引ッ張つて來る。大次郎も付いて出る。
木曾　これはしたり、また女夫喧嘩か。マア、何から起つた事ぢや。
大次　祖父様、怖いわいの。
木曾　オヽ、大事ない／＼。
ます　大次郎、サア、云はぬかいやい。
大作　なんぢややら、とんと氣狂ひでござります。
ます　アイ、わたしや氣狂ひぢやわいなア。
都市　おますさん、どう云ふ譯ぢや。マア、その譯を。
ます　譯と云ふはこの簪。コレ坊、誰れに貰やつた。まア一度云うて聞かしや。

大次　アイ、その簪は、結構な〴〵着た小母様に。

大作　コリヤ。何吐かす。

ます　サア、お前が覺えがござんせう。この簪の出所を、云はしやんせ〳〵。

ト胸倉を取る。

大作　見苦しい。コリヤ、何するのぢや。

ます　イヤ、それでも金輪際、聞かにやならわわいなア。

太九　マア〳〵お內儀、待つたがようごんす。

小糸　好い仲の戀諍ひは、ある事ぢやけれど。

都市　それ〳〵、なんぢやあらうと

太九　おれが挨拶ぢや。

小糸　マア、堪忍をなさんせいなア。

ト此うち、大作、二人を見て

大作　貴樣達は誰れぢや。

木督　イヤ、隣へ宿替へして來た人ぢや。

ます　アノ、お前も。

都市　兄弟ぢやさうにござります。

ト太九郎、簪を取上げ

太九　こりや、重ね扇の紋所。

大作　ハテ、隣のこなたが構ふ事はない。

ト引ッたくる。

太九　こりや、どうやら分明して來たわい。

トこなしあつて、奧より、同心者銅鐵、淺黄頭巾、破れ衣を着て

銅鐵　ヤレ〳〵、醉うた事ぢや。

ト眼を擦り〳〵出て

同行衆は去なれたさうな。

ます　サア、こちの人、今のを云はしやんせ。

大作　エヽ、又しつから。

ます　それでも。

トまた兩人せり合ふ。

銅鐵　アヽ、イヤ〳〵、寢耳に聞いた女夫喧嘩。なんぢやあらうと、愚僧が貰ひぢやに依つて、

ト生醉ひ心にて大作おますが中へ入る。

大作　イヤ、同心者の知つた事ぢやない。すッ込んで居や。

ト銅鐵を見て

ヤア、われは。

銅鐵　ヤア、おのれは。

大作　深川で取逃がした
銅鐵　その時の豆腐屋め。
大作　騙り仕掛けた乞食坊主。
　トきつとなる。
木曾　ムウ、さてはこれも近付きか。
大作　近付きの段か、ハレ、よい所へうせたなア。
銅鐵　ハレ、悪い所へ、こりや來たわい。
太九　何にもせよ、重ね扇の簪……この家にあるからは、
　この坊主めに。
　ト大次郎を引立てるを大作、突き廻して
大作　コリヤ、何する。
太九　今の簪の出所を、この子倅に詮議するのぢや。
　トまた行くを、大作引き廻す。小糸、太九郎を留め
小糸　コレ兄さん、調べて見ると此方も身の上。そんな事
より、わたしや眞實アノ
　ト都市を見る。
都市　ア、コレ、底を割つては物がないぞ。
ます　どうやら訝しうなつた簪の出所。
太九　それを詮議すれば、大枚の金。
　トこの前より有平、出かけ

有平　銀兵衞さま、詮議の手筋が分りましたか。
大作　ムウ、有平どの。
木曾　そんならこなたも。
有平　藺原家の浪人者。
皆々　ヤア、。
　ト銘々心々に思ひ入れあつて
木曾　すりや、こなたは。
有平　手前の若殿になつて、祝言したる騙りの詮議。
都市　エ、。
　ト思ひ入れあつて
大作　それを功に元の身の上。
木曾　そんなら倅、其方は。
有平　藺原家の家臣、勘當請けた平柳銀兵衞どの。
都市　エ、すりや兄者人は、藺原家の御家臣とな。
太九　その藺原家の由縁で、さては九重姫を、この家に匿
まうて居るのぢやな。
大作　なんと。
太九　詮議は重ね扇の簪、姫が定紋。
銅鐵　姫がこの家に居るからは、伏屋之助も居るであら
う。

木曾　ハテ、變つた詮議をする同心者。
大作　壁一重隣の若い人。
銅鐵　伏屋之助九重姫は、足利よりのお尋ね者。
太九　詮議すれば褒美の金。
銅太　頂かうと思うて
大作　詮議をするのか。
有平　イヤ、その詮議より騙りの詮議。
都市　もしまた騙りの知れぬ時は
有平　銀兵衛どのには一生埋れ木。
大作　イヤ、その詮議よりは、外に思ひ當りし一つの功。
銅鐵　伏屋之助が身の上、代官所へ。
太九　九重姫が在所を。

ト銅鐵は門へ出ようとする。太九郎へ奥へ行かうとするを、小糸、おます、留める。大作、銅鐵を突き廻し

大作　滅多に動かす事はならぬぞ。

ト門の戸ぴつしやり閉す

銅鐵　なんと。
大作　サア、深川で出合つた時、圖書どのに受取つた一品。
銅鐵　ヤ。
大作　サア、その詮議を仕抜かにや置かぬ。
銅鐵　コリヤ／＼、その詮議を仕掛けりや、伏屋之助が詮議を仕抜くぞ。
大作　ヤ。
太九　此方はかけ構はぬ姫の詮議。
小糸　イヤ、その詮議をさしやんすと、わたしが名乘つて出てお前の身の上。
太九　ヤ。
有平　こりや、騙りの詮議をすれば。
ます　若殿樣やお姫樣のお身の上。
有平　ヤ。
木曾　縺れかゝつたこの場の詮議。岡目八目。こりや皆、思案があらう。
銅鐵　成る程、さうぢや。
有平　慥かにそれと知れてはあれど、事を糺せば
大作　此方の詮議。
銅鐵　矢張り身の上。
太九　癇持つ足。
有平　こりや、一先づゆるめて
大作　追つての詮議。

木曾　それがよからう。

ます　そんなら得心して

小糸　云はず語らず

太九　詮議に詮議の枷をかくれば。

都市　マア、何事も後程とくと。

大作　事を糺して

有平　貴殿の返答。

木曾　詮議の落着。

銅鐵　丸う納めた頭役。

大作　非時に參つた同心者。

銅鐵　奥でもちつと寢て去なう。

小糸　兄さん、お前も内へ。

太九　去なざアなるまい。サ、妹め。

ます　こちの人。

大作　有平どの。

有平　銀兵衞さま。

皆々　ムウ。

ト心意氣あるを

木曾　ハテ、マア奥へ。

ト唄になり、皆々こなしあつて、この一まき奥へ入る。太九郎、小糸、橋がゝりの内へ入る。後に木曾兵衞、一人殘り、こなしあつて

木曾　最前よりこの場の仕儀。おれとは生さぬ中の兄の大作は、園原家の家來平柳銀兵衞と、初めて聞いたあれが身の上。ムヽウ。

ト思ひ入れある。ト橋がゝりより、飛脚早助、狀箱持つて出て門口より

早助　花守り木曾兵衞さん、都よりの飛脚。

木曾　コレ。

ト奥へ心を付けて、小聲にて

都の樣子はどうぢや。

早助　委細はこの狀に。

ト狀箱を渡す。木曾兵衞、取つて

木曾　あたりに心を付けやれ。

早助　ハア。

ト奥口へ心を付ける。此うち、狀を讀み〳〵

木曾　こりや、この間上した、金子の受取、稻田東藏にまだ對面せぬと云ふ件が文體……又こちらは。

早助　御返翰がござらば、直さま拙者が。

木曾　イヤ、返事にも及ばぬ。書狀慥かに受取つたと、傳

へ召され。
早助　畏まりました。
木曾　大儀であつた。
早助　然らばその樣子を都へ。
木曾　早う。
早助　ハツ。
　ト早助、橋がゝりへ走り入る。木曾兵衞、こなしあつて
木曾　これまで兄弟の子供をせたげて、調へさした金は、人知れず都へ上す軍用金。これも皆、御主人稻田伊豫之助のさま鬱憤を晴らさせん爲。今日が即ち討死の御命日。當譽院殿角入居士、心ばかりの御追善。ア、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。
　トこなしあつて、向うより、稻田東藏、虛無僧にて、尺八を吹き出て來て、本舞臺、門口へ來て、矢張り尺八を吹く。
ソレ、今日は志しの命日。表の修行者、梵論字に手の内。
　ト立ち上がるを表より
東藏　手の内御無用。
木曾　ヤア。
東藏　報謝を頂く修行者でござらぬ。
木曾　虛無僧の修行、手の内を頂かぬとは。
東藏　今日の命日、花の手の内は、此方より望み次第。
　ト天蓋を取つて内へ入る。木曾兵衞、ヂツと見て
木曾　アノ、こなたは。
東藏　ついぞ逢はねど、噂に聞いた花守り木曾兵衞、百姓の營みに、劍術の指南。流石は昔を忘れぬ天晴れの老人。
木曾　ムウ。今この澤の杜若の番を云ひ付けられ、百姓片手に暮らす木曾兵衞、劍術の指南は好きの道。それは格別、近付きでもない虛無僧どのが、この親仁に手の内入れうとは。
東藏　印可が請けたい。
木曾　ヤ。
東藏　伊賀流の秘事口傳……忍びの術は流儀の極意、いま世に稀れな鍛練覺えし木曾兵衞。その傳授を望みに來たこの虛無僧。
木曾　成る程、忍びの術は、おれが流儀の極意。傳授を望むこなたの本名は。

東藏　立別れ稻葉の山の峯に生ふる

木曾　そりや、美濃の國稻葉山の古歌。

東藏　今日の忌日、志し。

木曾　當譽院殿角入居士。

東藏　報謝の手の內、入れに來た虛無僧。

木曾　ハテ、心あり氣な詞の端。

東藏　傳授いたせば本名名乘らん。

木曾　義を見てせざるは勇みなし。殊に依つては望みの傳授許さん……先づこなたの器量が見たい。

東藏　軍慮智謀は胸中に納め、勇は武士の常。そりや珍らしからぬ事。

木曾　人多き人の中にも人がなく、人となせ人人となれ人。その胸中の智謀、武士の常たる勇氣が見たい。

東藏　一を聞いて十に通ずる我が手の內。

ト松の木へ手裏劍に針を打つ。鳩五六羽落ちる。

木曾　ムウ。戰場にて好き敵と見れば、生捕りにして味方に招くが名將。命を絕つを常とするは愚將の習ひ。仁の道がなうては、四海は納められまい。

東藏　流石の老人、天晴れの一言。

ト鳩を寄せ、針を拔く。こなしにて、三衣袋の米を撒く。鳩直ぐに米を拾ふ。

なんと、これが仁の道……目前の理を解かん。解かば其方が心を計り、勇は梢にとゞまる。翼を眼下に取拉ぎ、仁を施す米穀にて、アレあの鳩の備へこそ、魚鱗鶴翼長蛇の陣取り。斯く智仁勇の三德、その氣に備はるこの虛無僧。これでも傳授を

木曾　イヤ、もちつと許されぬ。

東藏　なんと。

木曾　今の手の內、放下師の品玉同然。三德よりは誠の器量を。

ト有り合ふ竹刀にて打つてかゝる。東藏、立廻りにてしやんと留める。

東藏　イヤ、滅多に無手では望まぬ印可。

ト突き廻し、よろしく立廻り、見得よくあつて、木曾兵衞、竹刀にて拜み打ちに打つてかゝらうとする。東藏、疊を蹴上げる。木曾兵衞、下を見て

木曾　ヤア、この下家に。

ト東藏も見て

東藏　慥かに薗原。

ト寄らうとする所へ、大作、ツカ／＼と出て、兩人を突き廻し、疊をこかし、しやんと上へ乘つて
大作　親仁どの、虚無僧どの。
東藏　其方は何者。
木曾　イヤ、おれが忰。
大作　大作と云ふ者。
東藏　ハテ、健やかな若者。
大作　こりや、マア、何事。
木曾　イヤ、今日の志し、修行者を呼び入れしは。
東藏　手向けの笛竹、回向の爲。
大作　それに疊を上げて、ても仰山な。
木曾　忰、この疊の下には。
大作　イヤ、何もござりませぬ。
木曾　思ひ合せば、重ね扇の最前の簪。
大作　エ、。
木曾　義理ある大作、其方が身の上、おりや何も云はぬ。
東藏　疊の下の兩人が、命を助ける仁の道。
大作　ヤ、なんと。
東藏　小事に拘はらぬ寛仁大度。
木曾　望みの傳授。
東藏　互ひの實名。
大作　云はねどそれと
木曾　沖津白浪。
東藏　伏屋に生ふる
大作　母人の命日なれば。
木曾　共に回向は、あの二階で。
東藏　木曾兵衞、案内。
ト唄になり東藏、木曾兵衞、連れ立ち中二階へ上がる。後に大作、こなしあつて
大作　最前の仕儀と云ひ、今の樣子、御兩所のお身の上。
ト思案する。奥より、有平、出て
有平　銀兵衞さま、先程の御返答はな。
大作　有平どの。
有平　こなた樣の心底、どうも心得ぬ。この家の樣子と云ひ、この疊の。
ト上げにかゝるを大作突き廻し
大作　コリヤ、何するのぢや。
有平　イヤ、疊を上げて、この下を檢めるワ。
ト立廻りにて
大作　ハテ、この下には何も無いぞ。

有平　見せぬ心は、なんでも一物。
大作　ヤ、なんと。
有平　サ、心の知れぬ銀兵衞どの。
大作　すりや、御兩所を。
有平　匿まひあるが誠なら、お供して立歸る。
　ト一々立廻りよろしく
大作　イヽヤ、勘當請けても大切の御主人。滅多に人手に
は渡されぬ。
有平　所を拙者が是非お供。
　ト有平、疊を上げうとする。大作、留める。この模様
にて、トヾ立廻りのはずみに兩人、疊を上げると、ど
ろどろにて、銅鐵、六面の手箱を捧げ出る。
大作　ヤア、其方は。
　ト悔り。有平、銅鐵は目に見えぬ心なり。
銅鐵　平柳銀兵衞、血判せい。
有平　さてこそ御兩所を匿まひしとは、僞はりぢやよな。
大作　ヤ、なんと。
有平　舊恩を忘れ、惡事に與みする平柳銀兵衞。こな人非
人め。
　トきつとなり、大作もこなしあつて

大作　大切な御兩所は、何所へやつた。サ、、、それ吐
かせ。
有平　御兩所とは、何のたわ言。
銅鐵　伏屋之助九重姫は、愚僧が術で入れ替つて、虜にし
た。
大作　ヤア〳〵、それは。
　ト寄らうとするを有平引き廻して
有平　身共を誑かる銀兵衞。この上は其方に繩かけ、主人
へ引く。腕廻せ。
大作　ヤア、有平、慮外であらう。
銅鐵　一器量ある銀兵衞。お頭の大望、その一味に加はり
血判すればその身の活計。
大作　ヤア、穢らはしい一言。薗原家へ忠義の銀兵衞。
有平　忠義でない、不忠の其方。
銅鐵　血判せねば伏屋之助、九重姫が命はないぞ。
大作　サ、それは。
銅鐵　血判するか。
有平　繩かゝるか。
大作　エヽ、コレ、現在うぬは朱印の盗賊。
有平　朱印の盗賊とは、そりや何者。

大作　ムウ。すりや爰に居る賣僧めは、有平其方が眼には。
有平　何がどうした。
大作　すりや、野狐の妙術、手ざしのならぬは、エヽ。
有平　ムウ、さては爰な。
トきつとなる。
銅鐵　ハヽヽヽ、どう惱まさうと、おれが妙術。サア、銀兵衞、得心して血判せねば、二人の命がないぞ。
大作　ムウ。例へ術ある其方でも、忠義の魂ひ。
有平　云ひ譯の種を。
ト兩人、無二無三に切つてかゝる。銅鐵、よろしく立廻つて
銅鐵　けい〳〵きつたしおんらい、さんばら〳〵。
トどろ〳〵にて銅鐵、廻り壁にて消える。
大作　ヤア、銅鐵が姿を消したは。
有平　すりや、この場を立去つたか。
大作　エヽ、無念や口惜しや。
有平　ハテ、殘念至極。
ト兩人こなしあつて、奥より、都市、ツカ〳〵と出て
都市　有平どのとやら、兄者人の返答、この都市に繩かけて引かつしやれ。
大作　ヤア、弟。
ト眞中へ直り、手を廻す。
有平　これは。
都市　サア、この春深川の八幡で、薗原伏屋之助さまになつて、姫と祝言したはこの都市。
大作　ヤア〳〵、なんと。
ト有平、キツとなり
有平　すりや、其方が若殿になつて。
都市　騙りと知つて賴まれたは、申し兄者人、お前を元の身の上、侍ひにしたいばつかり。
大作　そりや又、ド、どう云ふ仔細あつて。
都市　サア、常々のお前のお話し、古主へ歸參は、使ひなくしたお納戸金の償ひと聞いて、ア、どうぞして金子が進ぜたい、金が欲しいと思うたばかり。才覺はなし、殊にお前の御主人を、薗原とは夢にも知らず、この春の騙りの事、賴み手あつて若殿に、まんまと首尾よう、仕負ふせて、褒美に貰うた百兩の金。ヤレ嬉しやと夜を日に次いで國へ戻り、親仁樣を賴んで、お前に進ぜて下され

と渡した金は歸參の足し、せめてはわしが志し、その金も最前聞けば何所へやら。まだそればかりでなく、この流れの盛りの花を切賣りに、人の小遣ひ畑の仕事、鳥おどし猪落し、ねん〱ころりの子守りまで、賃さへ貰へば只はせず、僅かながらも儲けた金は、一錢でも身に付けず、お前の歸參が嬉しさに、親仁樣へ渡しても、その金の行き端も知らず、お前の爲にと思うた事も、惡の報いは針の尖。廻り廻つて弟ゆゑに科に科。わしが名乘つて出ねば、一生お前は埋れ木と、最前有平どのゝお詞、聞くに忍びず、この身の覺悟。サア、騙りの科人は私しなれば、繩かけて、お引きなされて下さりませ。

大作　ムウ、すりや、この兄を歸參させう爲に。

都市　若殿になつた騙り事。名乘つて出れば歸參の願ひ。一つの功は立ちませうがの。

大作　おやと云うて、義理のある其方を、なんと繩がかけられう。矢ツ張りこの身は、此まゝ朽ち果てゝも。

都市　そりや、兄者人、未練にござる。何ゆゑこの都市に繩かけて下されぬ。

大作　弟、義理ある兄を思へばこそ、科人となつた其方を、如何に身共が爲ぢやとて、繩かけて渡すと云ふ義理があらうかいやい。

トこなしあつて、都市、思ひ入れあつて、有平が側へ行て

都市　有平どの、若殿になつた騙りの科人。サア、繩かけて、お引き下さりませう。

ト手を廻す。

有平　ハテ、神妙な志し。如何にも若殿になつた騙りの詮議の爲に、この家へ參つた有平なれど、都市どの、こなたにかける捕り繩はない。

都市　エ、。

有平　サア、銀兵衞どのにお預け申した、此方の捕り繩。いま持ち合さねば、どうも繩がかけられぬ。

都市　そりや、お情の罪科。

有平　科の重きは輕く計らふ。

都市　ヤ、なんと。

有平　主人の兵庫が計らひ。

ト合ひ方になり、有平、思ひ入れあつて、澤邊に立ちたる高札を拔いて來て、その裏へ矢立にてそゝくたな書き

コレ、この通り。

ト見せる。大作、都市、立寄つて
「當春深川八幡に於て、若殿伏屋之助に相成り、寶を騙り
取りたる科人行くへ知れず、この者訴人いたしたる者に
は、褒美は望みたるべきものなり、月日、萬野兵庫」。

都市　サ、それぢやに依つて、この都市に繩をかけて。
有平　イヤ、こなたに繩かける科はない。
都市　エ、なんと。
大作　弟に科はないとは。
有平　尤も、若殿になりし騙りなれど、我れと我が科を名
乘つて出たるは卽ち訴人。
大都　エ、。
有平　おやに依つて、この高札の通り、訴人いたしたる者
には、褒美は望みたるべきものなり。
大作　すりや、この高札の通り。
都市　訴人した望みの褒美は
大作　弟が騙りの科。
有平　褒美に赦すは、自身の科を自身の訴人。
都市　そんならわたしが身の上は。
有平　構はぬは望みの褒美。
大作　有平どの、それでは。
有平　ハテ、薗原家の御家老、萬野兵庫さまの掟は反古に
はならぬ。
大作　エ、忝ないこなたの計らひ。
有平　併し、御朱印の詮議は。
大作　この家へ參つた賣僧の銅鐵。
有平　サア、その詮議を銀兵衞どの、とくと、ナ。
ト唄になり、有平、こなしあつて奥へ入る。後に大作
都市、殘り、大作こなしあつて、都市が手を取つて
大作　弟、騙りの仕儀と云ひ、これまでの志し、なんに
も云はぬ。
ト手を頂く。
都市　エ、、勿體ない兄者人。なんの弟にそのお禮。
大作　天晴れ、兄に生れ優つた其方に、何ゆゑ刀を差させ
なんだぞいなう。
ト木曾兵衞、出かけ
木曾　イヤ、氣遣ひしやんな。弟の都市は、歷とした武士
にして見せる。
大作　エ、、親仁樣。
都市　アノ、わたしを侍ひにするとは。
木曾　コレ、この狀の。

ト最前の狀を見せる。

都市　ナニ〳〵「先達て其方殿へ預け候ふ手前が一子、成人の樣子承り候へば、此方へ引取り、蘭原の家國の跡目に立つる兼ねての計らひ、成就の上は悴儀、早々此方へ御戻し下され、近日迎ひの人數を遣はし申すべきものなり、八ツ橋村木曾兵衞どの、蘭原圖書」。

都市　エヽ、そんならわたしは。

大作　蘭原家の伯父御、圖書どのゝ胤であつたか。

木曾　子で子にあらぬ郭公、幼ない時より預かつて、おれが養育した都市と云ふは、蘭原圖書どのゝ、眞實血を分けた御子息ぢやわいやい。

大作　エヽ、すりや、この弟は。

都市　惡人の圖書どのゝ胤であつたか。

ト大作、狀を取上げ

大作　蘭原の家國跡目に立てん兼ねての計らひとあるからは、すりや、日頃の惡事も、この都市を世に立てん爲であつたか。

都市　さうとは知らず、若殿になつたも圖書どのゝ賴み。

ト此うち橋がゝりより代官、捕り手大勢連れ、門口に窺うて居る。

大作　現在お家の仇は。

都市　假の兄弟。

木曾　追ッ付け迎ひの來れば、大名の都市。即ち蘭原家の若殿樣ぢや。

代官　伏屋之助に紛れない。ソリヤ。

捕手　ハッ。

トばら〳〵入る。

腕廻せ。

ト取卷く。

木曾　ヤア、これは。

代官　足利の嚴命、蘭原伏屋之助は重罪の科人。見付け次第に繩なふてとある仰せ。

木曾　すりや、この都市を、

代官　蘭原の若殿と云うたでないか。

木曾　イヤ、それは。

大作　イヤ、お代官樣、そりや大きな間違ひ。こりや私しが弟、都市と申しまする者。

代官　でも、あの者の詞が正銘。あらがふと

捕手　爲にならぬぞ。

ト十手を振り上げる。

木曾　イヤ、薗原伏屋之助は外に居りまする。
大作　イヤ、申し親仁樣、それでは。
木曾　ハテ、都市は大切の預かり者。あれが身の上に替へられぬ情。
都市　イヤ〳〵、申し親仁樣、例へ私しは出世しても、非道な親の情より、矢ツ張り貧しうても實義のある、お前や兄者人の側は、金輪際放れませぬ。
代官　サア、その伏屋之助を渡すか、此方が縄かけうか。
木曾　こりや申し、今申しまする通り私しが悴。
代官　でも、其方が。
大作　イヤ、誠の伏屋之助、九重姫が首討つて渡しませう。
木都　ヤア、それは。
大作　ハテ、乘りかゝつた不肖。忠義と義理には替へられぬ。御兩所の首討ちまする。
都市　コレ、それでは、こなたが人でなしと。
大作　ハテ、大事ない。イヤ、お代官樣。私しも元は薗原の家來。その由緣で伏屋之助、九重姫をこの家に匿まひ居りますれど、所詮賴み甲斐なき家の沒落。二人の首討つが身の安堵。何卒お代官樣のお情にて、

代官　容赦いたせば、兩人の首討つちやまで。
大作　キッと討つて差上げませう。
代官　然らば夜半まで待つてくれる。夜半の鐘を合圖に、首受取りに來るぞよ。
大作　そりや、如何やうとも。
代官　首受取るまでは、家來ども、この家の四方を取圍み、油斷いたすな。
捕手　ハッ。
代官　必らず夜半までに。
大作　御念に及びませぬ。
代官　キッと申し渡したぞ。家來、供せい。
捕手　ハッ。
ト代官、家來、殘らず、ツイと橋がゝりへ入る。ト三人、後にこなしあつて
都市　兄者人、お前、眞實お主の首を討つて
木曾　渡す所存か。
大作　如何にも、伏屋之助どのも九重姫も、首討つて渡します。
都市　そりや、お前、不忠ぢや。人でなしと云はれる心でござるか。兄者人、日頃に似合はぬ、どう云ふ天魔が入

れ替りましたな。
大作　弟、わりや不忠者、人でなしと云ふ事知つて居るか。
都市　エ、。
大作　人でなしとはコリヤ、うぬが事ぢやわいやい。
ト都市を引寄せて打ち倒す。木曾兵衛、留めて
木曾　コリヤ、なんで都市を打擲するのぢや。
都市　イエ／＼、親仁様、大事ござりませぬ。兄者人、この都市が不調法があるなら、腹の癒る程存分にして、どうぞ不忠者人でなしと、云はれぬやうにして下さりませ。
木曾　常の心と入れ替り、兄よ、どう云ふ事で其やうに。
大作　サア、魂ひが入れ替つたは、あの弟の畜生めゆゑ。
木曾　ヤア、なんと。
大作　親仁様、お前は様子を知らしやるまいが、兄が御主人薗原の若殿となつて、大それた騙り事。有半が情にて、その科は遁がれぬは天道。非義非道をして生きて居やうと思ひ居るか。コリヤ、今迄は知らぬ事なれど、様子を聞けば、うぬは圖書が胤とあれば、親の悪事を請け継いで、盗人騙りの圖書が胤と、始めて聞いた。包み隠しひろいでも、疾に親子の名乗りをして、薗原家を没落さす企み。一千丁の御朱印も、うぬが掏替へて、圖書どのへ渡したであらうがな。
都市　なんのマア勿體ない。圖書どのゝ胤と云ふ事は、いま聞いたが初め。なん／＼の誓文、日天様かけて、何も知りませぬ。只金儲けしてお前の爲にと。
大作　イヤ、吐かすな／＼。例へ百萬陀羅云ひ譯ひろいでも、今までとは違ふ。悪人の悴、圖書の血筋と聞いて、おりや、モウ、憎うて／＼ならぬわやい。
都市　エ、、親仁様、ひよんな事を云うて、兄者人に愛想を盡かされました。どうぞ仕様はないか。どうしませう。ちやつと詫びして下さりませ。わしやモウ、生みの親の圖書どのより、他人の兄者人に、矢ッ張り孝行が盡したいわいなう。
大作　可愛や都市。イヤ、憎い弟めが。
都市　エ、。
大作　顔見るもこと／＼しい。ヤイ、悪人の悴め、この銀兵衛、もううぬが顔見ぬぞよ。生きて逢はうと思ひ居るな。
都市　そんなら、どうでも兄者人。

大作　ト大作に取りつくを
エ、穢らはしい畜生め。
ト唄になり、都市を向うへ蹴り倒す。こなしあつて入る。此うち、木曾兵衞、始終手を組み思案して居る。

都市　いろ／＼こなしあつて
都市、申し、親仁様。お前はなぜ其のやうに默つて居て下さります。兄者人の今の詞、わしや勘當請けたも同然。どうぞお前が親甲斐に、詫び言して下さりませ。親のお慈悲お情に、圖書どのゝ方へ返さずと、矢ッ張りお前や兄者人に。

木曾　ハテ、大事ない。コリヤ都市、よう物を合點せい。例へ無道でも惡人でも、追ッ付け圖書どのから紛失の寶を差上げると、信濃の領主、藤原の家は圖書どのが押領。すりや其方も一國の若殿。兄の大作は歸參も叶はず、伏屋之助は自滅。それゆゑ彼奴も死暴れの惡口。必らず心にかけなよ。いつまでも百姓の、しを垂れた姿より、供に供連れ曳き馬乘り切つて歩くやうに、とつくりと思案せい。
トまた唄になり、木曾兵衞も奥へ入る。ト本釣り鐘にて暮れ六ツの鐘打つ。都市、悄々と立ち上がり

都市　兄者人の今の腹立ち、また親仁様の勸めは裏表。一旦科は遁がれても、兄者人の御主人を騙つたこの身。圖書どのゝ胤と知らず、義理ある兄者人を世に出さうと、思ひ詰めた心も無足。殊に不忠の名を穢しては。
ト奥を見て、こなしあつて
寶の親元へ立歸つては、共に非道の名を穢す……謀計は眼前の利深しと云へども、必らず神明の罰す。ムウ。
トこれより、尺八入りのめりやすになり、都市、思ひ入れあつて、納戸口より角行燈を出し、硯箱を取つて來て、書置を書く。隣の家より、小糸、出て、門口にて、こなしあつて

小糸　都市さん、其所にかえ。

都市　ヤア。
トちやつと書置を隠し
誰れぢやと思うたら、小糸さん。

小糸　わしや日の暮れるを待つて居たわいなア。
ト側へ寄り添ふ。此うち始終尺八入りの合ひ方。都市思ひ入れあつて

都市　居所の羊の縮まる壽命。日の暮れるのを待つて居たとは。

小糸　サア、最前の約束、なんぼうわたしが戀を叶へて下さんしても、こちや寢ぬと氣が濟まぬわいなア。
都市　エヽ、人の心も知らずに。
小糸　矢ツ張り嫌でござんすかいなア。
都市　ヤア。
小糸　申し、互ひの固めに、起請の代りと云うて下さんした、この杜若は嘘かえ。
都市　そりや、物が知らした一本花。
小糸　エヽ。
都市　なんの約束違よう、違やせぬ。
小糸　お前がさう云ふお心なら、どうぞ末長う、友白髮まで添ひたうござんすわいなア。併し、殿御よりは女子は早う老けるものぢやさうな。年が行て、頭が白髮になつたら、その時お前に愛想が盡かされうかと、わしやそれを案じて居るわいなア。
都市　友白髮まで今爰で。
小糸　抱かれて寢ても、大事ござんせぬかいなア。
　　ト嬉しがるこなし。都市、悲しい思ひ入れにて
都市　それ程に思うて下さる志し、無下にするは
小糸　きつい殺生。ホヽヽヽ。
　　トこなしあつて
都市　もし死んだ後で
小糸　エヽ、死んだ後でとは。
都市　イヤサ、それは。オヽ、ソレ。こなさんとわしが、マア女夫になつて居ても、もし老少不定とやら、その時もしわしがひよつと死んだら、後で男を持つ氣であらう。
小糸　ナンノイナア。お前が死なさんすりや、わたしも死にます。何樂しみに、後に長らへて居やうぞいなア。
都市　アノ、それ程までに。
小糸　思ひ詰めたる女子の一筋。
都市　千筋に絡む都市が身の上。
小糸　エヽ、なんぢややら、じめ〱と。お前、氣合ひでも惡いかえ。
都市　イヤ、どつこも惡い事はないぢや。
小糸　そんならわたしが云ふ通り
　　ト其所らを見て、蒲團枕を取つて來て
幸ひ爰に蒲團も枕もある。
　　ト思ひ入れあつて
こちの人、もう寢やしやんせんかえ。

都市　ヤ。
小糸　早うこないに云うて見たい事ぢやわいなア。
ト云ひ〳〵寢所を敷き
サア、ちよつと爰へござんせいな。
都市　滅相な。そんな事が。
小糸　ツイ、ちよつとぢやわいなア。
都市　コレ、親仁樣や兄者人に、見付けられたら惡い。寢るのは又折があらう。サア、ちやつと去なつしやれ。
小糸　折角こないに、寢所までして去ねとは、こちや嫌ぢや嫌ぢや。
ト都市、思ひ入れあつて。
都市　時刻延びれば恥の恥。
小糸　そんなら、ちよつと爰へござんせいなア。
ト都市、こなしあつて
都市　それ程に云はしやる事。來いなら行かうが。
ト云ひ〳〵納戸の暖簾の内より脇差を取出し、こなしあつて取落す。小糸、恟り。
小糸　エヽ、それは。
ト都市、ちやつと脇差取つて隱し、寢所へ來て、しやんと下に居る。

都市　コレ、寢所へ來た。
小糸　鬼の來ぬ間に命の洗濯。サア、寢やしやんせいなア。
ト屏風引き廻す。これより凄き合ひ方になり、隣の家より、太九郎、出て來て、こなしあつて、尻引ッからげ奧へ忍び込む。ト中二階障子殘らず開く。ト東藏、立ち身にて傳授の一卷を開き見て居る。側に木曾兵衛、腹切つて居る。この見得よろしく
木曾　若殿萬壽丸さま、伊賀流の極意、忍びの秘書、とくと御覽なされしか。
東藏　遠霞の傳へと云ふ對陣、數萬の人數取卷くとも、やすやす立退く九字の切りやう秘文まで、詳しく記せしこの一卷。我れに渡せし其方が功に愛で、親人に成り替り、最期の臨終に勘當赦す。花守り木曾兵衛とは假の名、美濃の國齋藤家の家臣、稻田伊豫之助どの、家來、六郷主膳。出かした出かした。
木曾　エヽ、忝ない。若殿の生立ち、この主膳、勘當の身の悲しさは、御主人討死のお供に遲れ、無念止む事を得ず、土民となつて當村へ蟄居の身なれど、我が眞實の悴、藏之助と云ふ者、主人の仇を報はんと、都島原に人をな

づくる計略に、揚屋の營み。何卒こなた樣と藏之助と、心を合して齋藤龍興公、又は稻田伊豫之助どの丶弔ひ軍。

東藏　仇ある藤原はぶッ潰す。この上は足利の四海を掌握。今日は幸ひ、父の忌日。

木曾　主膳の對面。

東藏　親人伊豫之助どの丶髑髏。

ト髑髏を出して見せる。

木曾　ハツ／＼。有り難いこの世の對面。未來でとくと、こなた樣のお身の上申し上げん。

東藏　父の精靈へとくと傳へよ。

木曾　サア、この上は我が血汐、こなた樣の金瘡の妙藥に。

東藏　藤原左京太夫が切りつけし刀疵、兵庫の計らひ、露に中りし我が金瘡。これを治するには、いれい仙に戊寅の老人の血汐にて、これを服すれば、立ち所に平癒。

木曾　サ、、早く我が血汐を。

東藏　如何にも。

ト手水鉢の柄杓を取上げ、木曾兵衞が血汐を請け、妙藥を入れグツと呑む。木曾兵衞、こなしあつて

木曾　我が最期の血汐が役に立つも、主人へ盡す忠義の魂ひ。

ト東藏、いろ／＼とこなしあつて

東藏　今の血汐を呑むと、心濟々として疵は癒え、金瘡平癒。ハテ、妙藥もあればあるものぢやなア。

木曾　若殿へ傳授せし秘書にて、忍びは心の儘。

東藏　いま強氣の稻田東藏に、忍びの術を得るは、龍に翼を生じたも同然。

木曾　倅藏之助に返す／＼も。

東藏　都へ登り心を合す。

木曾　最早拙者はこの世のお暇。

ト刀を引き廻す。此うち、奥より有平出て、中二階を窺ふ。大作も出て、屏風の際へ寄つて窺ふ。この模樣引ッ張りよろしく、東藏、こなしあつて

東藏　忠臣稀代の六郷主膳、冥途へ參らばこの萬壽丸に功を立て、亡父稻田伊豫之助どの、閻魔の廳へ訴へよ。

ト首ボンと打ち落し、刀の血汐拭ふと、どろ／＼にて杜若一時に枯れる仕掛け、吹き水の薄上ろ。皆々、キツと目を付ける。東藏、こなしあつて

東藏　ハテ、心得ぬ。いま主膳が血汐、この澤へ流れ落つ

有平　ると、忽ち盛りの花も枯れ凋み。
大作　屛風の中より流れ出づる血汐と云ひ
有平　水巻き上がる澤邊の面。
大作　流れ寄つては別れる血汐。
有平　爰は八ツ橋。
東藏　岸根に茂る杜若。
紫の朱を奪ふと、去つて血汐に色を亂し、石に音あり水に精あり、兩聲ともしつかりと、不思議を見せるは、ムウ、さては我れに一味の土手の銅鐵、彼れが行ふ幻術は、野狐の神通。すりや寅の年の主膳が血汐に、男女愛着の精血の穢れに依つて、野狐は立去り、銅鐵が術は忽ち消え失せしか。ハヽヽヽ、ハテナア。

トどろ／＼にて水氣納まると、銅鐵セリ上げにて出て

銅鐵　お頭、不思議や愚僧が術を。
東藏　血汐の穢れで消え失せた。
有平　盗賊稻田東藏。
大作　朱印を所持する銅鐵。
有平　繩かゝれ。

ト大作は銅鐵、有平は中二階へ東藏と兩方立廻る。

東藏　いま主膳が授けし忍術を試すは。

ト九字を切りかけ、廻り壁にて消ゆる。

有平　ヤア、東藏は。ホイ。

トこなしあつて、大作、銅鐵が朱印を取出し

大作　これこそ御朱印。
銅鐵　それを。

ト引ツたくる。有平、飛び下り、銅鐵を一刀切る。

有平　誠の朱印、手に入りました。
銅鐵　イヤ、うぬ。
大作　ドツコイ。

ト三人見得になり、じやん／＼と夜半の鐘鳴る。

ヤア、ありやモウ夜半の鐘。

ト屛風の中より

太九　伏屋之助九重姫が最期の有樣。

ト屛風を退ける。内に都市、小糸、自害して居る。

有平　すりや、御兩所のお身替りに。
大作　弟出かした。よう死んだ。
銅鐵　太九郎、うぬを。
太九　薗原のお爲になるも妹が遺言。
有平　ヤア。
大作　弟は圖書の胤と聞いたるゆゑ、其方を殺すは圖書が

都市　悪事を絶たん爲。とても死ぬる命なら、若殿のお身替りにと、心付きたる最期の悪口。兄者人、エヽ。

ト拜む。

小糸　都市さまが死なしやんす様子を聞いて、何樂しみに生長らへん。死なば一緒のわたしが思ひ。

太九　この悪者の兄ゆゑに、苦勞をした妹。

大作　そりや、銀兵衛も同じ事。

小糸　よう心を直して下さんした。

都市　思ひ置く事も無ければ。

ト小糸、都市、手を合す。

太九　南無阿彌陀佛。

ト都市、小糸、こなしあつて、大作、太九郎、後へ廻り二人の首をポンと切る。トじやん〳〵と九ツの半鐘鳴る。橋がゝりより、最前の代官、捕り手連れ出て

代官　サア、約束の刻限、兩人が首受取らう。

大作　伏屋之助九重姫が首。

ト二人が首を渡す。代官、取つて

代官　出かした。この上は圍みを開かせ、其方が身の上、構ひはない。

大作　エヽ、有り難うござります。

代官　足利へこの首。

ト走り入る。奥より、おます、伏屋之助、九重姫、出て

ます　様子を聞けば、都市さまや小糸さま。

伏屋　我れ〳〵ゆゑ敵へない最期。

有平　これも忠義。

有平　とは云ふものゝ

皆々　エヽ、可哀やなア。

ト八千代獅子の合ひ方、尺八に合し、これにて、東藏、以前の形にて、切り穴よりセリ上げにて出て、皆の前を尺八を吹き〳〵靜かに通り、靜々と花道へ行きかゝる。有平、大作、太九郎、皆々思ひ入れあつて

皆々　ヤ、この笛の音は。

ト東藏、花道にて立ちどまり、舞臺の方へ向ひ

東藏　主膳が追善。

トこれにて心付き

皆々　稲田東藏。

トきつとなる。花道の方へ擬勢。東藏、九字切りかけ少しドロ〳〵。皆々、こなしあつて

東藏　ヤア、姿を見せぬは。稀代の忍術。

皆々　ヤ。

東藏　ム、、、ハ、、、。

ト中音にて靜かに笑ふ。ト幕さす。東藏、こなしあつて立ち直り、また尺八を靜かに吹いて向うへ入る。

よろしく幕

切幕　島原角屋の場　東寺羅生門の場

役名――足利義晴。薗原伏屋之助。九重姫。角屋才兵衞 實ハ六郷藏之助時澄。幇間、宗助 實ハ八代加藤次。同、喜作 實ハ矢島伴藏。薗原圖書。奴、有平。同、雁助。同、八内。仲居、おせん 實ハ笠森おせん。同、姉娘、おまつ。同一子、當吉。平柳銀兵衞。同一子、大次郎。仲居、お半。同、お里。同、お萬。同、お淺。同、お民。才兵衞女房、お丸 實ハ局藤浪。座頭、富市。傾城、棧橋、實ハ齋藤息女山吹姫。萬野兵庫。稲田東藏 實ハ稲田萬壽丸。

造り物、平舞臺、惣打抜きにて、遙か奥二重舞臺、見附け長暖簾、東西に障子屋體、右二重舞臺西より舞臺前まで。橋がゝり臆病口、兩方ともに塗り骨障子の見切り。道具に好みありて、一面の大座敷の模樣。所々に雪洞付きの燭臺すさまじう並べあり、この座敷方々に、おせん、お半、お里、お民、お萬、お淺、皆揃への仲居。幇間喜作、同じく宗助。座頭富市、藝子富野。角屋才兵衞、亭主にて、才兵衞女房お丸、この人數皆々二人づゝ差向ひにて掛合ひの見得よろしく、幕の内より

〽爰は島原出口の柳、招く禿が合圖の手管、忍び逢ふ夜のその樂しみは、千代の契りに稻葉の松よ、青葉榮えて友白髪まで、戀路の思ひはこれなんめり、さつきよい〳〵よい殿御。

トこの唄に合せ幕明ける。二三度返すうち、向うより、足利義晴、信濃當藏娘おまつ、禿よし野を先に立て田舍大盡の形にて出て來て、花道にて

義晴　でも、廣い座敷ではある……コリヤ〳〵、其所へ行く二人のたいら子ども〳〵。

両人　オヽ、をかし。わたしらは太夫さんの禿ぢやわいな。
義晴　サア、その禿と云ふ事は、よう知つて居るわいやい。
両人　それに、たいら子とは、なんのこつちやぞいなア。
義晴　コリヤ、云ふな。一目に軒の細見に、たいら子は西の禿に並びけりと、宝晋斎其角が発句がある。それで禿をたひら子と云ふが、おれが誤まりか。
よし　こちや、そんな事は知らぬわいなア。
まつ　アレ、大座敷に面白い掛合ひ、ちやつと向うへ行かうわいなア。
ト二人は本舞台へ行く。此うち始終右の唄。本舞台にて、構はず掛合ひ。義晴、こなしあつて
義秀　待て〳〵。コリヤ、ちつと尋ねる事があるわいやい。
ト云ひ〳〵本舞台へ来て
ヤア、こりやなんぢや。
ト掛合ひを段々見て
ハテ、面白いな。けうといワ〳〵。
トいろ〳〵こなしあつて、下に居て、皆々を眺め
えらいぞ〳〵。面白い。やつちや〳〵。

ト余念なう寝転び見て居る。お丸、才兵衛と枕合せして居て、フト義晴を見て、枕持ちながら義晴が側へ行て
まる　コレ〳〵、お前は見馴れぬお方ぢや。誰れさんぢやえ。
義晴　愚推傾城を求めに来た。小分ながらお客ぢやわい。
まる　傾城を求めに来たとは、お客どころか、お大尽様ぢや。
義晴　サア、お大尽と云へば大尽、小尽と云へば小尽ぢやて。
まる　ホヽヽ、アノナ、わたしやアノ、この角屋のお丸と云うて、才兵衛どのゝ女房。これはマア〳〵、ようお出でなされたなア。
ト此うち、才兵衛、相手がないゆゑ、お半を無理に連れて来て枕合せにかゝるを、お丸、これを見付けて
ヤア〳〵この人、仲居のお半を捉へて。
トつか〳〵と行てお半を引退け
さうはさゝぬわいな。
トまた枕合せになり、此うち、宗助、お浅と枕合せして居て、ちやつとおせんの方へ入れ替り、おせん、嫁や

がりお淺と合す。喜作も富野と合して居て、これもお里と入れ替る。お里、嫁がり、座頭の富市と合す。宗助、喜作、方々にて振られ、ト、宗助、喜作と枕を合せ、顏見合せ悄りこなしある。此うち、義晴、お半が手を取つて、こちらへ連れて來て

義晴　コレサ、この廓初めての身共ぢやに依つて、どうぞ傾城をも厭う付くやうに、賣つてもらひたいワ。

はん　エヽ、そんな事は知らぬわいなア。

ト突き飛ばし、こちらへ來て、おまつと枕を合す。義晴、こなしあつて、おせんを又連れて來て

義晴　コレサ、角屋と云ふ揚屋を、聞き傳へて來たからは、どの傾城でも、勝手次第に買はれる。

せん　エヽ、面白い枕合せの邪魔して、エヽ、辛氣な、知らぬわいなア。

トまた突き飛ばし、こつちへ來て枕にかゝる。

義晴　ハア、皆枕の煤掃きで、きつう取込んで居るさうな。

トうろ／＼お丸を尋ね廻つて

オヽ、さうだ。この女だワ。

トお丸をこちらへ連れて來て

コレサ、お身に賴みかけたのに、枕の煤掃きに凝つて、相手にならぬとは、どうしたものだ。

まる　サア／＼、私しが請合つたら、お買ひ次第でどんなお敵でもお手に入るわいなア。

義晴　イヤ、お敵ぢやない、傾城が買ひたい。

まる　ハテ、傾城は望み次第ぢやと云ふ事。

義晴　そりや忝ない。身が望みの傾城は、この島原で、エヽナニ。エヽ、がた／＼と喧ましうて、ねつから思ひ出されぬ。

まる　オヽ、辛氣。誰れぢやぞいなア。

ト此うち、才兵衞もこなしあつて、おせんを連れて來て無理に枕合す。これをお丸見て

アレ、又おせんを捉へて。

トむつとしてツカ／＼と行ておせんを引退け

滅多に油斷はせぬわいなア。

ト枕を合す。

義晴　こりやマア、なんの事ぢや。

トこれより唄を少し早める。また義晴、おせんを連れて來て傾城が買ひたいと賴む事。始終此うち才兵衞、喜作、宗助、あちらへ行たりこちらへ來たり、濡れに

かゝる心にて枕を合す。女形は嫉がつて入れ替りする。この模様、本には書かれず、各々仕打ちに物云はずに、壬生の仕組みのやうにキッと心入れ、立ちかゝつてよろしく取なしに右いろ／＼あつて

まる　モウ／＼、枕合せ止しにしてもらはう／＼。

　トこれにて、唄三味線留まる。

才兵　コレ／＼嬶、何を其やうに腹立つて居るのぢや。

せん　枕合せは萬さんのお好み。

はん　萬さんでも千さんでも、大事ないわいなう。

　ト無理に腹立てる。ト奥バタ／＼にて、桟橋、傾城の形にて逃げて出る。薗原岡書、衣裳羽織にて追つて出る。

女皆　ヤア、桟橋さん。

桟橋　才兵衛さん、どうもなるこつちやござんせぬわいなア。

才兵　萬さんの手前を事分け云うて、ちよつと貸した大盡様。

岡書　その傾城には詮議が。……イヤサア、心をかけたに依つて、口説き落して抱いて寝ようと思へど、なんのかのと吐かして跳ね廻る。

はん　そりや、初對面には餘り打ちつけ。

岡書　なんと。

はん　マア、とつくりと互ひの心が知れねば、あの子ぢやと云うて、ナア旦那様。

才兵　それ／＼、彼の深草の少將も。

　ト淨瑠璃にて

笠に降る雪積る雪、小野の小町に百夜通ふぢやござりませぬか。

　トお丸こなしあつて

まる　コレこちの人、才兵衛どの。

　ト胸倉取つて引据ゑる。

才兵　これは情ない。まだ玉豐を見知らずか。

まる　エヽ、お前はなア／＼。

喜作　ソリヤこそ又始まつた。

せん　旦那様とお家様の口舌は、久しいものぢや。

才兵　アレ、皆の手前、外聞が悪いわいやい。

義晴　ハヽア、枕の媒掃きをしまうたら、女夫喧嘩に居直つた。

まる　知るまいと思うてか。常からアノ桟橋を口説くお客があると、こなさんが邪魔さしやんすが、合點がゆかぬ

わいなア。
才兵　ハテ、桟橋はおれが抱へ。それで大切にするを、悋氣とは、ハテ、女ぢやな。
義晴　オヽ、さうぢや。おれが望んで買はうと云ふ傾城は、その桟橋ぢや〳〵。
圖書　イヤ、桟橋は身共が心をかけ居れば、滅多に外へは靡かさぬぞ。
喜作　何をも知らぬ桟橋さんを買はうとは、ほんに雲に桟橋。
宗助　霞に千鳥。
義晴　及ばぬ事か。
圖書　是非桟橋を身共か。
桟橋　イヤ、わたしが身の上は。
才兵　マア、約束のお客萬様を、大切にかけにやならぬ。
まる　ハテ、外へ散らすといふ事はござんせぬ。
せん　お丸さん、お前さんもマア、其やうに云はずと。
まる　イヤ、知るまいと思うて。わが身達にも油斷がならぬ。
せん　エヽ。
まる　今の枕合せのうちも、ひそ〳〵と、性の惡いこちの人。

ト女形皆々睨む。
せん　これは迷惑な。
才兵　好い男でもある事か、このおれに悋氣するとは、エヽ、女房持つまいものぢや。
まる　仲居の癖に、オヽ、好かん。
トひんとする。内にて伊勢音頭。
〽額に春木屋大文字、紋日明き日はなけれども、さうぢやかさいなア〳〵。
トばた〳〵にて、花道戸屋の内より、奴八内を見事に投げ出す。有平、男達にて、雁助の手を捻ち上げ、よき所にて突き放す。
八雁　慮外な、うぬ。
トかゝるをよろしく立廻りにて
有平　ハテ、ざわ〳〵と何さらすのぢや。
ト兩人を投げ、本舞臺へ來る。圖書、見て
圖書　ヤア、わりや兵庫が家來有平。
有平　お國お家の騷動より、二合半の切り米を、さらりと變へた奴商賣。今は都に羽を伸した一物の有平。廓へ入込む、男伊達でえすわい。

八雁　お旦那、お聞きなされましたか。

圖書　憎くい下郎め。ソリヤ。

兩人　うぬ。

ト又かゝるを、よろしくあつて

有平　コリヤ、何ひろぐ。蚊蜻蛉めら。

圖書　わりや圖書が家來、手籠めに致すか。

有平　ハテ、行合ひの喧嘩なりや、せう事がないでえすぢや。

圖書　さう云や身共が。

ト切りかゝる。鐺を取つて見得よく留め

有平　何するのぢや。

圖書　慮外働らく下郎め。眞二つに。

有平　へ、、、昔は格別、今は廓の男達、意氣づくの出入りなら、伯父御でも容赦はない。お相手になりませうか。

圖書　サ、その儀は。

有平　じたばたせずと、扣へてござれ。

圖書　イヤ、うぬを。

トきつとなる。奥より

兵庫　待つたお客。

圖書　ヤ、なんと。

ト奥より、信濃當藏の子當吉、銀兵衞の子大次郎、兩人ともに黒股引、半纏大小鉢卷にて、ツカ〱と出て種ケ島にて圖書を圍ふ。圖書、こなしあつてこれは。

ト醉うた騷ぎ唄になり、これにて、奥より萬野兵庫、衣裳羽織、しどけなき姿にて大杯を持ち、千鳥足にて出て來る。

才兵　ヤア、これは萬さま、お一人拋つて、置炬燵にお休みなさつてござつたゆゑ、お構ひ申しませなんだ。

せん　今お目が覺めましたかいなア。

兵庫　おせん、お中、お里、皆の者も、身共を盛り潰して置いて、その隙にソレ、色に逢ふ。エヽ、ちよんの間とやらぢやな。

皆々　何を仰しやるやら。

トお丸を見て

兵庫　オヽ、これは亭主。才兵衞が北の方。

まる　北の方も南へ飛んで居ります。

兵庫　ホウ、悪い受けの。

才兵　奥方の燒き餅で、我れらも困り山の重忠。

圖書　粹な裁きの萬大盡と呼ぶは、さては萬野兵庫。薗原圖書ぢやが覺えて居るか。
兵庫　コリヤ、ぼんち引け。
大當　ハツ。
ト　つッと上の方に並ぶ。
圖書　その子悴どもは、
兵庫　拙者が廓通ひ、聊爾があつてはと、心を付ける由縁の者の悴ども。
圖書　扶持放されに似合はぬ廓のほだへ。
兵庫　以前に變らぬ伯父御の御氣丈、先づはめでたう存じ奉るぢや。
才兵　ハア、さては近付きでござりまするな。お客のてつぱり、混雜の座敷づき、どうならうと思うて居たが、これで心にも角屋の才兵衞、兎角この上は
喜作　わつさりと酒に致しませう。
兵庫　吞まいでならうか。すつぱりと皆寄つて殺せ／＼。
才兵　所で、新らしい吸ひ物と出かけませうかい。
はん　わたしもお酌をせうか。
有平　アイヤ／＼、酒は元より量りなしと申せば。
兵庫　有平、奴の心が放れぬ。其方は男達ではないか。
有平　エ。
兵庫　意見とは、古い奴／＼。
義晴　所を新らしう、ちよつと助けうかい。
有平　貴樣は誰れぢや。
義晴　知れた事、お客ぢや。
富市　客は客ぢやが、もつきやくでござります。
義晴　何を默つて居い。
ト　富市が頭を叩く。
有平　其方も控へい。
義晴　オッと合點ぢや。
ト　後へ寄る。圖書、こなしあつて
圖書　諏訪の騷動、湖水の泡と消え失せて、跡なく亡ぶ一家中。それがどうして。
ト　思ひ入れあつて
ハレ、命冥加な對面。
兵庫　イヤ、拙者より伯父御の存命。
ト　思ひ入れあつて
才兵衞、獻さうか。
才兵　頂き笠の紐とは。
せん　それを宙で覺えてかいなア。

才兵　東西、惡口云ふまい。
まる　イヤ、默つては居られぬ、桟橋が身の上。
岡書　お丸、身共に口説き落せ。
義晴　イヤ、おれに貰つてもらはう。
兵庫　才兵衞、頼んで置いた身共が戀路は。
才兵　ハテ、蛇の道は蛇。
せん　色の道は仲居の役。
はん　キッと取持つて
まる　イヤ、岡書さまに抱かして寢さすぞ。
桟橋　引手に靡くが川竹の、勤めの習ひと聞けど、わしや帯解く事は、才兵衞さん。
才兵　サア、マア、宵の口舌は無理なさゞめ言。云はず語らぬ胸せまり、ちつつん〳〵と上げませうか。
桟橋　イ、エイナア、才兵衞さん。
ト才兵衞が側へ行くを
まる　イ、ヤ、此方の抱への桟橋、わしが自由にするぞ。
兵庫　お丸、桟橋は身共が揚詰め。貸す事は罷りならぬぞ。
まる　でも、貸借りは廓の習ひ。
兵庫　これはしたり、無理を云やるぞいの。

まる　イ、エ、それでも。
ト又桟橋にかゝらうとする。二人の子役、種ヶ島にてお丸を圍ひ
二人　無理云ふと、火蓋を切らうか。
まる　ア、コレ、子達、むざと鐵砲放すまいぞ。
兵庫　ハテ、マア、扣へて居やれサ。
まる　アイ。
ト不承々々に扣へる。子役も後へ寄る。
岡書　兵庫、今日は彌生二十日、非業に死したる左京太夫、月こそ變れ、其方は命日と云ふ事存じて居るか。
兵庫　譜代相傳の主君の命日、忘れは致さぬが、覺えぬちや。ハ、、、、。
岡書　ムウ。すりや、家國を再興の所存もなく。
兵庫　兎角浮世は戯れ遊べ。ツ、テン〳〵。
トこなしあつて
いかいたわけな。
有平　イヤ〳〵、お旦那。それでは。
兵庫　ハテ、名を取らうよりは德を取つて、一生を樂しむ盧生が榮華。邯鄲の枕の一曲。どうも云へなんだが、仲居ども、身共、もちつと指南にあづからうか。

さと　申し萬さま、あの枕を合す新唄の、作者は才兵衛さん。
兵庫　ムウ、あの唄は亭主が拵らへて
まん　廓中を流行らす新唄。
たみ　なんとマア、可愛らしい文句ぢやござんせぬかて。
兵庫　ムウ、さては廓の中を流行の新唄。
喜宗　爰は島原出口の柳、招く禿が合圖の手管。
　ト枕なしに謳うて手を叩く。
圖書　その手管より梭橋が。
はん　コレ、戀は木折りでは行かぬわいなア。
さと　兎角梭橋さんの心次第。
梭橋　わたしが心は尼同然。
せん　髪下ろし衣の色は染めぬるに、猶つれなきは心なりけり。
義晴　もし墮落するなら、此方が先ぢやぞ。
まる　何を云うても揚詰めなれば。
兵庫　我が物ながら、自由にならぬは
才兵　稲荷山の松茸か。
兵庫　イヤ、稲荷山ではあるまいが。
才兵　エ、。

兵庫　武も運も、盡き果てし我が美濃の國。
梭橋　かゝる浮世をかねて知りなん。
才兵　ハテ、コレ。
　トこなしあつて
圖書　どうでもそれを。
有平　伯父御の心底。
雁八　萬野が下郎め。
　ト又かゝなちよつと立廻つて
有平　ハテ、ひこ／＼と猪小才な。
兵庫　コリヤ／＼、有平、必らず聊爾いたすな。
有平　イヤ、でも。
兵庫　ハテ、力量を見せるばかりを、男達とも云ふまいぞよ。
有平　エ、、成る程。
　トこなしあつて
弱いを構はず、強いをいがめる。
　ト圖書へかけて
それも追つて。
　ト兩人を見事に投げ、懐手になる。
はん　この上は皆、打混じて

まる　座敷を替へて、ナ。
　　ト図書へこなし。
才兵　イヤ、この才兵衛が何もかも仲立ちで。
兵庫　桟橋が色好い返事。
せん　比翼の床入り。
義晴　心の下紐。
図書　解くか。
まる　解かぬか。
有平　今宵のうちに。
桟橋　そんならどうでも。
才兵　ハテ、一寸延びれば。
まる　ヤア。
才兵　イヤ、一寸先は闇の夜。
　　トわい／＼のわいとな、ト騒ぎになり、皆々こなしあつて、才兵衛、サア／＼お出でなされませと、この一巻き残らず奥へ入る。チョン／＼にて、返し。
　　向う見付け屋台、正面へ突出す。道具とまる。と合ひ方になり、向うより、平柳銀兵衛、夜番にて割り竹を持ち出て、花道にて立ちとまり、こなしあつて

銀兵　美麗を好む角屋が座敷。兵庫どのゝ放埒、亭主才兵衛が心の一物。おかせ亂したこの家の有様。ハテ。
　　ト思ひ入れあつて、本舞台へ来て、門口に窺ふ。ト内にて
さと　大座敷へお銚子は行たかえ。おせんどん、お牛どん、皆何所へ行かんしたぞいな。
　　ト言ひ／＼出る。銀兵衛、見て
銀兵　これは賑はしうござりますな。
　　ト内へ入る。お里、見て
さと　平柳銀兵衛さん。
銀兵　ア、コレ。
　　ト押へ、あたりを見て
　　斯く廓の夜番となり、島原を徘徊するも、心得難きこの家の様子。
さと　それゆゑに、わたしが夫、有平どのも、御主人兵庫さまのお身持ち。
銀兵　色に耽り、溺るゝ兵庫どのゝ本心は、敵を詮議の手段とは思へども、染まり易きは色酒の二つ。誠放埒と極まらば
さと　諫言仕抜く夫婦が忠義。申し、伯父御の図書さまも

銀兵　入込んだ様子見届け置いた。何は格別、心にかゝる
は若殿姫君、お二方のお身の上。
さと　この家の亭主才兵衛が虜とし、一間を隔て、囚人も
同然。
ト銀兵衛、思ひ入れあつて
銀兵　それに付けても、弟都市が忠義の正夢。
さと　エヽ。
銀兵　イヤサア、何卒密かにお二方を、盗み出す工風は、
コレ。
ト囁く。
さと　そんなら、おせんどのに云ひ合して。
銀兵　目立たぬやうに。
さと　合點でござんす。
ト此うち、喜作、出かけ居て
喜作　様子は聞いた。うぬ。
ト銀兵衛にかゝる。立廻つて手を捻ち上げ
銀兵　鵜の目鷹の目、聞き出さうとする敵の犬。随分と覚
られぬやうに。
さと　銀兵衛さま。
ト云ふを押へて

銀兵　コレ。
ト額にて教へ。
行かんせ。
さと　アイ。
トお里、奥へ入る。銀兵衛、こなしあつて
銀兵　お家の納まり。何事も今宵の。
ト喜作を突き廻し、喜作、うぬとかゝるを、ポンと當
て、思ひ入れあつて
銀兵　火の廻り〳〵。
ト唄になり、銀兵衛、割り竹を突き向うへ入る。喜作、
起き上がつて
喜作　うぬ、夜番め……イヤ、それよりは今の手番ひ。さ
うぢや。
トついと奥へ入る。あと合ひ方になり、奥より、棧橋
出て
棧橋　才兵衛さんの目顔を忍び、盗み出したこの二つの
鍵。あの柳の間の妻戸が、伏屋さまの居やしやんす座敷。
幸ひこの間に。
ト思ひ入れあつて、面取りの障子屋體の妻戸を鍵にて
開ける。ト内より伏屋之助、着流しにて出る。

伏屋さま、さぞかし氣詰まりにござんせうなア。

伏屋　鳥同然のこの身を、折々の音信。忘れは置きませぬぞや。

棧橋　お禮に及ぶ事か。マア／＼、ござんせいなア。

ト伏屋之助、眞中へ連れ立つて出る。お里、出かけ居る。棧橋、銚子杯を取つて來て

結ぼれ解く酒の付けざし。サア、飲ましやんせいなア。

伏屋　この身の難を思ふに付けても。

ト東手の褄戸へ目をやり

萩の一間は九重が在所。可愛や。

棧橋　逢ひたいかえ。

トこなしあつて

伏屋　ヤ。

棧橋　サイナア。焦れさしやんすお姫樣は、アレ、あの萩の一間、褄戸の鍵は爰にござんす。

ト見せる。伏屋之助、こなしあつて

伏屋　すりや、その鍵を。

棧橋　上げうかえ。

伏屋　成る程、その鍵さへたもつたらば。

棧橋　日頃から、わたしが願ひ、叶へて下さんすかえ。

伏屋　サア、それは。

棧橋　伏屋さま、胴慾でござんすわいなア。いつぞやから文玉章の數々も、逢ふ事稀れなお身の上。あゝ云ふ可愛らしいお姫樣と、云ひ交してござんすれば、所詮どのやうに思うても、叶はぬ事と思ふ程、一倍募る戀路の闇。焦れて死ぬるこの身をば、ちつとは不便と、思ひやつて下さんせいなア。

トこの間に棧橋の側にある褄戸の鍵を、お里、ソツと取つて奥へ入る。伏屋之助、こなしあつて

伏屋　志しは嬉しうござるが、願ひある身の上なれば、返事は重ねて。

ト立つて行かうとするを留め

棧橋　そりや、胴慾でござんす。

伏屋　ハテ、放さつしやれ。

ト振り放すを、棧橋、また留める。所へ義晴、ツカ／＼と出て、この中へ入り

義晴　ドッコイ。我れらが右の字の傾城、間夫切らす事はならぬ。オヽ、グッとならぬぞ。

ト伏屋之助、褄戸へこなしあつて、それト奥へ行くを、棧橋、義晴を退けて伏屋之助に取り付き

桟橋　そんならどうでも。
　ト義晴、引分け
義晴　我れらへの返事は
桟橋　エ、、嫌ぢやわいなア。
　ト引退け、伏屋之助に取り付く。
伏屋　嫌ぢやわいなう。
　ト振り切るを、桟橋に義晴取り付き
義晴　此方は應ぢやわいなア。
　ト桟橋を引ッ張る。これにて伏屋之助、ツイと奥へ入る。桟橋、義晴を突き退け
桟橋　伏屋さま、待つて下さんせ。
　ト續いて走り入る。この時、守り袋を落す。義晴、こなしあつて
義晴　何事ぢや。金出して買はうと云ふ客は振られて、あるは嫌なり思ふはならず。ア、、千差萬別の世の中ぢやなア。
　トこなしあつて、落ちてある守り袋を拾ひ
　間夫に氣を取られて、守までを落して行た。この中は、彼の起證とやらであらう。後學の爲、ちよつと見て置かう。なんでも凄まじう血の付いてある物ぢやがな。

　ト云ひ〳〵守り袋を開ける。此うち、奥より、おせん出かけ居る。義晴、守より書いた物を出し
　そりやこそ起證ぢや。
　ト廣げ見て恟り。
　ヤア、こりや美濃の國齋藤家の系圖。そんなら、あの女は。
　ト思ひ入れあつて
　疑ひもない先祖の系圖。
　トおせん、スッと側へ寄り
せり　それをちよつと。
　ト見ようとする。義晴、ちやつと隱し
義晴　エ、、恟りしたわいの。
せん　アノ、きよと〳〵しい顏わいの。申し、いま隱さしやんした物を、わたしや見たぞえ。
義晴　ヤア、アノ、今のを。
せん　面白さうな手管の濡れ文。
義晴　そんなら濡れ文。
せん　見たは違はぬ、きついやつし。
義晴　そのやつしが惡い受けぢや。
せん　イヤ、よいぞえ。もうお前の事は、町でも廓でも、

きつう受けがよいに依つて、それでわたしも。
義晴　ヤ。
せん　惚れたと云うたら、どうさんす氣ぢや。
　ト見れかゝる。義晴、こなしあつて
義晴　ハテ、相縁奇縁ぢやなア。
せん　そりやモウ、初めから思ひ込ましやんした桟橋さん
のやうにはあるまいけれど、アノ、ほんぼのやつと云ふ
は、わたしらがやうな女を可愛がるものぢやげな。
義晴　なにを。人を術ながらすやうな事ばかり云うて、お
前ほんまにわしらがやうな者でも、どうぞする心かえ。
せん　なんぼう里に育つたわたしらでも、こんな事が打付
けに云はれるものかいなア。
義晴　そんならアノほんまに。
せん　付合つて下さんすかえ。
義晴　應とさへ云うたらば。
せん　千年も萬年も
義晴　帶紐解いて
せん　抱かれて寢て
義晴　この系圖を取るのか。
せん　エヽ。

　トぎつくり。義晴、おせんを突き廻して
義晴　手に入れた系圖は、割符を合すこの身の願ひ。桟橋
にちよつと。
　ト行くをおせん留めて
せん　善とも惡とも、底意の知れぬこなさんの胸の内。一
寸もやる事ならぬ。
義晴　面倒な。其所退け。
せん　イヽヤ、退かぬ。
義晴　ハテ、退かうてや。
　ト立廻りあつて、義晴、おせんをポンと當て殺し、ツ
ツカと奥へ行かうとする。お半、出て立ち塞がり
はん　待たしやんせ。
義晴　そんならこなたも。
はん　先刻にからの一部仔什、とつくりと見屆けたわいな
ア。
　ト義晴、こなしあつて
義晴　こりやモウ、幕の内へ取込まにやならぬわえ。
はん　お前よりは、此方の味方に。
義晴　味方とは。
はん　この連判に血判をさしやんせ。

ト連判を出す。

義晴　なんと。

はん　美濃の國にて御最期ありし、齋藤龍興さまの修羅の妄執、晴らさん爲の忠義の旗上げ。

義晴　して、こなたの俗性は。

はん　稻田東藏が忍び妻。夫の大望、せめて力にならうと思うて。

義晴　廓は諸方の入込みなれば。

はん　貴賤高下の分ちなく、心を試してお客の俗性。初對面では心も知れず、居續け酒の籠城と、堅い約束誓詞の血判。

義晴　すりや、手管の客の內へ、取込まうと思うて、この誓詞に加はれと云ふのか。

はん　合點が行たかえ。

義晴　イヽヤ、血判さつしやれ。

ト連判を出す。

はん　エヽ、それは。

ト取らうとする。お半を突き廻して

義晴　齋藤の舊臣、氏江左衛門が一子、左五郎勝久と云ふ者。

はん　エヽ、そんならお前も。

義晴　不倶戴天の君父の怨敵、不思議に手に入る系圖に依つて、御主人の忘れ筐、姫君の在所知るゝ上は、時を過さず、この身の大望。

はん　云ひ合さねど互ひの本心。今宵のうちに。

義晴　アヽコレ、萬事は密かに。

はん　この連判と

義晴　この連判を取替へて

はん　云はず語らぬ心の固めは

義晴　廓の出合ひに、心一致の味方の大望。

はん　出口の門に限りの太鼓、數を亂すが徒黨の固め。

義晴　天晴れ出かした。諸事は後に。

はん　左五郎さま。

義晴　アヽコレ。

ト顏にて押へると、唄になり、兩人こなしあつて、義晴は上座の障子屋體へ入る。お半は暖簾口へ別れ入る。トおせん、起きて後を見やり、こなしある所へ、奥より、お里、お民、お萬、お淺、出て、左右よりおせんの側へ寄り

皆々　今のは。

せん　コレ。

　ト押へ、あたりを見て、こなしあつて

皆聞いてゞあつたかえ。

あさ　アイ、目當違はぬ齋藤の餘類。

たみ　系圖の樣子、何もかもとつくりと

皆々　聞き屆けましたわいなア。

せん　兵庫さまのお指圖で、千變萬化に心を盡すも、園原のお家を取立てゝ未來の夫、信濃の當藏どのゝ妄執を晴らさん爲、二つには、我が子の生い先、現世未來と二道かけて辛勞も、何を云うても女子の身の上。

さと　わたしとても、夫有平どのゝ指圖に依つて、假の奉公前埀れがけ。

たみ　我れとても

まん　御臺樣のお手廻り。

せん　思ひ〳〵に……分け登る麓の道は變るとも

四人　同じ雲井の月を見るかな。

せん　同じ雲井の月。

　ト東の椽戸へ目をやり

九重さまのお身の上は。

さと　申し、お前の指圖で、椽戸の鍵はどうやら。

　ト最前の鍵を出す。

せん　出かさしやんした。人絶えの折を見て、隨分密かに。

さと　そりや、合點でござんす。

まん　この上は殿樣。

せん　そりや、わしが呑み込んで居ますわいなア。

　ト内にて

圖書　これは、仲居どもは何れに居るぞ。

あさ　アレ〳〵、尋ねて居るぞえ。

まろ　ほんに皆、何所に居る。來い〳〵。

　ト手を叩く。喜作、宗助も口々に云うて呼び手を叩く。

四人　アイ……。

　ト長う返事をして、おせんが側へ寄り

おせんさん。

　トおせん、額にて押へ、こなしあつて

せん　サア〳〵、これから呑まうぞえ。

さと　こちらはモウ、いきついだけれど

せん　サア、マア行かんせいなア。

たみ　アイ〳〵、サアござんせ。

ト騷ぎ唄になり、おせん、女形皆々こなしあつて、しどけなく奥へ入る。ト圖書、宗助、喜作、奥より出て

喜宗　圖書どの。

ト內にて序の舞打ちかける。圖書、こなしあつて

圖書　あの打ち囃子は萬野兵庫、廓のほだへに心をゆるさせ、我れ〳〵が腸を探る彼奴が底意は、ムウ。

トこなしあつて

宗助　それゆゑ、斯く太鼓と姿をやつし、入込みし我れ〳〵は、宇津の家來八代一學が弟、同苗加藤次と云ふ者。

喜作　身は一學どのゝ舊臣、矢島伴藏と云ふ者。圖書どの、いよ〳〵主人の內意の通り、

圖書　車輪の縛を、足利家へ差上げてもござらうならば、薗原の家國安堵の御教書。

宗助　その儀は兄一學が推擧を以て、足利の御前は取繕ろふであらうが、いよ〳〵縛を。

圖書　今日中に差上げませう。斯程までに心を盡すも、八ツ橋の里、木曾兵衞が方に預け置きし、悴都市を立身させんと思ひの外、くたばつたは彼奴が不運。悴が相果つれば、日頃の十倍、臍を固むる身共が大望。

喜作　それは格別、合點のゆかぬこの家の才兵衞。敵とも見えず、味方とも見えず、如何にしても呑み込めぬ。

圖書　ナニサマ、才兵衞が底意、探り見るは。

ト此うち、お丸、出かけ居て。

まる　その詮議は、私しが致しませう。

トすつと出る。始終序の舞。

圖書　わりや、この家の花車お丸。

まる　わたしとても同じ大望。

喜宗　すりや、其方も。

まる　齋藤の家臣、氏江左衞門が家來、南宮左忠太、今の名は銅鐵が妹でござんす。

圖書　ナニ、銅鐵が妹とな。

まる　主君の恨み兄の仇、薗原の家國、根葉を絶たんと思ふ折節、入り聟の才兵衞どの、女夫と云ふは名ばかりで肌をゆるさぬ夫の心底。

宗助　正しく一物。

喜作　油斷はならぬ。

まる　殊に夫の物好きで、新たに繕ろふ座敷の普請、柳の一間、萩の座敷、間每々々に美麗を好み、中にも芦の一間と名付け、わたしは元より家內の者を寄せ付けず、合點のゆかぬ普請だらけ。

圖書　揚屋の座敷を高家の如く、御簾をかゝぐる御殿の營み。人を避けて足蹈みさせぬは、正しく先祖の

まる　エヽ。

圖書　爰に集むる齋藤の餘類。

まる　怪氣に事寄せ、とくと實否を糺して見ませう。

宗助　この上は折を見合せ、萬野兵庫を。

圖書　呼吸を溜むる種ヶ島、手供が手練でたつた一打ち。

喜作　我れ〳〵は九重姫を盜み出し、惚れてござる一學さまへお手渡し。

まる　萬事の手番ひ。

圖書　遊興の物音に紛れて。

宗助　此方の手筈も。

圖書　コレ。

ト押へる。鳴り物止む。四人、こなしあつて

まる　圖書さま。

圖書　何れも、奥へござれ。

ト唄になり、圖書、おまる、こなしあつて兩人を連れて奥へ入る。また序の舞になり、奥よりお里、出て

さと　幸ひの人絶え。萩の袖戸は。

トこなしあつて、東手の障子屋體の袖戸を鍵にて開ける。ト内より、九重姫、出る。

九重　ヤア、そもじは。

さと　ア、申し、何にも仰しやりますなえ。

ト向うへ連れ出る。九重姫に囁く。

九重　それで落ちついたわいなう。

さと　何を云ふ間も心が急けば、マア〳〵、ござりませ。

ト九重姫を連れて行かうとする。喜作、出て突き廻し

喜作　コリヤ、さゝぬゾ。主人一學が惚れてござる九重姫、此方へ渡せ。

さと　聊爾しやつたら、爲にならぬぞ。

喜作　面倒な、なにを。

トお里を突き退け。

九重姫、ござれ。

ト引立てる。お里、留めるを立廻りにてお里を當て、九重姫を引ッかたげ向うへ入る。お里、こなしあつて後を慕ひ入る。チヨン〳〵にて返し。

造り物、六間餘りの見事なる松の大木、枝左右へ連なり、方々に釣りをかひ、枝ごとに瑠璃燈を大分灯し、夜の景色、綺麗に、向う一面の網代垣、よき所

に切り戸口。上の方に一軒數寄屋立て、緞障子にて
この前、柴垣、數寄屋より松の元まで通ひの飛石。
切り戸の側に雪見燈籠、すべて中庭の模樣、隨分綺
麗に大場にあるべし。道具とまる、トしつぽりとし
た好みの合ひ方になり、緞張りの障子を開けて、兵
庫、少し醉ひたるこなしにて

兵庫　面白の花の盛りや、祇園清水、地主の櫻は
　ト謠ひながら駒下駄を穿き、眞中へ出かけ、松の方を
　見て
　亭主が物好き、自慢の中庭。何か鼻にかけて、自慢し居
　る程あつて、枝葉も共に見事々々。
　ト謠にて、松は元より常磐にて、ト謠ひながら松の幹
　へ靜かに立寄ると、雨車の音する。こなしあつて
　これは怪しからぬ雨模樣。
　ト袖をかざしながら元の所へ來る。ト雨車止まる。
　月は清光、それに今のは。
　トこなしあつて、また松の木へ寄ると雨車の音する。
　キツと思ひ入れあつて
　さては我が懷中せし寶の奇特、畏れ多くも後鳥羽院の御
　宸筆を染められし、かたしきの衣手寒く時雨つゝ。

　ト此うち、才兵衞、出かけ居て、太夫の長柄傘を兵庫
　にさしかけ

才兵　有明山にかゝる村雲。
　ト兵庫、才兵衞を見て
兵庫　其方は才兵衞。
才兵　折ふしの時雨にて、亭主が機轉の
兵庫　長柄とは、出かした〳〵。
才兵　なんとござりませうぞ。
兵庫　秦の始皇の御狩の折、時雨の晴れ間を松の木影。
才兵　枝を垂れ葉を並べ、その雨をもかざりしかば
兵庫　太夫と云ふ字を送り給ひしより、松を太夫と號せし
　謂はれ。
　ト雨車止む。
才兵　それは老松。
兵庫　これは亭主が自慢の松ヶ枝。
　ト寄らうとする。才兵衞、付け廻して
才兵　ア、イヤ、時雨はもう、止みましてござりまする。
兵庫　イカサマ、雨も止めば月の最中。
才兵　花は花と申しますれど、又あのやうに冴えましたと
　ころは、眺めも一入でござりまする。

兵庫　イヤ、月花よりは、望みかゝつた太夫が身請け。なんと才兵衛、其方が働らき、手に入れる工風はないか。

才兵　お歴々の智恵才覺にも、これぱかりは思ふやうに、サア、ならぬ所がこの道の味ひ。が、いよ／＼私しが抱への、棧橋太夫を。

兵庫　イヤ、身共が望むは、これなる太夫に。

ト松の側へ寄るを、才兵衛よろしく留め

才兵　エ。左樣の引き事。太夫と名の付いたあの松を、身請けせうと仰しやるのかな。

兵庫　如何にも異なる秘藏。全盛の松の位、正しく木元。

才兵　エ、。

兵庫　サア、秘藏の松ケ枝、根曳きにはなるまいか。

才兵　イヤモウ、御所望あれば私しが大慶。成る程と、サア、申したけれど、あの松ばかりは。

兵庫　ハア、不承知なか。

才兵　請け出すな矢張り野に置けげんげ花。非情と云へども、土地に育つた青葉の榮え、心もなう根曳きなされませうより、廓に置いて眺めてござる方が、御一興にもなりませうかと、憚りながら存じられます。

兵庫　アイヤ、貴賤分たぬ廓の門、風雅知らぬ田夫野人の眺めとなるも、なんとやら心憎い。

才兵　ムウ。して又差上げうと申したらば、アレあの太夫を。

兵庫　いよ／＼身請けする。

才兵　その身の代はな。

兵庫　千金萬金望み次第。

才兵　七寶の黄金より、思ひは人の魂ひの据ゑ所。太夫が身の上、是非請け出すお心なら。

兵庫　身の代は。

ト短刀を差出す。

イヤサ、この短刀で身請けするに、違背はあるまいがな。

才兵　アノ、その短刀が。

ト寄るを、兵庫、短刀を拔いて才兵衛に突き付け

兵庫　美濃の國御主、齋藤龍興が無念の血汐。

才兵　ヤ、。なんと。

ト見ようとする。兵庫、手早く鞘に納め

兵庫　稻葉山の合戰に、敗北なしたる齋藤一類、數年の寃逆、一時の泡と消え失せて、家の子郎黨思ひ／＼に相果て、今は斯うよと龍興が最期。

ト才兵衛に目を付けろ。才兵衛、愁ひを隠すこなし。
兵庫もこなしあつて
龍興が無念の最期は、その身に報ふ天の冥罰。
ト始終、才兵衛に目を付け
鎧を傍へに脱ぎ捨て、辭世の一首、遺言殘す間もなく、
右手へガバと突き立て
ト短刀を逆手に、鞘ながら腹を切るこなし。
右手へキリ、〳〵と引廻す。相手の大將駈け寄つて、短刀を奪ひ取り、水も溜らず首掻き切つて、梟木に曝して、鳶鳥の餌食となりしは、後代まで恥辱を殘す齋藤龍興。
ト始終才兵衛に目を付けて云ふ。才兵衛、こなしあつて
才兵　最期の御無念、聞けば聞く程。
兵庫　無念なか。
才兵　エ。
ト　ぎつくり
兵庫　さもあらん。道理〳〵。
ト才兵衛、氣を替へ
才兵　ハ、、、、かけ構はぬ軍話し。涙脆い者と云ふものは。ハ、、、。

トこなしあつて
シタガ、その齋藤どのにも、一門もあらうし、また家來衆もあらうが、今のやうな話しを聞きましたならば。
兵庫　無念、口惜しいと存ずるであらうか。
才兵　サア、其所は人情、腰拔けのやうな侍ひでも、譯を聞いては、おのれやれ。
トこなしあつて
へ、、、、力身返つてがなござりませう。
兵庫　ア、イヤ、鬼畜に劣つた龍興を、主と頼む家來の奴原、よも無念とは思ふまい。
才兵　其所の所は、なんとござりませうやら。
トこなしあつて、この時分、上の方柴垣の後へ圖書出かけ、兵庫を鐵砲にて狙ふ。兵庫、こなしあつて
兵庫　身の代の短刀、承知したか。
才兵　莫耶が打つた名作でも、町人の身では猫に小判。殊に龍興とやらが首を掻いた短刀とあれば、第一がマア、不吉と申すもの。
兵庫　すりや、望みにはないか。
才兵　不承知に存じまする。
兵庫　ハテナア。

ト思ひ入れあつて、圖書をフッと見る。圖書、ちやつと引込む。兵庫、ギックリと思ひ入れある。バタ〱にて奥より棧橋、走り出て

棧橋　才兵衛さん、爰にかいなア。とつとモウ、ひよんな事が出來たわいなア。

才兵　ひよんな事とは。

棧橋　サア、お前が大切にさしやんす、伏屋さまの

ト云はうとする。

才兵　ア、コレ、賤が伏屋の月を見や。

ト唄に紛らし

冴えた月でも見ようと思うてか。

棧橋　イ、エイナア、お前に隱して、彼のお方に、ちよつとお話しを申すうち、わたしをば突き放して裏道から、どつちへやら。

ト才兵衛、恟り。

才兵　ヤア、すりや捕り手の。

ト云はうとして兵庫を見て

ホイ。

ト當惑のこなし。棧橋、ウロ〱して

棧橋　こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

トそゞろのこなし。圖書、また出て兵庫を目がけ火蓋を切らうとする。兵庫、棧橋を引廻し、上の方へ突きやる。圖書、的が違ふゆゑ、いろ〱合せるこなし。

兵庫　松の事が不承知ならば、初めの通り、矢張りこれたる太夫を。

才兵　有情と非情の松の位を。

兵庫　身請けして身共が妻女に。

棧橋　わたしや、どうあつても。

才兵　ハテマア、寄る邊定めぬ苦界の身の上。

兵庫　引く手に靡け青柳の、千筋百筋。

ト兵庫、才兵衛へ目を附け

詮議の落着、目當はこの

ト右の短刀を縁先の吊り花活けへ打つ。ト花活けの鎖切れて短刀は柱へ立つ。本水零れて鐵砲の火繩濕る。圖書、鐵砲抛り付け、ムッとしたこなしにて、ツッと入る。才兵衛、見て

才兵　すりや、今のも。

兵庫　爰彼所を御徘徊いたして、某を狙はんなど〻は、及ばぬ。イヤ及ばぬ。

ト才兵衛を目がけ、刀を拔かうとする。才兵衛、傘を

片手に掴んで兵庫が腕を押へ、双方チッとこなしあつ
て、
才兵　上見れば及ばぬ事の多かりき、笠着て暮らせおのが
心に。
ト兵庫、傘を肱にて落し、刀をしやんと納め、こなし
あつて
兵庫　その傘の宿りもなく、雨露に出立つて、みの一つだ
になきぞ悲しき。
ト棧橋を見る。
棧橋　ほんに思へば味氣ない身の上。
ト泣かうとするを
才兵　ハテサテ、コレ、勤めする身は、いづくの浦でも。
兵庫　同じ假寢の宿の亭主。
才兵　居續けのお大盡樣。
兵庫　身請け致して直さまいなば。サア、稻葉山の落城
を。
才兵　聞くも
兵庫　語るも。
才兵　一佛他生の緣ぞと思へば。
ト手を組み、チッとなる。兵庫、尻目にかけて

兵庫　餘所には洩れぬその身の、イヤサ、身の上の工風を
とくと。
棧橋　わたしやどうでも。
ト才兵衞が側へ行かうとするを、引廻して
兵庫　ハテ、才兵衞、後刻。
ト唄になり、兵庫、こなしあつて、棧橋を連れ、才兵
衞へ目を殘し、奧へ入る。才兵衞、チッとなり、手を
組み居て、後を見やり、こなしあつて
才兵　藤原譜代の萬野兵庫、我れを齋藤の餘類と氣取つた
上、あのやうに目を付けるは、土中を穿つて埋め置いた
調伏
ト云はうとして
雨の不思議は彼れが懷中、慥かに時雨の……底意を探る
先を打つて、美濃の沒落、龍興公御最期の樣子、無念重
なる御切腹の、短刀はアノ。
トつか／＼と柱に立つ短刀を拔き取り來て、こなしあ
つて。
切尖よりはゞき元まで、錆びついた血汐は、龍興公の御
無念の魂魄。せめて御最期の場所に、父主膳か、斯く云
ふ藏之助が有り合さば、斯く淺ましき御生害はあるまじ

きものを。
ト切尖をヂッと見て
その折からが思ひやられて。エヽ……。
ト身を慄び、いろ〱あつて、どつさりと下に居る。
この見得にて、返し。道具廻る。
造り物、正面、三間の簀垂れ屋體。上の方、筋交ひに御簾屋體。この上に起雲閣と云ふ額を掛け、下座の方、後にて御簾巻き下ろし、舞臺先に泉水、山吹の盛り見事にあるべし。道具とまる。ト眞の神樂になり、橋がゝりより、有平、ちよつと目を付ける。雁助、上手より出て、これを見て後へ寄る、思ひ入れあつて、ツイ〱と行かうとする。上の方より。八内、出て、直ぐに切つてかゝる。有平、身をかはす。雁助、切りかける。立廻りあつて、兩人が腕首を取る。
有平 狼藉な。何ひろぐのぢや。
ト双方へ突き放す。
雁助 亭主才兵衛が引籠りし、御簾の一間。主人圖書さまが御吟味をなさるゝまで
八内 萬一餘人が慮外いたさば、打つて捨てよと主人の云ひ付け。
有平 ムウ、すりやこの一間へ。
兩人 踏切り込まば眞二つぢやぞ。
有平 此方にも不審のかゝつた一間の吟味。そこ退いて通せ。
兩人 イヽヤ、通さぬ。
有平 妨げせば切捨て。
雁助 身共より先へ、うぬを。
ト切りかける。
有平 猪小才な。なにを。
八内 所を。
ト双方一時に切りかける。激しき立廻りあつて、有平、兩人を切り倒し、こなしあつて
有平 揚屋の座敷に不相應な御簾の一間。人の出入りを止めて、才兵衛が閑居するは、正しく一物。事の實否。この御簾を引きちぎつて。さうぢや。
トきつとなり、行かうとすると、臆病口より、圖書、出かけ居て、有平を付け廻し
圖書 一間の吟味、うぬにはさゝぬ。

有平　好い所へ伯父御の御入來。こなたにも詮議がある。
覺悟して腕廻した。

圖書　小癪な下郎め。くたばつてしまへ。

ト切りかける。立廻り。

有平　拙者が命は、まだ〳〵入用。

ト突き放す。

圖書　所を。

ト切りかける。立廻り。始終眞の神樂にて、この間に正面の御簾上がると、内に東藏、百日鬘、着流しに大小、上手に旗棹に旗を立て、この前に香爐を置き、香を焚き居る。後ろ一面金襖にて、燭臺二本仕掛けにて火筒上げ下げあり。圖書、有平、立廻りにて、程よくとまる。

圖書　お身は東藏。

有平　ナニ、東藏とは。

ト圖書、東藏を見て

ムウ、形を見せぬは八ツ橋村にて、主膳が譲りし伊賀流の忍術。

圖書　細言云はずと、くたばつてしまへ。

ト切りかける。立廻り、有平、圖書が刀を叩き落す。

東藏、九字切りかけると、有平ウンと悶絶して倒れる。圖書、見て

これは。

東藏　伊賀流の忍術、暫時の呼吸。

圖書　いつそ止めを。

東藏　アイヤ、血をあやすは御旗への畏れ。矢張り其まゝ。

ト靜かに香を焚き、扇にあふぐ。圖書、こなしあつて

圖書　ムウ。すりや、才兵衛が計らひに依つて、御簾の一間と名付けし謂はれは。

東藏　先祖を祀る心の追ひ腹。今こそ明かす某が本名。足利の下知として篠原左京太夫に亡ぼされし、齋藤龍興が家臣、稻田伊豫之助が一子萬壽丸。

圖書　ナニ、伊豫之助が倅萬壽丸とな。

東藏　まつた才兵衛と云ふは、某が腹心、六郷主膳が倅同苗藏之助と云ふ者。主君龍興どのゝ遺兒、山吹姫を守り奉り、斯くしつらへし御簾の内は、四海遍歷、時候を計る工風の別業。

圖書　イ、ヤ、大義をなさん者、斯く一間に引籠り、人を

東藏　恐るゝ卑怯の振舞ひ。

東藏　ハヽヽヽ、愚か〳〵。その身帷幕の内にあつて、謀り事を巡らすは、將たる者の常。斯く先祖の祭りに事寄せ、足利武將を調伏の呪文。

圖書　ムウ。すりや武將義晴公を。

東藏　呪詛の印は中庭の松の木の元。

圖書　すりや、中庭の松の木の元。ムウ。

ト宗助出て

宗助　圖書どの、車輪の轡は如何でござる。

圖書　イヤサ、その轡は。

東藏　望みの一品。

ト懷中より袱紗の袋を出し拋る。圖書取つて

圖書　これは。

東藏　馬具にはあらぬ轡の笛。其方に頼まれ、盜み取りし似せ物を渡し置き、これまで所持せし誠の寶。

圖書　すりや、この笛を。

東藏　四海に羽を伸す稻田東藏。寶は望まぬ。汝にくれる。

圖書　天晴れ〳〵。して、足利を亡ぼす手段。

宗助　味方集むる軍慮の工風は。

東藏　某の軍配、伊賀流の忍術。

ト一卷を出し合掌して、サツと廣げる。トどろ〳〵にて、後の燭臺仕掛けにて一時に消える。ト兩方の通ひ道より、黑裝束の侍ひ大勢、龕燈提灯を持ち、しと〳〵出て、本舞臺に直り、左右へ二行に並び

東藏　雪。

西忍　鐘。

東藏　鐘。

東忍　雪。

東藏　兼ねての合圖。時刻を違へず、何れもぬかるな。

皆々　ハツ。

圖書　ムウ。すりや雪鐘の合ひ詞を以て。

東藏　場所を違へず、惣軍を屯する某が計略。合點な。

皆々　ハア、。

東藏　皆行け。

忍び　ハ、ア。

トどろ〳〵にて御簾下りる。忍び皆々元の通ひ道へ入る。

宗助　ハレ、不思議の忍術。

圖書　然らば身共は車輪の轡を。

宗助　武將の御前へ誘引いたさう。

ト此うち、有平、氣の付きしこなしにて

有平　さてこそ轡の在所。

ト圖書にかゝる。宗助、有平を突き廻して小筒を構へる。有平、悩りして

宗助　寄つたら二つ玉ぢやぞ。

有平　コリヤ、聊爾いたすな。

ト合ひ方になり、圖書、先に立ち、宗助、有平の方へ鐵砲を抱へながら圖書に付き添ひ、靜かに向うへ入る。有平、ヂッと向うを見詰めて居て、こなしある。

ト橋がゝりより、銀兵衞、出かけ

銀平　有平、今のは。

有平　飛び道具に支へられ、口惜しや圖書を。

銀兵　それよりは稻田東藏、例へ忍術を行ふとも、忠義に凝つたる我れ〱が一心。

有平　誠に目前、爰に隱れ忍ぶ稻田東藏。

銀兵　召捕つてお家の納まり。

有平　銀兵衞さま。

銀兵　有平、來やれ。

ト兩人こなしあつて、奥へ駈け込まうとする。ト眞中の御簾上がる。兵庫、衣裳長上下に改め出かけ

兵庫　兩人待て。

銀兵　兵庫どの。

有平　お旦那、今のあらまし。

兩人　お聞きなされましたか。

兵庫　諸人をくらます伊賀流の忍術。

銀兵　神力も勇者に勝たずと云へば、稻田東藏。

トきつとなる。

兵庫　イヤ、荒立てるは事の破れ。

有平　轡の在所は伯父御圖書。

ト向うを見る。

兵庫　サ、それも手に入る時節があらう。

ト銀兵衞、有平、こなしあつて、兵庫が左右より詰めかけ。

銀有　して、東藏を亡ぼす工風は。

ト兵庫、こなしあつて、

兵庫　廓に集まる謀叛の大寄せ。彼れらに合ひ詞……雪……鐘……場所を違へず埋伏せよとは、ハテナア。

銀兵　ムヽ。すりや、雪鐘の合ひ詞を以て。

有平　敵に用ゆる隱し詞を。

兵庫　工風いたすが詮議の道筋。
銀兵　雪。
有平　鐘。
兩人　ムウ。
　ト有平、銀兵衛、兵庫、三方にて一時に手を組むと、内にて、右新唄の合ひ方になり、庭先の池にて蛙鳴く。兵庫、池の方を見て
兵庫　池にうつらふ山吹の盛り。おのが住家と蛙の鳴く音は
銀兵　奥の唱歌は才兵衛が工風の新唄。
有平　もしやこれも隱し詞に。
銀兵　爰は吉原出口の柳。
有平　招く禿が合圖の手管。
銀兵　合圖。
有平　合ひ詞。
兩人　ハテ。
　ト思案する。兵庫、こなしあつて
兵庫　漢の御代に、張良と云ふ者、唄を作りて市に觸れ、流言させし軍慮の秘密。この心を以て雪、鐘。ムウ。
　トこなしあつて

銀兵　座敷のかゝり、風雅を好む亭主才兵衛。
有平　御殿に等しき座敷の經營。
銀兵　庭の物好き、山吹の花。
　ト思ひ入れあつて
有平　もと齋藤は美濃の國の生立ち。領地も空しく亡び失ひしを、山吹の花見に譬へ、みの一つだになきぞ悲しき。
銀兵　一首に籠めし謀叛の根ざし、稲葉山に籠城して、足利の御代を覆へさんと謀りしも、遂に空しく亡び失せる。
有平　龍興が寵愛の娘一人、家臣の計らひに依つて囲みを拔け出で、都のうちに人になりしと傳へ聞きしが
銀兵　もしやこれを守り立て。
有平　謀叛の根組み。
銀兵　解り難きは合ひ詞の
有平　雪。
銀兵　鐘。
兩人　ムウ。
　トこなしあつて、兵庫もこなしあつて
兵庫　雪は水なり、鐘も金氣。金生水と和合の心か。ハ

テ

トこなしあつて、上の方の額を、フッと見て

起雲閣と記せしあの額。起雲の文字は雲を起す。

銀兵　虎嘯けば風を起し

有平　龍吟ずれば雲を起す。

兵庫　龍の一字を廻らすあの額。くんすれば即ち龍興。

銀有　すりや、龍興が。

兵庫　サア、雲を起し雨を呼ぶ、一天四海を覆さんず額の文字。

銀兵　美麗を好む庭の物好き。

有平　榮華を飾る御簾の座敷。

兵庫　この所の絶景、御簾の一間。

ト思案のこなしにて、フッと御簾の方へ目をやり

御簾をかゝげて庭の絶景。

ト思ひ入れある。ト合ひ方とまる。

御簾を掲げて、ムウ。

トきつと工風のこなし。

誠にこの御簾の心を以て、才兵衛が工風の流言。東藏が合ひ詞。悟りが開けた。兩人安堵。

銀兵　ムウ。すりや、唄の唱歌。

有平　隱し詞も

兩人　この御簾の心を以て

兵庫　如何にも。白樂天が雪中の詩歌。七言の粹を以て、敵に用ゆる隱し詞。

銀兵　白樂天が雪中の唐歌。

有平　七言の粹を以て

銀平　合ひ詞と定めしとはな。

兵庫　それ、一條帝のいたらん時、偶々朝雪大いに積りしかば、香爐峯の雪は如何と宣旨ありしに、有り合ふ諸卿答へる能はず、淸少納言傍らに侍りしが、其まゝ立つて御簾を卷き上ぐ。帝大いに感じ給ふ。この心は、彼の白居易が詩に、香爐峯の雪は簾を掲げて見る、いあいしの鐘は枕をそば立て聞くと云ふ、詩の心を以て見れば、洛陽東寺を香爐館と名け、埋伏の場所と定め、彼の張良が例しを妥に、流言させる自作の新唄。青葉さかゆる稲葉の松は、先祖稲田を觀せし心、廓の出口に味方の殘黨、招く合圖は忍び逢ふ夜と、つゞけし手爾波。彼れを思ひ、これを覺れば、心一致に會合の場所と云ふは、東寺羅生門であつたよなア。

銀兵　誠に香爐峯の雪。

有平　いあいしの鐘。
銀兵　雪にすゝぐの謎もあれば
有平　鐘に響くの稱へを以て
銀兵　先祖の恥を雪とすゝぎ
有平　名を萬天に響かす突き鐘。
兵庫　東寺の明けを合圖と定め、足利御所に押寄せんと云ふ、彼れらが工風の謀計であつたか……ハ、、、ハテナア。
銀兵　すりや、埋伏の場所は。
有平　東寺羅生門。
ト兩人、顏見合せ
兩人　ソレ。
ト血相して行かうとする。
兵庫　兩人、待ちやれ。
兩人　イヤサ、羅生門へ參つて。
兵庫　敵の枝葉は枯らすとも、古木の根組みは稻田東藏。
兩人　すりや、稻田東藏。
トきつと立ちどまる。
兵庫　彼れが壽命も今暫らく。有平近う。
有平　ハツ。

ト寄る。兵庫、有平に囁く。
ムウ。すりや圖書どのも。
兵庫　網代の鱗屑。
有平　網にかゝつた四海の科人。
兵庫　召捕つて主人へ忠義。
有平　加勢の爲に拙者も。
兵庫　直さま東寺へ。
有平　彼の野邊は一筋道。
兵庫　有平、早う。
有平　ハツ。
ト凜々しく向うへ走り入る。ト内より大次郎出て
大次　コレ父樣。盜人めは、おれが切つてやらうぞえ。
銀兵　オヽ、手柄をさすぞよ。
ト兵庫が側へ行て
兵庫どの、して東藏が術を挫くは。
兵庫　今宵を過さぬ修羅の道場。
ト池の方を見て
蛙の鳴く音、殺伐たるも、彼れが寂滅知らせの前表。
ト池を眺め、蛙を目掛け手裏劍打つ。蛙、鳴き止む。
銀兵　これは。

兵庫　ソレ。
ト銀兵衞、池の方へ行て、小柄の立ちし蛙を取上げて兵庫に渡す。兵庫、取つて小柄にて蛙を切り割り、蛙の血汐を香爐の中へ絞り込むこなしあつて
兵庫　齋藤が先祖を祀る香の煙り、蟇の生血にこれを穢せば、すべて彼れらを調伏の願文。
銀兵　すりや、蟇の生血を以て。
トこの時、香爐よりパッと掛け煙硝立つ。兩人、キッと空を眺め
兵庫　ムウ。蟇の生血一途の妙火となつて。
銀兵　赫々たる星の光り、破軍の劒先、西北に向ふべきを、劒先すべて東に向ふは。
兵庫　即ち東寺羅生門、東に隱るゝ東藏が忍術、天の命數極まる運命。
銀兵　東藏はさもあらんが、心憎きはこの家の才兵衞。彼れが素性は。
兵庫　稀田が舊臣、六郷藏之助と云ふ者。
銀兵　すりや、拙者が。
ト銀兵衞ギックリ。
兵庫　主膳が爲には實の倅。親子の義理と古主の忠義。

サ、滅多に所存は定められまい。
ト銀兵衞、思ひ入れあつて、大次郎を突き据ゑ、切らうとする。
兵庫　銀兵衞、待ちやれサ。
銀兵　男子ながらも母方の惡縁、血筋を切つて拙者が潔白。
ト切らうとする。兵庫、スッと下りて銀兵衞を突き廻して、大次郎を引寄せ
兵庫　人質慥かに預かり申した。
銀兵　ムウ。すりや、倅めを。
兵庫　一心狂はぬ一つの功は、中庭の松の木の元。
銀兵　ナニ、中庭の松の元に。
兵庫　忠義を立つる一品があらう。
銀兵　何にもせよ、土中を穿つて。
兵庫　早く行きやれ。
銀兵　ハッ。
ト銀兵衞、橋がゝりへ走り入る。兵庫、こなしあつて。
兵庫　坊よ。コリヤ。
トちよつと囁く。

大次　ア、、合點でござる。
兵庫　行け／＼。
ト大次郎走り入る。ト また眞の神樂になる。兵庫、こなしあつて
祭事の樂は、すべて彼れらを調伏の音律。ハテ。
ト思ひ入れあつて、元の所へ來る。奥より、お半、醉ひたる體にて銚子杯を持ち出て
はん　萬さま、爰にかえ。
兵庫　仲居のお半、酒機嫌と見えるな。
はん　アイ、わたしは。
ト懐劍にて突きかゝる。兵庫、留めて
兵庫　心あり氣な其方が素性。
はん　わたしや仲居。
兵庫　イ、ヤ、稲田東藏が思ひ者。
兵庫　エ。
ト兵庫を突きかくる。兵庫、お半を下へ突き落し
兵庫　共に連なる謀叛の枝葉。
はん　なんのマア、わたしが。
兵庫　あらがはさぬ慥かな證據は、我が君様、これへ御入りあられませう。

ト眞中の襖を明ける。義晴、衣裳上下に改め、伏屋之助、衣裳上下にて付き出る。
義晴　萬野兵庫、忠臣の心遣ひ、天晴れ／＼。
兵庫　ハッ。
ト平伏する。お半、見て
はん　ヤア、こなさんは。
義晴　氏江左衛門が倅と名乘りしは、叛逆の枝葉詮議の爲。
伏屋　畏れ多くも足利武將義晴公。
はん　エ、。
ト悔り。
義晴　敵の姓名、東藏が自筆の連判。
兵庫　新吾、參れ。
喜作　ハア。
ト喜作出て
仰せに從ひ、八代が家來と偽はり、姫君を奪ひ返してござりまする。
兵庫　出かした。その女を。
新吾　女め、胸廻せ。
ト かゝるを突き廻して
はん　善悪ともに、夫と共に。

兵庫　ト自害する。
兵庫　天晴れ最期。ソリヤ。
喜作　ハア。
　ト首をポンと切る。
義晴　これより直ぐに東寺へ立越え、殘黨を討ち亡ぼし、
凱歌を唱ふる下知の采配。
兵庫　者ども、參れ。
三人　ハア。
　ト橋がゝりより、おまつ、當吉、大次郎、凛々しき形
にて出て、兵庫が前に並ぶ。
義晴　この者どもは。
兵庫　忠義に死したる信濃の當藏が二人の悴、稻田東藏は
父の敵、又一人は銀兵衛が悴、六郷藏之助が討手の役目。
坊よ、ぬかるな。
まつ　父樣の敵。
當吉　東藏。
大次　藏之助。
　ト皆々キッとなる。
兵庫　オヽ、出かす〳〵。
　ト扇にて三人を煽ぎ立てる。

義晴　子供の生先、兵庫よきに。
兵庫　ハッ。
伏屋　武將には、此まゝ東寺へ。
兵庫　我が君のお立ち。供先、參れ。
　ト內にて
大勢　ハアヽ。
　ト所知入りの合ひ方になり、義晴、こなしあつて、
伏屋之助、喜作、子役、皆々付き添ひ靜かに向うへ入
る。後に兵庫、こなしある所へおせん、出かけ
せん　兵庫さま。
兵庫　色紙差上げし功に依つて、二人の子供は武將へお目
見得。
せん　夫信濃の當藏が、修羅の妄執、經陀羅尼の追善より、
この上もない我が子の出世。これと云ふも、兵庫さまの
取計らひ。エヽ忝ない。
兵庫　禮には及ばぬ。其方は、コリヤ。
　ト囁く。
せん　そんなら、この家の。
　ト兵庫、差添を抛り
兵庫　早う。

ト おせん、差添を脇挟んで

せん　畏まりました。

ト おせん、橋がゝりへ走り入る。兵庫、こなしあつて

兵庫　最早今宵も。

ト 空を眺め

敵の壽命も月の入り汐。

ト 刀を杖にキッと見得あつて、これにて返し。

造り物、一面の竹垣、奥庭の體。合ひ方にて道具とまる。ト 橋がゝりより、おせん、出て思ひ入れあつて、鯉口をくつろげ、奥へ行かうとする。臆病口よりお丸出かけ、おせんを突き廻し

まる　おせん、こりや何所へ。

せん　サア、わたしは。

まる　何所へ行くのぢや。

せん　サア、きつう夜も更けたに依つて、切り戸口の締りをちよつと。

ト 行くを突き廻して

まる　イヤ、待て。見れば腰に刃物を帶して。

せん　エ。

まる　底意の知れぬわれが素性。一寸も奥へやる事はならぬ。

せん　妨げさんしたら、容赦はないぞえ。

まる　小癪な。なにを。

ト 突き廻す。

せん　いつそ。

ト 拔打ちに切りかゝる。立廻りあつて、お丸、拔身を奪ひ取り、おせんへ突ッ込む。

エヽ、仕損じて口惜しいわいなう。

まる　兄左忠太が無念を受け繼ぎ、女ながらも思ひ立つた大望。軍神の血祭り。

ト 抉る。

せん　エヽ、それと知つたら、斯く不覺は取るまいものを。

まる　細言云はずと、往生しをれ。

ト いろ〳〵抉る。おせんが死骸を井戸へ入れる。此うち、才兵衞、出かけ居て

才兵　出かした〳〵。女房、疑ひ晴れた。

まる　才兵衞どの、そんならお前も。

才兵　稲田が家來、六郷藏之助時澄。南宮が妹とは、疾よりも知つたれば、心措きなく時節到來。

まる　廓に流行らす新唄。
才兵　女房への口の端に、味方を集むる智略の流言。今ぞ
顯はす謀叛の兆し。
まる　兄左忠太が無念の魂魄。
才兵　父の主膳が未來の供養。主人には早、東寺へ出陣。
まる　殿様へお目見得。さうぢや。
ト行くを留めて、
才兵　コリヤ、系圖の御旗。
ト拋る。お丸、取つて
まる　そんならこれを。
才兵　主人の御前へ。
まる　心得ました。
才兵　早う行け。
トお丸、旗を持ち、向うへ走り入る。始終合ひ方。才
兵衛、思ひ入れあつて、空を眺め、指を折り、星を繰
つてこなしあつて
才兵　今宵の手段。兼ねて主人の本懷。
トこなしあつて、空をキッと見る。
歳星榮惑、太白震星。
ト星を繰り〳〵花道へ出て

北方の宿星は牛女虚危室壁。
ト振返り、舞臺の方をキッと見て、こなしあつて
ヤア〳〵、南方宿星、火星金星を尅するは、ハテ心得ぬ。
トまた北の方を見て
北辰は南面して動かず。衆星は北面してたんだくす。我
が陣星、衆星の光に奪はれ……、金星と共に尅するは、
味方の不吉。東藏どのゝ身の上。東寺の屯も裏をかゝれ、
正しく亡ぶる天の告げ。ハヽ、ハテ、忌はしき分野ぢや
よなア。
トきつとなる。どんちやん遠責めになり、才兵衛、キ
ッとこなしあつて、空を見い〳〵、チリヂリと舞臺へ
立戻る。ト臆病口より、お里、お民、お萬、お淺、皆
皆白裝束、襷鉢巻にて出て圍ふ。才兵衛、これに構は
ず
心元ない主人の身の上。
ト向うへツカ〳〵と行くと、戸屋の方より、銀兵衛、
人形を持ち出て、才兵衛を圍ふ。才兵衛、こなしあつ
て、また橋がゝりへ行く。トおせん、お丸、棧橋、白
裝束、襷鉢巻、これにて長刀を持ち、連れ出て立ち塞
がる。才兵衛、棧橋を見て

ヤ、姫君を。

ト寄らうとする。銀兵衞、立廻りにて隔てる。

銀兵　六郷藏之助。

皆々　動くまい。

才兵　なんと。

銀兵　其方が企みの裏を掻いて、中庭の松の根を穿ち、調伏の人形を取上げたれば、最早遁がれぬ自業自滅。

まる　左忠太が妹と云ひしも、其方が俗性詮議せん爲。お家を勸めた局の藤波。

せん　コレ、この旗と諸共に、姫君を守り立て、齋藤の家名を立つる、武將義晴さまの情の計らひ。

才兵　すりや、これも兵庫が計らひぢやな。

トこの時、才兵衞が膝に流れ矢來て、發矢と立つ。

これは。

ト兵庫、弓を持ち、出かけ

兵庫　惡人を罰す神明の一矢、肝先へこたへたか。

棧橋　藏之助、心をひるがへしてたもいなう。

才兵　すりや、姫君のお身の上は。

銀兵　降參せずば、山吹姫を刺し殺さうか。

ト拔身を持ち、山吹姫にさしつける。

才兵　コリヤ、早まるな。

銀兵　降參するか。

才兵　サア、それは。

皆々　サア／＼／＼。

兵庫　藏之助、なんと。

ト皆々詰め寄る。才兵衞、こなしあつて

才兵　エヽ、無念や。子胥死して吳は傾き、范蠡存して越榮ふ。斯くまで謀りし我が謀計。一時に滅するは、よくも武運に盡き果てたか。エヽ……。

トいろ／＼こなしあつて、矢の根を腹へ突ッ込む。

棧橋　コレ、早まつた事しやつたなう。

ト才兵衞に取りつくを突き退け

才兵　一念凝つたる鋒先も、仁義に刃向ふ矢種も盡きて、兵庫どのへ今際の願ひ。叛逆の張本はこの藏之助と披露して、主人東藏どのは侍ひらしう、敵討の勝負をなされて下さりませ。こればかりがこの世の願ひ。

ト手を合す。

兵庫　イヤ、その願ひは叶ふまい。

才兵　藏之助が今際の願ひ。

兵庫　イヤ、其方は萬謀丸。

オ兵　ヤ、なんと。
兵庫　謀叛人の切腹、慥かに見屆けた。
オ兵　エヽ、忝ない。
せん　萬壽丸が相果つれば、稻田東藏は家の敵。
まる　討ち討たるゝはその身の運命。
オ兵　思ひ置く事、さら／＼ない。
ト引廻す。
皆々　この上は稻田東藏。
兵庫　萬壽丸は斯くの通り。
トオ兵衛が首をポンと切る。こなしあつて
これより直ぐに、東寺へ來やれ。
トこの一件、皆々臆病口へ入る。　返し
一面の幕になり、始終遠責めにて、橋がゝりより、
圖書、宗助を連れて出て
圖書　加藤次どのには、御苦勞に存じます。
宗助　なんの／＼。一刻も早く御前へ同道。
圖書　サヽ、お出でなされ／＼。
ト行かうとする所へ、有平、走り出て

有平　車輪の縛、此方へ渡せ。
圖書　面倒な下郎め、いつぞ。
ト有平に切つてかゝる、立廻りのうち、圖書、右の縛を宗助に渡す。
圖書　爰構はずと、縛を早う、
ト立廻り、宗助、向うへ行かうとして振り返り
宗助　有平どの、首尾よう參つた。
有平　お出かしなされた。御主人へ早う。
宗助　心得ました。
ト向うへ入る。圖書、恟り。
圖書　ヤア／＼、すりや一學が弟と云うたも。
有平　此方の味方。縛をしてやらうばかりぢや。
トこなしあつて
圖書　すりや、手段に乘つたか。エヽ、口惜しい。
有平　者ども、ソリヤ。
ト家來、バラ／＼と出て
家來　動くな。
圖書　寄つたら撫切りぢやぞよ。
ト立廻り、いろ／＼あつて、家來皆々逃げ込む。有平、圖書、早き立廻りあつて、追ひ込む。始終遠責めにて、

返し

造り物、東寺羅生門の體。一面の枝垂れ櫻、眞中の石垣を小立に東藏、大童の見得。上の方、義晴、床几にかゝり居る。この脇におまつ、當吉、大次郎、お里、お民、お萬、お淺。右の方に、おすわの方、長刀を構へ、伏屋之助、九重姫、銀兵衞、皆々凛々しく提灯を持ち、軍兵を下知して居る。この見得、松明、立て提灯數多、どんちやんにて道具とまる。

ト東藏、軍兵を相手に大タテいろ／＼あつてとまる。

東藏　寄つたら死人の山を築くぞ。

義晴　ヤア、愚か／＼。四海を騷がす叛逆人を召捕らんが爲、足利義晴、討手に向うた。

すわ　珍らしや稻田東藏。いつぞや本國を水責めにせし時、水遁の法を以て、難を遁がれしすわの方。最早天命、遁れはあるまい。

銀兵　其方を討取るは、古主人の忠義の潔白を立てる平柳銀兵衞。稻田東藏、遁がれはあるまい。

皆々　サア、尋常に覺悟々々。

ト兵庫、山吹姫を連れ出て

兵庫　ヤレ待て何れも。助け難き科人なれども、藏之助が忠死に依つて、家の跡目は山吹姫。

ト有平、圖書と切り結び出て

圖書　兵庫之助、うぬ、

ト付け廻し、兵庫に切つてかゝる。兵庫、圖書を押へて

兵庫　敵の片割れ。

銀兵　この上は稻田東藏。

皆々　再會々々。

ト打出し、

幕

けいせい忍術池（終り）

けいせい飛馬始

粟島の若殿は廓の先陣

新造の水上に一番乗の手柄者お敵は磯菜を包み重ねた蒸籠に陣屋の鐵漿つけ黑裝束は粹の水上音に聞えた駒木根の歳玉にいづ方も取あへず傳へとりゝ

島原の手まりうたに

向ひ通りやる熊野同者が肩に掛けたる帷子肩と裾とに梅の折枝中は御前反橋とてちゝろきりこつきり小女房をとて打たした吾妻海道でかゝたした

蚊田の嫁御は閨の勝鬨

初春の若水に一番鶏のぽつとり者お客は小松を引離けたる采配に揚屋の遠責め飾りの太鼓は禿の伏勢戀になづんだ手管の荒行お乳の人の橋玉に的は外さずめでたく〳〵

春畫　十二卷

けいせい飛馬始

寛政元年の二の替り狂言。正月廿五日初日で、大坂角の芝居に上場された。材料は天草軍記である。天草を紀州名草郡とし、天草四郎を尼子四郎、甚兵衛を山中鹿之助にしたなぞ、五瓶らしい御趣向を構へてある。粟島甲斐之助といふのは鍋島甲斐守で、乳母の忠死で足の病氣が癒えたといふ傳説を、京坂式に取込んである、これは默阿彌の天草軍記にも脚色された位で、先づ同軍記中一番のお芝居らしい個所だから、これを作り込んだのも尤もである。岩倉主膳正は板倉内膳、松ケ枝市之正といふのは松平伊豆守で、これが敵役になつてゐるなぞは少し可哀さうである。初演以來、京坂ではいつも大當りで、明治になつてからも興行された位であるが、五瓶が江戸へ初下りの際「花都廓繩張」と題し、大自慢で出したところ、見事に失敗してしまつた。江戸の看客には向かない狂言であつた。以後、東都では一度も出て居ない。

初演の役割は左の通りであつた。

傾城春雨、菓子尾上(澤村元三郎)乳人伏屋(嵐才三郎)毛利千里姫、傾城雛路(中村のしほ)傾城青柳、毛利岩姫、傾城幾浦、(芳澤いろは)吉川奥方萩の戸、傾城篠篠、後室小夜路(三桝德次郎)千葉勝右衛門、八代丹下、宇津村鯛右衛門(中山文五郎)毛利左京之進、森宗意軒(市の川彦三郎)廣島瀬吾、東條左衛門(中山榮藏)毛利照太郎、立花右近(小川吉太郎)赤星典膳、松浦喜藤治、岩瀬監物(山村友右衛門)名草甚兵衛、村澤兵庫、松ケ枝市之正(中村治郎三)鷲塚十右衛門、岩倉主膳正、立浪兵部(中山他藏)尼子四郎義久、粟島甲斐之助(中山來助)駒木根八郎、駒木根金左衛門、立浪伊達五郎(三桝大五郎)

けいせい飛馬始

發端　紀州名草郡離れ島の場

役名——百姓、四郎作　實ハ尼子四郎太夫義久。駒木根八郎。鷲塚十右衛門。千葉勝右衛門。赤星典膳。大矢五郎作。大館鄉右衛門。長濱幸左衛門。名草甚兵衛。

造り物、平舞臺、紀州名草郡離れ島の體にて、正面橋がゝり、臆病口、右三方に幕串を打ち幕張りあり、村々の書付けの旗幟、方々に立て、名草甚兵衛、捌き髮、鉢卷、陣羽織を着て、鹿の角の紋付きの幟を持つて、中央の床几にかゝり居る。駒木根八郎、鷲塚十右衛門、これも陣羽織凛々しき形にて、左右の床几にかゝる。その外大矢五郎作、千葉勝右衛門半切り小手、脛當にて、竹槍を携へ、皆々この見得

よろしく遠責めにて、幕明く。

甚兵　何れもこの度の企て、今日旗上げの血祭りに、山口中野を討取つたる吉左右も、鷲塚どの駒木根どの、御兩所のお働らき。天晴れに存じまする。

十右　それ、人窮するときは賊をなし、武士窮する時は死を極めて、亂をなすと云ふ如く、この鷲塚十右衛門、元は中國阿曾沼の家臣なれども、毛利元就に討ち亡ぼされ浪人となつて、當所名草の郡に蟄居の拙者。

八郎　イヤ、身共とて江州坂本の浪人、恨みある足利の御代、武將義晴をたつた一討ちと、思へど任せぬ時の運、時節を圖るその爲に、この名草の郡に立越え、野武士、土民となつて世を送る。

勝右　それなる甚兵衛どのゝこの度の企て。皆合體せしも以前の武名を輝かせん爲。拙者も中國尼子の浪人、千葉勝右衛門。

五郎　身共も同じ尼子の浪人。大矢五郎作。

甚兵　されば皆由緒正しき英雄なれど、時到らずしてこの名草の郡に百姓土民。常の懇意が時の幸ひ、この甚兵衛がお勸め申して、この度の企て。百姓徒黨と云ひ立て、京鎌倉を掌握。

八郎　日頃の望み、無念を晴らすも主人へ忠義。
甚兵　尼崎村へ討手に向ひし、赤星典膳も、同じ尼子の浪人なれば、何れも一騎に物頭と定め申して、
八郎　軍師は鷲塚十右衛門どの。
十右　イヤ〱、軍師とは憚りあり、貴殿こそ萬事の駈引きを。
八郎　ハテ、軍學に疎き拙者なれば、矢張り貴殿が。
十右　ぢやと申して。
甚兵　イヤ、御辭退あるな鷲塚どの、是非軍師は貴殿。武勇烈しき駒木根八郎どのは、この度の副將に。
八郎　拙者を副將とあれば、惣大將は貴殿。
十右　お年役なれば甚兵衛どの。
甚兵　ハテ、益體もない。
十右　イヤ、お年輩と云ひ、甚兵衛どの、御本名は尼子晴久公の舊臣、鹿之助どのなれば、ナウ駒木根どの。
八郎　如何にも。甚兵衛どのはこの度の棟梁なれば、
甚兵　イヤ〱、以前は尼子の家臣、麒麟と呼ばれ、武勇を現はせし山中なれども、斯く老いぬれば只の鹿之助。大將などゝは思ひも依らぬ儀。
勝右　ぢやと申して、大平味方に付きし村々の百姓、大將無くては歸伏仕らぬ。
五郎　副將軍師も定まりし上は、大將軍は甚兵衛どの。
勝右　イヤ、この度の企て、名草の郡の百姓、徒黨の大將軍になるべき、智仁兼備の勇者は外にある。
皆々　してその勇者とは。
甚右　赤星典膳、追ッ付け同道いたすでござらう。今暫らく。

ト向う小屋の内にて

笠膳　サア〱、四郎作どの、歩まつしやれ。
四郎　それでも、おりや親仁樣には逢はれませぬわいの。
典膳　ハテサテ、苦しうない。
皆々　ござれと云ふに。マア、ござれいの。

ト在郷唄になり、赤星典膳、半切小手臑當にて、四郎作ぼつとせの前髮にて、浴衣を引ッ張り、伊勢行李と菅笠を割りかけ、抜け參りの姿にて、典膳に引立られ出る。後より百姓軍兵、簑笠竹鎗にて附き出る。四郎作、花道に意地張り

四郎　コレ、お醫者樣の赤星さま、お前は分けて親仁樣と懇ろなお人ぢや。其やうに引立てずと、マア、親仁樣へ詫び言をして下さんせいの。

典膳　詫び言も何にも要らぬ。甚兵衞どのは、こなたを待ち兼ねてござる。
四郎　そりや京へ廻つたゆゑ、途方もなく伊勢參りが隙が入つたに依つて、それで叱らうと思うてか。そんなら猶内へは、去なれぬ〳〵。
ト振り切り、戸屋の方へ逃げようとする。百姓皆々留めて、
皆々　四郎作どの、待つた〳〵。
四郎　お前方も根性の惡い奴ぢや。これ程云ふに、おりやちよつと。
典膳　四郎作どの、甚兵衞どのはあれにござる。ちやつと行かしやれ。
ト四郎作を無理に本舞臺へ突きやる。四郎作、こなしありて
四郎　ヤア、親仁樣。
甚兵　忰、其方が下向を待つて居た。
四郎　南無三、夢になれ〳〵。
トすくむ。典膳、本舞臺へ直る。
勝右　赤星どの、小嶋村の樣子はな、
典膳　大吉左右、この度の企て、百姓徒黨の樣子を申し聞かせしところ、何の違背もなう、承知いたし、一味同心。
十右　小嶋村承知の上は、合して四十三ヶ村の百姓ども。
八郎　殘らず一味同心とあれば、先づは安堵。
典膳　甚兵衞どの、拙者小嶋村より、四郎作どのゝ下向を見受け、無理にこの所へ同道いたした。
甚右　それは御苦勞忝ない。
ト此うち四郎作。甚兵衞、十右衞門、八郎皆々が形を見て、あたりを見廻し。
四郎　とんと最前から、伊勢參宮で隙が入つたに依つて、南無三方下向したら、なんでも親仁樣に、こりや大きなお目玉を貰はにやならぬ事ぢやわいと、その事ばつかり思うて居て、氣が附かなんだが、親仁樣を始め、寺子屋の十右衞門さま、隣り村の兵法のお師匠樣。
ト皆々を見廻し、思ひ入れありて
お醫者樣の赤星さまと云ひ、内の下作の勝右衞門、五郎作どのまで、こりや途方もない形をしてぢやが、祭の練り物でもあるまいし、雨乞ひする時分でもなし、こりやどう云ふ樣子でござります。
甚五　忰、合點のゆかぬは、尤も。この甚兵衞、日頃の望

成就の時節。それゆゑ其方が下向を待ち兼ね居つた。

典膳　四郎作どの、こなたにも武勇を顯はすは今この時。

四郎　ムウ。何は知らぬが、親仁様が日頃の望み、叶うたとあれば、おれが下向の遲い縮尻も消えてしまうて、叱られる氣遣ひもなし　さうして皆此やうに。

甚兵　コリヤ、其方はこの度の企て。百姓徒黨の惣大將ぢやぞ。

四郎　エ、。

十右　ムウ。すりや御子息四郎作どのを。

甚兵　鶯の飼子の中の時鳥、子で子にあらぬ、あの四郎作。

皆々　なんと。

甚兵　ムウ。

ト合ひ方になり、床几を放れ、こなしありて、四郎作が手を取つて上座へ直す。四郎作もこなしあり、甚兵衞、ズッと下がつて兩手を突く思ひ入れ。

四郎　申し／＼親仁様、こりや何でござりまするえ。

ト立たうとするを

甚兵　イヤ／＼、苦しうござらぬ。矢張り其まゝ／＼。

四郎　でも、どうやら、子の身として親が、

甚兵　イヤ、親でない、悴でござらぬ。こなたは現在拙者が御主人。

四郎　エ、。

甚兵　誰れあらう。出雲石見の御主、尼子伊豫之助晴久公の御胤、御幼名は義丸公。拙者は御家來、山中鹿之助幸盛。

四郎　ムウ。すりや稚なき時より由緒ある、身の上と仰しやつたは。

甚兵　世を憚り、曾て様子を明かさず、我が子となして育て上げしは、十六年かその年月、無念の世渡り。

四郎　この名草の郡の百姓　甚兵衞が悴の四郎作と思ひし我れを、いま尼子晴久どのゝ胤と云ふには、何ぞ慥かな。

甚兵　證據と申すは、御肌に添へられし守は、即ち二重鶴臍の緒の書付けは、御父晴久公の御手蹟。

四郎　すりや、この守が。

ト首に掛けたる守を取つて、袋を取り見る。八郎も十右衞門も守にキッと目を附け居る。

甚兵　世に稀れな二重鶴の古金襴。ソレその如き守を證據に、この年月尋ねる、今一人の御妹御。これとても晴久公の肉身。こなたと御兄弟。

四郎　すりや、肉身の妹の行くへも知れぬとな。
甚兵　同じ裂れの守、證據に尋ねる妹君。
　ト此うち、四郎作、守より書付けを出して見て
四郎　我が誕生は永祿四年辛の酉。
甚兵　晴久公の御最期は永祿六年癸の卯年。出雲の國富田の城の敗北に。
四郎　聞き傳へしその合戰、毛利に責められ、尼子の落城。
　ト此うち十右衛門思ひ入れ。
十右　永祿六年は、今年で丁度十七年。
勝典　江州坂本の沒落も、同じ年號十七年。
勝典　その無念を晴らさん爲。
甚兵　年同の今月今日。
四郎　慥かな證據ある上は、すりや、この四郎作は、尼子伊豫之助どのゝ胤にて、父と思ひし其方は、家來であつたか。
甚兵　御成人を待ち兼ねし拙者が本懷。
四郎　ハテ、思ひがけないこの身の上。
甚兵　百姓徒黨の大將と仰いで。
四郎　倶に天を戴かぬは孝の道。

甚兵　父君の御無念、何れもの義心。
勝五　尼子浪人の我れ／＼まで
八十　力となつて、共に旗上げ。
　ト兩人、竹鎗取つて兩方より四郎作に突きかゝる。右三人早き立廻りにて、しやんと留まる見得になる。
甚兵　御兩所、それは、この大將の器量を試して、
　ト また立廻り、よろしくありて
四郎　イヤ、若年なれど武藝を好んで、農業の暇に鋤鍬の鎗術。空竿の竹刀打ち。綿の芽出しに、飛び越えの早業も少しばかりの心掛け。
十右　天晴れ、學ばずして、自然と備はる奇々妙々。
八郎　早業と云ひ、眼備の構へ。
甚右　父教へざればその子愚なりと云へど
八十　爭はれぬ尼子の公達。
三人　我れ／＼も驚き入つた。
甚右　すりや、拙者が望みの通り
四郎　百姓徒黨の大將と、仰がれても大事あるまいかな。
八十　エイ。
　ト兩人兩方より手裏劍打つ、四郎作、左右にて請け

留め

四郎　しつこい。こりや、まだ試すのか。

八十　見事。

甚兵　栴檀は二葉。

十右　一將は得難く

八郎　萬卒は求め易し。

甚右　すりや、この上は。

四郎　百姓徒黨の大將と仰がれ、大望の旗上げ。

三人　氏と云ひ、器量と申し

八十　天晴れの御大將。

ト兩人、四郎作が左右へ畏まり

十右　鷲塚十右衛門。

八郎　駒木根八郎。

兩人　御下知に從ひ、粉骨碎身。

甚十　我れ〳〵も忠勤を勵みませう。

ト辭儀する。四郎作、ヂロリと見て

四郎　君は船なり、臣は水なり、水よく船を浮むとやら。未だ柔弱の我れなれば、各々の助力を以て、何卒父が無念を散ずるよう。

皆々　お氣遣ひあられますな。

典膳　この上は用意のお小袖。

勝五　帷幕の内へ。

ト四郎作、こなしありて、菅笠にさして、ある劍先きのお秡を恭々しく持つて

四郎　今日の吉事、この身の幸ひ、全くこれ宗廟天照大神の御惠み、猶正直の頭に宿る義兵の旗上げ。

皆々　追ッ付け會稽

四郎　何れもの詞に從ひ、

甚兵　御辭退なく。

皆々　イザ〳〵。

ト君八千代ませの謠になる。四郎作、幕の内へ靜々入ると、橋がゝり、バタ〳〵にて、大館鄕右衛門。野袴幸左衛門、野袴にて、只の代官の形、捕り手大勢連れて出て

兩人　ソリヤ。

捕手　動くな。

十右　ムウ、さては當所の代官、討手に向ひしよな。

鄕右　如何にも。當名草の鄕の浪人ども、村々の百姓を語らひ、謀叛の樣子上聞に達し、討手に向ひし大館鄕右衛門。

幸左　長濱幸左衛門。
鄕右　サア、浪人ども、遁がれぬ所ぢや、腕廻せ。
　ト切廻せば、
三人　なにを。
　ト無二無三に切り散らし、捕り手を三人追うて入る。
　鄕右衛門幸左衛門殘りて、十右衛門に切つてかゝるを
　ちよつと立廻り。ボンと當てる所へ、典膳勝右衛門五
　郎作、切り散らし出て來て
三人　何の苦もなう今の奴等を、切り散らしました。
八十　オヽ、お手柄〳〵。
　ト遠責め花道の内にて打つ。
甚兵　ムウ。さては今の討手を切り散らせしゆゑ、あの同
　勢を以て召捕りに向ふのか。
十右　よし〳〵。討手を待たず、此方より押寄せ
八郎　敵の奴等を驅け散らし
典膳　一々に撫切り。
甚兵　さうぢや。
四郎　何れもは暫らく。
皆々　ハツ。
　ト皆々こなしありて、ツカ〳〵と本舞臺へ戻り、左右
　へ並よく直る。正面の幕切り落す。四郎作、衣裳長上
　下にて金の采配を持ち、百姓の軍兵を從へ、つッかけ
　の鳴り物にて前へ出る。皆々低頭する。
皆々　天晴れ出立ち。
甚兵　御大將どのでござるぞ。
皆々　ハヽア
　トこなし。四郎作もこなしありて
四郎　猛虎尙惠と仁とを知る。治亂我れにあり、敵にあら
　ず。未だ要害調はざるうちに、敵に向ふはこれ粗忽。一
　且緩めて、謀り事を以て、勝つ事を工風いたされてよか
　らう。
甚兵　智と云ひ勇と云ひ、勇ましい御賢慮の程
十右　身命を抛つても
八郎　露惜しからぬ御大將。
四郎　風に據らずんば何を以て雲霧を散ぜん。人師に倚ら
　ずんば何を以て迷ひを解せん。この上は駒木根、鷲塚、
　山中も只よきに。
十右　それ、義を見て爲ざるは勇なし。かゝる大將ある上
　は、この名草の郡を立退き、九州へ押し渡り、要害よき
　土地を見立て、城を構へ、毛利菊池を亡ぼす手段。

八郎　如何にも。鷲塚どのゝ仰せの通り、時日を移さず打立たん。
甚兵　謀り事は密なるを以てよしとすと云へば、九州へ渡るにも、大將始め目立たぬやうに、何れも密かに。
四郎　云ふにや及ぶ。鹿之助、其方は猶も妹が行くへを。
甚兵　二重衞の守を證據に。
八十　先づ大將には、受領ありて御姓名を。
四郎　百姓の呼び名を直ぐに、尼子四郎太夫義久。
三人　吉日を選んで御元服。
甚兵　九州へ出立も取急がん。
ト此うち鄕右衞門、幸左衞門、起き上がり、窺ひ
鄕右　樣子は聞いた。
幸左　尼子の殘黨。
ト四郎にかゝるを、八郎十右衞門引廻し、一刀にポンと切る。
八十　先づは血祭り。
皆々　めでたく勝鬨。
ト「エイ〳〵、オ、ウ。」
ト大鼓鉦打込みよろしく

幕

口明　博多廓揚屋の場

役名——毛利照太郎。松浦喜藤治。三上清藏。廣島源吾。福原軍八。妹、千里姫。奴、島平。傾城青柳。同、春雨。禿子、雛松。同、小里。同、梅路。質屋喜右衞門。車借り善右衞門　實ハ大矢五郎作。千葉勝右衞門。鷲塚十右衞門。名草甚兵衞。岩倉主膳。

造り物、一面の通り屋體。向う打抜き裸通り、幾重もありて奧深き千疊敷の體。兩方筋違ひに塗り骨の障子、欄干の所に注連繩を張り、橋がゝり切り幕の兩方に門松、注連飾り、柱に蓬萊屋と云ふ掛け行燈掛けあり、二重舞臺の上に禿子雛松、小里、梅路その外子供仲居大勢、皆々差向ひになりて手鞠を突いて居る。舞臺先は庭の心にて、傾城青柳、同じく春雨、毛利の娘千里姫。三人ながら大振り袖、娘の拵らへにて羽根と羽子板を持ち、突いて居る。この見得、面白き謠らへの手鞠唄にて早幕開ける。卽ち博多の津の揚屋の體。向うより、島平、繻子奴にて、

島平　こりやアなんだ。お姫様やら、お傾城やら、相交つた正月遊び。

ト思案して思ひ入れありて

エ、聞えた。大方若旦那の思ひ付きで、上下貴賤の別ちなく、一つごつちやの娘に仕立て、羽根や手鞠でどつぴさつぴは、早元朝のお取越し、所へ奥は御狀のお使ひ。さらば取次を頼むべい。

ト本舞臺へ來る。此うち女形皆々、手鞠羽根を突いて居る。始終鞠唄。但し千里姫、羽根を止めて島平に見惚れるこなし。島平、青柳の側へ行つて

ちよとお頼み申さう。

ト青柳、構はず羽根突いて居る。千里、島平が手を取つて、こちらへ連れて來て、何やら囁く。島平、物音が騷がしうて聞えぬといふこなし。千里又とつくりと囁き、島平に寄り添ふと、島平千里を突き退け、皆が見て居るゆゑ惡い／＼と云ふ思ひ入れにて、また青柳が側へ行つて

若旦那はどれにござる。大切な御狀だから、どうぞ取次いでもらひたい。これサ／＼。

青柳　オヽしんき。もちつとの所を落さして。退かしやんせ。

ト青柳が袖を引ッ張る。これにて羽根を落し。

ト突き退け、羽根を取上げ、また羽根を突く。始終手鞠唄にて、島平、春雨が側へ出て

島平　おてまへを頼む程に。

春雨　知らんわいなア。

ト構はず羽根を突く、千里は島平に物が云ひたけれど恥かしいこなし。島平、二重舞臺へ上がり、一人々々を捕へ、若旦那はどれにござると尋ねる。皆々知らぬと云うて、手鞠突いて居る。島平また下へ下りて、春雨が側へ行き、構はぬゆゑ、また青柳の側へ行く。千里、島平が手を取り、又こちらへ連れて來て

千里　コレイナウ島平。

島平　ナイ／＼／＼。

ト皆々を數へ、何にも云ふなと云ふこなし。

千里　イヽヤイナウ、自らと其方との譯は、あの衆は皆知つてなれば、差合ひ構はぬ二人が仲。ほんにモウ、其方のおちやるのを、大抵や大方。

島平　サア／＼、大抵や大方。若旦那が待ち兼ねでござる

であらうなア、皆様。

ト此の間に皆々羽根手鞠を止め、二人が素振り見て居る。鳴り物も止む。

春雨　島平どの。

島平　ナイ〳〵。

春雨　お前の尋ねさんす、照さまに逢はして上げうかえ。

島平　急な御状だから、一時も早うお目にかゝりたい。

青柳　あのやうに頼まんす事ぢや。こりや、わたしが呑み込んで逢はしてやらうかいなア。皆さん。

春雨　青柳さまの云うての通り、逢はしてやらしやんせいなア。

皆々　それ〳〵、逢はしたがよいわいなア。

青柳　サア〳〵、逢はさう程に、マア、そこへ目を塞がんせ。

島平　旦那のお目にかゝるのに、なんで目を塞ぐのぢや。

皆々　マア、云ふやうにならんせいなア。

島平　オツとよし〳〵。斯うか〳〵。

ト目を塞ぐ。

青柳　それ〳〵、さうさして置いて、いま逢はす程に、ソレ逢はんせ。

ト千里が手を取り突きやる。この拍子にぴつたりと抱きつく。

ヨウ〳〵、しつぽりと請けました。

ト島平腹立て、千里を突き退けて

島平　コリヤ、何とするのぢや。女中達が寄つてかゝつて奴一人を繊くたにするのか。もうよい。もうお身達は頼まない。直々に若旦那を尋ねて。

ト奥へ行かうとする。皆々立ち塞がり

皆々　どつこい。奥へ遣る事はならぬわいなア。

島平　これは又迷惑な事ぢや。

ト青柳、島平が手を取つて坐らせ

青柳　島平どの、マア、下に居やしやんせ。

島平　お旦那はどれにござる事ぢやな。

ト尋ねるこなし。

青柳　コレ、こなさんは毛利のお家では、新参の奴どの、御奉公にござんして間がないに依つて、わたしが身の上は知らずであらうなア。

島平　イヤ、その儀ならば存じて居る。若旦那の廓通ひ、この博多の揚屋へ、ついに一度お供して来ないけれど、こなたは青柳と云うて、若旦那の相方、又そちらは春

雨と云うて、突出しの新造。仲居禿や藝子達が、明日の元日を待ち兼ねた手鞠の遊び。とん〳〵〳〵とやらかしてござる所へ、下郎のおらが、ヅカ〳〵と參つたは、正眞のお花畑へ、うごろもちの土奴。これサ、腹が立つなら料簡して、どうぞ若旦那に逢はして下され。コレ〳〵、下郎めが手を合す。これぢや〳〵。

ト青柳を賴むこなし。此せりふのうち青柳、春雨に目を交ぜして、島平が側にある狀箱を取れと云ふこなし、春雨呑み込み、狀箱をソツと取り、こちらへ來て、千里に狀箱をやり、皆々囁き合つて居る。

青柳　サア〳〵、ようござんす。何を隱さう、殿樣は爰へまだござんせぬわいなア。

島平　ヤア、そんなら若旦那は、これにはござらぬか。

仲居　有やうは照さんのござんすのを、わたしらも待つて居るのぢやわいなア。

藝子　もう追ッ付けござんすであらうぞいなア。

千里　コレ島平、兄樣のござんすまで、爰に待つて居や。その間に話したい事もあるし。

ト島平が側へ來る。

島平　お姬樣、これまでも申す通り、この下郎めは、生れ付いて、女は嫌ひだ〳〵。

トこちらの方へ來る。

千里　そんなら、自らが云ふ事を聞きやらぬのかや。

島平　くどい〳〵。

青柳　お姬樣、今のを渡すまいぞえ。

千里　大切にして持つて居るわいなア。

ト島平、右の文箱を千里が持つて居るを見て

島平　南無三それを。

ト取りに行くを青柳、支へる。

千里　欲しいかや。

島平　此方へ下され。

千里　マア、よしにせうわいの。

島平　ハテ、惡洒落さつしやりますな。

ト取りに行くを

青柳　イヤ〳〵、あのお文は、お姬樣の戀の囮り、戾す事はならぬわいなう。

春雨　狀箱が戾して欲しくば、お姬樣のお詞に從ふ氣か。それがならずば戾さぬ狀箱。

藝子　嫌となりとも、應となりとも

皆々　どちらへなりとも、返事をさしやんせいなア。

島平　返事も瓢箪もいらぬ。その狀箱を。
青柳　どつこい。さらはならぬ。
ト留める。
島平　エヽ、退かしやれ。
ト青柳を突き退け、千里にかゝる。皆々千里を圍ひ立ち塞がる。島平、狀箱を取らうとして、千里を追ひ迫る。この模樣のうち向う戶屋の内より
侍皆　返せ〳〵、お姬樣返せ。
ト太鼓鉦にて、向うより若黨二人、澤瀉の紋の高張り提灯持ち、上下侍ひ、太鼓を擔ひ、又一人これを叩いて出る。この後より毛利照太郞、衣裳羽織にて出る。松浦喜藤治、衣裳羽織にて鉦を叩き、次に若黨十人ばかり、皆々澤瀉の紋付きの弓張り提灯、その後より廣島源吾、着付け上下の高股立ちにて、升の底を叩いて出て來る。
返せ〳〵、お姬樣返せ。
ト云ひ〳〵、鼓鉦にて本舞臺の取合ひの中へ入る。此うち島平、千里が狀箱を引ツたくり、照太郞を見て
島平　若旦那ではござりませぬか。
女皆　照さま、ござんしたかいなア。

照太　皆待ち兼ねたであらう。今日も一日迷子を呼んで、息も精も盡き果てた。サア〳〵、息つぎに、酒にせう酒にせう。
仲居　ソレ、お銚子〳〵。
ト杯を持ち行く。この間に青柳春雨、傾城の衣裳に着替へる。源吾、侍ひ皆々、橋がゝりへ並ぶ。青柳、煙草盆を提げ、照太郞が側にて煙草のみ居る。春雨、照太郞を見て、こなしある。千里、島平へこなし。照太郞、青柳がひそりし體を見て
照太　太夫、こりやおれが來やうが遲いので、持たせぶりぢやな。
青柳　待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うた譬へではあるぞ。
島平　若旦那樣へ申し上げまする。親殿樣より火急の御狀御披見あられませう。
ト狀箱を渡す、
照太　親仁の狀なら、讀まいでも解つてある。明日は元朝氏神の祭禮の儀式、屋敷へ戾れとの事であらう。島平、使ひ大儀ぢや。一つ吞め〳〵。
島平　イヤ〳〵、下郞めは、一向の下戶でござりまする。

照太　さうは云はさぬ。妹、島平めに、われが酌で一つ呑ませ〳〵。

千里　アイ〳〵、島平、一つ呑みやいなう。

ト杯やる。島平、不承々々に杯を取つて

島平　これは迷惑な事ぢや。

ト云ひ〳〵杯を受ける。千里酌する。

青柳　照さま、なぜ今宵は遲うござんしたえ。

源吾　イヤ〳〵、その譯は拙者めが申しませう。各々には御存じござるまいが、主人照太郎さまの妹姬君、岩姬さま、又その妹君はこれなる千里さま。毛利のお家に御三人の御兄弟。時にその岩姬さまと云ふは、先達て粟島家の若殿、甲斐之助さまへ、御緣邊を取結びござつたところに、どう云ふ事でか岩姬さまには、國遠なされておばず、この博多の津々浦々まで、姬君のお行くへを尋ね行くへが知れませぬ。それゆゑ殿樣の御領分は云ふに及廻る、返せ太鼓でござります。

喜藤　如何にも、源吾が申す通り、粟島家へ送らねばならぬ大切の姬君、お行くへ知れぬは、もしや妖怪の業ではないかと、毎日々々の返せ太皷。今日は若殿も直々のお出でゆゑ、そこで見やれ、毛利家の家老、松浦喜藤治とも云はるゝ武士が、人體らしい鉦の役目。何が方々と駈け廻つた事なれば、揚屋入りが遲うなつたと云ふものぢや。なんと皆、合點が行たか。

藝子　それで返せ太鼓の因緣が知れたわいなア。

喜藤　侍ひども、われ達は草臥れたであらう。次へ行て、酒でも呑んで休め〳〵。

侍皆　ハ、ア。

ト迷子呼びの人數、殘らず橋がゝりへ入る。

千里　ほんに、この姉樣は、何所に居やしやんす事ぢややら。何所を當途に尋ねに行かうよすがもなし。ならう事なら姉樣の行くへも知れて、自らが願ひも叶うたら。

ト島平が方へ目をやり

嬉しい事であらうもの。

ト恥かしいこなし。

島平　イヤ、一時も早うお返事を承つて、奴めは歸りたうござりまする。

照太　ハテ、忙しない奴ではある。

ト狀箱を取りて、中より狀を出し

島平。爰へ來い〳〵。コリヤ、この狀を讀め。

島平　イヤ、その儀は。

照太　早う讀め〳〵。
ト狀を島平に渡す。
島平　ナイ〳〵。
ト狀を持ちながら、無筆のこなしにて、せう事なしに讀む顔にて狀を攤げる。
仲居　オヽ笑止。そりや逆さまぢやわいなア。
ト島平、ちやつと持ち替へ、いろ〳〵しても一字も讀めぬこなしにて、うろ〳〵する。
喜藤　島平、御狀をなぜ讀まぬ。これはしたり、何をうぢうぢ。エヽ、此方へおこせ。
ト持つて居る狀を引ッたくり讀む。
通達を以て申し上げ候ふ、この大晦日は例年の通り、和布苅の神事、領國隼鞆の明神へ、明元日辰の刻、毛利の重寶天の羽衣諸とも、備ふるが古例、祭禮の御用意、早く怠るべきものなり、月日、毛利照太郎さま、一家中在判。
源吾　イヤ、殿樣、先達て廓の入用、據なう質物にお入れなされたお家の重寶。
照太　大事ない〳〵。毎年の元朝に、無ければならぬ天の羽衣。質請けの三百兩は、掛屋の善右衛門に云ひ付けて置いた。源吾、其方は掛屋へ參つて、金子受取つて參れ。
源吾　然らば、お出入りの掛屋善右衛門方へ。
島平　隨分とお早う飛んで行て、飛んでお歸りなされい。
喜藤　明日の祭禮、一旦お歸りなされずばなりますまい。
照太　それ〳〵、其方は供廻りの用意をさせい。
喜藤　畏まりました。
ト奥へ入る。
島平　大切な御用金、間違うてはならぬ。斯うして居らうより、おらも掛屋へ參つて、
ト行かうとする。
照太　コリヤ〳〵、島平待て。
島平　掛屋へ參りまして。
青柳　殿さんが留めてぢや。マア、待つたがよいわいなア。
島平　ネイ。
ト橋がゝりを見て居る。
藻子　なんとマア、堅い奴さんではないかいなア。
照太　サア、あの堅造を見込んで、妹がいき付いたと見えるわいなう。

千里　ア、申し、なんの自らが。
照太　コリヤ、隱すな。知つて居る〳〵。
春雨　照さん、許しが出たら
皆々　ひらいたものぢやわいなア。
照太　妹が戀を取持てば、氣が張つて惡からう。妹、其方は、マア、何でもこの太夫がする通りを、あの島平を捕へてしや。ヤイ島平、われは又おれがする通りをせいよ。
島平　御意ではござりますれど、餘りパッとした事で、下郎が額は空風呂同然。御容赦下さりませい。
青柳　イヽエ、御容赦はならぬわいなア。現在お主の云ひ付けぢやないかえ。
照太　コリヤ妹、云ふやうにするか。
千里　サア、それぢやと云うて。
青柳　島平どの、お主の御諚を背くのかえ。
島平　イヤ、全く以て。
照太　背かねば、おれが云ふ通りに、二人ともにするか。
島平　ハッ、何かは存じませねど、
千里　どうやら改まつたやうで。
照太　詞を背くと、兄弟主從の緣を切らうか。

島平　ナイ〳〵、左やうなら仕りませう。
千里　自らも致しまする。
照太　キッとするか。
千里　アイ。
青柳　お前もよいかえ。
島平　ナイ〳〵。
仲居　こりや面白からうわいなア。照さまの眞似は、島平どの、太夫の眞似は、お姫樣ぢやわいなア、
照太　サア太夫、爰へおぢや。
青柳　アイ〳〵。
ト行かうとして
わたしもどうやら改まつたやうで
照太　これはしたり、彼奴に色事の指南をするのぢや。サア、此方へ寄りや〳〵。
ト引寄せる。青柳、照太郎が膝の上へ乘り
青柳　照さん、何ぢやぞいなア。
ト此うち千里、島平、うぢ〳〵して居る。照太郎見て
照太　ヤイ〳〵、二人とも、どうぢや。する通りをせんのか。
島平　ナイ〳〵、呑み込んで居りまする。

ト照太郎が通りに坐り、こなしありて
これサ、爰へござれ。
トひつしよなう云ふ。
千里　大事ないかえ。
ト青柳の方を見合せ、島平の膝へ乗り
島平、何ぢやと。
島平　エヽ、ほてくろしい。措かつしやれ。
ト突き退ける。
千里　アレ、兄様、あのやうに云ふわいなア。
ト甘へるやうに云ふ。
照太　ヤイ奴め、おのれ憎くい奴、主の詞を背くのか。
島平　イヤ、背きは致しませぬ。
照太　致さずば、ソレ、ちやつと致し居らう。
島平　畏まりました。
照太　太夫、わが身のやうな可愛い者が、ほんに又とある
かいなう。
ト島平、千里を捕まへる。
島平　わが身のやうな可愛い者が、ほんに〳〵又とあろか
いなう。
トひつしよなう云ふ。

照太　オヽ、さうぢや〳〵。
島平　オヽ、さうぢや〳〵。
照太　エヽ、これは真似するのぢやないわい。
島平　ナイ〳〵、畏まりました。
青柳　申し、殿様、そりやお前、真實かいなア。
ト千里、始終見合せ
千里　申し殿様、そりやお前、真實かいなア。
照太　なんの逢はう二世三世も、變らぬ未來かけて、夫婦
ぢやわいなう。
青柳　オヽ、嬉し。
千里　オヽ、嬉し。
ト千里、島平に抱き付く、
島平　これは又、何たる因果だ。
青柳　冷たい手ではある。温めて上げう。
ト照太郎が手を懐へ入れる。千里も見合せて
千里　冷めたい手ではある。温めて上げう。
ト島平が手を懐へ入れる。島平、突き退けて
島平　モウ、主命でも、根が續かぬ。御免々々。
ト逃げる。
照太　奴め、逃がすな〳〵。

女皆　アイ〳〵、待たしやんせ〳〵。

ト皆々捕まへる。

島平　御免ぢや〳〵。

ト逃げ廻る。これにて烏刺しの合ひ方になり、島平逃げる、皆々押へる。この時、向うより千葉勝右衛門、田舎大尽にて出る。この中へ入り、春雨を見て

勝右　オヽ、春雨太夫、爰に居やるか。

春雨　オヽ、ござんしたか。オヽ、嫌ひ。

ト突き退けて奥へ入る。右合ひ方のうちにて、勝右衛門を捉へて突き出し、奥へツィと逃げて入る。皆々勝右衛門を島平と間違へて捉まへ、顔を見て、こりや違うたと云ふこなし。勝右衛門を突き飛ばし、皆々奥へ入る。勝右衛門一人残り居て

勝右　なんの事ぢや。おれ一人を、さゝぼうざにし居つた。金出して買うて置いた春雨は、あの通りの悪性。どう思うても、女には縁の薄い生れ性。アヽ、何とせう。酒なと呑んでこまさう。

ト取散らけてある銚子鍋取つて来て手酌にて呑まうとすると奥より

青柳　イエ〳〵、聞いた事ぢやござんせぬ。

ト奥より照太郎、春雨、帯をしい〳〵、青柳照太郎を引ッ張つて出る。女残らず附いて出る。勝右衛門、銚子鍋持つて片脇へ寄る。

女皆　マア〳〵、ようござんすわいなア。

青柳　イエ〳〵、ようはござんせぬ。殿さん、エヽ、お前はなア。皆も聞いて下さんせ。島平どのを尋ねて居る、その間に、あの春雨さんを閨ひへ引ッ張つて行て、何ぢややら帯を解いて。春雨さん、お前も突出しだてら、アタませくさつた。アタ〳〵なめ過ぎた。

春雨　青柳さん、堪忍して下さんせ。わたしや殿様に疾から。

照太　コレ〳〵、何にも云ふな。此方には覚えはないぞ。

青柳　云はしやんすな。覚えのない者が、どうして帯解かしやんした。

照太　サア、それはの。

青柳　返答はござんすまい。エヽ、腹の立つ。

ト照太郎に喰ひ付く。こりや堪らぬと逃げる。青柳押へるを皆々女留める。

女皆　マア〳〵、待たしやんせいなア。

青柳　イヤ〳〵。聞かぬ〳〵。

ト春雨の側へ行て
ほんに〳〵、油断も隙もなる事ぢやない。姉女郎を踏み付けた仕方。こりやモウ、これまでにあつたのぢやなア。
ト春雨恥かしさうに俯向く。
舞子　春雨さん、お前も處女な顔して、青柳さまの殿御を大それた事さんしたなア。
仲居　さうでござんしたか。ほんの事なら、氣の毒な者ぢやわいなア。
菫子　惚れ手の多い照さん、有りさうとは思へども、どうやら濟まぬこの場の仕儀。
皆々　春雨さま、云ひ譯をさんせ。どうぢやぞいなア。
春雨　申し、青柳さま、お前の事は、禿立ちからお世話になり、紋日々々もそれ〳〵に、お客のあしらひ、座敷つきまで教へて下さんすお前。眞の姉さんのやうに。
ト青柳ウカと彼方向く。
そのお前の殿御を、寢取る心は無けれども、アノ照さんには、わたしや疾から。
青柳　エヽ、そんならアノ、疾から。
春雨　アイ。
ト俯向く。
皆々　がをれ。
照太　サア、おれは知らんけれど、皆あつちから云ひ掛けた事ぢや。
青柳　默らしやんせ。こんな子を嬲らしやんすは、お前が惡い。
菫子　さうでござんす。皆照さんの惡性なからぢやわいなア。
女皆　さうぢやわいなア。
青柳　重ねて今のやうな事をさしやんせぬやうに、二人とも引き付けて置いて、せりふにせやならぬ。サア〳〵。
ト照太郎を引立てる。此うち勝右衛門、後に聞いて居て、むかつくこなし、いろ〳〵あいて
勝右　待て〳〵。其方より。此方のせりふ。
トつか〳〵と行て、青柳を引退け、照太郎を捉へ、さんざんに扇にて打ち据ゑる。皆々寄らうとする。
女郎ども、寄りやがるな。惡く留立てひろぐと、手は見せぬ、ぶち放すぞ。二才め、最前から聞いて居れば、身が揚詰めの春雨を盗みやあがつたな。傾城でも一夜妻、然すれば密夫、それも同然。うぬ、どうしてくれう知らぬ。

うぬがやうな奴は、カウ〳〵。

ト打擲する。皆々勝右衛門を宥める。

皆々　マア、お待ちなされませ。

仲居　青柳さま、こりやモウ口舌ぢやないぞえ。

青柳　さうでござんす。コレイナア、殿樣はわたしと云ふ相方なれば、なんのマア、お前の揚げてござんす春雨さんを捉へて、惡性がある者かいなア。

藤右　云ふな〳〵。おのれも一つ穴の狐。滅多には化かされぬ。憎くい二才め、うぬ、どうしてくれう。

ト皆々を突き退け、照太郎を打擲する。この時、橋がゝりより鷲塚十右衛門、着流し、一つ印籠の浪人にて、駈け入る。奧より松浦喜藤治出て、勝右衛門を留め

喜藤　お客、待つた〳〵。

勝右　密夫ひろいだ二才め、存分にするを何ゆゑ留める。

エ、聞えた。こりや、うぬも盗人の腰押すのぢやな。幾人でも相手は嫌はぬ。打つて捨てるぞ。

喜藤　イヤサ、討ち果たす氣なら、留めは致さぬ。拙者御挨拶を申すのぢや。シタガ、達て相手になれとあらば、なりかねも致すまい。其許も兩腰を差いてござれば、拙者とても粗忽の申さぬ。料簡あつてお留め申すのぢや。マアマアお待ちなされ。

勝右　すりや、挨拶をするのか。

喜藤　不肖ながら暫時の間。これはどうしたものぢや。共共に詫びたがよいわサ。

仲居　アイ〳〵。イヤ申し、總體色里の事と申しまするものは、又しても此やうないさかひが出來ます。そこを鎭めるがわたし等が役。

同　お侍ひ樣のお腹立ちに

同　お侍ひ樣の御挨拶。もう料簡して

皆々　上げなされいなア。

ト勝右衛門、矢張りムッとしたこなし。

喜藤　コレサ殿、一體こなたが惡い。青柳どのを差措いて外の花にてんがうをさつしやるに依つて、此やうな災難が起る。惡い〳〵、ずんと惡いから、あやまつてしまはつしやれ〳〵。

青柳　殿樣、お腹が立たうが、場所が惡うござんす。あやまつて濟む事なら、ちやつと、あやまつて下さんせいなア。

女皆　サア〳〵、ちやつと詫び言をなされいなア。

ト皆々寄つて照太郎を勝右衛門の側へ突きやる。照太郎、俯向いて居る。勝右衛門、照太郎を見て

勝右　お侍ひ、挨拶と云ふは、これでござるか。

照太　どうぞ御料簡の程を。

勝右　なりませぬ。ならぬ事ぢや。うぬ、ケチ臭い二才め顔も見るも、むか／＼するわい。

ト照太郎が額を蹴る。

照太　もう、どうも。

ト脇差を抜く。青柳春雨喜藤治留める。勝右衛門、何ひろぐと銚子鍋にてくらはさうとする。女皆々留める。

皆々　マア、お待ちなされませ。

喜藤　早まるまい／＼。

ト照太郎を留めながら、突きやり、けしかけるこなし。勝右衛門、銚子鍋を照太郎目がけ抛りつける。銚子、橋がゝりへ飛ぶと、十右衛門、これを取るこなしあつて、上の方の小蔭へ隠れる。照太郎、皆々を引退け、勝右衛門が眉間へ切りつける。勝右衛門、ウンと反る。皆々働り。

喜藤　待つた／＼。場所が悪い／＼。

照太　成せ／＼。

ト勝右衛門、起きて

勝右　サア／＼、切つたぞ／＼。連れ歸つて眞ッ二つにする。うせやがれ。

ト引立てる。喜藤治、照太郎の抜身を取る。勝右衛門照太郎を引立て行かうとする。皆々留める。喜藤治邪魔するこなし。此うち十右衛門、眉間に疵附きし體にて、銚子鍋を持ち、小蔭より出て

十右　お侍ひ、待つた。待たつしやれ。

ト向うへ出る。皆々見て

青柳　お前は。

十右　コレ／＼、身は初對面、初めて參つた揚屋の座敷。

勝右　武士たる者が顔を切られて、料簡がならうか。二才め、うせう／＼。

十右　イヤ、お侍ひ、用がある。待たつしやれ。

ト勝右衛門、こなしあつて照太郎を突き放し

勝右　見ればお身も浪人さうなが、身共に用とは。

十右　お侍ひ、身が面をとくと見やれ。

ト勝右衛門、十右衛門が眉間の疵を見て、働り。皆々も見て

女皆　ヤア、お顔に疵が。

十右　いつしか御意得ぬ他家の侍ひ、意趣遺恨を受ける覺えはないが、何ゆゑ武士の顔へ疵を附け召された。
勝右　なんと。
十右　何かは知らず、喧嘩と見掛け、挨拶せうと存ずるところ、コレこの銚子鍋を、身共が眉間へ拋りつけたは、慥かに其許であつた。
　ト勝右衛門、悄りする。
勝右　すりや、今のはずみに。
　ト思ひ入れありて
刃物三昧ひろぐから、打ちつけた銚子鍋、それが悪く飛んで、其許へ當てた事は、此方は存ぜぬ。畢竟これは間違ひと申すもの。
十右　默り召され。見られる通り拙者浪人者でござれば、主人を見立てゝ仕官の望み。それに斯ういふ顔では主取りがならうか。この座に連なる男女ともにかゝり合ひ。身共が武士の立つやうに、分別さつしやれ。
喜藤　ヤア。
　ト皆々思ひ入れある。
勝右　イヤサ、如何やうに云はしやれても、今のは間違ひ。珍事ちうやう、怪我の張合ひ。

十右　其許の顔を打ち割り、怪我ぢやと申さば、さてはさうかと御身、料簡するか。
勝右　サア。
十右　遊里と云ひ、場所悪しけれど、そこは浪人の一徳。覺悟がよくば、此方から抜きかけうか。但し、其方が抜くか。お客人、何とでござる。
　ト此うち勝右衛門、大きに怖ふこなし。
勝右　ハ、、、これは〳〵不調法千萬。心急くまゝ、只今の仕儀。お腹立ちは、御尤も〳〵。申さば銚子鍋めが悪うござる。憎くい銚子鍋でござる。ハ、、、。きつう痛みは致さぬか。慥か紙入れに血止めがあつたが、オ、あるワ〳〵。これはコレ血止めでござる。サアサア、これをお附けなされ〳〵。
　ト持つて居て疵口へつけうとする。十右衛門、突き退け
十右　イヤ、只今討ち果す貴殿、心遣ひは無用になされてサア、御用意なされ、ナニ、そちらな人、元を申せば、お身達から起つた事。氣の毒ながら用意さつしやれ。
照喜　アノ、我れ〳〵にも。
十右　武士たる者が料簡ならぬ時は、討ち果すより外はな

初演の

附　番　繪

い。ナニお客人、あの兩人、すつぱりと討ち放してしまつしやれ。その間はお待ち申す。マア、其方から片附けてしまはつしやれ。

ト勝右衛門うぢつく。照太郎、こなしありて

照太　成る程〳〵、この上は是非に及ばぬ。お侍ひ、尋常に勝負いたさう。

勝右　サア〳〵、よいわいの。

照太　イヤ、ようはござらぬ。勝負〳〵。

喜藤　それ〳〵、後がつかへてある。一方から片付けた片付けた。

十右　これはいから退屈にござるが、早う片付けてしまはつしやれぬか。

照太　サア、勝負〳〵。

勝右　コレ〳〵、これは御短氣な。爰は遊所でござる。場所が悪うござる。なんの〳〵、これ程のかすり疵、料簡ならぬと云へば云ふもの〻、討ち果す程の事でもござらぬ。モウ〳〵、何にも云はしやんな。よくござるわいのよくござるわいの。

皆々　それではお前、立つまいぞえ。

勝右　立つても立たいでも、料簡せぬと云へば、身共が身の上。

ト十右衛門の方を見て思ひ入れ。

此方が料簡すれば、どこもかしこも料簡がなりさうなものぢやが。

十右　料簡いたすが、よくござらうかな。

勝右　堪忍の二字は、武士たる者の嗜なみでござる。

十右　拙者が眉間へ疵を附けられ、料簡いたすからは、其許のその疵も料簡召さるゝか。

勝右　料簡いたさいで何と致さう。

照喜　この上ともに、云ひ分はござらぬか。

勝右　ハテ、此方の額に疵の附いたも、

十右　身共が眉間の割れたのも、疵は五分〳〵。貰ひかゝつた拙者が挨拶。

青柳　これで殿様のお名も出す

勝右　拙者が命も全うして、

照太　無事に納まる御浪人の計らひ。

女皆　わたし等も落ちついたわいなア。

勝右　ハテ、ようしたものぢや。金出して女郎には振られ、又その上に手疵を負つて、あやまると云ふは、餘りと云へば。

十右　手短かに討ち果しませうか。
勝右　なんの〳〵、段々のお世話、忝なう存じまする。
仲居　サア、機嫌直して太夫様とも仲直り。マア、奥へござんせいなア。
勝右　さうせう〳〵。サア太夫、奥へ。
藝皆　ハテマア、行かしやんせいなア。
喜藤　何かと巧うやりかけたものを。
　ト勝右衛門と顔見合せ、こなしあつて
　ドリヤ、座敷へ行て呑み直さうか。
勝右　サア、皆も奥へ。
女皆　サア〳〵、ござんせいなア。
　ト唄になり、勝右衛門喜藤治、仲居藝子大勢、皆々、嫌がる春雨を連れ、捨ぜりふ云うて奥へ入る。十右衛門照太郎青柳三人残り居る。合ひ方になり
青柳　ほんに、どうなる事ぢやと案じたが、殿様に怪我もなう、無難に濟んだもあなたのお庇。
照太　ついに御一座も致さねど、お顔に疵までを請けての御深切。なんとお禮を申しましてよからうやら。
十右　これは〳〵。お禮は結句痛み入る。先程よりの口論御大身の其許が、御名の出るのを笑止に存じ、我が手に打ち破つたを誠と心得たは、まだしもあざとい奴。兎角人と申す者は、いつ何時、どのやうな難儀があるまいものでもない。ハテ、その時は、こなた様のお世話に成るまいとも申されぬ。お手擧げられい〳〵。
青柳　一生の御恩、仇には思ひませぬ。日頃は嫌なお方ぢやと思うたが、今日と云ふ今日、御深切が顯はれて、此やうな嬉しい事はござんせぬ。
照太　太夫、そんならあなたを知つて居やるか。
青柳　アイ。
十右　引く手に靡く青柳の色香に迷ひ、空に知られぬ里の雨。今宵も振られに參りました。
照太　ムウ。すりや、この間から噂のある
青柳　御浪人の十さまぢやわいなア。
照太　アノ、こなた様が。
　ト十右衛門、青柳が手を取つて
十右　太夫、奥へ來やれ。
青柳　イエ〳〵わたしや。
十右　ハテ、二人が仲を見受けた上、下紐解きやれとは云はぬ。杯ばかりは座敷のつきあひ。
青柳　それでも、どうやら。

十右　貸借りは遊所の習ひ。

ト青柳、照太郎の方へ行くを、十右衛門引廻して

お若いの。後刻御意得ませう。

ト唄になり、十右衛門、青柳を連れ、こなしありて奥へ入る。照太郎、殘り居て

照太　この間から青柳に惚れて、夜毎に通ふ客があると聞いたが、その客と云ふは今の浪人。太夫に限つて、よもやとは思へども、心の外と云へば、油斷はならぬ。

トちよつと思案して

どう思うても捨てゝは置かれぬ。さうぢや。

ト奥へツイと走り入る。めでたや／＼と春駒の合ひ方になり、向うより甚兵衛、淺黄頭巾、綺麗なる猿廻しの形にて、猿にでんち羽織を着せ、春駒を持たせ、綱を持ち出る。

甚兵　ハイ／＼、毎年參りまする猿廻しでござりまする。

ト奥より藝子仲居大勢出て

藝子　面白さうな春駒。

皆々　サア／＼、所望ぢや／＼。

甚兵　ハイ／＼、年の暮れもめでたう。明日は早々年の始めの春駒遣ひ。サア／＼、やつたり／＼。

ト内にて、夜さの泊りの唄になり、これにて甚兵衛、猿を使ふ事、いろ／＼あり、よろしく留める。

皆々　ヨウ／＼、出來ました／＼。

仲居　可愛らしいあの猿、わしや抱いて見たいわいなア。

藝子　抱いたら掻きつかうかと、わしや怖いわいなア。

甚兵　イエ／＼、飼ひ猿と云ふものは、掻きつくものぢやござりませぬ。猿は豆好き。そこでお前方のやうな豆を見ると、アレ／＼、嬉しさうな顏をして、そこらでちよつと日和見や。お染と云うたら立つたりな。聞いて鬼門の角屋敷。

ト唄ふ。猿踊る。此うち奥より勝右衛門出る。

勝右　忌々しいぞ。怪體ぢやぞ／＼。

ト云ひ／＼出る。

仲居　勝さま、また機嫌が損ねたかいなア。

勝右　彼奴、新造の癖に、酢でも蒟蒻でもいけた奴ぢやない。

仲居　其やうに腹立たずと、あの猿が踊るを見やしやんせ。面白い事ぢやぞえ。

勝右　猿の狂言見たくない。放せ／＼。

仲居　さう仰しやらずと、コレ猿廻し、又ま一度今の踊を、

始めたがよいわいなア。
甚兵　ハイ／＼、お望みなら、何遍でも踊らせます。
　ト云ひ／＼向うへ出て、勝右衛門と顔見合せ
　ヤア、こなたは。
勝右　御身は。
　ト悧り。甚兵衛ちやつと
甚兵　イヤサ、コレ、聟入り姿でのつしりと。
　ト唄になり紛らし、猿を踊らす。
皆々　申し、お附近きかえ。
勝右　イヤ、近附きでないが、面白い猿廻し。なんと座敷へ來て、一獻酌まぬか。
甚兵　それは有り難うござりまする。
勝右　傾城に振られた代り。コリヤ猿よ。爰へ來い／＼。
　ト猿、勝右衛門が側へ行て掻きつく。甚兵衛繩を引ッ張り
甚兵　左やうならば、お辭儀なしに。
皆々　サア／＼、奥へござんせいなア。
勝右　猿廻しも奥へ來やれ。
　ト甚兵衛猿に辭儀をさして
甚兵　先づお入りあられませう。

　ト唄になり、この一件皆々奥へ入る。向うより質屋喜右衛門、男に風呂敷包みの箱を持たせ出て
喜右　頼みませう／＼。
禿一　アイ、。
　ト云ひ／＼出る。
　今の頼みませうは、お前かえ。
喜右　左やうでござりまする。内方に毛利照太郎さまが。
禿　アイ、來てぢやわいなア。
喜右　左やうならば照太郎さま、質屋の喜右衛門めでござりまする。彼の質物の天の羽衣を。
　ト云はうとして
　イヤ／＼、どうぞ照太郎さまに、直にお目にかゝりたいが。
禿　連れて行て、逢はして上げう。サア、ござんせ。
喜右　それはお世話でござりまする。
禿　サア、ござんせいなア。
　ト禿に附き男も奥へ入ると、奥より島平出る。千里姫も附いて出る。
島平　さりとては、放して下さりませ。
千里　イヤ／＼、放さぬ／＼。島平、其方は胴慾な人ぢや

なう。
島平　イヤサ、胴慾とはお前の事ぢや。おらが女嫌ひを知つて、嬲るにも好い加減がよいわい。
千里　そんならアノ、いつぞやの事は忘れやつたかや。
島平　いつぞやの事とは。
千里　それはなう。父様の御領分、宮島の廻廊で、たつた一度あつた事を。
・ト額を隠して云ふ。
島平　宮島の廻廊で、たつた一度あつた事とは、ムウ、たつた一度
トいろ〳〵思案して
女子と云ふものは、執念の深いものぢや。
ト千里、島平に取り付き
千里　コレイナウ、一度の逢瀬が生中に、思ひの種。戀に上下の隔てはない。父上に申して、夫婦になりたい自らが望み。それで其方の心を引いて見ようと、人目を忍び文使ひ。
島平　一字一點讀む事叶はぬ無筆の下郎め、そこでお文は繪に書いた判じ物。
ト懐中より狀を出し
昨日お遣はしなされたこの文の繪は。コレ〳〵、墨繪の鯉を四つまで並べて書いたは、鯉四、戀しいと云ふ事、そのこちらに、登り鮎と鰈とを書いたは、逢ひたいと云ふ判じ物。なんと、この通りでござりませうがな。
千里　さうぢやわいの。さうして島平、文の返事はどうぢやぞいなう。
ト島平思ひ入れあつて
島平　オヽ、サ〳〵、さう仰しやらうと存じて、この返事は認めて置きました。サア、直々にお渡し申す。ソレ、お返事だ。
ト懐中より封じ文を出しやる。千里姫、取つて
千里　そんならアノ、これが返事かや。
島平　返事だ〳〵。
ト千里、文を見て
千里　兩手を合して、その下に足を書いて、それに灸がすゑてあるが、こりや、どう云ふ事ぢやや。
島平　ハテ、お定まりの、參るよりでござりまする。
千里　どうしてや。
島平　ハテ、參るぢやに依つて、手を合して拜んで居る。向う臑の眞中に灸をすゑたは、三里の次ぢや。依つて四

里ぢやないか。氣に入らざお返しなされ。アタ面倒な。

ト千里、封を切り讀まうとすると、この時、橋がゝりより侍ひ大勢出て

侍ひ　姫君これに御座なさるゝか。明日は元朝の儀式、お館へお歸りあつて、然るべう存じまする。

千里　其方達は先へ歸りや。自らは島平と連れ立つて。

島平　ア、コレ／＼、下郎めは若旦那のお供せにやなりませぬ。マア／＼、お歸りなされたが、ようござりまする。

千里　イヽヤイナウ、それでは。

ト島平が側へ寄るを

島平　ア、コレ／＼、そこらあたりへ目をきかしてナ。マア／＼、お屋敷へ。

トいろ／＼顔にて仕方して

マア／＼、お歸りなされたが、ようござりまする。

侍ひ　如何にも／＼。延引いたしても、大殿の思し召しは如何。サア／＼、お歸りなされませう。

千里　サア、そんなら島平、早う戻りや。

侍皆　ござりませう。

千里　エ、、つッともう。

ト島平を見る。島平、顔にてよろしくある。千里、氣を換へ

供しや。

ト唄になり、千里、心を殘すこなし、向うへ入る。島平一人殘りて

島平　ヤレ／＼、女子と云ふものは、面倒な者ぢや。時に源吾さまは、もう歸られさうなものぢやが。

ト橋がゝりより町人、車借り善右衛門出て

善右　なんでも爰へうせたに違ひはない。

ト云ひ／＼出て島平を見て

コレ／＼、奴どの、物が尋ねたい。年の頃は三十ばかり色白で、斯う月代を延ばした立派な男を、この廓へ付け込んだが、貴樣は知らぬか。

島平　イヤ／＼、そんな者は知らない／＼。

ト始終源吾が戻りを待ち兼ねるこなし。

善右　面妖な。慥かに付け込んだ筈ぢやが。

ト奧より

十右　イヤ／＼、あれへ參つて、ちと醉を醒まさう。

ト云ひ／＼十右衛門出る。善右衛門見て

善右　ヤア、貴樣は。

ト十右衛門、恟りして逃げようとするを、善右衛門捉まへて

善右　ヤア、何所へ〳〵。傾城買ひの大盡どの、コレ、今日を何日ぢやと思うて居る。廓なりやこそ騒いでも居れ、世間は大晦日と云うて、きつしよぢやわいの。こなたが使うた三百兩、首代の判した不肖に、この善右衛門は盆を上げられて、宿なしの風來者になつたぞや。

十右　成る程〳〵、お身に向うては、兎から申す詞はない。お身に判を捺かして、借り請けた三百兩は、仕官の望み、身の廻りの拵らへと思ひの外、サア、ちと意氣づくな事があつて、使ひなくした右の金子、何を云ふも爰は繁華。聲高に云はずとも、どうぞ暫らくの所を。

善右　措いてくれ。人中で面恥か、すが、まだしもの腹癒せぢや。

ト懐中より證文を出し

見たか。こんな事もあらうかと、三百兩は、おれが手前の借り分で取つて置いたこの證文。貴様、これを反古にするか。ケチ太い和郎ぢやわい。こりや何か、おれに難儀さして、高見から見て居るのか。こんな事せうより、手を出して盗みせいやい。

ト十右衛門、ムッとする。この時、奥より照太郎青柳出かけ聞いて居る。源吾、戻り聞いて居る。

なんぢや〳〵。盗人も盗人、大騙り。アノ玆な大盗人めが。

十右　うぬ、餘りの法外。

善右　なんぢや〳〵。何ひろぐのぢや。

十右　云はして置けば、出るまゝの過言。うぬ。

ト刀を拔かうとするを、照太郎留め

照太　マア〳〵、お待ちなされませ。

善右　コリヤ、金を騙つた上に、おれを切るのか。面白い切られよう。サア切れ。どこを切れ。爰か〳〵。

ト尻をまくり、いろ〳〵あり、十右衛門、うぬをと云ふを照太郎青柳留めて

照太　これは短氣な。待つた〳〵。

善右　コレ二才、こなた樣の知らぬ事ぢや。退いて居やしれや。居やしやれ。

ト照太郎を突きこかす。十右衛門行くを島平留める。源吾は善右衛門を引廻し、捩ぢ上げる。

アイタ、、、どうする〳〵。

源吾　どうするとは、挨拶なさる、御主人をなんで投げた。

早速ながら主人の返報。

ト見事に投げて、刀の胸打ちに打ち据ゑる。

カウ〳〵〳〵。

島平　コレ〳〵、粗相せまい。怪我があつては双方の難儀。御浪人、其許の心一つで凶事があつては揚屋の騒ぎ。ナ、こりや御思案のありさうな所でござりまする。

ト十右衛門、思ひ入れありて着物を脱ぎ、襦袢一つになり、着物大小を差出し

十右　百貫の抵當に編笠とやら。金子調達の間、利息と思うて取つて歸りやれ。

ト善右衛門、着物大小を取つて見て

善右　こりや何ぢや。浪人の古着に、鰹掻きの大小。こんながらくたを何にせうぞい。

ト蹴る。皆々氣の毒なこし。十右衛門、こなしあつて

十右　イヤナニ、照太郎どのとやら。ちよと御意得たい。

ト照太郎十右衛門、向うへ出て

只今お聞きの仕合せ。近頃申し兼ねましたが、所持なされた三百兩、お貸し下されまいか。拙者が武士をお立てなされて下さるまいかな。

照太　成る程、これに三百兩は所持いたしたれど。

ト皆々と顏見合せ

島平　この金はどうも。

十右　サア、そこが御無心。申さばコレ此方も手詰め。何方の浦でも、大切なは金銀。ハテ、是非に及ばぬ。

トこなしありて奥より喜右衛門出て

喜右　殿樣、奥で申しまする通り、羽衣は持參して居りまするが、お金は調ひましたかな。

善右　埒が明かにや、取る所で取る。うせう。

ト十右衛門を引立てうとする。

照太　コリヤ待て。

喜右　サア、お金はどうでござりまするな。

照太　如何にも金は爰に。

十右　恩を着て恩を知らぬは鬼畜木石。

照太　然らば其許へ。

島源　それでは質屋の金が。

善右　代官所へ引立てうか。

十右　貸されませぬか。

喜右　代物を持つて歸らうか。

照太　サアそれは。

善喜　サア。

皆々　サア／＼。
善喜　返事は、どうぢや。
ト照太郎、思ひ入れあつて
照太　先程の返禮。ソレ。
ト財布を抛る。
十右　エヽ、忝ない。
、内にて暮れ六ツになる。
青柳　ありやもう暮れ六つ。
島平　本國へは海上六里。
源吾　三時に足らぬ神事の刻限。
十右　ソレ金。
善右　三百兩受取つた。
喜右　して、この羽衣は。
照太　南無阿彌陀佛。
ト腹切らうとする。
青柳　コレ申し、なんでお前は。
照太　サア、最前の難儀を救ひ下された御浪人、恩を知らぬは鬼畜木石との御一言、どうも。
島平　おやと云うても、時が切れるとお家の斷絕。
照太　それぢやに依つて。

島源　待つた。早まるまい。
善右　金取つたら云ひ分はない。
ト十右衞門、引戻して善右衞門をポンと當て、腹切らうとする。島平留めて
島平　待つた御浪人。コリヤ、こなたまでが。
十右　手詰めに及んでこの場の切腹。
島平　ハテ、コレ待つた。
照太　手詰めにこなたを殺しては、此方の武士が立たうか。
ト照太郎、腹を切らうとする。青柳留めて
青柳　コレ、早まつて下さんすな。
照十　放した／＼。
三人　早まるまい。待つた／＼。
ト此うち善右衞門起き、財布を取り、逃げようとする。十右衞門、引戻す。照太郎、死なうとする。この時奥より最前の猿出て、ウロ／＼して、善右衞門が肩へ上がり、財布の小判をパラ／＼とこぼす。皆々驚ろき
皆々　ヤア、この金は。
ト奥より甚兵衞、出かけ居て
甚兵　御用立てしは、この猿廻しでござりまする。

照太　先刻に奥で、ちよつと見受けた
甚兵　猿廻しの甚兵衛が、義理づくめゆゑ、お歴々のあなた方へ、憚りな事ぢやが、時の用には鼻かけ猿。お大名の御難儀。聞いて鬼門の角へ入込む小判の山吹。ハテ、金さへあれば、ナア、申し、お染と云はずに、立ちさうなものぢやぞえ。
島平　成る程。
ト島平、金を集める。
手詰めの御難儀、返濟は倍の倍でお返しなさるゝ。サア、この金子を。
ト照太郎に渡す。
照太　して、羽衣は。
喜右　これにござりまする。
ト差出す。源吾、改め見て
源吾　天の羽衣、相違ござりませぬ。
十右　然らばこの金子を、
照太　お心措きなう。
十右　さま〴〵の雑言。云ひ分はあれど免してくれる。持つてうせう。
ト抛る。善右衛門、取つて見て
善右　慥かに受取つた。ソレ、證文。
ト渡す。十右衛門、直ぐに引裂く。源吾、金を喜右衛門に渡す。
喜右　羽衣の三百兩。
善右　引負ひの三百兩。
十照　しつかりと渡したぞ。
ト十右衛門、善右衛門を睨む。兩人、コソ〳〵と逃げて入る。あと合ひ方になり、皆々こなしあつて
十右　お情を以て、人前の恥辱を雪ぎました。
照太　アイヤ、貴殿のお禮よりは、猿廻しの老人、賤しい身分で多分の金子を、よしみもない某へ。
甚兵　御用立てたは出世の種蒔き。こんな薄い風體で、金貯はへた樣子は追つて。三百兩、借り請けた證據に、ちよつと一筆。
源吾　成る程〳〵、金子借請けの證文なら、拙者が借請けに致して。
甚兵　イヤ、お前樣では。
島平　然らば身共が。
甚兵　イエ〳〵、あなた方には貸しませぬ。證文も何もいらぬ。殿樣の手でたつた一筆。

照太　然らば如何やうとも。
　ト料紙を取り、書かうとする。
甚兵　イエ〳〵、書いた物は落ち散つても悪い。この守の
　脇へ、ちよつとあなた様のお名ばかり。
　ト巻き物を出し、奥の方を擴げ見せる。照太郎、名を
　記し
照太　これでよいか。
甚兵　ようござりまする。これがほんの、心ゆかしでござ
　りまする。
　ト照太郎の手を取つて
　勿體ない。お大名様に。
　ト手を戴く拍子に、照太郎が脇差へちよと觸る。鞘走
　る途端に照太郎、手を切る。皆々、これはと介抱、猿
　血を見て入る。甚兵衛、こなしありて
　これは粗忽な。たんと切りは致さぬかな。
照太　イヤ〳〵、少しばかり。苦しうない〳〵。
島平　羽衣が手に入れば、直ぐにお國へ。
源吾　拙者は濱邊へ參り、出船の儀を。
島照　それが肝心。早う〳〵。
源吾　畏まつたでござりまする。

　ト源吾、橋がゝりへ走り入る。
青柳　お船の出るまで、廓の名殘りに。
照太　そんなら老人。
甚兵　奥へ參りませう。サア、そちらな御浪人も。
十右　拙者は最早。
皆々　サア〳〵、お越し遊ばしませいなア。
　ト唄になり、皆々奥へ入る。十右衛門一人殘り居る
　と、橋がゝりより善右衛門戻つて來て
善右　鷲塚さま。
十右　コレ。
　ト押へ、あたりを見廻し、合ひ方になり、正面奥より
　甚兵衛出る。上の奥より勝右衛門出る。皆々一所に寄
　り
甚兵　軍師鷲塚。
善右　名草の甚兵衛どの。
十右　千葉勝右衛門。
勝右　大矢五郎作。
善右　ソレ、三百兩の軍用金もこれで大方。
甚兵　毛利照太郎も此方の味方に。
　ト連判を出す。

十右　お出かしなされた。して、九州探題の印はな。
甚兵　氣遣ひ召さるな。それも先達て、コレ。
ト囁く。
十右　ムウ。すりや。
ト思ひ入れ。
甚兵　この連判は義久公へ。
ト勝右衛門に渡す。
勝右　心得ました。この上は毛利の重寶、天の羽衣、盗み取る手筈が肝心。
甚兵　ヤレ聲高し、爰は繁華。時到らねば龍も池中に潜むと云へば、手段の極意は軍師鷲塚。
十右　如何にも。名草の郡に地の理を見立て、砦を築く某が工風の繩張り。拙者は此まゝ。
勝五　萬事の手筈は。
十右　書面を以て。
甚兵　お別れ申さう。
十右　さらば。
ト唄になり、十右衛門、善右衛門を連れ、向うへ入る。甚兵衛勝右衛門、奥へ入ると、奥より仲居禿出て、蒲團を敷き床を取る。囁いて入る。照太郎青柳、羽衣の箱持つて連れ立ち出て
青柳　殿さん、舟の出るまで、ちよつと名殘りに。
照太　さう思うて取らしたこの床。
青柳　サア、ござんせいなア。
ト兩人手を取り、屛風の内へ入る。橋がゝりより三上清藏、頬冠りにて出て窺ふ。こちらより春雨出る。双方屛風を窺ふと、屛風の内にて
照太　太夫、これは何ぢや。
青柳　守ぢやわいなア。お前の起請があるに依つて、肌身離さずに持つて居るわいなア。
照太　邪魔な物ぢや。そちらへやつて置きや。
青柳　そんなら斯うして置かうわいなア。
ト屛風の縁へ掛ける。清藏ツツと羽衣の箱を取り来ると、甚兵衛出て、羽衣を摺りかへ、春雨、守を取る。清藏、空き殼の箱を持ち、双方にて箱の守を見て、眞中にて行き當り恟りして
春雨　ヤア、その箱は。
ト見ようとする。清藏引廻し、當て、橋がゝりより人音するゆゑ、清藏、奥へ入る。橋がゝりより源吾走り出て

源吾　若殿さま／＼。
　ト照太郎、屏風の内より手燭持ち出て
照太　源吾、出船の用意は。
源吾　直さまお越しあられませう。
照太　ヤア、爰に置いた羽衣の箱がない。
青柳　わたしが守もないわいなア。
源吾　ヤア。
　ト悔り。
照太　島平々々。
　ト島平、出て
島平　御出船でござりますかな。
照太　コレ、今まであつた羽衣が。
島平　羽衣がどう致した。
照太　サア、どこへやら。
島平　ヤア／＼／＼。
　ト驚ろく。仲居走り出て
仲居　申し／＼、勝さまが羽衣の箱を持つて、裏道からどつちへやら。
島平　ヤア／＼、すりや盜賊は先刻の侍ひ。
源吾　船の出口は博多の海邊。

島平　程は行くまい。道を分つて。
照太　追手を早う。
源島　ハツ。
　ト島平は向うへ、源吾、橋がゝりへ入る。
照太　マア／＼奥へ。
　ト青柳を連れ、仲居附いて奥へ入る。春雨、氣の付きし體にて守を見て
春雨　アタ嫌らしい青柳さんの起證。
　ト守より起證を出し、守を拋る。勝右衞門出て、守を見て
勝右　すりや
　ト春雨、勝右衞門を見て
春雨　エ、お前は最前の。
勝右　春雨どの、この守は、こなた樣のか。
春雨　イ、エ。
　ト云はうとして
　アイ、わたしが守ぢやわいなア。
　ト勝右衞門こなしありて
勝右　ムウ。こりやコレ二重鶴の古金襴。これ持つてござることなたは、鹿之助どのゝ尋ねてござるお姫樣。

春雨　そんな事は知らぬわいなア。
ト起證を抛り、思ひ入れありて、ツイと奥へ入る。
勝右　コレ申し。コレ。
ト後見送り、こなしあつて
思ひもよらぬあのお姿。この守と云ひ、最前の連判
ト一卷を出し、起證も取つて守の内へ入れ
この二種で何かの手番ひ。よし〳〵。
ト此うち喜藤治出かけて居る。
喜藤　その連判を。
ト取らうとする。
勝右　なにを。
ト立廻りにて喜藤治を當て
そんなぢやいかぬ。なんでも春雨を。
ト奥へツイと入る。奥より清藏、箱を連尺にて脊負ひ
出る。喜藤治心附き、
清藏　喜藤治さま。
喜藤　三上清藏。
清藏　申し合せた手番ひ。
ト囁く。
喜藤　出かした。其方は、コリヤ。

ト囁く。
清藏　心得ました。して、こなたには。
喜藤　屋敷へ歸つて何かの手配。
清藏　拙者は後より。
喜藤　ぬかるな。早う。
清藏　ハツ。
ト清藏は奥へ、喜藤治、橋がゝりへ入る。橋がゝりよ
り福原軍八、着流し頰冠りをして、家來に乘り物を吊
らせ、走り出て内を窺ふ。奥より清藏、照太郎を手拭
にて口を括り、引立て出る。
軍八　首尾はどうぢや。
清藏　ソレ若殿。
ト照太郎を突きやる。軍八、照太郎を乘り物の内へ入
れる。春雨出て
春雨　ヤア、殿さん。
ト寄るを清藏、春雨を半櫃へ打込み
軍八　乘り物早う。
ト乘り物舁いて向うへ入る。青柳出て
青柳　殿樣は、もうござんしたかいなア。
清藏　オ、サ、こなたも一緒に。軍八、合點か。

軍八　用意の早駕籠。ハ、ア。

ト駕籠を舁いて出る。

淸藏　サア〳〵、早う〳〵。

青柳　段々のお世話、忝なうござんす。

ト駕籠へ乘る。

軍八　直ぐに館へ。急げ〳〵。

家來　ハ、ア。

ト駕籠、向うへ走り入る。

軍八　淸藏。

淸藏　軍八、あのまゝで館へ歸れば時は切れる。羽衣はなし、切腹がものはぶらついてある。

軍八　この半櫃も持ち歸り、若殿が目見得と一緒に、傾城げらを引出し、何もかも露顯にかける此方の手段。

トこの云ひ合せる間に、奥より甚兵衛、猿を連れ出て半櫃より春雨を出し、猿を入れ替へる。春雨連れて奥へ入る。

淸藏　この上は喜藤治どのが云はつしやれた、連判と守

軍八　奪ひ取つて、後から歸りやれ。

淸藏　合點ぢや。

軍八　何でもしめたワ。

ト淸藏は奥へ、軍八、半櫃を引ッかたげ、向うへ走り入る。引替へて春雨出て

春雨　殿樣は慥かにお館へ。さうぢや。

ト走り入る。奥より勝右衛門、淸藏、右の二種を奪ひ合ひ出て

淸藏　二種ともに渡せ。

勝右　渡す事はならぬわい。

ト立廻りにて、トゞ淸藏、連判を取り向うへ逃げる。勝右衛門、南無三と守を咥へ、尻引ッからげ走り入る返し。淺黄幕になる

ト雪降りになり、橋がゝりより淸藏、箱を持ち出る。源吾と掴み合ふ所へ、島平出て、立廻りの中へ入り。勝右衛門、守を持ち出て、皆々ごつちやになり、連判と守と箱とを奪ひ合ひ、方々へ虎の子渡しにて段々と持ち合ひ、追ひかけになり、これにてチョン〳〵。橋がゝりより雪降りの松原を引出す。雪始終降る。段々追ひかけるうち、寶を方々へ取替へ、追ひかけ道具引き、松原、中程に辻堂に來る時分とまる。皆々立廻りにて、橋がゝりへ入ると引返し。源吾、守を持ち走り

出て

源吾　心得ぬ。この守は。

ト勝右衛門、連判を持ち走り出て

勝右　それを。

トかゝる。清藏も起きてかゝる所へ、島平、橋がゝりより出て、四人立廻りにて、連判と守を後へ投げ、辻堂へ入ると、內より連判守りの摺替へを出す。二品を清藏取り、羽衣の箱を勝右衛門取、向うへ逃げる。源吾行くを、島平引廻し、後を慕ひ入る。源吾追ひかけ入ると、この後、しつぽりとした合ひ方。雪頻りに降る。正面の辻堂開く。岩倉主膳正、黑裝束、兜頭巾にて、右の一卷と守を持ち出て見て、また一種を見て、ムウと思ひ入れあつて

主膳　これも何ぞになりさうなもの。

ト懷中する所へ、橋がゝりより雨裝束の供廻り、バラバラとすさまじう出て

供廻　岩倉さま。お迎ひ。

ト主膳、空の景色を見て

主膳　時刻も丁度。

トこなしありて、家來に向ひ

供せい。

供廻　ハ、、、ア。

ト主膳正、ツツと向うへ走り入る。供廻り續いて走り入る。

幕

二段目　毛利館の場

役名――岩倉主膳正。勅使、辨の宰相。毛利左京之進。毛利照太郎。同妹、千里姬。廣島源吾。松浦喜藤治。村澤兵庫 實ハ磯谷左忠太。入船屋才右衛門 實ハ大館惡次郎。三上淸藏。福原軍八。吉川奧方、萩の戶。乳人、伏屋。傾城、靑柳。大筒五太夫 實ハ駒木根八郎。奴、島平 實ハ尼子四郎義久。

造り物、一面の二重舞臺。見附け金襖、瓦燈口、東西に塗り骨障子屋體、結構なるかゝり。すべて毛利館の體。眞の樂にて、幕ひらく。パタ／＼にて、橋がゝりより、廣島源吾走り出る。

源吾　ヤア／＼、上使を歸してはお家の大事。ソレ。

ト向うへ走り入る。と橋がゝりより、駕籠舁いて出る。奥より侍ひ大勢出て、見て

侍ひ　照太郎さまがお歸りなされた。照太郎さま〳〵。

ト駕籠より、青柳出る、

侍ひ　ヤア、こなたは。

青柳　殿さんは、どこにござんすえ。お侍ひさん達、殿さんはどこにぢや。ちやつと逢はして下さんせいなア。

侍ひ　エヽ。そこどころぢやないわいの。

同　上使の不機嫌　おいらにも、祟りの來ぬうち、ござれござれ。

ト橋がゝりへ皆々入る。

青柳　コレイナア、お侍ひさん、なんの事ぢやぞいなア。この殿さんは、何をして居やしやんす事ぢややら。

ト向うを見て

あの大勢は。

ト思ひ入れあつて、ツヽと奥へ走り入る。この間始終樂にて、向うより、村澤兵庫、衣裳社杯、上使にて、出る。毛利左京之進、大殿の形。家來松浦喜藤治、衣裳社杯にて、乳人伏屋、衣裳襠褊。後より源吾、威儀を繕ろひ、この人數皆々、村澤兵庫に詫びしい〳〵出る。近習も附き出る。

左京　先程よりお頼み申す通り。

喜藤　何卒今暫らくの所を

源吾　家中一統のお願ひ。

兵庫　ハテ、かしましい。すりや、皆が寄つて暫時の猶豫を願ふのぢやな。

皆々　ハツ〳〵。

ト兵庫、思ひ入れあつて、本舞臺へ來る。皆々附いて來る。兵庫、上座へ直る。各々並よく並ぶ。神樂止む。

兵庫　毛利左京之進。

左京　ハツ〳〵。

兵庫　大内記錄所の下知を受け、上使に立つた村澤兵庫。さすれば勅使も同然ぢやぞよ。

左京　畏れながら、左やう存じて。

喜藤　松浦喜藤治。

源吾　その外、毛利の家中の者ども。

伏屋　腰元、端下に至るまで

皆々　皆一同のお願ひ。

兵庫　當所和布苅の神事と云ふは、大晦日夜半の間に、これを勤め、明くる元朝には、毛利の重寶、天の羽衣を以

て、隼鞆明神に供へて、四海安全、五節の神樂を奏するが古例。その役目を勤むべき、照太郎は、博多の廓にいりびたれ酒。上使を引請け出合はぬは、上を侮る仕方、法外とや云はん。左京之進、返答はなんと。

左京　ハッ、仰せの如く羽衣の儀は、元は雲州尼子晴久が家の重寶。野心あつて、叛逆を企てしを、當家の先祖、毛利元就、討手を蒙むり、一戰に切り靡けしは、莫大の功とあつて、即ち天の羽衣を、永く家の寶とせよと、下し置かれしは、先祖の軍功。

喜藤　さるに依つて、大晦日祭禮の時刻には、都より上使お立ちあつて、御覽に入るゝ、即ち吉例。

源吾　御内見は元朝の辰の刻。未だ間もござれば、何卒、暫らく御容赦を。

兵部　罷りならぬ。今まで歸らぬ照太郎が、半時、一時待つたとて、なんの歸らう。

左京　誰れかある。申し附けた一品、これへ。

ト内より

千里　畏まりました。

ト千里姬、さゝげ附きの振り袖の衣裳、裲襠にて、三方に一步小判を蓬萊の如く、飾り、持ち出て、兵庫が前に置き、左京之進が次に坐る。兵庫見て、こなしあつて

千里　今日は年の始め、日の始め、幾千代祝ふ蓬萊は、御上使さまを祝ひまして、父上のお指圖。憚りながら。

兵庫　左京どの、この蓬萊は貴殿の指圖か。

左京　なんとばしござりませう。

兵庫　氣に入らぬ。ずんど氣に入らぬ。金の山と積み重ねたこの蓬萊。賄賂を以て面を張り、照太郎が放埒も神事の事も、何もかも宥免して歸れと云ふのか。罷りならぬぞや。誰れだと思はつしやる。九州名草の城主、村澤兵庫。武將義明公より廣大の祿を賜はり、一家中を撫育すれば、金銀には飽き滿ちて居る。賄賂嫌だ。見苦しい。取措かつしやれ。何を馬鹿な。

ト皆々へ聞えるやうに云うて、ソッと三方の金を取り、袂へ入れると、向うバタ／＼にて、乘り物、早打ちのやうにして、三上清藏、衣裳𧘕𧘔にて、これをぼつ立て出る。

清藏　若殿照太郎さまを、博多の廓よりお迎ひ申し、立歸つてござりまする。

喜藤　ソレ、早く。

ト清藏、行く。

源吾　待つた。若殿がこの座へお出でなされても、肝心の羽衣が。

左京　羽衣がどうした。

源吾　イヤサ、その儀は。

喜藤　イヤ〳〵、大殿、何も騒ぐ事はない。羽衣は紛失いたした。

左京　ナニ、天の羽衣は紛失。

ト兵庫を見て

ホイ。

喜藤　それと云ふも、若殿の放埒ゆゑ。これへ引出し、御上使の御前で面縛させい。

清藏　ハツ。

ト行きかゝる。源吾、支へる。

兵庫　内見の時刻延引するがや。

左京　サア、その儀は。

喜藤　その云ひ譯に、若殿をこれへ。

源吾　それでは主人の。

兵庫　寶の行くへは。

左京　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

兵庫　なんとぢや。

トこの時、乘り物の内より

主膳　待つた何れも。毛利照太郎、遲參の云ひ譯、それへ參つて仕らう。

ト乘り物を開き、岩倉主膳正、衣裳長社杯にて出る。皆々見て

皆々　ヤア、あなたは。

左京　東山の執權、岩倉主膳正さま。

ト皆々氣味合ひにて納まる。

主膳　武將の嚴命に依つて、九州順檢の役目を蒙むり、この程より當地に逗留、今日は正月朔日、左京どのへ年始の禮に參りかゝつて承はば、上使の立腹、家中の混雜、家の寶も紛失とやら。併し、主膳正參つた上は、如何やうともなし申さう。何れも、安心召され。

左京　何にもせよ、先づ〳〵これへ。

主膳　然らば。

ト二重舞臺、村澤兵庫の次へ並ぶ。

承れば御勅使には、辨の宰相さまとござるが、して、其許は。

兵庫　拙者宰相が名代、村澤兵庫と申す者。貴殿が岩倉主
膳どのとな。
主膳　未だ御意得ませぬ。
兵庫　互ひに
二人　御苦勞に存じまする。
ト座席を見廻し／＼、千里を見て
主膳　それなるは、左京どのゝ御息女、千里どのか。いか
う御成人でござるの。ナニ左京どの、御子息照太郎どの
の次の妹、岩姫どのには、國遠召されたと承つたが、
左やうかな。
左京　粟島家と緣を組みし娘岩姫、
千里　今に於て行くへの知れぬ姉樣、朝夕案じてばかり居
りまするわいなア。
主膳　妹の身では、さうありさうな事ぢや。
ト云ひ／＼茶を一口呑み
ホヽ、このお茶は、播州の折鷹と見えます。結構なお茶
でござる。併し、これよりは矢張り山吹ナ。山吹の方が
利き目がよくござらう。
ト兵庫を見て云ふ。兵庫、思ひ入れある
ハヽヽヽ。ナウ左京どの。

左京　なんとござらうか。
ト此うち、兵庫こなしあつて、最前の金を袂より出
し置花活の中へ隱すこなし。
清藏　面妖な。若殿ぢやと思うて、ぽつ立て、戻つた乘り
物。
喜藤　思ひも依らぬ、主膳正さま。こりやどうぢや。
ト不承々々にあしらふ。この時、向うより奏者一人出
て
奏者　申し上げます。種ケ島の浪人、大筒五太夫と名乘つ
て、殿樣へお目見得を願ひまする。通しませうか。如何
計らひませう。
左京　御上使お入りの席と云ひ、目見得は叶はぬと云へ。
奏者　ハッ。
兵庫　ア、イヤ／＼、聞き及んだ大筒五太夫、苦しうな
い、呼び出さつしやれ。
左京　然らばこれへと云へ。
奏者　ハッ。
ト橋がゝりに向うて
大筒五太夫、お目見得さつしやれ。
五太　ハア、、、。

ト面白き鳴り物入りの木遣り音頭になると、向うより火消し人足大勢、一様の派手なる形にて、大筒を地車に乗せ、右の唄に合せ、引き出ると、地車舞臺の眞中へ直し、皆々橋がゝりへ直る。大筒五太夫、花道に辭儀する。この時、鳴り物止む。

五太　ハツ〳〵。

左京　苦しうない。近う。

五太　ハツ。

ト本舞臺へ來て、橋がゝりへ直り、平伏する。

喜藤　五太夫とやら。あれなるが都の御上使、村澤兵庫さま、次にござるが、管領岩倉主膳正さま。

左京　某は毛利左京之進。

五太　これは〳〵、お歷々樣、列座の中へ、お目見得いたすは、實加に叶うた拙者が仕合せ。元來拙者めは、種ケ島の浪人、先年義照公御治世に、井上新左衞門と申す者、種ケ島を武將へ差上げ、稀代の軍器とあつて、和國に擴まる種ケ島の傳來。これを以て編み出しましたる大筒一挺。畏れながら、御軍用ともならうならば、五太夫めが仕官の望み。何れも、御披露を願ひまする。

主膳　イカサマ、稀代の軍器。兵庫どの、あれを御覽じませ。

兵庫　なか〳〵大仰な物でござる。

主膳　種ケ島は大永元年に渡り、凡そ、この頃まで百四十年流行すれども、大筒は目馴れぬ製法。凡そこの筒先に、如何程の玉が籠るな。

五太　古來より用ひまする炮烙火矢、或ひは石火矢、棒火矢と申すは、人步かゝつて用に立たず。即ちこの筒先には、二十斤の玉を籠め、拙者たゞ一人、中ためにて致して力と骨を用ゆる鍛錬。古實秘傳は、追ひ〳〵申し上げませう。

喜藤　この筒先に二十斤の玉を籠め、一人して抱へるとは、途方もない力量ぢやなア。

主膳　イヤナニ、左京之進どの、後日近邊の川原に於て、五太夫が手練を試し、その上、抱へて遣はされたがよくござりまする。

左京　承知仕つてござりまする。

喜藤　五太夫は控へて居やれ。

五太　ハツ。何れも大筒を、次の間へ持參なされい。

皆々　ハア。

ト木遣りの人數、皆々大筒を抱へて、臆病口へ入る所

へ、橋がゝりより、入舟屋才右衞門、照太郎を引ッ立て出る。

才右　意地張らずと、うせい〳〵。

ト云ひ〳〵引ッ立て出る。

千里　ヤア、兄樣。

源吾　照太郎さま。

照太　見苦しい。爰放し居らぬか。

才右　なんぢや、見苦しい。イヤ、皆樣、お聞きなされて下さりませ。私しは博多の揚屋、入舟屋才右衞門と申す者でござりまする。即ち、照太郎どのが、馴染んでござる青柳が親方でござりまする。

源吾　ヤイ〳〵、あれに御上使もお入りなさるゝ。粗相吐かすな。

才右　イヤ、粗相は申しませぬ。まだそればかりぢやない、新造の春雨まで、一人ならず二人の駈落ち。埋んだ客は照太郎さまと、睨んだ眼は違やしませぬ。

源吾　ヤイ〳〵、云はして置けば、さま〴〵のざれ言。惡く頤骨立てると、手は見せぬぞ。

ト才右衞門、恟りして飛び退き、ハイと顫ふ。

喜藤　イヤ〳〵、源吾、彼れめが申す通り理の當然。若殿の放埒、どうで一度は斯うあらうと思うた。ハレ、ヤレ、ハテ笑止千萬な。

左京　不所存な悴め。眞ッ二つに。

ト拔かうとする。千里姫止める。奥より、傾城青柳出て

青柳　青柳は、これに居りまする。

ト出る。皆々恟り。

照太　ヤア、太夫か。

才右　そりやこそな。

青柳　廓を出たは、殿樣の御存じない事。親方さん、必らず早まつて下さりまするなえ。

才右　サア、一人は手廻つた。これからが春雨太夫、出しやうが遲いと、家探しするぞ。

ト向うバタ〳〵にて、淸藏軍八、半櫃を持ち走り出て、半櫃を眞中に直す。

喜藤　福原軍八、これは

軍八　神事に用ゆる小袖櫃、若殿の指圖で、中に入つたは傾城春雨。衣裳と見せて、この館へ連れ歸れと、即ち若殿のお指圖。

照太　コリヤ〳〵、何しに某が左やうな指圖を。

清軍　でも、こなたの指圖。なんにもせよ、傾城を出して。
ト半櫃にかゝる。源吾、止めて
源吾　イヽヤ、この内は。
ト立廻り。
主膳　神事の衣裳と僞はり、傾城とやらを、この半櫃に照太郎が、隱し置いたと、慥かに見屆けたとな。
清軍　左やうでござりまする。
主膳　しかと左やうか。
軍八　福原軍八、虚言は申さぬ。
主膳　清藏、其方も證人とな。
清藏　黒い眼で、しつかりと見屆け置いて申すのぢや。
主膳　ハテナア。樗屋とやら、其方もこの内に、傾城が居ると云ふ事、慥かに聞き屆けたか。
才右　ちつと、丈夫な地獄耳でござりまする。
主膳　ナニ地獄耳。ハテ、丈夫な耳ぢやなア。
齋藤　ヤア、面倒な。なんでも半櫃。
トかゝるを、源吾止める。なにをト引き廻し半櫃を明ける。内より猿出て、齋藤治に掻きつく。恂り。皆々驚ろき
ヤア、こりや猿ぢや。

軍八　面妖な。傾城春雨が
清藏　生を替へて猿になつたワ。
三人　こりや、どうぢや。
ト主膳正こなしあつて
主膳　ハ、ア、嬋娟たる花の粧ひ、芙蓉のかんばせ、柳の眉面赤く、目元はキヨロ〳〵。この器量を見ては、イカサマ照太郎どのが家國を忘れ、ほだしを打たれしも尤も至極。ハテサテ、美なる傾城ぢやなア。
三人　こりや堪らぬ。
ト逃げようとする。
源吾　動くな。
ト立ち塞がる。と五ツの時計鳴る。
兵庫　最早辰の上刻。神拜の儀、如何でござるな。
ト左京之進、ソレと腹切らうとする。千里これを留める。
主膳　左京どの、何ゆゑの切腹。
左京　主膳正どの、天の羽衣紛失と云ひ、九州探題の印も、先達て。
主膳　紛失の儀も承知いたした。
左京　それゆゑ拙者が。

トまた死なうとする。

主膳　アイヤ、切腹には及ばぬ。探題の印、天の羽衣、詮議の的は只一つ。吟味の間は今暫らく。辰の神事を酉の刻に轉じ替へ、其うちに寶の詮議を。

兵庫　ムウ。すりや、先例より傳はる儀式をもどいても。

主膳　神は非禮を受け給はず、正直の心を以て勤める神拜。善惡は主膳正が胸にござる。

兵庫　ハテ、だゝ廣い、胸中ぢやなア。

主膳　猿と人と見違へしは、イカサマ、黒い眼ぢやわい。粗忽申した過怠。源吾、彼奴が兩手を以て、眼を塞ぎ、キッと縛しめい。

源吾　ハッ。

ト淸藏、逃げようとする。源吾立廻りにて眼へ手を當てさせ、括る。才右衛門、軍八、顫うて居る。軍八此うち、皆々と逃げようとする。

主膳　コリヤ、待て。

軍八　ハアイ。

主膳　虚言は申さぬと云うたが、違うたぞよ。存じの外違うた。

軍八　サア、それは、弘法も筆の誤まりでござりまする。

主膳　イカサマ。源吾、弘法の口を閉ぢさせ、右の如く縛しめよ。

源吾　ハッ。捕つた。

ト軍八を押へ、口を塞がせて縛る。才右衛門、顫うて居る。

才右　こりやもう爰には。

ト花道へ逃げ出す。大筒五太夫、橋がゝりの隅より、エイと遠當てに當てる。才右衛門、花道にて、脾腹を抱へ苦しんで、見事に宙返りして轉ける。

皆々　これは。

五太　當身の鍛練。遠殺しの手の内。

主膳　天晴れ。彼奴を、これへ。

五太　ハッ。

ト花道へツカ〳〵と行て、活を入れる。才右衛門心附き、逃げようとするを、五太太、立ち塞がり本舞臺へ引き戻す。

主膳　町人、コリヤ、最前地獄耳ぢやと云うたが、いよいよさうか。

才右　サア、それはな。オ、ソレ。春雨は猿になつても、青柳が爰に居れば。

青柳　コレイナア、わたしは。
才右　手附けは取つても、後金の二百兩を取らねば、關破り同然。
主膳　その金子、身共がくれう。
　トこなしあつて、花活を取つて來る。
兵庫　ヤア〳〵、その花活は。
　ト立たうとするを、主膳正、押へて
主膳　アイヤ、見事に咲く山吹の生け花。廓では、花を打つとも申すとやら。
　ト花活を明ける。小判出る。才右衛門、集めて
才右　金さへ取れば、云ひ分はござりませぬ。
主膳　云ひ分なくば、源吾、ソリヤ。
源吾　ハッ。捕つた。
　ト才右衛門を蹴倒し
　して、此奴は。
主膳　聞きまがうた誤まり。耳を塞いで縛しめい。
源吾　ハッ。
　トよろしく括り上げる。
兵庫　して、照太郎が落着はなんと。
主膳　暮れ六ツまで拙者が預かり。

千里　身請けの濟んだ、お傾城は。
主膳　照太郎が番人。コリヤ、取逃がさぬやう守護いたせ。
青柳　エヽ、有り難う存じまする。
主膳　御上使には暫らく奥へ。
照太　五太夫は次にて休息。
五太　ハッ。
　ト主膳正、下へ下り、猿の綱を取り、三人を括る。
主膳　斯く縛しめし。有樣は、取りも直さず、耳、口、目の三申。實にや我が罪、おのれを責め、貪慾の心より、飽くまで喰ひ溫かに着て。
　ト兵庫に目を附けて
　見ず聞かず物も云は猿三ツ猿に、交らざるこそまさるなりけり。
兵庫　ムウ。
　トおしづく。主膳正チッと見て
主膳　イザ、御上使。
兵庫　何れも、案內。
皆々　先づお入りあられませう。
　ト唄になり、兵庫、主膳正、喜藤治、左京之進、千里姫、その外皆々奥へ、五太夫、橋がゝりへ入る。源

清才　吾も續いて入る。才右衛門、軍八、清藏殘りて、右庚
申の見得。唄のとまりまでヂッとして居る。この切れ
に奥より、喜藤治出て、三人が繩を解く。
喜藤　折角巧うやりついたものを、主膳正が支へこさへ。
エ、殘念な。
清藏　づきの廻つた我れ〳〵が身の上。
軍八　うろたへて居たら、どんな目に遭はうも知れぬ。
才右　この金を路銀にして、高ぶけりするより外はない。
後の捌きは喜藤治さま。
喜藤　そりや氣遣ひ致すな。人の見ぬ間に、三人とも早う
早う。
三人　合點ぢや。
ト三人、向うへ走り入る。喜藤治、見送る、奥より、
千里姫出る。喜藤治、片脇へ隱れる。千里姫こなしあ
つて
千里　このマア島平は、何をして居やる事ぢや。早う戻つ
てくれたがよいのに。
ト狀を出し
廓で渡しやつた島平が返事の繪文。この間に判じて見よ
う。
ト下に行て封を切らうとする。喜藤治、この間いろい
ろあつて、後より抱きつく。
喜藤　こりや、〆めたワ〳〵。
千里　ア、コレ、何をしやるぞいなう。
喜藤　何をせうにや。よい事をするのぢや。
千里　エ、つッとモウ、放しや〳〵。
トよろしく突き退け
喜藤治、自らに向うて慮外な奴め。
喜藤　慮外合點。ハテ、戀に上下の隔てはござりませぬ。
コレ、ようお聞きなされや、兄御の照太郎どのは、あの
通りのうつけ者。次の岩姫さまは行くへ知れず。理詰め
でいつちの妹御、お前に男を持たして、毛利の跡目。そ
の跡目に立ちさうな男と云ふは鼻ぢやな。この喜藤治が
似合ひ相應。これサ〳〵、日頃の思ひを、どうぞ晴らし
てくれの鐘ぢや。
ト抱きつき、嫌らしうする。
千里　惡い事しやんな。嫌ぢや〳〵。
ト逃げ廻る。この間に、喜藤治、千里が懷中にある狀
をソッと取る。千里これを知らず、逃げ廻る。喜藤治

捕へて

喜藤　嫁でも臆でも抱いて寝るのぢや。

千里　この島平は何をして居やる。

ト向うばつかり見て居る。喜藤治、いろ〳〵じなつく。

この模様よき時分、向うより

呼び　吉川藏人さまお入り。

ト渡り拍子になり、千里は島平を待ち兼ねる心にて、喜藤治を突き退け、橋がゝりの方へ行く。喜藤治、追ひかけ行くと、向うより、吉川の奥方萩の戸、衣裳裲襠にて華やかなる姿にて、破魔弓を持ち、腰元大勢附き添ひ出る。喜藤治は委細構はず、千里姫にかゝる。萩の戸千里を引き廻して後に圍ふ。喜藤治、萩の戸を見てギヨツとする。萩の戸、少し醉うたる體。喜藤治、後じさりする。萩の戸、千里姫が手を引きながら本舞臺へ來る。立廻り、和らかにあつて、留まる。鳴り物打ち上げる。

喜藤　思ひも依らぬ吉川の奥方。

千里　萩の戸さま。

ト萩の戸、醉うたるこなし。

萩の　年立歸る新玉の、春の霞ものどやかに、妾のお禮、かしこの年始。相の押へのと强ひられて、自らは、さつう醉うたわいなう。

千里　あなたのお越し。父上に樣子を。

ト行かうとする。

左京　イヤ、聞いた〳〵。

ト衣裳羽織にて、伏屋と小姓一人附き添ひ出る。

藏人の內室、よくこそ。サ、妾へ〳〵。

ト萩の戸、二重へ直る。皆々並よくあつて

萩の　左京之進さま、毛利吉川は近しい一家、心安う存じまして、今日のお禮も夫の名代、破魔弓は童の持遊びとは申せども、弓矢の形は武家の吉例。照太郎どのへ。

ト右の破魔弓を差出す。左京之進、取る。

左京　これは〳〵、志し受納いたす。

萩の　喜藤治、其方に自らが家土產。

喜藤　拙者へもお土產とな。

萩の　如何にも、誰れかある。縫付き、これへ。

ト向うより

源吾　ハア、、、。

ト花道より、才右衛門、清藏、軍八、縫付きにて戻り來る。

喜藤　ヤア、われ達は。
三人　コレ。
ト側へ行かうとする。向うより繩を引く。三人バッタリ轉ける。向うより、源吾、繩の端を持ち出て
源吾　萩の戸さま、御意に任せ、引据ゑましてござりまする。
左京　すりや、三人とも。
萩の　自らが來かゝる折から、逃げ行く三人。大方斯うと推量して、源吾へ云ひつけ、繩を打たせ、爰へ連れ來りしは、喜藤治、其方への家土産。
喜藤　まだこの上に吟味をせうなら、禮儀を亂す、不義の政道。
千里　それ〳〵、あの喜藤治が、自らを捉へて。
喜藤　イ、ヤ、不義と見せたは、不義の詮議。姫の隱し男は、拔差しならぬ證據の繪文。即ちこれに。
ト最前の狀を出す。千里驚ろき、それはと取りに行く。どこへ。人目を包む繪文の判じ物。この座に於て露顯に。
ト明けようとする。萩の戸、引取り。
萩の　こりや、自らへ送る文。
喜藤　なんと。
萩の　ハテ、自らへ來る文の返事。コレ、さうであらうが。
千里　サア。
喜藤　イヤサ、現在不義の。
萩の　達てとあれば、あの繩つき、責苦にかけて惡事の根ざしを。
喜藤　イヤ、それは。
萩の　サア、何事も云はぬが、秘密でありさうなものぢやぞや。
左京　何かは知らねど、大切な科人。彼奴らを御上使の御前へ引据ゑい。
源吾　畏まつてござりまする。
左京　内室には、イザ奥へ。
萩の　イヤ、暫らく、これで休息いたした上。
左京　然らば御勝手。
萩の　サア、喜藤治どの。
喜藤　段々のお世話、忝なう存じまする。
源吾　科人め、立ち居らう。
ト合ひ方になり、左京之進、喜藤治、小姓、腰元、奥へ入る。源吾、三人を引立て、下座へ入る。萩の戸、伏屋、千里、三人殘る。この時、向うバタ〳〵、てに

島平、大童にて、走り出て、本舞臺へ來てウンとこける。皆々、見て。

伏屋　ヤア、島平どのでござりますわいなア。

千里　ほんに島平、何をしやつたぞいなう。ちやつと藥を遣つてたもいなう。

トいろ〳〵介抱して

伏屋　昨夜からの大雪で、このマア手の冷たうなつたことわいの。

ト手を懷中に入れる。萩の戸が見るゆゑ、ちやつと放す。伏屋、水を汲んで來て

伏屋　サア、この水を〳〵。

千里　ドレ〳〵。

ト茶碗を取り、萩の戸が見ぬやうに、口から口に飲ますこなし。

伏屋　島平どのいなう。

ト二人介抱する。島平心附かざるゆゑ、萩の戸こなしあり、下手へ下り、懷中より守を出し

萩の　守の奇特

ト島平に戴かす。心附き、萩の戸が手をチッと取り、二人思ひ入れ。合ひ方になる。

島平、心が附いたか。

島平　萩の戸さま、只今の守は。

ト取らうとする。萩の戸、その手を拂ひ

萩の　下がれ。

島平　ハッ。

ト下へ下がり、こなしある。

伏屋　申しお姫樣、島平どのが、氣が附きましたわいなア。

千里　オヽ、嬉しや。自らは、どうせうと思うた。

ト萩の戸を見て

サア、下々の事を構ふ事はないけれど。

ト思ひ入れする。

萩の　なんにもせよ、正氣を失ふ程慌しう歸つたは、島平、氣遣ひな事ではないか。

島平　イヤ、モウ、お聞きなされて下さりませ。お家の重寶を盜んだ曲者めを、何が博多の廓よりぼッかけて、足を擂粉木にしても皆目知れず。すご〳〵歸る途中に於て、主膳正さまにお目見得いたし、まだその外に、サア、ちつと内用もござつて、心の急くまゝ、立歸つて、今の體裁。ところに、あなたが何やら結構なお守を戴くと、忽ち正氣が附きましたが、有り難い、その守を、ま一度。

ト萩の戸こなしあつて

萩の　イヤ、大切な守、滅多には戴かされぬ。島平、そちや無筆と聞いたが、いよ〳〵さうか。

島平　イヤ、モウ、育ちが下司でござりますれば、小ッ恥かしい事だが、生れ附いて、筆取る事は、知らず、皆目明盲目。

千里　それゆゑ自らが文は皆判じ物。

萩の　ヤア。

千里　サア。不自由な事でござりませう。

萩の　その恰幅で、無筆とは、惜しい事ぢやなう。

島平　さのみ屈託にもござりませぬが、どうやらすると恥をかきまするが、それより今の守。

萩の　イヤ、守より、有り難い物を頂かさう。ソレ。

ト最前の狀を遣る。島平、取上げ

島平　ヤア、これは。

萩の　無筆で讀めずば、返事は直ぐに。

千里　エヽ、そんなら。

萩の　思ひ内にあれば、色外に顯はれぬやう、たつた二人。サア、伏屋どの、奥へ。二人とも、後に逢ひませう。

ト唄になり、萩の戸、こなしあつて、伏屋を連れ、奥へ入る。千里姫、島平、殘り

千里　コレ、島平、其方の渡しやつた文を、人手に取られて、今の難儀。必らず叱つてもんなや。

ト側へ寄る。

島平　エヽ、舌たるい。退かつしやりませ。

ト千里を突き退け、奥へ行かうとする見得。

萩の戸さまが所持なされた、今の守は。

千里　また沒義道に云やるわいの。同じ屋敷に居ながらも、何時しみ〴〵と詞も交さず、何やかや云ひたい事が、たんとあるに依つての、島平々々。コレ、島平いなう。

島平　どう思うても合點のゆかぬ。お庭から座敷へ廻つて、萩の戸さまに。さうぢや。

トこなしあつて臆病口へツイと入る。千里殘り

千里　コレ島平々々、島平いなう。ツッと、なんの事ぢやぞいなう。人にばつかり氣を揉ませ。イヤ〳〵、自らも附いて行て。

ト行かうとする。奥より、伏屋出て

伏屋　申し、お姫樣、親御樣がお呼びなされてゞござりまする。サア〳〵、お越し遊ばしませ。

千里　イヤ〳〵、自らは。

伏屋　ハテ、マア、お越し遊ばせいなア。
　ト序の舞になると、千里を無理に連れ入る。合ひ方になり、障子屋體より、兵庫、そろ〳〵出て、奥より、萩の戸出る。
萩の　牛田源吾兵衛。
兵庫　こなたは。
萩の　上使となつて入込んだな。
　ト兵庫、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と萩の戸の側へ行き、破魔弓にて、萩の戸を散々に打ち据ゑる。
萩の　こりや、自らを、なんとするのぢや。
　ト兵庫、萩の戸が胸倉取つて
兵庫　なんとするとは、エ、こなたはなう。こなた樣は、尼子晴久公の忘れ形見、松江姫さま。
　ト云ふを「コレ」と押へる。兵庫もあたり見る。この時、上の柴垣より、島平、出かけ聞いて居る。兵庫、こなしあつて
兵庫　尼子の譜代、この牛田源吾兵衛はの、主人の仇、毛利の一家を恨まん爲、時を窺ひ、折を待つこの年月。今日、これへ都の上使來るを幸ひ、途中に於て討ち取れと家來に云ひつけ、某は村澤兵庫と名乘つて、勅使名代と云ひ立て、毛利一家を罪に落し、詰め腹切らさん我が計略。それにこなたは敵の枝葉、吉川が妻となり、色慾に溺れ、父御の仇を晴らさうと云ふ御所存はござらぬか。エ、見下げ果てたお人ぢやなア。
萩の　源吾兵衛、自らも尼子の娘、國の仇を思へばこそ、吉川の館へ入込み、色で仕掛けて藏人が心を蕩かし、妻よ、御臺よと呼ばるゝも、時節を見合せ、仇を晴らさん心の願ひ。國の事を思ふにつけても、幼少で別れた兄上、成人の後、顏も知らねば在所も知らず、父上の筐の守は、兄弟が廻り逢ひ、名乘り合ふ證據のしるし。二重鶴の片々も、今は筐と、なか〳〵に、無念を忍ぶも女の果敢なさ。この年月の遣る瀬なさを、源吾兵衛、推量してたもいなう。
　ト泣く。
兵庫　ホヽ、天晴れ。そのお心の程を聞く上は、若君の在所を尋ね
萩の　兄弟諸とも、年月の念願。
兵庫　マアそれまでは、矢張り其まゝ。
　ト破魔弓を取上げ
色どり飾りし破魔弓も

ト 破魔弓を碎き、弓と矢を外し
斯うすれば、心鋭き弓と尖り矢。

萩の　いつそ。

　ト きつとなり、奥へ行くを、よろしく留めて

兵庫　コレ、事に逸るは破れの元。こたたはコレ。

　ト 囁く。

萩の　すりや、一の宮には味方の伏勢。

兵庫　一手になつて今宵、館を討取る手筈。

萩の　すりや、自らも。

兵庫　一の宮へ早うござれ。

萩の　そんなら。

　ト つか／＼と花道へ行く。兵庫「エイ」と右の矢を打
ちかける。萩の戸、片手に掴み。
これは。

兵庫　ホヽウ、それでこそ尼子の姫君。早うござれ。

　ト 萩の戸、こなしあつて

萩の　源吾兵衞、さらば。

　ト 唄になり、向うへ、ツカ／＼行て、氣を替へ、形を
繕ろひ、しなやかに向うへ入る。兵庫こなしあつて、
障子屋體へ入る。直ぐに合ひ方。島平、そろ／＼向う
へ出る。奥より、主膳正出て

主膳　今のあらまし、とくと見屆けたか。

島平　ハツ。

主膳　コリヤ。

　ト 囁く。

島平　すりや、ぼツかけて。

主膳　早う行け。

島平　ハツ。

　ト 島平、向うへ走り入る。主膳正、後見送り、こなし
ある。暮れ六ツの鐘鳴ると、内にて

左京　最早暮れ六ツ。神拜の刻限。

照太　ハア。

　ト 内にて云ふ。主膳正、こなしあつて坐る。奥より、
左京之進、白無垢水色社杯、照太郎同じ形。よき所へ
坐る。二人の小姓、腹切り刀持ち、二人が前に直す。
千里、悄れ出て、橋がゝりより、源吾出る。

千里　そんなら、どうあつても。

源吾　お覺悟の御生害。ハア、。

　ト 千里、源吾、皆々悄れる。兵庫、出かけ

兵庫　云ひ譯の切腹、見屆けてくれうわい。

照太　親人様。
左京　悴。
兩人　南無阿彌陀佛。
　ト突ッ込まうとする。
主膳　兩人待つた。無益の切腹、それには及ばぬ。
二人　エヽ。
兵庫　ヤア、云ひ譯立たぬ親子の切腹。身共が介錯。
　ト立ちかゝる。主膳正、キッと留める。
主膳　上使の似せ者。そこ動くな。
兵庫　ヤヽ、なんと。
主膳　お勅使、辨の宰相さま、イザ、お越しあられませう。
　ト奥より勅使辨の宰相出る。
皆々　これは。
　ト主膳正、兵庫を引き廻し
主膳　今朝より、さぞお退屈にござりませう。やう／＼只今計りました。今暫らく御宥免下さりませう。
宰相　例年の格に依つて參りしところ、道を遮りし曲者。折よくも主膳正參り、曲者を追ひ拂ひ、裏道より廻り、あらましに樣子は聞いた。
兵庫　ヤア／＼／＼。

　ト大恟り。
千里　すりや、あなた様が、正眞の
左照　お勅使、辨の宰相さまか。
源吾　すりや、この上使は。
主膳　眞ッ赤な似せ者。
兵庫　ムウ。顯はれたら、いつそ。
　ト切つてかゝる。立廻りあつて、下へ取つて落し
主膳　源吾、ソリヤ。
源吾　動くな。
　ト取卷く。
兵庫　騷ぐな／＼。似せ上使に違ひはない。
皆々　さてこそなア。
兵庫　毛利に仇ある尼子の一族、命限りに切り拔く。ならば手柄に捕つて見よ。
源吾　捕つた。
　トかゝる。立廻りあり、振り切り向うへ駈け出すと、島平、向うより走り出て、見得よく留める。
主膳　島平、歸つたか。
島平　ヘツ。
主膳　して、曲者は。

島平　御城下より大手先、いろ〳〵探し見ましても、風を喰うてふけつたか、相揩り合つて逃がしたか、皆暮れ行くへ知れず。番手を揃へ捕り手を殘し、右の様子を御注進と立歸る出合ひ頭。同じ仲間の似せ上使、奴めが申し譯に、御前に於て引ッ縛り

ト繩捌きして

差上げまするでござりまする。敵はぬ所ぢや。お念佛でも、こつき出せ。

主膳　大切な科人。疵つかぬやうに搦め捕れ。

島平　ハッ。捕つた。

ト捕り方の立廻り。源吾もかゝる。三人橋がゝりにて、いろ〳〵あつて

宰相　して、探題の印は手に入つたか。

左京　御判手に入つてもござらうならば、毛利の家國治まりの儀を。

主膳　その儀は某、よきに推擧いたすであらう。御親子には衣服を改め、御勅使の饗應。

左照　ハッ。

ト兩人奥へ入る。橋がゝり立廻り。千里は、島平の方ばつかり見て居る。小姓、蓬萊を宰相の前へ持ち行く。

主膳　お勅使には、一獻召上がられませう。千里どの、お酌。

千里　アイ。

ト矢ッ張り、島平の方を見て居る。

主膳　これサ〳〵、お酌を早う。

千里　アイ〳〵。

ト始終、島平を見ながら長柄を持つ。

サア、お酌いたしませう。

トめでたい謠になり、辨の宰相、杯取上げる。千里、酒注ぐ。橋がゝり立廻りにて、兵庫、脇差を拔く。千里、いろ〳〵あつて

アレ〳〵危ない。あつちは拔き身を持つて居るわいなァ。

ト長柄を振り廻す。

主膳　これはしたり、どうした事ぢや。

トばた〳〵にて、花道より、股立ちの侍ひ走り出て

侍ひ　申し上げまする。

主膳　あわたゞしい。何事ぢや。

侍ひ　ハッ、羽衣の盜賊を、門前へ追ひ討ち出しましたところ、手痛く働らき、捕り手あぐんで見えまする。急ぎ

御加勢を願ひ上げまする。

ト云ひ捨て引ッ返し入る。

主膳　すりや、羽衣の盗賊。島平々々。

島平　ハツ。

ト立廻りあつて、源吾に渡し、こちらへ来る。

主膳　羽衣の盗賊、門前へ突き出したとある。手痛く働らき、持て餘すとの知らせ。外の者では心元ない。其方急ぎ参つて、羽衣を奪ひ返して立歸れ。

島平　ハア。して、あの曲者は。

主膳　源吾が居れば苦しうない。其方は羽衣の盗賊を。

島平　然らば御門前へ。

主膳　急げ〳〵。

島平　畏うて三度、まかせとな。

ト尻からげ、向うへ走り入る。

主膳　源吾、そちや廣見へぼひ出し、搦め捕れ。

源吾　ハア。歩め。

兵庫　小癪な。

ト兩人、立廻りしい〳〵、橋がゝりへ入る。千里姫、後を見て

千里　島平が怪我しやらねばよいが。

ト案じろこなし。此うち、左京之進、照太郎、衣裳改め出て

左京　神拜延引の申し譯は、羽衣と探題の印、二品を差上げませう間

照太　今暫らくの御容赦を

兩人　乞ひ願ひ奉りまする。

ト橋がゝりより、源吾出て

源吾　只今の曲者、搦め捕りましてござりまする。

主膳　出かした〳〵。

ト向うバタ〳〵にて、島平、羽衣の箱を持ち走り出る。

左照　島平、立歸つたか。

主膳　して、羽衣は。

島平　お喜びなされませ。盗賊めを引ッ捕へ、なんの苦もなく羽衣を、奪ひ返しましてござりまする。

ト主膳正が前に置く。

主膳　して、盗賊は如何いたした。

島平　後は組子に任せ、先づその箱が大切と、急ぎ立歸りましてござりまする。

主膳　出かした〳〵。愛い奴。左京どの、彼奴に褒美を遣

はされい。

左京　島平、出かした〳〵。武士に取立てくれうぞよ。

島平　有り難うござりまする。

　ト千里、いろ〳〵喜ぶこなし。

主膳　照太郎どの。羽衣を改め、お勅使に差上げ召され。

照太　ハッ。

　ト箱を前へ持ち出し、蓋を開けて見て

ヤア、この中の羽衣は。

主膳　なんと致した。

左京　悴、どう致した。

島平　どうやら心元ない。羽衣は如何。

　トつか〳〵と行て、箱を見て

ヤア〳〵、この中に羽衣はござりませぬ。

皆々　ヤア〳〵。

島平　さては。

　ト思ひ入れあつて、花道へ駈け出す。

主膳　島平、うろたへてどこへ駈け出す。

島平　只今の盗賊を捕へ、羽衣の詮議を。

主膳　コリヤ、待て。詮議に及ばぬ。

島平　ナニ、詮議に及ばぬとは。すりや盗賊の。

主膳　目當と云ふは、島平、其方ぢや。

島平　エ、。

　トぎつくり。千里も思ひ入れある。

主膳　下郎となつて、入込みし其方は、尼子が悴四郎太夫、眞の義久、謀叛の張本、身動きせずと、マア〳〵待て。

　ト千里、恟りする。源吾、花道へツカ〳〵と行て、島平が向うに立ち塞がり

源吾　尼子四郎、動くな。

　ト十手を構へる。

島平　この島平を尼子四郎とは、何を以て。

主膳　ホ、ウ、それこそは先達てより、紛失したる探題の印、まつた、夜前より紛失したる天の羽衣、其方を見出さん爲に、似せ者を以て盗賊を拵らへ、其方に云ひつけ、奪ひ返させしは、底意を採らん某が計略。コリヤ、其方が盗んだ羽衣は、眞赤な似せ者。

島平　ヤア。すりや。

　トぎよつとして、「ムウ」とこなしある。源吾、捕つたとかゝる。立廻りにて本舞臺へ戻る。

源吾　最早遁がれぬ。白狀々々。

島平　イ、ヤ、知らぬ。この島平は生抜きの下郎に違ひご

ざらぬ。
主膳　さうは云はさぬ。慥かな證據は探題の印、紛失の折から、寳藏に落ち散りしありし、コレこの密書。
ト狀を出し
島平　名もあり〳〵と尼子の姓名。密書とは猶以て。生れついて無筆の下郎。
主膳　イヤサ、汝が手より落せし密書、伊賀流の術者を頼み、毛利の館へ忍び入れ、探題の印を奪ひ、盗みくれよとの文言。詮議の種のこの密書を落せしゆゑ、わざと無筆となつて計らんとは、愚か〳〵。遁がれぬ所ぢや。直ぐに白狀せい。
島平　イヽヤ、その密書、心元ない。存ぜぬ、知らぬ。
主膳　達てあらがへば、其方と同腹の科人
ト向う戸屋の内より
萩の　最前の曲者、それへ參つて面縛しませう。
ト向うより三方に探題の印を載せ、持ち出る。
島平　ヤア、其方は妹。
萩の　この守を證據に、松江姫と名乘つて、毛利を討取ると云ひ合せしを、誠と思ひ、自らを始め、三人の繩つきを、奥庭にて助けるのみならず、味方と思ひ先達て、盗み取つた探題の印を自らに渡し、早うこの場を立退けと云つたでないか。
島平　ヤア、それは。
萩の　僞つて兄妹と云ひしも、其方が本心を見出さん爲。まだ合點がゆかずば、磯谷左忠太、これへ。
兵庫　ハア、。
ト橋がゝりより、兵庫、着附け麻裃、股立ちにて出る。
如何にも國詰めの武士なれば、人の知らぬを幸ひに、上使となつて入込む尼子の臣下、牛田源吾兵衛と名乘りしは、其方を見出さん爲。誠は東山どのゝ昵近の侍ひ、磯谷左忠太と云ふ者サ。
主膳　その道になつて、その道を顯はす苦肉の計、いま目前に思ひ知つたか。
照源　この上は尼子四郎。
左忠　白狀せずば、拷問にかけうか。
皆々　サア〳〵〳〵、どうぢや。
ト皆々詰めかける。
島平　ムウン。
ト無念のこなし。

子胥死して呉は傾き、范蠡去つて越亡ぶ、戰場ならで姓名は名乘らるまじと思ひしに、斯く顯はれし上は、何か包まん、雲州高田の城主、尼子晴久が悴、義丸、改名して四郎太夫義久。毛利が討手に亡び失せた鬱憤、まつた天の羽衣は、尼子の重寶、取返さんと思ふ一圖、事に逸つて斯く顯はれしは、運命の盡くる所。併し、心得ぬは兄弟の名乘り合ひ、割符を合せし、二重鶴の古金襴。その守は、どうして。

主膳　それこそ傾城青柳がこの起證。

ト此うち、青柳、出かけ居て

青柳　申し、その起證は。

主膳　覺えがあるか。

ト拋る。青柳、取つて

青柳　こりや昨夜、廓で失うた

主膳　思はず手に入る、博多の辻堂。

萩の　この守は親の筐。

ト青柳に見せる。

青柳　ほんに、それも。

主膳　コリヤ、兄妹の名乘りをせい。

島平　すりや、青柳が誠の妹、松江姬であつたか。

青柳　禿立ちから廓に育ち、親の筐と持つて居たその守。

照太　さてはお前が、兄樣であつたか。

照太　云ひ交した青柳が、現在敵の 妹 とは。

島平　思ひがけない、この場の名乘り。

照太　さうとは知らず。

青柳　現在の敵同士。

照太　ホイ。

トこなしある。千里姬、左京之進が刀にて死なうとする。左京之進とめて

左京　待て。

源吾　お姬樣、こりや、何ゆゑの御生害。

千里　父上樣、お免しなされて下さりませ。人目を忍んで、島平と云ひ交した、二世の契りの睦言も、仇になり行く敵同士。どうも生きては。

ト死なうとする。左京之進とめる。青柳、思ひ入れあつて、照太郎が刀にて、死なうとする。

照太　待つた。こりや何ゆゑ。

青柳　初めて逢うた兄さんの爲には、いとしい殿御は國の仇。どうでこの世では添ひ遂げては下さんすまい。孝と義理とに捨てる命。

千里　自らとても同じ事。例へ敵の血筋でも、思ひ込んだ大事の我が夫。死んで未來の契りが樂しみ。
青柳　さうでござんす。お姫樣。
千里　青柳どの。
二人　どうでも思ひ切られぬわいなア。
島平　禽獸翅に至るまで、愛着は離れず、心を以て心を知る。照太郎もその如く、千里姫、妹松江も、死くたばつてしまへ。
二人　南無阿彌陀佛。
照太　待つた。其方達より身共が先へ。
　ト死なうとする。
主膳　三人ともに待ちやれ。
三人　エ、。
主膳　照太郎どの、いま相果てゝ家が立つか。兩人も命を捨て、思ふ夫を地獄へ落すか。
二人　エ、。
主膳　閻魔の帳より慥かなる、某が詞は金鐵。死ぬるに及ばぬ。マア待て。
　ト連判狀を抛り出し
照太郎どの、それを見やれ。
　ト照太郎、取つて見て
照太　こりや、コレ昨夜廓で。
　ト披き
連判狀。こりや尼子一味に。
主膳　記した姓名。この恥を雪がずば、滅多には死なれまい。
三人　すりや、死ぬるにも死なれぬ身の上。
萩の　主膳さま、して張本の尼子四郞は。
主膳　九州名草に砦を構へ、浪人百姓を狩り集め、四海を計る四郞義久。
兵庫　さるに依つて順檢になぞらへ、到着なされた岩倉主膳さまは、汝を討手の東山家の御名代。この磯谷は横目の添へ人。遁がれぬ所ぢや、四郞義久、一味の者を白狀して、尋常に觀念々々。
島平　ヤア、愚か／＼。四郞義久、一本立ちの謀叛人。太刀刃金の續かんだけは、切つて／＼切り拔ける。ならば手柄に捕つて見居らう。
主膳　いづれも。ソリヤ。
兵照　捕つた。
　ト立廻り、いろ／＼あつて、程よく、義久、二人を引

き廻し、前なる空井戸へ飛び込む。掛け煙硝、井戸より立つ。遠責めになる。皆々悔り

皆々　ヤア、あの遠責めは。

ト奥より、喜藤治出て

喜藤　者ども參れ。

ト橋がゝりより。才右衞門、凜々しき形にて、福原軍八、三上清藏、その外組子大勢連れ出て

才右　ソリヤ。

軍清　動くな。

皆々　これは。

才右　尼子が謀叛を幸ひに、その虚に附け込み、菊地が殘黨、大館惡次郎と云ふ者。

喜藤　菊地の餘類に合體したる手始め。主膳正、うぬから。

ト切つてかゝる。主膳正、見得よく留めて。

主膳　ヤア、身の程知らぬ愚人めら。討手に向うた、岩倉主膳正。

兵庫　磯谷左忠太が、一々生けては歸さぬ。

皆々　觀念せい。

喜才　小癪な。ソリヤ。

ト皆々入り亂れ大タテ。遠責め嶮しく、喜藤治、切つてかゝり、兵庫、才右衞門と切り結ぶ。源吾、軍八、清藏に、組子皆々は、萩の戸、青柳、千里、左京之進、照太郎に切つてかゝる。皆々入り亂れの大タテ、華やかにあるべし。トゞ立廻り見得よく、どつこい〳〵ととまる。この時、大筒の音、ヅドンと響いて、人數屋體ぐろめ、バタ〳〵と微塵に碎ける。掛け煙硝方々にて立つ。皆々ウンと死ぬるなり。窓の黑蓋を下ろし。舞臺眞暗になると、向う戸屋の内より、大筒五太夫、大筒を構へ、後鉢卷にて、着込み、凜々しき見得にて出る。兩方の通ひ路より、黑裝束大勢、龕燈を持ち出る。大筒五太夫、誠は駒木根八郎にて、大筒を小脇に抱へ、舞臺へ靜々來て、皆々の死骸を見て

八郎　飛んで火に入る夏の虫めら。ムヽ、ハヽヽヽ。

トこの時、舞臺先の飛び石を上げ、下より四郎義久、着込み半纏にて、采配を持ち、ズツと出る。忍び皆々本舞臺へ直る。

四郎　駒木根八郎。

八郎　ハツ。

皆々　大將義久公。

ト一時に龕燈を差上げる。

四郎　コリヤ。

ト双方にて押へる。この見得よろしく

幕

三段目　粟島館の場

役名──粟島甲斐之助。後室、小夜路。立浪兵部。立浪伊達五郎。腰元、彌生 實ハ毛利息女岩姫。在所娘お種。八代丹下。鈴菜蕪藏。芹惡太郎。尼子四郎義久。名草甚兵衞。

造り物、惣一面の高塀、正面、門に門松、立派に拵の胴の大飾り、惣じて、粟島屋敷の表門の體。右門片脇に乘り物舁き据ゑ、陸尺、待ち合して居る體にて、めでたき太鼓にて幕ひらく。

ト向うより森本福之丞、𧘕𧘔にて、草履取り、若黨鈴持ちを連れ、出て來る。門の内より、鈴城大八、これも𧘕𧘔にて、草履取りを連れ出て來て、花道にて行き合ひ

大八　これは〳〵森本彌五右衞門どのゝ御子息。人日の御祝儀でござります。

福之　左やうでござります。粟島の屋敷へのお禮に參上仕ります。

大八　手前も只今お禮に參りました。先づはお別れ申しませう。

福之　おめでたう存じます。

ト互ひに目禮して、福之丞は家來を門前に待たし、門の内へ入る。大八は向うへ

大八　怪しからぬ冷えぢや、どうやら雪空になつて來たわい。

奴　左やうでござります。

ト云ひ〳〵入る。家の内より、和氣法印、熨斗目十德醫者の形、供侍ひを連れ出て

法印　お禮の次手にお脈を伺うたが、冷える加減か、兎角お藥が廻らぬ。アヽ、大名の若殿に、あの御病氣とは、氣の毒なものぢや。

ト云ひ〳〵乘り物に乘ると、陸尺、舁き上げる。七草を踏み、供廻りも入ると、門の内より、福之丞出て

福之　もう お禮も大方しまつた。定めて、父樣も下城なされたであらうか。

侍ひ　左やうでござります。
ト雪チラ〳〵降つて來る。
申し、雪が降つて參りました。早うお越しあられませう。
ト唄になり、福之丞、家來連れ、橋がゝりへ入る。これより、雪しきりに降つて來る。と向うより腰元彌生、着流し、抱へ帶にて、紅葉傘をさし、黑塗りの中下駄を穿き、出て、花道よき所にて立ちとまり、こなしあつて
彌生　誠に今日は人日、七種の御祝儀。若殿さまの御病氣、何卒御本腹あるやうにと、及ばずながら、歳德神樣へ願詣で、ほんに任せぬが世の慣ひとは云ひながら、どうぞ若殿樣が御息災で、わたしが。
ト云はうとして、思ひ入れあつて、空を眺め
君が爲、春の野に出で若菜つむ、我が衣手に雪は降りつつ。こちや雪も雨もいとやせぬ。どうぞ若殿樣が。
ト思ひ入れあつて、あたりを見て
滅相な。わたしとした事が、たつた一人。これも思ひ、内にあれば色外に……知る人のないは幸ひ。お待ち兼ねであらう。ちやつとお館へ。

ト小褄を取り、本舞臺へ來かゝると、門の中よりバタバタにて、三人の中間、あわて騷ぎて逃げて出る。彌生、恟りして
これは〳〵中間衆、騷がしい、何事ぢやぞいなア。
中一　何事どころか、腰拔けの若殿樣が、お召しもなされぬお馬が、厩から跳ねて出て、そこらを駈け廻つて、亂騷ぎぢや。
中二　口の怖い黑馬、跳ね歩いて、一向別當の手には廻りませぬ。
中三　アレ〳〵、お馬が爰へ駈けて來るさうな。
ト云ふうち、大バタ〳〵にて、黑馬、門口より駈け出るを、中間大勢、口綱を扣へながら、飛びさげ引き摺られ出るを、彌生、怖がり、皆々と一緒に逃げ廻る。馬、二三度東西を駈け廻る。中間皆々、蹄にかけられ、逃げて入る。此うち彌生、上の方へ廻つて居る。馬、橋がゝりへ駈け込まうとする、口綱を彌生、思はず下駄にて踏んで居る。馬はこれにて引き留められ、あせつて居る。彌生はこれを知らず、顏を隱し、顫うて居る。此うち向うより、尼子四郎、合羽にて、傘さし出かけ、これを見て、キツとなつて

四郎　ハア、、あればあるもの、天晴れ大力。女の縒れる髮筋には、大象もよく繋ぐと、大威德陀羅尼に說かれしは色に引かるゝ世を戒めの佛の梵言。それは方便。これは目前。力に任せて留める馬、古今に稀れなる稀代の女中。馬も一物。天晴れ名馬。並びなき駿馬。誠に今日は白馬の節會。青馬を見て、邪氣を拂ふと云ふに、この有樣。これも身共が孝心の喜び。

トこなしある。彌生もこれにて、チッと顏を上げ、怖怖馬を見て

彌生　ほんに思ひがけもない、この馬の。

ト云ひ／＼口綱を見て、始めて我が踏まへて居る事に氣が附いて

オヽ、怖。

ト飛び退き。馬、驅け出さうとする。四郎、ツカ／＼と行て、馬を引き廻し、口綱をしやんと取つて

四郎　コレ女中。

彌生　エヽ。

ト四郎を見る。四郎、こなしあつて

四郎　ハテ、美しい。

ト彌生もこなしあつて

彌生　でも、よう似た。

四郎　ヤア、

ト合ひ方になる。

彌生　見れば見る程……ハテ、合點のゆかぬ。

ト彌生、思ひ入れあつて、四郎に見惚れる。四郎、彌生に寄り添はうとして、思ひ入れあつて

四郎　ヤイ馬よ。其方が毛色はあでやかな。向う横肌ばり。それは兎もあれ、當世顏、髮の生え際、額のかゝり、目元に鈴をはる風。こぼれかゝりし梅の笑顏。櫻の鼻筋、つぼ／＼口の蕾つぼ菫。大坪流の馬上の大事、腰の坐りが肝心かんもん。チッと締めたる柳腰に、手綱より鞍抱へ帶、枚はどこぢや、水野が鶴飾か。漢の李夫人、揚貴妃もはだし馬。哀れ一期の思ひ出に、一馬場乘りたい。乘せてくれる心か。コレ、どうぢや、／＼。

ト片手にて、彌生を引き寄せる。彌生、こなしあつて

彌生　ほんに思ひがけない。あなたが、わたしらがやうな不束な者に、嬉しいお詞、忝ないと、お禮も滅多に申されませぬは、馬の事やら、わたしが身の上やら、とんとあやすが立ちませぬわいなア。

ト四郎こなしあつて

四郎　ヤイ、馬よ。長うは云はぬ。其方が蹄にかけて、身共をとんと、踏み殺せ〳〵。
ト思ひ入れある。彌生も思ひ入れあつて
彌生　馬よ。
ト轡づらを取らうとして、ちやつと飛び退き、こなしあつて
よう聞いてくれ。男馬の癖として、あの馬にも、この馬にも、ちよこ〳〵と乘り替へる飛び乘りならば、わたしや、否ぢや。この世は愚か、二世までも、通し馬なら、アノどうなりと。
四郎　通さいでは〳〵。二世は愚か三世相、相性も見て置いた。人喰ひ馬にも相口と云へば
彌生　なにを。狐を馬に乘せたやうな。
四郎　コレ、キヨロ〳〵した事ではないぞや。
彌生　知らぬ馬にも、たりがあると、得て見かけとは違ふなア。
四郎　通し馬の證據には、三方荒神、三方荒神、馬頭觀音も照覽あれ。
彌生　そんなら眞實。
四郎　違ひはない。

彌生　オヽ、嬉し。と云ひたいが、そんな徒らはなりませぬわいなア。
四郎　ヤア。
彌生　わたしは、このお館に宮仕へ。みだらな事いたしましては、御主人樣のお叱りでござりまする。
四郎　おやと云うて、最前から
彌生　いかい、御苦勞樣。
四郎　なんと。
彌生　御縁もござりませうなら、お目にかゝりませう。
ト唄になる。
四郎　コレ。それでは。
ト寄るを、振り切つて、ツイと門の內へ入る。四郎、こなしあつて
なんの事ぢや。折角釣つた三年物、水際で取り放した。併し、爰は栗島の館、今の女の力量。ムウ。
トこなしある所へ、橋がゝりより以前の中間皆々出て
中一　ヤア、大切な、此方のお馬を、奪ひ取る盜賊。ソリヤ。
皆々　やらんぞ。
ト取卷く。

四郎　猪子才ならづ虫ども。馬を奪ひ取る盜賊などゝは緩怠至極。惡く寄つたら蹴殺すぞ。

中二　ヤア、細言云はず、ソリヤ。

皆々　うぬ。

ト四郎にかゝる。立廻りにて、皆々敵はず、門の内へ逃げて入る。

四郎　ハテ、云ひ甲斐なき、もつさうども。無益の隙入り。思はず手に入るこの駿馬。さうぢや。

ト馬に乗り、向うへ驅けて行く所へ、向うより立浪伊達五郎、大前髪、着附け社杯、高股立ちにて走り出て、大手を擴げ

伊達　待つた。この馬とめた。待つた……待て。待たう待たう／＼。

ト馬の平首扱り廻す。尼子四郎、本舞臺へ乗り戻す。伊達五郎、入れ替つて、馬の尾筒をキッと捉へて見得になる。四郎も馬上より

四郎　ヤア、小賢しい童め。身を誰れとか思ふ。南海道に威を振ふ、百姓徒黨の惣大將、尼子四郎太夫義久とは我が事、身が乗つたる馬を留めんとは、命知らずの素丁稚め。

伊達　ハヽヽヽ、命知らずの素丁稚とは、こりやをかしい。忝なくも、この前髪は、當國の御主、粟島甲斐之助どのの御家老、立浪兵部が悴、同苗、伊達五郎さまぢやぞ。いま南海道に蔓る謀叛の張本、尼子四郎。幸ひのこの出合ひ。人馬もろとも引ッ縛る。觀念ひろがう。

四郎　見事其方が。

伊達　如何にも。

四郎　この四郎をや。

伊達　おんでもない事。

四郎　ハテ、しをらしい。蹄の引導、成佛させう。

伊達　なにを。

ト大小の鼓にて、面白き囃子になり、これより馬上にて伊達五郎と烈しき立廻りになり、兩人よろしく、トドどつこいと見得よくとまる。どろ／＼、チョン／＼にて、道具廻る。

造り物、二重舞臺、見附け金襖。上の方に塗り骨障子、筋違ひの屋體。橋がゝりの内屋體。この東西に押込みあり、右の二重舞臺に、後室小夜路、衣裳補襠、惣白髮にて、前に大きな板に薺を載せ、箸を持ち

つて居眠り居る見得。側に薺を囃す七つ道具飾り、よき所に、自在竹、釣り鍋をかけ、すべて綺麗に結構な座敷の模様、右の見得よろしく、合ひ方にて道具とまる。ト此うち橋がゝりより、腰元七人、揃ひの形にて、三方に七種を、一種づゝのせ、恭々しく持つて出て、小夜路が前に七つの三方を直し、上へ三人、下へ四人立ち別れ、皆々手を仕へ

腰三　申し、後室樣。

ト皆々顔見合せ、小夜路居眠り居るゆゑ

皆々　後室樣々々々

ト行儀よく起す。少しドロ／＼にて、小夜路、目を覺まし。

小夜　立浪兵部は居やらぬか。アレ、伊達五郎に力を添へ、百姓徒黨の大將、尼子四郎を搦め捕れ。兵部々々。

腰元　申し、後室樣。

皆々　そりや何を御意あそばしまする。

ト小夜路こなしあつて、皆々を見て

小夜　オヽ、腰元ども。

腰元　お家の吉例。

皆々　七種の若芽。

小夜　オヽ、誠に。それ正月七日、七種の粥を延喜帝へ奉りしより傳へて、これ若菜の節會と祝ひ、武士にもさま／＼故實あつて、七種の粥を煮る。殊に唐土の鳥と日本の鳥と、渡らぬ先にと、囃す役目も當館の主、悴甲斐之助倫澄なれども、筋氣の病に行歩自由ならず。それゆゑ妾が薺の囃子。この曉に、まどろむともなし寢入りしうちに、所は即ち館の表門、腰元彌生が歳德詣での歸るさに、厩の馬が駈け出るを、思はず留める女の力。慕ひ寄つた浪人は、名に負ふ尼子四郎義久。彼の馬を奪ひ取り駈け出すを、やらじと爭ふ立浪伊達五郎。互ひに劣らぬ若者の爭ひは。

トいろ／＼思ひ入れあつて

ハヽヽヽ。さては夢であつたか。

腰元　後室樣。

皆々　なんと遊ばしましたえ。

小夜　ハテ、夢は五臟の煩らひぢやよな。

トこなしあつて、向う戸屋の内より

呼び　立浪兵部出仕。

腰元　申し。お聞き遊ばしましたか。

小夜　兵部が出仕か。

皆々　左やうでござりまする。
ト臆病口より、八代丹下、衣裳裃。橋がゝりより、鈴菜蕪藏、芹惡太郎、同じ衣裳裃にて出る。
丹下　今日はお家の御吉例。
惡蕪　我れ〳〵も疾より、出仕仕りましてござります。
小夜　八代丹下……組下の兩人、出仕大儀。
三人　ハツ。
ト向う通るは熊野道者の手鞠唄になると、向うより、立浪兵部、親仁にて、着附け、勇み鯛持つて出る。在所娘お種、光琳模様の着附けに茜裏を裾に短く絡げて、手覆、脚絆、田舎娘の拵らへにて、梅の模様の帷子を肩に掛け、兵部と連れ立ち、ツカ〳〵と出て來て
たれ　コレサア、爺樣、わしが願ひを叶へてやらうと、深切なお詞、それで爰まで歩びましたが、こりやマア、どこへ行くのだなア。
ト少し訛りて云ふ。
兵部　子を思ふ親の心は、闇にはあらずと云ふ世の諺。この兵部も伊達五郎と云ふ倅を持てば、樣子を聞いた、其方が身の上。不便に思ふゆゑ、身共が望みを叶へてやる程に、なんにも云はずに、身共に附いて參れ。

たれ　アイ〳〵。そりや忝ならござんすわいなア。
ト お種、兵部に附いて、本舞臺へ來る。
小夜　兵部、其方の出仕を待ち兼ねたわいなう。
兵部　後室樣……丹下どの、何れも今日はお家の吉例。
蕪惡　若菜の節會、お互ひに
兵皆　萬々おめでたう存じまする。
ト皆々辭儀する。この時お種、あたりを見廻し
たれ　ても、結構なお内方でござんすなア。
腰元　申し兵部さま、あなたが御同道なされました、見馴れませぬこの女中さんは
腰皆　どなたでござりまするえ。
兵部　イヤ、この者の儀は、後にてとくと。先づ、若殿樣の御容體は
小夜　相も變らぬ、甲斐之助が病氣。先程典藥、和氣法印見舞はれて、密かに妾への話し。即座に平癒の秘法はあれど、早速に調はぬ大切な藥種。
兵部　して、その藥種はな。
小夜　イヤ、大切な秘法、迂濶には云はれぬ。
兵部　ムウ。御尤も。
丹下　イヤ、モウ、若殿の御病氣は、武家には不吉な腰拔

け覺。例へ耆婆扁鵲がかゝつても、滅多に癒らぬ御難病。
惡太　殊に粟島のお家には、腰より下の難病あつて
燕藏　若殿の覺の病と、注連繩の太いのは、粟島の名物で
　ござりまする。
小夜　三人とも默れ。家來の身として、主を嘲る過言の至
り。今一言云うて見よ。其方達が身の上おやぞ。
丹下　イヤ、全く惡く申すのではござりませぬ。若殿の御
病氣、氣の毒に存じますから。
小夜　まだ〱慮外な。
丹下　ムウ、然らば段々あやまり
二人　入りましてござりまする。
兵部　ハヽア。天に不時の風雨あり、人に不時の病あり、
殊に又、人間は病の器とあらば、難病、奇病珍らしから
ず。今日は大切な若菜の節會。お家を祝し、若殿を壽ぐ
拙者が献上。後室樣、御上覽下さりませう。
　ト右の鯛を、小夜路が前に置く。
小夜　ムウ。これは。
丹下　そりやソレ、子供遊びの
兵部　勇み鯛とも又、衽鯛とも申す。天照大神の弟神、
蛭子の尊は、足なへの御病にて、天の岩舟にて、漂泊ひ
給へど、當家の氏神すくな彦の尊、世に粟島大明神と唱
ふる、この神の計らひにて、御病平癒ありし古例を以
て、この衽鯛の献上。追ッつけ、若殿の御病氣御本腹あ
らば、當家は益々武名の榮え。さすれば家來の拙者まで、
冥加に叶ふ仕合せと存じ奉ります。
小夜　忝ない兵部が賜物。妾が計らひにて、この目出鯛
にめでたいを重ねる、甲斐之助が本腹。追ッつけ、吉左
右聞かしませう。
兵部　後室樣、御辛勞の程を憚りながら、察し入りまして
ござりまする。
　ト此うちお種、こなしあつて、兵部が袖を、ソッと引
いて
たね　申し〱爺樣、そつちやの御用が濟んだら、わたし
が賴んだ事は、どうでござんすえ。爰に夜を又宿取つて、
逗留せねばなりませぬわいなア。
兵部　如何にも。孝心な其方なれど、身共が家來に云ひつ
け、他國は知らずこの國中を、尋ね求めてくれるわいや
い。
たね　サア、早う逢ひたいと思へば、斯う云ふうちも氣が
急いて、待て暫しがござんせぬわいなア。

兵部　オヽ、道理々々。
丹下　イヤ、兵部どの、その女は何國の者でござる。尋ねるとは何者でござるな。
兵部　サア、お聞きなされい。產みの親を尋ねん爲、我が生れ故鄕を振り捨て、方々とさまよひ步くのでござる。
丹下　ハテ、大膽な女郎めなア。
たれ　大膽ぢやござんせぬ。產みの母さんに逢ひたいに依つてゞござんすわいなア。アノ、物を尋ねるには、一人でも大勢に賴むものぢやげにござんす。怖い顏なお侍ひ樣、お前も聞いて下さんせ。わたしは中國出雲の國、松江領芝田村、百姓、與茂九郎と云ふは、わたしの父さんなれど、疾に死なしやんして、母さんと二人暮らすうち、母さんも去年の秋、風の心地と病みつかしやんす。初手は當分の事ぢやと思うて居たが、お年の病に、醫者樣も、あれくれと、見てもらうたし、八卦にも、今度は大事ぢや、危ないと、聞く度々に、わたしが悲しさ、母さんは覺悟して、まだ息のあるうち、わたしを呼んでナ、コレ娘、わが身をこれまで育てたが、こちらの女夫はほんまの親ではないぞや、少さい時に、この村端れで拾うた捨子、賤しからぬ人の胤と見えて、コレこの紙縑の片しと

ト懷より、女雛を出して見せ

コレ、この帷子に卷いてあるを、死なしやんした親仁どのが拾うて戾つて、今まで育て上げたが、可愛や、わしが死んだら、わが身は孤子、さぞ賴りがあるまい程に、わしが身のとひ弔ひはせいでも大事ない、この雛樣と帷子を證據に、捨てられた、誠の親御を尋ねて、賴りにせいと、くれ〴〵との御遺言で、この年まで育てられた、母さんは死なしやんしたわいなア。

ト泣く。此うち、小夜路、樣子をとつくりと聞いて居る。丹下、お種が側へ立ち寄つて

丹下　エヽ、聞えた。それで時候に合はぬ、この帷子を持ち步くのぢやな。

ト擴げて見て

ハア、なんぢや。こりや派手な模樣ぢや。
惡太　ドレ〳〵。

ト蕪藏も立ち上がり見て

これ御覽じ、肩と裾とに梅の枝でござる。
蕪藏　それ〳〵、中は御前の反り橋でござる。
惡太　反り橋とは面白い模樣な。

燕蔵　どうでも、こりや踊り帷子でござらう。
丹下　七草の日に踊り帷子とは、誠に、これが盆と正月、
　先づ大踊り込みとは
惡太　起縁がよい。ハヽヽヽ。
　ト三人笑ふ。
たれ　ソレ、その帷子と、この雛を證據に、産みの母さんに逢ひたさ、中國からはる〴〵と、大和路から伊勢、熊野、この紀伊の國まで、尋ねて來やんしたわいなア。
腰一　ほんに、様子を聞けば、おいとしい女中の身の上。
腰二　親御を尋ねやうとは、いかい苦勞をさしやんすなア。
腰三　殊に女雛を附け、捨てたとは、どう云ふ心であらうなう。
腰五　そりや何を云はしやんすぞいなア。
腰五　わしや、あの雛さまが欲しいわいなア。
皆々　滅相な事を。
兵部　かしましい。腰元、控へさつしやれ。
皆々　ハイ〳〵。
　ト扣へる。兵部、右の雛を取り上げ見て
兵部　永祿四年辛の酉三月三日、誕生の双子の女子。ムウ、それ男女の双子は、女夫子と云うて、一つに育つれば親子に祟るとあつて、引分けるものとやら。すりや、男女の双子、女夫子ゆゑ、それでそちや捨てられたのぢやなア。
たれ　なんで捨てられたのぢや知らねど、早う母さんに逢ひたうござんすわいなア。
小夜　燒野の雉子、夜の鶴、凡そ生あるものごとに、子を思はぬはなき慣ひ、それに捨つるは胴慾な親心。
たれ　エヽ。
　ト小夜路を見る。
小夜　その帷子これへ。
たれ　アイ。
　ト合ひ方になり、お種おづ〳〵小夜路が側へ持つて行く。小夜路、思ひ入れあつて、帷子を手にかけ、お種が顔をヂツと見詰めて居る。兵部も雛の書付けを見て、小夜路に目を附けて
兵部　申し、後室様。
　トちやつと帷子を取つて模様を見る。
小夜　ヤ。
兵部　その帷子は。
小夜　親子の印。

兵部　なんと不便なその女。
小夜　誠に派手な模様どり。
たれ　どうぞ、あなた方のお世話で、母さんに逢はれるやうに、お頼み申しますわいなア。
小夜　コレ、其方には、まだ兄弟があらうがの。
たれ　イヽエ。
小夜　實の父御と云ふのも。
たれ　なんにも存じませぬわいなア。
小夜　定めし由ある武士の浪人であらう。
たれ　アイ、養子娘ぢやと、死しなに、母さんの物語りでござんした。
小夜　ムウ。して、其方は幾つぢや。
たれ　明ければ十九でござんす。
兵部　永禄四年辛の酉。
小夜　ムウ。三つの時、捨てられて十九歳。
兵部　倅伊達五郎も當年十九歳。
たれ　わたしが守の
兵部　コレこの女雛。
小夜　男雛は何れに。
兵部　水の流れと

たれ　母さんのお行くへ。
小夜　ソレ、尋ねてやつたも。
ト帷子を抛つてやる。兵部取り上げ、思ひ入れあつて
兵部　委細承知仕つてござります。
トこなしある。向うバタ／＼にて、伊達五郎、前髪の形にて出て
伊達　後室様、親人。
兵部　倅、あわたゞしい。何事ぢや
伊達　ハツ。
ト本舞臺へ來て
鎌倉より火急の御上使、今日當館へ御着との、御内意の先觸れ。承ると直さま、右の様子を。
兵部　ムウ。鎌倉より火急の御上使とは。
三人　何にもせよ、合點の行かぬ。
小夜　當館の主、甲斐之助は、長の病氣。なんぞ氣遣ひな儀ではあるまいか。
伊達　今日と云うても、時刻の知れぬ御上使のお入り。
丹下　伊達五郎どのゝ仰せの通り、不時の御上使なれば
黨惡　出迎ひ萬端、設けの用意。
兵部　尤もの心附き。三人とも、早く。

三人　畏まりました。

ト三人、橋がゝりへ、ツイと入る。お種、うろ〳〵して

たれ　申し、わたしや爰に居ても、大事ござりませぬかえ。

小夜　オヽ、苦しうない。ソレ、腰元どもと一緒に。

たれ　アイ〳〵。

ト皆の側へ坐る。

伊達　親人、御上使の趣き、なんぞお心當りがござりまするか。

兵部　善惡ともに、承らねば樣子は相知れぬ。

伊達　そりや知れた事を仰しやる。拙者は又、若殿樣の御病氣ゆゑ。

兵部　ハヽヽ、若殿は作り病でない、實病。何も案じる事はおりない。

伊達　ぢやと申して、お國と鎌倉、どう聞えてあらうやら。

小夜　イヤ〳〵、伊達五郎。

五郎　ハツ〳〵。

小夜　コレ、其方は、尼子四郎義久を見知つて居やるか。

五郎　イヤ、噂のある謀叛人なれど、これまで對面仕らねば、尼子四郎がしやッ面は、存じませぬ。

小夜　すりや、いよ〳〵夢であつたか。

トこなしある。

伊達　そりや、何を御意あられまする。

小夜　イヤ、現にも我が子の事。

トお種の方を見る。

兵部　御病氣の若殿なれど

伊達　御上使への御對面。

小夜　いつもの通りに。

たれ　わたしや旅籠屋で、待つて居ませうかいなア。

兵部　イヤ、奧の間で。

小夜　御上使饗應。

兵部　悴。

腰皆　この女中も御一緒に。

小夜　皆の者、奧へおぢや。

ト唄になり、小夜路、お種、七人の腰元連れ、奧へ入る。兵部、雛を見い〳〵、思案して、フト、伊達五郎と顏見合せ、ちやつと雛を隱し、思ひ入れあつて、顏にて奧へ來いと云ふこなし。伊達五郎、こなしあつて連れ立ち奧へ入る。と在鄕唄になる。向うより、名草

甚兵衞、旅籠をかたげ出て來る。後より以前の中間三人附いて出る。

三人　ヤイ、下に居らう〳〵。

ト云ひ〳〵附いて出る。

中一　うぬ、むさい形をして、誰れに斷わつて、お座敷先へ遠慮なう通り居る。

中二　茲な慮外者め。

中三　意地張ると、うぬ、引摺り出さうか。

甚兵　コレイナウ、お前方も、ぎこつに云はぬものぢや。どうで要る祝ひの物。既に發句にも、重たくも雪ついて來い若芽かり……これ見やんせ。いま畑から引き立て、どうでも冷える加減かして、今朝の雪がまだ解けぬ。お前方の心と一緒ぢや。ハヽヽヽ。

ト笑ひ〳〵、本舞臺へ行く。皆々も附いて居て

中一　しつこいぞ老ぼれめ。滅多無性に泥臑を切り込むと

皆々　手は見せぬ。

甚兵　ハテ、おれぢやと云うて、この國名草の郡の百姓。其やうにポン〳〵云はぬものぢや。百姓は國の寶。なんと正月早々から、寶が入つたと云ふは、起緣がよからうがの。

三人　イヤ、此方の起緣は、うぬを斯うぢや。

ト切りかけるを、ちよつと留めて

甚兵　滅相な。こりやおれをなんとするのぢや。

三人　どうやら合點のゆかぬ老ぼれめ。

甚兵　なんと。

三人　ぢやに依つて。

トこれより、甚兵衞、三人を相手に立廻りよろしく、ポン〳〵當てる。三人倒れる。

甚兵　なんぼう年寄りでも、そんなで行く親仁ぢやないわい。

トこなしあると、橋がゝりより、惡太郎、蕪藏、ツカツカと出て

二人　山中鹿之助どの。

甚兵　先達て入込ました兩人。して、當家の主、甲斐之助は、いよ〳〵噂の通り。

惡太　腰拔けの病。醫療手を盡しても

蕪藏　未だ本腹とは相見えませぬ。

甚兵　毛利に緣ある、この粟島の家。これも我が君の仇。

二人　して、義久公にはな。

甚兵　コリヤ。

ト呼子を出し吹く。前の井戸より、四郎義久、羽織野袴、頭巾、忍びの形にてセリ上がる。

四郎　鹿之助、其方は。

甚兵　やうやく只今。

四郎　この館へ忍び入りしも、毛利の枝葉、粟島家を滅亡させん我が手段。然るに今日、鎌倉より火急の上使とあるは。

二人　未だその様子は相知れませぬ。

四郎　この度、鷲塚の繩張りにて、名草の郡に城郭を築く、その儀はなんと。

甚兵　ハッ、軍師十右衛門が指圖にて、一味の百姓粉骨碎身仕り、名草の郡の城普請、今日成就。大將には、この粟島家の滅亡させ、直ぐに今宵入城、お供仕らん爲め、拙者當館へ。

四郎　萬事の手番ひ。鷲塚、駒木根、其方が働らき。天晴れ。して、申しつけた、天の羽衣は。

甚兵　如何にも、盗み置いた天の羽衣、隱し所は、卽ち、これに。

ト短册を出す。四郎義久取つて

四郎　紀の路なる名草の岡の櫻花、落ちて谷間の雪と見るらん。ムウ。

ト思ひ入れ、三人起きて

三人　ヤア、さては。

ト四郎にかゝるを、惡太郎、蕪藏、立廻り、兩人を切り殺す。甚兵衞、今一人を一刀に切り殺す。

甚兵　コレ、大事は小事より。

ト甚兵衞、四郎、二重舞臺。蕪藏、惡太郎は平に居て

惡太　斯くの通り。

トぐつと、止めを刺す。甚兵衞、こなしあつて

甚兵　ムウ。秘すべし〳〵。

四郎　尤も。

トちよん〳〵返し。廻る。

造り物、三間の間、二重舞臺、見附け、塗り骨綺麗なる障子。橋がゝり、臆病口に柴垣、植込み、紅梅の盛り見事に取合せよろしく、右の二重舞臺に粟島甲斐之助、中月代、廣袖、着付け羽織にて褥の上に居る。脇息に凭れ、見臺に德本論を載せ、讀んで居る體。腰元彌生、側に琴彈いて居る。兩人、この見得よろしく、琴唄にて道具とまる。彌生、琴にて

彌生　實に治まれる國かなと、君にひかふる松が枝の、立ち寄る蔭はいつまでも、老いても朽ちぬ常磐木の。

ト合ひ方になり

甲斐　剝の象は曰く、山地につくは剝なり……上宴を以て下を厚くし、宅を安んずる。上と云ふは君を云へり、人の上たるを云ふなり、それ下は上の本なり、その本堅ければ上安し、剝の卦は艮を上にして、坤を下にす、艮は山なり、坤は地なり、山高く地に起りて、却つてふじくするの憂ひなし、民を厚くすれば人君きぼうの禍ひなし。

彌生　申し殿樣、其やうに書物ばつかり御覽遊ばしましては、御病氣の上に、お疲れでも出ましては、後室樣のお心遣ひ。もう止しになされませぬかいなア。

甲斐　イヤ〳〵、好きの道なれば苦しうない。

彌生　申し、其やうに、常から學問をお好みなされます殿樣に、憚りながら私しが、ちとお尋ね申し上げたい儀がござりますわいなア。

甲斐　彌生、何事ぢや、

彌生　ハイ、アノ、この正月に姫始めと申しまする事は、何の事でござりまするえ。

甲斐　それ姫始めとは、梁塵秘抄に、正月始めて馬場殿に於て、馬二騎を駈ける、これ飛馬と書いて姫始めと唱ふ。また曆の元日にあるは馬の事にあらず……ひめ始めと假名で書くは、曆には火水妃とあり、これ天文の博士、土御門家の祕密なれば、餘人の知る事にあらず。

彌生　左やうなら、姫始めと申しまするは

甲斐　大內の御節會、大切の式。

彌生　私しは惡しう心得ました。姫始めと申しまするは、アノ

ト甲斐之助が顏見て

彌生　ホヽ、、、

ト顏を隱して笑ふ。甲斐之助、こなしあつて

甲斐　彌生、召使ひの其方なれど、日頃の介抱、過分なぞよ。

彌生　御勿體ない、殿樣のお詞。お主樣の御病氣、御介抱申し上げまする私しは、モウ〳〵嬉しうて〳〵

甲斐　ヤア。

彌生　サア、不束なわたしなれば、不調法の段は、お免しなされて下さりませ。

甲斐　なんの、氣に入つてある其方なれば

ト思ひ入れあつて、また見臺に向つて、
人の上たるもの、如何ぞ敬せざらん。不仁の君たるもの人心を失ふは、獨夫となる。

彌生　申し、もう陳分漢は、お止め遊ばしませいなア。

甲斐　イヤ／＼、この文の通り、人の誠を失はず、主從上下の隔てあらんや。殊には其方が志し。彌生。

ト思ひ入れあつて

忘れは置かぬ。

ト氣味合ひあつて云ふ。彌生も心意氣あつて

彌生　左やうな事は、マア。

ト嬉しいこなしにて、ちよつと琴にかゝり

〽誰れか云ひけん瑞垣の、久しき代々を祝ひこめ、高き屋に登りて見れば煙立つ、民の竈は賑はひて、治まる門のめでたさよ。

ト彈き仕舞ふ。甲斐之助、見臺を片附ける。これより合ひ方になる。

甲斐　ハテ、面白い琴の唄。

彌生　なんの拙ないわたしが爪音。

甲斐　イヤ、峯の松風通ふらん、彌生、其方が心は。

彌生　三年は爰に須磨の浦波の、行平の中納言さま、汐汲む蜑に馴れ給ひしは、どう云ふ御心でござりませうなア。

甲斐　歩行自由ならざるこの甲斐之助、病氣なればこそ其方が介抱。アノ、罪なくて配所の月と、只其方が事を。

彌生　早う御本腹遊ばしたら

甲斐　母にお願ひ申して

彌生　アノ、賤しいわたしを。

甲斐　戀に上下の隔てはない。

彌生　それでもあなたには、お云ひ號けの。

甲斐　尤も中國毛利の息女岩姫と、幼ない時より云ひ號けはあれど、かくの如くの病氣なれば、迎ひの輿は元より、使者は立てども延引するは。

彌生　岩姫さまは、お氣に入りませぬかえ。

甲斐　ついぞ對面せぬ岩姫。さら／＼嫌ふではない。身共が病氣本腹の上にては、呼び迎へて祝言の杯。

彈生　それに違ひはござりませぬかえ。

甲斐　ハテ、親御の契約なれば、是非岩姫は身共が奥。

彌生　エヽ、忝ない。

甲斐　彌生、忝ないとは。

彌生　エヽ。

甲斐　云ひ號けの岩姫と祝言するが、そちや忝ないか。
彌生　なんのマア。
甲斐　それに今の喜びは。
彌生　サア、それはアノ、斯うでござりますわいなア。女は、相身互ひと、云ひ號けの岩姫さまが、殿樣の今のお詞をお聞き遊ばされましたらば、さぞ忝ないと、お喜びなされうと存じまして、ツイ、それで今のやうに私しが。
甲斐　忝ないか。
彌生　ハイ。
甲斐　近う來い。
彌生　エ、、
甲斐　ハテ、來いと云ふのに。
彌生　ハイ。
　トこなしあつて、甲斐之助が側へにじり寄つて
お召しなされまする御用は、
甲斐　コリヤ。
　ト彌生の手を取つて引き寄せる。彌生「エ、」と悱りすると
そちや何かにつけて、しをらしい者ぢやなア。

　ト引き寄せる。彌生も思ひ入れ。奧より田舍娘お種、ツカ〳〵と出る。兩人悱りする。彌生、ちやつと下座へ下がる。
たね　さつきの爺樣は、何所に居さんす知らぬ。
　ト甲斐之助、お種を見て
甲斐　ムウ。館に見馴れぬ女。
彌生　ほんにお前は。
たね　アイ、わたしや出雲の國、芝田村の百姓、與茂九郎と云ふ者の娘でござんすわいなア。
彌生　その百姓のお娘御が、此お座敷へござんしたは。
たね　ちつと尋ねるお人があつて、変な御家來の親仁樣と、連れ立つて參じやんしたが、さう云ふお前方は、誰れさんぢやえ。
甲斐　身共はこの館の主、甲斐之助尙澄ぢやわい。
たね　エ、、そんならお前さんは。
彌生　殿樣の御前、下からしやんせ。
たね　アイ。
　ト悱りして二重の下へ下りる。
甲斐　イヤ〳〵、苦しうない。コリヤ女。
たね　エ、。

甲斐　其方が名は。

たれ　アイ、お種と申しまするわいなア。

ト甲斐之助が顔をヂッと見る。

甲斐　ハテ、百姓の娘にお種とは、よい名ぢやな。

たれ　アイ〳〵、わしが名は、よい名でござりまするかえ。

トつか〳〵と側へ寄らうとするを、彌生、こなしあつて二重より下り、お種を留めて

彌生　コレ、慮外な。殿樣のお側へ寄つて下さんすな。

トぴんと云ふ。お種、委細構はず

たれ　それでも、わしが名を、よい名ぢやと云うてぢやに依つて。

トお種とかく甲斐之助が方へ行きたがるを

彌生　滅相な。御病氣の殿樣のお側へ、滅多に外の女子はやる事はならぬ。なりませぬわいなア。

甲斐　彌生、百姓の娘とあれば、農業の手業が聞きたい。苦しうない。これへ、

彌生　イエ〳〵、杉菜の柴に土筆、松の木には得て竹が生えるものでござりますげにござりまする。

たれ　アイ、生えたわいな〳〵。わたしが在所の山にも、それは〳〵澤山に出來るに依つて、秋の頃にはお屋敷のお方も、皆茸狩りに見えるわいなア。それぢやに依つて、あの殿樣も、わしが在所へ連れまして行きやんせうわいなア。

彌生　なんぢやぞいなア、百姓の娘だてら、何も知らずに……エ、、慮外者めが。

甲斐　兎角あの女を、彌生が我が前へ寄せつけぬは。エ、聞えた。もし身共が。

彌生　お情深いあなたぢやに依つて。

甲斐　それで其方が。

ト笑ふ。お種、甲斐之助に見惚れ居て

たれ　オ、、可愛らしい、あの口元わいの。

ト思はず知らず大きな聲にて云ふ。彌生も思ひ入れあつて

彌生　そりやこそな。

トこなしある。

たれ　オ、、寒々。こりや、いから寒うなつて來たわいなア。

甲斐　コリヤ〳〵お種、なんとした〳〵。

たれ　なんぢや知らぬが、首筋のあたりが寒うて〳〵、ど

うにもなりませぬわいなア。

甲斐　風邪を引いたか。藥取らさうか。

　ト枕箱を明ける。

彌生　なんの、あの女にお藥を、

甲斐　イヤ〳〵、人を救ふは仁の道。

　ト藥を出す。

彌生　あなたのお手づからは、あんまり

　ト引ツたくり、お種が側へバタ〳〵と持つて行て

ソレ、お藥ぢや。

　ト抛りつけ、こちらへバツタリ、と下に居る。お種、藥を取つて頂き、甲斐之助へこなしあつて、嬉しさうに丸藥を呑む。

甲斐　湯を與へい、彌生、

彌生　なんの、丸藥を呑むに、白湯は入りませぬわいなア。

甲斐　ハテサテ、湯を呑ましてやれと云ふに。

彌生　ハイ〳〵、細々と、ようお心が附きます事ぢや。

　トびんしやんとして、白湯を酌んで來て、お種が側へ來て

殿樣の仰せ。ソレ白湯、

　ト素氣なう差出す。

たね　これはお前樣のお世話ぢやなア。

　ト茶碗を取る。

彌生　なにを。

　ト又びんしやんして、元の所へ坐る。お種、白湯を頂き呑む。此うち

甲斐　お種、よいか、どうぢや〳〵。

たね　お庇で、とんとようなりましたわいなア。

甲斐　イヤ〳〵、その顏では、まだようあるまい。ドレ、身共が脈取つてやらう。近う來い。

たね　エヽ。

　トこなしあり、彌生、愕りして

彌生　殿樣には、いろ〳〵の事を仰しやる程にの。

甲斐　彌生、また其方が

彌生　サア、お止め申しは致しませぬが、御病氣の殿樣、其やうになされたら、お障りになされますと存じまして。

甲斐　なんの障りにならう。大分心が浮き〳〵としてあるわいやい。

彌生　そりやマア……喜ばしう存じまする。

ト身を反けて居る

甲斐　お種、サア、近う／＼。

たれ　アイ。

トうぢ／＼とこなしある。

甲斐　ハテ、近う参れと云ふに。

たれ　アイ。

ト恥かしさうに顔を隠し、甲斐之助が側へ行て、チッ
として居る。

甲斐　コリヤ、手を出せ。

たれ　エ、。

甲斐　ハテ、脈取つて見てやるのぢや。

たれ　それでも、どうやら、

甲斐　苦しうないと云ふのに。

トお種が手を無理に捉へて

ムウ。こりや百姓の娘に似合はぬ、ぽや／＼とした、
尋常な手ぢやわい。

トいろ／＼撫でて見る。彌生、此うち思ひ入れある。
お種、始終恥かしさうなこなしあつて

たれ　もう脈は見いでも、塩梅は、ようなりましたわいな
ア。

ト手を引きにかゝる。甲斐之助、矢ッ張り捕へて居
る。

甲斐　ウム。そんなら、もうようなつたか。

たれ　アイ。

甲斐　さては其方は、抱かれて寝た事があるか。

たれ　アイ、抱かれて寝ました。

甲斐　ヤア。

たれ　アノ、去年までは母様に、常住抱かれて寝ましたわ
いなア。

甲斐　すりや、男とは、まだ抱かれて寝はせぬか。

たれ　なんのマア。

トこなしあるを

甲斐　よし／＼、さう云ふ事なら身共が。

ト引き寄せる。

たれ　ア、こそば……何をなされますぞいなア。

甲斐　イヤ、何もしやせぬ。ちよつと改めて見るのぢや。

ト引き寄せ、抱きつくを彌生堪えかね、つか／＼行て

彌生　エ、、コレ。

トお種を無理矢理に引退け

申し殿様、あんまりでございまするわいなア。

甲斐　ハテ彌生、其方は其方、お種はお種と、不便がれば
　よいぢやないか。
彌生　ナアニ、嘘ばつかり。
甲斐　イヤ、眞實ぢや。
彌生　イヽエ、そんな事はなりませぬ。
甲斐　コリヤ〱、武家に七人、心に入つたら幾人でも苦
　しうない。
彌生　なんぼ七人でも、わたしはどうも。
甲斐　奥か何ぞのやうに、お種を妬むは。
彌生　そんなら奥樣なれば、外の女の政道は、大事ござり
　ませぬかえ。
甲斐　ハテ、定まる妻、その餘は妾手かけ、
たれ　わたしや妾手かけでも大事ござりませぬ。どうぞ殿
樣の
彌生　イヽエ、なりませぬ。
甲斐　彌生、なぜに。
彌生　申し殿樣、これ御覽なされて下さりませ。
　ト懷中より袋入りの守り刀を出し、甲斐之助に見せる。
　取つて抜き放し、とくと見て
甲斐　ムウ。こりや菊一文字の鎧通し。

彌生　その守り刀は。
甲斐　毛利の重寶、即ち親々の契約、岩姫どの縁邊婚禮の
　砌り、毛利家よりこの甲斐之助へ賜はる聟引手の菊一文
　字。これを所持する腰元の彌生、そんなら其方は。
彌生　云ひ號けの岩姫でござりますわいなア。
甲斐　ムウ。さては推量の通り。ハテナア、
　ト合ひ方になる。
彌生　お恥かしいこの姿。腰元となつて入込みましたも、
　小さい折から云ひ號けではありながら、祝言の延引。ど
　う云ふ事と案じる其うち、御病氣の樣子承はれど、女
　の廻り氣、不束な自らゆゑ、云ひ號けと云ふ名ばかりで、
　打捨てあると心の迷ひ、只祝言を飛び立つやうに、待ち
　兼ねて遣る瀨なさ。乳人が見兼ねて斯う〱せいと、勸
　めにまかして、聟引手の守り刀を肌身に添へ、人知れず
　館を立退き、このお館へ名を改めて參りましたも、せめ
　て祝言の杯、女夫の結びは叶はずとも、お側に付き添ひ
　宮仕へ、朝夕御用聞くならば、心の樂しみ、御病氣の御
　介抱申し上げる其うち、ツイ戲むれに淺からぬ、お情の
　嬉しさ、忝ない、いつそ打明けて、身の上を申し上げう
　と存じましても、どうやら面ぶせ。ツイ云ひそぐれし岩

姫が、あなたに添ひたさ、大膽な、隱し包みし身の上を、露程なりと不便と思し召して、矢ッ張り變らぬお情を、お願ひ申し上げまするわいなア。

甲斐　腰元に似合はぬ、疎略なき日頃の介抱、其方が心底、心得ぬと思ふより、情の道をかけたるも、素性を聞かうと思ふゆゑ。いま又お種に戯むれしは、岩姫と名乘らさん爲ばかりぢやわいやい。

彌生　そんなら岩姫と名乘りました上は。

甲斐　云ひ號けなれば二世までも、變らぬ夫婦。

たれ　イ、エ、それではわたしが。

甲斐　ハテ、其方も氣に入つた。手廻りの腰元、彌生と云ふ名をお種につけ、彌生は又岩姫なれば、誰れ憚からぬ身共が奧。

彌生　エ、。

ト思ひ入れあつて

忝ならござりまする。

トこなしあると、奧より後室小夜路の聲にて

小夜　千秋萬歲の、千箱の玉を奉る。

ト唄ひ〳〵、小夜路、長柄持ち出る。

甲斐　ヤア母人。

たれ　最前の姿樣。

小夜　樣子は次にてとくと聞いた。彌生が志し、甲斐之助が心底、妾が日頃の喜び。それゆゑ今日の祝儀に取敢へず、この蓬萊の島臺は、代々所の家の榮。今は正月睦まし月に、女夫の固め、內祝言の杯を、サ、甲斐之助、早う。

ト下に居て蓬萊を直す。

甲斐　母の仰せ、武士の契約……コレ、この聟引手の菊一文字を、受納いたせば

彌生　親の許した妻結び。

甲斐　ソレ、岩姫早う。

彌生　エ……嬉しさは、どうも詞に盡されませぬ。左やうならば。

ト立寄りて蓬萊の土器取上げるを

小夜　イヤ、コレ、その杯の仕やうが違うた。

甲斐　アイヤ〳〵母人、祝言の杯は、女の方から始めるとやら申しますれば、岩姫より拙者に。

小夜　姫御前より夫にさすは、一世一度の祝言の杯ばかり。

甲斐　サ、その故實の通りに。

彌生　憚りながら私しが。
小夜　ハテ、杯の仕やうが違ふ。
兩人　エ、。
小夜　悴甲斐之助と祝言の 杯 さすは、ソレ、そこに居る在所のお種。
甲斐　ヤ、、なんと仰しやる。
たれ　アノ、わしが祝言の 杯 とやらを、するのでござんすかえ。
小夜　いつはならずと一つ食べて、悴甲斐之助へさしや。
甲斐　イヤ〳〵申し母人、お聞きの通りこの彌生は、某と云ひ號けの毛利の岩姫。腰元となつてこの館へ來りしも、拙者に添ひたいと思ふ女の貞節。それを差措き、素性知れぬ百姓の娘のお種。
小夜　祝言しても大事ない。
甲斐　そりや何ゆゑな。
小夜　妾が娘ぢや。
三人　エ、。
小夜　コリヤお種、其方が尋ね迷ふ、生の母は自ら。證據と云ふは、最前の女雛の書付け。海の模樣の帷子。
たれ　エ、、そんなら。

ト小夜路が側へツカ〳〵行く、お種が顏をキツと見て
小夜　植ゑて見よ花の育たぬ里もなし、父親の心柄とて、捨子となつた娘、可愛や、其方は賤しう育つたなア。
たれ　アノ、わしが尋ねる生の母樣は、お前でござんしたかいなア。
甲斐　ムウ。さてはお種と云ふは。
彌生　後室樣の眞實のお娘御。
たれ　どう云ふ事で、わたしを又
甲斐　今までそれとも
小夜　知れぬ譯は二昔、まだ娘の時に、藝州嚴島の社家に縁あつて、神事の間に見物がてらに呼び向はれ、凡そ一月あまり逗留の其うちに、これも中國、名あるお家の侍ひに、フトした縁で云ひ交し、暫しの日數に神事も見て、早親元より迎ひの使ひ、飽かぬ別れに是非なう、國へ戻つたその月より、懷胎したは常ならぬ、双子即ち女夫子を、月滿ちて產み落せしが、仔細あつて夫の方へ二人の產子を渡して、引別れたる夫婦の緣。すりや、離緣せし夫が捨てし娘のお種。拾ひ上げられし後の親は、芝田村の百姓、義理ある母の遺言に、尋ね迷ひし生みの母は自ら。いま名乘り合ふも盡きぬ恩愛。親に迷うてよう尋

ねてくれたなア。
たれ　そんならいよ〱、わしが生みの母様。
小夜　娘。
たれ　懐かしうござんしたわいなア。
　ト小夜路お種、思ひ入れ。甲斐之助こなしあつて
甲斐　ハテ、思ひがけもない御親子の名乘り。
彌生　あのお種さまが、後室樣の眞實のお娘御なれば、この殿樣とは。
小夜　甲斐之助とは生さぬ仲。
甲斐　すりや、義理ある兄弟。そのお種と拙者は。
たれ　祝言は格別、こちや知らぬ事ぢやに依つて、矢ツ張りこなたに。
　ト思ひ入れある。彌生も
彌生　嬉しや、兄妹とあれば。
　ト小夜路見てこなしある。お種、甲斐之助を見て
たれ　つツとモウ。
　トこなしあり。小夜路こなしなつて
小夜　コリヤ彌生。
彌生　エ。
小夜　イヤサ、腰元の彌生。

甲斐　ア、イヤ〱母人、先刻も申す通り、あの彌生は、實は毛利の岩姫なれば。
小夜　イ、ヤ、腰元、召使ひの女ぢや。
甲斐　エ、なんと。
小夜　悴、毛利の家は、尼子浪人の爲に滅亡したを、其方は知らぬか。
甲斐　ヤア、すりや毛利の家は。
　ト彌生、大いに驚ろき
彌生　どうして自らが家は、滅亡いたしましたな。
小夜　卽ちこの正月元日。
彌生　エヽ。
小夜　名におふ鎌倉の執權、岩倉主膳正どのも、その日の御最期。毛利御親子一家中は元より、附き從ひし諸家の面々、殘らず横死は、五太夫とやらんが手練の大僞。その日の人數は皆殺し。
甲斐　すりや、この朔日に。
彌生　父上始め兄樣、妹も。エ……。
　トこなしあつて
さうぢや。
　ト守り刀を取つて、向うへ駈け出す。

甲斐　岩姫待て。

彌生　イヤ、家國の騷動、女ながらも。

甲斐　いま駈け出して何所へ行く。

彌生　本國長門へ立越え、事の實否を。

甲斐　コリヤ、その騷動は、いま聞きし通り當月朔日。今日は七日。殊に女の足で中國へ、陸を行ても海上でも、彼れこれ積る仇な日數。

彌生　ぢやと云うても。

甲斐　血筋の最後に心の轉倒。うろたへるは理りなれど、緣を組んだるこの甲斐之助。我が思案もあらう。

ト彌生、花道にておろ／＼涙になる思ひ入れ。お種も氣の毒なこなしにて

たれ　アレ、殿樣が留めてぢやわいなア。

彌生　これがマアどう。

甲斐　待てと云うたら、マア／＼待ていやい。

ト彌生、本舞臺へ戻つて來て

彌生　ハア、。

ト大泣き。小夜路默つて居て、この時

小夜　ホ、、、ハテ笑止な毛利の滅亡。一旦忰甲斐之助と緣は組みたれども、家退轉なれば是非がない。

甲斐　すりや、母人には。

小夜　岩姫の婚禮は調はぬ。

彌生　エ、、そんなら家の騷動ゆゑ。

小夜　誰れ憚からずとお種と祝言。

たれ　イ、エ、若樣。あの殿樣とわしは、兄妹ぢやござんせぬかえ。

小夜　ハテ、妾が爲には血を分けぬ甲斐之助。根が他人ぢやに依つて、夫婦になつても大事ない。

たれ　イエ／＼、わしや矢ッ張り腰元になつて。

小夜　エ、氣の弱い。妾が惡いやうにはせぬ。エ、、默つて居や。

たれ　それでもアノ。

ト氣の毒さうに彌生を見る。

小夜　ハテ。

ト小夜路、顏にて押へる。お種こなしあつて、バッタリ下に居て口の中にて呟いて居る。彌生、泣き倒れながら又起き上がり、涙にむせて物の云はれぬこなしにて、甲斐之助が側へ寄り、袖をひかへ、小夜路に指差して、矢ッ張り祝言してくれいと云ふ思ひ入れ。甲斐之助、默つて思案して居る。彌生いろ／＼ある。守り

刀にて自害せうとするな、甲斐之助悔り、平舞臺へ行つて彌生を留める。彌生振り切り、甲斐之助、無理に留めて

甲斐　岩姫、其方は死ぬる所ではないぞ。

彌生　イヽエ、自らが身の上はな。

甲斐　コリヤ。

ト無理に守り刀を引ッたくり

この翠引手の菊一文字は、特よりこの甲斐之助が、受納してあるわいやい。

彌生　それもアノ

ト小夜路を教へる。

甲斐　ハテ

トこなしあつて、彌生を鎮め、小夜路に向ひ、

イヤ母人、あなたの仰せ、御尤もには存じますれど、一旦の契約、是非この岩姫と祝言の儀を。

小夜　毛利の家滅亡でも。

甲斐　離縁は七去の條目、また去らぬに三教。毛利家滅亡と聞いて、岩姫はどうも。

小夜　岩姫と祝言がしたいか。

甲斐　世の人口にも、卑怯未練と誹られるは、これ粟島の家の恥辱。

小夜　すりや、その岩姫と祝言して。

甲斐　尼子浪人を詮議仕出し、舅の仇、毛利の家引起すは、武士の功、拙者が本懐。

小夜　さう云ふ其方が身の上は。

甲斐　エヽ。

小夜　歩行叶はぬ長病、俗に腰抜けの躄と云ふぞや。

ト甲斐之助、思ひ入れあつて、キッと立たうとして、がつくりこける事、二三度もあるべし。

甲斐　チエヽ、無念な。

ト拳を握り、歯ぎしみして泣く。

小夜　コリヤ、毛利を滅亡させしは尼子浪人。その敵よりは我が身の敵、難病と云ふに甲斐之助、其方は、ドドどうして勝利を得るぞ。

甲斐　サアそれは。

小夜　名を取らうより得を取れ。

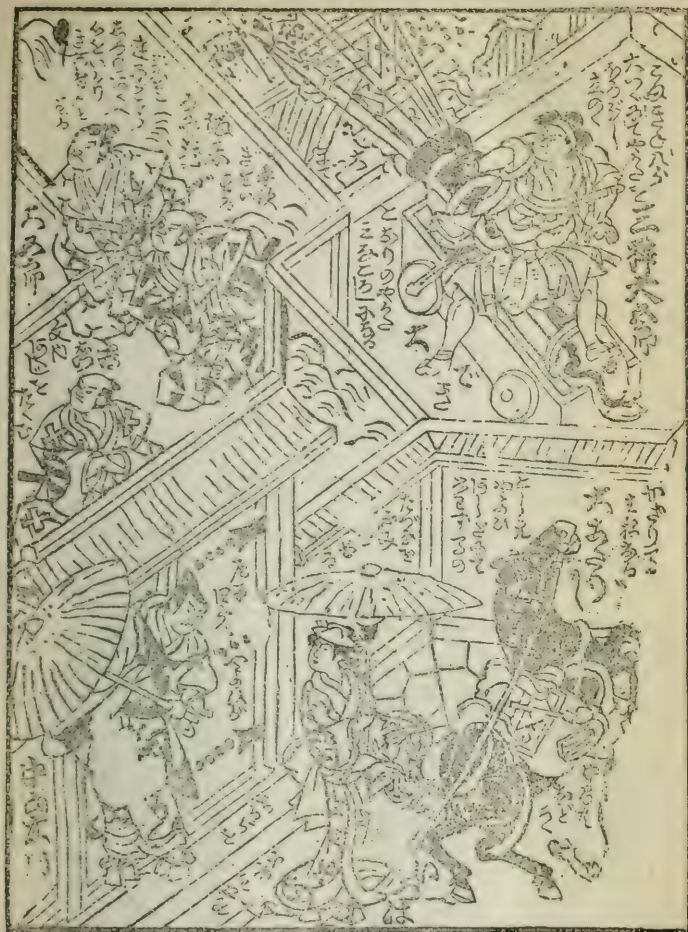
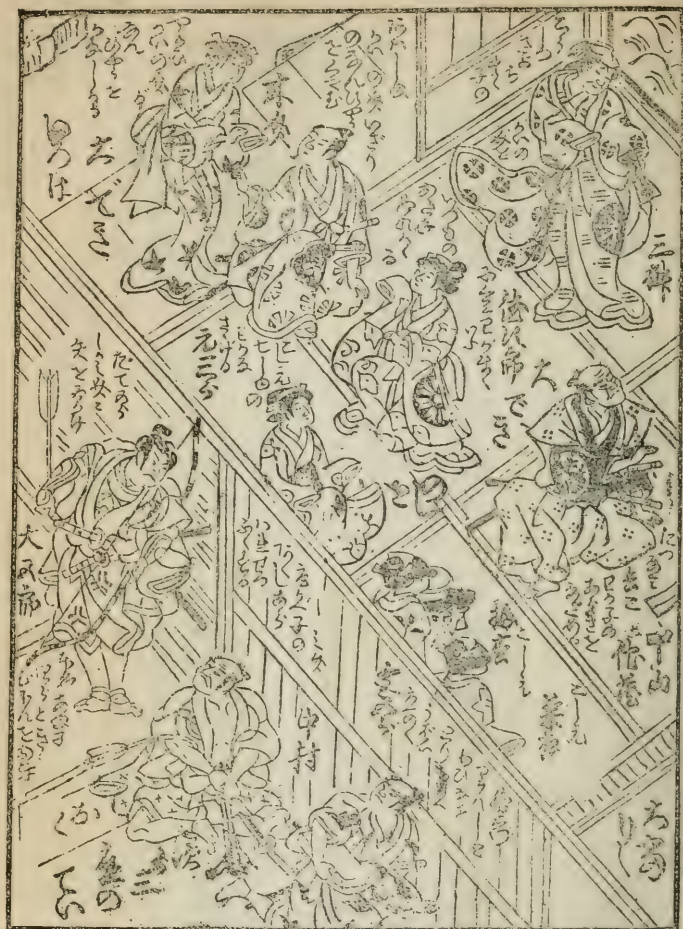
甲斐　エヽ、コレ粟島の氏も系圖も、世に劣らねど

小夜　難病と云ふ大敵には勝たれまい。

彌生　それぢやに依つて、自らは。

ト甲斐之助が刀に手をかける。

初演の

絵番附

甲斐　コリヤ、生は全し死は易し。
　ト留める。
小夜　矢ッ張り妾が云ふ通り、お種と縁組み、當家の相續、
　苗字を絶やさぬが孝の第一。
たれ　イヽエ、どうあつても祝言は。
小夜　親の詞を背くのか。
たれ　なんの、背きはせねどな。
小夜　背かずは、サア早う。
　ト蓬萊なお種が側へ直し、長柄を取つて
　コレ、祝言ぢや、
　ト土器を無理に持たす。所へ奥より伊達五郎、ツカツ
　カと出て
伊達　イヽヤ、この祝言はさゝれぬ。
　ト長柄を引ツたくり、蓬萊を微塵に踏み砕く。思ひ入
　れ。
甲斐　ヤア、伊達五郎、
小夜　大事の祝言、何ゆゑ妨げる。
伊達　妨げでも大事ござらぬ。
小夜　家來の其方が。
伊達　家來でないぞ。
小夜　家來でないとは。
伊達　乳母の小夜路。
小夜　ヤ、なんと。
伊達　イヤ、慮外な奴の。
　ト小夜路を引廻し、下に置く。
たれ　ヤア、母様を。
伊達　大事ない。
甲斐　コリヤ〳〵伊達五郎、母人に慮外千萬な。
伊達　イヤ〳〵、若殿様、苦しうござりませぬ。この老ぼ
　れめが身の上、詳しう聞き届けた伊達五郎。慮外も糸瓜
　もなんの構はう。身共は知らねど、其方が身の上は、當
　家の御家中、粟島三左衞門と云ふ、お馬廻りのその娘、
　小夜路と云うた
小夜　甲斐之助が乳母、お乳の人と云ふのか。
伊達　如何にも乳母め。あの若殿は其方が爲には、三代相
　恩のお主と云ひ育て若。いま後室と呼ばれても、猶大切
　にかけねばならぬ若殿。
小夜　甲斐之助ぢやに依つて、あのお種と祝言さすのぢ
　や。
伊達　云ひ號けの岩姫さまを差措いて。

小夜　伊達五郎、若輩に似合はぬ、妾が身の上、よう聞いたなア。

伊達　オヽ、聞いたがどうした。

小夜　成る程、其方が云ふ通り、妾は元、粟島三左衞門が娘。下樣の身の上なれど、先の奧方、この甲斐之助を御誕生なされし折柄、どう云ふ事にや、お乳人の乳を上がらず、取替へ引替へ幾人も、お乳の人をすゝめても、兎角乳につき合はず、それゆゑ一家中に乳のある者を御吟味。家老用人物頭、近習外樣は云ふに及ばず、足輕小者に至るまで、乳のある女房娘を召し出され、貴賤上下の隔てなく、お乳を進め申しても、一向のおむづかり。その折妾もお見出しにあひ、產家へ參つて抱き上げると、其まゝ乳房につき給ふ。直ぐにそれよりお乳母樣ともて囃される其うちに、大殿信濃守さま御逝去に、程なう奧樣にも重き病。今際の際の御遺言に、一家中お召しなされて、妾を家の後室と仰せ渡され、誰れあつて違背申し上ぐる人もなく、それより我が子となして、育て上げた甲斐之助。

甲斐　すりや、生みの恩より今の母人、御恩は蒼海淺からぬ、この年月のお慈み。

伊達　イヤ　その慈みも盜人の晝寢。當と云ふはこの娘。勿體なくも若殿樣と夫婦にして、當家を治める慾心魔王。

たね　イヽエ、例へ母樣が、どのやうに云はしやんしても、わしやアノ殿樣と、祝言する氣はござんせぬ。矢ッ張りこの岩姬さまに、殿樣と祝言を。

ト彌生をこちらへ連れ來る。

小夜　ハテ、慾心と云はうが魔王と思はうが、妾が詞、一家中に誰れあつて、背く者があらうか。

伊達　イヽヤ、人は知らず、この伊達五郎、即ちお家の爲に若殿樣への忠義。非道な御意は滅多に聞かぬ。

甲斐　コリヤ〳〵、伊達五郎。母人へ詞を返す慮外者。

伊達　ハア、後室と思ふにこそ。矢ッ張り以前のお乳母どの。

甲斐　以前は兎もあれ、今日は粟島家の後室。この甲斐之助が母人ぢやぞ。

伊達　其やうに思召すゆゑ、この

ト小夜路を睨む。

小夜　甲斐之助、詞を背かずばお種と。

伊達　イヤ、祝言は岩姬さま。

小夜　毛利の家は滅亡なれば。
彌生　この身の上は。
　トまた死なうとする。甲斐之助、彌生を引きつけて居て
甲斐　いま見放しては、武士の本意がどうも。
小夜　親の詞を背いても、岩姫に義を立てるは、色に迷ふ天晴れな武士ぢやなア。
伊達　エ、、これぢやに依つて、以前のお乳母に引下げて。
甲斐　コリヤ、母人に慮外いたすな。
伊達　エ、。
　トこなし、お種もこなしあつて
たれ　母さん、ござんせ。
　ト小夜路を連れて行かうとする。
小夜　コリヤ、何所へ行くのぢや、
たれ　ハテ、馬は馬連れ、牛は牛連れ。わしが在所へ來て下さんせ。お前はどうなりとして、わたしが養ひまするわいなア。
小夜　すりや、妾を。
たれ　在所へ連れて行かば、岩姫さまと殿様と祝言して、氣兼ねのないやうに。
伊達　天晴れ親に似ぬ子の。
たれ　生みの母様、ちやつと在所へ。
小夜　イヤ、孤垂れよりは玉垂れに、其方を出世さすわいなう。
伊達　どうでも強慾。
甲斐　コリヤ、身共が詞を用ひぬ不忠者。
伊達　ぢやと申して。
甲斐　孝を立てれば義を破り、義を思へば色香に迷ふと母のお詞。
　ト思ひ入れ。彌生も思ひ入れあつて立ち上がり、お種をこちらへ連れて來て
彌生　お種さま、殿様と御祝言を。
たれ　イ、エ、それではお前へ云ひ譯けの。
彌生　岩姫ぢやない。元の腰元彌生なれば、殿様のお側に宮仕へ。
たれ　それでは申し。
彌生　便りないこの身の上。不便と思うて、どうぞ後室様の仰せの通り。
甲斐　出かした彌生。

彌生　エヽ。
甲斐　ソレ。
　ト守り刀を抛る。彌生取つて
彌生　これは。
甲斐　撃引手を返せば元の腰元。命全う出勤いたせ。
彌生　エヽ。
　ト彌生もこなしある。
たれ　コレ母様、この仕儀を見ても、お前は矢ッ張り。
小夜　老の片意地、當築島の家國を、他人に相續ささうより、せめて血筋の其方に。
たれ　それではお前。
小夜　繼母の習ひ。
たれ　アノ、大勢の人に
小夜　憎まれても長生。
たれ　エヽ、ひよんな母様に尋ね當つて
小夜　コリヤ、其方が出世を、さま〲に……アヽ、親の心子知らずぢやなア。
伊達　エヽ、眞綿で〆める繼母根性。もうどうも。
　ト脇差を拔かうとする。彌生恟り。小夜路を圍ふ。お種も恟りして、伊達五郎が手に縋り

たれ　コレ、尤もぢや〱、母様を切らうより、迷ひの種のわたしを、殺して下さんせいなア。
彌生　コレ、必らず聊爾せまいぞ。
伊達　もう堪え袋の緒が切れた。
たれ　マア待つて。
　トお爲彌生、いろ〱留める。伊達五郎、振り切り、此うち甲斐之助、躄ながら小夜路と入れ代り、脇息、見臺、手に觸るものを投げる。伊達五郎切り拂ふうち、彌生、お種が伊達五郎の兩手へぶら下がり、脇差を振り上げる。甲斐之助、その上下へ行て、伊達五郎に刀を拔き、つきつけ
甲斐　コリヤ伊達五郎、若氣の至りに、母に過ちあつては、忠義は不忠、不便ながらも甲斐之助が、手討ちにするぞ。
彌生　心を沈めて、マア待つて下さんせいなア。
伊達　主を殺せば逆磔刑。例へ牛裂きの刑に遭ふとも、強慾無道の繼母を片付ければ、若殿のお爲。拙者が本望。ぢやに依つて。
　トまた振り上げる。お種彌生、矢ッ張りぶら下がつて留める。甲斐之助、ヒラリと刀を見せて

甲斐　コリヤ、是非聞き入れぬと、たつた一討ち。
ト此うち立浪兵部、奥より出かけ居て
兵部　伊達五郎、うろたへずと、マア／＼待て。
伊達　ヤア親人。
甲斐　誠に兵部。
兵部　御病中の若殿、悴め、先づお心を靜められませう。
ト伊達五郎に刀にて枷を入れ
先づ／＼。
甲斐　ムウ。
ト甲斐之助こなしあつて刀を納める。伊達五郎、爰にて振り上げた刀を取り直し、彌生お種、前へ直つてとまる。
兵部　苦しうない。御兩所とも御介抱。
伊達　ムウ。
トきつとなるを兵部、彌生、お種を引廻し、伊達五郎を留める。彌生、お種、甲斐之助を介抱。此うち小夜路は二重舞臺へ上がり、長煙管にて煙草をのんで居る。伊達五郎、始終小夜路を見て、むかついて居る思ひ入れ。
コレサ親人、お家のお爲に命を捨て、あの繼母を手にかける拙者を、なぜお留めなさるゝな。
兵部　ヤイ伊達五郎、忠義の爲とは云ひながら、其方は現在の親を殺すか。
伊達　イヤ親人、こなた樣には齒向ひませぬ。あの後室を。
兵部　コリヤ、其方が爲には生みの母ぢやわやい。
伊達　ヤ、なんと。
兵部　現在血を分けた母親を、見事手にかけるか。
皆々　ヤア。
ト小夜路始め皆々、ギヨツとして
甲斐　コリヤ／＼兵部。その伊達五郎を、この母人の、
たれ　お國とは。
伊達　親人、そりや何をお云ひなさるゝな。
兵部　慥かな證據は、これ。
ト男雛を出して見せる。
小夜　ヤア、その男雛は。
兵部　最前のコレ。
ト又お種が持つて來た女雛を出して見て
この女雛の片し。
たれ　そりや、わしが持つて來たその女雛。

兵部　この男雛と一對揃へば
小夜　夫が捨てた、妾が生んだ双子の兄弟。
兵部　年號も同じ、永祿四年辛酉の三月三日。ソレ。
　ト　お種に女雛、伊達五郎に男雛を渡す。
伊達　永祿四年辛酉三月三日の誕生の双子の男に
たれ　永祿四年辛酉三月三日誕生の双子の女子。
小夜　男女の双子を産み落し、夫に添うて別れしが、親に祟る諺に、ソレその雛に附けて、別れし夫が捨てたのか。
たれ　わたしが身の上は最前から
甲斐　とくと聞いた。出雲の國芝田村の百姓に拾はれたる其方。
伊達　また拙者が身の上は。
兵部　出雲の國大社へ、御代參の役目の歸るさ、鳥居の側に、ソレその男雛を相添へ捨てありしを、神の利生と拾ひ歸りし伊達五郎。其方を忰となして育てたは、今年で丁度十六年。
伊達　すりや、三つの年に捨てられし、拙者が生みの母と云ふは。
　トこなしあつて

兵部　即ち後室。
たれ　わたしが爲には、兄様やら弟やら。
小夜　知れぬ双子の二人が行くへ。
兵部　この立雛の證據もしつくり。
甲斐　皆粟島の緣に寄る。
彌生　腰より下の御難病
兵部　その御主人を
たれ　兄弟とも
伊達　親子とも
皆々　神ならぬ身は
小夜　嬉しや、妾が大願成就。
皆々　エヽ。
小夜　兵部、とても事に親子の血寄せ。
　ト合ひ方になり、兵部小夜路、こなしあつて、二つの白銀の鉢へ、兵部は伊達五郎の指を引き、血を受け、小夜路は刀にてお種が指を引き、血を絞り、兩人立ち別れ、右の鉢を下に置き、お種、伊達五郎坐る。小夜路兵部、立ち身にて、銘々指を引き、血汐を下の鉢へ流し込み
小夜　お種、それを見い。

ト お種、鉢を見て

たれ　こりや、お前の血潮と、わたしが血潮と、一つに寄るは

小夜　血を分けた親子の印。

兵部　伊達五郎、身共が血潮と其方が血潮。

伊達　同じ器にありながら、こりや別々に別れるは

兵部　其方とは他人、親子でないなア。

伊達　すりや、この血潮と。

兵部　合體するが親子の血寄せ

ト 兵部が持つて居る鉢へ小夜路が持つて居る鉢の血と一つにして、兵部、片手に持つて

斯くの通り。

ト 伊達五郎に見せる。伊達五郎、これをキツと見て

伊達　イヤ、この中の血潮、アレ〳〵、親人と後室と種が血潮、三人ともに合體すれども、この伊達五郎が血潮は自然と別れ、一緒に寄らぬは。

兵部　ドレ

ト 鉢を左の手へ持ち替へ、小夜路と一緒に鉢を見て

誠に、一つに寄るべき伊達五郎が血潮は別れ

小夜　思ひがけなき兵部が血潮が

兵部　別れもせずに合體するは

ト 思ひ入れあつて、小夜路こなしあつて

小夜　さては。

ト きつとなる。兵部、鉢をわ　と打ち落し、また小夜路と顔見合せ、兩人

兩人　ハテナア。

ト こなしあり

甲斐　兵部。

彌生　後室様。

たれ　それは。

兵部　血寄せの不思議。

小夜　ハテ、立浪兵部。

ト 兵部が顔をヂツと見る。伊達五郎こなしあつて

伊達　親人、血寄せの血が寄らねば、拙者は矢張り

兵部　身共が忰。

小夜　それでも證據の今の男。

伊達　でも、今の血寄せが。

兵部　ハテ面妖な。

ト 下がり葉になり、甲斐之助、こなしあつて

甲斐　あれは。

小夜　御上使饗應。
甲斐　すりや、鎌倉より。
兵部　御上使不時の御入りは、當家の譽れ。
甲斐　なんと。
小夜　その趣きは尼子浪人、當國名草の郡に城を築いて
伊達　百姓徒黨四萬餘騎、立籠るとの實説。
兵部　その討手は粟島甲斐之助尚澄と、若殿様に鎌倉の評議相極まり、即ち金の釆配、御教書ともに下し賜はり、上段の間に。
小夜　そんなら尼子浪人の討手を殿様に。
甲斐　幸ひ毛利の仇も倶に散ぜん。
兵部　火急の出陣。
伊達　名草の捕り手。
小夜　イヽヤ、その病では心元ない。
甲斐　ムウ、さうぢや。
トきつとなつて立ち上がり、又ばつたり下に居て、それなりに「エヽ」と兩の鬢を引きむしり、泣く。皆々顔見合せ、心意氣にて、しつぽりとなり、チョン／＼にて道具また廻る。中にて暮れ六ツの半鐘鳴る。

造り物、平舞臺、見付け、金襖、東西に綺麗なる障子屋體、但し燭臺灯しある。八代丹下、名草甚兵衛、御教書をせり合うて居る見得。矢張り下がり葉にて道具とまる。
甚兵　サア、望みかゝつたこの親仁ぢや。御教書を早う渡せ。
丹下　イヤ、野太い老ぼれめ、折角身共が物した御教書、それをうぬが又物せうとは、太い奴の。
甚兵　太うても細うても、名草郡に立籠る尼子浪人。その討手の御教書、是非此方に入用なワ。
丹下　この御教書を望むは、ムウ、さてはうぬは尼子の餘類ぢやな。
甚兵　細言云はずと、渡せと云ふに。
ト取りにかゝる。丹下、甚兵衛にかゝる。これより立廻りになり、お種、奥より出てせり合ふ様子を聞いて居る。甚兵衛、丹下、御教書を前へ落す。互ひに取らうと立廻りに燭臺こかす。これより暗がりになる。
丹下　大切な御教書、どこにあるか知らぬ、
トあたりを探す。甚兵衛もよろしくある。此うちお種、御教書を尋ね當り、取り上げて

たれ　これが御教書とやら。

兩人　ヤア。

ト恟り、お種も恟りして、ちやつと持つて居る女雛を吹き換へに投げる。丹下も探りて女雛を取り上げ

丹下　討手の御教書、忝ない。

ト頂く。甚兵衛、暗がりにてそれをとかゝるを、丹下、身を摺り抜けて、さうぢやと向うへ走り入る。甚兵衛、知らずに本舞臺を尋ねて居るうち、お種も暗がりにてこなしあつて

たれ　わたしが居れば母さんの惡事……又これを持つて殿樣に。オヽさうぢや

ト喜び、探りながら向うへ走り入る。甚兵衛、見て思ひ入れあつて

甚兵　さては御教書。

ト花道の方へ行かうとする。と橋がゝりより腰元三人、手燭を持つてツカ〳〵と出て、甚兵衛を見て圍ひ

三人　待つた。待たしやんせ。

甚兵　ヤア。

トこなしあつて、また奥へ行かうとする、所へまた腰元四人、これも手燭をてんでに持つて圍ひ

四人　コリヤ、何所へ。

ト甚兵衛を圍ふ。右七人ながら最前の揃への拵らへ。甚兵衛よろしくとまり

甚兵　お女中方。この親仁を、どうさつしやりまするな。

腰一　イヤ、わたしらがお取持ち申す。

腰二　目ざす戀人。

腰三　外へは

皆々　やらぬぞ。

ト皆々結び文を十手のやうに構へ、バラ〳〵と甚兵衛を取卷く。甚兵衛、右の狀を見廻して

甚兵　ムウ。こりや同じ名宛の、山さま參る花橘より。

腰四　昔の香り

腰五　只忘られぬ

皆々　思ひの玉章。

甚兵　エヽ、こりや何か、在所親仁のむくつけ者を、皆寄つて嬲つて樂しむのか

小夜　イヽヤ、眞實尋ねる事があるわいなう。

ト奥より小夜路出る。甚兵衛、見て

甚兵　ヤア、其方は。

トぎよつとする。

小夜　昔忘れぬあの玉章。
甚兵　ヤ、なんと。
小夜　妾が手蹟、覺えがあらうがの。
甚兵　すりや、粟島の後室と云ふは。
小夜　腰元ども、次へ。
皓々　ハツ。
ト皆々ツイと奥へ入る。甚兵衛、こなしあつて、物云はず行かうとする。小夜路、留めて
小夜　待つた。こりやこなた
甚兵　一旦離別の女房。詞は交さぬ。
ト振り切り、また行くを小夜路、立廻つて留め
小夜　イヤ、たつた一度尋ねにやならぬ。
甚兵　イヤ、云ひ譯聞くも面倒な。
小夜　云ひ譯ぢやない、悴が事。
甚兵　ヤ、なんと。
小夜　コレ。
ト合ひ方になり、甚兵衛を引据ゑ、胸倉を取つて
云ひ交した懷かしさも、互ひに積る頭の雪、腰には梓の弓取ると、名あるこなたが變り果てたる姿と心。年は寄つても直らぬ惡心、矢ツ張りこなた

甚兵　義を立て通すは武士の意氣地。
小夜　すりや、いま名草の郡に城を築いて、百姓徒黨の尼子浪人。
甚兵　その一人と呼ばれたる山中鹿之助。
小夜　アノ、それを忠義と思はつしやるか。
甚兵　亡君の仇、この身の無念。
小夜　イヤ、忠義ぢやない、邪ま非道ぢや。
甚兵　主君晴久公、富田の城にての御最期、その無念止む事を得ず、その恨みを晴らさん爲に、百姓徒黨の企て。
小夜　サ、その尼子晴久さまの御最期も、元はこなたの惡心から、謀叛を勸めて主人を陷り、其方の會稽コレ、知るまいと思うて居さつしやるか。現在枕並べたこの小夜路、度重なるに從うて、顯はれるこなたの本心。親の諫めも無理ならず、例へ惡でも一筋に、思ひ詰めた懷胎に、双子を生んだはこなたの胤。浮世の義理と謀叛の餘類、是非なき別れに二人の產子を、こなたの手へ。
甚兵　例へ惡でも善でも、腹は借り物。双子の悴は身共が胤。
小夜　サア、そのこなたの胤の二人の子供は、どうさつしやつたぞ。

ト此うち上の障子屋體より伊達五郎、下の障子屋體より四郎義久、眞中の襖より兵部、三方の引ッ張りにて樣子聞いて居る。甚兵衞、こなしあつて

甚兵　サア、その二人の子供は。

小夜　無事に育てさつしやつたか。

甚兵　如何にも、無事で成人して居る。

小夜　そりや、何所に、いづくに。

甚兵　サア、その住所は。

小夜　名は何と云ふ。サ、それが聞きたい／＼。

甚兵　知れた事。男子は四郎作、女子はお種。

小夜　そりや、生れ立ての幼な名。成人したとあるからは、定めて假名實名ともに。

甚兵　ムウ。尼子四郎太夫義久。

小夜　ヤ……なんと。

甚兵　いま名草の郡に城を築き、百姓徒黨總大將と尊敬せらるゝ、四郎義久と名乘りたるが、コリヤ、身共が種。其方が生んだ子ぢやわいやい。

小夜　エヽ、そんなら。

ト惘り思ひ入れあつて

そんなら尼子晴久どのゝ胤と云ふは。

甚兵　幼名は義丸どの、同じ年頃。これも我が手で育て居つたれども、悴に出世と心附き、即ち義丸どのゝ二重鶴の守を悴に持たせ、また義丸どのには、悴が誕生の年號を記せし男雛を附けて、出雲の國大社の鳥居の側に捨子となした。

小夜　すりや、こなたの御主人の胤を捨ててしまうて、わしが生んだ四郎作を

甚兵　主人の胤と大切に、育て上げしも悴が不便さ。

小夜　して又、双子の片割れは。

甚兵　女郎の餓鬼は足手纏ひと、これも年號記した女雛を附けて、其方が帷子諸とも、出雲の國芝田村へ捨てた。

小夜　そんなら、主人の胤と女子は捨てゝしまうて。

甚兵　後に殘つた一人の悴は、百姓徒黨の大將軍。なんと身共が育て柄、其方も憎うはあるまいが。追ッつけ四海の武將。その時其方も呼び戻し、御母公樣ぢや。喜べ喜べ。なんと、此やうな嬉しい事はあるまいがな。

小夜　エヽ、此やうな悲しい事はあるまいわいなう。

甚兵　ヤヽ。

小夜　人非人と云はうか、大惡人、こなたの爲には三代相恩の、お主のお胤を捨てゝしまひ、現在の我が子を主人

の胤と敬まうて、謀叛人の大將と呼ばすが、なんの嬉しい事。その討手と云ふは、義理あるが我が子甲斐之助、願うてもさゝねばならぬ功名手柄。現在我が子の首討たす、門出を祝ふ出陣の、その時の妾が心は、どのやうにあらうぞいなう。

甚兵　ハテ、出陣するには及ばぬ。足腰立たぬ甲斐之助、其方が手にかけ、殺してしまへ。

小夜　ヤア。

甚兵　名草の城の討手とあれば、忰が爲の仇敵。女の其方には幸ひな役目ぢや。甲斐之助を殺せ。

小夜　イヽヤ、義理ある我が子と云ふも、大切なお主、こなたのやうな不忠不義な、妾と思はつしやるか。

甚兵　すりや、以前のよしみを忘れて。

小夜　粟島家譜代の侍ひ、三左衞門が娘の妾は、例へ命を捨てゝも、甲斐之助に功名手柄をさゝねばならぬ。

甚兵　女ながらも忠義立て。ホヽウ、出かす〳〵。

ト詰つて云ふ。小夜路、思ひ入れあつて

小夜　コレ、義を張り詰めるは表向き。誠の心は、どうぞ善心になつて、我が子を無事に。

甚兵　ヤア、十が九つ仕負ふせたこの度の企て。離縁の女か意見聞かうか。馬鹿な奴の。

小夜　そんならどうでも。

甚兵　滅多にや飜へさぬ。

小夜　エヽ、すりや。

トこの時、三方の三人、一緒に顏見合せ、一時にピツシヤリと障子をさす。

ハア、……。

ト小夜路泣く。甚兵衞、こなしあつて、奥へ行かうとするを留めて

さては、こなたは。

甚兵　甲斐之助を手にかける。

小夜　イヽヤ、それでは。

甚兵　なにを。

ト立廻りになり、甚兵衞、小夜路をポンと當て、奥へツイと走り入る。所へ兵部、白金の鉢を持つて出て

兵部　後室樣。

小夜　ヤア、兵部。

兵部　生みの双子の行くへ、相知れました。

小夜　ヤア、なんと。

兵部　云ひ交されし夫は尼子。こなた樣は當家の御譜代。

殊に若殿へ義理と忠義を立て通す、天晴れの御心底。
小夜　すりや、最前からの樣子を。
兵部　殘らず承はつた。
小夜　ヤア。
兵部　この上は一刻も早く、若殿の御病氣、御本腹の手際
はこなた樣。
小夜　成る程、和氣法印が聞かせし、龍骨と云ふ藥に、女
夫子の血潮を注ぎ合ひしを用ゆれば、立ち所に本腹する
甲斐之助。
兵部　サア、その女夫子と云ふは、男女の双子。
小夜　それゆゑ、お種を祝言さして殺す思案。
兵部　イヤ、女の血潮はあつても肝心の男が。
小夜　サア、その男は。
兵部　尼子四郎義久。
小夜　南無阿彌陀佛。
ト懷劍にて腹切る。
兵部　後室、これは。
小夜　双子の片割れ、役に立つべき四郎は名草の城、殺す
とも生かすとも、對面せねば顏も知らず、殊に謀叛の棟
梁。
兵部　すりや、それゆゑの御最期か。
小夜　イヽヤ、斯く云ふ妾も即ち双子にて、片割れの男は
他家へ養子にと、稚ない時に聞いたばかり、例へ双子と
揃はずとも、娘のお種を手にかけて、あれが血潮と我が
血潮、合體して甲斐之助どのに、用ひてたべ、兵部ど
の。
兵部　イヤ、氣遣ひあるな後室。男女の双子、女夫子の血
潮は揃ひましたぞ。
小夜　ヤア／＼、そりやどうして。
兵部　双子の片割れ、即ち男の血潮は。
ト肌脱いで見せる。腹切つて居る。
小夜　ヤア、兵部どの、そんならこなたは。
兵部　立浪家へは只養子とばかり、親元知らず育ちしが、
さては身共も粟島三左衞門どのゝ双子であつたか。
小夜　アノ、こなたが。
兵部　如何にも。さうと知れたは最前の親子の血寄せ、親
子と思ひし悴が血潮は相別れ
小夜　他人と思ふ、こなたの血潮は
兵部　自然と寄りたる双子の兄妹。
小夜　すりや、忠義を思うて

兵部　腹切つたるは若殿の御難病。
小夜　本腹さすは二人が血潮。
兵部　戰場の討死にも勝つた功名。
小夜　育て君の御爲に
兵部　後室。
小夜　兵部どの。
兵部　生れた時に引別れ
小夜　死ぬる時に寄り合うて
兵部　お役に立つは
小夜　互ひの本望。
ト兩人、顏見合して思ひ入れあると、臆病口、バタバタにて彌生を蕪藏、惡太郎、引立て出る。
惡太　腰元の彌生と云ふは毛利の岩姫。
蕪藏　尼子の仇に根を絕つて。
ト兩人、切つてかゝるを、彌生、突き廻して
彌生　さては其方達は。
兩人　名草の城の一味。
ト三人、立廻りのうち、兵部、小夜路、よろぼひながら兩人を、ポン〳〵と切る。彌生、二人を見て
彌生　ヤア、さては後室樣、兵部どの。

兵部　コレ、我れ〳〵が最期は、若殿樣の御本腹。
彌生　エヽ。
小夜　幸ひの岩姫、二人が血潮を甲斐之助どのへ。
彌生　イヽエ、なんぼう御難病を癒さうとて、現在の
小夜　母ではない、お乳の人。
彌生　エヽ。
小夜　死ぬる覺悟で最前の仕儀。コレ。
ト手を合し、彌生を拜む。
彌生　勿體ない。なんのお恨み、
兵部　この度の出陣に、毛利の仇も御一緖に。時刻が移れば却つて妨げ。
小夜　一刻も早う、岩姫どの。
彌生　エヽ。
兵部　用意の藥種は、この釣鍋。
ト兵部、鍋を取つて我が血汐を入れしを、小夜路に渡す。小夜路も血汐を入れて
小夜　現在夫は惡人なれど
兵部　善きに似よ、惡しきに似るな
小夜　なべて世の
彌生　人の心の

小夜　自在鉤なり。
彌生　只栗島のお家に
小夜　子孫を
兵部　釣鍋。
　ト鍋を彌生にさしつける。
　サア、若殿へ
小夜　早う。
彌生　ハア。
　ト大泣き。チョン／＼道具返し
　造り物、見附け一面の網代塀にて、紅梅の盛り、上の方に一間半の綺麗なる高き屋體、塗り骨障子、すべて奥庭、奥座敷のかかりよろしく、矢張り靜かなる下がり葉にて道具とまる。橋がゝりより四郎義久、龕燈を持ち、右の形にて窺ひ出る。臆病口より甚兵衛も窺ひ出て、兩人互ひに行き合ひ
四郎　鹿之助。
甚兵　義久公。して、甲斐之助は。
四郎　あの一間に。忍び寄つてたつた一討ち。
甚兵　必らず仕損せぬやう。
四郎　如何にも。
　ト一間へ忍び行かうとして、思ひ入れあつて立戻り
　鹿之助。
甚兵　ハツ。
　ト側へ寄る。四郎、龕燈にて甚兵衛が顔を稍、暫らく見て、こなしあつて
四郎　吉左右知らさう。
甚兵　早う。
四郎　ムウ。
　ト思ひ入れあつて、一間へ忍び込む。甚兵衛こなしあつて後を見送り
甚兵　天晴れ四海の大將……親にはすぐれ
　ト云はうとして、ちやつと、
　賴もしい。
　トこなしある。一間の內、バタ／＼にて
甲斐　すりや、其方が尼子四郎ぢやよなア。
四郎　如何にも。毛利の緣ある栗島甲斐之助、殊にこの度の討手、不便ながらも今、四郎が手にかける。覺悟せい。
　トばた／＼する。

甲斐　卑怯者。歩行叶はぬ甲斐之助を。

四郎　今が最期ぢや。

ト始終バタ／＼にて、ポンと首切りかけ、甚兵衛、此うち立ち聞きして喜ぶ。甲斐之助、抜刀にて切り首を持つて出る。

甚兵　義久公。

四郎　まんまと甲斐之助を。コリヤ。

ト首を渡す。甚兵衛、探り寄つて首を取り

甚兵　お出かしなされた。

ト懐中より城内の繪圖を出し

義久公、これは名草の城の地理細見。これを持つて。

四郎　すりや、これが名草城の地理の圖とな。

甚兵　即ち鷲塚が繩張りの繪圖。

ト一間の内にて

彌生　ヤア、こりや何者とも知れず、若殿様を手にかけたわいなう。

皆々　何れも。灯々。

大勢　ハア、。

ト騒動の體にて、網代塀の上へ高提灯出る。

甚兵　アレ、見咎められぬうちに。

四郎　ムウ。ソレ。

ト繪圖を懐中するうち、橋がゝりより凛々しき捕り手八人出る。

捕手　曲者。

ト兩人にかゝる。立廻りにて四郎、四人を切り散らし、橋がゝりへ追つて入る。甚兵衛も四人と立廻り、切り散らし、追つて行く所へ、臆病口の方にて

伊達　エイ。

ト矢を放す。甚兵衛が眉間へ立つ、こなしあつて

甚兵　これは。

ト伊達五郎睨ぎかけにて、弓を持ち、ツカ／＼と出て、

伊達　不忠不義の山中鹿之助、なんと思ひ知つたか。

甚兵　ヤア、其方は。

伊達　立浪伊達五郎。

甚兵　その伊達五郎が、身を不忠者とは。

伊達　三つの年、兵部に拾はれ、人となつたる某は、うぬが捨てたる尼子晴久が胤の義丸。

甚兵　ヤ、、なんと。

伊達　仔細は最前後室への物語り。その様子詳しく聞き届けたる伊達五郎。コリヤ。

ト最前の男雛を出し
印の男雛はうぬが悴の生れ月日、また我れに附けある二重鶴の守は、うぬが悴の四郎作に附け置き、晴久どのゝ胤なりと、人を惑はす非道の謀叛。蛙は口から。思はず明かすはこれ天命。なんと一々胸に、イヤ、こたへうがな。

甚兵　さては最前の様子と云ひ、こなた様は。

伊達　尼子の胤と聞く上は、今より改め、父の無念を受け継いで義兵の旗上げ。

甚兵　エヽ、天晴れ、主人の胤。爭はれぬは悪の報い。

伊達　好事門を出でず。

甚兵　悪事千里。さうぢや。

ト腹へグッと突ッ込み、引廻す。

伊達　ムウ、こりや、まだしもの最期。

トどんちやん、遠責めになる。伊達五郎、甚兵衛とこなしあつて

兩人　ヤア、あれは。

ト一間の内にて侍ひ大勢。

皆々　出陣の刻限。

伊達　ヤア。

ト振返る。一間の障子開く、眞中に甲斐之助、矢張り羽織の形にて鎧櫃に腰かけ、城中地理の繪圖を開き見て居る。左右に小夜路、兵部、腹切つた形にてよろめき居る。彌生の岩姫、長刀持つて付き添ひ居る。その外、腰元大勢附き添ひ居る。

伊達　ヤア甲斐之助、其方は。

甲斐　この兩人が忠死の血潮にて、病氣本腹。

甚兵　ナニ、甲斐之助が存命とは、

トきつとなる。

小夜　鹿之助どの、こなたの悪事を見限つて、可哀や四郎は若殿の御身替り。

甚兵　ヤ、なんと。

甲斐　我が寢所へ岩姫が持參の妙藥、二人の血潮と知らず服用すれば、立ち所に病氣本腹。合點ゆかずと様子を聞くうち、尼子四郎と名乗り來て、晴久どのゝ胤とは僞り、先ッ斯う／＼と鹿之助が悪事の段々。双子の様子、委細を云うての四郎が切腹。甲斐之助が身替りとなり、敵を欺むく計略は、せめての親の罪亡ぼし。早首討てよと勧むるも、存命叶はぬ裏を搔いたる切腹に、是非なく四郎が首を討ち、コレこの如く姿も共に四郎となつて、

なつて、この名草の城の地理細見。鹿之助はそれとも知らず渡せしは、討手に向ふ敵地の案内。

彌生　自然と手に入る地理の一卷、この上は毛利の家國、

甲斐　取立てるは天の羽衣、在所を語る一首の歌は、ソレ。

ト彌生、取つて、

彌生　「紀の路なる名草の岡の櫻花、落ちて谷間の雪と見るらん」。そんならこれが

甲斐　後日の證據。

甚兵　ヤア〳〵。すりや、四郎は敵の身替りに。ドレ……。

ト首を取上げ、キツと見て

甚兵　誠に、こりや忰四郎が首。チエ、。

トこなしある。兵部、こなしあつて

兵部　忠孝却つて仇敵と

甲斐　生さぬ仲なる母人は

小夜　元へ戻つてお乳の人。

兵部　主從親子の緣も

小夜　斷ち切れば

ト引廻す。甚兵衞、こなしあつて

甚兵　惡事を企むも忰が出世。四郎が最期を遂ぐれば。

ト引廻す。ト鷄鳴く。

彌生　最早明け方、鷄の鳴く聲。

甲斐　人の最期に

甚兵　云ふ事まさに

兵部　よしない苦痛。

皆々　殿樣の御出陣。

小夜　この世の暇。

伊達　謀叛の門出。

ト伊達五郎、甚兵衞が首をポンと切る。兵部、小夜路、バツタリとへたる。各々途端によろしく、チヨン〳〵

幕

四段目　鳥羽畷の場

役名――鷲塚十右衞門。松坂法印　實ハ千葉勝右衞門。立花右近。東條左衞門。鐵屋久兵衞。駒木根金左衞門。駒木根八郎。

造り物、見附け黑幕、西の方、障子屋臺。眞中の荒菰の上に御幣立てある。舞臺眞中より橋がゝりへ板

松、間に胴桶、蓮屋根。橋がゝり火消し用心道具、立て並べある。在郷唄にて幕開くと、百姓三人、門口の外にて

百一　サア〳〵、ちと休んで一服せうかい。

百二　さうしませう。

ト皆々束を下ろし、おうこの上へ腰かけ、火打ちにて煙草のみ

百一　なんと、今年は十分の萬作ぢやが、よい事には寸善尺魔。何がちいと助からうと思へば、町々の旦那衆も、餅米から蔬菜香の物大根、換物が少ないと云うていぢり立てる。こちとらが貰うてやらにや、どう仕様もあるまいが、如何に身から出た物なればとて、せうべんにするてや。

百二　イヤ、又、我れ〳〵しきは、どのやうとも仕様はあるが、兎角嚙みかゝるとねだり取る代官。この秋入れもおらはえらうせたげられた。

百三　それ〳〵、イヤ又、あの代官様は、滅多無性に取上げる慾心者。ちつと見せしめに懲らしてこましたい。イヤ、それについて、彼の名草の百姓が集まつて、代官をこみぢにぶち砕き、それから軍が起つたげな。その大将の名は、尼子とやら尼出とやら。どうやら臭い名であるぞ。

百一　百姓の軍なら、臭いも尤もかいの。

三人　ハ、、、。

百一　アレ〳〵、人事云はゞ目代置けと、代官がござるぞや。

百三　ほんに代官ぢや。控へさつしやれ。

ト皆々片側へ寄る。代官官平、上下、股立ちを取り、仰山な拵らへにて、供廻りに鎗持たせ出て、挟み箱に腰打ちかける。後に庄屋、百姓三人附いて出る。皆皆下座へ直り

庄屋　これはお代官様には、御苦労千萬に存じまする。私しは、當村の庄屋、萬作でござりまする。

百一　その外は地下の百姓でござりまする。

皆々　御用の次第、仰せ下さりませう。

官平　われ達は所の庄屋、百姓どもぢやな。身が云ふ事をよつく聞け。

皆々　ハア、。

官平　この度、九州尼子が餘類、謀叛を企て、名草の郡に城を築き立籠る。小勢なれども尼子四郎、謀計を廻ら

し、一味の者を所々に伏せ置き、京都にも餘類の者ども隱れ居る由、油斷ならず、殊さら怪しき法にて人を誑らかし、軍用の手段にするとの事。詮議いたさば莫大の褒美をくれう。

皆々　エヽ、有り難うござりまする。

官平　身共はこれより、次の村へ參り詮議せん。しかと申し渡したぞよ。庄屋萬作、次の村へ案内せい。

庄屋　畏まりました。

官平　家來參れ、

ト唄になり、官平庄屋萬作、家來連れ入る。

皆々　なんと嚴しい詮議ぢやな。

百一　さればいの、あのたくら代官は、取りたくるばつかりで、ついぞ物を遣らうと云うた事のない和郎ぢやが、詮議いたさば、はつたいの褒美遣らうと、次の村へ案内せい、家來參れと横柄に云うた所が、褒美ははつたいぢや。命がけで注進して、はつたい位では合はんものぢや。

百二　何を云はつしやるやら。はつたいではない、莫大と云ふは、たんと褒美を遣らうと云ふのであらうぞいなう。

百三　ハア、おれがのは無體ぢや。併し、おれが心當ては、爰で祈禱ずる松坂法印。神道やら佛道やら、奇妙な祈禱をするげな。

百一　そんなら其奴を捕まへて、詮議さつしやれ。

皆々　合點ぢや。

トたごに柄長の柄杓など胴桶の側へ直す。

百一　もし松坂坊が手に餘る時は

二人　お代官へ。

百一　ぬかるまいぞ。

皆々　合點ぢや。

百一　行かんせ。

ト皆々入る。在郷唄になり。松坂法印、實は千葉勝右衞門、鼠木綿やつし、淺黄頭巾を着て、銅鑼を叩き、をかしき身振りにて出る。後より子役三人、木綿、在郷子供にて附き出る。

子供　坊主よ〳〵、何しやる。

ト勝右衞門、構はず、花道の眞中まで行く。

勝右　かのへ申、庚申の代待ち。

子供　味噌擂り坊主大坊主。

勝右　コヽ、喧ましいわい。コリヤ、後に居る奴、おのれ

は女子ぢやないか。えらいはつさいぢやな。嬲てくさる
と猿に掻かすぞよ。
子供　怒つた〳〵。
　ト子供、手を叩く。
勝右　悪い餓鬼どもぢや。
　ト構はず本舞臺へ、ぼやき〳〵行く。子供皆々手を叩
　きて
子供　坊主々々、何所へ行た。
同　ちんばで豆腐買ひに行く。
勝右　庚申の代待ち……エヽ、おのれらはな。おれを常住
　嬲てくさる。わいらはおれを阿房ぢやと思ふか。
皆々　その通り〳〵。
勝右　コリヤ、まんざら阿房でもないわい。
子供　それでも阿房のやうな。
同　阿房よ〳〵。
勝右　エヽ、いま〳〵しい。どづいてこまさう。
　ト箒にて叩き廻す。子供、逃げ歩く。
皆々　怒つた〳〵。
　ト皆々逃げて入る。勝右衛門、後を見て
勝右　エヽ、喧ましい奴等ぢや。

　ト合ひ方になり、あたりを見て
ア、嬉しや、何奴も居らぬぞ……某、此やうに馬鹿者と
なつて、所々に徘徊し、神道者踊り念佛、また此やうに
庚申の代待ち、七化けのやうに様を變へ、人の目をかす
め、儲ける金も皆軍用の、一つ二つには都の噂、名草の
城の攻め支度、聞き出さん爲、千葉勝右衛門とも
　トあたりを見て
けれう、誰れも居ねばこそ。思はず知らず、ツイ身の上
を。
　トこなし。
ドリヤ、護摩檀で股火せうか。
　ト在郷唄になり、中へ入る。久兵衛、着附け羽織、細
　やつし、隠居の拵らへにて出る。
久兵　慥か爰らと聞いたが……オヽ、爰ぢや〳〵。イヤ、
ちとお頼み申しませう。内方は松坂法印さまでございま
するか。申し〳〵。
勝右　アイ〳〵。
　ト勝右衛門出て、久兵衛が風體を見て、ちやつと氣を
　替へ、なかしき身振りにて
へ、、、ようお出でなされました。

久兵　イヤ、御免なされませ。私しはちつとお頼み申したい事があつて、參りましてござりまする。何卒お聞きなされて下さりまするかな。

勝右　エヽ、こりや失ひ物か走り人、御判祟色の考へか。但し、男女相性病人の伺ひか。何なりとも奇妙なが法印ぢや。お願ひ申して進ぜませう。

久兵　ちつと申し兼ねて居ります。

　ト云ひ兼ねて居るこなし。

勝右　ハテ、遠慮のない事の。

　ト此うち尼の婆、駕籠を吊らせて出て來て

尼　ヤ、お許しなされて下されませ。私しはこの間、狐つきを連れて參りました婆でござりまする。また御祈禱なされて下さりませ。

勝右　オヽ、ござりませ。易い事ぢや。狐を落す事なら、おれが得手物ぢや。落して進ぜう。

久兵　エヽ、そんなら狐でもお退きなされまするか。

勝右　狐は愚か、怨靈でも退きまするてや。

久兵　これは奇妙ぢや。

勝右　いづれも、暫らくそれに控へさつしやれ。

二人　ハイ〳〵。

　ト兩人、表の方へ出る。

尼　イヤ、申し、お前樣の願ひは何でござりまする。

久兵　近頃恥かしい事でござりまするが、わたしは戀でござりまする。

尼　ナニ、戀とは、

久兵　サア、此やうによい年をして、戀路の闇に迷うて居りまする。

尼　イヤモウ、誰れしもある習ひ、この道ばかりは幾つ何十になつても忘れませぬ。して、後家にても色が出來ましたか。

久兵　イヤ、私しが戀は、始めてでござりまする。これから少し南に當りまして、油屋がござりまする。彼の娘の名はお花と申します。過ぎつる春の花見の時、お花を見初め、この北在所に、さる懇ろな者がござりまする。これを媒介に頼みまして口說かしましたが、金銀を取られまするばかりで、今に返事もござりませぬ。それでこの戀が叶はぬか、見てもらひませうと參りました。

尼　ヘヽ、そんなら、これより南の方、油屋の娘お花どのに惚れて、北在所の者を仲人にお頼みなされましたか。さうしてお前のお名は、何と申しまする。

久兵　私しは鐵屋久兵衛。

尼　娘の年は。

久兵　十六、名はお花。

尼　お前の年は。

久兵　五十六。

尼　ハア、、蓮破りと云ふでもなし、男盛りぢやの。

　ト此うち勝右衛門、始終聞き居る。

勝右　サア、皆此方へ通らつしやれ。先づ先から片付けませう。兎角神は狐が慣はしと云ふ。地獄の沙汰も金次第、信心と金とが肝心。阿彌陀も錢程と云ひます。ナウ婆様。

尼　左やうでござりまする……イヤ、これはこの間から冥加の爲、明神さまへ御神酒を上げて下さりませ。

　ト包み紙を出す。

勝右　イヤ、モウ、これには及びませねど、冥加の爲なれば、少しばかり受けませうかい。

尼　イエ／＼、十兩かそこらの目腐り金、お納めなされて下さりませ。

　ト此うち駕籠の中より狐つき飛んで出る。ぽつとせにて、狐のついたこなし

男　ハ、、こつてりと此方の婆様が、やるワ／＼。ドレドレ、おれも伏見の稲荷の君に逢ひに行かう。

　ト駈け出すを駕籠舁き、これを留めて

駕舁　申し、申し、内儀さん、アレ、また駈け出されまする。

尼　ヤレうたてや。法印さま、頼みます／＼。

勝右　合點ぢや／＼。

　ト勝右衛門、御幣を持ち、狐つきを中へ突ッ込む。

サア、いづくの野狐ぢや。何恨みあつて斯く惱ますぞ。下がれ／＼／＼。

　ト御幣にて狐つきを叩く。この者バタ／＼と西の方へ行く。

男　ア、、お免されませ／＼。八百萬神の移らせ給へる御幣串、我れらがやうな野狐は恐れあり。只今元の古巣へ歸ります。その代りにはお宮を勸請して、油揚げと小豆餅をふんだんに供へてたべ。

勝右　どこへ。野狐め、立去らぬか。

男　歸ります／＼。

　トこの男、慄うてコロリとこける。尼の婆、介抱して居る。

久兵　これは奇妙ぢや。

勝右　これからは、こなたの祈禱をして進ぜう。

ト御幣を上げ、手に立て

南無八ッ峯和光大明神。その他諸國稻荷大明神、速やかにこの幣束に移らせ給へ。奇妙頂來々々々々。

ト珠數にて祈る。御幣動く。久兵衞、一心に拜んで居る。

いづれもの目には見えまいが、それ〳〵、そこへ、ハア、寄り來るソ。一番が大和の源九郎、妻の小女郎狐。その次は播磨の小坂部大明神。ハア、、恐れあり〳〵。

ト足にて紐を引く。御幣頻りに動く。

これからは願ひの一々聞いて進ぜう。小女郎さまへ申し上げます。この者が願ひ、何事かは存じませねど、お聞きなされて下さりませう。

ト御幣動く。勝右衞門、耳寄せて

ヘイ〳〵、畏まりました。

ト久兵衞に向ひ

さてはこなたは、鐵屋久兵衞どのでござるか。

久兵　左やうでござります。

勝右　こなたの願ひは、伏見油屋の娘、お染ではない、お花に執心。これより北在所の者を仲立ちに頼み置きたれど、この戀は叶はぬと云ふは、相性が惡い。こなたは五十六、娘は十六、北に當つてはこれ黑星。北磁石あつて鐵金銀を吸ひ取られ、怪體の卦なりと明神さまの敎へ。この戀は叶はぬ〳〵。

トまた勝右衞門、御幣に辭儀をして

ハッ〳〵、あなたはお辰狐さま、信田の葛の葉、向うへ來たのを誰れぢやと思へば、川竹大明神。寄り來るワ來るワ。はんにやしんぎやう。

久兵　申し〳〵、どうぞお前樣の御祈禱で、戀の叶ひますやうに。

ト紙入れより金を出し、前に置く。勝右衞門、取つて

勝右　これさへあれば戀は叶はす。猶も信心怠るな。名殘りは惜しけれど、もう去ぬるぞや。

ト御幣殘らずこける。狐つきの男、むく〳〵と起き

男　ヤア〳〵、こりや何事ぢや。おれがこの形と云ひ、母者人、おりや、どうぞしましたか。

尼　したどころかいなう。われには狐がついてナ、さまざまな事して狐を退けてもらうたわいやい。

男　エ、、有り難い、母者人、隨分お禮を澤山に進ぜて

下さりませ。

尼　合點ぢや。アヽ、がつくりと草臥れが來た。

勝右　道理々々。マア、ちつと奥へ行て、氣を休めて歸らしやれ。イヤ申し。

尼　とても事に、とつくりと御祈禱をお頼み申しまする。

勝右　それも合點ぢや。行ひをする間、奥へ行て待つてござれ。

久兵　そんなら後程逢ひませう。

ト唄になり入る。狐つきの男殘り

男　法印どの。

勝右　まんまと首尾よう仕負ほせました。ソレ、分け口の五兩。

男　忝ない。これまで母者めを騙して金を取つたれど、もう古手な事は喰はぬゆゑ、狐つきの眞似をして、こなたの庇で、マア五兩はしてやつた。また金が切れたら狐つきになつて來るぞや。

勝右　何時なりとも。併し、五兩づつには廉いものぢや。

ト橋がゝりバタ／＼にて、百姓葛籠を抱へ出て中へ駈け込む。後より侍ひ、追ひかけ出て

百姓　猪口才な下郎め。邪魔ひろぐとぶツ放すぞ。

侍ひ　身にも命にも替へぬ大事の葛籠、滅多に渡してよいものか。此方へ戻せ。

百姓　戻して欲しくば、戻してやらう。

ト切つてかゝる。立廻りいろ／＼あつて、百姓逃げて入る。追つて入る。奥より尼の婆、久兵衛出て驚ろき

皆々　こりやマア何事ぢや。

勝右　譯も云はずに、この葛籠をせり合つて、切り合うて行たのは。

久兵　逃げた男は盗賊か。

皆々　面妖な。

尼　アレ／＼、葛籠がひよこ／＼動きます。

勝右　何ぢやあらうと、明けて見よう。

ト皆々取卷いて明ける。中より若き男、絹やつし庇ぎかけにて、狂ひの姿にて飛んで出る。あたりキョロ／＼見るを、皆々恟りして

皆々　こりや何ぢや。

勝右　勿怪なものが湧いて出たぞよ。

狂人　何ぢや、勿怪ぢや、ハヽ……、さう云ふ貴樣は出家。

ト尼の顔を見て
こなたは所化、おれは武家。その武家、その武士を、なんで此やうにした。まどうて返せ〳〵。
ト勝右衞門を振り廻し泣く。
勝右　ハア、、こりや氣狂ひぢやな。ハテ、變つた物を持ち込んだが、賤しからぬ者と見える。コレ、こなたは何所の和郎ぢや。
狂人　おれを知らぬか。コレ、曲がないぞや。こなたと連れ立ち、對の小袖で手に手を取つて、死なざやむまい我が心。云ひ交したを忘れやつたか、コレお婆。
尼　オ、、怪體やの。如何に氣狂ひなればとて、わしが手を取つて、投節を謡ふか。いつそ益體ぢや。
男　面倒な。まくし出してこまさう。
ト手を取りにかゝる。この時、以前の侍ひ走り出て、この若者を圍ひ
侍ひ　マア〳〵待つた。この仁は拙者が御主人。ちと致した儀で館を出られ、それよりの氣狂。聞き及んだ松坂法印さま、御祈禱を頼まん爲、人目を忍び今の有樣、御祈禱の儀を願ひまする。
久兵　ハテ、氣の毒な。

男　法印さま、儲け口が浮かんで來た……コレ、若いお人、奇妙な山伏ぢや。本性にならぬ前に、キッと禮が要りますぞや。
侍ひ　爰に金子三十兩。マア、これを賴のみ印。
ト差出す。勝右衞門、男と顔見合せ、金を取り
勝右　さらば御祈禱を致さうか。
ト御幣を立てる。氣狂ひ、キョロ〳〵して居る。手を取つて御幣の眞中へ坐らす。勝右衞門珠數を持ち上げ、段に向ひ
勝右　南無稻荷大明神。神力應護の奇特を見せしめ給へ。奇妙頂來々々〳〵。
狂人　なんぢや、奇妙頂來ぢや。コレ坊さん、そりや何するのぢや。
勝右　ハテ、其方が正氣になるやうに、明神さまの御祈禱ぢや。南無稻荷大明神、本心になさしめ給へ。奇妙頂來奇妙頂來。
ト珠數にて狂人を叩く。
それ〳〵御幣が動くぞ。奇妙頂來々々〳〵。
ト御幣の紐を、男ソッと引いて居る。狂人ひ、これを見て

狂人　ハハ、、、、引くワ〱。こりや面白い。おれも引
かう。
ト合摺りの男が持つたる紐を引く。
久兵　ヤヽ。こりや御幣に紐が附いて居るワ。
侍ひ　さては稲荷の祈禱と云ふも、僞はりであつたよな。
久兵　こちとらも一杯やつたのぢやな。
男　南無三、化の皮が現はれた。
尼　悴め、こりや、法印と一緒になつて、親をやつたな。
勝右　コレ婆様、皆その和郎が頼みぢや。おりや何にも知
らぬぞ。
尼　イヤ、さうは云はさぬ。
久兵　先刻の金を戻せ。
ト尼、久兵衛、侍ひ、勝右衛門にかかるを振り放し、
勝右衛門、奥へ入る。合摺りの男も逃げうとする。久
兵衛、尼、立廻りある。侍ひは奥へ入る。男は兩人を
振り放し、橋がかりへ逃げて入る。氣狂ひの男、ウロ
ウロとして居る。勝右衛門、奥より出る。
勝右　なんでも爰に長居はならぬ。騙り取つたるこの金。
名草郡の四郎どのへ。さうぢや、
ト行かうとするを、狂人、勝右衛門を突き廻す。

どう氣狂ひめ、邪魔ひろぐな。
狂人　ヤア、愚かなり千葉勝右衛門。尋常に腕廻せ、
勝右　ナニ、某を勝右衛門とは。
狂人　ヤア、あらがふな。合點のゆかぬ松坂法印、某似せ
氣狂ひとなつて來りしに、目當は違はぬ其方が本名、開
かん爲。誠は立花右近。尼子の餘類、最早遁がれぬ、覺
悟せい。
勝右　ヤア、小癪な二才め。邪魔ひろぐと命がないぞ。
右近　なにを。
トこれより右近、十手にて立廻りあつて見得よくとま
る。以前の代官官平、家來引連れ出て
官平　家來ども、ソリヤ。
家來　ハア、動くな。
ト半切、小手臑當の軍兵取卷く。
勝右　うぬら一々死物狂ひぢや。覺悟せい。
トこれよりタテになり、皆々を追ひ廻し入る。立花右
近殘り居る。以前の侍ひ、奥より出て
侍ひ　立花右近どの、東條左衛門どの。
左衛　口惜しや、一人の曲者を取逃がしてござる。
右近　取逃がしても氣遣ひない。八方を取卷きあれば、追

ッつけ手に入る。氣遣ひ致されな。
ト兩人、橋がかりへ入る。これより早太鼓になり、勝右衛門、白鉢卷半纏、大童にて肌細、臑當にて軍兵を追ひ廻し、キッと見得になり、タヂ／＼と後へ寄り、胴桶の屋根を踏まへる拍子に胴桶の中へ踏み破り嵌る。軍兵走り出る。奥より官平出る。

軍兵　官平さま、勝右衛門が手酷く働らき

同　我れ／＼を切り散らし、皆くれ行くへが知れませぬ。

官平　コリヤ、氣遣ひ致すな。勝右衛門は……コリヤ。

ト囁く。皆々忍ぶ。勝右衛門、空桶よりヌッと出る。橋がかり、早太鼓かすめて打つ。凄き合ひ方になる。勝右衛門、體に藁や紙などつけ、上へ上がつて着物を絞る思ひ入れにて、花道の方へ行かうとする。捕り手後より附いて入る。よき所にて顏見合せ、勝右衛門、ぶる／＼と慄ふ。捕り手、寄られぬこなしにて後へ戻る。又そろ／＼行かうとする。また捕り手、捕つたとかかる。立廻りにて本舞臺へ戻り、見事にポン／＼と投げ、見得になる。捕り手鼻を押へ、勝右衛門、西の方へ行かうとする。四人の組子、飾りつけてある火消し道具にて双方より取巻く。これにて立廻り。勝右衛門、二つのたごをタテのうちに捕り手に浴せる。長柄の柄杓を持つて、キッと見得になり、官平、捕り手出て

捕手　ヤア、卑怯なる穢なき働らき。勝右衛門、尋常に勝負々々々。

官平　腑甲斐なき組子の者ども。かゝる必死の場合に於て、不淨たりとも猶豫するは不忠の働らき。

捕手　命の限りに働らけ／＼。

皆々　動くな。

トまた立廻り。官平、捕り手、双方よりかかる。キッと見得になる。

勝右　どつこい。

ト長柄の杓柄を構へると、チョン／＼、黑幕、切り落す。返し。

造り物、橋がゝりより松原、稲村、腰かけの石引き出す。暮れ六ツの鐘鳴る。即ち鳥羽畷のかかり。夕立、物凄き合ひ方になる。駒木根金左衛門、黑股引、合羽、旅の形、三度笠を着て、火縄を振り出て來る。厚袍衣裳の追剝二人附いて出る。花道にて

追一　ハテ、死太い親仁どの。こちとらが頑張つたからは、もう叶はぬ。四の五の云はずと、まき出してしまへ。

金左　イヤ、此奴が。最前から後に附いて、ぶう／＼喧ましい。無駄口きくな。早く歸れ。

ト行かうとするを二人、金左衛門を突き廻して、金左衛門を中に挾み

追二　コレ、親仁どの、昨日から貴様を附け廻して、今夜逢つたは百年目ぢや。否でも應でも借らにや置かぬ。痛い目せぬうち、キリ／＼酒手を遣つて下され。

二人　その路銀貰うたぞや。

金左　ならぬ／＼。ならぬ事ぢや。この海道は物騷なと聞き及んで居る。われ達如きが恐ろしいとて、夜道がならうか。主君へ貢ぐ御用金。一歩でもちゝうさす事能りならぬ。

兩人　ならずば斯うして貰はうかい。

ト兩人かかるを腕捻ぢ上げ

金左　へゝ、猪口才な蚊蜻蛉めら。老さらぼうても、おのれら如きは、爪はぢきにも足らぬ奴。飛びしさつて居らう。

ト一人を蹴飛ばし、又一人を戸屋の方へ打ちつけ、傘を取り

嬉しや、雨も止んだ。ドリヤ、一服吸ひつけて參らう。

ト悠々と煙管を出し、落ちたる火繩を取り上げ、そろそろ本舞臺へ行く。兩人、這々起き

追一　アイタ……手酷い老ぼれめ。例へどのやうに働らいても、鰐が見入つた金。

追二　取らにや措かぬ。待ちあがれ。

ト一人、向うへ立ち塞がる。

金左　ハテ、性懲りもない。とてもゆかぬ事ぢや。肝精やくな。わいらにや相應な田舍道者を相手にするが勝ちや。併し、捨てゝも行かれまい。爰までよく供して來た。駄賃をくれうぞ。爰に錢が二百文、瓢箪酒でも打喰ひ、腰の骨の養生せい。

ト二百文の錢を抛り出し、立ち塞がる二人の首筋掴んで引退け、行かうとする。

追一　こりやモウ手短かに。

追二　合點ぢや。

ト拔いてかかる。金左衛門、肩にてあしらひ、また一人が切りかかるを、しつかり止め

金左　コリヤ、うぬら、命が餒臭つたな。逢て妨げひろぐと生かしては置かれぬ。ぶッ放す。覺悟ひろげ。

ト見事に投げろ。
兩人　さう吐かしや、うぬから先へ。
ト兩人、切りかゝる。立廻りよき所にて、鷲塚十右衛門、黒羽二重の古き衣裳、袖頭巾にて、ツッと出て、二人の追剝を見事に投げ、金左衛門を圍ひ、こなしある。
金左　こなたは何人。
十右　イヤ、苦しうない者でござる。拙者爰を通り合せ、見請けますれば二人の盜賊、御老人に無體の有樣。見兼ねてちよつと出ました。貴殿にはお構ひなく。サ、、お出でなされ〳〵。
金左　ハテ、御深切なお人ぢやなう。
追一　ヤア、稻村から湧いて出た猿松め。
追二　こちらが商賣を、なんで邪魔するのぢや。
十右　最前より料簡強い御老人に無法の白刃。如何程に働らいても叶はぬ事ぢや。達つて往來の妨げすると、一々首が飛ぶぞ……サ、、御老人にはお出でなされい。
金左　ヘイ。
追一　イヤ、滅多にやらぬ。この老ぼれめは懷中に、金なら大方二百兩は慥かにある。一旦圍うた代物。
追二　素手の孫三で行かうかいの。邪魔さらすと、うぬから先へ疊んでしまふ。
十右　ハテ、小癪な奴等。ぶッ放す、覺悟せい。
兩人　なにを。
ト十右衛門に切りかゝると、立廻りで兩人をポンと當てる。
十右　邪魔は拂うた。
金左　段々のお世話、御緣もあらば重ねてお禮。さらばでござる。
十右　アイヤ〳〵お侍ひ、暫らくお待ち下されう。
金左　拙者に御用か。
十右　暫らくが間お待ち下されう。
トしめやかな合ひ方になる。蟲の聲、一つ鉦。雨車鳴る。十右衛門、空を見て、稻村の蔭より破れた紅葉傘を持つて出て、金左衛門にさしかける。兩人こなしあつて、舞臺にヂッとつくばふ。
金左　一樹の蔭、一河の流れ。
十右　不思議にお出合ひ申すも緣。
金左　最前よりのお志し
十右　旅は道連れ。

金左　人は情、武士は仁心。
十右　サ、その仁心ある誠のお侍ひと見かけ、ちつと拙者が御無心がござる。お聞き屆けて下さるまいか。
金左　ムウ。して、その御無心は。
十右　拙者も故ある武士の果。浪人いたし尾羽打枯らし、一人の母を養ふ糧に盡き、心を碎く折も折と、母の病氣。人參の力でなくば、取留め難き命。今日を渡りかね、此まゝにて親を見殺す事、無念とは思へども、力にも及ばぬは貧の病。最前盜賊どもが見極めし、貴殿の懷中の金は大方二百兩。
　ト金左衞門ギックリする。
近頃無體な事ぢやが、武士は互ひ。暫しが間御借用申したい。お侍ひ、何卒聞き分けて、お貸しなされて下されい。
金左　ハテ、思ひがけない金の無心。最前のお世話、如何にもと申したけれども、ちと此方も主人の爲、忰が忠義立てさせねば、武士が立たぬと申す譯合ひ。氣の毒ながら、この儀は叶ひません。
　トすつと立つて行かうとする。鐺を引き止め
十右　アヽ、イヤ、そりや貴殿のが尤もなれども、最前の時、盜賊を切り散らしても、行く先にも山賊集まり居れば、とても貴殿は遁がれぬ命。そこを助けた拙者がよしみ。
金左　アイヤ〳〵、こりや何か。身共を庇ひ義理をかけ、この金を謀計を以て取らんと云ふ、さては彼奴等とは、ハテ、よく仕込んだなア。
　ト行かうとするを、向うへ廻つて留める。と二人の追剝、氣の附きたる心にて、後に窺うて居る。
十右　貧苦に迫つても、非道に金子は貪らぬ。暫しが間その金を。
金左　嫌でござる。爰放さつしやれ。
　ト振り切つて行かうとする。引止める。此うち兩人の追剝窺ひ寄り、金左衞門に切りつける。金左衞門、ウンと倒れる。十右衞門恟りして、二人が又切りかゝるを留めて
十右　コリヤ、掏摸ども。何ひろぐ。コレ〳〵老人、早う逃げさつしやれ〳〵。
金左　ヤア、卑怯な奴の。所詮敵はぬと思ひ、騙し討か。
　ト切りかゝる。十右衞門、二人を拂ひ、金左衞門が切りかゝる刀を留めて

十右　ヤレ、粗相云ふまい。彼奴等と同類でないぞ。
金左　何を卑怯な奴。
ト切りかゝるうち、兩人の追剝、金左衞門を切り、十右衞門、心遣ひの立廻り、いろ〳〵あつて、二人を留めて居る。
エ、口惜しや。盜賊の手にかゝり、此まゝ死ぬるか。チエ、殘念やなア。
ト兩人、十右衞門に切りかゝる。立廻りのうち金左衞門、稻村へこける。十右衞門、兩人をポン〳〵と切る。
十右　コレ〳〵お侍ひ、御老人。
トいろ〳〵呼び廻る。金左衞門、息引取るこなし。
はや締切れたか。この憂目を見まい爲に。ハア、是非もない。非道ながらこの金、身共が借り請ける。
ト懷を探し、金財布を出す、守り袋附いて出る。
こりや守り袋。
ト取つて
慥かに二百兩餘り。忝ない。
ト金取り、花道へツカ〳〵と行て
最前の働らき、定めてこなたも由ある人。子息もあれば尋常に討たれん爲、この守は持ち歸る。位牌と思ひ朝夕回向を。
ト手を合すと、橋がゝりより人音する。十右衞門、氣を替へ、戸屋の中へ走り入る。と駒木根八郎、傘をさし、高下駄にて提灯を持ち出て
八郎　さても變つた日和ぢや。降り遂げもせず晴れもせず、とんと氣狂ひのやうな日和ぢや。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來ると、追剝が死骸に爪づき、こなしあつて
エ、滅相な。野伏りの非人ぢやさうな。此やうな往來の眞中にどぶさるとは、コリヤヤイ。
ト死骸見て
ヤア、こりや切られたワ〳〵。オ、、こりや澤山に切り居つた。
ト金左衞門が死骸を見て
どうやら、この死骸は。
ト提灯にて顏を見て
ヤア〳〵〳〵、こりや絕えて久しき親人樣。何者の仕業。
ト一人の追剝、ムク〳〵と起きて、後より
追剝　うぬ。
トかゝるを見事に投げ、また死骸を見て

八郎　ハア。

トヘたろ。よろしく

チョン〳〵幕

切幕

島原廓の場
道行の場
名草砦の場

淨瑠璃「妻結鄙の顏」宮薗文字太夫
三味線　豊澤香五郎

役名――尾子四郎義久 實ハ立浪伊達五郎。粟島甲斐之助。松ヶ枝市の正。岩瀨監物。東城左衛門。田畑左近。座頭、城住 實ハ森宗意軒。久留島丈助 實ハ鹿子木左京。傾城、雛路。同、幾浦。同、爲篠。引舟、戸川。禿子、小菊。同、尾上。同、花世。同、入江。花車、妙閑。八代丹下。軍兵、藤太。同、藤六。宇津村鯛右衛門。仲居、おふぢ。同、おさが。毛利岩姫。亭主三郎兵衛 實ハ駒木根八郎。太鼓持ち又市 實ハ鷲塚十右衛門。

造り物、三間の間、女郎屋二階の體。見附け唐紙。橋がゝりの方、折り廻りにて、踊り場。上がり口の方同じく二階格子。前一面に屋根にて、この道具に好みあり、すべて島原傾城屋の體。幕の内より、傾城雛路、幾浦、爲篠、内着の形にて、禿子小菊、尾上、引舟の戸川、皆々同じく内着の形にて銘々鏡臺に向ひ、雛路は上の方に狀を書いて居る。爲篠、鏡に向ひ、引舟、戸川に髮の筋を立てさして居る。幾浦は禿子、花世、入江、小松を相手に歌がるた取つて居る。小菊、尾上は下の方にて向ひ合になり、駱駝の三味線を稽古して居る。この唄にて幕開く。

戸川　コレイナア、小菊さん、尾上さん、お前方の稽古は下でさしやんせいなア。

尾上　イ、エイナア、いま流行る駱駝を、ちよつと小菊さんに敎へてもらふのぢやわいなア。

戸川　とんと喧ましうて、物音が聞えぬわいなア。

小菊　そんなら尾上さん、もう三味線は止しにして

尾上　わしらも幾浦さんに寄せてもらふわいなア。

ト幾浦が側へ二人ながら來て、歌がるたを取る。

幾浦　菅家、この度は幣も取りあへず手向山。

子皆　紅葉の錦、神のまに〳〵。

小松　それ〳〵入江、わが身の側にあるわいなう。
入江　どこにいなう。こりや、唐紅ぢやわいなう。
尾上　紅葉の錦神のまに〳〵。オツとわしが取つた。
戸川　申し、二十五日の約束を、角屋から云うて參じたぞえ。
尾上　サア〳〵、幾浦さん、後の上の句を、ちやつと讀んで下さんせいなア。
小菊　こちや坊樣は否。業平さまが取りたいわいなア。
皆々　サア〳〵、どうぢやいなア〳〵。
幾浦　オヽ、忙し。夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを。
皆々　雲のいづこに月宿るらん。
雛路　コレ、小松、その文を大文字屋へ屆けてたもや。
小松　アイ〳〵。
幾浦　大江山、生野の道は遠けれど。
雛路　なんぼう文を上げても、お返事のないは大方、姫づらめが引ツ附いて居くさるのであらうわいなア。
ト云ひ〳〵狀を封じて居る。
爲篠　雛路さん、きつい癇癪ぢやなア。
雛路　爲篠さん、辛氣でならぬわいなア。
爲篠　あのお方に逢ひたいかえ。

雛路　サア、不思議の緣で、不思議に云ひ交した、あのお方。どうも片時も、よう忘れぬわいなア。
トこなしある。
戸川　新造の雛路さん、きつう凝つてぢやなア。
雛路　ナンノイナア。
ト上書を書くうち
幾浦　足引きの山鳥の尾のしだり尾の
皆々　長々し夜を一人かもねん。
幾浦　オヽ、好かん。わしや否いなア。
トかるたを抛る。
爲篠　幾浦さん、嗜なましやんせ。子供大將して、歌かるたとは。
幾浦　イヽ、エイナア、ちつと辻占があるに依つて。
小菊　追ツつけ揚屋の花車さんになるのかえ。
幾浦　何を。ませくさりめが。
雛路　ほんに幾浦さんは、追ツつけ揚屋の花車さんにならしやんす。また、爲篠さん、お前も。
爲篠　コレ、引舟の戸川すが聞いてぢや。なんにも云ふまいぞ。
戸川　わしや何もかも、よう知つて居るわいなア。

ト筋立てしまふ。
幾浦　戸川すは、大抵粋ぢやないわいなア。
戸川　お三人ともに、今日は大文字屋の約束。最前から急
ぎに參じたが、大事ないかえ。
幾浦　身じまひは疾にしまうて、何時でも揚屋入りはする
わいなア。
尾上　大文字屋と云ふと、幾浦さんの請けがよいわいなア。
幾浦　そりや、わたしばかりぢやござんせぬ。爲篠さんも
雛路さんもぢやわいなア。
雛路　ナンノイナア、わたしが思ふお方ならよけれども、
アタ好かん、アタ憎てらしい侍ひめが、口說きくさるの
が、否でならぬわいなア。
幾浦　あらざらんこの世の外の思ひ出に
皆々　今一度の逢ふ事もがな。
雛路　オヽ、嬉し。爰にあつたわいなア。
爲篠　オヽ、辛氣。わしが尋ねて居るのに。
幾浦　爲篠さん、お前昨夜、彼のお方に逢はしやんしたか
え。
爲篠　サア、聞いて下さんせ。仲の町でも見附けたらな、
アタ憎てらしい、知らぬ顏で行き過ぎくさつたを、禿の
文字野を走らして、捉まへさしたわいなア。
尾上　あの太夫さんの云ひつけで、又市さんを無理やりに
連れて戻り、逢はしたわいなア。
皆々　そりや、よう逢はしやつたなう。
雛路　爲篠さん、あの又市さんは油斷がならぬぞえ。
爲篠　なるの、ならぬのと云ふ段かいな。堅い顏して、大
抵惡性な事ぢやござんせぬ。ナア幾浦さん、お前のもぢ
やぞえ。
幾浦　そりや合點ぢやわいなア。滅多に外で惡性さすまい
と思うて居ても、拔けつ潜りつ、どうもなるこつちやな
いなア。
戸川　そりやこそ始まつた。太夫さん方の身じまひ。部屋
での色話し。
尾小　これも勤めの中の樂しみかいなア。
幾浦　ほんに、惡性な男と云ひ交して居ると、それは〱、
心に遣る瀨がないわいなア。
雛路　アヽ、いづくも同じ秋の夕暮れぢやなア。
尾上　そんなら雛路さん、何さまもかえ。
雛路　定まる妻のあるお方に、所詮叶はぬ、及ばぬ事ぢや
と思うても、女の因果、思うお方に逢ひたいばつかりに、

川竹にこの身を沈めたのぢやわいなア。
幾浦　雛路さんの相方の尚さまと云ひ
爲篠　お前のお敵の三郎兵衞さん。
雛路　爲篠さんの林又市さんと云ひ
幾浦　そりや悪性者の三大將。
爲篠　忘れて居た事があるわいな。コレ幾浦さん、お前に見せねばならぬ物がある。コレ〳〵、この守を見やしやんせ。
ト鏡臺の抽出しより守を出し、幾浦に見せる。
幾浦　その守は、なんぢやえ。
爲篠　サア、この守を又市さんが、大事にかけて持つて居やしやんすゆゑ、合點のゆかぬ事ぢやと思うて居るうち、人の見ぬ所で、ちよこ〳〵出して戴かしやんすに依つて、どう云ふ事で、この守を大事にかけさんすと、幸ひ昨夜問うたればな、ハッと思うた顏色で、イヤ、これは文字の三婦が、桔梗屋の新造花紫と、云ひ交した起請ぢやと云うたわいなア。
幾浦　エヽ〳〵、そりや、ほんまの事かいなア。
ト大きに恟りする。
爲篠　それでお前に油斷さしやんすなと、云ふ事ぢやわいなア。
幾浦　これがマア、口舌どころか、なんでも花紫に逢うて、譯を立たさにやならぬわいなア。
爲篠　さうさしやんせ、わしや鶴屋でこの間一座したが、あの桔梗屋の花紫は、まだ突き出しぢやぞえ。
幾浦　サア、なんにも知らぬ新造の癖に、アタなめくさりな。わしが深う云ひ交して居る男を、寢取ると云ふは、厚かましいと云はうか、アタ悪性なと云はうか、面妖、新造づらと云ふものはな。
雛路　こりや、幾浦さん、耳が痛いわいなア。
幾浦　ほんに雛路さん、堪忍しておくれ。お前の事ぢやないわいなア。
雛路　新造を悪しう云はしやんす、爲篠さん、いよ〳〵その守は起請かえ。
爲篠　そこに譯がござんすわいなア。又とつくりと思うて見れば、又市さんがわしに問はれて、せう事なしの間に合せに、それで三婦さまの起請ぢやと云はしやんしたやら知れぬと思うて、ソッと取つて戻つたは、お前に渡して、三婦さまを、詮議ささうと思うて。
幾浦　そりや、よう知らして下さんした。あの男づらを詮

爲篠　議して、違うたら、矢ツ張りお前の方を。
　ト守を渡す。幾浦取つて
幾浦　こりや、モウ、歌がるたどころではないわいなア。
雛路　幸ひ大文字屋の約束なれば
爲篠　何時もと違うて、早う行かうわいなア。
　ト皆々立ち上がると、上がり口より、花車妙開、坊主の姿にて出て
妙開　戸川々々、太夫さん方の身じまひはどうぢや。大文字屋の使ひが來るも七度半ぢやぞや。
幾浦　アイ、行かうと思うて、拵らへて居るわいなア。
爲篠　アイ、わしも行きやんす。
雛路　わたしも行く。
皆々　サア〳〵、着物を着替へたがよいわいなア。
妙開　行かいでは。てつぺいから、爪先まで、おれが抱への太夫どもぢや。
爲篠　幾浦さん、その守で臺詞さんせえ。
幾浦　アイ、何がなしに、男づらを捉まへてからするわいなア。
　ト妙開が胸倉取り、振り廻す。

妙開　アヽ、コリヤ〳〵、どうする〳〵。
爲篠　もし違うたら、又市さんを捉まへて、斯うするわいなア。
　ト妙開を引き廻し、胸倉取り振り廻す。
妙開　コリヤ〳〵、目が舞ふわい〳〵。
　ト皆々取押へる。
皆々　マア〳〵、ようござんすわいなア。
　ト取さへる。
雛路　この口舌は、わたしが貰うたわいなア。
爲篠　イエ〳〵、此まゝでは濟まぬわいなア〳〵。
　ト一時に妙開に武者振りつく。
皆々　マア〳〵、ようござんすわいなア。
爲幾　イヤ〳〵きかぬ〳〵。
　ト云ひ〳〵、妙開を見て
エヽ、なんのこつちやいなア。
　ト突き飛ばす。
妙開　なんの事ぢや。
　トべつたり坐る。
三人　ドレ、行かうわいなア。
　トこなしある。チョン〳〵返し。

造り物、平舞臺、見附け、長暖簾。東西中二階、すべて揚屋の模様にて、岩瀬監物、衣裳羽織、大盡の形にて怒つて居る。仲居おふぢ、おさが、禿子大勢なだめて居る。法師城住、太鼓持ち又市。皆々、監物を、マア／＼ようござりまするると留めて居る。この見得、騒ぎ唄にて道具とまる。

監物　イヤ／＼、料簡ならぬ。留めな／＼。

城住　さりとては、マア／＼お待ちなされませ。

監物　エヽ、どう盲目め、放し居らう。

ト突き退ける。

城住　どつこい。留めかゝつたら留めにや置かぬ。

ト探り廻つて、又市を捉まへる。

さが　オヽ、笑止。そりや又市さんぢやわいなア。

城住　ヤア、太皷の又市か。ホイ。

監物　濟まぬぞ／＼。グッと濟まぬぞ。

又市　これはしたり、旦那、どうでござりまする。雛路さんが遲いと云うて、其やうに怒るとは、さりとては不粹不粹。太夫さんはもう疾に、座敷へ來て、あなたを待ち兼ね山の時鳥。

城住　ホオホケキヨウ。

尾上　コレイナア、そりや鶯ぢやぞえ。

城住　サア、その鶯の雛路さんを

監物　啼かして見ようと、今朝からはずみ切つて居るのに、やう／＼今來て、寢所へ行かうと云へば、兎角摺つたのもぢつたのと、傾城に似合はぬ閨惜しみをひろぐ憎い奴。ぢやに依つて身共が。

又市　そりや御立腹は御尤もぢや。併し、さう木折りではいかぬが戀の道。例へぞつこん惚れて居る男でも、眞實誠を見ぬうちは、滅多に打解けぬが廓の意氣地。ハテ、思ふ人いやと女の罪深く

さが　アレ、又市さんは、ちよと云うてぢや事でも、口上なわいなア。

ふぢ　とんと外の太皷さんとは違うたものぢや。

城住　愚僧とはどうぢや。

皆々　粹な揚屋に粹な太皷さん。

又市　御機嫌直しに、爰でちよいだては、どうでござります。

ふぢ　こりやよからう。お銚子／＼。

子供　アイ、ヽ、ヽ。

監物　太皷の又市に、押取り廻されて物が云はれぬ。

女皆　マア〳〵、下に居やしやんせいなア。
　ト監物、不承々々に坐る。
城住　サア〳〵、面白うなつた。ヤア、なんぼういんつう澤山でも、ひが左衛門はこちや好かんわい〳〵のわいとさ。
監物　おきやアがれ。いけもせぬひゞ割れ聲、すッ込んで居れ。
城住　オッと、すッ込んで居るぞ。
さが　サア〳〵、一つ上がれいなア。
監物　エヽ、忌々しい。酒など吞んでこまさう。
　ト杯を取る。
又市　ところで酌人代り、名つけの次第。
　ト酒を注ぐ。
ふぢ　二役二役は御苦勞ぢやなア。
監物　サア、一つ注げ〳〵。
女皆　又市さんのお庇で、嬉しや御機嫌が直つたわいなア。
又市　なんでも、えら勤めのえら吞みぢや。
　ト此うち、松ケ枝市之正、衣裳羽織にて、大杯を手に持ち出かけ

市正　身共も、ちよつと合ひをせうか。
監物　これは市之正さま、失禮の段、眞平御容赦。
市正　なんの、廓の遊びに慇懃な。
又市　こいつは又、餘ッぼど醉つて居る粹大盡さまめ。
市正　松ケ枝市之正と云ふ鎌倉武士、この朱雀の新廓、島原を一見せうと思うて。
城住　今の流行りもの、この大文字屋を信仰してお出でなされたか。
市正　如何にも。今朝からの大酒。奧の間で嫌はれる太夫が側にも居られず、又この大杯のやり所がないから、思はず爰へ。ナニ、又市とやら、幸ひ持ち合した杯、其方に獻さうか。
　ト又市に獻す。
又市　さらば頂戴。鏡立とは古いやつの。
市正　ハヽヽ。監物どの、見さつしやれ、太鼓に似合はぬ又市。ハヽヽヽ。藝者に似合はぬ好い骨柄。
監物　その筈でござる。この大文字屋の亭主と云ふも、原三郎兵衛と申す浪人。又この太鼓も、林又市と申して、由緒ある浪人でござる。
市正　ムウ、この九條の廓に新廓を營み、島原と號し、開

發と云ふは、この家の亭主三郎兵衛、其方と聞いたが、さうか。

又市　左やうでござりまする。この冷泉萬里の小路へ、一つの廓を開きしは、この家の亭主と、私しが思ひつき。

監物　浪人の身で、武家の仕官を望みもせず。

市正　廓を建てしは正しく要害。

又市　エ、、。

市正　イヤサ、陽氣の集まる廓の最初は、林又市、原三郎兵衛。傾城町の古事來歴を、聞きたい／＼。

監物　こりや、よくござらう。

女皆　所望ぢや／＼。

又市　サア／＼、お望みならば、なんぢや知らぬが、出鱈目に申し上げませう。ちよつと、なんぞ樣子を。

女皆　合點ぢやわいなア。

ト　これより鼓入りのぎつてうになり、又市、咳拂ひしたり、いろ／＼こなしあつて

又市　抑々廓を開きしは、萬里の小路や冷泉の、元は武将の東山、御酒宴の地であつたれど、今は廓となり振りも、粋で固めた戀の道。

市正　出口に柳を植ゑたるは。

又市　お客を招く合ひ詞。諸事は柳にやり孖子の、正月買ふは客の派手。

監物　六條三筋の揚屋をば、爰へ移した來歴は。

又市　通ひ廓の勝手よう、朱雀の野邊を眞直ぐに、建ち續けたる揚屋町。

尾上　出口にかけた板橋を、衣紋橋と名けしは。

又市　お江戸で云はうなら衣紋坂、入り來るお客の粧ひや、衣紋繕ろふ所にて、衣紋の橋とは呼びなせり。

さが　あらば垣と云ふ事は。

又市　曉告ぐるきぬ／＼に、送つてもらふ客達の、名殘りを惜しむ道だて垣。

監物　まだ問はう／＼。揚屋の嬶を花車と云ふ、これにも謂れのある事か。

城住　そこで我れらも佐平治に、ちよつと申して見ようなら、花車の文字は花ぐるま、諸事華やかに杯の、廻りくる／＼車坂。廻りのよいのが花車の役。

さが　貸し編笠はなんの爲。

ふぢ　夜毎に忍ぶ通ひ路に、人の目關の編笠や、色に心も一文字。

藝子　松の位と云ふ事は。

又市　秦の始皇の御狩の時、雨を凌ぎし松の蔭、太夫と位を賜はりし、餘風を今に色里の、太夫を松の位とて、江口、神崎、室の津や、淺妻船の淺からぬ、契り千歳の色替へぬ。

禿　圍ひは妻乞ふ夜の鹿、鹿の戀路と夕暮れに

さが　引船さんは太夫主を、引くや堤の綱手繩。

藝子　藝子は音〆め糸に寄る。

ふぢ　戀を取持つ仲居役。

城住　太鼓は滅多に鳴り渡る、黄金の威光山吹の、花を散らすは大々盡。紙花ならば私しに。

監物　さつても、えらいあつかひは、局小格子端下女郎。

禿　禿が文の遣り取りも、まだ新造の船下ろし、紋日、日柄もそれ〲に

ふぢ　數へてやり手のつこど聲。

皆々　まだも座敷の駈引きに

市正　思ふお敵を取込んで、酒のひらじひ皆殺し。

ト又市へ手裏劍打つ。片手に掴み

又市　旦那、クワッと有り難い、露を打つとはこの事か。

監物　呑めや唄へや色酒に。

ト大杯へ酒を注ぐ。

皆々　これはけうとい大酒ぢや。

又市　そこらをグッと一息に。

ト呑み乾して

呑んだ所は喜見城。

市正　寨の繩張り。

監物　林又市。

ト寄るを引き廻し

市正　慥かに、それと。

トきつとなるを、又市、こなしあつて

又市　百千鳥、島原へ通ひ來て見よ、はしのえ。やつとさ。そつこでせい。

ト踊り三味線になり、踊るゆゑ、市之正、監物も是非なく踊る。皆々この拍子に煽てられて、女形皆々踊りながら奥へ入る。市之正、監物、後に殘ると合ひ方になる。

監物　市之正どの。

市正　馬鹿者となつて樣子を試せば、身共が推量に違はず、彼奴等は正しく尼子浪人。この朱雀野へ廓を開きしは、味方を集める寨の構へ。

監物　本陣は名草の郡、鎌倉より討手の役目を蒙りしは、

こなた樣と、粟島甲斐之助。
市正　如何にも。百姓輩と思ひの外、手強い敵、甲斐之助を出し拔き、一戰に責め落し、身共ばかりの功となさば、莫大な忠義。
監物　殊に幸ひ甲斐之助も、この廓通ひ。卽ち奧の間に熟睡の體なれば、氣遣ひはござるまい。
市正　して、監物、こなたに先達て申し入れし、粟島家へ下し賜はる御教書は。
監物　その儀は粟島の家中、八代丹下と云ふ者に、盜み取つて渡せよと、內通せしが、未だ、なんの沙汰もござりませぬ。
市正　すりや、この儀は不分明。
監物　是非、甲斐之助をしまひまするが。
市正　コレ、萬事は奧にて。
監物　市之正さま。
市正　監物、お來やれ。
ト唄になり、市之正、監物を連れ奧へ入ると、向うより、丹下、淺黃の頭巾脚絆にて、粟島の小宮を持ち、鈴を振り出て
丹下　粟島さまへ、代僧代詣り。分けて女中は櫛、笄、簪、耳搔、髢留め、前差し、兩差し、後差し、其うちに、似せ物は値打がない。本鼈甲を上げよとの、御誓願でござる。
ト云ひ〳〵出て、本舞臺へ來る。奧より藝子花世、小松、禿、市彌出て
花世　なんぢや。面白い事を云うて來たわいなア。
小松　ちやつと、聞かうわいなア。
ト三人出て來ると、丹下こなしあつて
丹下　紀州名草の郡、加田粟島さまへ代僧代詣り。えらう腹が減つて來た。菓子でも取り肴の餘りでも大事ない。早う喰ひたいとの御誓願でござる。
トこれに節を附けて云うて居る。
小松　あれ聞きや。粟島さまぢやといなう。
市彌　粟島さまなら、早う太夫さんに知らして來うか。
花世　雛路さんは、粟島さまが好きぢや。早う知らして來う。
小松　ちやつとおぢや〳〵。
ト云ひ〳〵三人ながら駈けて奧へ入る。丹下こなしあつて
丹下　どうで、ちつぺいめでは埒が明かぬ。もう男の味を

覺えて居る衒妻でなければ、なんにも上げ居らぬわい。

ト獨り言を云うて居る。内より

雛路　面妖な。偖さまは離れ座敷にぢやと聞いたが、どうして今ござんしたぞいなう。

ト云ひ〳〵出て來る。丹下、一拍子あげて

丹下　粟島さまへ代僧代詣り

ト雛路、構はずそこらを尋ね

雛路　お供廻りも見えず、どこにござんすぞいなア。

丹下　粟島さまへ代僧代詣り。

ト雛路の後から附いて廻つて、耳の端にて鈴を振り、大きな聲して云ふ。雛路、悄りして

雛路　オ、怖。誰れぢやぞいなア。

丹下　ハテ、粟島さまぢやわいなア。

雛路　そんならお前は、甲斐之助さまの。

丹下　ヤア。

ト悄り顏見合せ

雛路　どうやらお前は。

丹下　見たやうな衒妻。

雛路　オ、ソレ、矢ッ張り殿樣のお屋敷で

丹下　憎みの親の行くへを尋ねると、帷子を持つて來た在所の娘ぢやな。

雛路　その時のお侍ひ樣。

丹下　でも、美しい粹になつたなア。

ト思ひ入れあつて、小宮より二つの雛を出して

コリヤ、この雛覺えて居るか。

雛路　エ、。

ト悄り

丹下　御教書の吹替へ、暗がりでしてやつたりと思うたが、この女雛、頼まれた人に渡されもせず、せう事なしに雛から思ひついた、粟島の代僧代詣り。幸ひの所で逢うた。御教書の行き端は大方われが。

ト雛路を捉まへる

雛路　エ、、そんな事は知らぬわいなア。

ト振り切り、奥へ行かうとするを

丹下　われが體、合點がゆかぬ。

ト捉まへる。ア、コレと立廻り。此うち、三郎兵衞、着流し袴、吸ひ物膳を持ち出て、片手にて丹下を取つて投げ

三郎　太夫さん、こりやなんぢやいな。

雛路　三婦さん、よい所へ、よう出て下さんしたなア。

丹下　アイタ、、、。こりや、途方もない目に遭はしたなア。

ト腰を抱へて起き上がる。

三郎　ハア、見りや願人の粟島。

雛路　甲斐之助さまは、離れ座敷にかえ。

三郎　なんぢや知らぬが、倚さんはえら怒りの、えら癇癪ぢやぞえ。

雛路　三婦さん、そりや、どうしていなア。

ト三郎兵衛をこちらへ連れて來る。吸ひ物をこちらへ置き、雛路と一緒に下に行て

三郎　コレ、太夫さん、お前、どうでも揚の大盡に請けがよいさうな。

雛路　ナンノイナア、アタ好かん。わたしやあの客の、側に居る事も否ぢやわいなア。

三郎　イヤ〳〵、合點がゆかぬ。お前、あの大盡と二人、どうして圍ひに居てぢやあつた。

雛路　そりや、なんなと云うて座敷を外さうと思うて、圍ひへ入つたりや、附いて來たのぢやわいなア。

三郎　どうでも、その様子を倚さんが見附けたのぢやわいな。

雛路　そんならお前、どうぞ證據人になつて、倚さんにナ。

三郎　イエ〳〵、わしらは、そんな事は知らぬぢや。

雛路　どうぞ頼むわいなア。

ト此うち、丹下、ソツと吸ひ物を吸ひ、骨まで喰うてしまひ

丹下　久し振りで、鮟鱇とは、よかつたわい。

ト三郎兵衛、心附き

三郎　ほんに、中の間へ出す吸ひ物を。

ト丹下を見る。丹下、腕を差出し

丹下　コリヤ、どうぞ替へられまいかの。

三郎　エヽ、何を吐かすぞい。アタ穢ない、むさい態をひろいで、八分棒に振らしやがつた。

丹下　あらでもだんない。ま一杯吸ひたいが。

三郎　一體おのれはマア。

ト捉まへようとする。雛路とめて

雛路　あんな者に、相手にならしやんすないなア。

三郎　太夫さん、お前近附きか。

雛路　イヽエ。

トこなし。

丹下　イヤ、近附きの段ぢやない、その衒妻は。

雛路　コレ、何も云はしやんすな。
丹下　ハテ、大事ない。云ふ事を云はにや譯が知れぬわい。
ト花道、戸屋内にて、エイ／＼オウと、太鼓鉦打ち込む。
三人　ヤア、あれは。
ト三人、惘りすると、向うより、軍兵藤太、藤六、陣羽織、小手臑當、凛々しき形にて、雑兵に鎗櫃を擔はせ、走り出て
二人　若殿様のお迎ひ。
三郎　ヤア、お前方は。
藤太　粟島家の軍兵。
丹下　エ、、。
ト惘りして、ちやつと後へ寄る。
皆々　早く御出陣と、仰せ上げられ下さりませう。
雛路　エ、、そんなら殿様の迎ひかいなア。
三郎　ハテ、仰山な。惘りしたわいの。
ト内より、甲斐之助。
甲斐　亭主々々。三郎兵衛はどこに居るぞいやい。
ト衣裳羽織にて、酒に醉ひたるこなしにて出る。
三郎　イヤ、これに居りまする。

雛路　申し殿様、逢ひたうござんしたわいなア。
ト甲斐之助に取りつくを
甲斐　イヤ、御繁昌なお傾城、措いてもらひませう。
トぴんとする。
藤六　イヤ／＼、若殿甲斐之助さま、大切な出陣の門出。爰より甲冑を改め、打立たうとの御諚ゆゑ
藤太　殘る軍勢は東寺に控へさせ、我れ／＼ばかりお迎ひの爲
皆々　參上仕りましてござりまする。
甲斐　イヤ／＼、今夜は矢ッ張り廓に泊つて、出陣は明日にせう／＼。
藤太　アイヤ、それでは。
三郎　ア、申し、只今はあのやうに、いから醉つてござる事。ちつと見合したがようござりませう。
二人　イヤ、延引はなり申さぬ。
三郎　ハテ、さう云はずと、マア供部屋へ行て、寢轉んでなと、ござりませ。併し
ト皆々を見廻し
こりや大勢。オ、、餘ッぼど理窟が。
ト頭掻く。雛路、こなしあつて

雛路　申し殿樣、何を其やうに怒つて居やしやんすぞいなア。

甲斐　どこに怒つて居る。ハヽヽヽ。此やうに笑うて居るわい。

雛路　イエ／＼、それが矢ッ張り腹立てゝ居やんすのぢやわいなア。

甲斐　なんぞ腹立てさす覺えがあるか。

雛路　エヽ。

二人　御出陣を若殿。

甲斐　ハテ、忙しない奴ぢや。

三郎　今は口舌の席開きぢや。マア、默つてござりませ。

二人　これは困つたものぢや。

甲斐　コリヤ、亭主、三郎兵衞々々々々。

三郎　ハイ／＼。

甲斐　この甲斐之助は、明日軍に立つさかいで、今宵は爰で樂しむ程に、誰れぞ、可愛らしい、美しい、氣のよい太夫を、ちやつと呼びにやれ／＼。しつぽりと抱いて寢にやならぬわい。

ト雛路の方へこなしある。雛路、何も云はずに泣いて居る。

三郎　申し／＼、雛路さん、コレ、どうぢやぞいな／＼。

雛路　サア、わしやなんにも覺えはないけれど、殿さんがあないに。

三郎　エヽ、齒がゆい。そこを突ッ込んでお前が……エヽコレ、新造さんと云ふものは。

ト頭を搔く。甲斐之助、雛路が顏を見て

甲斐　よう泣く新造さんぢやなア。それで流行るのであらう。奧の大盡が引きつけて置くのであらう。尤もぢや。コレ、泣くまい。

雛路　エヽ、知らぬわいなア。

甲斐　もう堪忍してやらうぞ。

雛路　エヽ。

三郎　アレ、ちやつと笑ひ顏が出た。

甲斐　亭主、見てくれ。常住この通りぢや。

ト雛路を引き寄せる。

三郎　イヤ、可愛らしい仕打ちでござりまする。

甲斐　あんまり何にも云はぬ石佛ぢや。その筈でもあろ。根が田舍に育つた御息女ぢやさかい。

雛路　又そんな事を。

トふツつり抓める。

甲斐　アイタ、、、、。
雛路　岩姫さまのやうにはござんすまい。
甲斐　今の返り討か。こりや油斷はならぬわい。
皆々　イヤ、我れ〳〵が抑へて居りまする。
ト皆々仰山に云うて立ち上がる。
三郎　こりや、仰山な口舌の御加勢。
甲斐　面白うたると、あへくさる程にの。構はずと抑へて居い。
藤六　イヤ、早う御出陣を。
甲斐　ハテ、出陣は明日ぢやと云ふに。
藤太　お大切なお役目。あれでは。
丹下　イヤ〳〵、暫らく〳〵。何れも様、先づ〳〵お待ち下さりませう。
ト この時、丹下、寺岡平右衛門のやうに皆々を留め、おづ〳〵と出て、甲斐之助の御へ行き
若殿様、お久しうござりまする。
甲斐　其方は。
雛路　ソレ、お前の御家來ぢやわいなア。
丹下　お見忘れ下さりましたか。八代丹下めでござりまする。

三郎　コレ〳〵、備さまは、ちつとお取込みの事があつて手の隙がない。マア〳〵、通つてもらはう。
丹下　サア、そこをあなたが執成しで
三郎　ハテ、おれぢやと云うて。
丹下　コレ、粹ではないか。
三郎　サア、粹は粹ぢやけれど。
丹下　身共にどうぞ。
三郎　その薄い形をして。
丹下　出陣のお供。
三郎　もし流れ矢でも來たら
丹下　質屋かなんぞのやうに、
三郎　命をしまふか。
丹下　おやと云うて、食へぬが悲しい。
三郎　それこそ青海苔貰うた禮に
丹下　太々神樂が舞ひ込んだ。
ト鈴を振りて立ち上がり踊る。此うち甲斐之助、雛路奥へ入る。三郎兵衛もこなしあつて
三郎　コレ〳〵、どうでも貴様は、少しのぼせてあるの。
丹下　ひだるい虫が取のぼして……亂れ心や狂ふらん。
三郎　とんと、氣狂ひに違ひなしぢや。

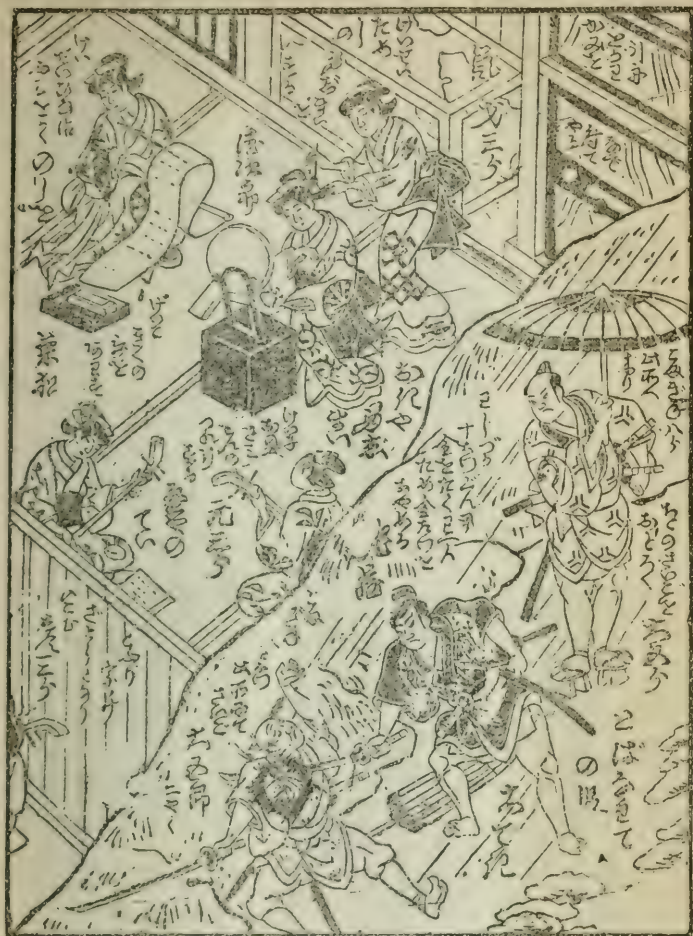
丹下　ヤア、若殿様は。
三郎　疾に太夫さんと一緒に、今頃は契つてござる最中ぢや。
丹下　なんの事ぢや。
皆々　我れも〳〵、今一應若殿に。
三郎　ハテ、戀を知らぬ軍兵衆。もちつとの所ぢや。粹を利かして。
皆々　イヤ、それでは。
三郎　ドレ、お手水の湯を持つて行かうか。
ト唄になり、三郎兵衛、ツイと奥へ入る。後に丹下殘る。軍兵殘らず橋がゝりに直る。
丹下　阿房らしい。折角張り込んで、所作事まで、見しらしたは、以前のよしみ、どうぞ若殿の太鼓になとならうと思うたに、ならぬ太鼓の渡し方ぢやなア。
藤太　藤六、こりや、なんと致したものでござらう。
藤六　藤太どの、若殿の今の様子では、明日の出陣も心元なう存じまする。
丹下　併し、あの衒妻めを捉へて。
トこなし。
二人　若殿を今一應お諫め申して。

四郎　イヤ、出陣さするには及ぶまい。
ト軍兵の内より同じ、張り陣笠を着て前へ出て笠を脱る。四郎義久の役、丹下見て
丹下　ヤア、こなた様は。
四郎　先達て味方に替りし、八代丹下。
丹下　義久公、そのお姿は。
四郎　事を計るが一つの手段。
丹下　すりや、この栗島の軍勢は。
四郎　殘らず身共が廻し者。
藤六　大將義久公へ一味の
皆々　我れ〳〵。
ト四郎、爰にて、半切を脱ぎ、立派なる衣裳になる。藤太、大小を渡す。四郎、取つて差し
四郎　秦の始皇が六國を呑まん爲、連衡の謀り事。この義久も以前は、兵部が悴、伊達五郎、いま名草の城に立籠り、名ある勇士は尼子の由縁、駒木根鷲塚なんどが、心を計つて、我が力、殊に合點のゆかぬは、甲斐之助、名草の討手に出陣もせず、廓のほたえ。その本心も見屆けん爲、斯くの通り。
丹下　すりや、義久公には。

四郎　コリヤ。
ト丹下に囁く。
丹下　心得ました。
四郎　早く。
丹下　ハッ。
ト丹下、奥へ走り入る。
皆々　でも、大將の。
四郎　氣遣ひない。もし事あらば兼ねての合圖。矢張り栗島の軍勢と思はせ、ナ、合點か。
皆々　畏まりました。
四郎　行け。
ト藤六、叢太、軍勢皆々向うへ走り入る。四郎、こなしあつて、奥へ行かうとする。鳴り物入り亂れの合ひ方、奥より、爲篠、三味線持ち出て、四郎を留める。入り違ひになる。構はず行かうとする。
爲篠　待たしやんせ。
四郎　そちや傾城ぢやな。
爲篠　アイ、爲篠と云ふ傾城。あの傾城の文字は、城傾むくると讀むといなア。
四郎　ムウ。この島原に揚屋を營み、入込む客の器量を見て、一味に招く、駒木根が計らひ。また鷲塚は太鼓となつて、共に心を盡す軍用の手段。その外尼子、由緒の者も
爲篠　或ひは傾城、引船遣り手に姿を替へて、この島原に勤むるも、皆それ／＼の大望。
四郎　中國阿賀沼の浪人、鷲塚十右衛門が女房。
爲篠　エ、なんと。
四郎　漁師は浪の音にて、魚鱗の有無を知る。我れ大義の大將、名草へ心を運ぶ諸士の由緒を知らいでならうか。
爲篠　流石は尼子義久公。
四郎　して、それ／＼の計略は。
爲篠　コレこの三味線。
四郎　ヤア。
爲篠　要害かるき花輪關、武士の誓ひをたがやさん、元は二上り三下り。
四郎　名草の城を本調子に
爲篠　三筋の糸は智仁勇。
四郎　てんじは大將、四郎が軍配。
爲篠　武具兵糧を京藏に
四郎　駒木根乘り出す時節來らば

爲篠　本手傳授の嬉ひなく、撥音高く手を盡し
四郎　味方を引立て、敵を惑はす騒ぎ唄。
爲篠　その唄開きに。
四郎　大望成就。
爲篠　今宵のお客は。
四郎　鎌倉と京。
爲篠　皆相方の。
四郎　心を探る淺へ譯……イデ、義久が聽かうわい。
ト唄になり、四郎、こなしあつて奥へ入る。爲篠、後に殘り、思ひ入れあつて
爲篠　夫を始め、尼子一味の人々、心を碎くも、皆大望の。
ムウ。
ト思案する。と〽行く末は誰が肌ふれぬ、と隱れん坊の唄になる。奥より、又市、羽織脱ぎかけ、醉うたる體、千鳥足にてヒヨロ／＼出て來て
又市　そこに居るのは誰れぢや……何者ぢや。
爲篠　ヤア、又市さん。お前に逢ひたかつたわいなア。
又市　ムウ。さては我が戀の爲か。
爲篠　お前は、いから酒を過して居やしやんすな。
又市　仰せの通り奥座敷で、双六のかけ物で、見事に打負けて、そこで、めれん／＼。
爲篠　コレイナア、大事の身の上に。
又市　死なざ止むまい憂き勤め。
ト唄ひながら
ア、誰れが其やうに御しんもじな御意見。我が身には爲篠太夫。
爲篠　コレイナア、じやら／＼と、そんな所ぢやござんせぬ。いま奥へな。
又市　奥へかりましよ、二階へちよつと。夜前の殘りの話しを申さう。マア、待ち給へ。
トひよろ／＼、手水鉢の側へ行き嗽ひする。爲篠、しかじかあつて介抱する。此うち又市、手水鉢の中に空の景色映る。ヂッと見て
ハテ、奇なる空の景色。
ト靜がなる面白き合ひ方。
大星しびきうを侵すは。
ト北の一つ星を見る心にて
北辰は南面にして動かず、衆星は北面してたんだくす。
殊に白氣、東に棚引くは。
爲篠　なんぞ氣遣ひな事ではござんせぬかえ。

初演の

繪番附

又市　本城名草の城に變あるか……但し、我が身の上に思
　はぬ災ひ。
僞條　エヽ。
又市　ムウ。ハテナア。
　トこなしある所へ、奥より、仲居おふぢ、おさが、子
　供皆々出て
さが　僞條さん〳〵、爰に居やしやんすかいなア。
ふぢ　奥の大盡さまが呼んでぢやわいなア。
皆々　サア〳〵、ござんせいなア。
僞條　イヽエ、わたしや爰で、又市さんにちよつと。
　ト又市、ちやつと醉うたる體、こなしあつて
又市　アヽ、太夫さん、そりや不埒々々。マア、勤める所
　は勤めてお出でなされ。
僞條　それでも今の樣子を。
又市　ハテ、戀は逢はれぬ所に樂しみがあるぢや。
ふぢ　さうでござんす。わたしらが間を見合せて
さが　又市さんに逢はすわいなア。
僞條　それでもどうも。
皆々　マア、ござんせいなア。
　ト皆々、僞條を無理に奥へ連れ入る。又市なんなと、
しか〳〵云うてこなし、空を眺めて
又市　アレ、白氣は徐々棚引き、また黑雲群がり、殺伐た
　る空の氣色は、これ、さのみ動ずる事にもあらず。
　ト思ひ入れある。と中二階バタ〳〵にて、監物甲斐之
　助と雛路を引ッ立てる。
監物　不義者め、動きやがるな。
甲斐　コレ〳〵、粗相云ふまい。不義の覺えはないぞ。
監物　覺えないとは太い奴め。これなる雛路は身共が揚げ
　詰め。すりや、身共が妻女も同然ぢやに依つて。
　ト甲斐之助を散々に打擲する。雛路とめて
雛路　コレイナア、殿さんに過まりはござんせぬ。皆わた
　しから。
監物　吐かすな。その執成しが胸が惡いわい。甲斐之助、
　うぬも大名の身で、傾城の盗み食ひ。それでも武士と云
　はるゝか。太い奴の。
　トまた打擲する。雛路、それはと支へる。又市、監
　物を引き廻す。
甲斐　ヤア、其方は。
雛路　又市さん。
監物　太鼓の又市。不義者の甲斐之助を打擲するを、そ

ちや、なんで庇ふのぢや。
又市　イヤ、庇ひは致しませぬ。兎角事なら座敷を丸うするのが太鼓の役。
監物　ムウ。すりや、其方が。
又市　貸し借りは廓の慣ひ。
監物　なんと。
又市　間夫の出合ひは勤めの樂しみ。それを捉へて、不義ぢやの間男のとは、ちと仰山過ぎます。わたしが爲には十方旦那、監物さま、御料簡がなり憎けりや、お客の代りに、この太鼓の又市が、御存分になりませうかな。
監物　イヤサ、その儀は。
又市　斯う云ふ事に切刃廻し、お腹を立てられますと、愚痴ぢやの野暮ぢやのと、笑ひますぞえ。
監物　ハテ、よく鳴る太鼓ぢやな。
又市　マア、甲斐之助さま、あなたはお歸りなされませぬか。
甲斐　又市、身共に歸れとは。
又市　承りますれば、名草とやら蕪とやらへ、討手の出陣とやら云ふ、御用を抱へてござるお身で、如何に深いと云うて、この雛路さんと……申し、最前もちよつと見ますれば、藤の森の祭りを見たやうなお方が、大勢迎ひに見えたぢやござりませぬか。
甲斐　又市、よう云うてたもるが、おりやモウ軍は止めぢや。出陣はとんと否ぢや。
又市　エヽ。
甲斐　ハテ、軍場の鎧兜より、太夫が喜ぶ鎧形、兜形の緒を締め、寢所の組討ちに、組んず轉んずの術を盡して、兩馬が間の轉び寢に、思ふお敵をちよんの間の、鎗先より戀の遣繰り。とりどり廓の遊びが面白いぢや。
雛路　イ、エイナア、軍にやりましては、わたしとても氣遣ひなれども、もしござらずば、あの武將樣とやらの御機嫌が惡からうし、大切な栗島のお家が。
甲斐　ハテ、立たうが立つまいが、そんな事に頓着しては、コリヤ、粹になられぬわいやい。
又市　ムウ、すりやアノ、眞實出陣は。
甲斐　氣もない事〳〵。
　ト奥より
市正　イヤ、出陣いたさいでは、鎌倉へ申し譯が立つまい。
　ト云ひ〳〵出る。甲斐之助、市之正を見て
甲斐　ヤア、松ケ枝市之正どの。

市正　甲斐之助どの、この度、名草の城に立籠る尼子浪人。先達て、岩倉どのゝ最期も、彼奴等が業、今度討手は貴殿と拙者。その相役の其許は、廓遊びの放埒。出陣の延引は、某へもかゝる災難。今にもあれ、鎌倉より催促の使者立たば、返答はなんとでござる。

トこなしある所へ、奥より、三郎兵衛、双六盤を持つて出て

三郎　サア〱、申し、松大盡さま、奥での勝負。どちらへなりと片附けませう。

甲斐　なんぢや双六か。こりやよからう。身共も。打たうこれへ持て〱。

三郎　左やうならば、倘さま。

ト甲斐之助が側へ持つて行く。

監物　イヤ、双六より大切な出陣の返答。

雛路　申し殿さん、アレあのやうに。

甲斐　ハテ、大事ないわいやい。

三郎　申し殿様、勝負は賭がけでござりますぞえ。

甲斐　負けた者が呑むのか。よし〱。

ト兩人、石を並べにかゝる、所へ、幾浦、奥より煙草盆、煙管、提げ出て、なんにも云はず、双六の石を煙管にて掻き廻す。

三甲　ヤア、こりやどうぢや。

雛路　幾浦さん、お前は。

幾浦　雛路さん、倘さん、堪忍して下さんせ。わしやこの三郎兵衛さんに用があるわいなア。

ト三郎兵衛が手を取り、ズッと下に連れて行き、無理やりに下に置く。

三郎　エヽ、阿房らしい。皆見てござるわい。

幾浦　大事ござんせぬわいなア。

又市　ハテ、さては、燒餅ぢやな。

幾浦　アイ、悪性の成敗します。

トびんと云ふ。

監物　市之正さま、こりや、どうでござる。

市正　ハテ、斯うなつた所が座敷の興。

又市　お顔が揃うた。わつさりと。

市正　馬鹿になつたり。

甲斐　ぎしやばつたり。

ト市之正に指差しする。

監物　いろ〱に綾ござるのか。

又市　臨機。

ト幾浦を見て

三郎　應變。

幾浦　お前を、マア。

鎌路　幾浦さん、今のかえ。

幾浦　さうぢやわいなア。

又市　酒にせうわいなア。

市正　こりやよからう。

甲斐　こりや、話せるわい。

ト皆々こなし。これより、戀慕のやうな合ひ方になり、監物、甲斐之助へかゝらうとするを、鎌路、ちよつと、甲斐之助を圍ひ、入れ替り、幾浦、三郎兵衛が胸倉を取るを、又市引き分けて入れ替る。市之正、又市へ氣味合ひある。また甲斐之助、又市を圍うて入れ替る。三郎兵衛を幾浦引き廻して、下に置くと、市之正、又市にキツとなる。又市こなしあつて

又市　コレ〳〵、お銚子〳〵。

ト手を叩く。

仲居　アイ〳〵。

トおふぢ、おさが、銚子杯持ち出る。

甲斐　サア〳〵、打寛ろいで、酒ぢや〳〵。

ト杯を取上げ

先づ我れから。

鎌路　申し、殿さん、それではお前。

甲斐　情ない。また喰ひ留めするかいやい。

市正　イヤ〳〵、甲斐之助、その杯では酒は吞めまい。

甲斐　吞める〳〵。

ト酒を半分程吞む所を、鎌路取つて後を吞む。監物ムッとする。鎌路こなしある。

甲斐　イヤ、その杯は市之正どのへ。

市正　イヤ、拙者が望むは鷲塚駒木根。

三又　エヽ。

市正　イヤサ、鐵砲の上手。

三郎　すりや。

トきつとなるを、又市、引き廻して

又市　イヤ、鉈とはよろしうござりませうわい。

監物　如何にも彼奴等は。

市正　さげ針も外さぬ。

幾浦　大抵色事は、上手ぢやないわいなア。

市正　亭主が手のもの、種ケ島。

又市　イヤ、その杯は、吞み憎うござりまする。

三郎　お望みならば、グッと呑みまする。
幾浦　色と酒とは、きつい好物。
雛路　種ケ島とは、杯の事かえ。
甲斐　ハテ、派手な揚屋の種ケ島。
ト　この前より、丹下出かけ、窺うて居る。監物と顔見合せ、目配せする。
丹下　甲斐之助、其方を。
ト　かゝるを
雛路　コレ、御家來のこなたが。
丹下　イヤサ、これは。
甲斐　身共をなんとする。
丹下　大切な出陣に。
甲斐　出さうで出ぬと云ふのか。
ト　見事に下の方へ取つて投げる。また起き上がつて
丹下　そんなら、この。
ト　又市にかゝるを見事に蹴倒す。又われと三郎兵衛にかゝる。
三郎　此奴、人さへ見ると、びろ／＼と。
ト　上の方へ取つて投げる。また起き上がつて、甲斐之助にかゝるを、又市「エイ」と手裏劍打つ。丹下かへる。

監物　ヤア、又市、うぬは。
又市　最前松大盡に預かつた、その小柄を、ハテ、珍事ちうやう。
監物　この丹下を。
甲斐　身共が家來、苦しうない。
市正　ヤア。
監物　現在の家來を殺されても
市正　苦しうないとは。
甲斐　なんと、粹であらうがの。
市正　ムウ。イヤ、天晴れな馬鹿ぢや。
ト　元の所へ直る。
監物　ハヽヽヽ、越王は呉王が爲に、辱かしめを受け、韓信は市人の股を潜り、恥を忍びて英勇を現はす。身を放埒に持ち崩すは、敵を計る手段の一つ。
甲斐　そんなら拙者が。
市正　色をも香をも知る人ぞ知る。松ケ枝市之正、承知。
幾浦　ようお前、桔梗屋の花紫に。
三郎　エヽ、見つともない、措き居れ。
監物　甲斐之助、して名草城の出陣は。

甲斐　コレ、この盤面の中に。
ト双六盤を前へ出す。
監物　ムウ。その双六盤の中にとは。
市正　天竺にては破羅塞戲、唐土にては牌頭と云ふ。鉾取つて敵地に向ふ形。
甲斐　一地より六地まで、向ひ合すは敵味方、黒き石に忍術あるも、白き石の城を以て
雛路　五地、六てんを占めて、虜とするのかえ。
幾浦　イ、エ、それも相手の手段に依つてな。
三郎　朱四朱三の乞目を以て、滅多に五地は作らせぬ。
市正　重六つ重目にて、飛び出る石を立切る打ち方。
又市　石を割つて道にし、捨石拵らへ、飽くまでも虜となつて、一地より六地まで、埋めさせ〳〵、悩ますばかりサ。
甲斐　また謀り事を以て、五地六地引割つて、算を亂して切り違へ、入り亂れては長蛇の陣。
三郎　切つて〳〵切り立て、死石殘らず我が領地へ積み重ね、石の手違へ、悪目の出る、その暇に、五陣六陣を遠巻きすれば、滅多に出られぬ。
甲斐　イヤ、切れう〳〵と、石を配る妙手を打つてや。

雛路　互ひに乞目を爭うても。
監物　上手は〳〵。
市正　のぼれば下り端の時節があらう。
監物　白い黒いの分ちも附かずに。
市正　心をゆるめて、また一献。
甲斐　相役の出合ひを致さう。
監物　ちよと手元を。
ト甲斐之助におてづくを
又市　又お助け申しませう。
雛路　纏れた杯。
市正　底意の知れぬ、又市、亭主。
三郎　奥へお供。
ト立たうとする。
幾浦　コレ、用があるわいなア。
甲斐　ヨウ〳〵、色事師め。
三郎　エ、、これは。
ト顔を隠す。唄になると、甲斐之助、監物、雛路、おふぢ、おさが、皆々奥へ入る。後に幾浦、又市、三郎兵衛殘り
幾浦　三婦さん。

三郎　又市。
又市　今の松ケ枝、粟島。
三郎　討手とあれば。
幾浦　コレ。
　ト兩手にて、又市、三郎兵衛が胸倉を取る。
三郎　エヽ、しつこい。引裂かれめ。
又市　コレ、其やうに。
幾浦　イヤ、腹立てにやならぬわいなア。
三郎　なんの事ぢや。
又市　とんと、譯が知れぬ。
幾浦　又市さん、お前も一つ穴の狐ぢやぞえ。
又市　そりやマア何事ぢや。
三郎　搗てゝ加へて悋氣どころか。
幾浦　サア、大事を抱へ……なぜ惡性さしやんす。
三郎　なにを。
幾浦　コレ、お前は桔梗屋の新造花紫に、起請を貰はしやんせうがな。
三郎　馬鹿な事を吐かすまい。
幾浦　馬鹿ぢやござんせぬ。コレこの起請。
　ト守を出す。

又市　ヤア、それは、
　ト恟りする。
幾浦　なんと又市さん、お前も覺えがあらうがの。
又市　ムウ。
三郎　その守を起請とは、なんの事ぢや。
幾浦　云はしやんすな。あの又市さんに預けて置かしやんした、花紫が起請、昨夜爲篠さんが、又市さんの持つて居やしやんすを、ソツと持つて戻つて、今日わしに渡さしやんした、この起請。なんと、これでも惡性ではござんせぬかえ。
三郎　ドレ。
　ト取つて守を開き見て
　ムウ。すりや、これを又市が。
又市　ちつと譯のある守ぢや。それを此方へ。
三郎　イヤ、又市、すりや、いよ〱この守を其方が。
幾浦　そりやこそ、惡性者の仲間割れぢや。
　ト三郎兵衛、脇差を取つて來て
三郎　鷲塚十右衛門、親の敵、覺悟せい。
　ト切つてかゝる。又市突き廻し、立廻つて
又市　イヤ、早まるまい、待て。

三郎　イヤ、卑怯な奴の。
ト無二無三に切つてかゝり。又市、捩り抜ける。幾浦
とめて、
幾浦　コレ、待つて下さんせ。
三郎　ユヽ、面倒な。
ト突き退ける所へ、奥より、爲篠出て
爲篠　ヤア、この爭ひは。
幾浦　爲篠さん、ちやつと留めて下さんせ。
三郎　ヤア、退け〳〵。
ト兩人を引き退け、又市にかゝる。又市、有り合ふ双
六盤にて受け留め
又市　駒木根早まるな。合點のゆかぬ。いま我が本名を明
かし、親の敵とは。
三郎　證據はこの守。正しく。
ト切りかゝるを、又市、引ツ外して、双六盤にて抜き
身を押へる。
親の敵、遁がれはあるまい。
爲篠　そんなら、又市さんが持つて居やしやんした
幾浦　その起請と云ふは。
三郎　敵討の證據。

爲幾　エヽ、なんと。
三郎　身共が親、駒木根金左衛門、江州坂本一戰の砌り、
お味方申せし甲斐もなく、國は沒落。それより親子互ひ
に引別れ、所々方々とさまよひしが、時至つてこの度の
企て。何卒父にも尋ね逢はんものと、心を碎く折も折、
昨夜鳥羽畷を通り合せし所に、盜賊と覺しき者、また旅
人の死骸。よく〳〵見れば親人金左衛門どの。ハヽア、
南無三方、何者の仕業なるぞ、エヽ口惜しや、無念やと
腸を斷つの思ひ。然るに今、幾浦が起請と云うて渡した
コレこの守の內の書付けは、卽ち駒木根流の大筒の秘書。
これを所持する十右衛門、爭はれぬ親の敵。
又市　ムウ。さては昨夜、鳥羽畷に於て出合ひし旅人は、
八郎の御親父、駒木根金左衛門どのとな。
三郎　如何にも。
又市　それとは知らず鳥羽畷にて、盜賊どもが、金左衛門
どのを取り廻し、路銀を渡せと爭ふ所へ、思はず參り、
樣子を聞けば、二百兩。此方も軍用金、武士の情に借用
せんと、盜賊どもを切り拂ひ、右の樣子を金左衛門どの
に、折入つて頼む其うちに、盜賊どもは切つてかゝる。
老人の悲しさは、思はぬ深手に時の災難。敵は我れとの

一言に、是非なう武士の義を思ひ、軍用金のその爲に、所詮助からぬ金左衛門どの、盜賊もろとも切り殺し、二百兩の金諸とも、奪ひ取りし、その守は、後日の證據と持ち歸りしは、本望達したその上で、天晴れ敵を討たるゝ所存。

三郎　その所存なら、立合つて勝負せい。

又市　イヤ、勝負はせぬ。其方が存分に。

ト首差伸べる。

三郎　ヤ、なんと。

又市　この災ひは最前の天文にて、とくと察したこの鷲塚。名草の城も危ふい時節。其方、我れを討ち負せ、義を金鐵に義久公へ、武勇を盡せ。

三郎　イ、ヤ、手向ひせぬは死人も同然。例へ討つとも討たるゝとも。

又市　武士の本意。サア討て。

三郎　イヤ、一旦の怒りは父への教養。この駒木根を討ち放せ。

又市　なんと。

三郎　名草の城の軍師と、呼ばれる其方ならずや。なぜ身共を返り討にして、忠義は盡さぬ。

又市　イヤ、敵を討つは孝の道、非道遁がれぬ、この鷲塚。

三郎　コリヤ、身共は返り討に討たれても、軍師の其方生き殘らば、名草の城は堅固の籠城。

又市　その忠孝を思へばこそ。

三郎　サア、鷲塚。

又市　サア、駒木根。

兩人　なぜ討たぬ。

トこなしある。幾浦、爲篠、こなしあつて、兩人引き分けて眞中へ入る。

幾爲　イ、ヤ、お二人、それでは忠孝が立つまい。

三又　なんと。

幾浦　サイナア。お前の親御も由緣の浪人、お主の仇を晴らさうと、思ふ心の一筋は、父御もお前も鷲塚さんも、思ひ思うて同じ事。

爲篠　幾浦さんの云うての通り、味方の欲しい最中に、どちらが討つても討たれても、名草の城の弱味となり、却つて敵に勢ひを附ける道理。

幾浦　及ばぬ智惠のわたしらも、殿御々々が大切さ。

爲篠　何事も心一つに料簡して

幾浦　この場の勝負を

爲篠　どうぞ延ばして
幾爲　下さんせいなア。
　ト兩人、兩方より取り縋り泣く。兩人、こなしあつて
又三　ムウ、誠に。
三郎　鷲塚。
又市　駒木根。
三郎　鹿追ふ獵師。
又市　負うた子の譬へ。
三郎　名草の一戰。
又市　かゝる時節に
三郎　敵討は私し事。
又市　ぢやと云うて、放き放したその眞劍。
三郎　ムウ。さうぢや。
　ト丹下が持つて來た、小宮の雛を二つに切り割る
又市　それは。
三郎　敵討は濟んだ。
又市　ウム。光る源氏の若菜の巻に、紫の上、あまがつを
　作り給ふ。
三郎　そのあまがつとは、今云ふ這子雛形の、これにおほ
　せて禍ひを除く。

又市　須磨のみそぎと、雛遊びにあるものゝ儀。紙の人形
　雛と名け、その身にあたる惡しき所を、雛におほせて禍
　ひをよくるを、所の遊びと聞く。すりやその雛を切り放
　して。
三郎　親の敵、鷲塚、覺えたか。
幾爲　エ、忝ない。
　トどんちやん、遠責めになる。
三郎　ヤア、あれは。
又市　市之正が計らひ。義久公の御身の上。
三郎　すりや。
爲幾　エ、。
又三　來い。
　ト又市、三郎兵衞、幾浦、爲篠を連れ、奥へツイと入
　る。奥より、監物、雛路を引ッ立て出る。
雛路　こりや、なんとさしやんすぞいなア。
監物　なんともせぬ。その御敎書、此方へ渡せ。
雛路　イエ〳〵、この御敎書を持つて居ればこそ、殿さん
　のお里通ひ。わたしが爲には、大事の〳〵戀の囮。渡す
　事はならぬわいなア。
監物　エ、、面倒な。

ト無理に御教書を取りにかゝる。よろしく立廻りある所へ、奥より甲斐之助、ツカ〳〵出て、監物を突き廻し、當て、御教書取る。

雛路　ヤア、殿さん。

甲斐　この程の廓通ひも、この御教書を取り得ん爲。心に思はぬ惰弱の振舞ひ。

雛路　そんなら。

甲斐　コリヤ。何も云はずに、雛路、來い。

ト雛路が手を引き、向うへ走り入る。始終遠責め。監物、心附いて

監物　南無三、うぬを。

ト追ひかける所へ市之正出て

市正　監物、待ちやれ。

監物　市之正どの、御教書と云ひ、甲斐之助を、あの儘で歸しては。

市正　苦しうない。甲斐之助を出し抜き、城攻めの一番乘り、此方へして取らば、遲いか早いか彼奴が一命。

監物　尤も。して、城内の手筈はなんと。

市正　岩瀬主税、お來やれ。

主税　ハア。

ト奥より、城住實は主税出て來る。

監物　すりや、座頭の城住と云うたも。

市正　如何にも。尼子浪人、爰へ廓を建てしは、心得ずと思ふより、新參のあの者の、得體見知らぬを幸ひ、態を替へて入込ませたは、手段を聞き取る身どもが計略。

主税　斯く姿をやつせば、誠の法師と彼れらが油斷。猶も樣子を窺ふところ、名草の要害、最早兵粮に盡き果て、牛馬の肉を喰はんばかり。必死の體。暫時も早く御出馬あつて、然るべう存じまする。

監物　この上は名草の砦へ忍びを入れ、攻め口を窺ふ手段。

市正　イヤ、その手段廻り遠い。砦の內を窺ふは、某兼ねての工風。名草の出張に築山を築かせ、一つの蒸籠を拵らへ、この中へ間者を入れ置き、兵船の帆柱を以て、彼の山に突き立て、蒸籠を吊り上げなば、要害を窺ふ究竟一。コレこの如く認め置きし蒸籠の繪圖。主税、其方はこれを持つて、名草の陣屋へ立越え、遠見の用意。必らずぬかるな。

ト繪圖を渡す。主税取つて

主税　ハッ。拙者直さま名草の陣屋へ。

市正　早く行きやれ。

主税　心得ました。

ト繪圖を持ち、走り入る。

監物　天晴れ妙計、して拙者は。

市正　コレ。

ト囁く。

監物　合點ぢや。

ト奥へ走り入る。九ッの鐘鳴る。橋がゝりより乘り物一挺吊らせ、股立ちの侍ひ、附いて出て來る。

侍ひ　市之正さま、お迎ひ。

市正　最早子の刻。火急の出陣。

ト乘り物に乘る。

乘り物急げ。

皆々　ハア、。

ト乘り物舁いて向うへ入る。矢張り遠責め掠めてある。奥より、三郎兵衛、又市、ツカ／＼出て向うを見てある。橋がゝりより、主税、凛々しき形にて引ッ返す。

又市見て

又市　森宗意軒。

主税　ハア。軍師の指圖に依つて、市之正が味方と見せ、砦を窺ふ釣り蒸籠、即ち繪圖。

又市　お働らき。出來ました。この計略の裏を掻くは、即ち、駒木根どのゝ御手練。

三郎　如何にも。

ト種ケ島を取つて來て

下げ針も打ち抜く身共が手練。彼の蒸籠より窺ふ所を、狙ひすまして、たつた一打ち。

又市　時刻を移さず、名草の郡へ。

主税　身も道を替へて。

三郎　然らば鷲塚。

又市　早くござれ。

三郎　合點ぢや。

ト三郎兵衛、種ケ島を持ち、向うへ入る。主税は橋がかりへ入る。後に又市、殘り居る所へ、監物出て來て

監物　者ども參れ。

軍兵　ハア、。

ト軍兵、バラ／＼と出て、又市を取卷く。

監物　尼子浪人鷲塚十右衛門、搦め捕つて手柄にする。腕廻せ。

又市　この上は包むに及ばぬ。身共が本名。ならば手柄に捕つて見居らう。

監物　者ども。ソリヤ。

ト皆々又市にかゝる。遠責め早める。又市、烈しき立廻りにて、軍兵、皆逃げる。監物、立廻りあつて、トド監物、橋がゝりへ逃げる。又市、追ツ駈け入る。チヨン〳〵返し。

造り物、奥深に廓出口の體。四郎義久、正面に抜き身を構へ居る。軍兵六人、左右より鑓襖にて取巻き居る。始終遠責め。この見得にて、向うへ出て

軍兵　尼子四郎、やらぬ。

四郎　小癪な蠅虫らめ。一々死人の山だぞ。

軍兵　捕つた。

ト見事なる鑓タテになり、軍兵皆々橋がゝりへ逃げる。四郎、追ひかけうとする。臆病口より、鷲塚十右衛門出て。

十右　待つた、義久公。

ト四郎、振り返り

四郎　其方は鷲塚。

ト軍兵二人、左右より窺ひ出て

軍兵　謀叛人、やらぬ。

トかゝる。四郎、十右衛門左右にて立廻りあつて

十右　これより直ぐに名草の砦へ。

四郎　寄手を引受け、花々しく。

十右　身共が軍配。

四郎　曠れの合戦。

軍兵　うぬ。

トかゝるを立廻り。双方一時にポンと切る。

四郎　鷲塚、來やれ。

十右　ハツ。

ト一時に刀の血を拭ふ。この見得よろしく、　チヨン〳〵幕

幕の内、始終遠責めにて、幕の外へ花道の眞中に蒸籠をセリ上げる。よき時分に鐵砲の音にて蒸籠より血煙り立つ。チヨン〳〵にて蒸籠、元の穴へ納まる。

これにて幕明ける。

造り物、陣屋の體、亂杭逆茂木に提灯数多立てある。眞中に、松ケ枝市之正、陣羽織、小手臑當、床几にかゝる。上の方に、東條左衛門、田畑左近。下の方

には岩瀬監物、久留島丈助、この人數皆々陣羽織の裝束にて、床几にかゝる。後に半切れの軍兵大勢扣へ居る。始終遠責めにて

丈助　都よりの御上使には、御苦勞千萬に存じまする。

左衛　この度尼子の一族、立籠りし名草の城、百姓土民の集まり勢と思ひの外の大敵。

左近　さるに依つて、松ヶ枝市之正さま、粟島甲斐之助さま、御兩所ともに討手のお役目。斯く申すは田畑左近。

左衛　この東條左衛門、東山どのゝ命に依つて、軍のお見舞ひとして

兩人　わざ／＼到着仕つてござりまする。

市の　これは御兩所ともに御苦勞に存じまする。この度の大敵、歷々の討手が向はれ、夜討ち朝がけ遠責めなどにいろ／＼に踠かつしやれても、いつかな落ちぬ、砦の構へ。併し、お氣遣ひなさるな。斯く某が出馬いたすからは、物の見事に攻め落して、お目にかけう。明日とも云はず今日のたつた今、勝鬨あげるを御兩所とも、見物さつしやれ。

左衛　イカサマ、其許の軍配ならば、一たまりもござるまい。

左近　相役甲斐之助どのは、都島原の廓より、皆暮れ行くへ知れず。察するところ、この度の討手の役、軍をするが恐ろしいゆゑ、逃げ廻る臆病神。あゝ云ふうつけ者に知行をくれて、大名で候ふなどゝは、第一東山どのが、馬鹿らしう存ずる。

卜此うち、市之正、始終向うを見て居て

市正　もう立歸りさうなものぢや。

卜待ち兼ねるこなし。

左衛　これは市之正さま、何かお待ち兼ねの體と見えまするか。

丈助　イヤ、その儀は斯うでござる、市之正さまの智略にて、砦の内を窺ひ見る蒸籠の御工風。その役目を受けし遠見の者を、お待ち兼ねなさるゝのでござる。

左近　イカサマ、蒸籠の儀も承つてござる。殊の外大仰な物さうにござる。

市正　某が軍略に秀でたる事は、只今遠見が歸り次第、各々方のお聞きに達しませう。これはもう歸りさうなものぢやがな。一兩人參つて、遠見の樣子を窺うて參れ。

卜軍兵二三人、ハッと云うて、向うへ走り入る。

監物　砦の樣子が相解り次第、直さま責め口の用意。市之

正さま、サア、御用意なされませう。

市正　なんの〳〵、目指す敵は高が知れた浪人百姓。この身此まゝ、鶏で寐鳥を刺すやうにして見せう。ちと口廣い申しやうぢやが、この度の合戰は、拙者が目からは悉皆、小兒を弄るやうに存ずる。ハヽヽヽ。

ト　この時、向うより右の軍兵、蒸籠を舁き出る。

丈助　市之正さま、遠見が立歸つてござりまする。

市正　歸つたか〳〵。

ト　蒸籠を眞中に舁き据ゑる。

左衛　これか噂の釣蒸籠でござるかな。

市正　左やうでござる。各々方にも後學の爲ぢや。よくよくお聞きなされや。すべて合戰と申すものは、臨機應變に軍慮を計る、爰らが餘人の及ばざる所でござる。御覽の通り、この釣蒸籠を以て、砦の構へ、内の樣子、只今お聞きに達しまする。ソレ、軍内をこれへ呼び出さつしやれ。

監丈　心得ました。

ト　監物、丈助、立ちかゝり、蒸籠を明ける。内に、軍兵一人、蘇枋だらけにて死んで居る。

市正　軍内、遠見の役目大儀々々。して、砦の樣子、とくと窺うたか。どうぢや〳〵。

監物　軍内、砦の樣子は、なんと〳〵。

丈助　各々方へ、詳しう申し上げたがよい。軍内。

市正　軍勢の多少、兵糧の分限、早く聞きたい。軍内。これはしたり軍内。物云はぬか。軍内々々。

監物　軍内、何を致して居る。市之正さまの目通りぢや。氣を慥かに持て、軍内。

丈助　さりとては軍内。早くこれへ。

ト　蒸籠より死骸を引出し見て、恟り。

ヤア、こりやコレ軍内めは、くたばつて居りまする。

監物　ドレ〳〵。

ト　立寄り見て

誠に朱に染んで、こりやくたばつて居る。

市正　ハテサテ、何を粗相な。軍内が相果てゝ堪るものか。コリヤ軍内。

ト　云ひつゝ立寄り見て恟り。

誠に、こりや、くたばつて居る。ホイ。

監丈　なんの事ぢや。

ト　市之正、向うを見て、呆れたこなし。左衛門、左近、死骸の側へ立寄り疵口を、とくと見て

左近　誠に手だれの手練。なか／＼世の常の者の仕業ではござるまい。

左衛　察するところ、種ケ島の名人、駒木根八郎、釣蒸籠より面を差出し、砦を窺ふ所を、狙ひすまして、眉間目がけ、斯くの仕合せと見えまする。

ト市之正、呆れし體にて

市正　イカサマ、駒木根は、いかい鐵砲の上手であつたなア。

ト向うより、名草玄龍、半切れ脱ぎかけ、組子大勢連れて出て來て

玄龍　者ども、ソリヤ。

軍兵　動くな。

ト丈助も一緒になつて、皆々を取巻く。

玄龍　軍師鷲塚の謀計。身は尼子の一族、名草玄龍と云ふ者。

丈助　この陣へ入込みしは、某も尼子の腹臣、鹿子木左京と云ふ者。

丈玄　遁がれはあるまい。覺悟せい。

三人　さてこそなア。

市正　釣蒸籠をしくじつた鬱憤。うぬらなりとも當座の腹癒せ。觀念ひろげ。

ト入り亂れのタテになり、皆々立廻りにて、どつこいと見得よくとまる。チョン／＼にて道具返し。

造り物、一面に嶮岨なる谷の景色。眞中に藁葺きの綺麗なる一つ家。上の方に見事なる櫻の立ち木。橋がゝりの方に谷の流れあり、小柴垣の下に山吹の盛り。毛利岩姫、賤の女の形にて、上の方なる櫻の枝に苅柴を踏まへ、短册を附けて居る見得。傾城雛路、同じく賤の女の姿にて、下の方にて、苅柴をからげて居る見得。甲斐之助、賤の男にて、右屋體の側にて、火ぜゝりして煙草のみ居る。各々右の見得にて道具とまると、一時に上の方へ出語り太夫座を突き出す。道行きかゝり、三味線にて、一時に道具とまる。

〽鳥もなく、鐘も聞えぬ里もがな、二人ぬる夜の曉と、菅家の御詠、今爰に、なまめく花の谷蔭や、世を柴苅の假り住居、いつを春とか定めなき、身は陽炎のうつゝなく、水の泡かや粟島の、甲斐も名草の露の蝶、翼を交す妹と脊の、割りなき緣なか／＼に、語る櫻の一枝も、夜

寒を凌ぐしの〻雨、濡れてや鹿の夜となく、晝とも分かぬ常の闇、せめては君の顏だにも、あゝ儘ならぬ身の憂さを、問ひつ問はれつ女氣の、しどけなり振り、かいしよげに、袖や袂の花吹雪、谷の深雪の解けしなく、暫し疲れや春景色。

ト此の文句のうち、岩姬、櫻に短册つけ、また外の枝を折り、甲斐之助の側へ持つて行て、閼爐裏に燻べ、烟草を吸ひつけ、甲斐之助にやる。甲斐之助、取つてのまうとする。纈路、柴を束ねながら目をやる。甲斐之助、ちやつと烟管を下に置き、それより三人銘々に柴を片附ける。文句のとまるまで、この模樣よろしくあるべし。

甲斐　サア〳〵、ちつと休まう。二人ながら、休みや〳〵。

岩姬　アイ〳〵、纈路さんも、ちつと休んだがよいわいなア。

纈路　アイ〳〵、柴も大方束ねてしまうたわいなア。シタガ、お前は誰れあらう、云ひ號けの岩姬さん、しつけもなされぬ事を、お手が痛むであらうなア。

岩姬　ナンノイナア、賤しい山賤の手業でも、殿御と一緒に暮らすが樂しみ。申し、殿樣。ではない、こちの人の尙作どの、今書かんした短册を、アレ、あの枝に附けたが、あれでよいかえ。

甲斐　よい〳〵、けうとい枝振りぢや。時に、二人ながら爰へ來て一服しや。なんと、世間の苦を離れて、人は愚か、鹿猿も通はぬ、斯う云ふ山の谷底に、三人一緒に暮らした所は、どうも斯うも云へんではないか。

纈路　さうでござんす。シタガ、マア、爰はなんと云ふ所でござんすえ。

岩姬　ほんに、斯う暮らしては居るもの〻、爰はマア、どこぢやぞいなア。

甲斐　ハテ、爰は今來山の谷底。この絕頂は名草の城と云うて、いま軍の最中。ところで、その軍場を、こそ〳〵と拔けて、二人を連れ立ち、この谷底のさゝ世帶。侍ひ止めて賤のすぎはひ、斯うした所が喜見城の樂しみ。見晴らした野山の景色。また氣が替つてよいぞ〳〵。

岩姬　ほんに、晴れやかな山路の風景。

甲斐　この紀の國の名所々々も多きうち、アレ

ト指さしする。文句にかゝる。

〽あれ〳〵あれを見や、あの岩木の結び松、落葉の塵も濁りなく、和歌の浦曲の夕霞、群れつゝ遊ぶ白鳥の、關

は人日の中垣や、雲井遥かに眺むれば、過ぎにし夜半の待乳山、ほんに野中の清水さへ、結ばぬ縁の結ぼふれ、流れに澱む川竹の、誓紙に洩れぬ肌と肌、逢うて別るゝ思ひより、添ふに添はれぬ憂さ辛さ、苦は色ゆゑに、さまさまの、辛い、せごしのありたけも、わしや覺悟して浮名にも、また身にも替へ、命に替へた、可愛い殿御にする辛抱、口惜しがりそなものかいなア、馴染むにつけて、いとしさが、ます穂の薄穂に出づる、千草結びに、主の名を、書いて合うたる縁定め、いや、それはそもじの我まゝな、戀には義理のないものか、今さら云ふも恥かしながら、夫婦の契り片糸の、餘所に洩らさぬ下紐を、解き初めてから今までに、外の殿御の肌知らず、初めて登る戀の山、梢にわたる鶯の、初音の床もいつしかに、寐亂れ髪のはら／＼と、千草に露の玉くしげ、鬢のおくれを撫でつけて、笑顔うつらふ姿見は、所體も流石武士方に、二人ともない御器量で、立派でしやんと、きつとした、女子の馴じむも無理ぢやない、あやかり者と敬まはれ、逢ふ嬉しさに別れの辛さ、暮れ待つ宵は筆のさや、焚いて寐る夜の蚊やり火に、思ひの闇のさゝめごと、濡れてや鹿の獨りなく、二人からみし褄結び、ひぞり／＼つ恨みわび、ねたみの角もいつしかに、折かる柴の一擔げ、花も紅葉も、紅葉も餘所に、割りなき仲の共稼ぎ。

甲斐　サア／＼、二人ながら、何も其やうにせり合ふ事はない。わが身達をせり合はさぬやうに、何時の夜さぢやと云うて、まんべに廻るではないか。コレ氣遣ひしやんな。地黄や玉子の精力で、わが身達に不自由な目はさゝぬ。逢はぬ證據は、コレ、いま案じたこの歌。わしが心は、コレ、この通りぢや。これを讀んで見や。

ト鼻紙に歌を書いたを見せる。兩人、立ちより見て

岩姫　梅さくら、締めて摘みし柴の庵。

雛路　住めば都の春やますらん。

甲斐　なんと、どちらをどうとも、勝り劣らぬ梅と櫻。彼の唐土の桃園に義を結ぶ、これは谷間の櫻が下で、縁を結ぶ。右と左の月と花。

岩姫　さうでござんす。雛路さま。

雛路　岩姫さま。

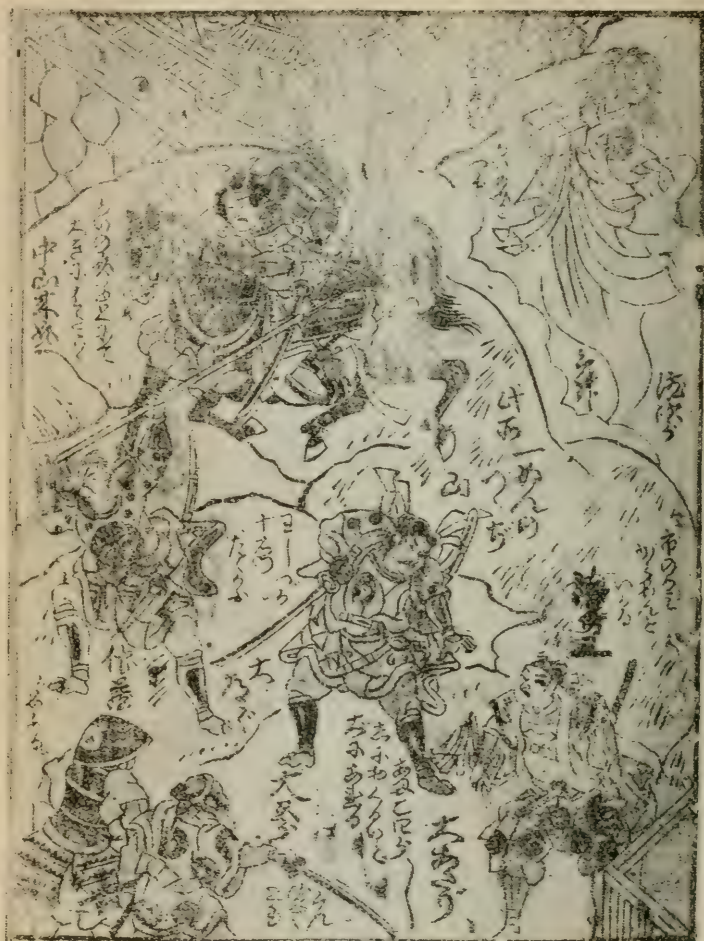
岩姫　この上ともに、二人して

二人　いとしほがらうわいなア。

甲斐　サア／＼、いつもの通りに二人とも。合點か。

ト大小入りの囃子になり、これより三人、手踊り。さ

初演の

繪番附

でなど持つて鮎くみのこなし、いろ〳〵あつて、よろしくとまる。鳴り物止める。と天上にて、靜かなる遠責めになる。三人、こなしあつて

甲斐　あの遠責めは。

岩姫　また山の上で、軍とやらが起つたかいなア。

雛路　こりや、マア、どうしたらよからうぞいなア。

ト兩人頷く。甲斐之助、こなしあつて

甲斐　ハテ、怖い事もなんにもない。軍場とは遙かに隔てある谷底の一つ家。敵も味方も爰へ來る氣遣ひはない。落ちついて居や〳〵。

兩人　それもさうかいなア。

甲斐　サア、一緒やつた〳〵。

トこれより踊りにかゝる。矢張り天上にて遠責め掠めて打つて居る。と唄になる。

〽おんらが住居はな、谷底のぞんぶり〳〵谷水の岩を枕にござれ轉び寐、汲むや清水を、運んでまつかせ、まつかせ、おんらが住居はな、奥山に咲いたか〳〵、櫻木の根を枕にござれ轉び寐、柴の焚木を運んで〳〵まつかせまつかせ。

〽風かあらぬか、遙かの岸より武者一騎、ころ〳〵轉んで落ち來る谷間。

ト大バタ〳〵にて、天上より宇津村鯛右衛門、人形仕立て、雜兵の拵らへ。仕掛けにて、三人の中へ落ちる。皆々恟りして

甲斐　ヤア、こりやなんぢや。

ト鯛右衛門、腰骨を抱へながら、皆々を見て

鯛右　なんぢやとは。

トのりの三味線をかつて

遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。この度名草の砦のうち、一騎當千鬼神と云はれたる、宇津村鯛右衛門とは我が事なり。スワよき敵と見るよりも、組み伏せんと思ひの外、取つて拋られて、絶頂より、落ち所は……ヤア、わりや討手に向うた、甲斐之助ぢやないか。うぬを。

ト甲斐之助にかゝるを、引き廻して、二人を圍ふ。鯛右衛門一いつそーと拔いて切りかゝると、ドロ〳〵にて、鯛右衛門、氣絶する。

三人　これは。

ト大ドロ〳〵にて櫻の木の枝へ、乳母、小夜路、白髪の老女の幽靈にて、羽衣の袖を持ち顯はれ出ると、寐

鳥になる。甲斐之助、二人を庇ひ、見て

甲斐　ヤア、其方は乳母の小夜路。

小夜　紀の路なる名草の城の櫻花、散りて谷間の雪と見るらん。

甲斐　サア、その歌を解かん爲、この山添ひの谷間に、今日まで暮らせしが、今に於て。

小夜　サア、その寶を尋ね出し、養ひ君を世に立てんと、思ふ心の一筋に、浮みもやらぬ魂魄の、一念通ぜし業通にて、コレ和子、天の羽衣は手に入りました。

ト寶の箱を差出す。

甲斐　すりや、幽靈の業通にて。

ト云ひ／＼箱を取つて見て

こりや、紛れなき天の羽衣。これを以て取り立つる毛利の家國。これと云ふも乳母が情。

岩姫　わたしが爲には神樣とも。

継路　殿樣の守り神とも。

甲斐　譬へ難ない情の程。エヽ、忝ない。

小夜　嬉しや今こそ成佛得脱。南無阿彌陀佛。

三人　南無阿彌陀佛。

ト　どろ／＼にて小夜路消える。寢鳥止む。

甲斐　この上は急いで出陣。二人とも、おぢや。

ト兩人を連れ、行かうとする。鯛右衛門起きて

鯛右　さうはさゝぬ。

〽こりやさせぬはと飛かゝる、心得あしらふ甲斐之助、二人の女も諸ともに、花の袴やてう／＼、打てば開き、開けば打つ、しや面倒なと無二無三、かゝるをくるりと車投げ、また起き上がつて、打ちかゝるを、隔てる神道、ひら／＼、ひらめく稲妻、電光石火、空定めなき谷の戸を、慕ひ出づるぞ。

ト三重になる。甲斐之助、二人を連れ、鯛右衛門を鞠蹴るやうにして、鯛右衛門、花道をクル／＼返りながら、この見得にて、四人とも向うへ入る。チヨン／＼返し。

見附けの門板、櫻の枝、ともに段々セリ上げる。一面に砦、外廓の體。右の門板、舞臺へつく時分、くるりと返る。と見事なる躑躅山になると、ドンチヤン早めると、西の方より、田畑左近、名草玄龍、東より東條左衛門、鹿子木左京、四人切り結び出る。

左近　尼子の一族、名草玄龍。

左衛　鹿子木左京。
兩人　覺悟ひろげ。
左玄　もう死物狂ひぢや。
　ト兩方にて、タテ、いろ／＼あつて、トヾ追ひこむと
　監物、鯛右衛門、切り結び出る。
鯛右　守津村鯛右衛門が死暴れぢや。
監物　よい覺悟。監物が首取つてくれう。
鯛右　猪子才な。
　ト立廻り、いろ／＼あつて、橋がゝりへ追ひ込むと、
　向うより、甲斐之助、鎧、馬上にて、切り首提げ出る。
　左近、左衛門、橋がゝりより出る。甲斐之助、花道よ
　き所にて、馬をとめる。
兩人　甲斐之助さま。
甲斐　勝利の手初め、麓に於て、駒木根八郎と一騎打ち勝
　負を遂げ、首取つて斯くの通り。
　ト切り首を差出す。
左衛　この上は大將義久。
左近　軍師鷲塚。
甲斐　一番乘りの手柄はこの時。侍ひ、續け。
兩人　ハツ。

　ト甲斐之助、馬に鞭打つて、橋がゝりへ駈けて入る。
　左近、左衛門、附いて走り入る。返し。
　右の外郭、觀音開きにて、左右に引き分ける。向う
　陣屋體。四郎、十右衛門、大童にて、甲斐之助、市
　之正、四人立廻りの見得。監物、左近、左衛門附き
　添ひ居る。皆々向うへ出て
皆々　叛逆人、動くな。
　ト取卷く、爰にて、十右衛門、四郎、腹切る。市之正
　甲斐之助、二人して、十右衛門、四郎の首をポンと切る。
　めでたく／＼打出し。　　幕

けいせい飛馬始（終り）

おくさまの
太郎冠者

おろかやいハアおん前に念なう早かつた禿の水あげ息子部屋の寄合ひに蒙古の通路菊地家の御隱居様は有馬の湯治芝居事の遊興に久しぶりにて逢瀬嬉しき井手の下紐めぐりめぐりて今九州に名高き山賊そのお頭は

曉東風右衛門

まかり出でたる色好み
こゝろつくしに
傳授の狂言

入間詞大名賢儀

番組
六番

けいせいの
次郎冠者

頼うだ人のおゆるしに戀に上下の隔ての唐紙身じまひ部屋の忍び逢ひに關所へ通ひ路大友家の若殿様は在番歸國軍術風儀に船となり帆となる風の芭蕉の發句さとり〳〵てこれは四國に鳴響く海賊の張本

玄海灘右衛門

入間詞大名賢儀

五瓶は三世澤村宗十郎に從つて江戸へ下つたが、寛政三年には又ぞろ宗十郎に伴はれ、錦を飾つて歸坂した。これはその時のお目見得狂言で、同四年正月十五日から、大坂中の芝居に上場されたものである。篇中、大友市之正歸國云々は、宗十郎の歸坂を當込んだのである。市之正の行列の場は、紀州侯のそれを眞似たもので、何事も革新を以てのぞむ五瓶は、大英斷を以てその馬に、生きた馬を使用した。大した評判になつたが、三日目にその馬が花道で放尿したので場内喧騷に陷り、再び不恰好な芝居の馬に代つてしまつた。事は失敗に終つたが、五瓶の意氣は、これだけを以つても覗はれる。

篇中、大友家の場一幕を缺いて居るのは甚だ殘念であるが、百方搜索しても完本を得られなかつたので、其まゝにして置いた。御諒恕を願つて置く。

役割は左の通りであつた。

菊池田島之助、大友宗太郎（中山來助）御臺讓早御前。かつぎの小萬（花桐豐松）久留島主税、廣島曾平次（中山染藏）粂古の田南、秋月土岐五郎（中山文五郎）帶刀女房渚、灘右衛門女房お浪（姉川菊八）宮地佐五郎、鵰の兵六（藤川半三郎）奴条平（嵐吉三郎）柳川隼人、柳川帶刀、唐犬四郎藏（中山他藏）三宅銀兵衛（山村菊次郎）天の龍藏、秋月主膳（今村七三郎）竹野十平太（嵐駒藏）仲居おすま（嵐瀨之助）白糸姫（花桐富杉）野町筑後、玄海灘右衛門（山村儀右衛門）大友市之正、毛利元就（澤村宗十郎）傾城青柳（市川太次郎）傾城名山（藤川友吉）日向のとゆら（澤村國太郎）曉東風右衛門（嵐雛助）

入間詞大名賢儀

口明

菊地館の場

役名──菊地田島之助。御臺、諫早御前。白糸姫。野町筑後。柳川隼人。宮地佐五郎。竹野十平太。三宅銀兵衞。茶道官齋。手下、闇の三藏。久留島主税。櫻井小金吾。奴、条平。蒙古の田南。帶刀妻、渚。傾城、靑柳。同、名山。同、花町。仲居、おすま。大友宗太郎。桃の井主膳 實ハ 曉東風右衞門。

觸れの口上仕舞ふと、兩棧敷の水引、城の體になる。幕明けると、內に緞子の幕引いてある。向うより、股立ちの侍ひ二人、今晩より夜芝居と云ふ字を書きし、立提灯を二行に持ち、その後より、下袴の近習の形、下に羽織にて、太鼓を打出し、花道にて、初日の打込みよろしく、本舞臺へ來ると、幕の內より、三藏、下袴にて、手燭を持ち、出て來て

三藏　遲い〳〵。もう觸れの太鼓が歸んさかい、狂言も始めず待つて居るが、コリヤ、どうしたものぢや。

近習　どうと云うて、この廣い屋敷から、町家の裏まで觸れて廻る初日太鼓。シタガ、今夜はマア初日の事なり、狂言は新物なり、ちつと遲い事もあらうぢやないかい。

三藏　サア、それはさうぢやけれど、立者衆が、殘らず衣裳をかけて待つてござる。マア〳〵、何がなしに打込んだ〳〵。

近習　合點ぢや〳〵。

ト近習の二、太鼓を打つて、橋がゝりへ入る。

三藏　サア〳〵、太鼓が戻りましたぞえ。

ト幕の內へ入る。

內にて、チョン〳〵拍子木を打ち、幕の內にて、いよいよ新狂言、口明けの始まり、左樣に御覽下さりませうと云ふと、外の茶坊主、さら〳〵と幕明ける。

造り物、舞臺、端六間、一面のところ、作り舞臺、

見付け三間の二重舞臺、茶屋の暖簾を掛け、兩方塗り骨障子屋體、燭臺、數多の火を灯しある。上の舞臺、先づ桶伏せの體。板の所には、切籠燈籠を數多吊り、門口には注連繩、門松、盆と正月一時の體にて、銀兵衛、十平太、着流しに伊達なる脱ぎかけにて、頭に置手拭を卷き、銀兵衛は杵を持ち、十平太は臼取りにて、餅を搗く體。白糸姫、茶屋の娘の形、花町、振り袖の傾城の形。二人、羽子板を持ち、羽子を突く體にて居る。踊りの太鼓、三味線にて、右の幕明ける。三藏は後見の心にて、拍子木を持ち、あちこちして居る。

銀兵 サア／＼、ちつと休まう／＼。

十平 臼取りも肩がつかへて、堪るものではない。

銀兵 今夜の趣向は、盆と正月を一時にせうと云ふ、お大盡樣の思付き。そこで餅を搗くやら、片端では羽根を突くやら、手鞠を突くやら、揚屋の座敷は盆と正月で、燃え返すと云ふものぢや。

十平 そこであの通りの仕組み、踊りの太鼓三味線。併し、餅搗きの拍子は、ちり／＼の間がないに依つて、拍子を間違へて、とんと餅が搗けぬ。

銀兵 女中方はそれも構はず、ヨウ／＼、羽根を突いて居る。

十平 この尻付きがどうも云へぬ。

ト白糸姫が腰を叩く。

白糸 また惡い事をするのかいなア。

花町 お前方が喧ましいので、羽根が突けぬわいなア。

ト始終鳴り物掠めてあるべし。

銀十 一突き突いて參らう。

ト白糸姫と花町を捉まへる。兩人とも振り切り、アレエアレエと逃げ廻る。花道の角まで行て、向うを見て

白糸 アレ／＼、居續けの大盡樣が、皆連立つて見えるわいなア。

花町 太夫さんもござんすわいなア。

十銀 ほんに打揃うて、見えるワ／＼。

ト揩り鉦入りの博多踊りの唄になり、向うより、傾城名山、裲襠衣裳。傾城青柳、同じく裲襠にて、二人とも花笠の長柄をさしかけさせ、花笠の禿二人、銘々に付き添ひ、佐五郎、衣裳羽織、田舍大盡の拵らへ。仲居おすま、大杯を持ち、めれんの體にて、禿の肩にかゝり、外に仲居松野、太鼓持ち軍領、茶辨當付き添

初演の繪番附表紙

ひ、各々並よく出る。

銀兵　これは〳〵、皆樣、待ち兼ねて居りまする。

白糸　名山さん、青柳さん。

花町　今日は野がけで、さぞ冴えましたで

兩人　ござんせうなア。

名山　冴えたやら冴えぬやら、マア、大概の事ぢやわいなア。

青柳　花見野がけも、矢ッ張り勤めのうちぢやと思へば、これも苦のうちぢやわいなア。

佐五　何かは知らず、天人達の受けが惡いので、とんと今日は冴えなんだと云ふものぢや。

すま　サア、その冴えぬ所を、斯う呑みかけた所と云ふものは、天上の榮華、喜見城の樂しみも、これには及ばぬぢやわいなア。

松野　おすまどの、足元が危ないわいなア。

佐五　仲居めが酒を喰ふと、悉皆客の方から太皷持ちで、遊ばしてやるやうなものぢや。

すま　わたしを遊ばしてやるとは、先づ以て恐悦至極に存じ奉りましてござります。

軍領　時に今宵は、盆と正月を引ッくるめた遊びの趣向。座敷へ行てわつさり御酒にせうではござりませぬか。

松野　こりや、よからうわいなア。太夫にも行かしやんせいなア。

名山　揚げられた不肖ぢや。ちつとの間、付合うてやらうわいなア。

青柳　お慈悲ぢやと思うて、行てやらんせいなア。

佐五　ハテ、きつい恩に着せやうぢやな。

皆々　サア〳〵、行かしやんせいなア。

トこの間、右の鳴り物にて、皆々舞臺へ來て、並よく並ぶ。

軍領　サア〳〵、酒にせうぞえ〳〵。

子供　アイ〳〵〳〵。

ト銚子杯を持つて出る。

佐五　なんと太夫、西國の侍ひ、たくさん澤右衛門ともあらう者が、君を思へばこそ、この博多の廓に數日の逗留。手を替へ品を替へ、金銀の山を積んでも、摺つたの揉んだのと帶紐解かぬは、そりやわれ、餘り曲がないと云ふものぢや。

名山　夜毎に替る手枕も、手管口舌で間に合せ、入り來る殿達の機嫌を取るが、勤めする身の慣ひ。苦界の不承ぢ

やと思ふけれど、どうした惡緣やら、きつうお前は好かんわいなア。

青柳　名山さん、殿樣に逢はしやんしたかえ。

名山　わたしゆゑに桶伏せの殿さん、今宵はまだ逢はぬわいなア。

青柳　通ふ緣の戀仲が、嵩じ〳〵て揚錢溜り、紙子一重に桶伏せの身の上は、昔からの廓の法。親方さんに堰き堰かれ、逢はれぬ仲の忍び逢ひ。可愛らしい仲ぢやと思へば、羨やましうてならぬわいなァ。

すま　青柳さんの云うての通り、とても苦界をせうなら、名山さんのやうに、樂しみあつてこそぢやわいなア。

白糸　裸人形や芥子人形を買うてもらうた殿さん、あのやうな身にならしやんしたと思へば、悲しうてならぬわいなア。

松野　こりや、おみよさんの述懷が、いつち、尤もぢやわいなア。

すま　所で、持ち合せた杯を、澤大盡さんへ、さしまの事觸れとは、どうであらうぞいなア。

軍領　ても、惡い口合ひだな。

佐五　太夫、身共へ返答せぬは、桶伏せの無頼漢へ、心中とやら、意氣地とやらぢやな。

名山　知れた事ぢやわいなア。

銀兵　小判の澤山なお大盡を嫌うて、素寒貧に身を打つと云ふは、どうした緣ぢやぞいの。

すま　どうしても桶伏せの中から、澁團扇で招ぐと見える。

佐五　太夫、抱いて寢る。來い。

ト手を取るを、振り放し

名山　オヽしつこ。嫌ぢやと云ふのに。

ト佐五郎、ムッとして、柄に手をかける。青柳、押し隔て、よろしく留め

青柳　オヽ笑止。また刃物三昧かいなア。

佐五　情の強い賣女め、眞ッ二つに打ち放して退ける。其所退け。

青柳　サア、留めて惡くば留めはせまいが、申し澤さん、お前も廓に居續けをして、粹の中にまぶれて居てのやうにもない、苟めにも切るの突くのと、なんぼう切刃廻しても焦らさんしても、戀の道ばつかりは、お侍ひさんの權威ではゆかぬぞえ。此やうな人の、側へは寄せぬものぢやわいなア。

ト肩を叩いて云ふ。佐五郎、ぐんにやりとなつて

佐五　ハテ、なんの彼のはない。名山が深間は桶伏せのならず客。彼奴を引出して、直々の貰ひ引きせうかい。
十平　さうぢや。引出せ〳〵。
ト行くをおすま、兩人を留め
すま　イヤ、さうはなるまいわいなア。
佐五　ならぬとは、なんでならぬ。
すま　サレバイナア、桶伏せは廓の大法。お前方の自由にさせては、廓の法式が立たぬわいなア。
佐五　立たうが立つまいが、引出して切刃するわい。
ト行くを、青柳、留めて
青柳　イヽエ、桶伏せの殿様より外に、名山さんには、キッとした間夫があるわいなア。
銀十　間夫があるとは。
名山　アイ、青柳さんの云うての通り、殿さんは昔の事。今では外に、深間の男があるわいなア。
すま　名山に付き纏ふは、一人ならず二人まで。
青柳　わたしらが證據ぢやわいなア。
佐五　面白い。その間夫に逢はう。
名山　サ、それはなア。
佐五　それはとは、所詮この場へ面出しは、えゝせまい。

それよりは、この桶伏せを。
トまた行くを、青柳、佐五郎を眞中に引廻す。名山、佐五郎が羽織を持つて留める。銀兵衛、十平太、行くを、おすま留める。この模様立廻つて、キッと見得になると、兩方より
兩人　待つた。名山が間夫の男、それへ行て逢はうわい。
ト渡り拍子になると、西の通ひ道より、博多の金兵衛男達の形、異風なる頭巾を着て、東の通ひ道より、小倉の金兵衛、これも頭巾着て、双方より出る。
佐五　ムウ、名山太夫が間夫と云ふは、わいらが事ぢやな。
博金　この博多へ入込む客の向きは、何奴ぢやと云うて面を見知らぬはないが、この客めは、いかいうんつくではあるわい。
小金　惣體、廓へ來る客の癖が悪うなつて、見知らねばよい事のやうにしをる。それは兎も角も、其所なお人、こなさんは名山太夫が深間ぢやと云うて、出やんしたが、いよいよさうか。
博金　少分ながら、名山が間夫でえすわい。
小金　して、こなさんの名は。
博金　定めて聞き及んでも居られう。名山が為には鯨に

鯱、腰に引添うて歩く、博多の金兵衛と云ふ男でごんす。

小金　聞き及んだ博多の金兵衛どの。

博金　して、こなさんは。

小金　噂にも聞かんせう。名山が爲には、鯨に鯱、腰に引添うて歩く、小倉の金兵衛と云ふ者。

博金　こなさんが、小倉の金兵衛どの。

小金　博多の金兵衛どの。

博金　相手も替らぬ名山が深間。

小金　金兵衛と

博金　金兵衛と

小金　同じ太夫の

博金　深間になると云ふは

小金　ハテ、思ひ合うた

兩人　出合ひぢやなア。

　トこなしあつて、本舞臺へ來る。

軍領　サア、むづかしいものになつたぞ。

佐五　ヤイ／＼、おのれらばかりが挨拶ひろいで、身が揚詰めの太夫を、何と吐かすぞ。

博金　玆な猿松め。何をほざく。コリヤヤイ、恐らく博多の金兵衛が懇ろせうと思ふが最後、例へ大盡であらうが、ざふであらうが、引ツ捕へて扱かにや置かぬのぢや。

小金　惡うどんとくいしけ廻ると、空臑を薙いで退ける。詞の柔らかなうちに、あやまりましたでござる、如何にも名山差上げませうと吐かさいでな。

青柳　アレ、見やしやんせ。お二人に極められて、きつい悄氣やうぢやわいなア。

松野　オ、をかし。

佐五　イヤサ、笑やアがるな。をかしうないぞ。ヤイ、素町人の慮外者め。

博金　慮外者とは、おのれが事ぢや。

佐五　どうして身共が。

博金　慮外であるまいか。この博多の廓で、傾城を買うて遊ぶ者の類は、マア一番におれに逢うて、私しは傾城が求めたうございますが、あなたに差支へはございませぬかと、一言屆けをさらすが、マア大法ぢや。それに何所の毛才六やら、知れもせぬ形をひろいで、おれにも屆けず揚詰めさらすが、なんと慮外であるまいか。

佐五　重ね／＼の法外。料簡ならぬ。

　ト博多金兵衛へかゝる。何さらすと云うて、首筋を持

つて、下の方へ抛ろ。ひよろ〳〵として、小倉金兵衛が側へ行く。

小金　玆なとんぼさぶめ。

佐五　ナニ、とんぼとは。

小金　とんぼであるまいか。あの太夫さんは、おれと云ふ深間がある事は、この博多は愚か、日本に隱れがない。それに何所から湧いてうせて、おれへも斷わらず、なんで揚詰めにさらした。あやまればよし、惡う跳ね廻ると、足でも腕でもへし折つて、パッ〳〵と粉にするぞ。

青柳　二人ながら、もう料簡してやらんせ。きつううてた顏ぢやわいなア。

名山　イエ〳〵、もそつと懲らしたがよいわいなア。

十平　それもいぢらしい事ぢや。申し、足元の明るいうちに、あやまつたがよからうぞえ。

佐五　默りあがらう。ヤイ、うぬらが男達ならば、これぢや、この魂ひと云ふものを以て、名山を手に入れて見せう。

銀兵　名山はおいらが仲間へ

十平　貰うたぞよ。

博金　腕づくなら遣りもせうわい。

小金　どうして貰ふ。

銀十　ちよつと、斯うせうか。

ト銀兵衛は博多金兵衛、十平太は小倉金兵衛を締めにかゝる。博多金兵衛、銀兵衛を取つて投げる。直ぐに小倉金兵衛にかゝる。太皷持ち立つて野かけを打つ。佐五郎、拔いて切つてかゝるを、博多金兵衛、見得よく留め、小倉金兵衛、十平太を踏まへ、銀兵衛が手を捻ぢ上げ、双方キッと見得になる。所へ橋がゝりより、官齋、右の茶屋に走り出て

官齋　コレ〳〵、狂言を待つてもらはう、ひよんな事が起きて參りました。狂言待つたり〳〵。

ト喧ましう云ふ。これに依つて、立廻りを止める。なんぢや〳〵と口々に云うて、立ち騷ぐ。軍領、東西東西と云うて、見物を靜める體。皆々うろたゆる。

博金　コリヤ〳〵、皆騷ぐ事はない。大事の狂言の腰を折つた坊主め、手打ちにする。其所へ直れ。

ト切らうとする。皆々留める。

官齋　ア、お慰みの邪魔は致しませぬが、ひよんな事と申すは、只今大殿の御臺樣からのお使ひとあつて。

博金　また意見に來たか。去なせ〳〵。

官齋　どうあつてもお目にかゝるとあつて、これへお出でございます。

皆々　ヤアヽ。

ト云うて白ける。小倉金兵衛、男達の形を脱ぐ。黒繻子の奴条平なり。

佐五　悪い所へ毛虫がうせ居つて、あつたら狂言を止めずばなるまい。

女皆　わたしらは、どうせうぞいなア。

トうろたへる。条平、衣裳を持つて、ウロ〳〵する。

博金　ハテサテ大事ない。マア〳〵、皆下に居い〳〵。

ト皆々坐る。

博金　凡そ某が夜の遊興、芝居好きと云ふ事は、一國に隱れはあるまいが。

皆々　左様でござります。

博金　それに何のかのと意見に來る。何奴であらうが、手打ちにする。

皆々　御尤も。

博金　構ふ事はない。狂言を始めい〳〵。

佐五　イカサマ、其所もある。殿田島之助さまには氣不足の御病氣。依つて、夜になれば心內を閉ぢ、御氣鬱の御病根、これを引立てんが爲に、さま〴〵の遊びをして、夜の明けるまで寢ずのほたへ、この儀は御母公も御存じな筈ぢやが。

軍領　どうでお屋敷の、勝手を知らぬ衆と見えまする。

佐五　サア〳〵、只今の續きを始めう。

女皆　どうやら勝手が違うたわいなア。

小金　斯う腰が折れては、一口もいけない〳〵。

三藏　イカサマ、この場はこれぎりに致して、わつさりと大踊りに致しませうか。

博金　それもよからう。サア〳〵、皆踊れ〳〵。

三藏　ヤア、千代の始めの踊り。先づは松坂越うたえ。

ト踊りの太鼓三味線になる。皆々踊る。此うち、橋がかりより、中通り六人、雀踊りの拵らへにて、ツカツカ出て、この中へ入り交つて踊る。後より、主税、着流しに、藍染めの頰冠りをして、付いて出る。皆々ごつちやになり、好き所にて博多金兵衛の田島之助、主税を見て

田島　ヤア、其方は新參の家來、久留島主税ではないか。

主税　左様でござります。殿の遊興、仕組み踊りの中へ、同氣求めて持ち込んだ雀踊り。一番當てる氣で持つて參

つたが、殿、氣に入りましたか。どうぢやの〳〵。
佐五　そんなら、御母公から使ひと云うたは。
主税　氣もない事〳〵。
女皆　嬉しや。落ちついた程にの。
粂平　どうやら人心地が付いたやうな。
田島　此奴、餘ッぽどな洒落者と見える。出かした〳〵。
主税　有やうは、私しどもも、彼の狂言とやら芝居とやら
に交ぜてもらひたさ。ナウ、何れも。
雀踊　それ〳〵、どうでお役には立ちますまいけれど、大
概馬の後位はやりますでござります。
同　申し上げますが、大得手ものでござりまする。
同　お馴染同然に隅から隅まで
皆々　づらりと願み上げまする。
ト一時に辭儀する。
田島　こりや話せるわいやい。サア、酒にせい〳〵。
子供　アイ〳〵。
ト銚子杯を持つて出る。
田島　時に、今夜の、おれが狂言の仕打ちを見せいで殘り
多い。
主税　見物せいで殘念なわい。

佐五　殿が男達の仕打ちと云ふものは、近年のえらい出か
しであつた。
ト口々に褒める。田島之助、喜んで酒を呑む。
銀兵　それに出かしたは、奴の粂平ぢや。
粂平　イヤモウ、何を云うても、狂言の相手が御主人だか
ら、どうか斯うかと氣が騒いで、怖くて〳〵、胸がどき
どきして、根ッから葉ッからいけるものぢやない。これ
を思へば、上方の役者などゝ云ふ者は、餘程厚かましい
ものだてなア。
すま　殿樣や家老樣達は主役になつて、女形の分は、博多
の廓から、わたしらを呼び寄せて、傾城は傾城、仲居は
仲居と、銘々の身分を其まゝの役割り。
名山　常住云ひ付けた事でも、狂言の事ぢやと思へば、恥
かしうてならなんだわいなア。
青柳　ひよつと云ひ損なひでもせうかと、氣が氣ではなか
つたわいなア。
名山　才兵衛さんの妹御、おみよさんも餘ッぽど好かつた
ぞえ。
白糸　わたしや恥かしうてならなんだわいなア。
佐五　恐らくこの佐五郎が、田舍大盡の意氣込みと云ふも

のは、餘程出かしたと思うて居る。

三藏　侍ひを侍ひの役に遣ふものぢやもの。お前が出かさいで誰れが出かすもので。

佐五　イカサマ、其所もある。

三藏　お前方に出かさすも、わたしと云ふお抱への振付けがあるに依つてぢや。凡そ市の川彥九郎と云うては、上方に於て、振付けのちやき〳〵ぢやわいなう。

軍領　イヤ、狂言綺語の戯れとは申すけれど、既に隋の煬帝西苑を開いて、蓬萊宮を移し、宮女を集めて歌舞をなさしむとござります。

すま　一甫さんの講釋が始まつたわいなア。

軍領　ハヽヽ。

松野　シタガ、名山さんは立つにも居るにも、殿さんを側に引き付けて置いて、さぞ嬉しうござんせうなア。

名山　これが嬉しうなうて、何が嬉しうござんせうぞいなア。

田島　サア、太夫は嬉しがる筈ぢやが、靑柳、其方は彼の馴染みの宗太郎と云ふ、後立が居ぬので持てまい。

靑柳　この間は、便り音信も聞かず、辛氣な事ばつかり。推量して下さんせいなア。

銀兵　きつう理に入つて參りましたぞえ。

田島　これから奥へ行て、明日の晩の稽古せうか。

十平　何がよからう。

軍領　明日の晩は、趙雲阿斗を助けて長坂坡の血戰の間はどうござりませう。

佐五　ハテ、堅い和郞ぢや。明晩は江戸仕立ての曾我に致さう。

皆々　よからう〳〵。

主稅　此方も、なんぞ使はれたいがの。

宮齋　わたしも役者には使はれまいかの。

ト佐五郎、なんでも當てればならぬと云ふ。銀兵衞、裁き役をしたいものぢやがと云ふ。十平太、臺詞書を早く見たいものぢやと云ふ。すべてこの臺詞、ごつちやに云うて、立騷ぐこなし。三藏、扇にて皆々を鎭めて廻る。

三藏　東西〳〵。さて明晩仕りまする狂言の外題は、今樣女曾我を仕りまする。即ち曾我の十郎祐成に傾城靑柳、同じく五郎時宗に傾城名山でござりまする。

皆々　よからう〳〵。

名靑　わたしらは否でござんすぞえ。

田島　ならぬ〳〵。なんでも込め付けて總稽古ぢや。サア
サア、皆騷げ〳〵。

女皆　サア、みんな、ござんせいなア。

ト騷ぎ唄になる。口々に稽古ぢやと云ふ。名山、青柳、
否ぢや〳〵と云ふを、無理やりに連れて、この一件皆
皆捨ぜりふ云うて、わや〳〵奥へ入る。主税、粂平、
殘り居る。あと合ひ方になる。

粂平　主税さま。

主税　粂平。

粂平　御主人の放埒、御意見と思ひの外、只今の有樣は。

主税　盛んなる火を鎭めんと、水を用ふれば、却つて逆立
つの道理。其所を思うて、火を以て火を鎭める某が只
今の計らひ。

粂平　御譜代お歷々の御諫言も、お用ひなければ是非に及
ばず。それゆゑわざと御意見も申さず、お側に付き添う
て、共々馬鹿を盡すも、何卒々々御機嫌に叶ひつゝ、そ
の折を見合せて、餘所ながら御諫言を申さん爲。何を申
すも只今は、彼の水の出端とやら。

主税　殊に御氣欝の御病氣とあれば

粂平　良藥口に苦しとやらで

主税　御諫言の匙加減が第一。ナ、心得たか。

粂平　畏まつてござりまする。

銀兵　主税どの〳〵。早くお越しなされいでの。

主税　只今それへ參る……然らば粂平。

粂平　先づござりませう。

ト唄になり、主税、粂平、連れ立ち奥へ入る。ト内よ
り、名山、出る。

名山　殿樣は何所に居やしやんすぞいなア。

ト尋ねるこなし。佐五郎、衣裳改めて出て、後より、
思ひ入れある。

面妖な。爰に居やしやんせぬ。宵から新造の花町さんの
素振り、どうやら呑み込めぬ。殊に花町さんも。

ト思ひ入れあつて。

こりや詮議せにやならぬわいなア。マア〳〵、なんぢや
あらうと殿さんに逢うて。

ト思案して

合點のゆかぬ奥の圍ひ。さうぢや〳〵。圍ひの間を尋ね
て見ようわいなア。

ト行かうとする。佐五郎、後より抱きつく。

佐五　ドッコイ〳〵、ちよつともやる事は、ならぬ〳〵。

名山　エヽ、嫌らしい。何をするのぢやいなア。

佐五　何をするとは名山、ぞつこん首たけ登り詰めて居る事は、大概目顔で知れさうなものぢやが。幸ひあたりに人もなし、日頃の思ひを得させたび給へ。コリヤコリヤどうぢやぞいやい／＼。

ト いろ／＼じなつくを、名山、振り切り

名山　佐五郎さん、殿樣と云ひ交して居れば、わたしは田島さまと云ふ、歴とした主のある身でござんすぞえ。

佐五　サア、殿と云ふものあればこそ……云はぬ。一度や二度振舞うたと云うて苦しうあるまい。ちよこ／＼と、これぢや／＼。

ト いろ／＼、嫌らしくする。

名山　アヽしつこ。嫌ぢや／＼。

佐五　嫌でも應でも、本望遂げにや置かぬのぢや。

ト いろ／＼追ひ廻す。この間内にて

銀兵　ヤア、工藤左衞門、遁がれはあるまい。

十平　友切丸を此方へ渡せ。

銀兵　何を小癪な。

ト ばた／＼と蔭を打つ。佐五郎、名山を追ひ歩く所へ銀兵衞、書拔を持つて走り出て

銀兵　サア／＼、名山さんの役場ぢや、ちやつとござりませござりませ。

ト 名山を連れ行かうとするを、佐五郎留めて

佐五　イヤサ、そこ所ぢやない。名山には用がある。

銀兵　ハテサテ、キッカケが外れます。サア／＼、ござりませ。

ト 無理に名山を連れて入る。

佐五　さりとては肝心の、なりかゝつた所を、忌々しい。

ト 合ひ方になる。佐五郎、落ちてある狀を拾ひ上げて見て

佐五　粂平さま參る、白糸より。ムウ。

ト こなしあつて、封を切り

斯うして置いてまさかの時、彼奴を。ムウ。これもよし。

ト 懷中へ納め、あたりを見て、上の方に置いてある桶伏せの側へ行て、桶の緣を扇子にて叩くと、桶伏せの穴より、蒙古田男、外國人の拵らへにて、首を出す。

田男　佐五郎どの。

佐五　蒙古の大將、剛立が下官の田男、申しつけた一儀、必らずとも油斷いたすな。

田男　お氣遣ひなされますな。長崎の渡海廻船、通路の勝手覺えた私し。日本の詞に慣れ、土地の案内を知つたれば蒙古の大將剛立柳氏、兩將の下知を受けて、一味合體の野町筑後どのへ、萬事の手筈内通の役目。
佐五　如何にもこの度、日本へ襲ひ來る蒙古の大將軍、内通を以て合體し、九州を切り從へ、探題職とならん筑後どのゝ大望。身共を始め、荷擔の輩大半あれば、大望成就瞬くうち。
田男　その手始めには、菊池田島之助を、遊興の油斷を窺ひ、騙してたつた一討ち。
佐五　ヤレ音高し、隱密々々。
ト靜かな踊り太鼓三味線になる。
田男　ヤア、あれは。
佐五　若殿が寢ずの遊興。
田男　何かの手番ひ。今宵のうちに。
佐五　必らずぬかるな。
田男　心得ました。
佐五　忍べ。
田男　ハッ。
ト唄になり、田男、首を引ッ込める。佐五郎、こなしあつて、奥へ入る。始終踊り三味線。向うより、大友宗太郎、浪人めいた形にて、深編笠を被て、小さき高札を持ち出る。後より、中間作助、付いて出る。
作助　イヤ〳〵、待て〳〵。面體を隱し胡亂な浪人。何れへ參るのぢや。名を名乘れ〳〵。
宗太　イヤ、仔細あつて、密かに田島之助どのにお目にかかりに參つた。苦しうない者でござる。
ト云ひ〳〵舞臺へ來る。作助、付いて來り
作助　例へ何者にもせよ、胡亂がましい者は、御前へ通す事はならぬ。門前へ出やれ〳〵。
宗太　ハテ、聞分けのない奴どのぢや。
作助　オヽ、聞分けはない。ずんと聞分けがないから、御門前へ出すのぢや。
トかゝるを、よろしく突き廻し、高札を見せて
宗太　コレ、御門前へ立てた高札の文言、こなた、ハ、ア、讀めぬの。
作助　なんと。
宗太　無筆ならば讀んで聞かさう。「當館に於て、今晩より歌舞伎狂言盡し相勤め候ふ間、武士町人貴賤を選まず、見物せしむべき者なり、家中屋敷町人中へ、菊池田島之

助一家中在判。」なんと、このそくたくがあれば、狼藉とは云はれますまい。

作助　イヽヤ、御遊興の見物も、暮れ六ツを限り。夜に入つては御前へ叶はぬ。キリ／＼御門前へ出でやれ。

宗太　ハテ、聞分けのない。

ト突きかゝる。始終鳴り物掠めてある。此うち奥より青柳、出る。

青柳　宗太郎さんぢやござんせんか。

宗太　青柳か。

作助　うぬ。

トかゝる。エヽ、邪魔なと、取つて投げる。

青柳　よう來て下さんしたなア。

ト取りついて云ふ。作助、又かゝらうとして、氣を替へ、すご／＼と逃げて入る。常の合ひ方になる。

宗太　すりや、田島之助どのゝ遊興に付いて、この所へ來て居やるのぢやな。

青柳　サレバイナア、毎夜々々芝居とやらお能とやら、お慰めに一緒に來て居るも、田島さまと氣の合うたお前なり、ひよつとお前に逢ふ事もあらうかと、樂しんで居る甲斐あつて、ようお顏を見せて下さんしたなう。

宗太　隣國のよしみを思ひ、毎度廓に於てお出合ひ申せば田島さまは取分けて懇意。この宗太郎は樣子あつて、國元を立退き、いま浪人の身の上。今宵忍んでこの所へ參つたは、田島どのにお目にかゝつて、家國の納まり、何かと賴みたい儀。

青柳　アイ、奥にでござんす。宗太郎さん、打明けては云はしやんせねど、わたしやお前の本心を、よう知つて居るぞえ。

宗太　知つて居るとは。

青柳　サレバイナア。お前の親御さんは、大友宗麟さまと云ふ豐後の國の領主、他家から御養子をなされて、家國相續のところ、その後御隱居樣の御妾腹に出生なされたお前、實のお子なれば、家國がやりたいと思し召し、養子の御惣領をば、御隱居樣がお憎しみ遊ばし、家の跡目はお前にと、子を思ふ親御の慾心。お前は又、さうさしては道が立たぬと、兄御の市之正さまへ、義理を立てゝの御浪人。

宗太　さほどまでに身が所存を。

青柳　云ひ交した殿御のお前の心、知らいでならうかいなア。その眞實を親御樣にお聞かせ申して。

宗太　サア、お聞入れある御氣性ならば、今まで御意見を申さずに居やうか。善にも悪にも片意地の親人と、思ひ計つての出國。青柳、この事は他言せぬがよいぞや。

青柳　そりや合點ぢやわいなア。そんなら田島さまに逢うて。

宗太　兄市之正どのゝ、御歸國の樣子も聞きたし。

青柳　わたしも久し振りに話したい事もあり。

宗太　萬事は後に。

青柳　宗太郎さま。

宗太　青柳、案内しや。

ト唄になり、青柳、宗太郎を連れ、奥へ入る。と奥より、太鼓持ちに扮した軍領、右の形にて、大小を差し出て、あたりを見て、呼子を吹くと、前なる井戸より玄海灘右衛門、船頭の形にて、ズツと出る。

灘右　軍領さま。

軍領　九州の海賊、玄海灘右衛門。

灘右　合圖の呼子を聞いたに依つて、抜け道の空井戸から。

軍領　出かした。

灘右　ハツ。

軍領　この天部軍領は、大友宗麟どのゝ家來にて、姿をやつし、この館へ入込み居るも、宗麟どのゝ御意に依つて野町筑後へ内通の役目。其方を呼び寄せしは、主人方より申し來りし内意に依つて、委細の儀は御主人の自筆を以て、認め置かれし頼みの密書。

ト狀を出して、玄海灘右衛門に見せる。

灘右　私しへ頼みの樣子は。

軍領　先づ披見しやれ。

ト玄海、封を切り、口の内にて讀む。

主人の子息市之正どの、都在番の役目も相濟み、この度蒙古討手の副將を仰せつけられ、御歸國あるは明日との知らせ。それゆゑ取るものも取り敢へず、萬事の手筈を頼みの密書。

ト此うち、灘右衛門、密書を讀みしまひ

灘右　成る程、この事は先達て、宗麟さまからお頼みの上、念の入つたるこの密書。氣遣ひなされますな。へゝ、さすものではござりません。とつくりと聞き繕らうたところが、殿は三池から内海の濱まで歩行の道中、彼の足利より預かつて居らるゝ雷鳴丸の劍を。

ト云ふを軍領押へて

軍領　コリヤ。

ト二人、あたりに氣を付け
彼の雷鳴丸と云ふは、元尼子晴久が重寶。晴久滅亡の後、室町の寶藏へ納まりしところ、蒙古討手の副將とあつて彼の雷鳴丸を預かり、歸國召さるゝその道筋。

灘右　殿は本海道、雷鳴丸はお召しの船に取入れ、守護して戻ると聞いたは究竟。姫島の彼の船頭に行はせ、劍を此方へしてやるは、海賊の手慣れた働らき。

軍領　よも仕損じはあるまいが、大切の儀なれば、必らずともに油斷はせまいぞ。

灘右　九州の海道、船の往來、水筋の深み淺瀬、知り拔いて居る灘右衞門、船と見るならば必らず水底を潜つて、沖の深みに漂はせ、船頭ぐるみぞんぶりと云はせ、濡れ手へ摑む雷鳴丸、首尾よくやつたら一廉の骨折り代、必らず忘れまいぞや。

軍領　氣遣ひ致すな。宗麟公へ申し上げ、御朱印を以て海賊をさせるワ。

灘右　まだ夜深なれば、そろ〳〵とやりかけうか。

軍領　隨分ぬかるな。

灘右　明日逢ひませう。

ト行かうとする。

軍領　灘右衞門待て。

ト差添を取つて差出す。

灘右　覺えの一腰、忝ない。

トボツ込む。

軍領　早く行け。

灘右　合點ぢや。

ト唄になり、灘右衞門、向うへ走り入る。軍領、後見送り、ムンと手を組み、眞の樂になる。軍領、落ちてある高札を取上げて

軍領　日夜に募るあの遊興、後日の咎めはこのそくたく。ムウ、さうぢや。

トついと奥へ入る。矢張り眞の樂にて、奥より、名山、庵木瓜の素袍の上を掛けて、田島之助、元の若殿にて、衣裳羽織になり、名山、田島之助を引ッ張りて出る。田島之助、少し醉ひたる體なり。後に小姓、田島之助が小さ刀を持ち出る。

名山　サア〳〵ござんせ。濟まぬわいな〳〵。

田島　名山、濟まぬとは、何が濟まぬぞいやい。

名山　アイ、濟まぬ譯を云はうかえ。

田島　さらば聽聞仕らう。

ト坐る。

名山　申し、わたしがこの姿は、なんぢやえ。

田島　されば、姿は時宗、顔は名山、泣く聲は鵺にさも似たの。

名山　エヽ、仇口を聞かうとは云はぬ。人には狂言の稽古ぢやの、なんの彼のと騙して置いて、あの新造の花町とたつた二人、圍ひの間には、何をして居やしやんしたえ。

田島　サア、あれは。

名山　云はれぬかえ。なんの云はれう。どうで碌な事ぢやあるまいわいなア。

トびんとして云ふと、桶伏せより、田男、首を出して見て居る。始終眞の樂なり。

田島　コリヤ、めかりを利かして物を云へ。花町と二人、圍ひの間に居たは、あれは。

名山　なんぢやあつたえ。

田島　サア、あれは何やらぢや。オヽ、それ〳〵、狂言の稽古ぢや。

名山　エヽ。

田島　ハテ、花町の役は大磯の虎御前、そこで祐成の濡れの段を、彼奴に教へてやらうと思うて。

名山　稽古なら、なぜ人前でさんせぬ。四疊半の圍ひの間で、差向ひになつて、稽古をするとは、油斷のならぬ、心元ない稽古ぢやなア。

田島　サア、マア、あれはフトした出來心の稽古ぢや。眞實誠の濡れの稽古は、名山、其方より外にはないわいなう。

ト名山を引寄せる。

名山　サア、それはさうぢやけれど、わたしや、まだ氣の濟まぬ事があるわいなア。

田島　まだ氣の濟まぬ事とは。

名山　その濟まぬと云ふは、都冷泉家とやらのお姫様と、お前と云ひ號け。近く輿入れがあるとやらの噂。さうなつた時はわたしが身は、どうなる事と思へば、行く末が思はれて、アヽ、思ひ廻して見れば見る程、氣の濟まぬ事ばつかりぢやわいなア。

田島　ハテ、愚痴な事ばかり。云ひ號けはあらうが、得心せぬうちは、押しつけた輿入れはならぬと、云うて聞かしたら、如何な云ひ號けの縁も、あつちから變替へせねばならぬ。なんと、けうとい手番ひであらうがな。

名山　サア、さうなればよけれど、殿御の心は飛鳥川とやらで、ひよつと心が變らうと思うて。
田島　ても疑ひ深い。エ、聞えた。こりや、なんぢや。其方からそろ〳〵秋風が立つたに依つて、退き下地に、前置きを云ふのぢやの。
名山　なんのマア。さうではござんせぬわいなア。
田島　イヤ〳〵、さうぢや。なんぢや知らぬが、腹が立つてゝあるぞ。コリヤ主水、その杯を持つて來い。
主水　ハア、。
　ト持つて來る。田島之助、大杯を受けて、小姓主水に注がせ、呑まうとする。
名山　コレイナア、下地もあるし、もう酒はよしにさしやんせいなア。
田島　われが指圖受けうとは云はぬ。構うてくれな。
　トひつしよなう云うて酒を飲む。名山接穂ないこなしにて
名山　サア、マア、今のやうに云うたのが、お心に障つたら、申し、わたしがあやまつたわいなア。
田島　あやまつた位では濟まぬわい。
　トまた注がせて飲む。名山、こなしあつて

名山　サア、其やうに云はしやんすと、わたしも氣が濟まぬわいなア。互ひに氣の濟むやうに、殿さん、ちよつと來て下さんせい。
　ト手を取る。
田島　來てくれいとは、何所へ行くのぢや。
名山　サイナア、わたしに秋風が立つたのかと疑はしやんすに依つて、わたしが心に秋風が立つたか立たぬか、お前の得心の行く、しつかりとした證據を見せるわいなア。
田島　面白い。證據があるなら爰で見よう。
名山　爰では見せられぬ證據ぢやわいなア。
田島　爰で見せられぬ證據とは、どんな證據ぢや。
名山　エ、つツとモゥ辛氣な。あの一間で、ついちよつと證據を見せるのぢやわいなア。
田島　なんぢや。あの一間で、ついちよつと證據を見せると云ふ。その證據と云ふは。
　ト思ひ入れあつて
　イヤ〳〵、その證據は見られぬわえ。
名山　なぜ證據が見られぬえ。
田島　ハテ、寢る事のならぬと云ふが、某の病ぢや。サア、それぢやに依つて見られぬわえ。

名山　そんなら帶をも解かずに、ついちよつと證據を見せるわいなア。
田島　大分醉も廻つた程に、ちよつと位は大事もあるまい。
名山　サア、ござんせいなア。
田島　エ、、行てやらうかえ。
ト唄になり、名山、田島之助を連れて、東の障子へ入る。主水、小さ刀を其所に置き、奥へ入る。田男、其うち羨やましさうに見て居て、いろ〳〵こなしあつて、それより桶を退け出る。蒙古の形なり。あたりを見てそろ〳〵東の障子屋體を覗き、こなしあつて、劍を出し、鯉口を濕し、田島之助を切る心にて、ツカ〳〵と障子屋體へ行く。奥より粂平、つツと出て、田男を引廻し、立ち塞がり
粂平　待て。一間を目掛けて、何ひろぐのぢや。
田男　イヤサ、これは。
粂平　これは。
田男　オ、これは、田島どのゝ遊興を見物しようと思うて。
粂平　ハテ、姿は唐人、物云ひは日本。合點のゆかぬ曲者。どう云ふ事で忍び込んだ。眞直ぐに白状ひろげ。
田男　イヽヤ、何も胡亂な者ではない。
粂平　胡亂でない者が、劍に手を掛け、あの一間目がけてなんで踏ん込まうとした。
田男　サア、それは。
粂平　蒙古の賊徒、九州に薹る折と云ひ、心得ぬうぬが俗姓。細かけて詮議する。尋常に腕廻せ。
田男　邪魔せずと其所退け。
粂平　腕廻せ。
田男　面倒な。いつそ。
ト拔いて切りかける。粂平、立廻つて、劍を叩き落し、これより兩人、摑み合ひになつて、よろしくドツコイと見得よくとまり、向うより
呼び　御母公さまの御入り。
ト橋がゝりの内より
呼び　野町筑後出仕。
ト兩人、立廻つて
粂平　ナニ、御母公の御入り、筑後の出仕ぢや。
田男　なにを
トかゝる。立廻つて、田男、前なる井戸へ飛び込む。
粂平　南無三。拔け道、うぬを。

ト續いて井戸へ飛び込むと、奥より、青柳、花町、仲居おすま、松野、子供皆々出る。障子屋體より田島之助、醉うたる體にて、名山の肩にかかり、ヒョロ〳〵して出る。

青柳　申し殿樣、母御さまがお出でなされたといなア。

花町　御家老樣もござんしたといなア。

田島　サア〳〵、母者であらうが、家老であらうが、構ふ事にない。斯う醉が廻つてはそこどころぢやないわい。

トひよろ〳〵する。

女皆　わしらは、どうせうぞいなア。

田島　これから築山の櫻の林へ行て、夜の花見と出かけう、サア〳〵、皆來い〳〵。

トめれんの體にて、名山の手を引き、青柳、皆々を連れて、花道の方へ行かうとすると、琴唄になる。向うより、諫早御前、衣裳裲襠、御臺にて出る。軍兵二人鎧櫃を差擔ひ、後に軍兵大勢付き添ひ、花道の眞中にて、行き合ひ

諫早　田島之助、こりや何所へ。

田島　南無三。

ト皆々を連れ、後へ戻ると、橋がゝりより、野町筑後、衣裳上下、家老の拵らへにて、立ち塞がり

筑後　待つた若殿。御母公のお入りでござるぞ。

ト田島之助、是非なく奥へ行かうとするを、見付け暖簾、ハラリと落ちると、向う金襖、銀燭臺、數多灯し立て、佐五郎、十平太、銀兵衞、皆々、衣裳上下に改め出る。臆病口より、渚、衣裳裲襠にて出る。田島之助は始終醉うたる體にて

田島　これは〳〵、歷々のお出ぢや。小姓ども、杯を持て、早く早く。

トめれんの體にて坐る。女達も是非なく側へ坐る。

佐五　御母公には、イザ先づこれ　。

皆々　お通りあられませう。

ト諫早御前二重舞臺の眞中へ直る。筑後、女形の皆々に目を付けながら、ズツと通り、二重舞臺の下の方へ直る。女形、筑後に目を付けながら平舞臺左右へ並よく並ぶ。軍兵、鎧櫃を御臺が側へ直して、殘らず橋がかりへ入る。諫早、座席を見渡し、こなしあつて

諫早　野町筑後、其方が知らせに依つて、田島之助が病氣の根差し、とくと見屆けたわいなう。

筑後　心氣不足の病氣と云ひ立て、晝夜を分たぬ身持ち放

埒。酒色の二つに前後を忘じ、この有樣。斯う滲み込んでは、如何な／＼。耆婆扁鵲が匙劑でも、本腹は心得ませぬ。

諫早　柳川帶刀が女房猪。

猪　ハア。

諫早　當家新參の久留島主稅。

主稅　ハア。

諫早　田島之助を守護の爲、晝夜をいとはず勤番ぢやの。

佐五　左樣でござります。

諫早　宮地佐五郎、その外の家中、其方達も田島之助に、諫言を加へんが爲、晝夜相詰めて居るのか。

佐五　御意の通りでござりまする。

諫早　田島之助、それへ出や。

ト田島之助、醉眼で居るを、青柳、名山、兩方より袖を引く。

田島　サア／＼、母人のお話し、聞いて居る／＼。

諫早　治世に亂を忘れずとは、弓矢取る身の戒め。我が夫武勇の鋒先に依つて、尼子大内が惡逆を切り鎭め、四海一統はせしかど、彼れらが殘黨、爰彼所に蔓る由、油斷ならざる折も折、印田と云へる蒙古の賊軍、この日本へ襲ひ寄り、大明と一手になり、數萬騎にて不日に攻め寄せるとの風聞。それゆゑ武將足利家の下知を以て、蒙古討手の大將は、當家菊池家に仰せつけられ、副將は隣國の領主、大友宗麟の子息市之正どの、足利家より雷鳴丸の劍を預かり、明朝未明に歸國との先觸れ。即ち早打ちを以て上屋敷まで知らせしゆゑ、取るものも取り敢へず、急ぎ出陣を進めんが爲、吉例の鎧を持たせ、これまでわざわざ來ましたわいなう。

筑後　當家の重寶、玄武の旗を眞先に押立て、出陣の節は茶の湯を催ふし、打立つが吉例。殿、蒙古退治の御出馬の用意は、如何でござるな。

女皆　申し、お心をお附けなされませいなア。

田島　イヤ／＼、もう一吸も飲めぬ。免せ／＼。

ト横になる。

佐五　ハ、、、出陣どころか、傾城に精根を奪はれ、晝夜の熟醉。女を相手に夜軍は知らず

十平　蒙古の討手の大將とは

銀兵　イヤ、及ばぬ事ぢやて。

十平　如何にも及ばぬ儀でござるぞ。

主稅　聰明の若殿なれども、酒色の二つに溺れ給ふ智者の

諸　一失。ハテ、なんとせう。
　舅柳川隼人どのは、濱手の檢見のお留主と云ひ、夫
　帶刀　折惡しく他國。
名山　殿樣の御難儀も、元は私しから皆起る事。
青柳　心を慥かにして、出陣とやらはならぬかいなア。
諸　申し、殿樣。
名山　醉を醒まして
皆々　下さりませいなア。
　ト左右より取りつき泣く。
筑後　爰があるゆゑに、某が數度の諫言、用ひなければ馬の耳に風同然。出陣の今となつて、うろたへ顏の家中の混亂。詫いても叶はぬ。何れも、見苦しき女ばら、佐五郞、彼奴等を門前より引出し召され。
佐五　心得ました。女郞ども、立ち居らう。
　ト立ちかゝる。主税、留める。
諫早　佐五郞、待て。
佐五　イヤ、筑後どのゝ下知でござれば、女ばらを引立てまする。
諫早　イヤ、それには及ばぬ。
佐五　でも。
主税　御前の御意ぢや。扣へさつしやれ。
　ト立廻つて、留める。
筑後　都冷泉家の姬君と婚禮あるべきところ、傾城を引込み置いて、都への聞えは如何思し召す。但し、御前には御合點で、廓通ひを勸めあるのか。
諫早　田島之助は一國の大名、寛仁大度の計らひを以て、情を商ふ君傾城に、城を傾くの歎きさへないならば、苦しうあるまいわいなう。
佐五　すりや、冷泉家の御緣をも解いて。
諫早　勅諚の緣組み、違背はせぬ。
佐五　それに又、傾城どもを。
諫早　諸侯に七人、免しの本文。其方は知らぬか。
佐五　サ、その儀は。
諫早　自らが詞、批判があるか。
佐五　全く左樣では。
諫早　左樣ならば、扣へて居よ。
　ト佐五郞、筑後と顏見合せ、こなしあつて
佐五　ムウ。然らば如何やうとも。
諫早　出陣まではまだ程もあり、傾城どもは田島之助を介抱して、マア／＼奥へ。

青柳　アレ、母御様のお詞。
名山　脇から邪魔の入らぬうち。
青柳　奥へお越し
皆々　遊ばせいなア。
　ト手に手に、田島之助を起す。
田島　なんぢや。座敷を替へて飲み直せか。こりやよから
う。サア〳〵、皆、騒げ〳〵。
　トひよろ〳〵と立ち上がる。名山、青柳、女形皆々介
抱して、奥へ連れて入る。この時、向うバタ〳〵にて
　条平、田男に縄をかけて、うせう〳〵と引摺つて出る。
田男　忙しなう云ふな。行くわやい。
条平　キリ〳〵うせうてや。
　ト花道にて、田男、逃げうとする。ドッコイと留める。
諸　　条平、その有様は。
条平　ハッ。蒙古の餘類と相見え、怪しき曲者、搦め捕つ
て斯くの通り。
　ト本舞臺へ連れて来り、眞中へ引据ゑると、また逃げ
うとする　立ち塞がり
身動きひろぐと、打つ放すぞ。
　ト此うち佐五郎、田男を見て

佐五　ヤア、其方は。
　ト恟り、筑後、押へて
筑後　イヤサ、コレ、外國の曲者、近付きであらう筈がな
い。御母公の目通りで召捕られたは、彼奴が不運。併し
世の常ならぬ面魂ひ。迂闊に大事をナ……滅多に白状は
致すまい。
諫早　して、手懸りともなるべき類は、所持して居ぬか。
条平　ハッ、即ち懐中に所持いたしたこの一巻、御覧遊ば
れませう。
　ト一巻を持ち行く、諫早御前、披き見て
諫早　初めに三韓の地理を記し、續いて明朝蒙古國の浦々
島々、又は天竺の道の記、日本の港々。この九州の國中
まで、悉く書きつけたは、仔細ぞあらん。条平、とくと
相糺してよからう。
条平　ハッ。サ、、毛唐人め、何もかも白状ひろげ。
田男　イヤ、何も白状する覺えはない。
条平　死太い奴の。吐かさずばカウ。
　ト刀にてこぢる。
田男　ア、、コレ〳〵。其やうに痛めまい。申します〳〵
条平　サア、吐かし居らう。

田男　アヽ、浮世ぢやなア。人には術ない目をさして、外らさぬ顔で高見から見て居るとは、あんまり胴慾。

ト筑後、佐五郎を見ると、筑後、顔にて、何にも云ふなと押へる。田男、こなしあつて

イヤサ、胴慾なは繩目の憂き恥。斯うなるからは、有やうに申し上げませう。私しは外國渡海の船頭でござります。この日本へ商ひ船を付けましたところが、この頃は蒙古の夷が起つて、よう商ひどころであらうぞ、喇叭チヤルメラに煽てられ、びく／＼しながら宙を逃げ歩く揚句には、代物積んだ船も引ッくり返つてしまひまして、故郷の唐へは去ぬる路銀はなし。日本で渡世せうにも、土地の勝手は知らず、ほんの唐人の、ふところ子でござります。

主税　ムウ、すりや其方は、外國渡海の船の船頭とな。

田男　船頭と云うても、まだ楫子も同然、小息子の部屋住みでござりますれば、わたしが名を息子部屋と申します。

銀兵　ハテ、替つた名ぢやなア。

田男　どうぞお助け下さりませうならば、ハイ／＼、有り難う存じます。

諫早　外國通路の船頭が、何ゆゑこの一卷は所持して居た。

田男　サ、それは。

諫早　蒙古退治に出陣の折柄、地理の一卷手に入りしこそ勝利の吉左右。異國の要害、土地の案内、糺明して白狀させい。

粂平　この上は、火水の拷問にかけて

筑後　粂平待て。

粂平　なんでお留めなさるゝ。

筑後　その曲者、誠の蒙古の曲者にもせよ、深くこの地へ渡る程の奴、勝手知れざる異國の要害、嘘を以て白狀いたさば、さうかと軍を發し、却つて賊徒の手段に乘らば當家ばかりの恥辱ではない。日本の武威拙しと、蒙古の賊徒に笑ひ謗られ、その期に及んで悔いて返らぬ。拷問無用と留めたは爰の事、御前樣、なんと左樣ではござらぬか。

粂平　ア、イヤ／＼、筑後さまの左樣御意なさるれば、どうか異國人の御贔屓をするやうで、聞き憎う存ずる。例へ蒙古であらうが、印田の賊であらうが、菊池の武威を以て手足くるめに粉微塵に打ち潰すに、なんの手間隙。云はれざる御批判で、士卒の鋭氣を失ふ道理。こりや、ちと御粗忽な御一言かと存じまする。

佐五　ヤア、大身な家老に向つて、無禮な雜言、蛆虫同然の差出る場所でない。すッ込んで居らうぞ。
条平　イヤ、すッ込んで居るまい。一事が萬事、曲者拷問お留めなされた筑後さま、こなたのお胸にも一物がござるわいなう。
筑後　慮外な下郎め。其奴、引立てさつしやれ。
銀十　下郎め、立たう。
条平　イヤ、善惡邪正の判らぬ其うちは、どなた樣の御意にもせよ、爰一寸も動きやせぬ。
ト二人を引き廻す。
銀十　慮外な奴め。
諫早　すりや、曲者が拷問は。
筑後　拙者が預かり、理非明白に糺して見せう。
諫早　しかと詮議を。
筑後　相糺してお目にかけうワ。
ト内にてドンチャン。向うより小金吾、小手脛當の軍兵、走り出て、花道にて、手をつかへ
小金　御注進々々。
諫早　櫻井小金吾、注進とは何事。
小金　討手の兩將御出馬なきうち、蒙古の方より不意にとりかけ。
諫早　騷動の知らせとや。
主税　柳川隼人どのは如何なされた。樣子は。
皆々　なんと〳〵。
小金　ハッ、我が君樣は明日の御出陣。蒙古の勢は釜山海に屯のところ、夜討ちと見えて數多の賊、國界まで俄かの逆寄せ。
主税　不意の騷動、居り合ふ者はなかりしか。
小金　かゝる事もあらんかと、隼人さまの下知に依つて、待ち設けたる味方の伏せ勢、一度に起つて鬨を擧げ、重地に足をためさせうと、勢ひ盛んに攻め戰ふ。
諸　夜軍なれば敵味方、同士討ちなども多かりつらん。
条平　勝負の次第は、なんと〳〵。
小金　軍は十分味方の勝利、無二無三に駈け散らせば、蒙古の一手はうろたへ騷ぎ、色めき立つて逃げ出るを、爰に押し詰め彼所に切り伏せ、死骸は山を亂せし如く、皆散り〳〵に逃げしゆゑ、勝鬨つくりて立歸りましてござります。
条平　ハテ、勇ましい御注進、お出かしなされた〳〵。
主税　手合せの戰ひ利運とあらば、味方の吉左右。

佐五　蒙古の敗軍。
ト筑後を見る。筑後、キッと向うを見て、刀を持ち、思はず立ち上がる。
諫早　待つた。血相變へて、コリヤ何所へ。
筑後　イヤサ、餘り烈しい勝利の知らせ。身も駈け向つて軍の次第を。
諫早　イヤ、賊軍は敗北して、殘らず逃げ退きしとの注進。參つてからが最早後へ。
筑後　ハテ、命冥加な賊徒ぢやなア。
トこなしあつて、下に居る。
諫早　敗軍の賊徒、取つて返さんも計られず、夜廻り怠りなく、遠篝を以て、濱手々々を吟味いたし、油斷なく守れ。
小金　畏まつてござりまする。
主税　早く行きやれ。
粂平　風を喰つた蒙古の殘黨、まだ／＼詮議しようより、白狀さすはこの繩付き。
ト田男にかゝるを、佐五郎、粂平を引廻して
佐五　イヤ、この曲者は、筑後さまが直の拷問。
粂平　すりや囚人は。

筑後　身共が預かる。
佐五　して、若殿の御出陣は。
諫早　無明の醉も、明けなば醒むる軍の門出。
諸　今宵も未だ四ツの半時。
主税　曉までに萬事の落着。
筑後　して、母公には。
諫早　これにて宿直。
粂平　思へば。
ト田男を見て駈け行くを、十平太、銀兵衛立ち塞がり
筑後　その繩付き、引立てい。
佐五　ハッ、立たう。
筑後　御母公には後刻
皆々　御意得ませう。
ト唄になり、筑後、田男に顔にて呑み込ます。佐五郎田男を引立て、臆病口へ入る。筑後、こなしあつて、奥へ入る。主税、諸、銀兵衛、十平太、皆々奥へ入る。後に御臺、粂平、殘る。
粂平　御前様、異國の地理を記した一卷。
諫早　披見に及ばぬ。こりや似せ物。
粂平　ナニ、似せ物とは。

諫早　これも矢ッ張り敵の手段。いま九州に尼子大内が殘黨蔓り、やゝもすれば國を窺ふ。

粂平　心得難きは御家老筑後どの、惡事に馴れ合ふ家中の惡者、一々に引ッ捕へ、何ゆゑ御詮議はなされませぬ。

諫早　自らもさは思へども、荒立てゝは大切なる、御旗の行くへ。

粂平　御旗の行くへとは。

諫早　家の重寶玄武の旗は、先達て紛失。

粂平　エヽ。

諫早　サア、その盜賊も、慥かにそれと推量はしたれども、これぞと云ふ手懸りなければ、種々に心を碎くわやい。

粂平　ムウ、さうだ。

ト駈け込まうとする。

諫早　待て。何所へ行く。

粂平　延び／＼ならぬ御旗の詮議、例へ手懸りはなくとも一々に素首押へて御旗の在所を。

諫早　イヤ、事をあらはに詮議しては、引裂き捨てるものならば、家の斷絶。

粂平　ぢやと申して。

諫早　ハテ、血氣に逸るは破れの基。待てと云うたら、マアマア待て。

粂平　エヽ。

ト奧を見てこなし。

諫早　下郎ながらも忠義の其方。

ト思ひ入れあつて

粂平、近う。

粂平　ハッ。

ト諫早御前が側へ寄る。ちよつと囁く。

すりや、最前の。

諫早　曲者を詮議せい。

粂平　畏まつてござりまする。

諫早　早う行け。

粂平　ハッ。

ト橋がゝりへ駈けて入る。西の障子明けて、軍領、最前より聞いて居る。九ッの時計鳴る。諫早御前、こなしあつて

諫早　最早三更。出陣の時刻まで、いま二時が家の安否。ハテ、どうしたものであらうぞ。

ト思案する。軍領、ズッと出て

軍領　その思案、貸して進ぜう。

諫早　其方は。
軍領　身共が名は斯う。
ト刀を抜きかゝる。
諫早　コリヤ、何をする。
軍領　田島之助に頼まれて、こなたをば殺してしまふのぢや。
ト切つてかゝる。よろしく立廻つて
諫早　現在伜の自らを。
軍領　刺し殺せと頼んだ、親殺しの大罪人。頼まれた身共は武士の意氣地。それぢやに依つて。
トまた切つてかゝる。抜身をもぎ取り、目先へ突きつけて
諫早　こな僞はり者。
軍領　なんと。
諫早　大友が家來、天野龍藏。
軍領　すりや、身共を。
諫早　宗麟が云ひ付けに依つて、犬になつて入込み居たと云ふ事は、柳川隼人よりの知らせ。斯程の事を知るまいと思ふか。
軍領　ムウ。それ知つたら百年目ぢや。

ト燭臺を蹴返し、逃げうとする。諫早御前、立廻つて見得よく取つて押へる。花町、おすま、手燭を持つてバラ／＼と出て
女皆　この場の騒動。
諫早　ハテ、騒がしい。
ト靜めながら提げ緒にて縛し上げる。序の舞の合ひ方になる。この見得にて、所作舞臺とも後へ道具引く。
網代塀になり、破風より一面の糸櫻吊り下ろす。三方一時にて、道具とまる。始終序の舞の合ひ方、道具とまると、常の合ひ方になり、切り戸より、大友宗太郎、出かけ、こなしあつて
宗太　入込んで窺ひ聞けば、我が推量に違はず、野町筑後が惡心の根ざし、親人宗麟どのを勸め、おのが企みの根組みとなさん謀叛の結構。親人は實子の我れを世に有らせんとして、義理ある兄者人、市之正どのを拒み、日夜に募る非道の振舞ひ。我れさへ無くばと出國はしたれども、聞き捨て難き彼れ等が企み。とあつて、これを明らさまに訴ふれば、罪科は遁がれぬ親人の身の上。云はぬが好いか、云ふが好いか。義理も立て、孝も全き心の

企み。それは。ムッ。

ト両手を組み。ヂッと下につくばふと、合ひ方少々づつ忙しくなると、櫻の木へ蟬とまり鳴く。大木の後より蟷螂出て、蟬を狙ひ寄る。好き所より、雉子出て、蟷螂を窺ふ。宗太郎、これに見惚れる。こなしあつていろ〳〵ある。

ムウ、唐漢の齊友が、琴を調べて殺伐の調子を分け、音律に委しく譽れを取りしその有樣。いま蟷螂が、蟬を窺へば、野鳥來つて蟷螂を狙ふ。當時九州塗炭の中に交つて、親子兄弟主從の分ちなく、只おのれを立つるに脇見えず。この三蟲に譬ふる時は、蟬は親人宗麟どの、その聲潔よく調和して、豐後一國の梢に登り、その身の饒きを樂しむ。後には尼子大内が餘類諍り、毛利菊池の野鳥ある事を知らず。然るに集まる蟬も蟷螂も、仁義正しき夜鳥の餌食となつて、滅び失せんは目のあたり。ハ、、ハテ、忌はしき前表ぢやよなア。

ト蟬と蟷螂を、雉子羽叩きして落し、木蔭へ入る。

さてこそ。

ト側へ寄らうとすると、人音する樣子に隱れると、常の合ひ方になり、切り戸より、筑後、十平太、銀兵衛を連れ出る。橋がゝりより、佐五郎、田男、窺ひ出る。

皆々一つに寄る。

筑後　外國の賊徒、田男とやら。

佐五　先達て入込ませ、田島之助を一討ちと思ひしに、手違へてしくじつたて。

筑後　賊徒ながらも一器量ある面魂ひ。また云ひつける手段もあれば、この一筆に血判いたせ。

ト連判を出す。

佐五　こりやコレ連判狀。

田男　早々血判。

ト田男、脇より唐の矢立を出して、姓名を記し、血判する。

田男　これにてようござりまするか。

銀十　して、こなたの思し召しは。

筑後　初度の手段を仕損じたれば、この上は出陣の茶の湯に毒藥を仕込み、田島之助親子を仕舞ふと云ふ手段の近道。

佐五　すりや、毒藥の手段を以て。

筑後　館の内は塞した。

田男　その擧に乘つて、この地へ攻め入る漢古の出勢。日

筑後　本の土地の案内はこの田男。
筑後　當家の重寶玄武の籏は、某、兼ねてより盗み置き、豐後の國府の領主、大友宗麟どのに合體し、宗麟どのゝ謀り事を以て、九州の海賊玄海灘右衛門と云へる者に申し付け、惣領の子息市之正が歸國を窺ひ、足利家より預かり歸る、雷鳴丸の劍を奪ひ取らすと、密書を以て宗麟どのより身共へ内通。
佐五　劍紛失の越度は、市之正に負はせて詰め腹切らせ、大友の跡目も、繼目の綸旨を以て、實子の宗太郎に讓らんと云ふ、宗麟どのゝ思し召し。
筑後　事成就せば互ひの本望。何事も今宵のうちに。
佐五　もし毒藥で首尾よく行かずば。
筑後　それで行かずば、これでやらうと、工風は樣々。思案の極意は。コレ。
ト佐五郎に囁く。
佐五　天晴れ妙計。
銀兵　して、蒙古より攻め入る手筈は。
田男　釜山海の港に集まる兵船、駈け廻つて下知を傳へ、剛立柳氏の兩大將に諜し合せ、一度に起つて攻め立てなば、日本勢は粉微塵。

筑後　まさかの時は狼煙を合圖に。
田男　駈けつけて加勢いたさう。
佐五　出かした。早く。
田男　心得ましたが、行く先々は船手の關所。
筑後　海上通路のこの割印。
ト切手を遣る。
田男　すりや、これを以て。
筑後　早く行け。
田男　おさらば。
ト向うへ走り入る。
佐五　この上は、奥へ參つて。
三人　筑後さま。
ト唄になる。こなしあつて、佐五郎、皆々切り戸の方へ入る。ト木蔭より宗太郎出て、こなしあつて
宗太　ハテ、恐ろしい企みの段々。エヽ、淺ましい親人。如何に某を世に有らせたいとても、義理ある兄を失ひ、繼目の綸旨を以て我れを跡目にせんと、慾心一圖の思し召し。ふるなが辯で意見したとて、所詮お聞入れはあるまい。
ト思ひ入れあつて

綱目の綸旨さへなくば、跡目の沙汰も暫らくは延引。意見せうより諫言より、綸旨を盗んで隠し置くが、思案の最上。誠にさうぢや。

ト つか／＼と花道へ出て、こなしあつて

佞人どもが當家を亡ぼす、毒殺の急難。どうも聞捨てには。

ト つか／＼と戻り、また向うを見て、とあつてこちらもと、いろ／＼こなしあつて、思案を極め、田男が落した矢立にて、鼻紙に歌を書き、櫻の木へ結び付け置き、行かうとする所へ、青柳、手燭を持つて出て、この體をよろしく留め

青柳 待たしやんせ、血相變へて、何所へ行くのぢやえ。

宗太 仔細を語る隙がない。其所退け。

ト 引退ける。裾に取りつき

青柳 聞かぬうちは、なんぼうでも、やりやせぬ／＼。

宗太 ヤア面倒な。

ト 立廻りにて、青柳をちやつと當て、空を見て

まだ九ツの月魄ぢや。

ト 唄になり、宗太郎、ツイと向うへ走り入る。青柳、心付き

青柳 ヤア、何處へ行かしやんしたぞいなア。

ト いろ／＼尋ねて

何にもせよ。様子を聞かぬうちは心が済まぬ。さうぢや。

ト 行かうとする。佐五郎、出て立ち塞がり

佐五 待て青柳。名山がつれなくとも、せめてそもじは得心であらう。

ト 取りつく。

青柳 エヽ、嫌らしい。否ぢや／＼。

佐五 貴公も否か。なんぼ否がつても、今宵中に二人ながら請け出して、この佐五郎が右と左に月と花。可愛がつたり、がられたりするわいやい。

ト いろ／＼あつて、青柳を捉へ、引寄せんとする所へ粂平、出て、佐五郎を引廻す。

青柳 粂平どのか。

佐五 うぬは下郎め。

粂平 コレ、爰に構はず、早う／＼。

青柳 そんなら、頼むぞえ。

ト 走り入る。佐五郎、われもと行かうとするを、立廻つて留め

粂平 佐五郎どの、最前の毛唐人が、かくみ所を白状さつ

しやれ。
佐五　イヽヤ知らぬ。
粂平　知つても知らいでも、云はさにや置かぬ。
ト佐五郎、粂平へ切つてかゝる。
コリヤ、何をなさるゝ。
佐五　大事を氣取つた下郎め。生け置いては夜の目が合はぬ。
ト立廻りあつて
粂平　イヤ、奴めが體には、ちくとばかり骨があつて、おてまへ方の手には合はぬ。
佐五　ところを。
ト拔いて切りかける。いろ〳〵あつて、佐五郎逃げて入る。粂平、追ひかけうとして、櫻の短册を見て
粂平　心得ぬこの一首。何にもせよ。御前へ。
ト櫻の枝を折り、行かうとする所へ、奴四人、バラバラと出て
四人　下郎め、動くな。
ト十手構へる。
粂平　コリヤ、何ひろぐ。
奴一　佐五郎さまの仰せに依つて、放し討ちに打ち殺す。

皆々　下郎め動くな。
粂平　無法なお手討。くたばる事はマア否だ。
ト櫻の枝を腰に差し、身拵らへする。
奴一　ソリヤ。
ト双方よりかゝる。立廻りあつて、キッと見得になる。返し。
遠責めになる。造り物、見付け三間の二重舞臺、向う金襖、燭臺數多灯し、兩方後へ寄つて廊下、綟張りの障子、前竹の節、半ば御簾を下ろしあり、眞中に諫早御前、裲襠、上帶、脫きかけ長刀を持ち、床几にかゝる。腰元大勢付き添ひ、道具とまるまで、ドンチャンにて、橋がゝりより、小金吾、軍兵の形にて、軍兵大勢引連れ出て
小金　曉方近し。御出陣の御用意はな。
諫早　大勢の發駕は寅の刻。其方達は先手に加はり、東雲頃に手合せの軍を始めよ。早う〳〵。
小金　畏まつてござります。何れも、來やれ。
皆々　ハッ。

ト どんちやんにて、軍兵皆々向うへ走り入る。橋がゝりより、物見の侍ひ走り出て

侍ひ　申し上げます。只今物見の高殿より遠見いたすところ、都より早打ちの上使と見え、文色は見えねど數多の同勢、お館を目がけ、大手の御門より込み入つてござります。

諫早　ハテ心得ぬ。都よりの上使。何にもせよ、この旨一家中へ觸れ流してよからう。

侍ひ　畏まつてござります。

ト 橋がゝりへ入る。始終遠攻めにて、向うより、侍ひ一人走り出て

侍ひ　申し上げます。柳川隼人どの、何か御不審の旨とあつて、都の上使矢襖にて取卷き、只今これへ御入來でござります。

ト 云ひ捨てゝ入る。

諫早　何にもせよ、上使のお迎ひ。誰れかある。早う〱。

ト 奥より、筑後、佐五郎、主税、諸、十平太、銀兵衛出て

筑後　都より上使とあり。何れもお迎ひ。

皆々　ハツ。

ト 皆々出迎ふ。此うち、腰元、立寄り、諫早御前に裲襠を着せる。

筑後　お上使、こなたへ。

皆々　お通りあられませう。

ト どんちやん打ち止める。謹上再拜の唄になり、向うより、バタ〱にて、柳川隼人、中親仁の家老の拵らへにて、股立ちの侍ひ四人、弓矢にて、隼人を圍ひ、後より、桃の井主膳、繻子やうの着付け麻上下、後に上下侍ひ大勢付き添ひ出て、各々見事に花道に立ちとまる。

諫早　夜陰と申し、先觸れもなき俄かの御上使。

諸　思ひがけなき隼人さまには

皆々　この有樣は。

隼人　明日蒙古征伐の御發駕、不時の狼藉もあらんかと、夜廻り檢分の折柄、都の上使と承はり、お出迎ひ申せしところ、思ひも依らず斯くの仕合せ。

主膳　室町どのより當家へ、お疑ひの箇條ござつて、出迎へた隼人どのを、取卷きしも役目の表。何れも、扣へやれ。

四人　ハア、。

筑後　イザ先づ、お通りあられませう。

ト　また唄になる。侍ひ、隼人を圍ひながら本舞臺まで來て、殘らず橋がゝりへ入る。主膳、二重舞臺の諫早御前の脇へ座を扣へる。筑後、隼人、次へ直る。平舞臺の兩方へ、佐五郎、主税、渚、十平太、並ぶ。上下の侍ひ、橋がゝりへ入る。

筑後　これにお渡りあるが當家の御母公。拙者は家老、野町筑後。

隼人　同じく家老柳川隼人。

佐五　その外一家中の者ども。

皆々　お見知り下さりませう。

主膳　家の世繼、田島之助どのは、どれにござる。

ト　内より

田島　菊池田島之助、それへ參つて御意得ませう。

ト　初めのやうにて、上下に改めて出る。

佐五　若殿、熟醉の夢は

十平　醒めましてござるか。

田島　室町どのより上使の趣き、逐一に承りたう存じまする。

主膳　上意。

皆々　ハツ。

ト　平伏する。

主膳　その上、天文の亂治まつて後、尼子晴久、大内義弘、九州に滅び失せ、一旦干戈靜まるといへども、殘黨殘らず機を窺ひ、一揆を起すとの風聞。まつたこの度印度の地、蒙古起つて日本へ襲ひ來る。さるに依つて菊池田島之助へ、蒙古の討手の大將を仰せつけられ、副將には隣國の大守市之正、明日都より歸國の上、副將の儀なれば出陣とあつて、急ぎ軍馬を發すべき旨、先例なれば菊池の重寶、玄武の旗を改め、出陣の茶の湯な催ふし、勝軍の凱歌を掛かんが爲、嚴命に依つて足利の昵近、桃の井主膳、火急の上意の趣き、あら／＼斯くの通りでござる。

筑後　若殿、玄武の御旗、早々御持參なされ。

田島　サア、その旗は。

筑後　御旗がどう致した。

田島　サ、それはナ。

諫早　ア、イヤ、出陣に用ゆべき玄武の御旗、上使の上覽に入れませう。

筑後　ムウ。すりや玄武の籏を。

諫早　上覽に供へるわいなう。

筑後　アノ御籏を。ハテナア。
　ト思ひ入れ。
隼人　この度、討手を蒙むり給ふは、差當つて家の面目。悴帯刀は仔細あつて勘當し、當時館にあらざれば、柳川親子が二人前の武勇の程、蒙古の夷に泡吹かせ、追ッつけ凱歌を唱へるでござらう。
筑後　玉子を以て大山に向ふとは、一心の及ばぬ譬へ。口中の血氣に任せ、やりつけうと存じても、武に逞ましき蒙古の大將、臆病風にぼッ立てられ、牛蒡程の尾を振つて、逃げ歸るを見るやうな。ハヽヽ。
隼人　佞人賢人に紛ふと、辯舌巧みに立ち上がつた家老職軍の手段は、なんとして〳〵。
筑後　默れ隼人、佞人とは誰れが事ぢや。
隼人　臆病風とは誰れに云うた。
筑後　云ふぞよ。
隼人　聞くぞよ。
筑後　なにを。
　ト詰め寄る。
諫早　アレ留めい。
諸　御前の御意でござりまする。

筑隼　ハツ。
　トこなしあつて、扣へる。
主膳　田島之助。
田島　ハツ。
主膳　足利家より改めて御不審の箇條。
田島　ハツ〳〵。
主膳　田島之助、弓矢の家に生れながら、武藝一通りは事とせず、酒宴亂舞に性根を奪はれ、本心亂れて晝夜の放埒。足利家より咎めの第一。
諫早　アイヤ、その儀は田島之助、生得の多病、心氣不足の病根ゆゑ、英氣を添へる笛鼓、打ち囃子の遊興は、取りも直さず名醫の配劑。
主膳　然らば又、館の内へ博多の里の遊女を集め、歌舞伎の趣向なんどゝ、町家に等しき囃子の遊興。
諫早　憚りながら、その古への舞姫は、賢き帝にも召し出され、磯の前司は歌舞伎をなして、賴朝の御感にあづかる。靜謐の御代には、まゝある試しかと存ずる。
主膳　歌舞伎の譬へさもあらん。猥りに辻放下傀儡などを出入りなさしめ、貴賤混雜の所行を以て、君臣の禮を亂すは、不届きの一つにあらずや。

諫早　館には五穀神を勸請し、四季の祭禮は貴賤とも、門の出入を許し、見世物放下の戯れに、神慮をいさめる家中の賑はひ、代々の恒例を以て勤め來れば、今更お咎めには及ぶまいかと存じまする。

主膳　故もなきに町人百姓を殺害し、御前伺候の琵琶法師を、罪もなきに、壁の中へ塗り込めしは、法外なる無成敗。この儀はなんと。

諫早　賞罰正しからざれば背くの理り。その盲人は斷罪の科人、掟を以て刑罰にかけしは、私しならぬ政事の表。無成敗ではあるまいかと存じまする。

主膳　ムウ、さほどまで曇らぬ掟を以て、町人百姓に課役をかけ、權威を以て金銀を貪りしは。

諫早　謀叛の殘黨爰彼所に蔓り、未だ九州穩やかならず、貯へ集めるまさかの軍用。寶藏に籠め置きしは、私しならぬ四海の忠義。

隼人　足利家代々武功の菊地の家筋。

諫早　先程の功に思し召しかへられ

主税　當家長久の御計らひ。

隼人　御賢慮の程を

皆々　願ひ上げ奉りまする。

ト主膳、こなしあつて

主膳　ムウ、申し開きの段々、一々承知いたした。然らば玄武の旗、内見いたさう。

筑後　その御旗は、先達てより紛失いたした。

主膳　なんと。

諸　ナニ、玄武の御旗は

主膳　紛失とは。

ト田島之助、腹切らうとする。名山、皆々走り出て、縋り付き

名山　申し、何ゆゑの御切腹。早まつて下さんすないなア。

諸　詮議の種はござりませぬか。

主税　早まつて犬死なさるな。

銀兵　田島之助さま。

田島　母人様、この身の放埒に、忠孝の道を忘れし誤まり天道の憎しみに依つて、大切の御旗を盗まれしも知らず上聞に達しなば、家國沒收の御沙汰にも及ばんかと、御旗紛失のその日より、猶も惰弱に身を持ち崩し、歌舞伎や囃子の遊興になぞらへて、武士町人の選みなく、館の内へ引入るゝも、もしや詮議の手懸りにもと思ふがゆゑ例へ病氣を發せずとも、夜の寢られうか、枕席が安から

うか。晝夜を寢ずの遊興も、片時忘れぬ御旗の紛失、折も折と、蒙古の討手の大將を蒙むりしは、家の規模と云ひながら、御旗なければ出陣も叶はず。所詮切腹をしてとは兼ねての覺悟。

ト主膳に向ひ

何卒御上使の御思案を以て、某が切腹見屆け、國家全く武將の執成し、偏へに願上げまする。

名山　折惡い御旗とやらの紛失。どうぞお果てなされずとも、云ひ譯の仕樣はござんせんかいなア。

トこの時、橋がゝりより、粂平、返し前に宗太郎が櫻に付けたる歌を枝ともに手折り、持ち出る。

粂平　奧庭の櫻の木に、心あり氣な一首、仔細あらんと其まゝ手折り、持參仕つてござりまする。

諫早　これへ持て。

粂平　ハツ。

ト持つて行かうとして、主膳を見て、小腰を屈め、櫻の枝を諫早御前に渡し、元の所へ來る。諫早御前見て

諫早　この古歌は。

トちよつと思案のこなしあつて

家中の者に見馴れぬ手蹟。ハテナア。

佐五　若殿、何をウヂ／＼。早く切腹

銀兵　遊ばされい。

主膳　イヤ、待て。

佐五　待てとは。

主膳　玄武の御旗、內見濟んだ。

筑後　なんと。

主膳　檢分は相濟んだ。

隼人　有り難う存じまする。

筑後　イヤ、內見は濟んだにもせよ、蒙古討手の大將が軍頭にも立つべき御旗なくては、出陣なるまい。

主膳　昔楚國に寶なく、仁あるを以て寶とす。旗はなくとも士卒に施す仁義あるからは、君臣の心一致して、勝つべき道がないとも云はれぬ。

佐五　して、後日に足利よりお咎めあらば。

主膳　桃の井主膳が腹一突き。

筑後　イヤ、それでは。

主膳　上使に向つて批判をぶつか。

筑後　イヤ、全く。

主膳　批判でなければ控へて居やれ。

筑後　ムウ。

ト思ひ入れあつて、下に居る。チヤンと七ツ半の時計鳴る。

隼人　最早寅の一天。

渚　出陣の刻限。

諫早　先例の通り、門出の茶の湯、佐五郎主税、用意いたしてよからう。

佐主　ハツ。

ト兩人入る。

名山　そんなら、殿樣へのお疑ひは、もう晴れましたかえ。嬉しや、わたしもモウ、どうなる事ぢやと、氣が氣ではなかつたわいなア。申し殿樣、御出陣を遊ばすのぢやといなア。

諫早　イヽヤ、田島之助、出陣は叶はぬ。

渚　すりや、上使樣の御簾內見濟みましても。

諫早　濟まぬは後日足利のお咎め。田島之助、勘當ぢや。

田島　エヽ。

名山　ナニ、御勘當とな。ハア。

諫平　すりや若殿を。ホイ。

ト皆々當惑のこなし。

筑後　ナニサマ、こりや斯う有りさうな事。

隼人　いま近國に尼子大內が餘類蔓り、もしや御簾もこの筋。サ、勘當の身は心措きなく、命全う御簾の詮議が肝要、ナ殿樣、御合點參つたか。

ト田島之助、大小を諫早御前が側へ置き、元の所へ來て

田島　お情の御勘當、有り難うござりまする。

筑後　ムウ。勘當は聞えたが、蒙古討手の大將は、こりや何者が勤めるな。

諫早　その大將は、自らが勤めるわいなう。

筑後　アノ、女儀のこなたが。

銀兵　女の際に蒙古討手の大將とは。

十平　腹筋な詮索。ハテ

銀兵　馬鹿々々しい。

諫早　申すも畏れ多けれども、その上、神宮皇后は三韓を切り從へ、高麗唐土の端々までも、神國の武威を知らしめ給ふ。

隼人　武內の宿禰、皇后守護の古例を引き、年寄りたれども柳川隼人、眞先駈けて分捕り功名。イヤモウ、老臣の思ひ出、この上はござらぬ。

諫早　渚は奥へ行て、鎧物の具、相調へてよからう。

諸　畏まりました。
筑後　勘當請けた田島之助。主從の緣切れば、容赦に及ばぬ。早く門前へ引出だせ。
十平　如何にも若殿。
銀平　立たつしやれ。
ト兩方よりかゝる。粂平、引廻して、立ち塞がり
粂平　御主人に指でもさすと、何奴も此奴も容赦はないぞ。枝骨切つて切り下げるぞ。
筑後　慮外な下郎め。彼奴から引出せ。
十銀　下郎め、うぬ。
トかゝる。立廻りあつて
粂平　びく／＼ひろぐな。わいらが手に合ふ奴ではない。
二人　慮外な奴め。
トきつとなる。此うち、主膳、莨のみながら始終見て居る。奥より、佐五郎、袱紗に茶碗持ち出る。
佐五　吉例の口切り、イザ、召上がられませう。
ト諫早御前が側へ持つて行かうとするを
主膳　佐五郎とやら。待て。
佐五　待てとは。
主膳　その茶の湯、毒味いたせ。

佐五　エ、。
ト恟りする。
主膳　ハテ、驚ろく事はない。申さば大切の茶の湯、先づ毒味がなくてはならぬ。サア、早く呑め。
佐五　サア。
主佐　サア／＼／＼。
主膳　どうぢや。
トきめ付ける。佐五郎、ギヨツとして、慄へ／＼下に居る。
諫早　ハ、、、心元ないお茶の手前。斯くあらんと察し茶の水はとくと改めて、饌の菓子も別間を以て餝らせ置いた。誰れかある。茶の湯を持ちやれ。
主税　畏まつてござります。
ト奥より、袱紗に茶碗を載せ出て、諫早御前が側へ置く。
主税めが手前、服加減、如何ござらう。
ト諫早御前、主膳へ、ちよつと目禮して、茶碗を取り「御祝儀」と上げて、何れも内に諷ふ。
〽一張の弓の勢ひ、東西南北の敵を安く平げぬ。
ト諫早御前、一口呑んで下に置く。主税、取つて隼人

へ持ち行く。隼人、呑みしまふまでに謠とまる。

隼人　吉例の茶の湯、相濟みましてござりまする。

条平　サア、佐五郎どの、これからおてまへも茶の湯の相伴、サア、早く呑まつしやれ。

諫早　オヽ、滅多に呑めまい〳〵。いま条平が持參せしは。

ト右の枚を取上げ、切紙の短冊を見て

忘れてもくみやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水。

高野の奥の玉川の水。こりやコレ空海の玉川の古歌、事事しく書きつけ、櫻の木に付け置いたは、この館に毒害の急難ありと、餘所ながら事に准へて知らせしは、讀み人は知らねど天晴れ忠節。なんと覺えがあらうがな。

佐五　ム、サ、その儀は。

条平　覺えがなくば毒味さつしやれ。

佐五　サ、それはな。

条平　但し押へて賞玩ささうか。

佐五　サア。

二人　サア〳〵。

条平　なんとだ。

佐五　ムウ。

ト筑後を見て、また茶碗を見て

これは又、迷惑な事ぢや。

ト下に居る。

筑後　その茶碗これへ。

佐五　アノこれを。

筑後　早く持ちやれ。

ト佐五郎、心得ぬ顏つきにて、茶碗を持ち行く。筑後取つて、殘らず呑み乾し

筑後　主膳どの、毒味仕つたぞや。

ト諫早御前、隼人、条平、主税、皆々、筑後が顏をヂツと見て居る。

隼人　ムウ、顏色も變ぜぬ。ハテ心得ぬ。

ト皆々訝かしきこなし、主膳、思ひ入れあつて、佐五郎、ズツと立つて

佐五　御前樣、只今の茶の湯、何事もござらぬぞや。隼人どの、毒害ではござらぬぞや。下郎、毒害ではないぞよ。

トこなしあつて、隼人が側へ行て、膝を並べて詰めかけ

隼人どの、イヤ隼人、宮地佐五郎は、一心潔白の武士だぞ。云ひかけひろぐと、その分には置かぬ。皺首ぶつて打ち殺すぞ。

隼人　イヤ、殿の吟味は濟んでも、また外に詮議がある。

佐五　詮議があるとは。

隼人　お家を亂す謀叛の同類。

佐五　何がなんと。

隼人　惡事に馴れ合ふ一味の曲者、天野軍領を召捕り、拷問の上一味の白狀、先づ一番の宮地佐五郎。

佐五　すりやアノ軍領が。

隼人　遁がれはあるまい。

佐五　もう是非に及ばぬ。

ト拔いて切つてかゝる。立廻つて、佐五郎を蹴倒し

隼人　粂平、繩ぶて。

粂平　ハツ。

ト立廻つて、佐五郎を蹴倒し、捕つたと繩かける。

諫早　竹野十平太、それへ出い。

ト十平太、ギックリしながら、氣を落ちつけ、向うへ出て

十平　御用でござるか。

諫早　其方も科人の同類。

十平　エヽ。

諫早　軍領が白狀で疾に聞いた。

十平　こりや堪らぬわい。

ト逃げうとする。粂平、引廻し、立廻つて、取つて押へ、繩かけて引据ゑる。

粂平　差詰め銀兵衞どの、これへ出さつしやれ。

ト銀兵衞、スッと出て

銀兵　お尋ねに及ばぬ。ソレ繩。

ト懐中より捕り繩を出し、粂平に渡す。

粂平　ハテ、好い覺悟だ。

ト蹴倒し、繩をかけ、三人を傍へに引据ゑ

ばれ次手に筑後どの、こなたの詮議。

ト筑後目掛け、驅け行くを、諫早御前、押へて

諫早　ア、イヤ、底の底まで詮議せぬは、自らが心あつて。

粂平　エヽ。

ト無念がる。

諫早　時刻も移る。田島之助、早う。

ト合ひ方になる。

田島　ハツ。

ト粂平、こなしあつて

粂平　御前樣へお願ひ。何卒殿樣の御先途、下郎もお供の儀を。

田島　ア、イヤ〱、假にも科人の菜一人にても家來を召し具しては、足利家への恐れ、一家の大名と生れながら、これまで百姓町人に仁愛をなさず、邪しまな非道の榮華の夢も、覺めて空しくこの身の罪障。

筑後　誰れがある。科人早く、門前へぼッ立てい。

主膳　イヤ、科人の警固は皆女ばら。田島之助に添うて、ナ、國境まで警固いたせ。

女皆　エヽ、有り難うござります。

主税　拙者も門前まで見送りませう。サア、何れも。

ト田島之助、すご〱立つて行かうとする。諫早御前、向うを見て

諫早　田島之助待て。

田島　ハッ。

ト戻る。諫早御前、田島之助、顔見合せ、こなしあつて

田島　恨めしく又懐かしき月日かな。

諫早　別れし今日の憂さを忘れな。隨分無事で。

田島　母人にも御堅固で。

諫早　さらば。

隼人　粂平、繩付き引立てい。

粂平　ハッ、立たう。

ト合ひ方になり。田島之助、こなしあつて、名山、青柳、おすま、子供皆々、主税も附き添ひ、皆々向うへ入る。粂平、三人の繩附きを引立て、橋がゝりへ入る。諫早御前は右の思で、後見送り、隼人も田島之助を見送る心にて、舞臺先より出る。皆々向うへ入る。右入り切る時分に、諫早御前、隼人、毒の廻りし心にて、いろ〱苦しみ、べつたりと下に居て

諫早　ハテ心得ぬ。俄かに身心惱亂して

隼人　五臟六腑を貫く如く

筑後　毒とも知らず喰つた茶の湯。

諫隼　何がなんと。

筑後　ハテ、よく廻つたなア。

諫隼　すりや、其方が企みであつたか。

ト苦しむうち遠責めになり、諫早御前、よろぼひながら、長刀を取り、隼人も刀を杖に突き、キッとなつて

諫早　あの遠責めは。

隼人　ムウ。御出陣の貝鉦なら、遙かに遠く聞ゆべきに、次第に間近く、アレ〱〱。

諫早　館を目掛けて近付く有樣。ハテ訝かしい。

初濱の

縮番附

隼人　斯く計らひしも野町筑後、其方が謀計ぢやよなア。
筑後　如何にも、毒殺の謀計も、所詮一應では喰ふまいと佐五郎が立てし茶の湯をこの上使に進めさせ、わざと毒なりと云ひ觸らし、それから久留島主税が二度目の茶に毒藥を仕込み置いたを、それとも知らず、心よく喰うたが、自滅を招くおのれら兩人。こな大馬鹿め。
諫隼　エ、、、チエ、、。
ト身を慄はして、苦しきこなし。
筑後　足利の上使と云うたも、身が申し付けた廻し者。山陰道の盗賊、曉東風右衛門、大儀であつた。
ト主膳、これに構はず、ヂッとして莨をのんで居る。
筑後見て
イヤサ、東風右衛門、大儀であつた。もう休め。
ト主膳、默つて居る。隼人、筑後へ詰めかけ
隼人　知行を貪り、主を賣るの大罪人、獅子身中の虫とや云はん。エ、、うぬはなア。
諫早　旗の在所を見出さん爲、猶豫は却つて仇となり、謀られたが、口惜しいわいやい。
筑後　コリヤ〱、騒くな〱。如何にもうぬらが推量の通り、野町筑後が、一本立ちの叛逆謀叛、菊池を亡ぼしその虚に乗つて九州を切り從へ、探題職とならん我が大望、家の重寶玄武の旗も、先達て盗み取り、即ちコレ爰に。
ト出して見せる。
諫隼　さてこそなア。
筑後　ハテ、騒いでももう叶はぬ。作田島之助はたつた今追手をかけて一討ち。何もかも巧ういたわい。東風右衛門、大儀であつた。休め。
ト主膳、物云はずに居る。この時、筑後、毒の廻りし體にて、苦しみ出し、いろ〱あつて
ハテ心得ぬ。身心惱亂して、五臟六腑を貫く如きは。
主膳　うぬが喰つたも毒ぢやわやい。
筑後　ヤ、なんと。
主膳　ハテ、よく廻つたなア。
ト筑後、大きに驚ろきながら、いろ〱苦しみ
筑後　すりや、茶を誑かつたな。
主膳　大馬鹿め。
ト筑後が持つたる旗を引ツたくり
これしてやらうばつかりに、いかい骨折りしたのぢやわいやい。

ト諫早御前、隼人、主膳へ詰めかけ

諫早　すりや、其方が

筑後　叛逆徒黨の。

隼人　餘類ぢやよな。

主膳　山陰道を股にかけ、手下は凡そ十萬ばかり、曉東風右衛門と云ふ、盜賊のお頭様ぢや。

三人　エヽ。

トきしみ苦しむ。筑後も同じく苦しむ。

筑後　飼犬に手を喰はれたが、無念なわやい。この上は一味を集める兼ねての合圖。ソレ。

ト松へ手裏劍を打ちかけ、煙硝立つと、ドンチャンにて、橋がゝりより、田男、主税、三藏、皆々手下の形。その外、森明きの雀踊りの形の人數、その姿にて、バタバタと出て、ドンチャンの後、矢張り遠責めなり。

田男　お頭。

三藏　今宵の仕事は

皆々　どうでごんした。

主膳　オヽ、皆、大儀であつた。

筑後　ヤア、うぬらも同類であつたよなア。

主税　お頭の云ひ付けで、半季前から入込んで居たればこそ、肌をゆるして喰うた毒藥。

田男　蒙古の夷となつて、筑後を始め一味の者を一杯やり外國通路の船切手までしてやつた。頭、受取らんせ。

ト切手を渡す。

主膳　出かした。して、田島之助は。

主税　後妻どもをはかして、二才めは粮米櫃へ打込んで、いつもの不淨場へ。

田男　この騷動を聞いて、取つて返す菊池の先手、うろたへ騷ぐ責め太鼓、その中へ紛れ込み、鎧兜太刀刀の選み捕り。

主税　これから奧へ行て、金の在所を。

主膳　それが肝心だ。働らけ／＼。

主税　合點ぢや。

ト主税先に立ち、先の踊りの人數、皆々奧へ入る。

主膳　筑後、本望も遂げずくたばるは、さぞ無念にあらうな。

ト筑後、キッとなつて

筑後　秀る運と傾むく運、天命の兆す所は是非に及ばぬ。死出の道連れ。うぬ、盜賊め。

ト切つてかゝる。主膳、立廻つて、筑後を程なく切つ

て

主膳　コリヤ、其奴等も息の音止めてしまへ。

子分　合點ぢや。

ト子分兩人、倒れて居る、諫早御前　隼人を殺さうとする。二人ムツクと起き上がり、よろぼひながら双方にて立廻り、主膳、下へ下り、右の刀にて、諫早御前を切り倒し、隼人も程なくボンと切ると、奥より、主税、千兩箱を二つ重ねて擔げ、その外銘々千兩箱をかたげ出る。主膳、こなしあつて

主膳　杣六、善八、わいら二人は、コリヤ。

ト囁く。

二人　合點ぢや。

ト橋がゝりへ入る。

主膳　サア、夜の明けぬうち、引取らうぢやないか。

皆々　そんなら、頭。

主膳　行け／＼。

ト主税先に立ち、手下段々花道へ行く。この間、主膳、殿りの心にて、誰れも居ぬかと、ウソ／＼と見廻して居る。好き所に、渚、窺ひ、ツカ／＼と出て

渚　さてこそ盗賊。

ト主膳へ切り付ける。主膳、渚をざぶりと云はせる。皆々振り返る。

主膳　構ふ事はない。サ、行け／＼。

ト輕う云ふ。皆々向うへ入る。主膳、こなしあつて、靜かに向うへ入る。

幕

二つ目　松原の場

役名――曉東風右衞門。玄海灘右衞門。蒙古の田男實ハ浮洲の岩。宮地佐五郎。竹野十平太。三宅銀兵衞。傾城、名山。白糸姫。仲居、おすま。同、松野。傾城、花町。奴、粂平。柳川帶刀。局、松ケ枝。大友市之正。

造り物、一面に淺黄幕。兩棧敷の城、元の水引になる。淺黄幕は掠めて打つて居る。バタ／＼にて仲居おすま、松野、花町、名山、走り出て

すま　どのやうに尋ねても、殿さんの行くへが知れぬわいなア。

松野　どこではぐれたのぢや。合點がゆかぬわいなア。
花町　あのやうに、ドンチャン／＼と云ふのは、ありや何ぢやぞいなア。
名山　あれは軍を起して、唐へ攻めに行くのぢやわいなア。
すま　軍なら見たいものぢやなア。
名山　そこどころかいなア。早う殿さんを尋ねて下さんせいなア。
松野　足が痛うて歩かれぬわいなア。
花町　何ぢやあらうと、行きつき次第に尋ねう。サア／＼ござんせいなア。
ト皆々立ち騷ぐ所へ、佐五郎、十平太、銀兵衛、走り出て
佐五　コリヤ、しめた／＼。
ト引立てにかゝる。おすま、退けて皆々を圍ひ
すま　てんがうしやつたら聞かぬぞや。
名山　憎てらしい。また來くさつたわいなア。
佐五　屋敷は追放に遭はされ、亂騷ぎの身の上ぢや。せめて去にかけの駄賃に、わいらを連れて行て、皆々が念佛講ぢや。皆引ッかたげて、ふけれ／＼。
銀十　合點ぢや。

ト引立てようとする所へ、粂平走り出て、皆々を取つて投げる。
佐五　ヤア、われは。
女皆　粂平どの。
名山　お前は殿樣に逢うたかえ。
粂平　されば、殿樣の行くへは勿論、心ならぬ館の騷動。都の上使と云うたは、東風右衞門と云ふ盜賊。
女皆　エヽ。
ト佐五郎も悄りする。
粂平　毒藥を以て御前を始め、隼人さまを失ひ、渚どのを殺め、筑後めも自滅ひろいだとの噂とり／＼。心ならぬ若旦那のお行くへ。
佐五　下郎め、動くな。
ト切つてかゝる。粂平、三人を相手に立廻りあつて
粂平　爰構はずと、若殿のお行くへ、早う／＼。
女皆　合點でござんす。
ト皆々橋がゝりへ入る。三人、ソレと行くを引き戻しタテいろ／＼あつて、三人逃げるを粂平、臆病口へ追つて入る。始終バタ／＼にて、橋がゝりより田男、白糸姫を引き立て出る。

白糸　白らをどうするのぢやぞいなう。
田男　白らをどうするとは、白らをお頭の隠れ家へ連れて
行くのぢや。細言云はずと、うせやアがれ。
白糸　狼籍しやると、聞く事ぢやないぞや。
田男　ませた事云はずと、うせやがれ。
ト引立てる所へ糸平、引返し出て、田男を引き廻して
白糸姫を囲ひ
糸平　毛唐人の抜け殻め、よい所で逢うたわい。
田男　兎角おのれには縁がありさうな。
糸平　お館を騒動させしは、並々ならぬ盗賊めら、うぬに
繩かけて一々に白状さす。腕廻せ。
田男　衒妻を渡せやい。
糸平　繩かゝれやい。
田男　なにを。
ト立廻りある所へ、柚六走り出て白糸姫を捉へ
柚六　コリヤしめた。
ト立ちかゝる。糸平これを支へ、これより三人相手に
立廻り、いろ〳〵あつて、トヾ二人とも蹴据ゑ
糸平　お怪我のないうち、この場を早う。
白糸　心にかゝるは館の騒動。

糸平　ハテ、何を云ふにも火急の所。
ト柚六起きてかゝるを立廻りにて
諸事は追々。マア
ト抜身をもぎ取り、柚六をポンと切り
ござりませ。
ト白糸姫を連れ、向うへ入る。田男、起きて
田男　南無三方、うぬを。
ト追ひかけうとする。
柚六　コリヤ、待つてくれ。
ト足に取りつく。
田男　面倒な。
ト柚六を蹴据ゑ
うぬ、奴め。
ト後を慕ひ走り入る。
右浅黄幕切つて落す。一面の高舞臺にて並木の松原
後は黒幕にて、すべて夜更けの體にて、東西の窓黒
蓋を下し、暗がりの體、かすかに本釣り鐘に、凄き
合ひ方にて道具とまる。
ト向うより玄海灘右衛門、袋入りの劒を腰に差し、手

下四人連れ出て來る。右手下のうち、刀脇差、金箱、その外いろ〳〵の雜物をかたげ、また臆病口より東風右衞門、手下、雀踊りの人數を殘らず連れ、これも金箱に小さき半櫃を擔はせ、後より出て來る。兩方互ひに本舞臺にて行き合ひ、東風右衞門、灘右衞門と入れ違ひ皆々心意氣のこなしあつて

灘手　海。

東手　山。

灘右　ムヽ、曉か。

東風　玄海か。

灘右　其方もはけ口、何事もまぶと見える。

東風　イヤモウ、近年の大まぶ。其方もほらで重疊々々。

灘右　東風右衞門、祝ひに一服せうかい。

東風　約束の符牒の場所、それもよからう。

灘東　ソレ。

ト手下に金箱三つづゝ直させ、兩人腰かける。腰より竹の筒の仕掛けの火繩を出し、煙草のむ。

手下　コレ〳〵お頭、折角首尾よう仕負ふせた今日の仕事。さう悠長に構へて居ては、もしくれが來ると爲になるまい。殊にナ、コレ、大事の代物。

ト半櫃を下ろして

ナ、まだ玄海どのと、なんぞ符牒があるなら密かにいつもの所へ行て。

東風　ハヽヽ。ハテ、大事ないと云ふのに。誰れだと思ふ、曉の東風右衞門。仕事先は九州の大名、ずつしりと手前手の入る品。紐つけられる事も、手まへる事も、滅多にやならぬ。手下の奴等、落ちついて錨下ろして來い。イヤ、灘右衞門、見てたも。鳥がないに依つて、腰がぐにやついて、どうもならぬ。

灘右　イヤモウ、そりやどこも同じ事ぢや。がんどう巾着切り、掠めをのしつけた目からは、この玄海や東風右、貴樣の仕事を見ては、びく〳〵〳〵と、水壺から大蛇が出たやうに思ふも尤もぢや。

手下　コレ〳〵、此方のお頭、こなさんも、さう落ちついて居ずと、大友家とやらに、頼まれた今宵の仕事。

灘右　尤も大友の隱居、我まゝ坊主と呼ばるゝ宗麟が頼みに依つて、現在我が子が都から、預かつて戻る雷鳴丸と云ふ劍、手まへてくれいと段々の頼み。海の上の仕事は手馴れたおれ。それで今宵小倉の沖でナ、首尾よう仕負ふせて、まんまと雷鳴丸の劍は、コレ。

ト腰に差したる袋入りの劍を拔いて見せろ。
灘手　ヤア、アノ、頼まれた先へ。
灘右　この雷鳴丸の符牒は外にある。
手下　なんと云はんす。
東風　イヤ、その符牒はこの曉東風右衛門。
皆々　エヽ。
東風　灘右、今夜の働らき、大儀ぢやあつた。先達て約束の符牒雷鳴丸、受取らうか。
灘右　成る程、渡さうが、おれが方への符牒は。
東風　ソレ。
ト返し前の旗を取出し
約束の符牒、菊池の重寶玄武の旗。今一種はコレ、若殿田島之助もこの半がへに。
灘右　ムウ、よし。いかい大儀。東風右もおれも、今度馬鹿友に頼まれたを幸ひに。
ト互ひに旗と劍とを取替へ、東風右衛門、半櫃を突きやる。灘右衛門の方へ取寄せ
東風　斯う取替へるが、兼ねての云ひ合せぢや。
手下　とんとづきが廻らなんだ。
東風　大鵬の心は、小雀が知らぬ筈ぢや。

トごんとキッパリと明け六ツ突き出す。二人こなしあつて
ありやモウ明け六ツ。
灘右　そろ／＼と、ふけらずばなるまい。
灘手　イヤコレお頭、大友家へ渡す大切な代物。どうさつしやる。
灘右　ハテ、仕様は斯うぢや。
ト手下の差して居る脇差を拔き取り、雷鳴丸の袋に入れ、口をしい／＼
この銅脈を雷鳴丸ぢやと云うて、褒美の生を手まへてこます。
東手　時に此方のお頭。
東風　ソリヤ。
ト立ち上がり、腰かけて居る金箱を突きやり
今夜の踊りの趣向。こりやわいらへ別の酒手ぢや。
皆々　こりや忝ない。
トだん／＼金箱を擔げる。灘右衛門、こなしあつて
灘右　イヤ、曉の東風右衛門、貴樣もおれも、四國九州に名の高いいかみ。金銀は勿論、變な代物を心にかけるも、身に望みがあつて此やうに。

東風　ハテ、そりや知れた事。
灘右　すりや、互ひの心は。
東風　追つて明かさう。
灘右　成る程。して、又の出合ひは。
東風　君が代に空吹き拂へ天津風、越えて歸らんてまの岡山。
灘右　ムウ。さてはどうでも中國に。
東風　して又、玄海は。
灘右　浪荒き潮干の松の松浦潟、沖には續く海の中道。
東風　ムウ。ハテナア。
手皆　頭、夜の明けぬ間に。
東風　わいらは先へ。
皆々　そんなら先へ。
灘右　曉。
東風　玄海。
兩人　互ひに重ねて。
ト灘右衛門、半櫃を手下に擔はせ、皆々向うへ、東風右衛門の手下、橋がゝりへ、東風右衛門一人殘る。これをキッカケに明け六ツの鐘、ゴンと打ち切る。ト方方にて掠めて鷄鳴く。所知入り聞える。東風右衛門、

東風　臆病口を見て、こなしあつて
ムウ。ありや大名の供廻り。
ト空を見て
もう光は發した。ソレ。
ト思ひ入れあつて、後の稻村の蔭へ隱れると、夜の明けし體にて窓の黒蓋兩方一時に明ける。舞臺明るくなる。後の黒幕切つて落す。
後だん／＼奥深に右松原引き續き、幾重も並び、遙か向う浪幕、吊り物にて遠霞の體。これより所知入りキッパリと彈き出す。ト臆病口より本行列、立派にお先手手を振り、金紋の先挾み箱、紋所大きな菱にて、大房の臺傘、立て傘、長刀大鳥毛、猩々緋の覆ひの鐵砲二行に立て、高股立ちの侍ひ、近習大勢皆々見事に振つて出る。續いて市之正、殿の形にて、黒の着付け羽織、茶色緞子の袴、一文字の菅笠を着て、馬上勇々しく出て來る。數鎗、押へ、茶辨當、合羽籠、だん／＼次第を作りて花道の方へよろしく振つて行く。市之正、附け際まで來ると、橋がゝりよりバタ／＼にて松ヶ枝、局の形、置き綿抱へ帯にて、蒔繪の文箱を持つて出て來て

松枝　イヤモシ、殿様と見受けましてござりまする。お館より火急のお使ひ。どなたぞお取次ぎ願ひ上げます。

ト　お馬係りの侍ひ、市之正に向ひ

近習　お聞きあられましたか。

ト　市之正、馬を留め、皆々下につくばふ。所知入り掠める。市之正こなしあつて

市丞　ムウ。只今歸國の折柄、火急の使ひとは氣遣ひな。苦しうない、近うと云へ。

近習　それへ御免なさるぞ。

松枝　ハッ。

ト　馬前へ出る。

市正　して、火急の使ひとは、親人様よりお使ひか。但し家老どもの内意か、様子はどうぢや。

松枝　イエ／＼、憚りながら御隠居様、御家老方のお使ひではござりませぬ。お腰元の小蝶どのよりの密かのお使ひ。例へ途中でも差上げよとあつて、持参仕りましたこの文箱。

市正　ナニ、腰元小蝶よりの密かに。

ト　思ひ入れあつて

これへ持て。

松枝　ハッ。

ト　近習、文箱を取次いで渡す。市之正取つて開く。中に扇あり、取上げ見て

市正　見れば外に書面もなく、この扇を。

ト　こなしあつて披き見て

こりやコレ白地に時鳥の繪。

ト　ちよつと思案して

返事くれう。硯持て。

近習　ハッ。

ト　旅硯を持つて馬上へ差上げる。市之正、扇に俳句を書き記し

市正　時鳥啼くや五月の菖蒲草。

ト　再吟して扇をすぼめ

ソレ、小蝶へ渡せ。

ト　抛る。近習取つて文箱へ入れ、松ヶ枝に渡す。

松枝　左様ならば、私しはお先へ。

市正　早く。

松枝　ハッ。

ト　橋がゝりへツイと走り入る。市之正、馬上にてちよつと後を見送り

初演の番附

市正　凡そ一年振りにてこの度の歸國。それを待ち兼ね、エ、しをらしい小蝶が今の知らせ。兼ねて時鳥と云ふ鳥は。

ト近習供廻りを見て

蘭の香や蝶の翅にくゆらする。

トちよんと手綱を構へる。侍ひ心附き

侍ひ　お立ち。

皆々　ハツ。

ト所知入り烈しく鳴る。行列を振り出す。市之正、皆皆を連れ、向うへしと／＼入る。人數だん／＼列を正しく向うへ入る。と稻村より東風右衛門、ツカ／＼と出て、向うをキッと見るうち、臆病口より帶刀、右行列廻りの心にて、草鞋をすげ／＼遲れたる體にて出て、東風右衛門を見てキッと窺ふ。東風右衛門、手早く鐵砲を取り出し、玉を籠め向うへ行かうとする。帶刀、ツカ／＼と出て、東風右衛門を引き廻しかゝる。東風右衛門振り切り、立廻つて左右へ別れ、東風右衛門、刀に手をかける。帶刀、反り打つ氣勢。東風右衛門、ムッと眉に皺よせ、キッと見得にて

幕

三段目　箱崎八幡の場

役名――かつきの小萬。傾城、名山。同、青柳。花車、松野。禿、金彌。廣島省平治。奴、粂平。唐犬四郎藏。手下、浮洲の岩。同、馬の傳。同、捨石の九助。同、潮見の長。同、水母の權。同、闇の三藏。同、備中の粂八。同、鰐の鰐吉。毛利元就。

造り物。一面の草土手、上の方、大鳥居、これより續きの並木、間毎に御神燈、提灯を立て、後奧深に浪幕。橋がゝりにて礒際、汐の滿つる仕掛けあるべし。平舞臺の眞中に赤壁の張り骨を兩方に二枚立て眞中に納戸暖簾、この上に貼り紙をして、東清七罷り下り中、侍と云ふ書付けあり。この松に繪馬を敷き、長、若い衆の形、上下にて枕の曲をして居る。左右の床几に參詣の仕出し大勢、これを見て居る。幕の内にて九助、どつと譽めたりと云ふ。仕出し皆皆、よいよいよいと譽める。この矢聲にて幕明く。

ト長、扇使ひをして居る。皆々えらいものぢやと口々に譽める。

九助　東西々々。さてお庇を持ちまして、この儀も首尾よう仕り負ほせましてござります。さてこの度は、亂曲浮かれ枕と名づけまして、枕はだん〲浮かれて參る。頂上にては野中の一本杉、獅子の洞入り、鷲の谷渡り、首尾よう仕負ふせまするが、今日の前狂言でござりまする。

長　ハツ。

ト扇を上げると、三味線になり、だん〲枕を使ふ事いろ〲あつて、よろしく納まる。皆々譽める。

九助　首尾よう仕負ほせましたれば、いよ〲本藝大坂下り、東清七お目見得仕りまする。

ト長、辭儀して片脇へ寄ると、出端の形になると、右暖簾の内より浮洲の岩、お目見得の形にて出て、辭儀をする。鳴り物止む。

さて、ちよつとお斷わりを申し上げます。罷り出でました東清七儀は、大坂道頓堀に於きまして似顔似姿並びに役者聲色を以て、殊の外御機嫌に相叶ひましてござります。この度御當地箱崎八幡宮御祭禮につきまして、遙かに罷り下り、相勤めまするではござれど、旅がけなれば舞臺などは不都合。その段はお目長に御覽下され、御贔屓御憐愍の程を、づいと願ひ上げまする。

岩　ト仕出しへ口上様々云ふ。譽める。岩こなしあつて

高うはござりますれど、土手よりちよつとお斷わりを申し上げます。只今申されまする通り、似顔似姿とは申せども、なか〲瓜を二ツ、西瓜の梨割りと申すやうに、似るものではござりませぬ。ほんの癖ばかりを致すのみでござります。殊に靑天井で聲は漏れる。どうでお聞き辛い勝ちでござりませう。その段は御憐愍を以て御見物の程を隅から隅まで、づいと願ひ上げまする。

九助　太夫身拵らへを仕りまする。

ト岩、づいと暖簾口へ入ると、内にて坂田藤四郎のめりやすになると、岩、内にて似顔を拵らへ、我が手に名を譽めて出て、いろ〲あつて入ると、また唄になるべし。この模様二三度に短かくある。右仕打ちの間に九助、長、仕出しの紙入れ早道など取る事あり、よろしくしまふと、果ての太鼓を打つ。九助、長、入れ代り〲と云ふ。仕出し皆々賞めて

仕出　えらいものぢや。なんでも上方の芝居を直に見るや

うな。
同　これから宮へ行て、蒟蒻の田樂で一杯ひッかけう。
皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト此せりふ、こつちやに云うて、皆々鳥居の方へ入る。
長　入れ代つた。
ト云うて居る。
九助　今入りは後へ〳〵。
岩　コリヤ、皆散つてしまうた。
九助　ヤア、ほんに。
ト云ふうち、暖簾の内より傳、三味線太鼓抱へ出て
傳　ヤレ〳〵、囃子方も一人ではいけるものではない。
岩　仕事はどんなものぢや。
九助　紙入れが三つぢや。
トためて見て
この輕さでは心元ない。
岩　ドレ〳〵。
ト取つて中を見る。九助、殘り二つを見て
九助　こりや、紙入れ二つで、二朱銀たつた一つぢや。
傳　しまひ〳〵。
岩　コリヤ、力を落すな。一歩が十一切れあるワ。
九傳　そいつはえらい。
長　おりや、革の腰提げと早道二つぢや。ひッくろめて錢が五六十もあろかい。
岩　コリヤ、よう聞けよ。海上を働らいて、浮洲を念がけるが、おいらが商賣ぢやけれども、船が入つて來ぬととんと隙ぢや。そこでマア堺の内は陸を働らいて、ちつとづつの口すぎをすると云ふものぢや。ハテ、顯はれてばれると云うても、獄門よりは、磔刑よりは、釜入り牛裂きなどと、ちつとも派手な店を出すが、おいらの死花と云ふものぢや。
トこのせりふのうち、長、アイ〳〵と云うて居る。
九傳　こりや結構な御意見ぢや。
岩　時に、頭が云はれた彼の代物は、今日是非とも手まへにやならぬ。
九助　されば、博多の里の名山と云ふ傾城と、外の女郎ども一二枚、引ッかけて來いと頭の云ひかけなれども、道具や金と違つて、生き物の事、むづかしい仕事。
傳　聞き合したところが、彼の名山が客に揚げられて、今日この八幡へ參詣との事。廓へ入込み、とつくりと聞き合せて置いた。

岩　そりや、人込みの中で喧嘩を仕掛け、どさくさ紛れに取る代物。皆ぬかるな。
三人　合點ぢや。
岩　諸事は符牒場で云ひ合さう。サア皆、來い／＼。
三人　サア、行け／＼。
ト岩、皆々、右の小道具をてん手にかたげ、鳥居の方へ入る。ト庭神樂になり、向うより名山、傾城の形。置き綿、抱へ帶にて、藝子金彌。松野、花車の形。曾平治、田舍客の形。太皷持ち連れ立ち出る。
金彌　名山さん、ちつと靜かに行かしやんせいなア。
名山　わたしや八幡樣へ、ちつとばかり心願があるに依つて、氣が急いてならぬわいなア。
曾平　心願とは、何か心悩い事ぢや。
松野　太夫樣の心願は、大方な。
ト曾平治が肩を叩く。
曾平　サア、さうならよけれど。
太皷　オツと道草を取措いて、アレ／＼、海を見晴らしたあの床几へ行て、暫らく御休息あられうずるにて候ふ。
松野　サア／＼、行かしやんせいなア。
ト始終神樂にて、皆々舞臺へ來りて、床几に腰をかける。
松野　太夫樣、見やしやんせ、斯う見晴らした所は、けうとい景ではないかいなア。
金彌　アレ／＼、沖を通る帆かけ船、だん／＼小さうなつて、繪に畫いたやうなわいなア。
ト皆々向うを見て樂しむこなし、曾平治、名山を見て現の體。
名山　あの向うに見える島は、ありや何と云ふ所ぢやぞいなア。
太皷　あれか。あれは玄海島と云うて、この沖中の離れ島でござりまする。
名山　どうやら怖いやうな名ぢやなア。
金彌　中國さん、お前もちつと物云はんせんかいなア。
曾平　オ、サ／＼、お身達は浦々の風景を見て樂しむ。身共は又、太夫どのゝ花の顏を見て、せめては心床しに樂しむと云ふものぢやて。
太皷　ハテ、きつい思ひ込みやうぢやな。
曾平　ハテ、思ひ込んだればこそ、ソレ、金銀米錢を出して揚げを求め、箱崎の八幡へ參りたいと云ふに依つて、箱崎オ、合點だ、藝子を連れて參りたい、藝子かオ、合

點ぢや、引船の松野も連れて參りたい、松野かオ、合點ぢや、太鼓をオ、合點だ、合點ぢや〳〵と、諸事大腹中に合點したは、コレ、何の爲。皆名山に思はれたいばつかりぢや。なんと太夫樣、拙者が寸志、足下の胸中に徹しませうかの。

名山　サア、入り來るお客樣の中でも、正直さうで、呑み込みのよささうなお方ぢやに依つて、何やかや頼みたい事もあるし、八幡樣へ願かけた願ひもあるし、松野さんを頼んで神詣で。

曾平　仰せられる事は、一つも漏れぬではないが。

名山　それでわたしや、嬉しう思うて居るわいなア。

曾平　なるやうでならぬやうで、一圓呑み込めぬわいの。

松野　それ〳〵、當り障りのある事は、云はぬものぢやわいなア。

太鼓　ハテ、モウ、物事は抑へ目に、云はぬは云ふに勝るなりけり。

曾平　なんの事ぢや。

ト庭神樂になる。

金彌　アレ〳〵、お神樂が始まつたわいなア。

曾平　何かは知らぬが、賑はしい事ぢやなア。

ト庭神樂を替へて、向うより粂平、旅の形、三度笠を持ち出て

粂平　ハテ、すさまじい參詣だな。イヤ、お宮に參つて、暫らく休息いたして行くべい。オ、、幸ひの茶店だ。一服吸ひつけて行かう。イヤ、御免下されい。

ト煙管を出して煙草を吸ひつけようとして、名山と顏見合して

名山　ヤア、こなたは。

粂平　あなたは。

ト慟り。神樂止む。

名山　ア、コレ、惡い〳〵、惡いわいなア。

ト皆々を教へる。

曾平　惡いとは何か惡い。

名山　サア、その惡いと云うたわな。

金彌　太夫樣、何が惡いぞいなア。

名山　アノ、なんぢやわいな。今日は皆さんと連れ立つて八幡樣へ參つたぞえ。

皆々　さうぢやわいなア。

名山　サア、さうぢやけれど、あまりに參詣が群集するに依つて、あなたと連れ立つて歩いたら、何のかのと人が

嫌てうかと思うて、それが恥かしい。わたしやそれで惡いと云ふのぢやわいなア。

曾平　ハテ、初心な。身共は又、手に手を取りて道行をする心ぢや。サア／＼、來やれ／＼。

名山　マア、先へ行かしやんせ。後から行くわいなア。

松野　それでは濟まぬわいなア。

皆々　サア、ござりませ。

　トロ々に云ふを、曾平治留めて

曾平　ア、イヤ、兎角御機嫌に背くはいらぬもの。然らば身共は、皆を連れて先へ、そろ／＼と行くに依つて、後から靜かに早う來てたもれ。サア／＼、皆參れ／＼。

金彌　そんなら先へ行くぞえ。

太鼓　早うござりませえ。

曾平　サア、來やれ／＼。

　ト曾平治、皆々を連れ、ワヤ／＼と云ひながら鳥居の方へ入る。合ひ方になる。二人こなしあつて

名山　条平どの。

条平　名山さま、ハテ、變つた所でお目にかゝりましたなア。

名山　いつぞやお國の騷動、殿樣は行くへなくならしやんす。廓へ戻つても心ならぬ事ばかり。便りを聞かうにも手がゝりはなし。無事で居やしやんすかと、萬年草を受けて占うたり、心一つに月日を戀して、暮らして居ましたわいなア。

条平　イヤ、お案じは御尤も。下郎めもその砌り、國を立退き、お館沒落の上は、所詮腹かッさばいてとは存じましたなれども、イヤ／＼、若殿樣の生死定かならねば、とくと相糺し、御存命でさへござらうならば、土を穿つても尋ね出してお目にかゝり、菊池のお家に仇をなしたる盜賊めを詮議仕出し、寶の在所を求めた上、お家再興の願ひを立てんと、九州の探題職、毛利元就公へ相賴け御內意を受けて、忍び／＼に盜賊の詮議。まつた若殿のお行くへ、いろ／＼と詮議いたせど、今に於て廻り逢はず。これより中國へ立越えんと存ずるところ、お目にかかつたも不思議の御緣、先づは御無事で重疊に存じます。

名山　わたしとてもその心なれば、今日は廓を拔けて出ようか、明日は人目を忍んでと、思ひ暮らした折も折から、出合ふも神樣のお知らせ。わたしも一緒に連れて、殿樣を尋ねさせて下さんせいなア。

条平　ぢやと申しても、女中を伴うては。

名山　どうぞ頼むわいなア。
ト此うち岩、傳、長、權、これ皆手下にて、後へ出て左右へ別れ聞き居る。条平、ちよつと思案して
条平　ムウ。ようござる。お供仕らう。
名山　連れて行て下さんすか。
条平　ハテ、關破りとなつても、若殿に巡り逢ひ、御代にさへ出したら、その時は直ぐに身請けあるこなたの體。四も五もないから、下郎めがお供申して。
ト云ひ／＼名山が風俗を見て
果しもない長旅。こりや餘ツほど難儀な連れだわい。
名山　どうしたらよいぞや。
条平　裾もグッとからげたがよい。ドレ／＼。
ト裾をからげさす。名山、笑止がる。条平、いろ／＼あつて
名山　これでよい／＼。
条平　さうして、どこが目當だえ。
ト行かうとする。皆々立ち塞がる。
岩　奴どの、待たんせ。
皆々　待つてもらはう。
ト条平、名山を後に圍ひ
条平　待てとは何の用だ。
權　見りや、向きのよい若鳥を引ッかけて、うまい事するの。
傳　頭の道具から、むきばかりでも大事ない仕事。
權　首もよし。
長　年頃もよし。
岩　ずつしりとした金儲け。おいらもちつと、あやからうかい。
ト条平、こなしあつて
条平　ムウ。すりやうぬらは。
ト云はうとする。名山、袖を引いて留める。条平も氣を替へ
ハヽヽヽ、おてまへ達は、この海道を徘徊召さるゝ、彼の粹方とやら伊達衆とやら申すのだの。何を隱しませう。同道いたしたは、こりや身共が妹でござる。
皆々　なんと。
条平　サア、妹を連れて、八幡宮へ參詣いたし、只今下向。兄弟を捉へて、駈落ち者、ふけり者のやうに、ハヽヽヽ、ハテ、麁相千萬な。サ、妹、來やれ。
權　ハテ、兄弟であらうが、夫婦であらうが、斯う見入

つたら捨てゝはやらぬ。箱崎の沖で、大きな鰹が見入つたと思うて、奴どの、キリ／＼酒手を、やらんせ／＼。

粂平　こりや、足弱を伴ふたと思うて、うぬらが。

ト云はうとして、また氣を替へ、腰に挾みし錢二百文を出して抛り出し

岩　ソリヤ、望みの酒手ぢや。

こりや何ぢや。

ト取上げ見て

コレ、四人の中へ、たつたこれかい。みんな見やれ。おいらが命も廉うなつた。

皆々　脆いものぢやなア。

岩　目腐り錢が欲しくば、うぬらにこますわい。

ト目先へ打ちつける。

粂平　こりや何だな。物云ひを附けて喧嘩を仕掛け、うぬら、こりや物取り盜賊だな。

皆々　オヽ、知れた事。盜人ぢや。

ト名山、怖がつて粂平に取りつく。粂平なだめて

粂平　大事ござりませぬ。下から行く程附け上がりますは彼奴等が道でござります。大事ござりませぬ。片寄つてこざりませ。サア、蜻蛉めら、行く先に心が急けば、道おッ開いて通せばよし、惡く邪魔ひろぐが最後。何奴も此奴も容赦はない。一々海へ浚ひ込み、鰐や鰹の餌食にするぞ。

岩　面倒な。畳んでしまへ。

皆々　合點ぢや。

ト薪ざつぱを持つて双方よりかゝる。粂平、一人々々取つて投げ、ヒラリと拔く。皆々橋がゝりへ逃げる。粂平、名山を連れて追うて入る。バタ／＼にて仕出し大勢、喧嘩々々と云うて走り出る。この中へ松野、金彌、太鼓も出て

松野　喧嘩ぢやさうなわいなア。

金彌　わしや怖いわいなア。

太鼓　太夫樣を手放してはならぬ。サア、尋ねう／＼。

ト仕出しと一緒に橋がゝりへ入る。ト庭神樂になる。向うより四郎藏、粋な拵らへにて、鰐吉、巾着切りの形。四郎藏、鰐吉の首筋を持つて引摺り出て

四郎　うせう／＼。

鰐吉　お免されませ／＼。

四郎　免す事はならぬ。うせうてや。

鰐吉　モシ／＼、お紙入れを戻しましたら、どうぞ去なし

て下さりませ。
四郎　太い奴の。コリヤ、筑前一國の粹方、唐犬四郎藏を知りやアがらぬか。なんで差しを引きよつた。
鰐吉　サア、それは見外れましてござります。
四郎　見外れたでは濟まぬ。うせう。
ト引立てる所へ、九助出て分け入り
九助　マア／＼、待たつしやりませ。樣子は聞きました。マア／＼待たつしやりませ。
トいろ／＼と分ける。
四郎　貴樣は誰れぢや。
九助　おりや仲間でごんす。
四郎　ヤ。
九助　この海道を働く歪み。おいらが仲間でごんすが、唐犬の四郎藏どの、聞き及んで居やんす。コリヤ鰐吉よ、來い。
トこちらへ連れて來る。四郎藏、床几に腰をかけて胴亂を出し、煙草をのんで居る。九助、鰐吉をこちらへ連れて來て
われも働らくと云うて、目角を利かせいやい。大概人相でも知れるものぢや。阿房め。サア／＼、あやまれ／＼。

鰐吉　イヤモ、口のだるい程あやまつて居やんす。
九助　イヤ親方、高が二才あがりだ。料簡して、やらんせやらんせ。
四郎　惣體この海道を働らく歪みどもが、この四郎藏に目見得をさゝんが、第一の心得違ひぢや。
九助　さうでごんすとも。ぢやが、何も緣ぢや、マア、これで近付きにならうと云ふものぢや。
トばた／＼にて傳、長、權走り出て
三人　捨石、爰に居るか。
九助　街妻を手まへたげな。どうした／＼。
權　さればいやい。喧嘩ぢや／＼と云うて、人群集が固まつて來るさかい。つい鳥を逃がしたわい。
鰐吉　あの鳥を取り外しては、お頭に逢うて機嫌が惡かろ。云ひ譯がないわい。
九助　さうぢや。今日手まへて居らぬと、お頭の機嫌が惡い。皆手分けして、搜せ／＼。
傳　これから仲間の者を、百ばかり集めて、奴めを疊んで置いて、街妻めを尋ねうわい。
九助　さうぢや。おりや爰に見張つて居る。わいらは行け行け。

傳　合點ぢや。皆來い。
ト三人とも橋がゝりへ入る。
鰐吉　おれも行こかい。
九助　イヤ〳〵、爰に居い。時にカウト。衒妻を手まつたら、直ぐに通ひ船で島へやるワ。ぢやが、お頭の誂らへは二三人。せめて、ま一枚引ッかけたいものぢや。
ト思案する。右の筋を四郎藏、煙草のみ〳〵聞いて居る。
四郎　イヤコレ、先刻にから聞いて居れば、頭々と云ふが貴樣達の仲間の
九助　アイ、頭でごんす。
四郎　ムウ。して頭の所は。
九助　イヤ、それは。
四郎　ハテ、隱す事はない。鐵火博奕は盜みの下地。まんざら退いた仲でもねえ。頭と云や大勢の大將。して商賣は海か。
九助　ヤ。
四郎　但し山か。
九助　イヤ、海ぢや。
ト四郎藏こなしあつて
四郎　ムウ。面白い。仲間入りせう。
九助　仲間入りとは。
四郎　ソレ。
ト紙入れを抛り出し
中には五兩ばかり、差引きかけた仲間の仕事と、お頭への目見得の印ぢや。
ト九助取つて
九助　そんならアノ、おいらが仲間へ。
四郎　イヤ、近年にない不仕合せ。とんと腐り續けぢや。そこでマア、博奕商賣を暫らく休んで、元手のいらぬ夜の働らきぢや。新米ぢや。隨分引廻して下んせ。
九助　ムウ。呑み込んだ。そんならお頭の住家へ。
四郎　して、所は。
九助　向うの玄海島ぢや。
四郎　玄海島へ行こかい。直ぐに。
九助　合點ぢやか。おりやちつと仕掛けた仕事もある。鰐よ。いま聞く通りぢや。この若を連れて、お頭へ目見得を。
鰐吉　合點ぢや。サア、行きやんしよかい。
四郎　ホ、、こりや先刻には麁相云うた。料簡して下され。

九助　仲間の通ひ船で、直ぐに島へ。
四郎　ドリヤ、お頭に逢ふべいか。
　ト唄になり。鰐吉、サア／＼ごんせと云ひ／＼、四郎藏を連れ、橋がゝりへ入る。九助、鳥居の方へ入る。向うバタ／＼にて青柳、傾城にて廓を抜けて出た體。頬冠りをして走り出て
青柳　嬉しや、誰れも見咎めはせなんだ。どこと云ふ當途はなけれど、マア／＼、行き着き次第に。さうぢや／＼。
　ト云ひ／＼本舞臺へ走り來て、ウロ／＼して居る所へ橋がゝりより名山逃げて出て、二人行き當り
二人　お免されませ／＼。
　ト兩方へ別れて、顫へ／＼顔見合せ
名山　青柳さんぢやござんせぬか。
青柳　名山さんかいなア。
名山　そんならお前も。
青柳　廓を駈落ちしたのぢやわいなア。
名山　わたしも八幡樣へ參つて、途中から思ひつき、俄の駈落ちぢやわいなア。
　ト云ひ／＼方々を見て、顫へて居る。
青柳　きつい顫へやうぢやぞえ。
名山　さう云ふお前も。
青柳　マア、水なと一つ。
　ト茶屋の茶碗に酌んで來て、名山に飲ませ、我れも飲んで
　マア／＼、氣をしつかりと持たしやんせいなア。
　ト云ひ／＼、その身も癪を押へるこなし、いろ／＼あつて
　シタガ、名山さん、おんなじ廓を駈落ちすると云うても、わたしやお前が羨やましうならぬわいなア。
名山　何を云はしやんす事ぢややら。殿さんのお行くへは知れず、生死の程を聞かぬうちは、わたしや氣が氣ではござんせぬわいなア。
青柳　サア、田島さまの生死の知れぬは、却つて樂しみ。わたしが云ひ交した宗太郎さまは、孝と義理との道を立て、館に於て敢へない御切腹。
　ト云ひさして泣く。
名山　サア、その噂を聞いたわいなア。
青柳　云ひ交した殿御に別れ、何樂しみに生き永らへる心はなけれど、大友のお家に仇をなしたる惡人を、女でこそあれ、一太刀なりと恨み、夫へ手向けなば、これにま

したる追善あるまいと、心は尼法師とも思ひ暮らして居るけれど、儘ならぬは勤めの身の上。田舍客が仕切つての身請けの沙汰。あるにもあられず廓を拔けて、やうやう爰まで來たのぢやわいなア。

名山　ほんに、お前の云うての通り、殿様の生死の知れぬが、まだしもの樂しみぢやわいなア。

青柳　サア、そんなら人の見咎めぬうち、駈落ちの道連れにならうわいなア。

名山　さうして、どつちへ指して行かうわいなア。

青柳　そりやモウ、行きあたりばつたりぢやわいなア。

名山　それもさうかいなア。サア、ござんせいなア。

ト手を引き行かうとする所へ、岩、九助、長、兩方より出て名山青柳を捉へ

岩　コリヤ、してやつたワ。

青柳　狼藉な。何としやんす。

名山　青柳さん、ちやつと逃げさしやんせいなア。

岩　頤骨を立てやがるな。

ト引立てる所へ曾平治、出て

曾平　身の揚げて置いた太夫を、どうするのぢや。コレ、どうするのぢや。

皆々　エヽ、退いてけつかれ。

ト取つて拋り、三人して曾平治を散々踏む所へ、傳、權、長持を持つて出て、九助、名山を打込む。青柳それをと寄る。

岩　おのれも注文のうちぢや。

ト一緒に長持へ打込み、蓋をして

おりや後に殘つて、奴めを片附けてしまふ。わいらは先へ。

二人　合點ぢや。

ト長持を擔いで三人は入る。曾平治は踏まれたなりに後に屈んで居る。岩、九助、一つに寄つて

九助　浮洲よ。彼のはモウ戻られさうなものぢや。

岩　されば、此やうに隙のいるのは、どうでも今日は仕事先が多かつたと見える。

九助　いつもの符牒場へ行て待ち合して、連れ立つて行かうかい。

岩　それがよい。シタガ、コリヤ。

ト囁く。

九助　合點ぢや。

岩　來い。

初演の

繪番附

ト二人とも鳥居の方へツイと入る。トこけて居た曾平治、起きてこなしあつて、並木の方より捕り方の侍ひ四人、程よく出る。

捕方　曾平治さま。

曾平　主人元就どのゝ御意に依つて、隠し目付けの我れ我れ。この場の様子を主人へ。

ト侍ひ連れ、ツイと橋がゝりへ入る。とチヨン〳〵にて鳥居松原ともに西へ引いて取る。矢張り向う浪幕にて東より蘆原一間、眞中ばかり土手の上へ出るとギヤンギヤンと暮れ六ツの鐘鳴る。誂らへの合ひ方。向うより小萬、着流し抱へ帶、被衣を着て、鋲乘り物を附け粂八、三藏、ぶツ裂き羽織にて附き添ひ出る。小萬こなしあつて

小萬　最早黄昏、鳥は塒へ、行き交ふ人も絶え〴〵に、ハテ、閑靜な海の景色ぢやなア。

粂八　奥樣には、暫らくあれにて御休息あつて

三藏　然るべう存じまする。

小萬　供せい。

二人　ハツ。

ト小萬、靜かに本舞臺へ來る。皆々附いて出て、粂八三藏、ウツ〳〵あたりを見る。始終合ひ方にて、一緒になり

三藏　小萬さん。

粂八　あたりに人ぎれはごんせぬ。

ト小萬物云はず、顔にてあたりへ氣を附けいと云ふこなし。皆々寬うて居る。小萬、被衣を脱ぐ。脊中腰の廻り、卷き物を入れて居て、取出す。粂八三藏、衣裳を脱ぐ。乘り物舁きも手下の形になる。小萬、卷き物を見たり脇差の拵らへを見たりして

小萬　大概な仕事であつた。今の金は。

粂八　爰にごんす。

ト五十兩包みを二つ出して、小萬に渡す。

屋敷方の名を騙つて、こなんを玉に使ひ、市にて働らいた今日の仕事。

三藏　しくじりなしにやりつけたも、こなんの働らき。

手下　そりやその筈ぢや。筑前一國に隠れのない

皆々　かつきの小萬どの。

小萬　アヽコレ、無駄口きかずと、其方衆は先へ。

皆々　合點ぢや。

ト云ふうち、小萬、上着を脱いで一つ前になり、卷き

物腰の物着類皆々を乘り物へ抛り込み、刀を一腰殘し
腰に差し、金を懐中する。桑八三藏も右の形を乘り物
へ抛り込み

皆々　そんなら小萬さん。

小萬　行きや。

皆々　アイ。

ト手下、乘り物を舁いて橋がゝりへ入る。後にて小萬
こなしあつて

小萬　女子の身は髮形。所體と云ふにこのマア。

ト我が形を見て、こなしあつて

ア、浮世ぢやなア。

ト雨車にて時雨降る。小萬、空を見て

こりや時雨れて來たわいな。ドレ、わしも内へ。

トちよこ／＼走りにて行かうとする。矢張り雨車にて、
頻りに雨降る。向うより毛利元就、着付け長羽織にて、
大小差し、高足駄、蛇の目の傘を持ち、合羽の奴一
人、澤瀉の紋付きの小先提灯を持ち、先に立つて出る。
花道にて小萬、奴の提灯の灯影に顔を隱して、摺れ違
ひに元就に行き合ひ、双方チッと氣味合ひあつて、よ
ろしく摺れ違ひ、小萬、行かうとする。

元就　アイヤ／＼、女中。

ト輕う云うて留める。小萬こなしあつて

小萬　御用でござりますかえ。

元就　一しきり降る雨もいとはず、只一人の徒歩裸足は、
ハテ、サテ、濡れぢやな／＼。

ト小萬、物云はず行かうとするを、傘にて前へ引き廻
し謠にて

濡れてや鹿のひとり鳴く、實に面白き。

ト謠ひながら、小萬をヂリ／＼付け廻し、本舞臺へ來
て

戀と見た目は、コリヤ、黑星であらうがな。

小萬　何を仰しやりまするやら。

ト隙を窺ひ、逃げうとする仕打ち。雨車止む。元就、
空を見て傘を捨てる。

元就　家來、其方は先へ參れ。

ト囁く。

奴　ネイ／＼。

ト提灯を持ち、行かうとする。

元就　コリヤ、提灯は置いて參れ。

奴　ネイ／＼。

ト臆病口へ入る。

小萬　心急ぎにござりますれば、わたしも。

　ト又行かうとするを、また留めて

元就　ハテサテ、エヽ、これは何か、思ふお敵が長うて、斯う待つて居やうと思うて。

小萬　なんのマア、左樣の事ではござりませぬ。

元就　それ〳〵、さう隱す所が心得ぬ。有やうは身共も、かつぎの君にはあらねども、妾が方への忍びの道。只床しきは君が俤。

　ト提灯を取つて顏を見ようとする。小萬、脊向けて顏を見せぬこなし。よろしく立廻つて

小萬　サア、さう黒星を指されてからは、一言もござんせぬ。有やうは、わたしも戀ぢやわいなア。

元就　そりやこそな。茲な畜生めが。

　ト提灯を上手に下に置く。

小萬　お前樣も妾宅樣へ。きついお樂しみぢやな。

　ト云ふうちも逃げたい心。元就は始終小萬を目放しせぬ心にて

元就　イヤモ、樂しみやら苦しみやら。苦は色變る濱の松風。外にまた面白をかしい風が吹くなら。

小萬　靡く氣かえ。

　ト脊向けて云ふ。

元就　柳々。

　ト脊中をもたせかけて云ふ。

小萬　そんならアノ、わたしがやうな者でも、どうぞ談合でもせうかえ。と云うたら

元就　それこそは、開いた口なれ、直ぐに談合。

小萬　お妾樣があつてではないかえ。

元就　イヤモ、叱らうが怒らうが、そこらあたりは構はぬ構はぬ。

小萬　さうしてお前のお所はえ。

元就　此方の住家は福岡の屋敷。して、そもじの所は。

小萬　サア、わたしが所は。

元就　所は。

小萬　ツイ近所の。

元就　近所の。

小萬　アノ。

元就　玄海島か。

小萬　エヽ。

　トぎつくり。

元就　但しは萬海か。
小萬　なんと。
元就　かつぎの小萬。
小萬　エヽ。
　と頷ふ。
元就　目付けの者より知らせの人相。
ト小萬、逃げうとするを元就、引き廻して手早く提灯を取つて小萬が顔へ突きつける。小萬、提灯を叩き落し、双方へ別れ、柄に手をかけて、ヂツと身構へ、忍び三重になる。此うち最前より上手の方に、九助、出かけて居る。橋がゝりの方より粂平、岩、別れ〳〵に出かけ、窺ひ出て、この時粂平、ツカ〳〵と出て
粂平　元就さま。
元就　コリヤ。
ト押へて囁く。岩、うぬをと粂平にかゝる。よろしく立廻つて、よき所にて岩、橋がゝりの浪のうちへ飛び込む。粂平、南無三と猶豫するを、元就、行けと云ふこなし。粂平心得、引き續いて浪の中へ飛び込む。此うち小萬九助、囁きこなして、花道際まで摺り拔ける。元就、透し見て
元就　曲者。
ト引き留るを、小萬、振り切つて行く。元就、追ひかけようとするを、九助、うぬと切つてかゝる。立廻つて刀をもぎ取る。小萬、花道の中程まで行き、エヽと懐劍を元就へ手裏劍に打つ。元就右立廻りのうちにて程よく身を交し、九助手にて受け留める。小萬、向うへ入る。元就、九助を見事に投げつけ、右の刀にて止めを刺す。この途端よろしく

幕

四段目　玄海島の場

役名＝菊地田島之助。かつぎの小萬實ハ大内息女滿壽姫。唐犬四郎藏實ハ宍戸下綱。手下、鷗の兵六。同、浮洲の岩。同、あかの喜八。同、沖浦の國八。同、備中の桑八。同、闇の三藏。同、馬の傳。同潮見の長。同、水母の權。奴、粂平。傾城、名山。同、青柳。灘右衛門女房、お浪。玄海灘右衛門實ハ松浦五郎則宗。

造り物、三間の間、少し高舞臺がゝり荒木の柱、見付け鼠壁、納戸は上の方折り廻し障子屋臺。橋がゝり嶮岨なる岩を疊み、塀の心。この前に岩にて寄せたる井戸あり、臆病口の方も岩の切り組み、花道戸屋より二間程岸登りの體付き出し、これも岩の切組みにて、右小屋の上に荒木丸太の切り口を見せ、この上より登り下りの出入りにて、浪頭の合ひ方、太鼓は幕の内より打ち流し、道具出來次第に幕開き。

二重舞臺に、お浪、世話女房の拵らへにて、俎板を控へ、料理の拵らへして居る。片端に、喜八、國八、盗賊の形にて、味噌を摺り、菜を拵らへて手傳つて居る。平舞臺に、兵六、同じく盗人の形にて、小萬と竹刀打ち劍術の稽古の體。この見得よろしく、兵六小萬立廻りの間に、竹刀を叩き落し、小萬引廻して見事に投げる。

喜八　コリヤ〳〵、沖浦よ、また國が、腕をやられ居つたわい。

國八　イヤモウ、何として小萬さまは、前の板緣、巴、兵法は拔けきつてある。お頭の手下のうち、誰れか一人叶ふ者はないて。

ト此うち、兵六、起き上がり

兵六　サア、そのどえらい小萬さまに、兵法は叶はずともこの國の兵六は、日頃の思ひを、どうぞ叶へてもらひたい。

ト云ひ〳〵、小萬に取りつくを

小萬　エヽ、アタ嫌らしい。又しても〳〵、わしを捉へててんがうしくさるのかいやい。

ト引廻して逆腕取つて捻ぢ上げる。

兵六　アイタ、、、、。腕が捥げます〳〵。

なみ　さうして小萬さまは、大事の人の妹御。てんがうする國の兵六、その手を引き拔いてやつたが、よいわいなア。

小萬　アイ〳〵、斯うかいなア。

トぐつと捻ぢる。

兵六　アイタ、、、、。これは又、情ない。お家さんまでが。執成しはしてくれず、焚きつけるとは、どうしたものぢや。

なみ　サア、それも、日頃の仕振り。

小萬　同じ手下でも、可愛げの少ない兵六。この後よう窘なめよ。

ト突き放し、取つて投げられながら

兵六　ア、、これに懲りよ、と云ふ才坊よ。もう、お前に利身は掛けられぬ。流石の兵六、閉口々々。

なみ　オ、、それがよからう。お頭様も、奥にすや／＼休んでござれば、爰でまごついて、お目が覺めたら悪い。兵法の稽古も、もうよしにして、小萬さん、お前も爰へ來て、一服のましやんせいなア。

小萬　アイ／＼、さうせうわいなア。

ト竹刀を抛り出して二重舞臺へ上がる。

お浪さま、最前から、兄様が見えぬが、何處へぞ行かしやんしたかえ。

なみ　サア、こちの人はお頭様の病氣、どうぞ御本腹あるやうにとて、その事で、向う島へ渡らしやんしたわいなア。

小萬　ほんに、夜になると、時節なしに起るお頭様の病氣それでつんと。

ト思ひ入れあり、ちやつとこなしあつて

氣の毒なものでござんすわいなア。

兵六　なんの氣の毒な事の。ありや榮耀に誇つて、罰が當る病氣ぢや。

國八　コリヤ／＼、嬶よ、又そんな事云うて、もし灘右衛門どのが聞かしやつたら、どえらい目に遭ふぞよ。

なみ　さうぢや。常から隨分大事にかけいと云ひ付けてある。

喜八　お頭の身の上、コリヤ、滅多に悪う云ふ事はならぬぞよ。

兵六　ぢやと云うて噓ぢやなし。命がけの野暮な仕事は、手下のおいらにさして、お頭は寢たり起きたり、一體、おいらが晝寢は、當がなけりやせぬのに、兎角マア悪い樂寢ばつかりして居られるぢやて。

ト此うち橋がゝりより、灘右衛門、世話の形、元服頭にて、櫂の先に生貝の籠を附け、擔げて出て來て、暫らく、立ちどまり、様子を聞いて居る。これを知らずに

自體、生れついた野良くらな、極道と云ふは、あの和郎ぢや。それをおいらが仲間の、頭々と奉る灘右衛門どのぢや。この和郎も玄海と呼ばれては、恐らく海賊の親玉ぢや。この島の殿様同然。その和郎の元ぢやに依つて仲間の者が誰れがグッとも云ひ手はなけれど、あれが、なんの、盗人の頭。ハヽ、ぐにやついた産れつき。あの

和郎は、ほんの芋頭と云ふのぢや。
ト此うち、そろ〳〵、兵六が後へ來て
灘右　ムゥ。成る程、さうぢや。
兵六　なんと芋頭とはよからうが。おれが又、灘右衞門どのなら、あの芋頭を止めるに依つて、頭合ひなしつかりした者がある。それとあの妹の小萬さまと女夫にして、頭を勤めさす事ぢや。
灘右　ハヽヽヽ、そりや誰れぢや。
兵六　外でもない、おれぢや。
灘右　ヤ。
兵六　サア、この鬮の兵六を、頭とさつしやると、仕事も能うする。恰幅はよし。恐らく、こみづがあるまい。
灘右　さうすれば、何頭と云はれるぞ。
兵六　ハテ、どんな野暮が來ても、滅多に動かぬ。堅いと云ふ心で、ほうぼうの、金頭。
灘右　そんなら兵六、われを、頭に直さうか。
ト此うち、前へ出る。兵六心付き、灘右衞門を見る
兵六　ヤア、こなさんは灘右衞門どの。
ト恟りする。
灘右　イヤ頭。ほうぼうの金頭。

兵六　ヤア、そんなら最前から。
なみ　コレ、戻りかゝつて、相手になつて居やしやんすこちの人を、
小萬　それとも知らず、いろ〳〵の事を云うて、好い氣味の。
兵六　エヽ、根性の惡い。さうならさうと知らしてくれたがよい。おりや又、ありやお浪ぢやと思うて居た。
灘右　猿松め。
ト右の櫂にて脛を撲り、さん〴〵に打ち据ゑる。
兵六　アイタヽヽヽ。ア、コレ、灘右衞門どの、御料簡御料簡。
灘六　イヤ、ならぬ。おれは兎もあれ、頭の事を、惡う吐かすおのれ、滅多に料簡はせぬぞ。
ト又さんざんに打ち据ゑる。
兵六　ア、コレ〳〵、小萬さまお浪さま、二人の奴等もちやつと詫び事をしてくれぬかやい。
小萬　お浪さま、もうようごんしよ。好い加減に拾うてやらうかいなア。
なみ　さうぢや。こちの人に
小萬　早う詫び言を

灘右　イヤ〳〵、何奴も、詫び言さらすな。料簡せぬぞ。

ト皆々立つて、灘右衛門の側へ來る。

皆々　サア、そこをどうぞ。

灘右　ならぬ。おのれが極めた今のお頭。何に依らず、云ひ附けるを背くまい。惡う云ふまい。海賊仲間の長と奉るやう、誓紙に血判取つた、そのお頭の手をこみづく此奴ぢやに依つて。

ト又さん〳〵に打ち据ゑる。兵六、いろ〳〵とこなしあつて

兵六　ヤレ、痛いよ〳〵〳〵〳〵。

灘右　おのれ、いつそ打ち殺すぞ。

ト櫂を振り上げる。

兵六　アイ〳〵。

ト身を縮める。小萬、お浪、二人も灘右衛門を、止めて

小萬　兄さん、もうようござんす。料簡してやらしやんせいなア。

なみ　こちの人、小萬やわしらが挨拶。

小萬　どうぞ兵六を。

兵六　申し。これぢや。

ト兩手を上げて拜む。

灘右　アレ〳〵、云うたくらめ。

トきつとなるを、小萬、皆々留めて

皆々　サア、そこを、わしらが詫び言。

灘右　假にも惡う吐かす影に、もしお頭の耳へ入ると、この灘右衛門が。

ト障子屋臺より

田島　イヤ〳〵、大事ない。どうで無法な手下の奴等、灘右衛門、その氣兼ねには及ばぬぞ。

ト云ひ〳〵、田島之助、茶筌髷、若殿の拵らへ、大縞の褞袍を引つかけ、蒔繪の莨盆、太き煙管を携へ來る

皆々　エヽ、お頭樣。

灘右　すりや、最前からの樣子を。

田島　晝寢の覺めに、現のやうに、頭が叩かれた事を、イヤ………オヽ、ひぞられるを聞いたに依つて。

灘右　いづれお頭の耳へ入れたからは。

トきつとなる。

田島　ア、、コレ〳〵、灘右衛門、もう料簡して遣つてたも。頭のおれが挨拶ぢや。

灘右　イエ〳〵、また外の手下の奴等への、見せしめ。後

にお頭を。
田島　ハテ、よいわいの。兵六が事は構はず、ちつと其方に訊ねたい事があるて。爰へ〳〵。
ト太煙管にて招ぐ。小萬へこなしあつて
小萬　アレ、お頭様の呼んでぢや。兄さん、マアあそこへ。
灘右　ムウ。そんなら。
ト兵六を睨み付け、小萬、思ひ入れあつて灘右衛門をかこつけ
小萬　マア、ちやつと行かしやんせいなア。
ト二人、二重舞臺へ上がり、小萬、田島之助、灘右衛門の眞中へしやんと坐つて
アイ、兄さんが見えました。
ト田島之助、小萬と顏見合せ、こなしあつて
田島　オヽ小萬、聞きや其方は、途方もない騙りを。イヤ……何やらぢやあつた。オヽ、まぶな仕事をしやつたげな。
灘右　イヤ、妹めも、かつぎの小萬と云はれては、衒妻に似合はぬ、この灘右衛門が兄弟程あつて、相應な小仕事をば働らきまする。
田島　そりや、いつちよい事ぢや。マア、渡世に油斷なら出精して重疊々々。
なみ　コレ申し小萬さん、アレ、お頭様の御褒美のお詞。お前、嬉しからうがな。
小萬　アイ〳〵、わしや大概嬉しい事ぢやないわいなア。
喜八　お頭に譽めらるゝとは、エヽ、羨やましいなア。
兵六　おりや、胸がうづくわいな。
なみ　コレ、又そんな事を。
兵六　アイ〳〵。
トしよげる。
田島　時に灘右衛門、其方は最前から何處へ。
灘右　イヤ、時ともなしに起るお前様の御病氣。どうぞ療治の仕様はあるまいかと、向う島へ渡つて、醫師の聞き合せ。どうでも田舎は不自由な、思はしい名醫も手廻らず、せめてはと浦々の蜑に云ひ付けて、取寄せた。女房ども、その籠を。
なみ　アイ〳〵。
ト籠を取つて見て
こりや、生貝ぢやござんせぬかいなア。
灘右　サア、生貝はお目の藥。それで吟味させた九穴の大貝。もし眞珠があらうも知れぬ。妹、よう料理して、お

頭へ上げてくれ。

なみ　アイ／＼、合點でござんす。

ト右の籠を片脇へ取片付ける。

田島　ア、誠に緣は不思議のもの。國の騷動、家老筑後が惡心にて、東風右衞門と云ふ盜賊の、似せ上使に捕へられ、どうなる事と思ひの外、半纏を開いて出たところが思ひがけない灘右衞門。其方とても玄海と呼ばれ、海賊の張本。とつくりと樣子を聞けば。

灘右　菊池家大殿修理の大夫どのに、大恩請けた私し。その若殿の田島之助どの、お家の沒落。東風右衞門が連れて立退く所を、奪ひ返して、あなたを、この島へお供して立歸りましたも、これ以前の御恩送り。

田島　サア、その恩おくりに紛失の玄武の籏も詮議仕出し菊池家の家を立てると、世に賴もしき其方の一言。それを賴りに指圖の通り、いま海賊のお頭と呼ばれて居るも。

灘右　凡そこの島三里四方は、皆玄海が手下の者。九州の海賊は三筋あつて、この島の者より外人知らず。浦々の舟着きには、木戸を打つて手下の者が、油斷なく晝夜の番頭。例へ大時化で吹き流れの船が寄つても、用意の鐵砲大筒にて打ち碎き、滅多に寄せ付けねば、討手の氣遣ひなく、出るにも入るにも自由ならぬ島の要害。住む者は海賊ばかり。そこに匿まふあなたの身の上。鵜の毛で突いた程も氣遣ひはござりませぬ。ぢやに依つて、何事も灘右衞門が指圖の通り。

田島　詞に洩れぬ田島之助。この上ながら、兎角よいやうに其方を賴む。

小萬　さうでござんす。兄樣やみんなと一緒に、何日までもこの島に、あなたを置きましてなア。

兵六　海賊のお頭か。

なみ　實は菊池の若殿樣。

灘右　ぢやに依つて、人をなづける……イヤサ。

ト思ひ入れあつて

人知れず寶の詮議。お家再興の一つの手段。

田島　それに付けても灘右衞門、某が賴み置いた事。

灘右　賴みの事とは。

田島　エヽ、それは不粹な。ソレ、これも、アヽ、何やらぢや。オヽ、それぢや、げん、衒妻ぢや／＼、衒妻の事はどうぢや。

灘右　氣遣ひござりませぬ。浮洲の岩の手下の者を附けて遣つたれば、追ッ付け手まつて戻りませう。

ト これを聞いて、兵六、立ち上がり

兵六　イヤ、昨日からその仕事に出て居る浮洲。斯う隙の入るのが心元ない。二人の者、來い。

二人　合點ぢや。

ト 三人、向うへ行かうとする。

灘右　コリヤ待て、わいらは何所へ行くのぢや。

兵六　ハテ知れた事。九州へ渡つて、浮洲に代つてこの兵六、今の仕事を。

灘右　そりや無駄骨ぢや。よしにせい。

兵六　でも最前のおれがしくじり、その取返しに一働らき。

灘六　イヤ、この以後、キッと嗜なめば料簡して遣らう。

兵六　そりや忝ない。

ト 皆々立戻る。

灘右　コリヤ兵六、われは此うち、手の者どもに、今宵の仕事、殊に依つたら長崎へ渡らにやならぬ大金儲け。その手合せをとつくりと、云ひつけて置け。

兵六　ムウ。兼ねて、こなんが、云ひ付けて置いた彼の。

灘右　サ、何時か知らぬ。スワと云はゞ、必らずぬからぬやうに。

兵六　合點ぢや。

灘右　早う行け。

ト 兵六、橋がゝりへ、ツイトと入る。灘右衛門こなしあつて

灘右　マア、あれで此方はよいが……肝心のお頭のお頼み。浮洲めがきつう隙を。

ト 向うをチッと見る、戸屋の上の木戸口より

皆々　エイサッサ〳〵。

田島　アレ〳〵、灘右衛門、皆、戻り居つたさうな。

喜八　ソリヤ、待ちかねて居られる。早う〳〵。

皆々　エイサッサ〳〵〳〵。

ト 矢張り掛け聲にて、鹽見の長、馬の傳、水母の權、備中の柔八、長持を擔ひ、出て來て、本舞臺へ來る。

喜八　皆、戻つたか〳〵。

傳　オヽ、二人の者、やう〳〵今ぢや。

ト 小萬を見て

柔八　オヽ、小萬さんは先にか。

小萬　サア、わしやちよつと氣ぶさいな事があつて、それでふけつたわいの。

柔八　ムウ。とうでもそんな事で、浮洲めがおいらに遲れて

権　後へ殘り居つたか。

灘右　コリヤ〳〵、皆の者、岩は何とした。どうして後へ殘つて居るぞ。

長　イヤ、昨日の仕事が、何やかや手張つたに依つて。

灘右　ハテ、大概にして戻り居ればよいが。

傳　イヤ、彼奴も前先の見える奴。滅多に氣遣ひはごんせぬ。

なみ　こちの人、お頭様が待ち兼ねてぢや。今の代物なら、ちやつと爰へ。

灘右　成る程。さうして、云ひつけた彼の者は。

傳　この長持に。

灘右　早う出せ。

傳　合點ぢや。

ト立ち上がり、長持の蓋を開き

粂八　サア、二人の女中。

皆々　爰へ出やんせ。

ト名山、青柳、長持より飛び出て、皆々の姿を見て恟り。こなしあつて兩方へ立別れ、慄うて居る。田島之助、二重舞臺より名山を見て、太夫かと、立ちかゝらうとして、小萬を見て、ちやつと素知らぬ顏にて、其をのむ。小萬もムツとして、田島之助の側へ摺り寄つて、思ひ入れあるうち

灘右　ムウ。すりや、この二人の衒妻は。

傳　お頭の注文の名山。

長　いま一人は、青柳と云ふ

皆々　博多の廓の代物でごんす。

灘右　ハヽヽヽヽ、二人ともようごんしたの。

ト名山、慄へ〳〵

名山　サア、よう來たやら惡う來たやら、生きた心地はござんせぬわいなア。青柳さん。

青柳　爰はマア、冥土と云ふのか、地獄と云ふのか、思ひがけない名山さん。お前も、わたしも、死んで來たのかいなア。

名山　どうでもそんな事かいなア。

ト二人、始終、怖がつて慄へて居る。

権　コレ〳〵、二人ともに人馴れた、傾城にも似合はぬ。其やうに慄ふ事はないわいなう。

長　イヤ、傾城ぢやに依つて、慄ふは廓の慣ひぢや。

皆々　こりや長がやり居つた。

ト此うち田島之助、名山の顏を餘念なく見て居る。小

萬は又、田島之助に心を附けて居る。灘右衛門、こなしあつて

灘右　イヤナニ、妹小萬。

ト小萬、うつとりと、田島が方へこなしある。

ハテ、小萬々々。コリヤ妹。

ト恟りして

小萬　エヽ、兄さん、なんぢやぞいなア。

灘右　なんぢやどころか、われに云ひ付ける。日頃焦れて待ち兼ねてござるあの代物を、ちやつと頭の側へ。

小萬　イヽエ、逢はす事はござんせぬ。もう、ちやつと去なしてしまはしやんせいなア。

灘右　ハテサテ、折角取寄せたものを去なせとは。

小萬　イヤ、それは。

なみ　コレ／＼小萬さま、こちの人の云ひ付け。ちやつとお前も絆を開かして、お頭様の側へ。

小萬　サアそれでも、もし。

なみ　ハテ、女子は相身互ひ。荒男ばつかりの仲。お前がちやつとお頭様へ、サア、エヽ、呑み込みの悪い。

トきつと云ふ。小萬、こなしあつて

小萬　ハイ／＼、畏まりました。

トびんしやんして、平舞臺へ下り、名山が側へ行て

小萬　コレ、名山さんとやら云ふ、可愛らしい女中さん。ちやつとござんせい。

トじつせうなう云うて手を取る。

名山　エヽ。

ト恟りして

申し、お慈悲に、どうぞ廓へ去なして下さんせいなア。

小萬　そりや、わたしも勝手ぢやわいなア。

ト名山が手を振り放す。それではとこなしあつて

田島　エヘン／＼。

ト咳拂ひする。青柳も怖々顔を上げ、田島之助をヂッと見て

青柳　ヤア、お前は、慥かに殿様、田島之助さまではござんせぬかいなア。

田島　青柳、なんと久しいなア。

青柳　エヽ。

ト恟りして

ヤア、ほんに殿様に違ひはないわいなア。

名山　青柳さん、なんと云はしやんす。

ト云ひ／＼田島之助を見て

ヤア、お前は。
ト これ又、慟りする。
田島　太夫、無事でめでたい。
名山　エヽ、無事どころかいなア。
青柳　名山さん、ちやつと。
名山　ソレ。
ト 兩人、二重舞臺へ駈け上がり、田島之助を引廻して
こりやマア、夢ではないかいなア。逢ひたかつた〳〵わいなア。
皆々　そりやこそ、こたれかゝるワ。
小萬　エヽ、阿房らしい。
ト びんと體を背け、思ひ入れあり、田島之助、名山を取つて突き退け
田島　太夫、もうそのほだしは食べぬぞ。今までは處の便りはしくさらず、よう拋つて置いたな。誠に猫の鼻と傾城の心の底は、冷たいものぢや。
ト 口說きかける。名山、思ひ入れあつて
名山　何を云はしやんすやら。逢ひたいは山々なれど、何處をせうどにお前のお行くへ、處の便りも定かならず。水臭いはお前のお心。斯く云ふ處に御無事でござれば、なぜこの樣子を、知らせては下さんせなんだぞいなア。
ト 泣く。
田島　成る程、こりやおれが惡かつた。通路のならぬこの島。殊に女子の其方、便りせねば知らぬも理り。
青柳　そればかりか殿樣、最前からわたしらが怖がるを、よう默つて見て居やしやんしたなア。
田島　サア、あまり二人が怖がつて慄ふに依つて、とてもの事に、もそつと慄はさうと思うて、詞を掛けたい處をわざと堪えて默つて居たのぢや。
名山　アレ胴慾な。あんな事を。
青柳　前に變らぬ。矢ッ張り惡洒落。
田島　でも、太夫の身の上、心にかければこそ、灘右衛門を頼んで、爰へ寄せたのぢやないか。
青名　そんなら、わたしらを。
なみ　お頭のお頼み。それでお前方を。
名山　合點のゆかぬ殿樣のお姿。
青柳　お頭とはえ。
名山　さうして爰は、マア、何處でござんすえ。
皆々　玄海が島。
二人　エヽ。

灘右　コレ〳〵、お傾城達、菊池の若殿、田島之助さまの今のお身の上。
手下　こちらが仲間。
灘右　海賊のお頭ぢや。
二人　エヽ。
　トまた恟りこなしある。
田島　イヤ〳〵、其やうにびく〳〵驚ろくまい〳〵。前の大名と違うて、今の海賊の頭と云ふ者は、何に依らず心の儘に、それは〳〵、大抵氣樂でよいものではない。これと云ふも、皆灘右衛門が指圖。いかい世話になつて居る。太夫、其方も禮を云うてたも〳〵。
青柳　アレ、聞かしやんせ名山さん、何ぢや知らぬが、わたしやとんと合點がゆかぬわいなア。
名山　こちや合點のゆかぬ事も、怖い事も打忘れて、殿樣に逢うたのが、嬉しうて〳〵
小萬　エヽ、アレ、厚かましい。
　ト立ち上がり、名山を叩く眞似して皆々を見て
しやほんに阿房らしい。
　トこなしあつて又トンと坐ると、ジヤリ〳〵チユンと時計鳴る。

なみ　アレ、もう暮れ六ツの時計。
　ト灘右衛門こなしあつて、キツと空を眺め
灘右　今夜は十五夜。晴れ渡る月魄。
　ト此うち仕掛けにて空へ滿月現はれ出る。
長崎の渡海は最屈竟。
田島　灘右衛門、すりや其方は。
灘右　阿蘭陀船の入津、大金になる唐物を。
なみ　こちの人。もう今度は、よしにさしやんせいなア。
灘右　なにを。仕事の先を折る不吉者。猪口才云はずと、もう日が暮れてある。灯をともせ。
なみ　アイ〳〵。
　ト角行燈へ灯をともすうち、田島之助こなしあつて
田島　これから又、座頭ともに惱まされる刻限ぢや。
小萬　ほんに、その御病氣が起れば、申し。
灘右　幸ひ今宵はおれがお伽。妹を始めお傾城達、夏の月見を夜とともに。
田島　鬼なくてこの島の月を見るならば。
名青　そんなら殿樣、お前は。
田島　以前に變らぬ田島が、夜鶴の難病。
名山　どうぞ、物紛れになるやうに。

青柳　久し振りでのお杯。

なみ　お肴には九穴の生貝。

手下　イヤ、お頭は、赤貝好き。

小萬　エヽ、それもツンと、兄樣が

田島　何もかも引請けて。

灘右　追ツつけ御代のふくら煮に……嬶。サア。

なみ　サア、皆さん。

灘右　お頭、奥へ連れてござりませ。

　ト合ひ方になり、小萬こなしあつて女房殘らず、奥へ入る。灘右衞門、思ひ入れあつて、二重舞臺へ居直る。

どう思うても、彼奴を玉に遣へば、先達て曉が取替へた玄武の旗を手放さぬが。

　ト奥をちやつと見て

底心に。

　ト莨盆を引寄せて、莨のむ。

傳　コリヤ汐見、もう日が暮れてあるのに、浮洲はまだ戻り居らぬわい。

柔八　サア、この柔八が思ふには、昨日のざぶめが、もしけしてしまやしよまいかな。

權　そりや知れぬ。

皆々　何を起緣の惡い。

傳　おやと云うても。

灘右　ほんに、わいらが云ふ通り、浮洲の岩めが、怪しからぬ隙入りやう。

皆々　ア、申し、居り戻つたやうぢや。

　ト浪頭打ちかくろ。向う、戸屋の内より闇の三藏、唐犬四郎藏二人出て

四郎　思はぬ貴樣のいかい世話ぢや。

三藏　なんのいの、仲間になりや互ひぢや。

四郎　聞いたよりは海手の通路、用心の嚴しさ、とんと氣遣ひ氣なしぢや。

　ト云ひ〳〵兩人本舞臺へ下りて來て

三藏　サア、早うお頭へ引合さう。おれに附いて來たがよい。

四郎　兎角そこへよいやうに。

　ト本舞臺へ來る。

三藏　闇の三藏、昨日の和郎を。

皆々　連れ立つて戻つたか。

三藏　やう〳〵今ぢや。皆の者、この和郎の事を。

四郎　どうぞ早う頭へ、引合せてもらひたい。

傳　そりや合點ぢや。
ト此うち、灘右衛門、四郎藏をちやつと見て
灘右　皆の者、ついぞ見ぬ面相。ありや誰れぢや。
傳　昨日箱崎で、縛がかゝつてしくじつた人。それが緣になつて、どうぞ仲間入りがしたいとの頼み。
桑八　こなんや、お頭へ引合せてくれいとの事ぢや。
皆々　それぢやに依つて、どうぞこの和郎を。
灘右　ムウ、すりや、仲間入りして一働らき、働らいて見たい望みか。
四郎　さうでごんす。おれも箱崎では、唐犬の四郎藏と云はれては、相應な稼方。立つて小口をきけど、近年博奕が拂底で、とんと、あがつたに依つて、どうで平らな事はいけぬに依つて、元手なしの巧い商賣。かすり物ぐらゐは、これまでなんぼてゝ、まんざら素人のやうにごんすまい。世話ながら仲間へ入れて、提灯持ちなど働らかして下んせ。
灘右　ムウ。恰幅と云ひ、丈夫さうな性根玉。一人でも殖えるがこの島の繁昌。今の詞の引はなし、末頼もしい所がある。皆の者、こりや、お頭へさう云うて、働らかしてやらうかな。

皆々　灘右衛門どの、どうぞ、そこへこなさんが。
手下　お頭へ。
四郎　ムウ。そんならこなさんが、聞き傳へた玄海の灘右衛門と云ふ
皆々　オイノ、親玉ぢや。
四郎　それに合點のゆかぬ。玄海と云や海賊の張本。今の詞に頭と云ふ人あるからは、すりや、まだ外に頭と呼ばるゝ
傳　惣大將の海賊王が住します。
桑八　灘右衛門どのは關白職。
皆々　おいらは臣下の隅とり。ではない、物取り公家ぢや。
四郎　ハテナア。して、そのお頭と云ふは。
灘右　そりや追つて引合さうが、マア、仲間へ入るからは、萬ざら無手な者は使りない。貴樣もなんぞ覺えがあるか。
四郎　劍術は大場流。兵法は貞の神影。ちつとばかり。
灘右　イヤ、その流儀は歴々ぢや。
手下　そんなら、おいらが試しに。
ト兩人、四郎藏の兩手を摑みにかゝるを
四郎　覺えて居るとは大口なれど。

ト振りほどき、兩人を兩方へ取つて投げる。

長樫 ところを。

ト かゝるを、よろしく立廻り、皆々一時にかゝるを、有り合ふ、竹刀にて皆々を叩き伏せ

四郎 なんと玄海どの、そつとした我れらが手の內。

灘右 とくと見屆け、驚ろき入つた。

ト有り合ふ、庖丁を手裏劍に打つ。四郎藏、よろしく留めて

四郎 こりや危ない。云ふ事も刃物。

灘右 生疵絶えぬ、いがみの五體。

四郎 そんなら、古參のこなたへ。

ト打ち返す。灘右衛門、よろしく留めて

灘右 イヤ、生くら刀、身には立たぬ。

四郎 先づお怪我がなくて。

トこなしあつて、灘右衛門も思ひ入れあつて

灘右 ハテ、新入りには勿怪の四郎藏。

四郎 この上はお頭へ。

灘右 引合して、いよ／＼仲間。

皆々 イヤ、どうやら。

トきつとなるを

灘右 コリヤ、一人でも人をなづくるこの灘右衛門。イヤお頭の所存ぢやに依つて、わいらも互ひに別心なう。合點か。

傳 こなたさへ、その氣なら。

皆々 おいらが何も。

四郎 そりや、忝ない。

ト灘右衛門、四郎藏、心意氣ある所へ、奥パタ／＼にて、お浪出る。

なみ コレ／＼、こちの人、ちやつと來て下さんせいなナ。又お頭樣の御病氣が發つたわいなア。

灘右 ヤア／＼。そんならモウ、座頭が來居つたか。

なみ アイ、いま惱んでござる最中でござんす。早う來て下さんせ。

ト云ひ捨て走り入る。四郎藏こなしあつて

四郎 灘右衛門、合點のゆかぬ。お頭の病氣に座頭が來るとは。

灘右 以前は大國の主。その時のお仕置に、盲人の成敗。その妄念が附き添うて、夜陰に惱ますお頭の病根。

条八 それで世にある時は、芝居ぢやの亂舞ぢやのと。

傳 そのお頭の身の上を。

四郎　この唐犬が看護いたさう。
灘右　ヤ、なんと。
四郎　邪は正に勝つ事あたはず。心の鬱症。氣から生ずる病に依つて、魂魄、邪心の殘るなら。それこそ昔から武將は勿論、領主國主代官までも、皆難病を煩らふ筈。依つて事を糺して、仲間入りの手始め、お頭のお心をキッと。
灘右　面白い心の附け所。幸ひの唐犬四郎藏。お頭に引合はして、今宵はお側に寐ずの番人。畜生ならぬ人間の
四郎　この唐犬。
皆々　座頭が出るとも
四郎　仲間入りの手始めに
灘右　其方の働らき、望みの通り。
皆々　おいらはその間に、ぐつすりと。
灘右　大儀であつた。皆、休め。
皆々　オッと〆めたぞ。
灘右　四郎藏、奥へ。
ト唄になり、灘右衞門、四郎藏、こなしあつて奥へ入る。皆々は納戸口へ、右の一件、殘らず入る。浪頭烈しく打ちかける。向う戸屋の內バタ／＼にて、浮洲の岩は、本水にて一絞りに濡れて逃げて出る。續いて奴の粂平、これも本水にて絞り濡れ、追ひかけ出て、本舞臺にて兩人立廻り、浮洲の岩を下へ引廻して上へ立ち塞がつて
粂平　盜賊め、待ちやアがれ。
岩　ヤア、又うせたか。しつから追ひかける奴ぢや。
粂平　オヽ、大切なる詮議。うぬ、例へ海でも山でも、捕まへる處まで、追ひかけるのぢや。
岩　ハテ、根の強い者ぢやな。
粂平　うぬに繩打ち、元就さまへ引渡し、紛失の寶、詮議の手がゝり。
岩　イヤ、そんな事は、おりや知らぬぞ。
粂平　なんでも、盜人の手下。
ト立廻りよろしく、ドッコイと摑み合うてとまる所へ奥より、青柳、走り出て
青柳　ヤア、粂平どの、爰へはどうして。
粂平　思ひがけない青柳どの。下郞よりお前の身の上。
ト立廻りのうち
岩　ほんに昨日の衒妻。
青柳　コレイナウ、わしや名山さんは。

岩　イヤどつこい。
　ト始終立廻りにて
条平　名山さんも、この所に。
青柳　あの子ばかりでない、殿様も。
条平　ヤ、なんと。
　ト青柳の方へ行くを
岩　この間にさうぢや。
　ト橋がゝりへ逃げようとする。
条平　イヤ、うぬを。
　ト引廻す。浮洲の岩、立廻つて条平を振り切り、橋がかりの方の井戸へ飛び込む。
条平　ヤア、南無三。
青柳　滅相な。条平どの。
　トつか／＼行て、井戸の内を見て
条平　こりやコレ、慥かに空井戸。
　ト同じく中へ飛び込む。兵六、ツカ／＼戻つて來て、青柳に突き當り、愕りして
青柳　オヽ怖。誰れぢやぞいなア。
兵六　ヤア、見馴れぬ衒妻。われは。
青柳　さてはお前も、殿様の手下ぢやな。

兵六　ムウ。殿様と云ふからは、お頭の注文、浮洲が連れて戻つた、博多の廓の、お傾城。
青柳　青柳ぢやわいなア。
兵六　柳とは忝ない。
　ト云ひ／＼取りつく。
青柳　ア、コレ、滅相な。何するのぢやぞいなう。
兵六　何するとは知れた事。コレ、この島は女一人の男暮らし。所へそもじの御來臨。サア、ついちよつと。
　ト又いろ／＼しなだれるを
青柳　エヽ、嫌らしい。否ぢや／＼。
兵六　ハテ、聞分けのない。
　トいろ／＼しなだるゝ仕打ちあつて、無理に捕まへる所へ、臆病口の上よりバタ／＼にて、浮洲の岩、逃げて出て、兵六に躓づく。愕りして、立ち上がり
兵六　ヤア、わりや浮洲の岩か。
岩　鴨の。おりや昨日から亂騷ぎぢや。
　ト青柳、浮洲を見て
青柳　面妖な。いま井戸へ嵌つたこなさんが。
岩　そこらまでも通ひの抜け道、見附けられたゆゑせう事なしに。

青柳　ほんに、粂平どのは、どうしやんしたぞいなア。

ト此うち、浮洲の岩が出て來たる臆病口より、粂平もソロソロ窺ひ、出かけ居て

粂平　イヤ、氣遣ひない。爰に居る。

岩　ヤア、南無三、又かい。

兵六　浮洲。さては此奴が。

岩　島の様子を氣取つた奴ぢや。

兵六　そんなら、消してしまはにやならぬわい。

青柳　コレ、粂平どの、この島はな。

粂平　海賊盜賊の寄合ひ。それぢやに依つて。

兵岩　なにを。

トこれより浪頭烈しくなる。兩人、粂平にかゝる。青柳、恐る〳〵中へ入る。また立廻りにて、皆々二重舞臺へ上がり、さま〴〵烈しくあつて、粂平、兩人を引きつけ、青柳ともキツと、見得になる。　チヨン〳〵にて返し

右の飾り付け、西の方へ引いて取る。後に三間の間、二重舞臺、見附け金襖。上の横、付ひに折り廻し、二間の障子屋體。橋がゝりの方、揚幕。前は浪幕にて、岩組みの臺。塀の上にさま〴〵の枝を折りかけ振りよき松の枝へ上がり下りするやう恰好よろしく下には一面の竹の穗。すべて奥座敷の模樣。右二重舞臺の上に田島之助、褥の上に脇息に凭れ、病氣の發りし體。名山、擦つて居る。小萬、藥の七輪を團扇にて煽ぎ、藥を温めて居る。兩人介抱。遙か下の方に四郎藏、立派に畏まり、兩手を膝に置き、キツとして居る。四人この見得よろしく、座頭の合ひ方にて道具とまる。

ト始終これより右の合ひ方。小萬こなしあつて

小萬　申し名山さん、ちつとわたしが替つて、お脊中を擦らうかいなア。

名山　イエ〳〵、大事ござんせぬ。擦りつけて居る、殿樣のお脊中。お前は構はず、もうお藥を上げさしまして下さんせ。

小萬　エヽ、なんぼうお殿樣と云ひ交して居やしやんすと云うても、まんがちなお傾城さんではあるわいなア。

ト思ひ入れあつて七輪を煽ぐ。四郎藏、田島之助の方を見て

四郎　二人の女中。お頭の容體は。

ト兩人、こなしあつて

小名　いま靜まつた樣子。すや〳〵と

四郎　ムウ。そんならよし。こなんもさぞ草臥れ。これから不寢の番はこの唐犬。二人ともに次へ行て、少しの間休まんせ。

小萬　イエ〳〵、大事ござんせぬ。矢ッ張りお側に居て、御介抱を。

名山　アレ、まん勝ちなお方ぢやわいなア。御介抱はしつけたわたしが、お側に居てするわいなア。

小萬　やう〳〵今日來て、何も知りもせいで、こちやお頭樣の介抱は、これまでちよこ〳〵しつけて居るわいなア。それに二言目には、馴染顏して、オ、好かんわいなア。

　　　トこなしあつて、名山、ムッとして

名山　何を云はんす。小萬さんとやら。そんなら殿樣の御介抱を、これまでちよこ〳〵しつけて居やしやんすかえ。

小萬　アイ、慮外ながら。

名山　こりやモウ、起してキッと聞かにやならぬわいなア。

　　　ト立ち上がる。

四郎　ア、コレ〳〵、名山どのとやら、そりや何事ぢや。

名山　エ、。

四郎　折角寢入りかゝつて居るお頭を引起すとは、如何に馴染の女中ぢやとて、そりや病氣の介抱ではない。法界悋氣とやら。

名山　サア、それはな。

四郎　コレ、おれが惡い事は云はぬ。マア〳〵、ちつとの間次へ行かんせ。

小萬　それ〳〵、兎角お側に置くと邪魔になる。ちやつと次へやらしやんせいなア。

四郎　コレ、小萬さんとやら、お前も一緒に行たがよい。

小萬　イヤ、わたしは大事ござんせぬ。

四郎　ハテ、見たところが、互ひに氣味合ひの燒餅と見える。どちらか一人殘れば、一人が怒る。さすれば、お頭の病氣の障りぢやに依つて、二人が一緒に、おれが云ふ通りに。

兩人　イ、エ、それでもな。

四郎　これはしたり、ばたついて目を覺まして、また惱ますのか。

兩人　イ、エ、さうではなけれど。

四郎　なけれどなら、少しの間ぢや。

小萬　エヽ、そんなら。
ト思ひ入れあつて、名山の手を取り
お傾城さん、ござんせいなア。
ト引立て、こなしあつて奥へ入る。四郎藏、見送りて
四郎　ハテ、女子と云ふものは。
トこなしあつて、田島之助が體を見て
九州に於て、誰れ肩を並ぶる大名もなき、武勇の名家に
生れながら、身の放埒より國家の沒落。いま海賊の張本
の頭と呼ばれ、安穩に身を過ぎ、色慾に迷ふ性根の蕩け。
愚なるかな。座頭盲目の死靈に、時ならず惱まされるも
理り至極。
ト思ひ入れ。田島之助、目をぱつちり開き
田島　誠や、釋尊天地萬法を勸めて、悉く目なしなりと說
き給ふ。草木だにも、佛になれば、まして況んや人間の
などか佛にならざらん。
四郎　そりや倶舍論の經文。
田島　毛利元就が家臣宍戸下總。珍らしき對面。
トきつと顏を見る。
四郎　田島之助さま、こなたは。
田島　水は方圓の器に隨ひ、その水も見やうに依つて、い
ろいろに。天人は瑠璃、魚は棲家、人は矢張り水と見れ
ど、餓鬼は炎と見るとかや。某が心の內。下總、見事其
方は汲み取るか。
四郎　ハッ、菊池のお家は毛利の累葉。さるに依つて主人
元就が下知を請け、某この所へ入込みしも、御本心を探
つた上、菊池のお家を再興せん爲。
田島　その本心亂れて、未だ納まらぬ時節なれば。
四郎　拙者が計らひ、何卒病氣の配劑、御本腹の容體を。
田島　イヤ、それとても今宵のうち。
ト此うち障子屋體より、瀨右衛門、障子を開き、ちよ
つと樣子を窺うて居る。この時、田島之助、四郎藏、
顏を見合せ、瀨右衛門、障子をピッシャリ立てる。四
郎藏こなしあつて
四郎　すりや。
田島　コリヤ、本腹の時節を待て。
四郎　でも。
田島　又もや病氣が
ト四郎藏こなし。
四郎　座頭の死靈を守護の番犬。
田島　次へ同道。

四郎　ハッ。

ト唄になり、田島之助、四郎藏、思ひ入れあつて奥へ入る。あと合ひ方になる。灘右衛門、障子屋體より、そろ〳〵出て來て、ちよつと奥を見て

灘右　ハテ、猪口才な田島之助。我が心底を探らん爲、虚病を構へて座頭の死靈。疾よりそれと何もかも……心惜きは唐犬四郎藏。手下と僞はる宍戸が悴。イヤ、それよりは今宵の手段。成就の汐時。

ト空をちよつと眺めて

月も傾むく西の空。雲横たはつた和田海に入る渡海の刻限……ムウ。

ト思ひ入れある所へ、橋がゝりより、馬の傳はじめ、手下殘らず、バラ〳〵と出る。

傳　濱手の者が知らせの上は。

手下　早う渡海を。

灘右　如何にも、今宵長崎へ渡り、異國の船の入津。それを働らきとは僞はり。誠は毛利元就、我が身の上、この島の樣子を氣取り、謀り事を以て討ち取らんと、多くの人數を語らひ、向うなる筑前福岡に陣屋を構へ、密かに屯ろす。その裏を掻き、此方より鯨寄りしと獵船を馳せ出し、合圖を極めて元就めを。

傳　すりや、仲間の者が一手になつて。

灘右　イヤ、三方四方に引分け、船手は船手、陸は陸と、伏兵を以て討ち立つる、手段は虚々實々。何事も我が指圖。

手下　して、頭と呼ばする田島之助は。

灘右　彼奴は庭籠の小鳥同然。菊池家に大恩請けしと僞はり、一旦仲間の頭と呼ばすも、まさかの名目、人をなづくる手段なれども、誠に歸伏せざる時は、ハテ、玄武の簾を引裂き、ツイ締め殺す分の事ぢや。

皆々　天晴れ。

灘右　イザ、閑居の岩窟へ。

皆々　ハツ。

灘右　皆の者、參れ。

ト合ひ方、浪頭、靜かに、灘右衛門こなしあつて、皆皆を隨へ、花道へ入る。とシヤンと常の合ひ方になる。一間の障子を開き、田島之助、蒲團の上に、名山を引寄せ

名山　申し、殿さん、お前と、斯うして、久し振りぢやなア。

田島　太夫、今まではどうして居たぞ。久しぶり。定めて
　引く手數多の身の上なれば、何も淋しい事はなかつたで
　あらうの。
名山　ナンノイナア、お前に別れてから、今日を今日とも
　思はずに。
田島　ナニ嘘ばつかり。
名山　ほんまちやわいなア。
田島　コリヤ、ほんまか、嘘か、改めて見たら、ツイ知れ
　るぞよ。
名山　アイ、どうなとさしやんせいなア。
田島　さう云や、改めて、見ずばなるまい。
　トぐつと引寄せ、いろ〳〵こなしある。名山もこなし
　あるうち、奥より小萬出て來て
小萬　お頭さん、お頭さんは何處へ行かしやんしたぞいな
　ア。病氣が癒ると又、最前の傾城づらが大方。
　ト思ひ入れあつて
　エヽ、辛氣。何處へ行かしやんしたか知らん。
　トいろ〳〵尋れるこなし。田島之助、悄りして名山に
　囁き、一間を出て來て
田島　小萬、おりや爰に居る。

小萬　エヽ、お頭様、お前の身の上、もう爰には置かれま
　せぬわいなア。
田島　ヤア、なんと云やる。
小萬　サア、兄さんの心底はな。
　ト思ひ入れあつて
　こりや、爰では云はれぬ。様子は道々云ふ程に、マア、
　ござんせいなア。
田島　これはしたり、何處へ行くのぢや。
小萬　サア、それはアノ、行く先の目當はなけれど、二人
　連れ立つて立退くのぢやわいなア。
　ト引立てるうち、障子細目に明け、名山招ぐ。田島之
　助、これを見て
田島　サア〳〵、そこへ行く。必らず出まいぞ。出ると惡
　いぞ。
　ト小萬を教へて、いろ〳〵ある。小萬、ちやつと見て
小萬　申し、あの招ぐのは、先刻のお傾城さんかえ。
田島　ムウ。
　ト息を呑んで
　成る程、名山ぢや。
小萬　どうでも連れまして退かにやならぬ。サア〳〵、來

て下さんせいなア。
ト引ッ張る。田島之助、こなしあつて
田島　待ちや小萬。灘右衛門が指圖なければ往來の船の通ひ路叶はず。この島を立退くに、外に船の手がゝりでもあるか。
小萬　エヽ。
田島　サヽ何處へも行かれぬ玄海が島。おりやモウ碇を下ろして居る。なんの何處へ行かう。いま其處へ。
ト名山に云うて、小萬を見る。
イヤサ、この島を離れる氣はない。
ト小萬、思案して
小萬　ほんに、それもさうぢやわいなア。この上は、どうぞ兄さんにこの譯を。
ト割つて云はうと云ふ事を、仕方にて、思案する。田島之助、名山といろ／＼と仕方して、其所へ行くと云ふこなし。名山呑み込み、障子をさす。よき所にて二人、顔を見合せ、小萬、ヂッとなる。田島之助は奥へ行きたいけれど、少し氣兼ねのこなし。
田島　小萬、其方ももう寐やらんか。
小萬　アイ、獨り伏屋の月でも詠めて、枕に伽でもさゝうかいなア。
トぴんと拗ねたるこなし。
田島　ドレ、某も寐所へ。
小萬　ア、申し、寐やしやんすかえ。
田島　サア、ほつちりと起きても居られず。
小萬　名山さんと枕を並べ。
田島　ヤ。
ト堪え兼ねたるこなしあつて
小萬　そりや聞えぬ、胴慾ぢや／＼わいなア。
ト取りついて、大きに泣く。
田島　コレ／＼、奥へ聞えては。
ト名山の方へ、こなしあつて
イヤ、灘右衛門が聞いたら悪からう。
小萬　イエ／＼、大事ござんせぬ。斯うなるからは顯はれても構やせぬ。この春お前が、この島へござんしてから、ほんにマアいとしらしいと、思ひ初めは初めながら、打出して云はれはせず、殊に又戀も情も辨まへないこの島。兄様は元より、荒々しい殿達の中に育ちては、あの女子は金平ぢや、落して來たのぢやと皆さんに云はれるが嬉しくて、見るを見眞似に世のすぎはひ。空恐ろしい盗み

騙りも、サア、これには段々譯のある事。でも、お前の思惑も恥かしくて、さらば身持ちを直さうぞ、氣も詞も改めてと、思うたばかり面伏せ。今さら常の女子にもなられはせず、人目ふせぎの負け惜しみ。都方で持て扱ふ大和詞に引替へて、まぶの仕事をして來たの、爰がやわぢやの、そこを蹴つてしまへのと、あるとあられぬ、口わんばい。詞で云へども心では、お前の手前が恥かしく、思へど今さら直されぬ身の行跡。それもお前は堪忍する氣なればこそ、折に觸れては、嬉しい夜を、明かした事も有明の、今さら愛想を盡かされうとは、わたしや知らなんだ〳〵わいなア。

田島　ハテサテ小萬、某がこの島へ來た日から、其方の志しを忘れねばこそ、ソレ、云うた事を忘れはしやるまいがの。

小萬　イヽエ、云はしやんした事は、皆嘘ぢや。

田島　僞はりではないわいなう。

小萬　僞はりでない者が、あのやうな美しい傾城を呼び寄せしやんしたは、エヽ、ツヽとモウ、氣の定まらぬお頭樣ではあるわいなア。

田島　愚痴な事を云やるわいなう。コレ、おれがアノ名山を呼び寄せたは。

ト　こなしあつて

サア、あれは、おゝそれよ。其方をば一生の妻にせうと思ふに依つて、あの太夫を呼び寄せ、廓で取り交した起請も取り戻して、互ひに愛念殘らぬやうに、そしてその上で、其方と心より添はうと思うて。ツイちよつと名山に得心さして來う。

ト　行かうとする袂を扣へ

小萬　それ程までに、事を分けて云はしやんすもの。わたしぢやとてまんざらに。

田島　なんの悋氣ぢやらう。これ程に事を分けて云ふからは、悋氣せう筈がない。ちよつと逢うて來う。

ト　小萬、袂を持つて、默つて居る。

コレ、騙しやせぬ。つい來るわいなう。

ト　云うても放さぬゆゑ

これは又、疑ひ深い。よい〳〵、嘘をつかぬと云ふ證據を見せう。

小萬　エヽ。

ト　袖を放す。

田島　サア、その證據は。

ト香爐を取つて、懷中より香を出し
こりや某が、秘藏の柴舟。
トちよつと火加減をして
この香の立たぬうち、得心さして來るが、小萬、待つて
居やるか。
小萬　そんなら、アノ、この香の立たぬうち。
田島　ついちよつと行て。
ト行かうとする。思ひ入れあつて
イヤ〳〵、小萬、某が方から證據を渡したれば、其方も
又、爰に待つて居ると云ふ、何なりと證據をおこしや。
小萬　わたしにかえ。
田島　ア、簪も古し、櫛も嫌なり。なんぞ大事にするも
のを。
ト小萬の懷中より守り袋を取り出し
コレ〳〵、幸ひのこの守り袋。
小萬　イエ、それは。
田島　ならぬか。エ、聞えた。こりや起請ぢやな。某より
外に、云ひ交した男があつて、その男からおこした、二
世の固めの起請か。
小萬　さうではござんせぬが、兄さんの大事にかけいと、
常々の云ひ付け。
田島　それで遣る事はならぬと云ふのか。
小萬　なんのさうでは。
田島　そんなら、預けて置きや。
ト取る。
小萬　サア、そんなら必らず麁末に。
田島　ツイ、行て來るぞよ。
トちよつと留めて
小萬　どう思うて見ても、以前のお馴染、田舍に育つたわ
たしとは違うて、廓の全盛、所謂とやら手管とやら。
田島　ハテサテ、まだいの。コレ、其方もかつぎの小萬と
云うて、まんざらな素人でもなし。所謂手管も昔は昔、
今は今。
小萬　この柴舟の香の煙りの、必らず仇にならぬやうに。
田島　誓ひの守に、しつかりと。
小萬　お頭さん。
田島　待つて居や。
ト唄になり、名山、また障子を明けて招ぐ。田島之助
少しこなしあつて、一間へ入る。障子さす。あと靜か
なる合ひ方、小萬、思案のこなし

小萬　お頭さんのお詞、よもやとは思うても、くどう云ふたらよつと又、愛想でも盡きやうかと思うて、云ひたい事をえゝ云ひはせねど、どう思うて見ても。

ト我が形を見て

不束な身なれば、お氣に入らう筈もなし、定めて今頃は

ト又奥の方を見て、また香爐を眺め

この香は、もう立ち切りさうなもの。

ト香爐をヂッと見詰め

香を送れば、縁切れると云ふ、譬へもあるに。

トまた、奥を見て

下地からの馴染と云ひ、どう思うて見ても、こりやモウ、香の立つ間は待たれぬわいなア。彼處へ行て、名山さんと三つ鼎、是非お頭さんを此方へ貰うて。オヽ、さうぢや。

ト一間を目がけ、ツカ／＼と行かうとする。拔け穴の井戸の中より

灘右　待つた。姫君、待たつしやれ。

小萬　ヤ、なんと。

灘右　色に迷うてその身を亡ぼし、未來の父御に孝が立たうか。

小萬　さう云ふは、慥かに。

ト振返る。雨車にて雨降る。灘右衛門、簑笠にて、鯨突きのモリを持ちて、拔け穴よりセリ上げにて出る。

小萬　ヤア、兄さん。

灘右　こなたの身の上、聞くと等しく、取つて返せしこの拔け道。

小萬　そんなら。

トちよつとこなしあつて

エヽ、恥かしい。

ト兩袖を顏に當てる。

灘右　コレ。

ト小萬が胸倉を取つて引廻す。これより浪頭入りの合ひ方になり、灘右衛門、モリを捨て、簑笠をかなぐりこなしあつて

灘右　今は何をか包まん、こなたの身の上、誰れあらう、九州に於て、琳聖太子の末葉たる、大内多々羅之助義弘卿の御胤、滿壽姫。我れも名に負ふ大内の忠臣、松浦太郎左衛門が忰、同苗五郎則宗。

小萬　コレナウ五郎、我が身の上、詳しく記した守り袋も、最前田島どのへ、待つて居ると云ふ約束に。

田島　渡さつしやりましたか。
小萬　ホイナウ。
田島　すりや、こなた、灘右衛門が本名も。ホイ。
トこなしくつて
小萬　この上は家來のよしみ、其方を頼む。手段の爲のお頭を、どうぞ、ほんまのお頭にして、わしと夫婦に仲睦まじく、添はれるやうに。
灘右　ヤア、おかしやれ。彼れが親めに恩義を請けしとは僞はり。實は謀叛の梯に事よせ。成就の後は討ち放す兼ねての所存。それとも知らず、こなたは矢ッ張り。
小萬　名山を殺して、田島さんと添はしてたもいなう。
田島　すりや、仇も恨みも打忘れ
小萬　夫婦になれば、わしや本望。
田島　イヤ、頼みにならぬ人心も、つれなう當れば。
小萬　筐こそ今は仇なれ、この香爐
ト以前の香爐を取上げる。灘右衛門、小萬が顏をキッと見て
灘右　只一筋に思ふとも、あつちは計略、名山が薫りにほだされ、此方は慥かに伽羅の焚きさし。それを知らずにうか／＼と、大事を明かした、徒ら女。見るもなか／＼恨みの香爐。
ト右の香爐を取つて、井戸の中へ打ち込む。パッと狼煙上がる。ドンチヤンと達責めになり、小萬、恟り。灘右衛門、思ひ入れあつて
小萬　ヤア、あの鉦大鼓は。
灘右　某が計略。刻限違はぬ味方の手筈。天晴れ頼もしき健氣の者ども。
ト笑を含み、向うを見ると、バタ／＼にて馬の傳、鯨突きの形にて、銛を持ち出て、花道にて
傳　松浦五郎どのへ、注進々々。
灘右　身が本名明かした其方、注進の様子は。
傳　先程の手筈、徒黨の面々。向う島の濱手へ漁船を漕ぎ寄せ、鯨の寄りし體にて駈け付け、毛利が陣屋を押取り巻き、引包んで討ち取らんと切つて出で、只今、勝負は眞最中。大方味方の勝利と見ゆれば、御安堵あられよ五郎どの。
ト云ひ捨て引返し入る。灘右衛門、ぞく／＼とこなしあり
灘右　すりや、元就は網代の魚。追ッつけ自滅。
小萬　して、田島どのゝお身の上は。

灘右　彼奴も生けては置かぬ。
小萬　ヤア。
灘右　コレ、事成就の上は、こなたを取立て、大内家の再興と、松浦五郎がこれまで、海賊となり盗賊と呼ばれ、千辛萬苦の肝膽を碎きし甲斐あつて、今月今日毛利を討取り、中國九州掌握すれば、御身の安堵。拙者が忠義を思ひやり、仇を斷ち切り父御の家名、女ながらも探題職と呼ばるゝ所存はござらぬか。滿壽姫さま。
小萬　イヤ、思ひ切らうと、心で心を取り直しても、輪廻は離れぬ女子の常。
灘右　大内の胤と云ふ事を、忘れさつしやつたか。
小萬　サア、それは。
灘右　思ひ切らつしやれ。
小萬　サア。
灘右　菊池は大内の仇敵。
小萬　サア。
灘右　サア。
兩人　サア／＼／＼。
　ト此うち灘右衛門、キッと空を眺めて
灘右　ア、ラ心得ぬ。紫星の北に斷續して、火星これが爲に光りを失ひ、紫微宮を犯して、變化を生ぜし有樣は、すりや某が大望も、半途より空しく敵方へ、洩れ聞えしと云ふ知らせなるか。ハヽヽヽ。ハテ忌はしき前表ぢやよなア。
　トこなし、ある所へ、バタ／＼にて、お浪、手負にて走り出て
なみ　申し、お姫樣、五郎どの。
灘右　何ゆゑ其方はその深手。
なみ　サア、今宵の手段、敵を計る計略なれば、やがて元就の陣所へ押寄せたるに、思ひの外に、元就へ漏れ聞えしか、用意は兼ねて備はつて、以前の知らせは皆僞はり。一味の者ども裏返り、誠の味方は浮洲と閑。これも生死は覺束なく、女ながらもこの事を、お前に知らさんその爲に、やう／＼切り拔け、立歸つたわいなア。
　ト苦しみのこなし。灘右衛門キッとなるこなしあつて
灘右　ヤア、兼ねて計りし今宵の手段は。
なみ　殘らず敵へ。
　ト無念のこなし。
この事を知らせし上、所詮、助からぬわたしが深手。お姫樣、五郎どの。

灘右　ト刀を取り直し、自害する。灘右衛門こなしあつて
計略の爲、勿體なくも、姫君を妹となし、乳人たる
其方を、女房と世を僞はりし甲斐もなく……ムウ。
トこなしあつて首をポンと打ち
人に洩らさぬ今宵の手段も、蟻の一穴、何者か。
ト思ひ入れある所へ、手下四人、灘右衛門を取卷く。
灘右衛門、小萬をキッと圍ふ。

手下　叛逆の松浦五郎。
同二　元就公への手柄初め。
同三　繩かけて御前へ引く。
四人　腕廻せ。
灘右　すりや、うぬらも裏返つたな。
四郎　うぬが本名。人に知らるゝ海賊の張本。
田島　あさる雉子の妻戀ふ例し。
皆々　そこ動くな。
ト田島之助、四郎藏、ツカ〳〵と出る。
小萬　ヤア、田島さん。
灘右　最前立ち聞いた、汝が本名。
四郎　毛利隨一の忠臣、宍戸下綱、松浦五郎を討手の役目。
田島　妹小萬と呼びたるも、誠は義弘が忘れ形見の滿壽姬。

灘右　ヤ、なんと。
田島　最前香爐と取交せしこの守り袋。
四郎　詳しく知れし大内の系圖、最早遁がれぬ松浦五郎。
皆々　覺悟いたせ。
灘右　ムウ、すりや姫君を囮に、うぬらが謀計。もうこの
上は、毒喰はゞ皿。
四郎　ソリヤ、者ども。
皆々　やらぬぞ。
ト双方よりかゝる。灘右衛門、千鳥に投げて手早く銛
を取りて振り上げる。皆々逃げ込む。直ぐに、田島之
助を目掛け、二重舞臺へ上がる。灘右衛門、四郎藏、
小萬を下手へ引廻し、三人、キッと見得。立廻つてド
ッコイととまる。チョン〳〵にてこの前へ淺黄幕切つ
て下ろす。一面の蘆原浪打ち際の模樣、矢張り遠責め
浪頭の合ひ方。八人の人數、皆々腰簑鯨突きの形にて
銛を持つて出て
喜八　皆の者、灘右衛門はどうだ。
皆々　風を喰つて、家内に居らぬ。高飛びのならぬこの離
れ島。
粂八　本名は松浦五郎、小萬と云ふも大内の娘、滿壽姬。

權　毛利家へ裏返つた手柄始め、兩人ともに遁がさぬよう。
傳　鷗と浮洲は云ひ合せの仲間外れ。矢ッ張り灘右衞門が味方。
團八　見附け次第に此奴らも片附け、コリヤ、鯨突きは手柄次第ぢや。
長　みな一の銛をぬからぬやうに。
喜八　手分け定めて、コリヤ。
ト左右へ囁く。また次へ囁く。
皆々　合點ぢや。
喜八　みな來い。
ト喜八、權、粂八など臆病口へ走り入る。長、傳、手下殘り、隱れる。始終遠責め。浪頭にて、橋がゝりより浮洲の岩、鷗の兵六、粂平を取圍み出て、本舞臺へ直る。
粂平　最前助けた二人の盜賊、また敵たふとは自業自得。觀念ひろがう。
兩人　なにを。
トこれより粂平、二人を相手に取り、タテになる。右タテのうち、橋がゝりにて

呼び　松浦五郎は主從ともに、外國船に飛び乘りました。何れも、熊手引綱の用意々々。
トこの聲にて、兵六、岩、少し猶豫して
二人　ヤア、あれは。
粂平　うぬ。
ト兩人が首をポンと切る。
海賊の張本松浦五郎を、搦め捕るはこの粂平。さうぢや。
トこなしあつて走り入る。チヨン／＼。
右淺黄幕切つて落す。
後ろ打拔き、見附け浪幕。臆病口に海中の立て岩。橋がゝり、磯際の模樣。前、浪手摺りにて、本舞臺、奧の方、見事なる阿蘭陀船。この中に灘右衞門、小萬を圍ひ、手下の者大勢、合ひ方にて立廻りして居る。この船、眞綱を掛け、橋がゝりの岩端より、入り亂れの軍兵大勢。矢聲にて綱を引き寄せて居る。戸屋の上、同じく磯端の高みの岩山にて、この上に四郞藏、遠目鏡にて本舞臺を見て居ると、田島之助立ち身にて樣子を聞いて居る。三方この見得よろしく矢張り遠責め、浪頭にて道具とまる。程よき所に

て、灘右衞門、手下を一々海へ切り込む。橋がゝりより船をだん〳〵引寄せる。この道具、誂らへの、大仕掛け。トゞ船半まで橋がゝりへ引寄せる。

小萬　アレ〳〵、船は次第に、磯端へ。

灘右　苦しうござらぬ。

ト船張りの石火矢に火を附けると、ズドンと火蓋を切る。軍兵殘らず倒れる。船は臆病口へ一散に走り入る。

花道の方にて

田島　下郎、様子は。

四郎　五郎は遁がれて船は沖へ。

ト兩人こなしあつて

田島　すりや、今の石火矢。

二人　エヽ、殘念。至極。

トこの前へ黑幕切つて落すと、本舞臺で拍子、

チヨン〳〵幕

切幕　福笑の里の場

景事「昔今夢手枕」鈴木萬里

役名――俳諧師、松尾桃靑　實ハ大友市之正。娘、戸由良。秋月主膳。秋月土岐五郎。茶摘み女、おすみ。同、おさら。同、おみわ。同、おきよ。曉東風右衞門　實ハ山中鹿之助。

造り物、二間の間、三重舞臺、見付け、赤壁、納戸口。上の方、折り廻し障子屋臺。橋がゝり柴垣、上の簀戸屋根、殘らず大和葺きにて、すべて誂らへの道具にて、幕の内よりおさら、おすみ、おみわ、おきよ、茶摘みの形にて二重舞臺腰かけに休んで居る。戸由良、世話形、振り袖にて茶を酌んで居る見得。在鄕唄にて幕明く。

さら　申し、戸由良さま、構うて下さんすな。毎度お前のお世話になりまするわいなア。

よし　ほんに、わたしらが仕事、茶園へ行く行き戻りに、爰へ寄つて、此やうに馳走にあふは、氣の毒にござんすわいなア。

戸由　ナンノイナア、お前方の知つて居やんす通り、わたしは女子の獨身の事なり、どうで所のお方のお世話。隨分懇ろに願はにやなりませぬわいなア。

みわ　そりや互ひの事ぢやわいなア。

すみ　イヤ、それに付いて、問はうと思うて居た。爰は日

向の國津の崎、福笑と云ふ所。それに、この戸由良さまを、福嫁御々々と云ふは、どうしたものぢや。

さら　ハテ、そりやこの日向で、名高い事ぢやわいなア。

みわ　それ〳〵、日向ばかりぢやないわいの。脇の國へも聞えてある、福笑の里の福嫁御。

よし　オヽ、謂れと云ふはな、爰な戸由良さまの身の上。成人の娘御を持つて居ながら、アレ、あのやうに鐵漿もつけず、いつまでも娘姿、樣子を聞けば、わしらと違うて、きつい貞女のお方ぢやわいな。

さら　イヤモウ、側へ置いて云ふは惡いか、まだ年端もゆかぬ間に、たつた一度殿御に逢うて、その男の名も知らず、また廻り逢ふまでは、側へ武將の上意でも、外の男を持つ事は否ぢやといなう。

よし　その貞女を聞き傳へ、どうぞ女房に欲しい、嫁に貰うたらば家が富貴するぢやあらう、福笑の福嫁ぢやと、縁組みの相談をするのぢやわいなア、

三人　戸由良さんは、この福笑の福嫁、わしらは悋氣の津の崎、貧乏嫁ぢやわいなう。

すみ　それで聞えた戸由良さまの身の上。殿御を持つて、振り袖着て居やしやんす事が合點がいた。云ひ交した男に逢はしやんすまでは、前流行つた唄の通り、三十振り袖四十島田ぢやなア。

きよ　何を云やるやら。おすみとした事が。

よし　イヤ、おすみより戸由良さまの御馳走で、いから隙がいつたぢやないか。サア、茶園へ行かうぢやないか。

戸由　ハテマア、ようござんす。マア、一服のんで行かしやんせいなア。

三人　イエ〳〵、また戻りに寄つて御馳走になりませうわいの。

皆々　それ〳〵それがよい。いかいお世話でござんした。戸由良さん、イヤ福嫁御。

戸由　オ、笑止な。そんな事を。

皆々　忝なうござんす。

戸由　また戻りに寄らしやんせ。待つて居るぞえ。

ト在郷唄になり、皆々しか〴〵あつて橋がゝりへ入る。戸由良、後に殘り、苧こけを取り寄せ、苧を績んで居る。ト向うより主膳、在郷親仁、百姓の形にて、藁苞を肩にかけて出て來る。

主膳　この福笑の里の、戸由良どのと云ふは爰かな。

戸由　アイ、戸由良はわたしでござんすが、なんぞ用事で

もござんすかえ。

主膳　イヤそウ、ある段ではない。ありやこそわざ〳〵尋ねて來ました。マア、許さんせ。

ト内へ入る。

ヤレ〳〵嬉しや。日向の國でも爰は片田舍。尋ねるにホツとしたて。

ト云ひ〳〵、尻からげ下ろし草鞋を脱ぐ。戸由良、合點のゆかぬこなし。所へ橋がゝりより土岐五郎、衣裳上下にて、家來に白臺に卷き物を持たせ、出て門口にて

土岐　福嫁と呼ばるゝ戸由良の宅は爰な。在家ならば御意得たい。

戸由　ハイ〳〵爰に居ります。どなた樣でござります。マア、これへお通りなされませ。

土岐　然らば許さつしやれ。

ト内へ入り、ツヽと上座へ通る。戸由良こなしあつて

戸由　これは、ついぞ見馴れぬお歷々のお侍ひ樣。私しには何の御用あつて、お出でなされましたえ。

土岐　成る程、拙者儀は近國にて、そと致した武士。樣子を聞けば、其方は獨身とあれば、幸ひ身共、未だ定まる妻を迎へねば、似合はしき緣邊と存じ、尋ね參つたは愚妻の望み、押しつけ業ながら家來共。その臺の物これへ。

家來　ハツ。

ト右の臺を戸由良の前に直す。

土岐　これは身共が結納の印。些少ながら納めてもらひたい。

ト此うち戸由良、相手にならず、苧を績んで居る。

主膳　イヤコレ、戸由良どの、おれもこの在鄕の百姓、息子に世を讓りて、隱居せうと思へども、思はしき娘がないで、あちこち云うてくれど、この親の心に合はず、所に幸ひこなさんの噂、貞女とやら、日向一國の噂。福嫁御の奇緣と云ひ、器量と云ひ、氣に入り過ぎてある緣組み。そこでこの藁苞は、結納の印。精分の山の芋、舅の國もの。オヽ、嫁御、ちやつと受けて下され。

ト此うち戸由良矢張り苧を績んで居て相手にならず。主膳、土岐五郎、顏を見合せて居る。

戸由　思ふより云ふは愚かになりぬれば、譬へて云はん言の葉ぞなき。

ト桛はずす苧を績んで居る。

土岐　イヤサ、戸由良、身共が奧になる所存か。

主膳　但し、おれが嫁に來て下さるか。
土主　サア、返事はどうぢや。
戸由　ホヽヽ、お二人ともに、銘々ばつかり得心して、結納の印ぢやの嫁ぢやのと、不束なわたしを、其やうに仰しやつて下さんすは、キッと有り難うござんすけれど、殿御を持たぬ誓ひの振り袖。最早三十路に及べども、袖をとめぬが人樣への云ひ譯。
主膳　すりや、振り袖は、男を持たぬと云ふ看板か。
土岐　傾城なれば振ると云へど、玆な女子は男を振り袖。
戸由　どうした事やら、外へは御縁がないやら。
主膳　嫁に來る事。
土岐　男を持つ事。
二人　不得心か。
戸由　アイ、お二人とも、ゆるりとして、お歸りなされませいなア。
二人　ヤア。
戸由　オヽ、笑止やなう。
　ト唄になり、戸由良こなしあつて奥へ入る。土岐五郎主膳、顔見合せ
兩人　なんの事ぢや。

　トこなしあつて立ち上がる。
土岐　親人主膳どの。
主膳　伜土岐五郎。コリヤ。
　ト入れ代り
　我れ〳〵は高縁の城主、苗字は秋月。この度足利家の嚴命に依つて、曉東風右衞門、玄海灘右衞門、まつた女なれどもかづきの小萬と云ふ盜賊、右の者ども詮議の役目を蒙むりしゆゑ
土岐　この福笑の里に、福嫁と云はれる獨身の戸由良。何とも合點のゆかず、縁組みをかこつけ、この如く姿を變へ、親子云ひ合せ參つたところ。
主膳　如何にも一癖ある女と見ゆれば。
土岐　矢張り縁組みと僞はり、彼奴を探るは、コレ。
　ト囁く。
主膳　如何にも。然らば家來、其方達は出口に扣へ、合圖をなさば同勢をこれへ。
家來　ハッ。
　ト侍ひ、橋がゝりへ入る。土岐五郎こなしあつて
土岐　イザ、この上は奥にて戸由良を。
主膳　嫁に勸めるか。

土岐　奥になるか。
主膳　お侍ひ様。
土岐　百姓の老人。
兩人　サア。
　トこなしあつて兩人、奥へ入る。次第を打ちかける。
〽破庵に落ちて松の聲〳〵、仇にや風の宿るらん。
　トこの謠にて向うより桃青、着流し筒服絆にて、行脚の形にて、傘を脊負ひ、菅笠を携へ、本舞臺へ來て
桃青　誠に日向とは日に向ふ國。古への都。その餘風殘りて、陽氣盛んに、麗らかな土地ぢやよなア。
　トこなし。
里人が敎へたる、茲が福嫁御と云ふか。
　ト思ひ入れあつて
何にもせよ、宿の無心の上。
　ト上げ簀戸の方へ行て
賴みませう〳〵。
　ト奥より
戸山　アイ〳〵、どなたでござんす。
　ト云ひ〳〵出て來て、桃青を見て
これは、ついぞ見馴れぬお方。何の御用で御案內を。

桃青　イヤ、拙者は俳諧修業に諸國を行脚。殊の外足を痛め、難儀に及ぶ。最早暮るゝに間なければ、何卒一夜のお宿を、御芳志ござらば、忝なう存じます。
戸山　それは、マア〳〵お易い事なれど、お氣の毒ながらどうも一夜の宿は愚か、暫しの間も、この家の內には。
桃青　叶ひませぬか。
戸山　サア、仔細あつてわたしは女子の獨り身。それに殿御のあなたを、泊めます事はどうも。
桃青　成る程、雪折れ竹に本來空の悟道の趣き。江口の君の假の宿。お宿のたらぬも御尤も。
戸山　濱手の方には百姓、漁師、それへござつてとつくりと、お賴みなされたら、つい心安う。
桃青　左樣ならば、御無心ながら、この
　ト傘を解き
傘を預かつて下さりませ。
戸山　そんなら、この傘ばかりを。
桃青　近頃御面倒ながら、その傘は拙者が旅の身代。麁末にならぬ品。しつかりとお預け申した。
戸山　イヤ、隨分大切に。
　ト右の傘を二重舞臺の上の方へ立てかけて置き

モシ、斯うして置きます程に、明日何時なりとも、取りにお出でなされませ。

桃青　いかいお世話でござります。

戸山　お氣の毒に存じます。

ト合ひ方になり、戸由良、二重舞臺に上がり、また亭をごけを取り寄せ、亭を續みかゝる。桃青、思ひ入れあり、ズッと上へ通り、右の傘を廣げ、踞まつて居る。戸由良これを知らず

ほんに隱すより顯はるゝと、わたしが身の上。誰れが云ふとなく、樣々の名を附けて、福女子ぢやの福嫁ぢやのと……これにつけても娘小蝶、宮仕へのその先に、豐後の國。いつぞやより便りも聞かず、どうか斯うかと案じる親の心を予知らずに、便りを聞かさぬ情ない娘。

桃青　子にあくと申す人には花もなし。

戸山　エ、。

ト悔りして桃青を見附け

これはしたり、お前はいつの間に。

桃青　イヤ、お宿の御無心は申しませぬ。

戸山　すりやこの家の内へ。

桃青　イヤ、最前お預け申したこの傘は、我れらが旅の身代ぢやに依つて、この下宿りは、さし構ひのない傘だけ。

戸山　傘より外へは。

桃青　一寸も外へは出ませぬ。もし出たら、如何やうとも御存分に。

戸山　それ〳〵、さう仰しやる其うちにも、ソレ、裾の方が後へ。

桃青　オッと心得ました。

ト引ッ込める。

戸山　イエ〳〵、又こちらへ褄先が。

桃青　如何にも合點。

ト引ッ込める。

戸山　ソレ、モシ、こちらが。

桃青　どこか。

戸山　そこか。

桃青　斯うか。

戸山　こちらぢやわいなア。

ト戸由良、いろ〳〵指圖する。桃青こちらを引ッ込めたり、あちらを引ッ込めたり、忙しう塲てられる。雨人よろしくあつて

桃青　斯やうの事を存じたら、偕屋の傘を借りてなと、參る

つたらよかつたに。
戸由　さうして、モシ、あなたのお國は、何所でござんすえ。
桃青　豐後の國。
戸由　ナニ、アノ、豐後の國とな。
桃青　如何にも。こなたも豐後の國に、ソレ、由緣がござらうが。
戸由　エ、。
桃青　蘭の香や蝶の翅に燻らする。
戸由　ムウ。ハテ、どうやら合點のゆかぬ。
桃青　詞の花は俳諧修業。
戸由　一河の流れも
桃青　緣につれたる豐後の國。
戸由　傘の宿りも打晴れて
桃青　何かは密かに。
戸由　奧へ伴ひ、とつくりと……爰は日向の福笑。
桃青　福嫁御やら姑の。
戸由　エ、、なんと。
桃青　この心推せよ花に五器一具……御亭主。
戸由　旅のお方。マア奧へ。
ト唄になり、桃青、戸由良、思ひ入れあつて奧へ入る。

ト合ひ方、寢鳥の笛になつて、向うより東風右衛門、百日脊流し、一つ印籠にて出て來る。蝶々飛んで出る。後より捕り手大勢。東風右衛門を附けて出て來る。東風右衛門、ちよつと花道にてこなしあつて、立ちとまり、蝶々をキッと見て、心意氣あり、捕り手に構はず靜々と本舞臺へ來る。
捕手　うぬ。
ト擬勢する。東風右衛門、振り返り、キッとなる。捕り手恐れて皆々橋がゝりへ逃げて入る。此うち始終寢鳥笛。東風右衛門、蝶々に向ひ
東風　この世を去りし小蝶が一念、某を導きし貞心を感じこの家の女戸由良に、目見得しくれるぞ。
ト蝶々頻りに飛び、附け聲にて
小蝶　エ、、有り難うござんす。この上ながら母樣と、仲睦まじうその上にて、わたしが願ひを。
東風　思ひがけない親子夫婦。聟と云ふのも大友市之正。
小蝶　サア、それぢやに依つて、どうぞ。
東風　萬事は何れ對面して、名乘り合ひし上の事。
小蝶　必らず父さん。
東風　十七年振りにて、名乘り合うたる我が娘。

小蝶　さらばでござんす。
東風　南無阿彌陀佛。
トこなしあつて、ドロ〳〵にて蝶々消える。此うち奥より主膳、土岐五郎出かけ、東風右衛門を窺うて居る。
東風右衛門、思ひ入れあつて
この家が福嫁と呼ぶ戸由良の宅。
ト東風右衛門、スッと内へ入る。
主膳　ソリヤ悴。
土岐　なんでも曲者。
ト東風右衛門にかゝる。東風右衛門、引き廻す。主膳かゝる。よろしくあつて
東風　何者なれば身共を。
主膳　我れ〳〵は當所の領主、秋月親子。
ト兩人一時にかゝる。東風右衛門、立廻りて、トゞ土岐五郎を引敷き、主膳が手を捻ぢ上げ、よろしく見得にてチョン〳〵。
右の飾りつけ、セリ上げにて平舞臺になる。
ト門板塀に一面の糸櫻、大木の幹、淺黄幕切つて落す。橋がゝりより舞臺一面の筆捨山の模樣にて、一面に山吹の花盛り、見事に、臆病口の方、亭屋構、太夫座にて、それより東へ柴垣綺麗に、薄ドロ〳〵に道具とまる。
ト前の切り穴より東風右衛門、戸由良、參宮の形にてセリ上がる。
これより景事。
〽神風や伊勢の濱荻折りしきて、暫しまどろむ旅枕、夢てふものや結ぶらん。
戸由　一昔、過ぎし彌生の春風に、吹き誘はれし神路山。
東風　大内山の春の草、靑侍ひたりし時、伊勢兩宮へ御代參、初めて合の土山にて
戸由　雨より濡れの忍び音に
東風　語る間もなく引き別れ、互ひにその名所をも知らざれば
戸由　文も書かれず徒らに、筆捨山の捨てられて
東風　後の印と取交した
戸由　守り袋は殿御の魂ひ。
東風　丸き鏡は女の魂ひ。
戸由　再び逢うて今ぞ知る、お前の生れも
東風　伊勢の國、其方の生れは
戸由　日向の國、二人の魂ひ取替へる

東風　伊勢や日向の物語り。
戸由　盡きせぬ緣は天照らす
東風　神の惠みぞ
戸膳　有り難やなア。

〽お禮參りの女夫連れ、心いそ／＼足輕々と、先へ歩めば後から招く、ホイ／＼先に立たせてなう、よい女房、むまい腰つき幅廣帶で、いんくわめ、なんぢやいな、緣は異なものその時に、起證一枚書かねども、雲津の川瀨二世三世、離れまいぞの睦言を、聞けば嬉しい馬士衆の唄に、竹に雀はしなよくとまる、とめてとまらぬ色の道よナエ、とめてよいのは伽羅の香の、濃いと薄いは染め浴衣、裾には若松、千代の松坂越えてなう、思ひの竹をかきつ梅、開いて見よとやり梅に、落ちても見よや手毬梅、よい／＼／＼よいやさア、ほんに人目も白梅ならば、何の心を筑紫梅、一枝せいて折を待つ、よい／＼／＼よいやさ。行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂人が、あれば都の通し駕籠、若い女郎衆の伊達參り、戀の櫛田の濡れ姿、それ宮川に身を淸め、その願事をかけまくも、畏き御代に生れたる、今日の我れらが親子なり、君が代は千代に八千代にさゞれ石、岩戸の闇も晴れたれば人の面も白々と、面白い世の世の中は、また明らけき月よみ日よみ、光り限なき高天が原の、神の惠みの相の山、

〽お杉お玉は繼ぎ煙管、逢うたやうでも離れ行く、竹はさゝらにもまば、殿中ぢや、張り肱ぢや、お女房さん若殿さん、やれ降れ／＼降るや神樂の、五十鈴川の神代の浪の、敷浪寄する伊勢の國。

〽天照皇太神宮と申すなり、相殿は手力雄、七所の別宮四所の宮、雨の宮風の宮、石淸水は弓矢神、商ひ神は蛭子三郞、誕生ましますその時に、何だか口より熱湯を出だし、吐いたる口より溫湯を出だし、產湯をひかせ奉り、錦が千反綾が千反、金襴緞子を產着に召され、海を讓りに受取り結び、命ながらの釣り竿下し、あらめでたいを釣り／＼釣つた姿の、ヤレさてしをらしや、祇園山王加茂春日、稻荷は五穀陸の神、すくな彥名は醫師の神、松の尾住吉梅の宮、さて又こなたは下總の、香取の宮にて在します。爰は上總の玉崎や、常陸に鹿島の御社、齋宮おこらご淺間が嶽も、お手に手を引きてのんぼろエ、のんぼろ。

〽田舍道者の仇口に、おまん女鼈甲の櫛は、エ、そりや誰れに貰うてもらうたぞいの、エイサッサ、かめす茂三

郎イヽエ伊勢土産、させば名が立つヤアさゝねばすたるぞいの、エイサツサ、元の茂三郎にサンザ蹉し戻せ、なんぼ戻しても、ヤア茂三郎は取らぬぞいの、エイサツサ、さつさでな、達者でナ、いざや下向と云ふしでの。
謠〽かゝる御代ぞと仰ぎ見る、月も曇らで
唄〽天照らす、御影ぞ映る御裳濯川の。
謠〽波のしろにぎて。
唄〽水の青にぎて。
謠〽とり／＼さま／＼神遊び。
唄〽立ち舞ふ袖をひるがへす。
謠〽神風松風。
唄〽さらり／＼。
謠〽さらり／＼と枕に響く。
唄〽明け方の。
合〽鐘に破れしきぬ／＼の。
謠〽夢を殘して覺めにけり。
唄〽夢を殘して覺めにけり。
トどろ／＼にて東風右衛門、戸由良、セリ下げにて消える。道具元へ戻す。また先の飾りつけを、だん／＼セリ上げにて先の世話場の體になる。臆病口、以前の通り。常の合ひ方にて道具とまる。
ト奥より主膳、土岐五郎出る。土岐五郎、呼子を吹くと、橋がゝりより捕り手大勢出る。
皆々　合圖の呼子は。
土岐　推量の通り、曉東風右衛門。踏ん込んで召捕れ。
皆々　ハアツ。
ト納戸へ入る。
主膳　東風右衛門は聞き及んだ力量。彼奴等ばかりでは心元ない。身共も加勢を。
ト行かうとする。
土岐　親人、待たつしやれ。東風右衛門とて狼でもあるまい。存分働らいた上、萬一手に餘らば、我れ／＼親子。
ト捕り手皆々納戸より走り出て
皆々　東風右衛門手ひどく働らき、我れ／＼が手には及びませぬ。
土岐　ヤア、腑甲斐ない奴等。手強く働らき、其方達が手に餘らば、飛び道具を以て打つて取れ。
主膳　女諸とも取逃がさぬやう、合點か。
捕手　ハツ／＼。
ト皆々引返し、奥へ入らうとする所へ、東風右衛門、

東風　以前の通りの形にて、ちよつと立廻りにて皆々を追ひ込む。主膳、土岐五郎、兩方よりかゝる。東風右衞門かい潜り、手早く拔打ちに兩人が首をポン／＼と切る。ドロ／＼、大雷になる。仕掛けにて庭の芭蕉、次第に開く。東風右衞門キツと芭蕉を見て

東風　ソレ、葵は日を見て薫じ、芭蕉は雷を聞いて發する。いま時ならずして響き渡る雷鳴は。ムウ、さては劍の奇瑞、雷鳴丸。

ト刀をキツと見る。此うち桃青、窺うて居る。この時、ツカ／＼と出て、刀に手をかける。東風右衞門キツとなつて

東風　ヤア、うぬは。

桃青　この劍紛失の越度に依つて、漂泊の身の上。

東風　すりや大友市之正は。

ト突き放す。桃青もこなしあつて

桃青　小蝶が導くこの家の內。俳諧修業も劍の詮議。

東風　奇瑞を顯はす雷鳴丸。

桃青　船となり帆となる風の芭蕉かな。

東風　ハテ、幸ひの市之正。

ト心意氣あると、薄ドロ／＼にて戸由良、夢の覺めたる體にて元の世話娘の形にて奥より走り出て、東風右衞門に取りつき

戸由　エヽ、胴慾な鹿之助さま。今までお前は。

東風　戸由良、わざと明かさぬ我が本名を、鹿之助とは。

ト戸由良、思ひ入れあつて

戸由　そんなら今のは夢であつたか。

東風　ナ、なんと。

戸由　サア、いま奥でまどろむともなく、一睡の夢の內、お前と馴れ染め、參宮の樣子と云ひ、その時聞いた、鹿之助さまと云ふ本名まで。

東風　さては夢にて何もかも。

戸由　また逢ふまでの筐に、取替へたお前の所持の守り袋。

ト出して見せる。

東風　其方が渡した丸鏡。

ト東風右衞門出して見せる。

戸由　伊勢や日向の物語りに、夢の合ひ紋。

東風　夢野の鹿の古事に、鹿之助が身の上。

トきつとなるを戸由良留めて

戸由　コレ、舅親と云ひ交したるわたしが夫。

東風　娘小蝶が身の上。

桃青　不便の最期も

戸山　誠に正夢。

東風　娘が菩提。

ト刀を拋つてやる。桃青取り上げ

桃青　これは。

東風　亡君の御重資なれども、劍を賴みに、大義は企てぬ山中鹿之助。返し與へる仁の道。

戸山　冥途の道へ娘を先立て。

桃青　今こそ發心芭蕉翁。

ト髻を切る。

思へば不便や。

東風　小蝶の夢。

ト大泣き。所へ捕り手、バラ〳〵と出て

捕手　盜賊の張本、腕廻せ。

ト大勢、東風右衛門を取卷く。

東風　へ、、、、。猪口才な奴等。

トこなしあつて、よろしく、先づ今日はこれぎり。

打出し

入間詞大名賢儀（終り）

編纂校訂責任　渥美清太郎
鈴木　侃

日本戲曲全集・第五卷
並木五瓶時代狂言篇・第十九回配本

編纂者檢印

昭和五年四月五日印刷
昭和五年四月八日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彥
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七・八一
振替東京一六一七八

整版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社印刷）